大正十三年三月一日印刷
大正十三年三月五日發行

花袋全集第十卷
（第十回配本）

不許複製
（非賣品）

著作者　田山錄彌
東京市小石川區青柳町二十九番地
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行所　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

やうにした。

――花袋全集　第十卷　終――

ある日、Tの母親は言つた。

『今日始めて見た。あの鈴子さんの男ッて言ふのを……。あそこを通ると、赤兒をあやすやうな男の聲がきこゑるから、何氣なしにひよいとのぞいて見ると、緣側に立つて、男が兒を抱いて立つてゐるぢやないかね、お前……。ちよつとも好い男ぢやないぢやないか。それに、もう年も取つてるね。もう四十近いぢやないか。』

『そんなことはないわ。』

『さうかね。あれで三十二三かね。ふけてゐるねえ。』

根が丈夫な鈴子は、肥立つのも早かつた。十五六日も經つと、もう勝手に出て働いた。産褥にゐる間は、それでも男の遠い親類の老人が來て手傳つてゐたが、それもやがて歸つて行つて了つた。

をりをり秀子は自分の子を伴れて來て『そら、赤ちやん、……ね……ゐたでせう。』などと小さな蒲團の上に寢てゐる兒を指して見せた。

一年經つた頃には、その生れた兒も大きくなつて、よく肥つて、人見知もせずに聲高に笑つた。相變らず餘り樂でない生活らしかつたが、それでも鈴子は、銘仙の新しい派手なねんねこを拵へて、大きな丸髷に結つて、際立つて色の白い、頰の柔らかな、髮の濃い兒をあたりに見せながら其處等を歩いた。と、通りすがりの妓達は『まァ可愛いわねえ、なんて色が白いんでせう』と、言つて、母親の背を覗く

かうした話の出た二三日後の秋晴に近い赫と照つた日に、秀子は鈴子が産氣が催して來たといふことを聞いた。秀子の家では、下女を產婆の家に走らせてやつたりした。

秀子はちよつと見舞に行つて歸つて來たが、產婆が來ると間もなく、やがて女の子が安らかに生れたといふことを聞いた。產は極めて輕かつた。綱を柱に張るまでもなく、三度目のいきみには、もう兒は生れてゐた。

それと聞いて、秀子が行つた時には、產婦が枕を高くして、白い顏を薄暗い室の空氣の中にくつきりと嬉しさうに見せてゐる向うで、產婆が後產の下りる始末をいろいろとしてゐた。生れた兒はさゝやかな聲を立てゝ啼いた。

緣側のすぐ下の狹い庭には、鳳仙花の赤いのや白いのが靜かに午後の日影を受けてゐた。

その日は男は早く歸つて來て、莞爾して、生れた兒を覗いて見たり、いろいろ世話になつた禮を秀子の家に述べに行つたりした。

かねていろいろ評判を聞いてゐる男を產婆はその時初めて見て、『かういふ人か』と不思議に思つた。それほど男はやさしい口の利き方をした。

鈴子の家には、それからをりをり小やかな兒の啼聲と、それをあやなすやうな鈴子の聲とが聞えた。おしめが竿につらねてかけてあるのなども見えた。

雨戸が一枚明けたばかりになつてゐるのを見た。いつもしんとしてゐることが多かつた。しかし此頃では、もう何もめづらしくないので――さうした生活とさうした懷妊した女とは、何處に行つても澤山にあるので、土地の人達の口にも、鈴子の噂はもう滅多に上るやうなことはなかつた。二階の庇を並べた格子戸の家々では、いつものやうに切火の音がして、藝者達は褄を取つてそこに待つてゐる車に乘つて出懸けた。

それでも、閑なTといふ妓の母親は、何うかするとその話を持ち出した。

『鈴子さんの家に、今でも男は每日歸つて來るのかね。』

『何うして?』

『だつて、餘りしんとしてゐるからさ。いつ通つても、話聲なんて、滅多にきこえたことがないよ。』

『夜、遲いんでせう。歸つて來るのは――』

『お前、見たことがあるかえ? その男を。』

『あるわ。おとなしさうな人だわ。矢張、女たらしだとか、何とか世間では言つたけれども、あゝしてゐる處を見ると、さうでもないのかも知れないわねえ。』

『鈴子さんが怜悧なんだよ。愚痴なんか少しも言はないからね。……それに、もう生れるんだから。男としても、あゝなつたものを投り出して行くわけにも行くまいからね。』

自分で自分が怪しまれるやうになつたことが度々あつたが、今は鈴子はもうそんなことに多く心を悩まさなくなつて了つた。鈴子はもう一人ではなかつた。鈴子は自分の體に中に生きて動いてゐる小さい呼吸と心臓と魂とを空に描いた。

二十五

夏は來た。

南風が大粒の雨を車軸のやうに二階の雨戸に降りつけるやうな日が三日も、四日も續いた。さういふ時には、低い川添の土地は、地水が出て、溝といふ溝がみんな開き、緣の下まで水がさして、ちよつと通りに行くのにも足駄の丈が立たないで困つた。「水が出やしないか、土手が切れやしないか。」かう言つて人々は心配した。土手に上ると、川は岸につくばかり凄じく赤く濁つて流れて、いつも通つて行く帆の影すらも見えなかつた。雨は幌深く包んだ車の上から流るゝやうに落ちた。

しかし、さうした雨も長くは續かず、やがて赫と晴れた暑い日が濁つた埃の多い水の上を照した。

「好い鹽梅だ。これぢや、今年も水は大丈夫らしい。」

かう其處此處で言つた。

鈴子の家の裏の細い通りを通る人達は、その二階の雨戸が閉切りになつてゐたり、下の廁のところの

別にそれを苦にもしてゐないらしいのを秀子は見て、

『氣にならない？』

『したつて爲方がないもの。歸つて來ないものを何うする譯にも行かないぢやないの？　足に糸をつけて置くわけには行かないものね。』

かう言つて鈴子は暢氣さうに笑つた。

時には、何も彼もするのが厭で、雨戶を明けるのも、掃除をするのも厭で、茫然長火鉢の前――それは此頃は元のやうに氣にして拭きもしないので汚くなつてゐる長火鉢の前に半日坐つてゐることなどもあつた。かと思ふと、ある日は、別な人かと思はれるやうに、しやきしやきと、赤い襷を十文字に綾取つて、ばたばたはたきをかけて掃除をしたり、雜巾掛をしたり、又そこらにたまつてゐる汚れた物を盥に一杯持つて行つて、近所にある水道栓のところで、女達と平氣で話しながら、一生懸命に洗濯をしたりした。ある暑い晴れた日には、二階の狹い欄干に、餘り綺麗でない蒲團や夜着などを干した。

以前は、自分一人のさびしさ、父母も兄弟も何もない孤獨のさびしさを心から辛いと思つて、夜ひとりで悲しい淚をこぼしてゐることなどもよくあつたが、さういふ時には、男の浮氣が疑はれ、意氣地なさが呪はれ、貧しい頼りない生活が悔まれたが――旦那のわざわざ訪ねて來てまで與れた情なども染々と思ひ出されて、何うしてかういふ氣になつたか、何うしてあんなに夢中になつて惚れて行つたかと、

近所の人達は、相變らず、鈴子が構はない扮裝で、全く世話女房で、もういくらか眼に立ち始めたお中をして、通りなどを歩いて行くのを見懸けた。湯屋では、鈴子は昔の友達にいろいろな話をしかけられたりした。

去年の暮は、一時男は景氣が好く、まだ流れずにあつた鈴子の質物などを出したり何かしたが、今年の二三月頃からまた餘り思はしくないといふ風で、鈴子はをりをり質屋の門を潜つた。隣へ行つては、『秀ちやん、お氣の毒だけど……五十錢ほど一寸貸して頂戴。』などゝ言つて借りて行つた。

男の歸つて來ないやうな夜が續いても、鈴子はもう以前のやうにやきもき思はなかつた。さういふ時は何も用事もない身の、朝は、午近くまで、厠のところの雨戸を一枚明けたばかりにして、ゆつくり床の上に身を横たへてゐた。隣に來る五もくの師匠が、黄い聲で下地子に三味線を教へる聲を聞いて、『あゝもう一時だ……』と思つて漸く床から離れることなどもあつた。

起きたばかりのところに、秀子がやつて來て、『何うしたの？　今起きたの？　隨分寢坊ね。あんまりいつまでも戸が明かずにゐるから、何うかしたのかと思つたわ。』

『だつて、用がないもの。』

『昨夜は歸らないの？』

『えゝ。』

『秀ちやん、子供を持つた時はどんな氣持？』

かう小吉が訊くと、

『さうね。』と鈴子の方を見て、『そんなことをきかれても、ちよつと口へ出しては言はれないわねえ。生れて初めて啼聲をきいた時は、變な氣がするものね。』

『さうね、本當に。』

かう鈴子も合せた。

『嬉しいでせうね。』

『嬉しいには嬉しいが、唯うれしいばかりぢやないわねえ。安心したやうなさつぱりしたやうな……いろんな苦勞なんか忘れて了つたやうな氣がするわ。』

『さうですかね。』

小吉は經驗しない。これからもさういふ經驗には逢ひさうにも思はれない不可思議を搜すやうな顏をして言つた。小吉は矢張節操を守つたり、心を一つにすることの出來ない女であつた。鈴子の今度の戀などをも、『何うして、皆なさう眞劍になれるものかね。私なんか、いくら惚れた男でも、疑つたり、だまされてゐやしないかと思つたりして、とてもあゝいふ風に、何も彼も捨てゝくつついて行くことは出來ないがね。』と言つたりする方の女であつた。

『でも、鈴ちやんは、體が丈夫だから、お產が樂でせうけれども、私は隨分重かつてよ。綱を引張つて置いて、それを力にしたんですがね、あんな苦しいことは二度とはイヤだと思ふわ。』

かう秀子が言ふと、『さう、そんなに重かつたの？　私は前の時も、樂だつたから、今度だつて、ちつとも心配してゐないのよ。さう言へば、二三日前梅ちやんのも生れたてね。男の兒だつたけれども、重かつたつてね。前の日の午頃から一夜中かゝつたんだつて……。今年は產なみがよくないつて言ふわねえ。』

かう鈴子は話した。

『でも、產んで見れば、案じたほどのことはないわよ。』

『それはさうね。』

傍にゐた小吉は、

『羨しいわね、みんな子持で……。そんなお產の話なんかされると、不思議の氣がしますよ。私なんか丸で知らないことなんだから……』

『それはさう　せうね。』

かう鈴子と秀子は笑つた。

その傍では、秀子の兒の二つになるのが、聲高に笑つたりした。小吉は『可愛いわね』と言つて、それを自分で抱いて見たりした。

『養母とは矢張これかえ？』仲たがひのしるしを手でして見せた。
『さうですとも……。途中で逢つたつて、お互に挨拶もしないでせう。それに、今度引越したところはそれは近いところですよ。あの通りですよ。矢張、あゝして別れずにゐるのは、意地もあるのね、意地で持つてゐるのね。』
『さうしたところのある女だよ。』
『まア昔の女の惚氣なんか止しませうよ。』
かう長く引張つて甘つたれてゐるやうに若い妓が言つたので、話はそのまゝになつて了つた。

二十四

時はやがて經つて行つた。土地の妓達は鈴子が大きなお中をした姿をあちこちで見た。體の加減で、時にはいやに青白い顏をしてゐる時もあるが、大抵は元氣の好い、漸くつかむものをつかんだといふやうな顏をして歩いてゐた。
もう鈴子は悲觀ばかりしてはゐなかつた。朋輩の秀子の家へ出かけて行つても、晴々したやうな顏をして、お產の話や、子供の話などをした。
何うかすると、其處に、奧に住んでゐる小吉といふ妓が來合せたりした。

『さうなさいよねえ、旦那。旦那だつて、わるく思つてばかりゐはしませんわねえ。さうして、兎に角、やつて行くんだから、豪いわ、あの子……』

『苦勞はしてる人だよ。それでも……』

『それはさうよ、秀子さんなんか、とてもあの眞似は出來ないつて言つてゐますもの。一度藝妓をしたもので、あゝまで世話女房になる人はめづらしいつて、此頃では評判だわ。大きなお中をして、平氣で、歩いてゐるのをよく見るわ。』

『あいつは昔から、何處か素人らしいところのある女だつた。』

其處に入つて來た若い妓は、

『何を言つてるの……？　さう、昔の惚氣を言つてるの？　子供が出來たら、お祝ひに行つてやらうつて言つてるの？　暢氣ね、男は？』

『だつて爲方がない。』

『女ぢや、さうは行きませんね。さういふことがあつたら、一生口なんかきゝませんね。』

『さうでもないわ、ねえ、旦那、矢張人情はありますものねえ。』

『わるかれとは思はないよ。』

かう言つたが、旦那は考へて、

『そんなに、いつまでも困らせて置きやしないよ。僕だツて男だよ。その位のことは考へてゐるよ。』

かう言つて、男は涙の流れた鈴子の顔を眺めた。

二十三

お房姐さんは言つた。

『さうですツて、もう六月位ですツて……』

『本當かね。』

『本當ですよ。あの人は前にも子供があつて、體が丈夫ですからね。』

『それは好いな。』

いくらか顔を曇らせ加減にして、前の鈴子の旦那は言つた。

それはその翌年の五月頃で、奥の菖蒲が見頃になるといふ頃であつた。旦那はよく葭町あたりの若い妓をつれてやつて來ては、昔から馴染の姐さん達をお座敷に聘んだ。

『何うやら彼うやらして居ると見えるね。』

『去年の暮あたりは、いくらかよかつたらしいですよ。』

『生れたら、一つ祝ひに行つてやらうかな。』

藏前での媾曳宿、そこにゐる老主婦、踊の師匠の家、二人の間を取持つた清さん、さうした光景は、遠い遠い昔になつたやうに思はれた。時には、何うしてさう夢中になつたかと不思議に思はれる位であつた。しかし、つかむことの出來ない男心を矢張つかむより他に爲方がないのを鈴子は思つた。

鈴子は決して愚痴をこぼさなかつた。愚痴をこぼすのは恥辱である。そのため自分が世間の笑はれ草になるのだと思つた。鈴子は辛い辛い思ひを忍んで、默つて暮した。

世間ではこんな噂をした。

『それでも、よくいつまでもくつ附いてゐるね。もう大抵、男の方で、愛想をつかしさうなもんだが……男は惚れてゐるんぢやないんだがな。』

『男は爲方がないから、くつついてゐるんですよ。無論、見番の養母を宛てにして、それで出來たに相違ないんですけれども、鈴ちやんがあゝいふ風だから、それも出來ず、今ぢや、えらいものに引かゝつたと後悔してゐるに違ひないんですよ。しかしそこは人間だから、いくらわるでも、いくら、女たらしでも、女があゝ縋つて行くのを投り出して行くわけにも行きませんからね。』

『それはさうですね。』

かう言はれるけれど、しかし、それとは違つて、鈴子の心と男の心とぴつたり合ふやうな夜がないでもなかつた。流石に、男の心は此頃では鈴子の心に深く、確り合つて行つてゐた。

音などもした。三味線の賑やかにきこえる夜などもあつた。

さうした幸福の境遇にゐても、それでも猶懲々するほど色戀をして見たいなどと秀子はまだ思つてゐるのであつた。それにつけても、自分の戀がいかに大きな犧牲を拂ひつゝあつたであらうか。それでしつかりとつかんだ筈の男心は、果して鈴子にしつかりとつかむことが出來たであらうか。

鈴子は二階でその賑やかな全盛な氣勢を聞くのを辛く思つて、後には、その時は成るべく下に下りてゐることにした。鈴子は自分の心の孤獨に堪へられないで、早くから床を取つて寢たりした。

鈴子の今の心には、眼には、土地にゐる種々の妓達の生活が、寧ろ女といふものゝ生活が、はつきりと映つて來るやうに感じられた。何處を見渡しても、思つたやうな生活はなかつた。秀子だッてその全盛に滿足してゐるのでもなく、梅子だッてそれで好いと思つてゐるのでもなく、又、お座敷へ出て客に大騷ぎをされてゐる妓達も、決してそれで好いのではなかつた。それに、その近所に庇を並べてゐる二階屋の妓達も、決して好い生活はしてゐなかつた。ある妓は情夫と旦那とをおなじやうにしてその家に泊らせた。ある妓は男に出刄庖丁をつきつけられた。又ある妓は男を養母と二人で張り合つてゐて、一日として喧嘩口論をしないことはなかつた。『それから比べれば、まだ私の生活の方が本當だ。』困つて困り拔いて、何か質にでも持つて行かなければ、お小遣もないといふやうな時には、鈴子はかう思つて、せめて自分の小さな心を慰めやうとした。

かう言つて、鈴子は考へたやうな顏色をした。何も彼も皆な解釋がついて行つたやうな氣がした。旦那はもう思ひ切つたらしいのが、鈴子には淋しい心細い感じを起させた。其夜は男が遲くまで歸つて來ないので、ひとりさびしく長火鉢の前に坐つて、あの大騷ぎをした戀が、お座敷にも出られなくなるほど評判された戀が、旦那にもあんな不義理をした戀が、かうしたさびしいぢみなものになつて行つたことを思つた。鈴子の頰には淚が流れた。

それに、隣の秀子の全盛が、いつも鈴子に種々なことを思はせた。電話もかけられれば、離座敷も出來、新しい寢道具も出來、風呂は每日立つて、前の細い烟突からは、紫の烟が西風に吹かれて來た。秀子の妹の京花までにも、旦那は著物をつくつてやるらしく、ある日行つた時には、吳服屋がやつて來て、頻りにお召の縞模樣などをあれかこれかと選んで見てゐた。『鈴ちやん、何方が好い？　此方が好い。』かう言つて、秀子は水車の模樣と梅の模樣とを並べて見せたりした。

秀子の旦那には、此方に越して來てから逢つたことはなかつたけれど、それでもそのやつて來る時の氣勢は、隣りだけにすぐわかつた。旦那はいつも車でやつて來た。と、格子戶が明いて、『姉さん、旦那が入らしつてよ。』きまつてかういふ妹の京花の聲がした。

夜は賑やかな氣勢が二階の壁一重を隔てゝ聞かれた。その肥つた旦那のあはゝと笑ふ聲、秀子の父親の醉つて騷ぐ聲、秀子の幼い兒をあやす聲、時には花でも引いてゐるらしい、ピタ〳〵と札を疊に打つ

『娘さんも矢張學校？』
『さうよ。』
『矢張、あの禿ちやん來て？』
『え……』
『山川さんは？』
『暫くお目にかゝつたことはないわ。』かう言つたが、小桃はふと四五日前に、鈴子の旦那に逢つたことを思ひ出して、言はうか言ふまいかと迷つてゐたが、思ひ切つて、
『さう云へば、此間、旦那に逢つたわ。』
『何處で？』
『奥で？』
『誰か行つてて？』
『お房姐さんと、政治姐さんと……』
『それきり？』
『他に若い妓がゐたけれど、土地の人ぢやないらしかつたわ。』
『さうなの？』

Kとは一切綺麗になるといふことであつた。鈴子は何うかすると、湯の中で、梅子に逢つたりした。
さういふ時には、次のやうな會話が始まつた。
『さう？　もう四月、羨しいわねえ。』
『だつて、困つちやつたわ、私。』
『でも好いわよ。』
『鈴ちやんも、出來さうなんもんだがね。』
『駄目よ、私。』
『體はわるくはないんでせう？』
『わるくはないけども……駄目よ。』
『出來て好いものには出來ないで、欲しくもない私なんかに出來るんだものねえ。』
時には又小桃といふ妓と、こんな話をした。
『花屋のお上に逢つて、此頃？』
『昨日も逢つたわ。』
『皆な丈夫。』
『え。』

を氣の毒に思つてゐるので、何んの彼のと親身になつて世話をして奥れた。男と一緒になつて棚を吊つたり壞れた處を直したりした。

しかし世間ではいろ〳〵な噂をした。養母の側に立つてゐる妓達は、『呆れたもんですね。わざと意地になつて近くに越して來たんですがね。私なら、きまりがわるくつて、土地にはゐられませんがね。……此頃はもうひどいッて言ふぢやありませんか。向うの家を疊む時だッて、家賃が三月も四月も溜つてゐたッて言ふぢやありませんか。』などと言つた。それに久しく逢つたことのない妓達がひよつくり繕はない鈴子の姿を細い露地などで見かけて、『すつかり世帶染みちやつてね、鈴ちやん……。隨分可哀相のやうな氣がしたわ。』と言つた。

中には、それほど鈴子の心を注いだ男のインバネス姿を見て、『あゝいふ人なの？　好い男ッて言へば好い男だけれど、それほどぢやないぢやない？』などと言ふものもあつた。鈴子は後には下氣で、見番の前を通つて、通りに買物などに出懸けた。

鈴子がかうなつたために、一時非常に流行兒になつた梅子は、其時分、引くとか引かぬとかで評判になつてゐた。何でも、その前の息子でなしに、新しく出來たKといふ藥種屋の主人との間に、梅子は懷妊したらしく、それがまた田舍の旦那に知れて、散々悶着をしたが、その噂を伏せるために、旦那は金を出して、梅子を引かせることにしたといふことであつた。そしてその子は旦那の兒にして育てる代り、

『え、さうよ。……あそこなら丁度好いと思ふわ。』

『さうね。』

鈴子は此處の家賃が既に三月も四月も溜つてゐてやかましく移轉を差配から迫られてゐることを思つた。『さうしようかしら？』

『さうなさいよ、……さうすると、家が隣りだから、何かにつけて便利よ。父さんも、鈴ちやん可哀相だなんて言つてゐたから……』

『さう……』

移轉するにしても、又いくらか金がいるなど丶鈴子は考へてゐた。何うして男はあ丶暢氣だらう。そして又女はまた何うしてかう苦勞しなければならないのだらう。つゞいて鈴子は、立派な好い旦那を持つて、かうして平和に、自分の子を育て丶行くことの出來る秀子を羨ましく思つた。先の旦那のことだの、此間來た旦那のことなどがいろ〳〵と思ひ出されて來た。

二十二

その月の末には、鈴子は秀子の隣の家に移轉してゐた。前の家に比べては、家も古く、間數も少く、疊や建具なども汚れてゐたけれども、それでも家賃は安く、もとの半分位で濟んだ。秀子の父親は鈴子

二つにわけ、欺騙と虚僞とを敢てしてゐる自分を想像してゐるのを見た。深い溜息がひとり手に出た。
やがて思返して勝手元に洗物に行つた鈴子は、ちよつとの間に突然湧くやうに起つて來た光景をくり返して考へた。急にかの女は悲しくなつて來た。孤獨が、さびしさが、縋らうと思つた男にさへ完全に縋ることの出來なかつた悲哀が、その小さな胸を塞ぐやうにした。涙は洗桶の水の中に落ちた。

二十一

それから少し經つたある日のことであつた。鈴子は途中でふと邂逅した秀子に訊いた。
『何處か明いてゐる家はないかしら。』
『何うして？　越すの？』
『だッて、今の處は少し廣すぎるの。二間か三間ありや、好いのよ。もつと小さな家に入らなけりや、とてもやりきれないもの。』
『あんなことを……』
『本當よ。』
秀子はふと思ひついたといふやうに、『そら、私の家の隣が明いてゐるわ。』
『あの眞砂屋のゐた家？』

『好いから來たしるしだよ。』
『いゝえ……』
と押返すのを、
『いゝぢやないか、それつぱかし……。取つてお置きな……。それとも、知れちやいけないのかえ？』
いくらか笑を含んで旦那が言ふと、
『そんなことはありやしないけど……』顏を赧くして、『でもお氣の毒ですもの。』
『そんなことはないよ。請く貰つてお呉れよ……』
『さうですか。本當にすみませんね。』鈴子は涙を見られないやうに顏をうつ向けて了つた。
『ぢや、丈夫でゐたまへ……。困つたら、いつでも、手紙でも何でもおよこし。』
かう言つて、旦那は立つた。下駄を表に廻さうとするのを、『好いよ、好いよ。』と言つて、そのまゝ裏口から出て行つて了つた。
鈴子はぼんやりして暫しは長火鉢の前に坐つてゐた。かうした生活を見られたのがきまりがわるいやうな又さうした旦那の情が染々と心に染みわたるやうな、又一方男の中ぶらりんな、徹溫い心が物足りないやうな、かうしてゐたら本當に身が何う立つて行くであらうといふやうな、さうした考へが雜然として胸に湧き上つて來て、拂つても拂つても容易に去らなかつた。鈴子はいつか心を二つにわけ、體を

『未練があるからと思はれちや困るんだ。それはね、未練はあるさ。しかし僕だつて、もう年は取つてゐるし、いろんなことは知つてゐるからね。單に、未練ばかりで、かうして訪ねて來た譯ぢやないんだ。兎に角、一年でも一緒にゐたお前だからね。決してあしかれとは思つてゐやしないよ。仕合せであつて呉れゝば好いと思つてゐるんだよ。本當だよ』うつむき加減にしてゐる鈴子をぢつと見て、『何うも思ふやうにならないもんだね。』

『…………』

旦那はさう長くは其處にゐなかつた。鈴子のしやくつて呉れる甘納豆を一匙手に受けて食つて、それから茶を五六杯飲んだ。友情――さういふ淡い心持にはお互に容易になれなかつたが、世話になつてゐる時よりも、一層旦那の心持がわかつたやうな氣が鈴子にはした。普通藝者のやる兩天秤――それが單に金ばかりのものではなく、心を分けて行く段になれば、さうしたことは決して不自然でなく行はれることなどを鈴子は考へた。

歸る時には、旦那は財布の中から五圓札を二枚出して、

『何にも買つて來なかつたから……』

と言つて出した。

『いゝえ、こんなものを頂いては……』

其心の中には、男と旦那と自分とが一緒になつてくつ附いてゐるので、好い加減にお世辭に言つて了ふことは出來なかつた。

『でも、ね、僕はね。』

かう言ひかけた旦那の顏には、眞面目な表情が上つた。『僕はね、お前のことはね、心配はしてゐるんだよ、これでも……。上の空には思つてゐないんだよ。困つた時には、力になつてやるつもりなんだよ。』

『…………』

『實はね、かうして來ちやわるいと思つたのさ。折角靜かな心持でゐるところを亂しちやわるいと思つたのさ。だけどね、氣になるんだ。いろんな噂を聞くもんだから……。』

『私こそすまないんです……』

『何アに、僕はさうは思つてやしないよ。幸福であつて吳れゝば好いと思つてゐるんだよ。さう言ふと、變に取られるかも知れないけどね。あのわかれる朝言つたことは、今でもさう思つてゐるんだから……。困つてゐる時は、いつでも力になつてやるよ。』

『すまなかつたことは、私は……私は、忘れや致しません。』

かう言つた鈴子の眼には涙が見えた。

『駄目ですよ。』鈴子は又顔を染めて、『思つたやうには行かない世の中ですもの。』

『それはまァさうだが、何處に行つたからツて思ふやうに行きやしないが、兎に角、自分で思ひ通りにしたゞけでも好いぢやないか。』

『いゝえ……』

旦那の輕い洒脫な心持は、かうして相對して坐つてゐる中に、次第に重く苦しくなつて行くのを覺えた。もとのやうに扮つてゐないので容色が落ちたやうな氣はするが、それでも其處にその眉があつた。額があつた。笑ふ時何とも言はれない愛嬌のある眼があつた。小さな唇があつた。旦那は突然やつて來て、靜かな生活の中に波を立たせたのを悔ゆるやうな氣がした。男のことを訊かうとしたが、何うしてもさういふ輕い氣分にはなれないのをかれは見た。

ともすると、互に押默つて、話が途切れさうになつた。

鈴子の胸には言ひたいこと話したいことは非常にあつた。あの時別れたまゝで何とも言つてやらないのからしてすまないと思つてゐる。それを、かうして訪ねて來て呉れた眞心にも感謝してゐる。自分をよしてすぐ他の女に移つて行くやうな旦那でないだけに、一層氣の毒にも思つてゐる。しかしその心を何う言葉に上せて好いか鈴子にはわからなかつた。貧しい生活に對する苦痛、世間に對する反抗の苦痛、土地の人達の薄情、さうしたことを打明けて話して、自分の今の苦しみを同情して貰ひたかつたけれど、

『すつかり聞いたよ。』

『さうですか……矢張、養母にお逢ひになりますか。』

『いや、近頃は逢はないがね……』少し途切れて、『すつかり理想通りにして了つたッていふ譯だね。』

『…………』

默つて鈴子は茶を注いで出した。何かないかと思つて、茶簞笥の中を搜すと、其處に、昨日男の買つて來た甘納豆があつたので、それに匙をそへて出した。

『母さんの方を綺麗にしたんだつてね。』

『え……。でも、養母はわる口を言つてるでせう。本當を言へば、それは世話になつたんですから、無理はしたくなかつたんですけど……』

『矢張、慾だからな、お母さんだッて……』

『本當ですよ。』

『でも、感心してゐるよ、僕は……。お前のやり方はてきぱきしてゐるから……。ぐん〳〵やりたいと思ふことをやつて行くから……』

『駄目ですよ。』

『でも、仕合せなんだらう。』

分厚な桐の簞笥も、それに並べて置いてあつた服簞笥もなかつた。掃除も碌にしないと見えて、床の間には埃塵が白く積つてゐた。

旦那は一種の淡い悲哀を覺えた。

鈴子は容易にその姿を其處にあらはさなかつた。さうかと言つて、仕かけた洗物をつゞけてやつてゐるらしくもなかつた。誰もゐない家の中はしんとして、奧の六疊の方の庭の荒れたさまが一ところ此方から見えた。

暫くして、鈴子は此方へやつて來たが、『御免なさいまし、今、御挨拶をしますから……』かう言つて矢張顏を赧くして、旦那の坐つてゐるところを通つて、奧の六疊へと入つて行つたが、十分ほど經つて其處から出て來た時には、着物なども着替へ、亂れた髮も梳いてあつた。やがてさう綺麗でない座蒲團を勸めて、丁寧に挨拶をした。

『藝者をやめちやつたツてね？』

快活な調子でかう元の旦那が言ふと、

『え……』

矢張鈴子は顏を赧くしながら、旦那の方を見るのもきまりがわるいといふ風で、鐵瓶に觸つて見たり、茶簞笥から茶器を出したりした。

つた。

「此頃は婆やはゐないのかえ？」

あたりを見廻しながら旦那は言つた。

「え……」

かう言つたが、氣がついて、

「ぢや、まア、此方へ……。ひどく散らかつてゐるのよ。」

「一人でやつてゐるのかえ。」

上にあがりながら旦那はやさしく言つた。

「まア、本當に汚ないんですよ。」

かう言つて、兎も角、茶の間の方へ旦那を伴れて行つた。しかし、鈴子は何う挨拶して好いかわからなかつた。胸がドキ／＼して顏が火のやうにほてつて爲方がないので、そのまゝ旦那を其處に置いて、そして再び勝手の方へと來た。暫く胸を靜めるやうに……。

旦那の眼には、曾て來た同じ室、同じ長火鉢、同じ簞笥、同じ長押にかけた三味線などが映つたけれど、その時分と比べて、あたりが亂雜に、男のぬぎ捨てた着物や襦袢がそこらに散らかつてゐたり、女の帶が長く引張られてあつたり、疊がイヤに汚なくなつてゐたりするのがすぐ眼についた。もう一つあつた

何うして好いか鈴子にもちよつとわからなかつた。

『こんな恰好をして……』

かう言つて鈴子は笑つて見せたが、『マア、お上んなさいましな。』

『好いのかえ、上つても……』

『え、誰も居りませんから……』

こんなことを言ふのではないと思ひながら、鈴子はついかう言つて了つた。

『あちらから……』

『いゝよ、此處からでも好いよ。すぐ行くからね。たんと邪魔はしないからね。』

『でもね、此處からでは……』

『いゝよ、いゝよ。』

外に長く立つてゐるのを怖れるといふやうにして、旦那は逸早くその裏口から入つて內から戶を閉めて了つた。

『本當に誰もゐないのかえ？』

『え……』

鈴子は益々顏をほてらせて、爲方がないといふやうにして其處に立盡した。胸は早鐘をつくやうに鳴

物の手を止めて、茶の間から長火鉢の傍を通つて、上り端の方へ出て來て見た。しかし、そこには誰もゐなかつた。午前の日影が唯明るく向うの寺の垣にさしてゐるばかりであつた。

『犬かも知れない……』

かう思つて鈴子は再び勝手の方へ戻つて來た。

また蹲踞んで洗物を始めた。

と、今度は、すぐその前で、ガタガタと戸に人の觸れる氣勢がした。

不思議にしながら、戸を明けて見ると、そこには誰もゐない。はてなと思つて、首を出して見たかの女は、急に赧くなつた。

家のしたみに身を寄せるやうにして元の旦那が立つてゐた。

『ま？』

かう言つて聲を擧げた。

旦那は寄つて來て、

『誰もゐないのかと思つたよ。』

その顔にも、表情にも、狼狽したやうに、又は誰もゐないかといふことを聞くやうな形がありありと見えてゐた。鈴子は鈴子で、さうした水仕業の姿を、取亂した姿を元の旦那に見られたことを恥ぢた。

藝者達は、鈴子をふり向いても見ないやうにしてゐたが、それが秀子には可哀相にも氣の毒にも思はれた。豫て噂できいてゐたよりも一層鈴子は困つてゐるらしかつた。
秀子は其處で一時間ほど遊んだ。歸る時には、幼い兒は乳母車の中でよく眠つて、小さい可愛い呼吸を立てゝゐた。秋の日影は靜かに通にさした。『好い兒だ、本當に……何ッて色が白いんでせう。まア可愛い顏をして寢てること。』かう言つて鈴子は乳母車の中を覗くやうにした。

二十

ある日鈴子はいつものやうに男を送り出して、跡片附をしようとして勝手元に來て、茶碗を洗つてゐると、入口の格子戶の方で、頻りに戶をあけやうとする氣勢がした。
格子戶にはいつもの通り矢張鍵がかけてあるのであつた。
それは秋の靜かな晴れた午前であつた。日影は鮮かに前の空地の草原を照し、向うの方からは、何處かで普請をしてゐる大工の釿や鉋の音が靜かにしてゐた。物賣や人通りのちよつと途絶えたやうな時で、隣の藝者屋にいつも今時分に來る淸元の師匠もまだやつて來てゐなかつた。晝間の靜かな時——さういふ時であつた。
格子戶をガタ〳〵させる音に氣の附いた鈴子は、また乾兒の一人でも來たのかしらと思ひながら、洗

『あんなこと言つて……』

抱いてゐる兒が泣き出したので、『おう、よし、よし、おつぱいが飲みたいのか知れないわ。』

『さうね。』

秀子はそれを受取つて、胸をひろげて、白い大きな乳を出して、平氣でそれを兒に吸はせた。『もう、秀ちやんにかういふ兒があるんだからね。』

『でも、つまらないわ、お父さんがおぢいちやんだから……。この兒が二十位になると、お父ちやんがもう七十だわ。』

『だツて、ちやんとして置いて吳れるんだから好いぢやない？』

『でもね……』

考へて、『もう一偏藝者になりたいと思ふわ。』

『あんなことを言つてゐる。私なんか、藝者はこり〳〵。あんな稼業位いやなものはないと思ふわ。』

『ぢや、懲りてばかりゐるのね。色戀が懲々で、藝者が懲々ぢやしやうがないわ。私なんか好いから色戀に懲りて見たいわ。』

『そんなことを思ふもんぢやないわ……。秀ちやんなんか仕合せだもの。』

かうした話は長く長く續いた。養母とさうした關係になつたために、稼業をしてゐる昔懇意であつた

散苦勞をして……』
『本當ね。』
二人は話しながら、やがてその格子戸の處へ來た。鈴子は先に立つて、乳母車の中から赤兒を抱いて、それをあやしたり自分の頬に押しつけたりした。
秀子は障子などの破れた掃除も十分に行屆かないやうな亂雜な室の長火鉢の前にやがてその身を發見した。
『女中もゐないの？』
『一人でやつてるのよ。』
『本當？』
『だつて、面倒だもの……それに、貧乏だもの。』
『あんなことを言つて……』
『だつて、秀ちやん、お前さんなんかにはちよつとわからないだらうけれど、それは苦勞したのよ、痩せたらう？』
『さうでもないけど……』
『色戀なんか懲々よ、もう……』

『一人よ。』

『さう。』

で、秀子は其處に置いた乳母車を自分で押した。

秋の日影が靜かに赤兒の顏を照した。兒は眼をぱちぱちさせた。

『まぶしいんだよ、幌をかけておやりな。』

『大丈夫よ。』

『でも、あんなに眼をぱちくさせてゐるよ。』

『日に照される方が好いのよ。男の兒は色の黑い方が丈夫々々してゐて好いわ。』

『でも、本當に可愛い子ね。』さも羨しいと言ふやうに又覗いて見て、『子供ッて嬉しいもんだらう？』

『さうね。でも、世話が燒けてしやうがないわねえ。』

『だッて、秀ちやんなんか――手元で育てゝ行けるから樂しみぢやないの？　私の以前の子なんか世話が燒きたくたッて世話が燒けなかつたんぢやないの？』

『それはさうね。』

かう言つたが、『でも、此頃でも行つて逢ふんでせう。』

『行つたことなんかありやしないわ。もう向うのものになつたのよ。本當につまらないと思ふわ。散

祝をした。旦那は平生親しくしてゐる又は秀子の世話になつてゐる姐さんや藝者や土地の女將などを大勢大きな料理屋に呼んで、ひき物なども人の驚くやうな立派なものを添へて、そして御馳走をした。その時鈴子も呼ばれて行つて、その席に列した。『本當にね、秀ちやん位仕合せな妓はありやしない。今ぢや、土地ぢや一番だよ。時ちやんの旦那も好いけれども、あれよりもつと仕合せだよ。それがね、お前さん、つい去年まで、正月の出を何うして拵へやうなんて、秀ちやんは心配してゐたんだがね、運だねえ。運が向いて來たんだね。』こんなことを姐さん達は言つた。秀子は鈴子や時子やなどよりも一時代新しい妓で、鈴子とは昔から交情がよかつた。踊も上手で、二人は一緒によくお座敷で踊つた。着物もわるく、髮も壞れ、非常に世帶染みた鈴子を秀子はいたましいやうな氣がして見た。

鈴子は言つた。

『でも、皆な丈夫、……父さんも……』

『え……難有う……』

『ちよつと家に寄らない?』

『寄つても好いけれど……』

『お寄りよ。』

『ゐるの?』

の花を手にして立つてゐた。

かう鈴子もなつかしさうに言つて傍に寄つて行つた。

『まア秀ちやん……。』

『こんなに大きくなつたの？　もう。』

大きな眼を明いて空をじろ〳〵見てゐる子供の方に體を寄せて、『大きな子ね。男の子だつたね。』

『さうよ。』

『もう、すつかり好いの？』

『え、大抵好いの。』

『幾日になるの、一體？』

『今日で、もう百日の上になるのよ。』

『さうなるかね、もう。早いものね。』

鈴子が戀に落ちる時分、秀子のお中はもう餘程眼に立つてゐた。秀子の旦那は、土地でも評判の金のある旦那で、着物でも指環でも十分にして呉れた。そればかりではなかつた。今まで住んでゐた家屋が汚いと言つて、二階を新しく普請して呉れたり、離れを一間拵へて呉れたりした。懐妊して、目に立つやうになつてからは、いつそ引かせて了はうと言つて、惜しいと人々に惜まれながら、立派な立派な引

よ。』かう男に言はれて入れた冬着の一葛籠が、一月經つた今になつても出すことが出來ずに、その利子にさへ追はれ勝であることを鈴子は思つた。他にもそのをり〳〵につけて近所の質屋に持つて行つたものも少しではなかつた。

鈴子はひとりで種々に思ひ沈んだ。男に對しては世間で言ふ『女たらし』と言ふやうな批評の思ひ當るやうなこともないではなかつた。しかし、さうは思つて見ても、男と相對して話をする時には、また一方何うしてもさうは思はれないやうな處もあつた。男は金があつてそしてそれを出さないのではなかつた。鈴子に對しては、すまない、すまないと思つてゐるやうな氣の小さい可愛い處が見えると、『あんなことを思つてすまなかつた。』とかの女は思つた。かうした間柄になつて一緒に苦勞をするのは當り前のことだとも思つた。それに、かの女の胸には、世間の笑はれ草になるといふことが何よりも厭であつた。

十九

『まア、鈴子さん……』

かう言つて聲をかけられて、ふと見ると、そのすぐ向うの木槿の垣のところに、かねて知つてゐる秀子といふ妓が大きな乳母車に綺麗につくつた生れていくらも經たない兒を乘せて、そこで赤い白い木槿

えた。そこの抱妓のゐる窓は、丁度鈴子の家の裏口に對してゐるので、鈴子が襷がけで、勝手元などをしてゐるのを抱妓達は常によく見かけた。『すつかりお上さんね。堅氣ね。』かういふ噂が抱妓達の口に上つた。

鈴子の生活は、脇目にはさういふ風に平和に、暢氣に人に羨まれるやうに見えたけれど――又、男は曾て女を大勢相手にしたものに似合はず、鈴子の情と眞心とに引かされてか、滅多に家を空けるやうなことはなかつたけれど、戀の後の空虚と悲哀と辛苦とがひしく〳〵とその身に迫つて來ずには置かなかつた。何うかすると、金を男が澤山に持つてゐて、その時は、男の乾兒見たいな人達に留守を賴んで、普通の夫婦がするやうに、市川の方や、柴又の帝釋天あたりに睦しさうに出かけて行つたり、川崎の大師にお詣りしたり、更に遠く、箱根あたりまで出かけて行くこともないではなかつたが、大抵は財布は空な時が多く、『どうも、これぢや困る。もう少し好い目が出さうなもんだな。』などゝ言ひながら、ありもしない小遣を鈴子の財布から引出して持つて行つては使つた。それに、乾兒になる男達は、

『姉さん、姉さん。』と言つてよくやつて來て酒を飮んだ。

何うかすると、鈴子は長火鉢の前で、ひとり涙を流してゐることなどもあつた。

鈴子は養母との緣を綺麗にする爲めに自分の持つたものをあらかた賣拂つた後、更に近頃になつてまた自分の持つてゐた種々なものをなくしたことを頭にくり返した。『二三日經てば、すぐ出すよ。乾兒だ

小川といふ姓に男文字で書き更へられたが、格子戸も、格子戸の中に見える下駄箱も、長い瀨戶のステッキ入れも、何も彼もそのまゝで、時には女のあづま下駄がさびしさうに唯一足置いてあつたりした。午後の日影は靜かにさした。使つてゐた雇婆はとうの昔に其處を出て行つて了つたらしかつた。土地でもその噂はもう滅多には出ず、出ても以前のやうにめづらしくは思はれなかつた。人々は皆な自分自分の生活に逐はれた。養母ですらも、その話が出ると、『あれはもう駄目さ。捨てたものさ。』などゝ平氣で言つた。

しかし近所では、をり〳〵猶その噂が出た。『マア、ねえ、鈴ちやんの眞似は出來ないわねえ。此頃はね、婆やがゐなくなつてはからね。女中も置かないで、自分で炊爨をしてるんだとさ。……それもね、始めの中は、きまりがわるいと見えて、朝早くと夜遲くとしか通りには出て來なかつたさうだけれどね。此頃ぢや晝間でも八百屋なんかに平氣で出かけて行くとさ。』かう一軒置いて隣の姐さんは言つた。その姐さんも、此頃は長年添つて來た最初は情夫であり中頃は間夫であり後には亭主になつた四十先の男に厭氣がさして、名高い三味線彈と出來て、時々家をあけるので、凄しい喧嘩などがをり〳〵持ち上つた。

此方の方の梅林といふ藝者屋では、姐さんはさう大して容色は好くないが、旦那を大事にするので、段々抱妓などが多くなつて、笑ふ聲や三味線を復習ふ聲がいつも賑やかに、夜は切火の音が景氣よく聞

鈴子を大の贔屓にしてゐた中年のお客は、『さうかえ？　養母とも手を切つて、すつかり素人になつて行くつもりかえ。さうかえ。それは好いな。一つお祝ひに行つてやるかな。僕はさういふことは大賛成さ。あいつは、昔からさういふ好い處があつたよ。藝者氣質ぢやなかつたよ。さうとも、それが本當とも……。男だつてね、さういふもんぢやないよ。たとへ、始めは、さう思つて、引張る氣で始めたことでも、さう女に纒られて見ると、それでも騙す氣や何かでゐられやしないよ。そこまで出て行つたあいつの心がいぢらしいね。だから、僕はあいつは好きさ。……唯あの巧い踊を見られなくなつたのがさびしい。扇子を持つて、かうして立つと、何とも言はれないところがあつたからな。』かう言つてその手にした盃に口を當てた。

十八

暑い夏も時の間にすぎて行つた。土手の上から都鳥の流燈を見に賑かに人達の集つて來た夜も過ぎて、川には涼しい秋風が立ち、碧い晴れた空が澄んだ水に印象派の繪のやうに映つた。上流から下つて來る白い帆は帆につゞき、ペンキ塗の小蒸汽は浮き出すやうにすつきりとあたりに見えた。

百花園の草花などを見に出かけて行く人達が靜かに土手の上を通つた。

寺のほとりの細い通に面した鈴子の家は、依然として元の儘であつた。中田といふ曲つた女文字は、

ふ女文字の曲つて書かれてある表札の家は、かれ等に取つては、想像の出來ない歡樂の場所のやうに思はれたり、又さうした思ひ切つた態度に出て行つた鈴子の心の中に自分等の悲しい心を發見して羨しいと思つたり、又目を瞬つて不思議のやうな氣がしたりするのであつた。かれ等に取つては、丸髷に結つた鈴子の姿は、時には妬ましく、時には羨しく、又は自分等とは丸で違つた種類の女のやうにも思はれた。

何うかすると、朝歸りの抱妓などが、その格子戸から兜町へ出掛けて行く男の姿などを見かけた。男はいつも意氣なソフトを冠つて、白つぽい夏外套を着て、雪駄をちやらちやらさせて、靜かに鷹揚にその通りを土手の方へと出て行つた。時には、鈴子が半ば壞れかけた丸髷姿で、その男の出かけるのを入口まで送つて出て來るのを見送つてゐることなどもあつた。『仲が好ささうよ、鈴子姐さん。行つて入らつしやい……なんて、にこ〳〵して見送つてゐたわよ。あれが本當ね。好きな人と一緒になつたんだから、土地から除け者にされたつて本望ぢやない？　それが人間の本當の道なんだよ。それを思ふと藝者なんか、いつまでしてゐやうとは思はないわね。』染々自分の身に思ひ當るといふやうにある抱妓は話した。

それに引かへて、梅子は、鈴子がさうなつたのを好いことにして、鈴子が持つたお座敷を皆な自分の勢力範圍にして毎日忙しさうに褄を取つては出かけて行つた。『鈴ちやんがあゝなつたんで、旨いことをしたのは梅ちやんだよ。』かう誰も彼も言つた。

として長火鉢の前に坐つてゐた。

養母との仲に入つた人も、養母自身も、鈴子がさういふ態度に出たことを、寧ろ意想外にも、又は裏をかゝれたやうにも思つた。しかしさう出られた上は、その上苦情は言ふことは出來なかつた。その義務の遂行と共に、養母は爲方なしに、鈴子の籍を返すことにした。

養母はあしざまに鈴子のことを罵つて世間に吹聽した。『あんな恩知らず、義理知らずはありやしない。借金さへ返せば、それで、長年世話になつたことは忘れても好いと思つてやがる。……あんな男に騙されて自分の持物は皆な賣つて了つたつて言ふぢやないか。阿呆も何處まで阿呆なんだかわかりやしない。今にすつてんてんになつて捨てられて、目が覺めないやうにするが好いや。』こんなことを大きな聲で、見番に來る妓達や人達に言つた。

ぢかに旦那を斷つたのさへ、藝者にはめづらしいとも慾がないとも思はれてゐたのに、身のまはりのものまで賣拂つて、養母との關係を綺麗にしたといふ話は、其處でも此處でも眼を丸くさせるに十分であつた。『あの子は、そんなに度胸がある妓とは思はなかつたがね。お酌の時分にも、一本になつた頃にも、はき／＼しないやうな妓だつたがね。』などと年を取つた姐さん達は噂した。男に騙されてゐると言ふのはかれ等の定評であつたが、その騙された程度が餘り深過ぎ、又餘りはまりすぎてゐるので、その男の旨さや歡樂の度數の濃さ加減などが、いろいろと噂されるのであつた。從つて通に面した中川とい

流石に、その番頭も、鈴子の思切りの好いのに驚いたと言ふやうな顏をして、其處にずらりと並べられた品物を見た。

『皆な御不用なんですか。』かう言つて鈴子の顏を見た。

『だツて、藝者をしてなけりや、こんなものは要りやしないもの。』

『それは左樣ですけども。』

『成たけ、高く買つてお出でよ。長年のお馴染だから……』

『へえそれは、もう……他さまでは御座いませんから。』

かう言つて番頭は世辭笑ひをして、又はかねていくらか聞いてゐる鈴子の情話に思ひあたると言ふやうな顏をしてにやく〳〵しながら、めづらしく男に打ち込んだ女の心と、そのあたりに漂つてゐる歡樂の氣分とを覗いて見るやうな顏をしてゐた。

鈴子はいつそ何も彼も、綺麗さつぱりと賣つて了はうかと思つたけれども、それでも、頭のものと、息子に買つて貰つたダイヤの指環と、それから戀しい思出の割合に濃く殘つてゐる精巧な彫をした金の指環とを脇にのけた。

番頭は其日は歸つて、翌日又やつて來て現金を鈴子に渡した。鈴子は流石に悲しいやうな心細いやうな氣がせずにはゐられなかつた。番頭の歸つて行つた後では、獨り行末のことなどを考へながら、茫然

なことがあるのではあるまいか。かう思つて、容易に出來ない男の金を疑つて見たりした。
しかし、鈴子に取つては、何うしても、養母との間の關係を綺麗にして置きたかつた。鈴子は二度と再び養母の家に行くことだけは絶對に厭だと思つた。此頃になつては、一層養母と土地とに對する反感が強くなつて來てゐた。
男はそれでも、その期限までに、兼ねて言つただけの額は出來なかつたけれど、その半分ほどの金を拵へて持つて來た。
『これで澤山よ。あとは私のものを賣るから好いわ。』
かう言つて、鈴子は胸算用をした。養母の方から言つて來た金の額は、かなりに多かつたけれど――又わざと多くしたやうな形もあつたけれど、その本當のことを知つてゐる鈴子は、仲に入つた人に一々言つてやつて、此方から正當に拂はなければならないものはこれだけといふ風に談判した。世間では、男が仲々な腕を持つてゐるからとか、あの男がついてゐては流石に見番のお政をばさんも困つたらしいとか、いろ〳〵に評判したけれども、實は鈴子が先に立つて、その方面のことは一切自分でその衝に當つた。
その翌日はかねて出入りしてゐる日本橋あたりの小間物屋の老舖の番頭がやつて來た。いよ〳〵さうした記念の多い貴重品に別れなければならない時が來た。

てく〳〵爲方がなかつた。丁度息子に口說かれた時分正面に持つてゐた旦那であるが、その息子に一度でも鈴子が靡いたのは、その旦那をよしてから、Rからその息子を奪ひ取らうと思ふ心が鈴子に萠してゐたからであつた。後には、餘り此方が無愛想をして見せたので、つまらないと思つたか、旦那の方から手を引いて了つた。その時、養母はその旦那から尠からぬ金を取つた。

箱の中にある其他いろ〳〵な形をした指環を鈴子は一つ〳〵手に取つて見た。後にはさう大して指環なんか欲しくないと思ふほどそれほど鈴子は、眞珠の入つたのや、純金の名工の彫をしたのや、ルビイの入つてゐるのなどを持つてゐた。

『まア、大變あるのね。』かう言つては、照葉などが來て見て羨しがつた。その他の翡翠の玉の金簪や、蒔繪の櫛や、珊瑚の根がけや、その折々につけての流行の細々したものを澤山に持つてゐた。

かうしたものを、いろ〳〵な男の追憶の絡み着いて殘つてゐるものを、かうして調べて見たが、いざ賣らうとなると、流石に鈴子も悲しいやうな氣がせずには居られなかつた。ダイヤの一つもない指！それはもう藝者はする氣はないから好いやうなもの丶、又はさうして自分の物になつたものをすつかり手離して了ふといふことはさつぱりして却つて氣持が好いやうな氣がするけれども、さてそれを賣つて了つた曉は？　何にもなくなつて了つた曉は？　かう思ふと、疑つてはならないと思ひながら、世間の言ふやうに、實際自分は夢を見てゐるのではないか、魔がさしてゐるのではないか、あとで後悔するやう

張絡みついて殘つてゐた。遊びの派手な、金を使ふことを何とも思はない、土地では評判されるほどの旦那で、年はかなり取つてゐたが、何處か氣の若いところのある人だつた。『もう、少し若いとな、夫婦になれる處だつた、もう十年遲く生れて來れば好かつた。』などゝよく戯談を言つた。鈴子は、まだ若かつたので、その情を深く染々と感ずることは出來なかつたけれど、それでも時々は思ひ出して、『何うしていらつしやるだらう、今時分は？』などゝ思つた。この間も、『あの旦那が盛んでゐて下されば……』などゝ思つた。その旦那は二年ほどして、すつかり家産を蕩盡して、紙衣のあはれな身になつて了つたのであつた。今は東京にゐるか、それとも田舍に行つたかわからなかつた。

もう一つのダイヤの指環は、梅子があの息子を騙してゐる時分のお客で、何うかして鈴子を自分のものにしたいと言つて奧の待合に一日隔のやうにやつて來た。芝居へも伴れて行けば、國技館へも一緒に自働車で行つた。何でも日本橋あたりの大きな呉服屋の息子で、年は二十七八、金を使はせやうと思へば如何やうにも使はせることが出來るやうな人であつた。それを散々引張つて、終に、鈴子はそのダイヤを買つて貰つた。矢張二百圓と少しした。しかしその息子とはさう長い間關係はしてゐなかつた。息子はやがて禁治産になつた。その本當の女は、今もゐるRといふ藝者だつたが、息子はいつしかそのRの方にも來なくなつて了つた。

もう一つの矢張二百圓ほどしたダイヤの指環は、二番目に持つた旦那に買つて貰つた。この旦那は厭

十七

ある日の午後、鈴子は自分の持つてゐる貴重品をすつかり調べて見た。

鈴子は何も彼も出して見た。質に入れて、まだ出さずにそのまゝになつてゐるものもあるが、それでもまだ大切なものは大抵其處に殘つてゐた。

ダイヤの指環が三つ。一番大きいのはその時四百圓したもので、それはかの女をお酌から一本にして呉れた旦那が買つて呉れた。その時は何んなに嬉しかつたか知れなかつた。子供のやうに朝に夕にそれを簞笥から出して來て見た。そのためにのみ旦那は難有い情深い人だと思つた。それにお座敷にそれをはめて出るのがまたどんなに得意であつたであらうか。朋輩の妓達は皆なそれを羨しがつた。『鈴ちやん、ちよつとお見せよ、大きいわねえ、光るわねえ。』など丶言つて寄つて來て、細いかの女の指にはめてあるダイヤを羨しさうにして見た。姐さん達すら、大抵はさうした指環を持つてゐないので、『四百圓、そるだらうね。質が好いもの。』などと言つた。そしてまたそのダイヤが夜のお座敷の灯に光るのがうれしかつた。それをはめてゐると、自分の身から、體から後光がさすやうにすら思はれた。何處のお座敷に行つても、それがあるがために、人にひけを取らないで濟むやうな氣がした。

それればかりではなかつた。それには、そのダイヤの指環には、旦那の情と言ふやうなものが今でも矢

『好いよ、わかつたよ。』

世離れた二人だけの生活になつても、かうした話は猶をり〳〵かれ等の間に取換されるのであつた。鈴子がいかに情を見せても、さびしく丸髷に結つて見せても、前に關係した男の數々は、常に二人の間に浮び出すのであつた。又時に由つては、それとは反對に、男の持つた大勢の女に對する鈴子の疑惑が際限なくかの女を惱ますのであつた。勝手に近い三疊にゐる婆やは、これを聞いていつも、『又始まつたな。』と思つた。そして馬鹿々々しいやうな笑ひたいやうな氣がするのであつた。そして二人は泣いたり笑つたりするかと思ふと、今度は急にはしやぎ出して、長押にかけてある三味線を下して、男が彈くのに女が合せたり、女が彈くのに男が唄つたりした。

奥の六疊には、明るい晝のやうな月がさし込んで來たり、又はしめやかに終夜雨の音が聞えたりした。庭には婆やが買つたり又は此間通りに賣りに來た爺さんから買つたりしたダリヤの赤い白い紫の花が一面に咲いて、朝は眩しいほどそれに七月の暑い日がさした。名物の蚊は、もう先月あたりから出て、此頃では、もう蚊帳を吊らなければならなくなつた。五燭の電燈の白い笠は、蚊帳を吊ると、ずつと持上つて、紐はたるんで、蚊帳の中に、浮ぶやうになつた。鈴子の丸髷は、派手な長襦袢と共に縮のやうにその淺黄の蚊帳の中に透いて見えた。

『まだ、あんなことを……。』

かう言つて、ぢつと男の顔を鈴子は見詰めた。急に、悲しくなつて來たといふやうに、はら〳〵と涙は鈴子の白い頬を傳つて落ちた。

暫く二人は默つた。

『貴方はまだそんなことを思つてるの？』

『さうぢやないけれど……。』男は笑つて、『まア好いよ、そんなこと、戯談に言つたんだよ。』

『でも、本當に、そんな風に、貴方は思つてるの？』

『さうぢやないよ。』

『聞かして頂戴……本當にさう思つてるんなら、さうと聞かして頂戴……。』

『ぢやないつて言ふのに……。』

『旦那だつて、それはわかつた旦那よ。それは好い事だつて賛成して呉れたんですよ。先の旦那なんかから比べれば人情はあるし、物はわかつてるるし、さういふことにするにしても、お前、當分は困るだらうからッて言ふのよ。それを私は、ちやんと斷つたんですから……。私は、これでも藝者氣質ぢやなくつてよ。普通の藝者なら、屹度兩天秤かけて置くのにきまつてるるのよ。それをしない私ですからね。そんなことを思はれると、本當に腹が立つわ。』

『何なら、私がつけても好いわ。』かう言つた鈴子は、長い間のことを考へて來てゐた。兎に角何を措いても、鈴子は養母の手から自由になりたかつた。世話になつたとは言へ、又恩にもなつたとは言へ、あの慾の深い、薄情な、金を貯めることばかりに夢中で、義理も人情も知らないあの養母の籍から身を拔いて、もとの、小川姓に戾るなり、又は男の籍に自分を入れるなりしたかつた。さうしなければ、世間に對する自分の顏も立たないし、かうした戀に進んで入つて行つた意義も徒爾になつて了ふやうに思つた。立派な一人前の細君になつて、この土地の人達に見せてやらなければ氣が濟まないやうに思つた。

『私ね。』かう言つて男の顏を見て、『此間から考へてゐたにはゐたのよ。私、ダイアの指環を三つ持つてるし、それに櫛だつて、笄だつて、好いのがあるから、あれを皆な賣つて了へば、かなりのお金になりますからね。さうしたら、綺麗にすることが出來ると思ふわ』

『何アに、好いよ、僕がするよ。』

『でも、ね、あんまり喧しく言つて來るんだもの。向うではね、その癖それとは、正反對のことを考へてゐるのよ。今に目が覺めるだらうツて言つてるんですよ。そして、あやまつて歸つて來るだらうと思つてゐるんですよ。馬鹿にしてゐるんですからね。藝者なんか、イヤなこつた、もう二度と再び……』

『でも、此間、旦那から來た手紙は何うしたえ。返事をやつたらう？』

『さう……。』

かう言つて、男の不斷着を出したり、着物を疊んだりして、それから二人で長火鉢にさし向ひに、其話やら、何やら彼やらに夜は更けて行くのであつた。

『向うぢや、いつまでもさうぐづ〳〵してゐるなら、爲方がないから、表沙汰にするやうな話よ。』

『おどかしだよ。』

『でも、今度はおどかしぢやないやうだわ。』

『今日も來たのか?』

『え……。それに、長火鉢だの、簞笥だの、皆な向うのものだから、今日にも持つて行くつて言ふのよ。實はさうぢやないんですけども……。この長火鉢だつて、簞笥だつて、先の旦那が皆な拵へて呉れたんですからね。』

『そんな眞似をするツて言ふなら、さうさせれや好かつた。家宅侵入で、あべこべにやつてやるから……。』

『しかし本當に、何うにか始末をつけたいわねえ。いつまでもかうしてゐては、氣持がわるいわ。』

『僕もさう思つてるんだ。もう少し待つて呉れ……。今日もその話で行つたんだが、何うも旨く行かなかつた。今、十日も經てば出來る筈だから。』

『だッて、ちよつとはありませんし、それに、近所に奉公でもされて、種々なことを言はれると厭だと思つて……。』

『そんなことは構はないぢやないか。』

『でもね……。』

しかし男が此頃になつて眞面目に種々なことを考へて呉れるのが鈴子には嬉しかつた。乘りかゝつた船、始めはさういふ風なところが何處かに見えてゐて、本氣になれないやうな水臭いところが、いくらかないでもなかつたが、此頃では、かうして世間を離れて、又自己の位置を離れて、女が自分一人に盡して呉れる眞心がかれを動かしたか、それとも又かうした世離れた二人の生活が、今まで紅燈綠酒の間にのみ埋められるやうにして來たかれに興味を起させたのか、それは何方だかわからないが、兎に角、男は家を明けるやうなことは滅多になかつた。『今日は遲いわねえ、何うしたんでせうね。』壞れかけた髮を氣にして、いろ〳〵なことに思ひ崩折れて、長火鉢の傍でしよけて待つてゐると、格子が音高く明いて男は歸つて來た。

あたふたと迎へに出て、

『隨分遲いのね。待つたわ。』

『でも、あの話であちこち廻つて來たもんだから。』

養母の方では、好加減に鈴子が懲りて、戻つて來て異れるのを望んでゐた。仲に入つた人達も、『何アに魔がさしたんですよ、ぢき目が覺めますよ。』こんなことを言つてゐた。しかし、それをかれ等の目的の下に近づけて來るには、何うしても鈴子の養母に負つた負擔の方から攻め寄せて行かなければならなかつた。後には、養母の手から、さういふ口利きをのみ業としてゐる三百代言なども入つて來て、毎日のやうに、靜かな、世離れがした鈴子の家を脅かした。

婆やはまだそこに使はれてゐた。見番の養母に濟まないから暇を取りたいと言つてゐたが——更に立入つて、かうなつてはもう以前のやうに旨い鼻藥を貰ふことが出來なくなつたので、體好く引上げやうと思つてゐるのだが、手のない今、婆やに行かれては、ちよつと鈴子は困るので、いろ〳〵に機嫌を取つて、つとめてそれを引留めて置くやうにした。しかし、その婆やも此頃ではもとのやうに自由に十分には動かなくなつてゐた。はいと言つておとなしく引込んでゐるところにまで理窟をつけて、いろ〳〵なことを言つた。洗濯物なども何の彼のとよく溜めて置いた。

鈴子はさういふところにも、沒落の氣分を味はなければならないのを悲しく思つた。ある日は、『本當にしやうがない、婆やまで人を馬鹿にするんですもの。』かう縋るやうにして男に言つた。鈴子の眼には涙が光つた。

『出して、代りを伴れて來たら好いぢやないか。』

『羨ましいわねえ、姐さん！』

『何うして？』

『だつて、丸髷に結ひたいわ。』

『でも、苦勞はあるわ……。』

『それはあるでせうけれども……丸髷に結つてゐる人を見ると、私なんか、いつさういふ身になれるかと思つて……。それに、姐さんは、毛が好いから、丸髷が本當によく似合ふわ、羨ましいわ。』

『駄目よ……。』

『本當に綺麗……。矢張、姐さん位の年頃になると、丸髷が一番好く似合ふわねえ。』

『何うしても、年が來ますとねえ……。』かうそれを見てゐた髮結は言つた。

大きな丸髷は、鈴子の心の象徵か何ぞのやうに四邊に際立つて美しく見えた。土地の藝者達も、何うかすると、その髮結がへりの鈴子の丸髷に邂逅して、それを話の種にした。

十六

養母の方のきまりを附けなければならない時期が次第に切迫して來てゐた。男も無論、心配して、出來るだけ多くその額をつくらうとして奔走した。

唯熱心に川向うに毎朝朋輩と連れ立つて踊の稽古に行つたかの女か。

ある時、土手で花屋の女將に逢ふと、『鈴ちやん、お前さん、何うしたつて言ふんだよ。魔がさしたッて言ふのかえ、それとも何うかしたのかえ。ちつとは、自分の身の上の振方も考へてごらんよ。』かう言つて、その他には何にも言はずに、さつさと向うの方へ行つて了つた。つい此間まで懇意にした花月の女將は、それでも行くと、別に變つたことが無いやうに愛嬌よく取扱つてくれるけれども、『でもねえ、鈴ちやん、損ぢやないか。折角磨いた藝を持つてさ、それが惜しいぢやないかねえ、さうは思はないの、鈴ちやん。』など丶言つた。

鈴子はそれが口惜しいと言ふやうにして、又はその代りにかうして見せてやると言ふやうにして、いつも髮はきまつて丸髷に結はせた。矢張元の髮結さんであつたが、それがそのことがあつてから三四度來て、その次に、『お氣の毒ですけれども、お師匠さんが喧しくて爲方がありませんから……。』と言つて斷つた。髮結の師匠と言ふのが、鈴子の養母であつた。

それからは、鈴子はその近處に住んでゐる髮結の許に、自分で出掛けて結つて貰つた。矢張何時も丸髷に結つて貰つた。手絡もわざと派手なのを、髷の形も一番大きいのを用ゐた。

何うかすると、その髮結の許に、知つてゐる抱妓などが來てゐることがあつた。抱妓は待ちながら鈴子の大きな丸髷の段々出來て來るのを見た。

『けしからんな、それは、見番にはさういふ權利はない。』かう男が怒つて見たところで、養母との方がそのまゝになつてゐるので、何うすることも出來なかつた。

聞くこと、見ること、すべて沒落の光景を鈴子に思はせた。仲を好くした照葉や梅子なども、そのことがあつてからは、成べく此方に近寄らないやうにした。何うかして、土手などですれ違つても、ちよつと挨拶する位で笑つて通つて行つた。今まで入れなかつた川添ひの大きな料理屋へも、此頃では梅子が入つて行つて、お座敷の數が非常に殖えたなどゝいふ噂を聞いたときには、鈴子は今更ながらくわつとして、男のために拂つた自分の犧牲の如何に大きかつたかを思つた。何處に行つても、此處に行つても、人達はもう相手にしてくれなかつた。

十五

これが川添ひの土地で全盛を盡したかの女か。又これが何處のお茶屋でも姐さん姐さんと立てられて、美しい巧な舞の袖に客の心を恍惚たらしめたかの女か。又これが人に羨まれる旦那をもち、指環にも着物にも贅澤を盡し、自働車などで歌舞伎座や國技館の本場所あたりに出掛けて行つたかの女か。又たこれが世間の苦しみも何にも知らず、人情の冷たいのも暖いのも知らずに暢氣に日を送つてゐたかの女か。

れども、それでゝ男が割合に眞劍に、養母の方を綺麗にする話の相談相手にもなつていろ〳〵心配して吳れるのが力であつた。花屋での旦那とのわかれ話を男にした時には、男は決してそれをわるいと言はなかつた。又、普通の藝者のするやうに兩天秤にかけて置かなかつたことを、『もう少し引張つて置けば好いのに……智慧のない女だ。』とも言はなかつた。此頃では男は午後になると、いつも蠣殼町の方から歸つて來た。

時には踊の師匠の相弟子と一緒にやつて來て、酒肴を取つて、はしやいで騷いで三味線を彈いたりした。

通りに面した格子戶には矢張り鍵がかけてあつた。

一月ほど經つた後には、鈴子は益々自分の墜ちて行くところに墜ちて行きつゝあるのを感じた。最早鈴子は土地での一流の姐さんではなかつた。又、勢力のある見番の養母や、立派な後楯の旦那を持つて居る姐さんでもなかつた。それに、かうなつて了つては――かう土地に噂を立てられて了つては、假令口がかゝつて來ても、きまりがわるくつて、又人々にじろ〳〵顏を見られるやうで、お座敷には出て行かれなかつた。それればかりではなかつた。養母が見番の全權を握つてゐるので、又、養母と土地のお茶屋との關係もあるので、お座敷の口はばつたりかゝらなくなつて了つた。お名指でかけて來ても、見番では矢張陽に、陰にそれを遮つた。

一刻も早く家を疊んで同居することを嚴談した。時には、中に人が入つて、『今の中に思ひ切れば、今までのことは許してやる。何にも言はない。さうした方が貴女の行末のためにもなる。今、かうして見番の養母と喧嘩しては、また不義理をしては、貴女だつてこの土地では藝者の稼業をして居られなくなる。又、同盟を廻されゝば、他の土地に行つたとて矢張稼業が出來ない。それに、折角これまで築き上げた貴女の名前だ、餘り智慧のない話ぢやありませんか。』かう言つて譯を細く說いた。

十四

鈴子は世間で想像してゐるよりも一層辛い運命の迫つて來てゐるのを感じた。しかし、何うしても自分の思つたことは通したいと鈴子は思つた。鈴子に取つては、今では、男と、『女たらし』だとか、『騙されてゐるのだ。』とか言はれてゐる男と、一緒に伴れ添うて見せなければ、何うしても自分の面目が立たないといふやうなハメに陷つて行つてゐるのであつた。

その話を男にすると、

『大丈夫だよ。僕がついてゐるよ。そんな心配はしない方が好い。』

かう言つて、男はいつも鈴子をなだめた。それは戀の歡樂に續いてゐるので、何の點まで男は自分を愛してゐるか、又どれほど深く自分を思つてゐて呉れるか、それがちよつとわからぬやうな氣がしたけ

『それにしても、好く三月もわからずにゐたもんだね。』
かうある老妓に訊くと、
『これが土地で出來たことなら、すぐわかるんですけれども、稽古先で出來たんですから、それで、ちよつとわからなかつたんですね。そひやもうねえ、土地ならすぐなんですけれども……。』
『面白いな、しかし……。』
『堅い評判の妓だけにね。』
『矢張、色戀でなくつちや末が納まらないんだねえ。かういふ稼業をしてゐても……。』
『それは本當ですね。』
かう言つて老妓は笑つた。
花屋で鈴子が旦那をぢかに斷つたといふ話は、旦那の口から洩れたか、それとも旦那から話した養母の口から洩れたか、それは何方からだかわからないが、さういふ噂も土地の人達の耳を聳たしめるには十分であつた。
『ぢや、本當に、きつぱり斷つたのかしら？　本當にさうなら、豪いわねえ、餘程眞劍ねえ。』などと妓達は言つた。
その時分には、鈴子と養母との關係は、一層難しくなつてゐた。始めは養母は度々出かけて行つて、

鈴ちやんが……』かういふ妓もあれば、『もう三月も前からですとさ。それで格子にいつも鍵をかつて、中で逢つてゐたんですとさ。』といふものもあつた。照葉といふ鈴子と仲の好い妓は、『さう言へば、思ひ當ることがあるわ。此間、芝居に行く約束をした時、私の方から誘ひに行くつて言つたら、好いのよ、家になんか來なくつたつて好いのよ、誘ひに來るならやめるわツて言ふのよ。變なことがあると思つてゐたのよ。その時ゐたのよ、屹度。』かう言つてある妓に話した。

これが見番の養女でなかつたならば、あの監督の喧しい養母のもとにある妓でなかつたならば、又は平生堅い方で旦那と別れるにさへ涙を流したと言ふほどの妓でなかつたならば、人々はさう評判にも立てなかつたかも知れなかつた。かういふ社會にはさういふ話は別にめづらしい話でもなかつたから……しかし鈴子の戀の話は人々を驚かした。

從つて、その相手の男に對する批評もあちこちできかれた。遊人だと言ふものもあれば、有名な女たらしだといふものもあつた。一中節の年を取つた師匠は、『まア、あの人かえ？　あの人は評判の男ぢやないか。それはね、好い男さ。よし町あたりを通ると、お酌さんがキとか、アとか言つて目くばせしたものだアね。大變な人に引か丶つたね。』など丶言つた。『見番のお政をばさん、それは心配だね、だから、堅い人は柔かい人よりも用心しなけりやいけないつて私が言はぬことぢやない。』かうも言つた。

お座敷で、或るお客が、

さうにして酌み交す朝酒も、多くは手持無沙汰のやうな沈默の中に過ぎた。

女中は鈴子を廊下まで呼び出して、

『何うかしたの？』

『いゝえ、別に……。』

『でも、變ね。』

『御機嫌がわるいのよ。』

で、雨の降頻る中に車は呼ばれて、旦那は淋しさうにして歸つて行つた。あとで鈴子は女將や女中から種々なことを聞かれたけれど、鈴子は別に何も話さなかつた。別れないですむものなら、旦那とも別れたくないといふ心が未だに胸の何處かに殘つてゐるのを鈴子は見た。やがて鈴子の車も來た。雨は入口の紫陽花の紫にしとゞに降つた。

十三

鈴子と男との間柄は忽ちその土地にぱつとなつた。何方かと言へば思ひがけない噂なので、初めは人々も半信半疑でゐたけれども、またある姐さんなどは、鈴子の平生堅いのを知つてゐるので、そんなことはないと言つて容易に信じなかつたけれど、段々それが事實であるといふことが知れて來た。『まあねえ、

鈴子は着物を着て、帶をしめて、涙に濡れた顏を直して、そのまゝ旦那の枕元のところに來て坐つた。

『兎に角、一度お暇をいたゞかして……。』

『……………。』

『表向きだけでも好う御座んすから……。』

『兎に角、これきりで別れるといふことは止さう。』

『それでも好う御座んすけども……この家へは、もうこれ切りにして下さい。』

『それは何うでも好い……。しかし藝者はしてるんだらう？』

『えゝ』かう言つたが、張り詰めた心がまた弛んで、自分の男の戀に對する疑惑と旦那のやさしい未練に對する同情とが縺れ合つて來るのを感じた。鈴子はわからなくなつたといふやうに、『もう、この話はよしませう。もつと考へさせて下さい。』かう言つた鈴子の眼からは涙が出た。

佗しい佗しい雨の朝であつた。昨夜のやうにもう強くは降らなかつたけれど、びしよ／＼といつ晴れるとも知れなかつた。庭の緑も石も菖蒲も野も皆雨に濡れそぼちてゐた。やがて女中は入つて來たが、その眼にも、その座敷のいつもに違つて濕つた空氣に滿されてゐるのがわかつた。鈴子の眼にはかくし切れない涙の痕が殘つてゐるし、旦那の顏には包みきれないやうな佗しさがそれと見えた。いつも樂し

鈴子の思つたとは反對に、そんな女とは思はなかつたとか何とか言つてすぐ突離すかと思つたとは反對に強く熱く自分の方に偏つて流れて來るのを感じた。それが却つて鈴子には辛かつた。旦那は終にはエクスタシイに陷つたやうに、『わかれの Kiss !』などゝ言つて女の體を固く抱き緊めた。

鈴子は長襦袢姿で、廊下を通つて厠へと行つた。また一つ新しい苦勞が開けて來たやうな氣がした。つゞいて容易に解くことの出來ないきづなが深く自分の體にからみついて來るのを感じた。昨日までは、今度逢つた時には、旦那にはきつぱりことわる。さうでなくつては本當ではない。かういふ風に簡單に考へてゐた。ところが、さうは行かないものであることが考へられた。『何うでも好いよ。此處の家で具合がわるいなら、此處でなくつても好い。又、別れなければならないんなら、表面別れた形にして置いて好い。兎に角、さうした新しい生活に入るなら入つて見るが好い。それの邪魔はしない。しかし、折角僕もお前を見て來た。世話といふ世話は出來ないが、行末までも世話をして見やうと思つてゐた……』かう言はれて見ると、鈴子はそれでも暇を戴きたいとは言へなかつた。

厠を出たところで、手に水をかけながら、鈴子は立留つて、心を一ところに集めるやうにして考へた。やがて室に歸つて來た鈴子は、再び床に入らうとはしなかつた。その儘着物を着て起きる支度をした。旦那は佗しさうに、又は自分の言ひ出した心持を女が汲んで吳れないらしい態度に失望したと言ふやうに、ぐつたりと半あげてゐた頭を枕に落した。

ずに打明けて旦那に話したことを後悔した。惚れてはゐないけれど、さう憎くも厭だとも思つてゐる旦那ではない。これが他の藝者ならば、言ふ時はいつでも言へる。別れる時はいつでも別れられる。かうした輕い程度で、それを月々世話になつてゐる經濟上の補助とくつ附けて、あるところまで理解させて、そして時節の來るのを待つやうにさせずには置かない。この社會では、さうした事件は到るところにある。ある姐さんなどは、さういふ風にして男をあやつつて行くのを戀の一番おもしろいことだと思つてゐる。かう思つた鈴子は、餘りに早く餘りに後先見ずに、さういふ話を持出したことを悔いても見た。そしてこれが、藝者稼業に似合はないかうした生眞面目が、梅ちやんのやうに腕を振ふことが出來ない自分の性質かなどとも思つた。旦那は又旦那で、かうと言はれて見れば、それならさうかと言つて此まゝ別れて了ふことが出來ないやうな氣がした。夜明近く、今度は、旦那は、鈴子の男に就いていろ／＼に訊いた。

『一緒になれゝばそれは結構だけども、……何うせ、さうすれば母さんは反對なんだらうから。』

『さうなれば、養母とはどうせ、すつかり綺麗になりたいと思つてゐます。』

『しかし、お前の話では、その人はこれまで隨分女にかけては、手のある男だつて言ふ話だが……。』

『だから、何うなるか、先はわからないんですけども……。』

て、さうした煮え切らない話が夜明までつゞいた。要するに、際限がなかつた。しかし旦那の男心が

もしなかつたが、折角眞劍に世話をしてやらうとした自分の心の通じなかつたのを遺憾に思つた。しかし鈴子の心持がわかつて來ると共に、又は鈴子の境遇と戀にあこがれた心とが飲込めて來ると共に、折角馴染かけた戀に似た自分の心が、忽ち水を注がれて消されて行くのを辛く旦那は感じながら、しかも何うすることも出來なかつた。そればかりではなかつた。旦那は自分の心が鈴子の戀に縺れ合つて行くのを見た。終には、自分を別に、自分をわきに離して、戀に狂ふ男女の心理に同感するやうな境にまで旦那は作れて行かれた。何のために？　また何の力のために？　鈴子の眞面目なまことの涙と、かうしたことを自分に言ひ得るまで思ひ詰めた心とのために……。

鈴子はこの間の夜の出來事の內容までは話さなかつたが、それでもその事は既に旦那にちやんと察しられてゐることを知つた。旦那はまた旦那で、そこまで追求しては聞かなかつた。

旦那はをり〳〵溜息を吐いた。腕を組合せたまゝ長い間默つてゐた。

一度小降になつた雨はまた音を立てゝ強く降り出して來た。

旦那には鈴子の心がわかり、鈴子には旦那が先の旦那とは違つて、物のよくわかる旦那だと言ふことはわかつたけれど、兎に角かうした別れ話を女から持ち出したといふ形が、その夜の空氣を佗しく辛く感じさせた。かれ等は同じ床には寢たけれども、竟に竟にいつものやうな氣分にはなれなかつた。

鈴子も旦那も終夜雨の音をきゝながら眠ることが出來なかつた。鈴子は一度はかうした話をあと先見

うな形を見せてゐたが、話して行くにつれて、『うん、うん。』と靜かに點頭いて聞いた。眞面目な表情が旦那の顏にも上つて來てゐた。

『ですから……ですから。』

かう言つて鈴子の言葉は途切れた。押へに押へた悲哀、世間や養母に對する悲哀が、思ひのまゝにならない悲哀、かうしたすまないことを言はなければならない悲哀が、今しも堰を切つて落した瀧津瀨のやうに鈴子の胸にこみ上げて來たのであつた。鈴子は顏を突伏して泣いた。

旦那も默つて鈴子の腕を自分の腕に合せたまゝにしてゐた。

鈴子が顏を上げた時には、旦那の眼にも涙のあるのを見た。

『わかつたよ、よくわかつたよ。』

かう旦那は靜かに言つた。

『本當に、こんなことを申上げて……。』

鈴子はまた突伏した。

何事をも鈴子は旦那に隱さなかつた。すべてあつたことを話した。『いゝえ、家を移轉したのは、さういふつもりで引越したんぢやないんです。越してから一月も經つてからのことですから……。』かう言つて師匠の相弟子の友達である男に戀したことを話した。前にもいくらか薄々知つてゐる旦那は別に驚き

歸つて來てから、さびしいから、何うしても、ひとり姐さんを聘ばうと旦那が言ふので、さういふ氣は起らなかつたけれど、女中に賴んでかの子姐さんを聘んで貰つて、やがてやつて來たその老妓を相手に、又一しきり靜かに酒を飮んだり話したりした。あまり進まなかつたけれども、旦那が望むので、別れのつもりで、鈴子は立つて靜かに袖をひるがへした。土地でも鈴子は踊が上手なので評判であつた。

狹い一間に入る時分には、一日降らずに暮れた空がいつか雨になつて、それも近頃にない大降になつた。屋根や庇に打ちつける音は、時としては霰か氷雨かと思はれた。從つて何の室にも客はなく、女中が丸い罎に水を持つて來た後には、あたりはひつそりとして了つた。唯瀉ぐやうな雨の音ばかりだ。

五燭の電燈、赤いメリンスの四布蒲團、微かな光線の中に浮き出すやうに見える派手な長襦袢、長い艶な美しい髱と襟足……ある期間を過ぎたあとで、靜かな聲で言つた。

『聞いて戴きたいことがあるんですがね。』

『何だえ？』

かう無造作に言つて旦那は此方を向いた。

靜かな囁くやうな鈴子の聲は續いた。鈴子の胸には眞面目な決心が上つて來てゐた。かうして打明けてはならないことを、又は濟まないことを、自分の口から、旦那の耳へ。悲しい辛い思ひがをり〳〵胸を一杯にするのを鈴子は感じた。旦那は始めは驚いたやうな顏をしてゐたが、又はいくらか焦々するや

『今日は靜かだね、何處の室にもお客はゐないね。』

『さうね……靜かね。こんなことはめづらしいんですよ。』

ふと思出したやうに、『藝者稼業なんて、いやな稼業ね。人間のするもんぢやなくつてね。』

『何うして？』

『何うしてツて言ふこともないけれども……さうぢやない？』

『それはさうだね。』

『つくづくいやだわ。』

川の畔に出た時には、二人は靜かに姿を浮き出すやうにして、長い間溶々として流れる大河に面して立つてゐた。對岸には大きなガス溜があつて、エンジンの動く音が川に反響して凄じく聞えて來た。川には荷物を滿載した舟や帆やボートや、大勢人を乘せた渡舟などが通つて行く。對岸の大きな工場の此方では、女の勞働者や男の土方などが頻りに煉瓦を運んで働いてゐるのが小さく見えた。

晴れた日ならば、夕日が美しく川に金屬のやうな輝きを流すのであつた。また碧い美しい空を、白い羊の毛のやうな雲を、又焰のやうに赤い夕映を……。しかし其日は灰色に空は曇つて、流るゝ水の色も佗しく、岸に生えた蘆荻の新綠に打寄せて來る波もわるく濁つてゐた。半孕んだ帆は薄暗くあはれげに見えた。鈴子はつとめて氣を引立てるやうにして話した。

ないか。』かう旦那が言ふのを鈴子はとめて、『今日は誰も呼ばないで靜かに二人ぎりで話しませうよ。』と言つた。鈴子は辛さうにさびしさうにしてゐた。それを旦那は却つて嬉しさうにして聞いた。

『この間の晩はあやしかつたぜ――』

かう旦那は笑ひながら言つた。

鈴子もつとめて晴々した顏をしてゐた。いくら考へたつて、なるやうにしきやならない。かう思つて此間中から辛い思ひをさせられた辛勞も何處かに行つたかのやうに、莞爾と樂しさうにして、『私にも一杯頂戴。』などゝつゞけて飮んで、顏を眞赤にして、三味線を彈いた。

夕暮近い頃には、旦那と伴れ立つて築山のある庭から、池の縁を廻つて、敷石を傳つたり、小さな丘に添つた道を歩いたりして川の方へ行つた。一年以上もかうして來ては眺めた川である。池の岸には紫白の菖蒲が眼もさめるやうに咲いて、大きな龜の子がそこの石に甲羅を干してゐた。『そら、其處に龜の子がゐるわねえ。』わざと平氣な顏をして、こんなことを言つて、鈴子は池の中の踏石を渡つた。

『危いよ、危いよ、醉つてゐるて、落こちでもすると、母さんから大小言が出るよ。僕の責任になるからな。』

『大丈夫ですよ。』

丘の裾を廻りながら、何も知らない旦那は、

關係を切るか切らないかが、眞の情を男に捧げてゐるか否かの試驗石のやうな形になつてゐた。平生鈴子は旦那を滿更厭だとは思つてゐなかつた。そこからもさうした空氣は醸されて來てゐた。

鈴子は竟に決心した。

旦那は普通多くの旦那に見るやうに、さう旨い口も利かず、唄もうたはず、又年も取つてゐたが、以前に持つた旦那よりは眞面目で、自分のことを深く思つてゐて呉れることを鈴子は思はずにはゐられなかつた。それから比べると以前に持つた子供の出來た旦那などは、旨い口は利いた。女の喜びさうなことは言つた。機嫌を取ることも上手であつた。旨い洒落などばかり言つてゐて、本當のところをつかみたいと思つても、いつもつかめないやうな處があつた。第一、女と遊ぶことが好きで、賑やかに大勢藝者でも集めて騷ぎさへすれば好いといふやうなところがあつた。子供が出來たことを始めて話した時にも、喜ぶかと思ひの外『ふん、それはお目出度いな。』などゝ平氣で戯談のやうにして言つた。鈴子はさういふ人に一度は目覺めかけた深い戀の情を寄せかけて行つたのであつた。鈴子はさうした旦那は向うから離れ、此方から離れやうとする旦那は、離れまいとしてやさしく眞心を開いて來るのを感じた。

旦那の顏を見ると、決心した言葉が何うしても口から出なかつた。

それは靜かな曇つた日であつた。かれ等はいつもの花屋の二階の一間にゐた。旦那は機嫌が好かつた。その日は旦那は午後の三時頃から來て、靜かに酒を飲んで話した。『もう一人、誰か姐さんを呼ばうぢや

るのを鈴子は感じた。鈴子は猶々長い間じつとして、身動きもせずに、其處に坐つてゐたが、一時間ほどしてから、靜かに格子戸を明けて通りの方へ出て行つた。

その姿はやがて明るい日の光線の中を土手の方へと行つた。昨日までは、……今朝までは、男と逢ふにも、人に知れないやうに、誰にも見られないやうに、秘密の上にも秘密にして、家に呼び寄せるのならば、人目のない夜、でなければ、金を使つて此方からわざわざ藏前まで出かけて行つてそこでこつそり逢ふやうにしてゐたが、今はその心はがらりと變つて、自分でも不思議に思はれるほど著しく變つて、知れた上は、もう仕方がない……といふ度胸が強い力で塞いだ鈴子の胸を開いて來るのを見た。鈴子はいつも行く土手の上の自働電話に出て來た男に、『ぢや、すぐ來て下さいね、相談があるんですから……夜でなくつて、今、すぐでも好いの。』といふ電話をかけた。

十二

顏にはそれと表はさなかつたけれども、鈴子は今日こそ旦那にその話をしやうと決心した。

それより他に、自分等のまことの戀に行く道はなかつた。養母には知れたし、土地では稼業もしてゐられなくなるのはわかつてゐる。しかしさうかと言つて、旦那を一方に釣つて置いて、此まゝ際限なく男との仲をつゞけて行くわけにも行かなかつた。それに二人の戀はもうかなり突詰めてゐた。旦那との

一度は好加減にして歸つて來た。しかし鈴子には泣いても泣いても盡きないやうな悲哀がその軀に纏り附いてゐた。鈴子は愈々行くべきところへ自分達の戀が到達して來たのを思つた。しかし、鈴子は割合に自分の心の動搖してゐないのを自分自身で見た。歸つて來ると、婆やはそれと知つて、逸早く傍に寄つて來て、いろいろ話しかけたけれど、鈴子はそれを好加減に聞流して、そのまゝ長火鉢のところに坐つて、長い間じつとしてゐた。昨日結つた銀杏返は、今朝梳かれたまゝにまだ綺麗になつてゐて、長く出た鬢は、俯向加減になつてゐるので、白い襟足を一際美しく艶にして見せた。

不仕合で、親身になつて心配して吳れる父母もない、又あつても無いと同じである身の上を考へると、鈴子は急に悲しくなつて來た。今までは、自分の置かれた境遇に唯盲目的に適從して、別に何とも思はなかつたけれど、養母の冷やかな打算的な心がわかつたり、世間の通り一遍な好加減な心持がわかつたりした今、又男の心より他に縋るにも縋るものがないといふことがわかつて來た今、又その縋るべき男の心が果して縋るに足るものであるかないかといふ疑念もいくらか萌して來てゐる今になつては、染々と深く自分の境遇を考へて見なければならなかつた。淚は拭つても拭つても出て來た。『女たらしだか何だか、見るが好い。』

男をかばふ心と、世間の批評に對する反感と、自分の戀を何うしても眞劍な眞面目なものにしなければ……少くとも世間や養母にさうして見せなければ氣がすまないといふやうな心が奧の奧から流れて來

やなかつたんだよ。來た時は、寢小便をして爲方がなかつた子なんだよ。』毒々しい言葉で嚙みつくやうに言つた。

『梅ちやんなんか御覽な。人に世話なんか少しも燒かせないで、……あんな幼さな時分から、お客をあやなすことをちやんと知つてゐて……。今度だつて、あゝして立派に、一人立になつて、立派な旦那の他に、またあゝして稼いでゐるぢやないか。』かう言はれた時には、鈴子は餘り口惜しいので、

『だつて、梅ちやんと私とは違ひますもの。』

『だから、お前は馬鹿だつて言ふんだよ。』

『馬鹿でも好う御座んすよ。』

終には養母も怒つて、『本當に、づう〳〵しいたらありやしない。恩も義理も忘れて、自分の思つたまゝを通さうとするんだから。……通すなら、ちやんと通るやうにしてから、お通し……。兎に角、お前さんは、養女なんだから、今ぢやまだ私の言ふことを聞かない譯には行かないんだからね。さうお思ひ……。そして、今日にも、明日にも、あの家を疊んで此方に一緒におなり……。好いかえ、わかつたかえ？』

餘り養母の疳立つた聲が高かつたので、後には、年を取つた政どんといふ長年ゐる箱屋が仲裁に入つて、二人の間をなだめたりなどした。鈴子の眼は赤く涙に腫れ上つて見られた。

い。口留めの鼻薬を貰つて、さういふ眞似をさせやがつて……。もう今から暇をおやり……。』こんなことをも養母は言つた。

いろいろに口汚く言ひ罵る養母の言葉を、鈴子は長火鉢の前に俯向加減に坐りながら默つて聞いてゐた。一體、鈴子はお座敷などでも口數を利かない方だが、かうなると、一層默つて唯々下唇を咬んだ。烈しい言葉を浴せられる時には、手にした火箸で、頻りに灰を縱横にならした。

鈴子の心は養母の言葉につれて深く細かく種々なものに反響してゐた。『評判の女たらし』といふ言葉、『あんなものに騙されて、今に裸にされるのも知らないで』といふ言葉、中でもさういふ言葉が鈴子に愈々强く下唇を咬ませた。養母がそれと氣がつき出したのは、此間、彌生といふ待合に男と二人泊つて、そして朝早くまだ夜が明けない中に歸つて來た。その歸りかけを牛乳屋の男に見られた。そしてその牛乳屋の男は、『あゝいふ自前の姐さんでも不見轉をするのかねえ。』と言つた。その話が何處からともなく養母の耳に入つた。と、今度は今までのあらゆる不思議に思はれたこと、朝早くお稽古に行くことや、いつも格子戸に鍵がかゝつてゐることや、球突に出かけて行つたことや、旦那をほつたらかして電話に出て行つたことや、何や彼やがあつちこつちから一つになつて來たのであつた。

養母はこれまでにするについての一方ならぬ丹誠をも一々並べた。『お前さんは、一人で大きくなつて、人に押しも押されもしないやうになつたとお思ひだらうけれど、お錢がかゝつてゐるんだよ。並大抵ぢ

鈴子は暫し首を低れて、長火鉢に凭りかゝつて、火箸で灰などをならしてゐたが、『旦那が誤解してゐるんでせう、屹度……。』

『しらじらしいことをお言ひでないよ。お前さんは、私はまだ知らないと思つて馬鹿にしてゐるけれど、ちやんと知つてゐるんだよ。お前さんは、あの男は、一體、何ういふ身上だか知つてるのかえ？お前、騒がれてゐるのを知つてゐるのかえ？』

『………。』

鈴子は思ひもかけず深く自分達のことを知つてゐるらしい養母の言葉に驚かされて默つて了つた。

『名代の女たらしだつて言ふぢやないか。よし町でも、柳橋でも、もう散々女を泣かせた男だツて言ふぢやないか。さつきもお政さんがさう言つてゐたよ。まア、ね、鈴ちやん、あんな男の口に乘せられたんですか、それは心配ですねツて言つてゐたよ。藝者稼業をしてゐて、二十五にもなつて、その位のことはわかりさうなもんだ。』獨語のやうに言つて、『本當に人に心配ばかりかけて、此前の旦那の時だつて、泣いたり吼えたりして……。つくづくお前さんには呆れたよ。』

養母の話の樣子では、もう何も彼もすつかり材料が上つてゐるらしかつた。婆やが昨日長い間此方に呼ばれて來てゐたが……、婆やは歸つてから別にその話をしなかつたけれど、その時婆やは養母に詰問されて、すつかり何も彼も饒舌つて了つたらしかつた。『あの婆やも本當に、人がつけてやつた甲斐もな

十一

それから一日二日經つた或日の午後、養母の許から竹どんといふ箱屋が、『姐さん、ちよつと用があるさうです。』と言つて來た。鈴子は別に何とも思はなかつた。吳服屋でも來てるのかしらと思つてすぐ氣輕に出かけた。

いつものやうに、見番の箱屋の大勢ゐるところに行つて、そこで一言二言世間話をして、何氣なしに其の長火鉢のある處に行くと、養母はいつもと違つて、疳の立つた蒼白い顏を此方に向けて、挨拶も碌にはせずに、じろ〳〵と鈴子の體をさがすやうにして見た。鈴子の胸は俄かに騷ぎ始めた。

『お前かういふ噂があるがね。本當だらうね。』

かう養母は興奮して言つた。

鈴子の顏は見る見る赤くなつた。『何うしてそんなこと？』

『何うしても彼うしてもないよ。本當かえ？　ッて言ふんだよ。』

『旦那が言つたの？』

『誰れが言つたもないよ。人が知らないと思つて、よくお前さんは、そんなことをおしだねえ。……それぢや、本當なんだねえ？』

大して改まつた晴衣を出せとも言はず、いくらか亂れた艶な仇つぽい髪と顏とを鏡臺を持ち出して映して見て、それを綺麗に梳き直して、そしてちよいちよい着の大島を出して貰つて、帶は黑繻子と羽二重との腹合せをしめた。ダイヤの指環だけはそれでもはめた。

で、晝間、養母のところから、融通して貰つて來た金の十圓ばかり鏡臺の抽斗に入つてゐるのを出して、財布に入れて、それを帶の間に挾んだが、もう一度出して、そこから一圓札を一枚さがして、『これ、お小遣におしよ。』と言つて婆やにやつた。婆やは、『澤山ですよ。さう、いつでも戴かなくつても……。』と言つて、一度は辭退したが、後にはお禮を言つてそれを自分のくしやくしやになつた帶の間に挾んだ。

『おや、ね、朝になるかも知れないからね。』

『えゝえゝ……。』

鈴子は出かけやうとしたが、ふと柱にかゝつた時計を見て、

『十一時半ね、もう。』

存外時間の經つたのを驚くといふやうにした鈴子の胸には、小さな待合の一間で、佗しく酒を飲んで自分を待つてゐる男のさまがまざまざと映つて見えた。しかしそれもこれから、逢はれる喜悅と歡樂との想像に由つてすぐ打消された。鈴子はいそいそとして出かけた。

かう言つて、それから鈴子は精々旦那の機嫌を取つた。旦那も、さう言はれて見れば、まさか行くなとも言へなかつた。さうした野暮も、かういふ社會では通用が出來なかつた。それも、旦那が大通で、男と女の心理に精通してゐて、ぴしぴしポイントをつかむことの出來るやうな人であつたなら、野暮でなしに、又は無理でなしに、女を引留ることが出來たであらうが、餘り深くかうした社會の空氣に浸み込んでゐない旦那には、それ以上に深く入つて行くことが出來なかつた。旦那は鈴子の言ふまゝになつてゐるより他仕方がなかつた。

旦那はいつも餘り深酒はしなかつた。一本飲めば、顏は赤くなり、機嫌がよくなり、兎に角女がそこに美しい顏と白い肌と滴るやうな髮とを見せてゐさへすれば、それで爲方がないから滿足してゐるといふ風であつた。鈴子はつとめて明るい顏をして、三味線を下して來て、旦那の好きな春雨などを彈いて見せた。

その間に婆やの支度した奥の六疊には、五燭の電氣が薄くついてゐて、枕元には藥罐にコップが赤い盆に載せられてあつたりした。婆やは支度をしてから、可笑しいやうな、淺猿しいやうな氣がちよつとしたが、いろ〳〵さういふ所をこれまでに澤山通つて來た身には、別にめづらしくも不思議にも思へなかつた。婆やはそれよりも、貯金の殖えて行くことなどを考へた。

その奥の六疊に一度入つて、そしてそこから出て來た鈴子は、すぐ出かける支度をした。しかし別に

男は默つて步いた。

『だッて、それは無理だわ。世話になッてゐるんだもの。……さうぢやないのよ。さういふ風にとるから厭だッて言ふのよ。ね、さうして下さいね。たしか、彌生ッて言つた家があつたと思ふわ。』

二人の黑い影は絕るやうに縺れるやうにして動いた。鈴子は自由にならない稼業のことを染々と悲しく辛く思つた。二人は向うから來る足音に氣がねして、細い暗い路地の中に入つて行つた。ある家の軒燈は遠く二人の影の重なり合ふのを黑く地上に映した。

暫くしてから、

『そら、彌生よ……。間違つちや、駄目よ。え、一時間、遲くも一時間半すれや行くわ。』

二人はもう一度抱合ふやうにして、そして別れた。

鈴子は裏口から入つて行つた。

『お座敷がかゝつて來たのよ。』

かう言つて、旦那のつまらなさうにして盃を口に當てゝゐる方へ行きながら、『ちよつとでも好いからッて言ふのよ。斷つたんですけれどもね。いつでもよく聘んで下さるお客さまなんですから。何でもよし町あたりの藝者とよく來る人よ。今、すぐでなくつても好いのよ。時間間際になつてからでも好いのよ。かの子姐さんが行つてゐるらしいから……。』

『ぢや、母さんでも行くの？』

『何うするかしら？』

『私も、何うしやうかと思つてゐるのよ。』

『今度の狂言は面白くないッて言ふぢやないか。』

『さうですッてね……。』

『まアお入りな、鈴ちやん。』

『また來るわ。』

かう言つて鈴子は此方に來た。これで男はすぐわかつたらしく、五六間行つたと思ふと、あとから男が近寄つて來た。

『困つちやつた、私……。』

『…………。』

鈴子は男の手を闇に握つて『後生だから、この奧にね、小待合が澤山あるからそこに行つてゐて頂戴な。此方ぢや知れると、あとで困るから……。向うなら、大丈夫だから、私を知つてゐるものはゐないんだから、見番が違ふんですからね……。』かう言つて、又堅く握つて、身をすり附けるやうにして、『一時間位すると、私行くから……屹度行くから。』

つてゐるばかりで、そこらに人の影も見えなかつた。奥の藝妓屋の二階からは、灯が明るく光線を樹蔭の中に落して、抱妓達の何か笑つたり話したりしてゐる氣勢がした。

鈴子は引返して、今度は球突の方へと行つた。途中で松屋の抱妓のお座敷から歸つて來るのに逢つた。それからお房姐さんにも逢つた。運がわるいと思つた。

球突はずつと行つた角のやうなところにあつた。隣りには西洋料理と書いた小さな家がある。そこには五六人人がゐるらしい氣勢がしてゐる。で、目かくしの間から覗いて見ると、果して男が其處に球を突くのを立つて見てゐる姿が眼に入つた。しかしそれを知らせるのに鈴子は困つた。それに、定連のお金姐さんがお客と來てゐるらしく、その姿は見えないが、その高い笑ひ聲がをりをりきこえた。

二人の仲をけどられては大變である。けどられゝばすぐ養母に知れる。大騷ぎになる……。かう思ふと、滅多なことは出來ない。しかし自分が入つて行つても、男はそれを知つてゐるから、そんなぶまな眞似はすまい。それに、自分の姿を見さへすれば、男は出て來るに相違ない。で、鈴子はいきなり球突屋の入口の處に姿を顯して、『お金姐さん、其處にゐるの?』と聲をかけた。

『鈴ちやん、お入りな。』

『えゝまた……それより明日の竈割、何うするの?』

『私、行けない……。』

はこの奥の方に、違ふ見番の支配の許にある知らない小待合の澤山あることを思つた。

て、さういふことに決めて、旦那が爽え切らない調子でゐるのなどには、もう取合つてゐられないといふ風な氣分で、婆やに酒の支度——男と一緒に飮まうとした酒と肴とを旦那に出すやうに吩咐けて、そしてその間に、小聲で、何處からか電話がかゝつて來たやうに言はせるやうに婆やに賴んで、そして此方に來て、落附いて坐つてゐた。

酒の支度はやがて出來て、旦那は、餉臺に並べられた盃を手にして、いくらか機嫌が直つたといふやうな顏をしてゐるのを鈴子は見た。

『姐さん、電話……。』

かう婆やは言つた。

『何處から？』

『花月さんから。』

『さう。』

かう言つて、わざと考へて、『誰かしら？……』旦那の顏を見て、『ちよつと行つて來るわね。』

て裏口から下駄をはいて、そゝくさと鈴子は出かけた。鈴子は一番先に奥の方へ行つて見た。男はまだ其處等に立つてゐやしないかと思つたからであつた。しかし闇の夜は暗く、樹の影が深く蔽ひかぶさ

げたのに腹を立て、歸つて行つて了つたかも知れないなど、心配になつた。
鈴子は言つた。
『今日は家に泊つて行つても好いんでせう。もう遲いから……。』
『いや――』
『ぢや、花屋に行くの？』
『何うでも好い……。』
探りを入れたところでは、旦那は確かに疑つてゐるに相違なかつた。鈴子は辛い氣がした。
『何うでも好いツて、泊つて行つても好いでせう。』泊つて行かれては困ると思ひながら、かう鈴子は言つた。
旦那は默つてゐた。泊るとも言はなければ、花屋に行くとも言はなかつた。しかし泊るにしても、花屋に行くにしても、兎に角、今夜は一度旦那に侍さなければならなかつた。
『花屋にいらつしやいな？』
『それでも好い……。』
『それでも好いぢや困るわ。家に泊るなら泊るで、さうなさいよ。もう遲いんですからね。……ぢや、さうなさい。』いくらか焦々した調子で言つた鈴子は、なアに泊るなら泊つても好い……と思つた。鈴子

『さうかえ……。』

『でも、暫らくいらつしやいませんでしたのね。何うしたの、一體。今日も餘程電話をかけやうかしらと思つたのよ。』

『忙しいものだからね。』

『忙しいたツて、隨分になりますよ。一週間以上になるわ。花屋のお上さんも、何うかしたの？　なんて言つてたわ。』

『少しそれに風邪を引いたものだから……。』

『さう、それはいけないわね。何んな風でしたの。寢たの？』

『寢もしないがね。』

『大事にしなけれやいけませんよ。風邪がもとになるんだから。』

其處に、裏口が明いて、酒を取りに行つた婆やが歸つて來た。婆やは男がゐるものとのみ思つて入つて來たが、そこに、思ひがけず旦那が坐つてゐるので、はつとしたといふ風で、また可笑しいといふやうな顏の表情で、『入らつしやいまし。』と言つて丁寧に挨拶した。

鈴子にしては、此際、何うかしなければならなかつた。男は闇に立つてゐるか、それとも近所の球突へでも行つてゐるのである。まさかあのまゝ歸りはしまいと思ふけれど、ことに由ると、旦那を家に上

長火鉢のあたりには男の慌てゝ置いて行つた煙草入が、飲みさした茶の半分の入つてゐる茶碗が、懐から出して半分讀みかけた夕刊が、又は今まで坐つてゐた男の跡が、一目見れば、すぐわかるといふやうに、あたりに殘つてゐるのを鈴子は見た。鈴子は慌てゝ、男の煙草入と煙管とを取つて懐に入れた。てつきり旦那に感附かれた……、と思ひながらも、そんな風は少しも顔へ現はさずに、今まで男の坐つてゐたところに旦那を坐らせて、鐵瓶から湯を急須にさして、茶簞笥の棚から茶碗を一つ取つてそれに茶をついで旦那にすゝめた。

鈴子の眼は鋭敏に旦那の顔やら態度やらに注がれた。

旦那はたしかに機嫌がわるかつた。

『大層、遲いのね、今日は？』

『うん……。』

などゝ言つて、旦那は膝を固く坐つて、四邊を見廻して、夕刊やら茶器やらに眼をつけて、更に深い秘密を嗅ぎ出さうとするものゝやうに、眼と、耳と、心と、體とを、一方面に集中するやうにした。それを、その狐疑を、その疑惑を、鈴子は先づまぎらかさなければならなかつた。

『今、お座敷から歸つて來たばかり、その着物を藏つて、此處に坐つて、お茶を飲んで、それからはばかりに入つてゐたのよ。』

『あゝ、貴方！』

かう言つたが、『待つてゐらつしやい。今、明けますから……。』

男のことも氣にかゝるが、しかし旦那を家に上げない譯にも行かないので、胸はドキ〳〵しながら、下駄箱の蓋を明けて、下駄を出して、そして下に降りて、格子にかけた鍵を外して、更に用心深くさして置いた釘を拔いた。

格子戸はがら〳〵と明いた。

『ゐたのかえ？　さつきから呼んでゐたんだがな。聞えなかつたのかえ？』

『はばかりに入つてゐたもんだから。』

『婆やは？』

『ゐないの。ちよつと使ひに行つたもんだから。』

旦那はそのまゝ入つて來た。鈴子は何うすることも出來なかつた。

此方へ入つて來た時、鈴子は男の裏口からソッと出て行く氣勢を耳にした。鈴子は濟まないやうな、男が可愛相のやうな、又はこれから樂しまうとした自分等の歡樂がこの不意の闖入者によつてすつかり壞されて了つたのを腹立たしく思ふやうな氣がした。しかし旦那の入つて來るのを拒絕する譯には行かなかつた。

ちよつと使ひにと通りまで出て行つて留守であつた。

鈴子と男とは耳を欹てながら互に顔を見合せた。

夜はもう九時すぎであつた。

鍵のかゝつた格子戸の頻りにガタガタと動く氣勢がした。

『おい、おい……。』

又その聲がした。

たしかに旦那である。旦那の太い聲である。

男は急に長火鉢の前から立つて裏口の方へと行かうとした。『いゝわよ、ゐても好いわよ。』といふ表情を鈴子は男にして見せたが、男はそれにも拘らず、こそこそと其方の方へ行つた。

『おい、おい、ゐないのか。』

外では聲が段々高くなつた。

『誰方?』

わざとかう言つて、今始めてその聲を聞き附けたといふやうにして、鈴子は上り端の方へと立つて行つた。で、上り端の障子を明けると、パナマ帽をかぶつた背の高い旦那の姿が、軒燈の明るい光を全身に受けて、黒い影を地上に落して、格子に手をかけてゐるのを鈴子は見た。

であるから、其次ぎに、旦那と男と打突つた時には、鈴子は、『今夜は神田の伯父の家に不幸があつて、是非お通夜に行かなければならないから。』と言つて、自分の言つたことがすつかり旦那に見すかされてゐるといふやうな氣がするにも拘らず、無理に遲くなつてから歸つて來た。

しかし、鈴子は男には旦那の來てゐたことは、少しも打明けて話さなかつた。却つてありもしない長尻のお客の話をして、『六時から行つて今時分までですからね。ほんたうに長尻のお客は懲々ですよ。それに、あそこは貰ひがきかないんですからね。』などゝ言つた。鈴子は兩方に嘘言をつかなければならない身の上を悲しまずにはゐられなかつた。それも、今までは——無邪氣に稼業をしてゐた時分には、そんなことは何でもなかつたけれど、寧ろ藝者には當り前のことだ位にあつさりと考へてゐたけれども、今は單にさうして片附けて了ふことが出來なかつた。心は無論男のものではあるけれども、體は、汚れた體は……。又、汚れた體を知らん顏をして戀した男に寄せて行く身は……。

十

『おい、おい。』

と言ふ聲が戸外でした。

鈴子はギヨッとした。男はさつきそつと裏の戸を明けて來てゐた。長火鉢の前に坐つてゐた。婆やは

の時分は婆やは大抵ぐつすり寢込んで了つてゐるので、鈴子は長襦袢のまゝの派手な艶な姿をして、自分で裏口の鍵を外して、『今度は明後日、明々後日、早く來て頂戴よ。』とか、又は、『ぢや、あそこでね、十一時にね。屹度ね。待たせてはイヤですよ。』とか言つて惜しさうにして男を戸外に出してやつた。そして自分は再び男のぬくもりのまだ殘つてゐる床の中に入つて、疲れた體を十時近くまでぐつすりと寢込んだ。

ある時には、男の來るといふ晩に、運わるく旦那が花屋にやつて來て、何うしても泊つて行かなければならないやうなこともあつた。その時には、鈴子は殊に染々とかうした稼業を情なく思つた。今夜は歸れないと言ふことを言つてやることも出來ず、またさういふことを平氣で男に言つてやるのも濟まないやうな氣がして、花屋の廊下を行つたり來たりした。とは言へ、旦那の方もさう菅なく振切つて行く譯にも行かなかつた。其夜は爲方がなしに泊つたが、寢てゐても、男がぽつねんと獨りで待つてゐるさまが眼に見えて、いつものやうに旦那を喜ばせることが出來なかうた。漸く朝が來て、怱々に歸つて來たが、男はさびしく一人奥の六疊に寢て、朝早く歸つて行つたといふ婆やの話であつた。本當に濟まなかつたと鈴子は思つた。否、それからすぐ電話をかけて男の聲を聞かない中は、心配で不安で爲方がなかつた。次に逢つた時には、鈴子は其夜の懊惱を男に話し、又男からは待つて待ち明かした話を聞いた。

鈴子は涙を流した。

かう言つて女は始めて心を安んじたやうにして莞爾と笑つた。

こればかりではなかつた。餘りさうしたことを氣にするので、ある夜は、男は、

『そんなに、わるいことをしてゐるやうに思ふのかえ?』

かう言ふと、

『さうぢやないけども……だツて、知れると困るもの。』

『矢張、水臭いねえ。』

『さうぢやないよ、すぐさう取るから困るのよ。第一、母さんに知れたり何かすると困るぢやないの?』

『そんなに母さんが怖いの。』男は笑つて、

『それより旦那が怖いんだらう。』

『旦那なんか構はないけれども、本當に、知れると、困るわ。すぐ、土地で評判になつて了ふんだもの。此間、花月に行つた時なんか變だつたわ。お上さん、勘附きやしないかと思つて、ヒヤヒヤしてたわ。貴方つたら、餘りズバズバ何でも言つて了ふんですもの。』

そツと裏口から男の出て行く時は、夜は明けたばかりで、時には朝霧が白くぼつとあたりをこめてゐることも度々であつた。朝の空氣はしつとりとしめつて、空地に生えた草も青々と露に濕つてゐた。そ

の話聲にも、何處かできこえる戸を明ける音にも、靜かに家の前を通つて行く氣勢にも枕を擡げた。」

『何うしたの？』

『でも、誰か來たんぢやない？』

かう言ふと、男も耳を聳てゝ、

『向うの家だよ。』

『さうかしら？』

まだ安心が出來ぬといふやうにして、鈴子は眼を大きくして、

『でも、家の周圍を誰か步いてやしなくつて？』

男も半ば身を起して聞いた。

『そら、聞えるでせう？』

ハタ、ハタと物の動く音が靜かに庭の垣の向うのところでした。

『さうだね。』

その音を見送るやうにして男はゐたが、

『何だ……犬だよ。』

『さう……。』

男を自分の宅に引入れると言ふことは氣が咎めて爲方がなかつたけれど、しかも一方では首尾よく誰にもわからずに泊めて歸すといふことが樂しみであつた。監督のためにつけた養母の婆やは、養母の眼鏡とは違つて、存外譯知りで、でなければつかませられるお小遣の多くなるのを樂しみにして、知つて知らぬ顏、見て見ぬ顏をした。『もう、寢て好いよ。』かう言はれると、婆やはいつも自分の三疊に行つてこそこそ寢た。

九

晝の中は、養母の來る虞があるので、男は十時すぎ、乃至十一時すぎにならなければやつて來なかつた。時には――男の財布に金のある時には、近い所にある待合などに行つて、わざと知らぬ顏をして、鈴子をかけて、女中や女將の目を盜んで、手を握つたり膝を寄せたりして、秘密の快樂を樂しむことなどもあつた。さういふ時には、歸りには、男は女よりも一足先に歸つて、いつも明けて置く裏口からそつと入つて、鈴子の歸つて來るのを待つた。やがて鈴子は歸つて來た。そして婆やにあとをまかせて、二人は奧の六疊に入つた。低い聲が遲くまで婆やの室に聞えて來た。

しかし、さうした夜更て、誰も來るものがないときまつてゐても、それでも鈴子は床の中で絶えず耳を聰くして、些少な音にもはつとして胸を躍らした。細い巷路を隔てた藝者屋に遲く歸つて來る不見轉

ばこそ面白いのよ。眞劍になんか考へちや、一日だつてかういふ稼業はしてゐられないわ。』

『それはさうね……。』鈴子は猶言はうとしたが、言つても無駄だといふやうな氣がして口を噤んだ。

暫し一座は默つた。鈴子の頭には、梅子のやつて來たことなどが一つ一つ浮んで通つて行つた。あれほど薄情にして振捨てた息子と今になつてよりを戻してゐることなども考へられた。梅子はその他にも奥の待合などでお客を一人や二人は持つてゐるらしかつた。それにも拘らず、田舍の旦那が來た時には、神妙に、猫をも傍へは寄せないやうな顏をして、『貴方、何うして？』などゝ言つて、旦那に甘えるやうな態度を梅子はして見せた。『私なんかには、とてもあの眞似は出來ない。』かう鈴子は思つた。

『でも、旦那だつて、長く一緒にゐれば情愛は出て來るわねえ。』

『鈴ちやんは何方かツて言ふと、惚れつぽい方だもの。……何うも、堅い人は惚れつぽくつて、そしてぢき眞劍になるよ。』

『それはさうかも知れない。』

鈴子の頭には、人知れずこつそりやつてゐる自分の男のことなど思ひ出された。

『もう少し浮氣をおしよ。』

梅子はかう言つて笑つた。

『本當だともね。』

梅子はそれに相槌を打つたが、『でも、鈴ちやんも、何方かと言へば、呑氣な方ね。ぢやなかつた、堅い方ね。』

『さうかしら。』

『だッて、さうぢやない……。』

鈴子は梅子と眼を合せたが、『でも、詰らないと思ふわ、藝者なんか。本當のことなんか一つもないんだもの。苦勞したッて、苦勞の仕ばえがないやうなもんだもの。』

『いやに後生を出してね。』

『だッて、さうぢやない。浮氣で、フワ〳〵してゐる中は好いけども、浮氣なんか詰らなくなることがあるわ。お客なんか、本當に相手になりやしないもの。眞劍でなくつちや苦勞したッて詰らない。』

『本當ねえ。』

照葉は傍から言つた。

『私なんか違ふよ。私なんか、男が意氣地がないのが面白いよ。眞劍ッて言ふけども、夫婦になつたつて、眞劍なんてなれやしないやうなもんぢやないかしら？　それよか、男と面白く遊ぶ方が好いと思ふわ。だましたり、だまされたり、此方で引張つたり、引張られたりして……。一體、男なんて、遊べ

『知らない……。』

梅子は笑つて、『知らをきつたつて駄目よ。すつかり村さんから訊いちやつた。だから、お前さん、油斷しちや駄目よ。鶴ちやんが腕によりをかけてるツて言ふから。』

『どうせ、駄目よ、私なんか……。』

『意氣地がないわね、あんな奴に、ほれた男を取られて、お前さん、それで好いのかえ？』

『だツて、爲方がないぢやないの？』

『そんなことを言はずに、もう少し眞劍におなりよ。』

『照ちやん、一體呑氣な方だから。』

鈴子が傍から言ふと、

『あら、さうぢやないわ、鈴子姐さん……。隨分私だツて苦勞してゐるんだけども……。』

『引込思案は駄目よ。しツかりしなけりや！』梅子が眞面目で言ふと、照葉は、

『だツて、私なんか、餘り辛くなると、何うでも好いと思つちやうわ。……詰らないんですもの、苦勞ばかりして？』

『その苦勞が面白いのよ。』

かう鈴子は押しつけるやうに言つた。

彩に富んだ着物や言葉や、壁につらねてある三四挺の三味線や、大入のビラや、神棚や、さういふものか六疊の一間を艶に且つ贅澤に見せた。

芝居の話や、昨日松阪屋にセルを買ひに行つた話や、見番の政どんが不深切で貰ひをかけても電話を通して呉れなかつた話や、そんな話を少ししてると、其處に格子が明いて、『梅子姐さん、ゐて？』かう言つて鈴屋の照葉といふ妓が入つて來た。

照葉は鈴子や梅子とは一時代後だが、矢張お酌から本式に一本になつた妓で、鈴子の行く踊りの師匠の許にも通ひ、三味線も上手で、土地の若い綺麗な方で評判な一人であつた。

『おや、鈴子姐さんもゐるのね。』

かう言つて莞爾して、其處に來て坐つた。

『今度の音羽屋は好いわ。』

『いつ行つて？』

かう梅子がきくと、照葉は、

『昨日見たい連で行つたわ。五右衛門が好いのよ。』

『私も行かうと思つてるたんだけど……。』梅子はかう言つたが、すぐ、『照葉ちやん、何うして此間のこと。』

經つた時分のことであつたが、利根川べりのある豪家の息子に思はれて、散々金を絞つて、殆んどその息子が勘當される位にまで引寄せて、もういよいよ脈が上つたといふ時に、それを突離すために、一時地方へ行かねばならなくなつたのであつた。梅子が姿を隱した時、紙衣になつた息子は、梅子の蒲團に顏を當ててオイ〳〵泣いたといふことであつた。土地でも梅子の評判はわるかつた。

『あの妓は本當に腕がすごすぎる。あんまりひどい。』かう二人の最初の仲を取持つた家の女將は言つた。

しかし其息子が勘當が許りたので、今では、梅子は矢張そのよりを戾してゐるらしく、其方の方からも、多くの金を取つて、時には家に泊らせることもあるらしかつた。梅子は土地の妓達に憎まれるほど着物や身についたものゝ綺羅を飾つて、五六百圓もするダイアを二つまで指にはめてゐた。

從つて鈴子の養母などは、それを話の種にして『何うして、宅の鈴子はあゝ呑氣だらう。あゝ腕がないのだらう。梅ちやんなどゝ比べては、丸でお話にも何にもならないんだからね。』などゝ當てつけて言つた。

『誰かと思つたら、鈴ちやん。』

かう言つて梅子は出て來た。

綺麗にみがいた長火鉢の傍、そこには友禪モスリンの派手な座蒲團が敷いてあつて、抱妓の一人の色

『其方へ行くの？　それぢや、さよなら。私、ちよつと花本屋に寄つて行くから。』

『ぢや、さよなら。』

かう言つて二人は別れた。

土手について少し行くと、二階屋の瀟洒な家があつて、椎の樹が夕日近い日影を帶びてゐるのが見えた。門には、花本といふ名が丸い軒燈に書いてある。

鈴子は門を明けて入つて行つた。

八

そこには、鈴子など、同じお酌で鳴らしたことのある梅子といふ妓が、二月ほど前に、二年ほど行つてゐた福島から歸つて來て、再び此地で名弘をして、褄を取つてお座敷へと出てゐた。家の生計は、福島で出來た旦那がやつて呉れるらしく、かなりに有福で、抱妓も來るとすぐ二人置いて貰つて、『矢張梅ちやんはえらいわね。昔から違つてゐたからね。』など、土地の人々から言はれた。鈴子と一つ違ひで、昔から仲がよく、踊りも旨く、容色もすぐれてゐて、何處に出しても立派な姐さんで通る妓であつた。旦那は月に一度位しかやつて來ないので、昔の友達は皆よく其處に遊びに行つた。

梅子の福島に行くやうになつたのには、事情があつた。それは丁度十九の時で、一本になつて一二年

願の夜でしたがね、お詣をすまして、ほつと呼吸をついて、其處に置いた傘を取らうとすると、……矢張小雨が降つて居ながら、薄月がぼつと白くかすんで見えると言ふやうな夜でしたがね。しんとしてゐるんだよ。それは夜はさびしい處だからね。ふと、さつきひろげたまゝにして置いた傘を取らうとすると、その少し向うに、白い、茫とした、何だかかう被衣か何かを着てゐるやうなものが立つてゐるぢやありませんかね。私はぎよつとしてね。さうでなくつてさへ怖い怖いと思つてゐたんだから、胸の動氣は高くなるし、何うしたら好いかと思つて、立竦んで了つてゐると、その白いものがすうと動いて行く……いゝえ、まぼろしぢやないんだよ。本當にはつきり見えたんだから……それから夢中で、そこに置いた傘を取つて驅け出して來たがね。本當にあの時位怖いと思つたことはない……。』その薄月夜のさまを鈴子は思ひ出したが、今は、そんなことがありさうにも思はれないほどあたりは開けて、明るい氣分が一面に境内に滿ち渡つてゐた。

鈴子はその話を抱妓にしながら、裏門から土手の方へと出て來た。

『本當ですかね。本當なら、狐か何かね。』

かう簡單に抱妓は言つた。

土手はもうすつかり新綠で、人通りも稀に、葦簾張の茶店になびく小旗もさびしさうに見えた。土手の下には、藝者屋や小待合などが並んで、下地妓の習ふ三味線の音などが賑やかにきこえた。

『さう言へば、何年にも、近所にゐながらお詣りしたことがないから、お詣りして行きませう。』

かう言つて、眞直に社殿の方へと向つて行つた。鈴子は帶の間から賽錢を出して、それをそこに投げたが、やがて白い手が太い紅白の紐に觸れると、鈴はガラ〳〵としづかに鳴つた。鈴子は兩手を額のところに合せて、さながら小唄にあるやうな形をして、一心に誓し祈念した。鈴子の胸には、今度の願事などが繰返されてゐた。

抱妓も鈴子と同じやうに、賽錢を投げ、鈴を鳴らして、そして手を合せた。

鈴子に取つては、この社はなつかしい追憶を誘ふに十分であつた。近くに居りながら、何年にも來たことがなかつたけれど、こゝに來た當座の幼い頃には、學校の女生徒の姿をして、又は可愛いお酌の姿をして、よく此處にやつて來たものであつた。其時分はまだ此處等は一面の田で、げんげが綺麗に咲き、菫の紫などもそれに雜つて、遊びに來るのに好い所であつた。姐さん達と根芹をつみにやつて來たことなどもあつた。鈴子はふと松屋の小富姐さんの言つた話を思ひ出した。それは小富姐さんのまだ一本になりたて位の時のことで、鈴子の知つてゐる時よりも、あたりはもつとぐつと淋しかつた。矢張願事があつて、深夜の祈願を七日かけて、毎夜十二時頃に、一人で其處にお詣に行つた。丁度春の初めで、これから土手の櫻が咲き出さうとする頃であつた。小富姐さんは話した。『丁度、薄月のある夜で、何だか怖くつて怖くつて、土手から入つて行くのも思ひだつたが、それでも一夜二夜と願をすまして、何でも滿

こんなことを話しながら二人は並んでのろくさ歩いた。すれ違ふ人々は、一人は若い派手な著物を着ただらしのない風體をしたのと、一人はどつちかと言へば、じみな年増らしい風をしたのとが縺れ合ふやうにして何か話して行くのを見送つた。路は混雜した町から折れ曲つて、椎の樹などのある淋しい屋敷町へと入つて行つた。ある二階屋の硝子窓には、夕日がピカ〳〵と金屬か何かのやうに光つた。突當りに、大きな社の石の華表が見えて、やがて汚い黑い溝に、新しい蘆荻の新芽がツンツン出てるるのなどが見え出して來た。

路は二つに分れた。

『お前さん、其方?』

『え。』

『ぢや、私もおつき合をしやうかね。』

鈴子はかう言つて、華表を入つて、神社に通ずる敷石道を眞直に靜かに歩いて行つた。新綠で包まれた社の境内は靜かで、昔からある名高い三圍の社殿は、斜に靡いた庇と、丸い二本の柱と、大きな賽錢箱と、赤と白とを綯ひ交ぜただらりと下つた太い鈴の紐とを持つて、瀟洒に、且つ淸楚に此方に向つて立つてゐた。

鈴子は立留つて、

『よく、元は聘んで呉れたわ。あの家だつて、あの旦那が買つてやつたのよ。お金さんのためには隨分いろんなことをしてやつたわ。』
『さうですつてね。』
『それにしても、あの人泊つて行くの？　今でも……。』
『さうでせう、屹度。何うかすると、あそこいら歩いてるてよ。何でも、あの人も好いんですつてね――鑛山の方が何うかしてるんですつてね。お金姐さん、今の旦那に切れたつて、ちつとも困りやしないんですつてね。』
『それはさうらしいわね。兩天秤をかけてるるのよ。お金さんは怜悧な人だもの。』
話は移つて、今度は、土手際にゐるSといふ元藝者であつた女になつて行つた。
『だつて、あの人は昔から評判だもの。』
『今でも三人や四人は來るんですつてね。――そして、それがよく鉢合せをするんですつて……。あそこは待合のやうだなんて言つてたわ。』
『それに、あそこの母さんが豪いのよ。さういふ人達に、鉢合せをさせないやうにすることが、上手だつて評判だもの。』
『さう。』

『あら、鈴子姐さん。』

かう言つて寄つて來て、

『お稽古の歸り？』

『え、』

並んで歩きながら、

『さう言へば、姐さん、今朝梅吉姐さんの處で大變よ。大喧嘩よ。』

『誰と……。』

『旦那とでせう？』すぐ言葉をついで、

『屹度、あれよ、あの事が知れたのよ。それで、旦那が怒つたか何うかしたのよ。ところがね、お金姐さんあゝだから負けてゐないでせう。それは騷ぎ。宅のすぐ前だから、よく聞えるのよ。お金姐さん啖呵をきつて、旦那がまけさうなんですもの。』

『さう……。』

と長く引張つて、『お金さん、もうあの旦那がいやなのね。切れたいばかりに、あの人を拵へたんでせう。それにしても旦那は氣の毒ね。好い人ですからね。』

『姐さん、知つてゐて？　旦那を。』

いた。

さういふ男の心持もよくわかるのであつた。それに、さうしないでは、自分達の遊ぶ金を何うにかしなければならないのだが、その方でも鈴子はもうかなり行詰つてゐた。けれど、今此處で、旦那と離れて了つては、生活のたつきの方がより以上に心配になつた。無論男は、さうなれば、自分で出來るだけのことはすると言つてゐるけれど……。さうなつた曉に、この事がぱつと世間に知れた時に、果して自分は今まで通りにお座敷に出て稼ぐことが出來るであらうか。

それに男の方の樣子の知れないのも、いくらか鈴子の心を鈍らせた。惚れてはゐるが――是非一緒になりたいが、今度こそは眞劍に戀をしたいと思つてゐるけれど、男の心に就いて疑へば疑へないこともないやうなところがあつた。鈴子は今日もいろ〳〵に考へながら歩いて來た。

橋を渡つて少し來たところに、長唄の師匠の二階屋があつた。それはさう大して上手な方ではなかつたけれど、杵屋の名取の一人で、名をEと言つて、よく鈴子の出てゐる土地にやつて來て、若い妓に稽古などをしてやつた。ある家の抱妓と出來て、一時評判に立てられたこともあつた。鈴子は其處を通る時に、いつも稽古をしてやつてゐる三味線の音を聞いた。

ふと通りかゝらうとすると、格子戶が明いて、中からかねてよく知つてゐる松屋の抱妓のとん子が出て來た。

艶な舞臺はやがて始まつて行くのであつた。男と女の遊びの樂み、それに雜つて心と心との交錯、輕い嫉妬、美しい樂しい爭ひの氣分、さういふものが靜かな初夏の晝の午後の空氣の中に漂ふやうに漲つて行つた。『でもね、心配になるもの。』こんなことを鈴子が言ふと、『だつて、何うも爲方がない。』かう言つて男は笑つた。女中は久しく二階に上つて行かなかつた。

七

ある晴れた日の午後、いつも乘る電車の停留場から、此方へ歩いて歸つて來る鈴子の姿が見えた。矢張いつもの扮裝だが、手に扇と撥とを包んだ絹の風呂敷を持つて、いくらかぼんやりしたやうな風をして、車や荷車の陸續と通る路を橋の方へと靜かな步調で步いて來た。

何うしても、もう、男を自分の宅に入れるより他に爲方がないやうになつてゐるのを思ひながら鈴子は步いた。眞劍に此方で思つてゐる心を向うに通じさせるには、さうする他に爲方がなかつた。旦那、その旦那がゐるといふことは、さうとははつきり言はないけれど、男には不滿足であるらしいのは、種々の言葉でわかつた。『そんな旦那ぢやないんですよ。本當に世話になつてゐるばかりなんですよ。』かう言つて聞かせて見ても、それだけでは、男の心を十分に此方に引寄せることは出來なかつた。鈴子は自分の今まで通つて來た生活の話などをもした。今日も子供の父親であつた旦那に捨てられた話をして泣

る藝者でもなかつた。唯の娘、男と遊ぶことを喜ぶ唯の娘であつた。

『何う？　今日は？』

『まア、好ささうだ……。』

『それは好いわねえ。』かう言つたが、『一昨日は何して？　あれからすぐ歸つて？』

『歸るには歸つたけども、まだ早くつて渡しも、蒸汽もないんだもの、困つちやつた……爲方がないから歩いた。』

『さう……。車もなかつたの？』

『車なんかまだ出てやしなかつた……。』

『さう……早かつたから。』

『それに……向うに行つてから困つたよ。何處でもまだ爲事が始まらないんだもの。』やがて話頭を變へて、『大丈夫だつたかえ？』

『え、大丈夫ですとも……。』

『知れやしないかえ。』

『知れたツて構やしないけど……。』

鈴子は莞爾笑うて見せた。

空想から覺めて鈴子の立上つたのと、男がその意氣な姿を階段のところに現はしたのとは殆ど同時であつた。二つの眼は逸早く宙に逢つた。

鈴子は男が大島づくめの着物に、白つぽい夏外套をはおつて、髮を綺麗にわけて、色の白い顏に莞爾と笑ひを湛へて、なつかしく其處に上つて來るのを見た。

『待つたらう!』

外套をぬぎながら男は言つた。

『そんなことありませんでしたよ。』

『早く來やうと思つたんだけれども……。あとの樣子もすこし見て置きたいと思つたもんだから……。』

『私、もうすこし前來たばかしよ。』

『いつでも待たせるから、今日こそ、此方から早くと思つたんだけれど……。』莞爾と鈴子の方を見て、

『今日はあそこへ寄つて來たのかえ?』

『えゝ。』

鈴子は考へてゐたことも何も彼も搔消すやうになくなつて、唯、心が、體がすべて男に偏つて行く樣なのを感じた。此處では、鈴子は稼業をしてゐる女でもなければ、客の一擧一動に冷やかな觀察を向け

るにしても、養母は――あのむづかしい利慾一方の養母は、一通りのことでは承知しさうにも思はれなかつた。しかし、鈴子ももう年若の娘ではなかつた。養母と自分の關係もかなり細かく飲み込めても居れば、養母が自分に對する權利の程度といふこともいくらかわかつてゐた。それに男の方でも、強く女の出て行くのを望んでゐた。『その時はしつかりしなければならない。』かう鈴子は繰返して考へた。

鈴子は既に餘りに多く養母の利益と犧牲とにその一身を供して來た。今までは全く操られた人形か何ぞのやうに、自分の死ぬほど厭なことにも、自分の生命に關することにも、又は辛い辛い涙の出るやうなことにも、全く目を瞑つて通つて來た。唯、養母の言ふまゝになつて來た。しかし、一二年前子供の生れる頃から、又はその子供の父親である旦那に捨てられた頃から、かの女のまことの心は目覺めて來てゐた。自分の沈んでゐる境遇のいかに不自然で且つ慘めなものであるかも飲込めて來た。年取つた姐さんの末路、又は中姐さんの浮氣と不しだら、客といふもの〻薄情、さういふことがわかつて來ると、いつまでかうして浮々しては居られないやうな氣がして來てゐた。

ふと空想が自分の幼い頃に飛んで、不仕合の身の上であつたことやら、度々注いだ戀が皆な氷のやうに溶けて流れて行つたことやら、何やら彼やらを思ひ出して恍惚としてゐると、不意に、下に人の話す氣勢がして、やがて廊下を此方へ、二階へと上つて來る足音がした。

男はやつて來たのであつた。

一人かうして此女中と對してゐると、この生眞面目な口の利き方をする女中に相對してゐると、さうした稼業の空氣に浸つてゐる鈴子も、何だかきまりがわるく、顏がほてるやうな氣がせずには居られなかつた。かうして男を待つてゐる心が冷かに笑はれてゐるやうな氣もした。

女中が下りて行つて、鈴子は始めて落附いた自分を其處に見出した。歡樂の記憶の多いその折々につけての樂しい跡の今だに其處此處に絡まり附いてゐる室の中に自分を發見した。其處に松があつた。欄干があつた。室の右の方に雅致に富んだ丸窓があつた。床には此間見た浮世繪の古い軸がかゝつてゐた。大きな煙突からは、矢張同じやうに煤煙が漲つてゐた。

靜かな初夏の明るい晝だ。

ふとある考へが鈴子の胸に往來し始めた。それは今始めて起つたものではなく、此前にも度々起つては消え、消えては起る考へであるが、又はその考へは、至極眞面目なもので、それに觸れ始めると、いやに陰氣になつて了ふので、成たけそれを思ひ出さない樣にしてゐるのであるが、それが今、不思議にも力強く鈴子の胸に漲つて來た。それはこの戀は何うなつて行くであらうといふことであつた。又、これから先、飽までも自分達の戀を遂げずには置かないといふ心であつた。それに、一方この戀が此まゝ知れずに長く續いて行くものとも思はれなかつた。かと思ふと、金のことやら、質に入れた頭のものゝことやら、養母のことやら、旦那のことやらが、それからそれへと思ひ出された。旦那はまア何うでもな

では客を上にあげなかつた。

鈴子は兼ねてさういふ家がこの近所にあるといふことは、お座敷で客の話に聞いて知つてゐたが、始めて男に伴れられて其處に來た時には、聞いたのと違つて、室も立派に、あたりも靜かに、道具なども昔のものが多く、寢道具なども立派であるのを見た。男の話によると、其處では絶對に客を泊めるといふことをしなかつた。又、騷がしい鳴り物を彈かせたり酒肴を多く取らせたりすることをしなかつた。

『晝間が主だから、それで喧しくないんですよ。夜も貸すには貸すけれど、九時、十時すぎは、もういやがるんですから……。』かう男は說明した。女中にも、老主婦のみよりのもの以外には、決して使はないといふことであつた。

鈴子が入ると、五十先の主婦――主婦と言つても、飽までも堅氣風に髷を小さく結つた、しつかりした主婦がちよつと顏を出して、それでも宛爾と挨拶して、そして鈴子を二階の一間に案內した。二十二三の、さう綺麗でない、此前にも來て度々世話になつた女中は、やがて其處に茶を運んで來た。

『もう、少し前、お電話で御座いました。』

『さう。』

『あの、もう三四十分ほど經つと、行くといふお電話でした。』

『さう、難有う。』

やがて細い通りがあつた。そこは、此處等にそんな家が、そんな媾曳の場所があらうとは思はれぬやうな混雜としたところで、古い庇の家があつたり、泣く子を汚い上さんが叱つてゐる家があつたり、指物師の小さな店があつたりした。午前の日影は明るくさした。

鈴子の姿はやがてそこのある巷路の中へと急に吸ひ込まれた。鈴子の前には、小さなしかし瀟洒な二階屋があつて、古い板塀の上に、庭の松や楓の埃を帶びてゐるのが見えた。古いしつかりした格子戸、それをあけて入ると、綺麗に掃除された上り端、質素ではあるが、何處となく艶かしい氣分が漂つて、成ほどさうした人達のために出來た秘密の家らしい感じが何處かでした。

これは昔からあつた家ださうだ。斯の道に深い、種々な秘密を知つたものでなければ、ちよつとわからない家で、さういふ人達の口から口へ、紹介から紹介へ、秘密から秘密へと永く藏されて續いて來たのであるといふ。『今の東京にもかういふところがあるんですよ。』始めてつれられて來た時、男はこんなことを鈴子に言つた。

この家には、種々の人達がやつて來た、名を聞くとびつくりするやうな人達が……。あの操行の正しいので聞えてゐる夫人が……。又はあの名高い役者が……。あの大官が……。あの娘が……。そしてさういふ人達は、決して派手々々しく自働車などではやつて來ず、又車でも來ず、皆歩いてこつそり此處にやつて來た。其處まで來た車も、皆通りで乘捨てゝ來た。それに、堅い紹介者がなければ、決して此處

かう聲をかけると、常香は、

『姐さん、もう歸るの？』

『ちよつと、寄るところがあるから。』

『何處？』

『公園に、ちよつと寄つて、買物をして行かうと思ふの。』

『さう。』

これでわかれて、鈴子はほつと溜息を吐いた。始めて自分の體になつたやうな氣がした。こゝからはもう眞直に、男の傍に行くことが出來ると思ふと鈴子は嬉しかつた。この前逢つた時、今日の十一時と約束をして置いた。もう來てるかも知れなかつた。かう思ふと、今までやつて來た媾曳の數々が頭に浮んで來た。そつと自分の宅に伴れて來たことや、婆やに口留のお小遣ひをやつて、ある夜こつそり自分の宅の奥の六疊の一間に泊めたことなども思ひ出された。自分のやつてゐることを誰も知らない、養母も旦那も世間の人達も誰も知らないと思ふと、戀の秘密の歡樂が一層色濃く鈴子の體に絡み着いた。

鈴子の姿はそこから電車の通ふ大通に出て、向う側の堀割の黒ずんだ水に舟が二三隻かゝつてゐる河岸を通つて、其側の煙突のある大きな會社の赤い煉瓦の塀と大きな門と其處に出入する職工の汚い姿とを眼にしながら、楊柳の青く靡いてゐる傍をずつと靜かに向うに歩いて行くのが見えた。

『さうかね、まア……あの子も、隨分ませてはゐたからねえ。』

かう師匠の細君は言つたが、そのまゝ用事が出來たので、居間の方へ行つた。師匠も蹄を始めた。

鈴子は小富と立つて長い間話した。『姉さんはがつかりしたでせうね。』とか『あの若いのに……。』とか言ふ言葉が絶えず出た。鈴子にはそれが自分の今の戀と相連續してゐるやうにすら考へられた。『まア、さう？　Kちやんにも關係してたの？　あの子？　あんな小さくつて？　それぢや隨分浮氣はしたのね。』かう鈴子は驚いて言つた。

横町の旦那といふのは、大きな吳服屋の息子で、まだ二十五六の好い男である話などを小富はした。

『旦那も泣いてゐましたつて……。』こんなことをも言つた。

しかし、さうした話も今日は落附いて聞いて居られないやうな氣が段々鈴子の胸に起つて來た。淸一がゐれば――自分等の秘密をよく知つてゐる、寧ろ鈴子の今度の戀を取持つたと言つても好い淸一がゐれば、まだ話して行きたいこともあるにはあるが、ちよつと歸つて來さうにも思はれないやうな師匠の細君の口振なので、鈴子は急いでそこを出ることにした。

其處に、同じ土地の常香といふ妓が入つて來た。

運がわるいと鈴子は思つたが、それを面には表はさずに、」

『今、來たの？　遲いわねえ。』

い美しい雪子、柳橋でも評判の雪子、矢張、二三年前は、此處によく踊を習ひに來て、その明るい愛嬌のある顏を、しとやかなそれてゐて快活な姿を其處に見せた。踊の質も好かつた。此頃でこそ滅多にやつて來ないけれど、それでも新曲ものなどが出來ると、それを習ひによくやつて來た。今年の春も、一度此處で落合つて、『雪ちやん、まア、綺麗になつたのねえ。』と鈴子は言つて、その最屓の話などをした。

『可哀相なことをしたね。あれまで仕込んでね。これからつて言ふ處だのに……。親はまア何んなだらう。』

かう師匠の細君も言つた。

『お上さん、本當に可哀相ね。』

鈴子の眼にも涙が浮んで來た。

つゞいてそのお中の子は？　その子はあの横町の旦那の兒だらうか、それとも又あの役者のSの子だらうかなどゝいふ話が出た。小富は話した。『何でも、Sの子だらうつて言ふ話ですよ。それでもね、昨夜ね、もうこれはいけないといふので、一目でも逢はせてやりたいつて言つてね、電話をSちやんのところにかけたさうですよ。Sちやんは、丁度あそこでやつてゐますからね。すぐ飛んで來たさうですよ。そして死目に逢つたさうですよ。』

人一倍早く知れた。

鈴子は居間で世間話をしたり、彼方此方の役者の噂をしたり、今度の歌舞伎の面白いことを話したりして、時間を過ごしたが、自分の番が來て、ちよつと溫習つて貰つて、それから此處に來て知つてゐる女達と又暫く話をした。此處から見た花柳界の裏面、又は藝妓達の浮氣物語、やれ旦那が何うしたの、情夫が何うしたのと言ふ話は、いつもこそこそと小聲で囁くやうに話されるのであるが、その日は葭町の小富といふ鈴子と同じ年頃の妓が來てゐて、其町で有名な綺麗な一本になつたばかりの妓が、産の出血で一夜で亡くなつたといふ話をした。

『まあ、いつ？　それは？』

『昨日よ。』

『まア、あの雪ちやんが……まア。』驚くやうに鈴子は胸を躍らせて、『此處のお上さん知つてゝ？　もう？』

『まだ、知らないでせうよ。』

『さう。まア、ねえ、あの雪ちやんがね。私、お中が大きかつたことなんかちつとも知らないわ。』

居間の方にかけて行つて、その話を鈴子は細君にした。初耳の細君も非常に驚いて、飛んで來て、小富からその話を聞いた。師匠も跡の手を留めてその話を驚いたやうな形をして聞いた。雪子！　あの若

師匠だけに、弟子は殖えこそすれ、少しも減つたやうなさまは見えず、それからそれへと若い人達が常に其處に集つて來てゐた。

『鈴ちやん、此方にお出でなさい。』

こんなことを言つて、細君は鈴子を居間の方へ伴れて行つたりした。

『今日は清さんは？』

『ちよつと出かけました。』

かう細君は言つた。

清一と言ふのは、此處の高弟で、始終此家に出入りしてゐた。矢張師匠のいそがしい時には代つて稽古をしてやつてゐるやうな人で、年は三十一二、おとなしい色の白い氣分の柔らかな髮を綺麗にわけた人であつた。鈴子はその清一を透して今度の戀の相手の出來たことなどを考へた。その相手は、清一の友達で、年は三十五の羊の三碧、兜町の方へ出てゐる男で、この師匠の家などにも時には出入りしてゐたのであつた。三味線も彈けば、唄などもよく唄つた。

鈴子は毎日此處に來なくつても好いのではあつたが、鈴子の出てゐる土地から習ひに來る藝妓やお酌も二三人はあるので、此處に其の姿を見せないでは、『此頃は鈴ちやんちつとも來ないわ、』とか何とか言はれて、それからそれへとすぐ知れて行く危險があつた。養母は、見番をやつてゐるので、鈴子の噂は

れた。三味線の師匠の弟子のいやに生白い顏をしてゐる男にも逢つた。その男はいやにニヤニヤして、『お稽古?』などゝ言つた。その電車は大抵は込んでゐるので、鈴子は釣革を手に、白い腕を見せて、いつも入口の處に立つてゐた。

名高い踊の師匠の家は、そこから停留場を三つ越した處のすぐ近くにあつた。それは瀟洒な意氣なつくりで、格子戸を明けて入ると、習ひに來てゐる弟子達の下駄の派手な鼻緒が澤山に其處に置いてあつた。廣い八疊と十疊との室があつて、三味線、鼓、さういふものが其處等に置いてあつたり、その時々の花が綺麗に床の間に生けてあつたりした。弟子達は葭町からも來れば、柳橋あたりからも來た。多くは派手なつくりをしたお酌や藝妓達などで、華やかな賑やかな氣分が家の內に漲つてゐた。

踊の師匠、老いた師匠、それにその高弟とも言はるゝ門弟一二人、さういふ人達が三味線を彈いたり踊を踊つたりして弟子達に敎へた。ひるがへる袖、靡く姿、表情と、手と、足と、それに三味線と、唄と、それが一つになつて動いて來るやうになるまでに仕込むには、師匠も並大抵の努力ではなかつた。

鈴子は長い間、その家の空氣に馴染んでゐた。六七年、或はそれよりももつと長く、かの女は此處に來て踊を習つた。鈴子はまだ幼かつた自分の姿を、或は壁に寄せて、又は緣側に坐らせて發見した。覺えにくい振事を何遍も何遍も敎へられてゐる自分の小さな姿をも見た。その時分から見ると、師匠も年を取つて、此頃では小鬢にも白髮が見え、師匠の細君の綺麗な顏にも小皺が寄つた。矢張名高い評判な

て、夕暮近く迄其處に一人でゐることなどもあつた。それに金も三度に一度は此方から出した。それを苦にしてゐる譯ではないが、養母に監督されてゐる身には、まだ金を自由に自分で使ふ譯には行かなかつた。一月程前にも、その金をつくるために、頭のものをそつとある人に頼んで質に置いて貰つた。それがまだ出さずにあることなどを鈴子は考へた。つゞいて、一昨夜、旦那にねだつて、金を少しばかり貰つて、それを今、帶の間の財布の中に入れて持つてゐることを考へた……。その間にも電車は絕えず走つてゐた。河岸、其河岸に並んだ二階屋、たぷたぷした量の多い水の上に勢よく動いてゐるペンキ塗の小蒸汽、白い大きな帆、輕く操られるやうに漕がれて行く傳馬、その向うに大きく川を跨いでゐる鐵橋……。

その鐵橋の前で電車を乘替へて、その鐵橋を渡つてからまた電車を乘替へた。鐵橋の上を電車が渡つて行く時には、その二階からすぐ眼の前に見える大きな烟突がその下流に添つて煤煙を漲らしてゐるのがはつきりと見えた。晴れた空には殊にそれが鮮かに見えた。鈴子は其處に來ると氣がいつもそはそはした。

鐵橋を渡つて乘替へてからの電車の中では、鈴子は何となく不安を感じた。そこでは、何うかすると、鈴子は知つて居る顏や同じ朋輩や自分の近所のものに逢ふやうなことが度々あつた。ある時は常にお座敷に聘ばれて行く肥つた男に逢つた。ある時は『鈴子姐さん！』かう言つて頓狂な聲をお酌から懸けら

人一倍早く知れた。

鈴子は居間で世間話をしたり、彼方此方の役者の噂をしたり、今度の歌舞伎の面白いことを話したりして、時間を過ごしたが、自分の番が來て、ちよつと温習つて貰つて、それから此處に來て知つてゐる女達と又暫く話をした。此處から見た花柳界の裏面、又は藝妓達の浮氣物語、やれ旦那が何うしたの、情夫が何うしたのと言ふ話は、いつもこそこそと小聲で囁くやうに話されるのであるが、その日は霞町の小富といふ鈴子と同じ年頃の妓が來てゐて、其町で有名な綺麗な一本になつたばかりの妓が、產の出血で一夜で亡くなつたといふ話をした。

『まあ、いつ？　それは？』

『昨日よ。』

『まア、あの雪ちやんが……まア。』驚くやうに鈴子は胸を躍らせて、『此處のお上さん知つてゝ？　もう？』

『まだ、知らないでせうよ。』

『さう。まア、ねえ、あの雪ちやんがね。私、お中が大きかつたことなんかちつとも知らないわ。』

居間の方にかけて行つて、その話を鈴子は細君にした。初耳の細君も非常に驚いて、飛んで來て、小富からその話を聞いた。師匠も踊の手を留めてその話を驚いたやうな形をして聞いた。雪子！　あの若

師匠だけに、弟子は殖えこそすれ、少しも減つたやうなさまは見えず、それからそれへと若い人達が常に其處に集つて來てゐた。

『鈴ちやん、此方にお出でなさい。』

こんなことを言つて、細君は鈴子を居間の方へ伴れて行つたりした。

『今日は清さんは？』

『ちよつと出かけました。』

かう細君は言つた。

清一と言ふのは、此處の高弟で、始終此家に出入りしてゐた。矢張師匠のいそがしい時には代つて稽古をしてやつてゐるやうな人で、年は三十一二、おとなしい色の白い氣分の柔らかな髮を綺麗にわけた人であつた。鈴子はその清一を透して今度の戀の相手の出來たことなどを考へた。その相手は、清一の友達で、年は三十五の羊の三碧、兜町の方へ出てゐる男で、この師匠の家などにも時には出入りしてゐたのであつた。三味線も彈けば、唄などもよく唄つた。

鈴子は毎日此處に來なくつても好いのではあつたが、鈴子の出てゐる土地から習ひに來る藝妓やお酌も二三人はあるので、此處に其の姿を見せないでは、『此頃は鈴ちやんちつとも來ないわ、』とか何とか言はれて、それからそれへとすぐ知れて行く危險があつた。養母は、見番をやつてゐるので、鈴子の噂は

らはすことの出來ない深いやさしい情緒がその周圍を繞つて踊つてゐるやうにも思はれた。そこにある戀は悲しい戀か、それとも嬉しい歡樂の極みの戀か、それとも又は身も心も捨てゝ靡いて縋つて行く戀か。次第に鈴子の眼には、あつき血が湧き、熱した心が靡き、それと共に、言ふに言はれない情緒が、その體を、その踊を、その姿を世にも稀な美しいものにした。

唄と三味線と踊とは、靜かに、又は急に、その富本の相の手の入つてゐるあたりに行くと、流るゝ水もこれがために留り、咲いた花もこれがために散るといふやうな美しい冴えた氣分を見せて來たが、次第に終りに近く、見る人の心を恍惚たらしめずには置かないといふやうな境に至つて、やがて靜かに開いた扇を閉ぢて、そして其處に斜に身を引いて見せた。終りはつひに來た。

三人の客は思はず手を拍つた。

いくらか興奮したやうな顏をして、鈴子が此方にやつて來ると、

『巧いな……。』

かう言つて、客の一人はすぐ盃を鈴子にさした。

『本當に上手ねえ。』

かうかの子姐さんが言つた。

『駄目ですよ……。難かしいから……。』

色なり態度なりが立勝れて來るのを誰も彼も見た。草花のポツポツ白く出てゐる派手な襟、何處へ出てもひけは取らないといふやうな金ピカの帶、蛇籠に水車のついた裾模樣、いきなり向うに裾を引いて歩いて行つたと思ふと、そのまゝ、坐つて、扇を前に置いて、首を低れて、そして、三味線の調子の揃つて來るのを待つた。

かの子姐さんの彈く上手な三味線は、金石でも叩くやうな高い調子を出して、次第に宛轉とした相の手から唄の文句へと入つて行つたが、ふと前に置いた扇を手にした鈴子は、そのまゝ、ぐるりと體を廻して、立つてそして靜かに踊り始めた。

すらりとした體、宛轉とした唄と三味線、それが唯一つになつたかのやうに、又は眼の表情と、心と、手足と、姿と、それが滑らかに一緒になつて靡いて行くやうに、又はその態度やら調子やらの中に、昔からの戀の歡樂と嘆きと情緒とが滿ちて溢れて來てゐるやうに、乃至は踊つてゐるもの〻戀の纏綿とした情緒と惑溺と悲哀とがそのまゝそこにも絡み附いてあらはれて來てゐるかのやうに、靜かに一座に艶な美しい空氣の張り渡つて來るのを感じた。

眼は靜かに靜に動き、手と足とは輕くやはらかに流る〻やうに靡き、色彩の濃やかな姿は、時には後の帶の模樣を見せ、時には前の裾の模樣を浮び上るやうにした。三味線につれ、唄につれて、或は立ち、或は踞し、或は袖をひるがへし、或は體を深く沈ませるやうな氣もすれば、又は言葉や態度では言ひあ

鈴子は自分で姐さんから三味線を取つて、そして、その難かしい富本の手の入つてゐるところを靜かに彈いて見せた。『さうだつたねえ。』かう言つて、今度はかの子姐さんが三味線を取つて彈いて見たが、

『この踊の三味線なんか、もう何年彈かないかわかりやしない、鈴ちやん、此頃、行つて習つたの？』

鈴子は點頭いて見せた。

『で、此頃でも行くの？』

『え、……。』

『熱心ねえ……、矢張、朝早く……。』

『え、……何うしてもね、早く行かなけりや、大勢來ますからね。』

『本當に藝熱心ね。』かう言つたが、又、三味線を彈いて見て、

『かうだね。』

『さう……。』

『途中で、間違つたら、御免よ。』

で、鈴子は、さつき三人で揃つて踊つたお酌の一人から、金ピカの扇子を借りて、サツと裾をさばいて立つた。三人の客はそのまゝ盃を下に置いた。

相對して見てゐては、さう際立つて美しいと言ふほどではないが、扇を取つて立つと、ぐつとその容

五

『鈴ちやん、踊つて頂戴。』
かうかの子姐さんが言つた。
『でもね……。』
躊躇してゐると、客は、
『踊れよ、君！』
かう傍から促した。
『でもね……。』
『文句はぬきにして、踊れッて言つたら、踊つたら好いぢやないか。』
『踊りますよ！』
かう鈴子は、心安立に焦れるといふやうな語氣で言つた。
やがて姐さんに何か囁くと、
『さうねえ、私、彈けるかしら？　あれには、富本の手が入つてゐるところがあるねえ。』
『さうよ。』

れて翻す美しい舞の袖、客は皆な酒に醉つて、或は唄ひ、或は踊り、時には女の長い廊下を通るのをあとから追ひかけて行つたりした。『はアい！』など丶女中の長く引張る聲なども聞えた。水に添つたある小さな待合からは、朧な月に展げられた川が白く茫と霞んで見えて、對岸の灯の水に落ちて靜かに暗く搖ぐのが指された。

かうした光景の中には、離れ難い男の心もあるであらう。又は捨てられた女の苦しみもあるであらう。欺かれた心の傷痍を癒やしかねて自暴に酒を呷つてゐるものもあるであらう。又、それとは反對に、ある心はある心を求めてゐるだらう。ある情はある情に縺れ合つて行つてゐるだらう。又は生活の辛さに淚を流してゐる女心もあるであらう。合歡の花のやうにひつたり相合ひ相擁してゐる樂しい二つの心もあるだらう。さうかと思ふと、何も知らずに、世の中の辛さをも男女の中の悲しさも知らずに、唯お座敷に行くことをのみ誇りとし樂しみとしてゐる幼い無邪氣な心もあるであらう。指輪と着物とにあこがれて、好きも嫌ひもなしに、客のゐる奧の一間に入つて行く心もあるであらう。思ひのまゝにならぬのを嘆いて、つくづく色戀の果敢ないのを感じてゐる心もあるであらう。姥櫻の顧みる人もなくなつたのを歎く心もあるであらう。――しかし、土手の上はいつも靜かで、交番のある、そして巡査の退屈さうに立つてゐる路の角を向うに曲ると、川は靜かにたぷたぷと灯を映して流れて、船頭の棹歌の斷續する彼方に、都會の夜の灯が美しく明るく空を照らしてゐるのが眺められた。

『さうですとも。』

しかしこれだけで別に變つたこともなかつた。さうしてゐる中に、また日が經つて行つた。土手の新綠が美しく日影を漉して濃淡の縞をつくつた。夜は待合の軒燈が明るく處々に點つて、三味線の聲が何處からとなく微にきこえて來た。四ツ目あたりの牡丹見の歸りの客が、途中で引かゝつて、遲くなつてから、藝者を五六人乘せて、自働車で土手の上を通つた。

袖垣、四ツ目垣、建仁寺垣で餘所から見えないやうにしきつた小さな室、それに面した草花の繪のやうに咲いた庭、或は長い廊下をずつとつき當つたところに隱されたやうにしてある一間、踏石傳ひにずうと遠く離れてゐる離座敷、でなければ、狹い通りに二軒三軒と庇を並べてゐる二階屋の一間、さういふ室といふ室には、皆な戀の歡樂の美しい繪のやうな光景が、待ち焦れる男女の心が、又は嫉妬が、恨みが、歡樂が、さういふものが一つ一つ混じり合ひ縺れ合つてゐるのであつた。ある室へは、褄を取つた美しい女が靜かに入つて行つた。ある室へは、低い私語の後の窓を月が朧ろにかすんで照した。爪彈の低い三味線には、女の涙が添ひ、唄ふ小唄の靜かな節には、男の思ひ詰めた心が籠つた。かと思ふと、『今度はいつ？　早く來て頂戴よ。』かういふ艶かしい聲が新綠の灯に搖らぐ中に聞えて、やがて下駄を穿いて、褄を取つて女の出て來る氣勢がした。

ある大きな料理屋の二階では、大きな宴會が夜毎に續いた。流るゝやうな三味線の連れ彈、それにつ

『だつて、鍵がかゝつてゐたもの。』

『でも、婆やがかけて置くんですよ。此間、掻さらひに逢つて、蝙蝠傘だの、下駄だの取られたものだから、それでこりたもんだから、晝間でも何でもかけて置くのよ。』

『さう？　さうとは知らないもんだから。』

それで疑惑は解けたといふやうにして、小鈴姐さんの話は、今度は晝泥棒や掻さらひの話になつて行つた。『あそこは、靜かで、人通りが無いもんだから……。』などゝ鈴子は言つた。

それで話は濟んだが、その時一緒にゐたお靜といふ中年增が、餘所でまた小鈴姐さんと一緒になつた時その話がゆくりなく復活した。

『何うも變よ……。あの時、餘程言はうと思つたけれども……私、默つてゐたけれど、……姐さんばかりぢやないわ。私も二三度鍵がかゝつた格子戸を明けたわ。一度なんか、たしかにゐるんですからね。きこえてゐた聲がぱつたり聞えなくなつたんですからね。用心ばかしぢやないと思ふわ。』

『さう？』

『たしかにさうですよ。何うかしたんですよ。あの仲の好い照葉ちやんなどさう言つてゐるんですもの。』

『さうかね。』考へて、『まさか、あまり皆なが行くから、さうしておくんでもないんでせうがね。』

『お留守なの？』

もう一度聲をかけて見た。矢張返事がなかつた。

始めは午後だつたが、今度は夜だ。しかももうかなり遲い。晝間、お座敷で逢つてそれから今、見番で札を見て來たが、鈴子の札は裏がかへつてゐなかつたやうに覺えてゐる。……不思議だ……。かう思つて小鈴姐さんはそれとなく上り端の方を見たが、靴脫の上には下駄も何もない。がらんとしてゐる。唯奧についてゐるらしい電燈の餘光が微かにそこにさしてゐるばかりである。爲方がないので、小鈴姐さんは引返して來た。

二三日して、湊屋の座敷で一緒になつた時、小鈴姐さんは、

『鈴ちやんの家は用心が好いのね。』

『何うして？』

鈴子の顏は氣の故かいくらか赤くなつて見えた。

『おとつひの夜行つたのよ、ゐるんだらうと思つたけれども、鍵がかゝつてゐるんだもの……、わりいから歸つて來たのよ。……この前にもさういふことがあつたのよ、一度……。』

『さう？』

少し顏を赤くして『さう？　いつ？　おとつひ？　おとつひならゐたわ。』

四

土手下に住んでゐる小鈴姐さんが、ある日の午後に、その小さく細く中田と書いた鈴子の格子戸の前に立つた。そしてその格子戸に手をかけた。

鍵がかゝつてゐる。

《留守かしら?》

かう思つて、聲をかけて見やうと思つたが、別に用事といふほどの用事もないので、そのまゝ引返して、その二三軒此方の鈴木といふ藝者屋に寄つて話した。

それからまた四五日經つた。今度は、芝居の見物の切符を賴むために小鈴姐さんは又鈴子の家に出かけた。そして前と同じやうにして格子戸の前に立つた。そして手をそれにかけた。

矢張、鍵がかゝつてゐる。

『お留守!』

返事もない。留守と思へば留守のやうでもあるし、さうでないと思へば、さうでないやうなところもある。一度なら、小鈴姐さんも別に不思議にもしないのであるが、同じやうなことが二度あるので、ちよつと變な氣がして、

『それは、お稽古だから、わるいとは言はないけれど、何も忙しい稼ぎ時にわざ〳〵行かなくつても好さゝうなものぢやないか。お前今日はお座敷が二つかゝつて來たんだよ。』

『だつて、しやうがない。今度のは、是非覺えて置かなくつちやならないんだもの。』

『なら、爲方がないから、成るたけ早く歸るやうにおしよ。』

『それはその積りでゐるんですよ。でもね……つい遲くなるんですもの。』

鈴子はいつもとは違つて熱心に、いつもは何んな張合がついて來ても時には休むこともあつたのに、今度は決して一日でも休まうとはしなかつた。朝も早く起きた。十二時過ぎに臥床に入つた時でも、朝は七時にはきつと眼を覺した。そして、大急ぎで、いつも婆さんの沸して置く湯のまだ十分に沸き切らないのにもかまはず、金盥にそれを取つて、顏を洗つて、それから、すぐお化粧にかゝつた。そのお化粧がまたいつもよりは念が入つて、鬢や髱の出具合を何遍も何遍も梳き返した。着物はつい此間出來た大島を着た。

指には、ダイヤだの、眞珠だのゝ指環をあるたけはめた。

扇子と撥とを白い絹の手巾につゝんで『ぢや、行つて來るよ。婆や……。』かう言つて出かけた。

かうした鈴子の朝の稽古が一月二月ほど續いた。

移轉してからも、養母はまだすつかり會計を鈴子には任せなかつた。家にあるものは、皆な家から持つて來させた。米も、炭も、鰹節も……。養母には、まだ何うしても鈴子の獨立が危なつかしいやうに思はれて爲方がなかつた。それに、近所とは言へ、さう離して置いては、何んなことが起つて來ないとも限らなかつた。それも、旦那との緣が深く、始終旦那が世話を見てやつて呉れるやうになれば、手離して置いてもやゝ安心だが、今ではとてもそれは出來ないと養母は思つた。十二から今まで長い間世話をして來たことを考へると、單に利害の方から言つても、放つて棄てゝは置けなかつた。養母はそれとなく婆さんを捉へては、種々なことを訊いた。

しかし何も變つたことはなかつた。日は段々麗らかになつて、土手には見事に花が咲き、人が假裝行列などをして通つた。土地では其頃が一年中の稼ぎ時なので、藝者は皆な褄を取つて料理屋から料理屋へと急いで出かけた。夜は自働車が大きな光る眼を闇にかゞやかしながら、けたゝましい音を立てゝ、土手の上を通つて行つた。三味線の音は其處でも此處でも聞えた。

三

此頃、鈴子はまた藏前の師匠の許へ通ひ始めた。

何うかすると、午後四時過になつても、まだ歸つて來ないやうなことが折々あつた。養母は言つた。

も始終來てやしないから……。』
『それはさうね。』
旦那も二三度はやつて來た。それも大抵は人目をかねて、日のある中はやつて來なかつた。好い家だと旦那も言つた。
『成ほど、これは好い、靜かで……。』かう言つて、奥の六疊をのぞいて見た。始めて來た時に、『大丈夫だからお泊んなさい。』と強つて鈴子が言ふのを旦那は振切つて、一時間ほど其處にゐて、それからいつもの花屋へ行つて泊つた。矢張、人目が氣になるらしかつた。『だつて、知つてゐる奴がゐないとも限らんからね。……向うなら大丈夫だけども。』
それでも二度目に來た時には、『ぢや、泊つて行つて見るかな。』と言つて、奥のに翌日の午後までゐた。藝者屋の內部といふものがめづらしさうに旦那の眼には映つたらしいが、しかし矢張、少しは金は使つても、料理屋、殊に川の眺望に富んだ花屋の二階あたりで、女中達に、ちやほやされる方が面白いらしかつた。夜のものも、此處と花屋とでは大分違つてゐた。
『川の方が好い。朝の心持が違ふ。』かう言つて、旦那は矢張花屋の離座敷の方へ行つた。離座敷の一間で、朝早く眼覺めた、艶な、自由な、何んなことでも出來るやうな氣分は、藝者屋の奥の一間ではとても味へないやうに旦那には思はれた。

その女文字の中田の二字が、少し曲り加減になつて、細く小さく、夕日に照されて見えてゐた。

何うかすると、夜遅くなつてから、姐さん達が鈴子と一緒に寄つて行くことなどもあつた。その時には、とつつきの六疊の一間は、賑やかな話聲や笑ひ聲で滿たされた。お座敷の話、お客の話、朋輩同士の話、男女の話、子供の話、それからそれへと話は容易に盡きなかつた。そして婆さんは、きまつて通の汁粉屋や鮨屋などに使ひにやられた。

『靜かで好いでせう、彼處は？』

かうお座敷などで、小鈴姐さんが言ふと、

『いゝわ、姐さん。川の方よりも餘程好いわ。靜かで、世間が煩くなくつて……。越していらつしやいよ。』

『行かうかしら、私も……。』

『いらつしやいよ。』

『それに、あの家は新しいから好いわね。それに材木だツて、貸家普請ぢやないわねえ。』

『しつかりしてるわ。』

『矢張、養母さんは來る？』

『來るには來るわ。でも、ね、この前のやうに隣同士ぢや煩くつて爲方がないけれども、今度は來て

て行きましたよ。」

「さう？　まだあるの？」

「ありますとも……。」

「私も食べやう。お祝ひだから……。」

急いで、晴衣を不斷着に着改へて、そこに寄つて來て、「婆やもおあがりな。」かう言ひながら鈴子は箸を手にした。

二

その新居は、新しい格子戸と、二坪ばかりの入口と、御影石の靴脱ぎと、傘やステツキを入れる瀬戸の丸いものとで、靜かな綠葉の多い通りへと面してゐた。をりをり下駄の齒入屋の鼓が通つて行つた。午後三時過には、夕日が明るく上り端の中までさし込んで來た。

丸い白い軒燈には、電氣屋が梅屋と黑く書いて行つた。その下に小さく、中田といふ表札が出てゐるが、これは養母の姓で、貰はれて來ない前は、小川と言つてゐた。誰も書く人がないので、爲方なしに、鈴子はその表札に自分で禿筆を揮つたが、中田と書くよりも、何方かと言へば、小川と書きたかつた。しかし、今ではまださうも出來なかつた。

るい日影がさしてゐる。庭には梅が白く咲いてゐる。紅梅などもある。碧空も廣く見えれば、それを横ぎつて通つて行く鳥の翼の影も見える。其處に鈴子は肝心なものの入つてゐる簞笥を置くことにした。

『元の家よりいくら好いかしれやしない。氣が清々するよ。何だか生き返つたやうね。これで家賃が二圓しきや高くないんだからね。』鈴子は嬉々として晴やかな顔の表情をした。

其處に、お座敷がかゝつて來た。休みたいと思つたけれど、養母の手前もあるので、急いで支度をして鈴子は出かけた。

湊屋で一座敷、それがすまない中に、花月から又かゝつて來たので、そこに行つてそれをすまして、家に歸つて來たのは、もう日暮れ近い頃であつた。室といふ室は、もうすつかり片附いて、簞笥は簞笥、寢道具は寢道具といふ風に、額もあちこちの長押にかけられ、見馴れた梅に月の幅物は、床の間にかけられてあるのを鈴子は見た。

『もう、瓦斯も電氣も來るの?』

『え、もう皆な來ます。』

婆さんも莞爾と明るい顔をしてゐた。

引越蕎麥の赤いせいろが澤山壁の處に押しつけて積んであるのを見て、『誰か手傳ひに來たの?』

『清どんや、竹どんが來て、今日は引越蕎麥だなんて言つて、御近所に配る次手に、取つて來て食べ

が。

『姐さん、引越し？』

かう言つて、

『羨ましいわね、お房姐さんのゐた家？　好いわねえ。あとで、お祝ひに行つてよ。』

『本當にいらつしやい？』

『行くわ。』

立話を一つ二つする間に、荷物をつけた荷車は、ぐんぐん先へ先へと動いて行つた。寺の傍の井戸端には、しきびの綠葉が一杯に桶に入れられて置いてあつた。

婆さんと養母とは、先に行つて、バタバタと掃塵をかけたり箒を使つたりしてゐたが、鈴子が行つた時には、それも大方は濟んで、婆さんは湯氣の白く颺るバケツの中で雑巾を絞つてゐた。

『此處に長火鉢を置いたのよ、お房姐さんは――』こんなことを言つて、鈴子は上り端の次の間の柱の下の疊の際立つて新しい處を指さした。

『さうだね、矢張火鉢は其處かね。』

かう其處に來て見て養母は言つた。

しかし何より氣分を清々させるのは、四疊半から奥につゞいてゐる六疊の一間であつた。障子には明

お房姐さんの住んでゐた家に移轉したいといふ鈴子の希望は、かなりに强く且つ眞劍であつた。鈴子は一番先にその養母の長い監督から脫したかつた。その聲から、その態度から、又その利慾に固まつた心から、眼から、空氣から……。次に鈴子は自由に單獨に一人になりたかつた。自分で自分の家や自分の周圍の主人公になりたかつた。靜かに自分の生活を振返つて見たかつた。二十五の年まで、唯無意味に、無邪氣に、他人の言ふまゝになつて動いてのみ來た自分の生活を……。

養母が容易に言ふことをきかないので、後には鈴子はそれを旦那の方へと結び附けた。『あそこなら、人目がさう多くないから、旦那だツて、入らつしやるツて言ひますからね。今のやうにしてゐちや、お寳ばかりかゝつて、旦那だツて大變ですもの。』これでも猶ほ養母は何の彼のと言つて言ふことをきかなかつたけれど、性得素直な鈴子が、何うしても言ふことを聞かないので、終ひには養母も折れてそれを許した。養母は自分が長年使つて目をかけてやつた婆さんを附けてやることにした。

移轉の日は、此頃にめづらしい風も無い好い日和であつた。咲過ぎた梅が、寺の門前や、畠や、道の角などに白く浮き出すやうに見えて、垣根の傍に、草が靑く萠え出してゐた。大きな桑の木の鏡臺、分厚なしつかりした二棹の簞笥、三味線が四五挺、それに木目のよく出た綺麗に拭き込んだ長火鉢、夜の寢道具、さういふものが荷車二臺に積まれて、細い巷路から、廣々とした寺近い新居へと運ばれた。

荷車の後から、鈴子がついて行くと、向うから來た、昨夜近所の待合に泊つたらしいびん助といふ妓

『え、大きくなつたけどもね……。此頃ぢや、もうすつかり田舍子になつちやつて、眞黑けな顏をして、洟なんか出してゐると、つまらなくなるわ。行つたつて張合がないわ。』

『何うしても、田舍にやつて置くとねえ。』

かう小妻といふ姐さんは、思ひ當るといふやうな調子で言つて『それに、離れてゐてはねえ、何うしても、情愛がなくなるわねえ。』

『初めは、それでも、精々と、樂しみにして、風車なんか買つて、大騷ぎをして出かけて行つたもんだけども……。』

『何うしても、向うに馴染んで了ふからね。』

『でも、男の兒だから好いわ。』

かう傍から同じ年頃の、矢張近くに女の兒を生んだ照代といふ妓が言つた。

今の旦那は、つい昨年の秋に出來たのだが、何處かの會社の好い處をつとめてゐて、今まで道樂をしたこともなく、堅いので通つて來た四十男で、鈴子の家にも時々は來るが、何うもさうした處に入浸つてゐる處を見られては世間體が惡いと言つて、最初に鈴子と出來た河添ひの花屋の離座敷をその一間にして、來る時は大抵そこに來て泊つて行つた。花屋ではその旦那のために專用の夜の寢道具などを拵へて置いた。

さういふ風に、表面は順序正しく、他の藝者などと比べて、後楯もあり、好い旦那もついて、ぐつと幸福に暮して來たのであるが、それでも、これまでに旦那を三度ほど取換へ、子供を一人生み、殊にその子供の旦那は、養母の眼鏡違ひで、金はあるが浮氣で、子が出來るとそのまゝ、他の藝者に氣を移して、さつさと鈴子を棄てゝ了つた。鈴子は今でもその旦那が他の妓から妓へと轉々移り變つて、相變らず道樂を仕つゞけてゐるのにひよつくりお座敷などで邂逅した。

『鈴ちやん、變な顏をしてたよ。可哀相ねえ。此頃はあの旦那は鶴ちやんと大騷ぎをしてゐるんだつて言ふから……。此間も花屋の廊下で、鶴ちやんと一緒にあの旦那が歩いてゐるところにばつたり邂逅してね、鈴ちやんが……。』

『氣の毒ねえ、何うして、あゝ浮氣なんでせう。もう五十ぢやない？』

『もう、その上に出てゐるんだよ、お前さん。』

こんなことを寄ると觸ると、姐さん達は話した。

時には又、鈴子に、

『坊やさん、何うして？』

『久しく行かないわ。』

『でも、大きくなつたでせうね。』

ら、聞馴れてはゐるが、又世話にもなつた人ではあるが、ちつともなつかしいとも何とも思はない養母の聲が常に煩く聞えた。

養母はおてると言つて、今年五十七、土地の髪結で一生終つたやうな女だが、今では弟子が多く、小金も出來て、見番のおてる婆さんと言へば、土地でも顏の立つ人達の一人である。鈴子は十一の時から藝者にすべく貰はれて來て、そこで三味線の撥の痛さをも、癇性の養母の小言をも、朝寒を川向うのお師匠さんに通ふ辛さをも、何も彼も覺えて來た。巷路を出た向うにある大きな石の華表、そこには月に二三度緣日の夜店が立つて、草花や、盆栽や、いろいろな人形などが並べられた。鈴子は來た當座、其處の店で、海ほゝづきを買つて來てはよく鳴らした。そしてそれから坂を上ると、大きな川に白い帆やペンキ塗の蒸汽が通つて、朝は鷗の群にきらきらと朝日がさした。姐さん達が綺麗におつくりをして、車で威勢よく其處を通つて行つたりした。

しかし今では、鈴子もお酌から立派な一本になり、それから自前になつて。昔羨んだ姐さん達にも多くはひけを取らないやうになつてゐた。三味線も上手だが、踊は藏前へ七八年も通つたので、今では名取になつて、何處のお座敷に行つても、すぐれたすらりとした姿を見せないことはなかつた。「鈴ちやんの踊は旨いのねえ。根は肥つてゐるんだけれど、踊ると、すつきりした姿に見えるんだからねえ。藝だねえ。」こんなことを姐さん達は言つた。

鈴子の戀

一

鈴子は新に移轉して行く家に興味を持つた。それはお房姐さんの今迄住んでゐた家、六疊に四疊半にそれから奥の八疊。その八疊の一間が草花や植木の多い小さい庭に面してゐて、垣根つゞきに人氣のない空地が廣くつゞいてゐるのも氣持が好かつた。「さう、姐さん、引越すの？　ぢや、私、借りやう。」鈴子はかう乘氣になつて言つて、歸るとすぐ其話を養母にした。

今でも鈴子は獨立した一軒の家を借りて住んでゐるのではあつたが、隣りがすぐ養母のやつてゐる土地の見番の家で、何かにつけて監督されるのが煩く、それに出入りにも人目が多く、狹い巷路の又その上に狹い家並つゞきになつてゐる爲め、室といふ室は皆暗く、陰氣で、靑空などは年中見たいにも見られないほどであつた。猫の額のやうな狹い庭、そこに痩せた松が一本あるが、秋などは雨が終日わびしくそれに降りかゝつた。長火鉢の置いてある處からは、窓を隔てゝ、向ひ合つてゐる隣の見番の一間か

鈴子の戀

かう思ふと、その城址の沼地の中に曾て不思議に一面に咲いてゐたその美しい杜若がもう一度はつきりとかれの眼の前を掠めて通つて行つた。

歡樂の場が此方にはなやかに描かれてあつて、向うに死の影の恐ろしく襲つて來るのを示したやうなものであつたが――別にむづかしいものでも何でもなく、いつか何處かの雜誌で見たものであつたが、それがはつきりと浮んで來て、容易にそこから離れやうとはしなかつた。

かれはぢつとそれに見入つた。明るい歡樂の光線が次第に死の暗い光線に變つて行くのを見た時には、かれは何とも言はれないさびしさが總身に滲み通つて來るのを感じた。しかしその光景は決して長く續いてはゐなかつた。舞臺はいつとなく轉換した。今度はさびしい廢址があらはれて來た。

かれの眼の前には、再び昔の城址があつた。草深く埋れた石垣があつた。石垣の間に何疋となく出てゐる蛇があつた。黑く腐つた濠の水があつた。折れ伏した蘆があつた。長く解けた女の髮があつた。青い赤いピラピラした小さな魚があつた。(しかし、もう何も彼も駄目だ。駄目になつて了つた。あゝして集めた昔の人達の悲劇の材料も、燒落ちた城の火事を描いた文章も、何も彼も全く徒勞に歸して了つた。)かう思ふと、丘の上の一室の机の上に積み上げて殘されてある原稿が歷々とかれの眼に映つて見えた。

(しかし、殘り惜しいことはない……。少しもない。何うせ人間は敗滅して了ふのだ。皆な廢址になつて了ふのだ……。さういふことは、無限に人間の上に起つては消え、消えてはまた起つて來ることだ。新しい芽はそれからそれへと無限に廢址の上に萠え出して來るだらう。そして、昔曾てかの色の濃い紫の杜若が、人知れずかれの最後を暗示したやうに、矢張さうした暗示を絶えず人間に與へるであらう。)

百十

何時間經つたか知れない。しかしかれは深手の創痍の痛みから再び意識を恢復して來た。かれの頭の上には、廣い穹窿があつた。星が煌々と金屬のやうに、天上の樂しい饗宴を開いて見せてるた。

ズボンの鳥が魔の鳥のやうに、キ、キと鳴いて通つて行くのが聞えた。

丸で違つた世界――今まで生きてるたところとは丸で違つた世界がかれの周圍にあらはれて來たやうな氣がした。何も彼も皆な趣を異にした。色彩を異にした。感じを異にした。氣分を異にした。

かれはそこにるる。そこにるるにはるるけれど、あらゆるものが次第に微かに、微かになつて行くやうなのをかれは感じた。かうしてかれが此處に横はつてるるといふことも、その傍に小蔦が死屍となつてるるといふことも、土手下にその男が死んで倒れてるるといふことも、皆その記憶から離れて行くやうな氣がした。(あゝ矢張さうだつた。矢張あの歡樂が、あの世にも稀なる歡樂が、かうした自然の運命を生んで來たのだ。否、十年前に、初めて小蔦の眼に觸れた時に、かうした運命は既にその最初の芽を出してるたのだ。否、否――)つゞいて何か考へやうとしたが、その考へは竟に纏まらずに、そのまゝまた意識がほんやりとなつた。

此時ふとかれの眼に、「歡樂」といふ題で描かれた大きな外國のある繪畫が映つて來た。それは男女の

しかし、深手を負つてゐるかれに取つては、僅に一町ほどもない距離も、容易なことではなかつた。かれは何遍となく躊躇ふやうにして休んだ。

空には星がキラ〳〵と煌いてゐた。

岸に近く漸くかれのやつて來た時には、かれは最早その重荷を負つてゐるに堪へられなくなつてゐた。爲方なしに、かれは一先づそこに女を置いた。そしてかれ自身だけが舟の中に入つた。

かれは暫くそこに倒れてゐた。

かれは再び勇氣を奮ひ起して、何うしてもかの女をこの舟の中に伴れて來やうと思ひ立つたのは、それから何の位時間が經過したのか、或は十分乃至二十分位しか經たなかつたのか、それははつきりとはわからなかつたけれども、兎に角かれはもう一度舟の繫がれてある岸の方へと這ふやうにして動いて行つて、そこから手を延して、女の衣の裾をたよりに次第に此方へとその體を引き寄せるやうにした。

かの女の體は、やがて次第に靜かにかれの動いて行つたあたりまで引き寄せられて來た。かれは遂にかの女の髮を手にした。つゞいて闇を白く劃つてゐる女の首のあたりを抱き寄せた。かれは最後の力をそれに籠めた。岸から舟に移る時には、その體の下半部は、水の中に落ちて微かに音を立てたけれども、しかもその次の瞬間には、何うやら彼うやら、かの女の體をその舟の中まで引寄せることが出來た。

かれはほつとした。そのまゝばつたりそこに倒れた。

かう首を抱へるやうにして、かれは女の名を三度まで呼んで見た、しかし小萬も既に全く意識を失つて了つてゐた。

突如として起つて來た考へは、かれももう生きてはゐられないといふことであつた。この深手では――腹部に一箇所、胸部に一箇所、それに、何處だかわからないところにそれよりも一層深い痛手があつて、そこから絶えず流れ出してゐる血のために、一刻毎に呼吸が苦しく迫つて來つゝあるやうなのをかれは感じた。

(さうだ……。死ぬには此處よりも舟の中の方が好い。)

かうした考へが不意にかれの頭を横ぎつて過ぎた。同時に、小萬も一緒に伴れて行かうと思つた。かうしてその男の、敵の死屍と一緒に殘して置くよりは、舟の中まで伴れて行く方が好い……。そして同じく死ぬものならば、舟の中で一緒に自分も死屍となつて横はる方が好い……。かう思つたかれは、そのまゝ、最後の力を揮つて――とてもさうしたことは出來さうには思はれないほど深手を負つてゐる身であるのにも拘らず、そのまゝ小萬の體をかれの肩にかけやうとした。

かれは幾度となくよろけた。幾度となく倒れた。しかも、かれはその愛するものゝ半ば死んだ體を遂にその肩に載せることに成功した。かれはまだいくらか溫か味の殘つてゐる體を自分の體に感じさせることが出來た。

『しつかりしなくちやいけない。』

かうかれは叫んで見た。

かれはつゞいて手を握つて見た。まだ温かであつた。黑い眼がぱつちり星の光に明いてゐるのが見えた。

『おい、おい――』

かう再びかれは呼びかけて、小萬の顏を闇に覗くやうにした。小萬は莞爾笑つたやうに見えたが、しかも體も首も、矢張ぐたりとして、重くかれの兩手に凭れ懸つた。何處かで、さびしくズホンの鳥の啼く聲がした。

百九

かれは男の狀態が氣になつた。本當に死んだか何うかが氣になつた。かれはぐたりとした女をそのまゝそこに置いて、もう一度その傍に寄つて見た。

男は兩手を啓いたまゝ、すつとも言はずに全く死んで了つてゐるのをかれは發見した。

かれは再び女の傍に戻つて來た。

『おい、おい。』

なり重い深手を再び右の腹部に受けたやうに感じはしたけれども……。

打伏した女の體に男が躓いて、撞と後に倒れた時には、最早その血に染みた短刀は、その手からかれの手に確實にもぎ取られてあつた。今度はかれが男の首やら胸やらを滅多突きに突く番となつた。

唸聲と叫び聲とが凄じくあたりに滿ちた。

『ざまを見ろ！』

かう言つて咽喉部に短刀をぐつと突立てた時には、男は既にスッとも言はなくなつてゐた。意氣地なく手足を兩方に踏いて、最早何等の對抗をさへ示さなくなつてゐた。

さてかれは立上るには立上つたが、それと同時に、さつき受けた腹部の痛手から血が凄じく流れ出して來るやうなのを感じた。かれはそのまゝよろけて倒れさうになつた。

しかしそれは正氣であつた。勇氣もまだそれほど失はれてはゐなかつた。かれは傷口を片手に押へながら、靜かに小萬の倒れてゐるところへ近寄つて行つた。

『おい、復讎したぞ……。もう、今度こそは、全くお前は僕のお前だぞ』

かうかれは女の耳に口を當てるやうにして言つた。

しかし小萬は最早何も言はなかつた。首を持上げやうとすると、既に生を失つたもののやうに體がぐつたりとなつた。

番先にかれは目にした。かれは何とも言はれない氣がした。自分の體が嬲殺しにでも逢つてゐるやうな氣がした。かれはその身の危險を顧みてゐる暇はなかつた。赤手のまゝで、かれは攫み懸つて行つた。男はそれを豫想してゐたらしく見えた。夕闇の中にそれを發見すると、男は慌てゝそのまゝ女の體の上から飛び上つた。そして短刀を振り翳して此方に向つて來た。

長い間、潜かに戰はれてゐた心、怨み、または互に一人の女を所有しやうとした欲望、さうしたものが遂に二人をかうした爭鬪に伴れて來たのである。かれ等は今や否應なしに互に死に面して立たなければならなかつた。

夕闇は深くこの凄まじい爭鬪を包んだ。をりをりは短刀が星の光に煌めき、をりをりは、互につかみ合ひむしり合ふ姿の彼方に行つたり此方に行つたりするのが微かに見えてゐた。暫く經つた。と急に何方だかわからないが、倒れてゐる女の體に躓いてそのまま摚と倒れたもののある氣勢がした。つゞいて苦しげに唸く聲がした。微かに叫ぶ聲がした。

最初に傷けられたのは、疑ひもなくかれであつた。赤手であつたかれは、忽ちその短刀で肩を突かれた。横腹を突かれた。顏を突かれた。しかしかれはそれに弱らせられてはゐなかつた。またそのために勇氣を失つてはゐなかつた。かれは振翳された短刀の下を潜つて、何うかして組み附かう組み附かうとあせつた。かれはその目的を達することが出來るまで奮鬪した。しかもその組み附いた時に、かれはか

變に遭遇したに相違なかつた。

續いて『あッ』と叫んだかの女の聲を聞いた。

その夕闇の中の姿と白足袋とは蹌と後に倒れたらしかつた。

しかしそれは唯瞬間であつた。かれはすぐそのかの女の後にある形の何であるか、急に起つた事變の何事であるかを知ることが出來た。

かれにはその身が何も持つてゐないことをも、またはその急に發見せられたる敵に對して、それと戰ふべき何物をも持つてゐないことを問うてゐる暇がなかつた。かれはすぐその中に飛び込んで行つた。

それは果してその小萬の世話になつてゐる男であつた。晝間から小萬の此處に戻つて來るのを待ちに待ち構へてゐた男であつた。舟から上つて土手について曲らうとするところの路の前にあらはれて、そこで女に決心を促した男であつた。男は遂に思ひ餘つて、舟の方へ逃れやうとした女を後から滅多突きに突いた。そのあらゆる怨み、家產を蕩盡せしめ、妻子を路傍に餓ゑしめ、その魂をさへ最後まで弄んで止まなかつた怨みを今こそは思ひ知れと言はぬばかりに――。

百八

女の倒れて俯伏しになつてゐる上に、馬乘に男が乘つて、滅多斬に斬つたり突いたりしてゐるのを一

袋と背の低いかの女の姿がぼんやり微かに浮び出してゐるやうな氣がした。『馬鹿な！　そんな筈があるものか。もう、とうに向うに行つた！　もうとうにあの廣い路のところへ行つた！』かう心の中でかれは自分自身を罵つて見た。

薄暮は次第に夜になりつゝあつた。地上には、沼には、いくらか霧がかかつてゐたけれども、空はよく晴れて、星が美しく煌々と輝き始めた。ふとかれはある物音を耳にした。

それは蘆荻の夕風に戰ぐ音でもなければ、漁師の遠いところで櫂をあやつる音でもなかつた。何か囁く聲、何か求める聲――もしひよつとすると、廢墟の中に埋れたあるものの蘇つて來た聲、運命の大きな力に由つて、ある扉のくるゝのひそかに明けらるる音！

猶そこに、白い足袋とかの女の姿とがぼんやりと――。

突然、かれはその白いものゝ此方に急いで動いて來るのを見た。つゞいて、その後に何か形があつて、その姿の此方に來るのを頻りに一生懸命に扯き留めやうとしつつあるのを見た。その白いものは行つたり來たりした。

『貴方、來て下さい！』

かういふ聲を聞いた時には、かれは既にその舟から、跣足のまゝで岸へとあがつて一生懸命にそつちに向つて走つて行つてゐた。たしかに何事か起つたに相違なかつた。たしかに、かの女はそこである奇

かう答へて小萬は笑ひながら手を出した。こんなことはつひぞこれまでないことであつた。かれはそれを堅く握つた。

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら……』

かう言つて、小萬は舟から岸へと輕く飛んだ。白足袋を穿いた吾妻下駄がくつきりと薄暮の空氣の中に動いて見えた。かの女はもう一度此方を振返つて見たが、そのまゝ靜かに土手の方へと步いて行つた。かれは舟の中から、その白足袋の夕闇の中に小さく動いて行くのを凝と見送つた。

百七

始めは白足袋の動くのと、何方かと言へば背の低いかの女の姿とが、昔の城址の土手を前にした夕闇の路の奥に次第に消えて行くやうに見えてゐたが、暫くして再び見た時には、その動いて行つた白足袋がぱつたりそこに留つたやうにかれには思はれた。そしてその白いものがいつまでもいつまでもそこに殘つて留つてゐるやうにも――。

かれはそれは錯覺だと思つた。幻視だと思つた。そんなわけはないと思つた。そしてもう一度ぢつと其方を見た。夕闇は次第に深くなつて行きつゝあつたけれども、それでも猶そこに、その白い小さい足

丘の竹藪の上の夕日が靜かに落ちて行くと同時に、沼の半面を染めた餘照は、次第に色が褪めて、段々暗く暗くなつて行つた。かれ等の近くに映つてゐる夕暮の空の赤い雲も、見てゐるゐる中に、次第に消えてなくなつて行つて了つた。薄暮に近い空氣はいつかかれ等の果てしない戀心を微かに包むやうに見えた。

『もう、大丈夫だ。人の眼に附くやうなこともあるまい。』

かう言つてその深い蘆荻の中から彼等が出て來たのは、それから猶は暫らく經つた後であつた。薄暮は既に來た。城址の向うの林は既に刷毛で塗られたやうに夕闇の中に沈んでゐた。沼には既に霧が被衣のやうに懸つて來てゐるのをかれ等は目にした。

『ぢや、明後日……』

『ことに由ると、明後日はむづかしいかも知れない。しかし成るたけ來るやうにします。何うしても來られないやうだつたら、午前中に、何うかして知らせるやうにしますから。』

『成るたけは來るやうに――』

『え、それはもう來るつもりだけども……』

『あの話もその時しなければならないからね。』

『え、さうですとも……』

やがてやつて來る自然のさびしさを豫想したやうな寂寞とを前にして、靜かに晴れた午後の日は傾いて行つた。沼は思ひ切つて碧く、水鳥の喧噪も一時途絶えて、蘆荻の伏した岸の入江には、さやかなさむさうな波が微かに皺を疊んでゐた。かれ等の舟は、靜かにいつもの隱れた船着の方へと近寄つて行つた。

かれ等は美しく澄んだ水を見た。斜めに靡いた丘の竹藪の上に大きく赤い日の落ちて行きつゝあるのを見た。そこからさして來た餘照が沼の半ばを赤く染めてゐるのを見た。水草の枯れたのが澄んだ水の中に沈んでゐるのを見た。小さな魚が一つ二つ靜かに泳いでゐるのを見た。

『今日は少し早かつたね。』

『さうね！……』

『少し、此處で遊んで行く方が好い。』

こんなことを言つて、かれ等は舟を蘆荻の深い中に入れた。そこからは、城址の土手も、土手に添つた路も、何も彼も見えなかつた。從つて此處にかうして舟がかくれて繫がれてあるのを岸から發見される恐れもなかつた。

かれ等は暫くの間其處にゐた。繰返しても繰返しても盡きない戀心が再びそこにあつた。靜かな樂しさうな笑聲がそこから洩れて來た。

『私の方の話なんか、いつきまるかわかりやしない……』

『ぢや、世話になつてゐる人は、その儘放つたらかして、いつでも東京へ行つて了はうと言ふのだね？』

『…………』

さう突詰めて言へば、さてさうでもないらしかつた。その世話になつてゐる人から小萬の心はをりをりは離れて來ても、それでも、此まゝ全く捨て去つて了ふといふことも出來ないらしかつた。(何うしてかう思ひ切がわるくなつたらう？何うしてかうはつきりした態度に出ることが出來なくなつたらう？)かう常に思つてゐるらしかつた。「本當に、私は意氣地がなくなつた！」時には染々何か思ひ當ることがあるやうにして小萬は言つた。

沼が初冬の暖かい日影に照されてゐる午後などもあつた。さうした時には、水鳥があちこちから多く集つて來て、その羽音やら啼聲やらで夥しくあたりは賑つた。鴨や雁なども下りて來た。岸に添つて行くと、ふと、その前に、誰かが長い鎌でサクサクと蘆荻を刈つてゐる氣勢などがした。かれ等は默つて竝んで歩いた。

百六

初冬の頃によく見るやうな冷たい透徹した空氣と、何處となく微かに影を持つてゐるやうな物象と、

かう言つて、小萬はわるく落附いたやうな風をその態度に見せた。

秋はもはや過ぎ去つて了つた。林の黄葉は既に全く散つて飛んだ。ある夜は風が凄じく起つて、終夜、一木の葉が家の周圍をガサコソと音を立てゝ廻つた。朝起きた時には、沼の色が錆鐵納戸のやうに寒く戰へて、岸を縁取つた黄い蘆荻は、全く打倒したやうになつて見えた。

『寒くなつたわねえ、もう。』

ぢつとその沼の水の色を見るやうにして小萬は言つた。

別に、詳しいことはかの女は言はなかつたけれども、町の方は益わるくなつて行きつゝあるらしかつた。もう一月とかの女は町に留つてゐることは出來ないやうな口振であつた。世話になつてゐる人のことに就いても、以前のやうに打明けてかれに話さなくなつたが、それでも強ひて問へば、『何うも、しやうがないのねえ。あの人も……』かう丸で自分に關係してゐるものではないやうな調子で話した。

ある時は、眞面目に、

『で、何うなるの……？　私達は？』

『さアね……』

『いづれ東京に行くには行くんでせう？』

『行つても好いのかね、もう？　行くなら、いつでも行くよ。お前の方の話さへよくきまれば――？』

ら運命の歩みか何ぞのやうに、靜かに且恐ろしく此方から向うに橫ぎつて行くやうに思はれた。かれはかの女の留めるのなどには拘つてはゐられないといふやうに、急いで立つて、戶を一枚がらりと引きあけて見た。しかしそこには、その小さな庭には、落葉がさびしく遲く上つた月に照らされてゐるばかりで、何の影らしい影も見當らなかつた。

百五

『今日も一日此處に隱れて、泊つて行つて好いでせう？』

かう言つで小萬はかれの顏を凝と見詰めた。何うしたためか、何うした理由があるのか、此頃はかの女は町に歸つて行くのが何となく厭だといふやうに見えた。

『何うかしたのかね？』

『いゝえ、別に……』

『でも、默つて、そんなに長く此處にゐては、町の方で騷ぎ出しやしないかね？』

『騷いだつて、構はない……。もう町に歸るのは、つくづく厭になつちやつた……』

『でも、あんまり長くなると、しまひには此處にゐるといふことも段々わかるやうになるよ。』

『わかつたッて構はない……』

「本當ですよ……だから、私、さつき大急ぎで、廊下を駈けて來たでせう？」

「何處に立つてゐたんだえ？」

「あの丘のところに……」

かう言つた小萬の目は、ぢつと一ところを見詰めた。いかにも恐怖に悸えてゐるかのやうに――。

「神經だよ。そんなことはありやしないよ。」

「でも……」

「ぢや、何かさういふ心當りでもあるのかえ？　こゝに、かうして二人でゐることが知れて、あの人でも來てゐるつて言ふのかえ。」

「いゝえ、さうぢやないけども……。今日はあの人は町にはゐない筈だから、そんなことはないと思ふけども……」

「氣の故だよ。何うかしてゐるんだよ。お前は？　今夜は？」

「…………」

小萬は默つて耳を欹てゐるやうにしてゐたが、

「そら……そら？」

かれも今度ははつきりと人の歩く足音を聞いたやうな氣がした。そしてその足音らしい音は、さなが

『さう、聞えない？　あれが、貴方に……？　何うかしてゐるのね……。そら、今度こそきこえたでせう？　そら？』

『あれは犬か何かだよ。』

『たしかに人よ。人の足音よ。』

かれはそのまゝ立つて行つて、その戸を明けやうとした。と、小萬は、

『およしなさいよ。もし明けて、人だつたら、何うして？』

かう言つて後から留めた。逹つて留めた。

小萬は何うも不思議だと言つた。さつきから不思議だと思つてゐると言つた。たしかに、今夜は誰か來てこの家の周圍をぐるぐる廻つてゐるに相違ないと言つた。

『馬鹿な……そんなこと。』

かう言つてかれが笑ふと、

『だつて、さつきもさうだつたのですもの……。さつき、お小用に行つた時にも、さう思つたんですもの……。そんなことを言ふと、貴方は變に思ふからと思つてわざと言はなかつんですけれども、確かに、人が立つてゐたんですもの……』

『馬鹿な。』

百四

さういふ風に感情的になつてゐるばかりではなく、外界から來る目に見えない災厄をもかの女は頻に恐れてゐるやうに見えた。何ぞと言つては、耳を欹てたり目を睜つたりした。風の落葉を吹捲く音を聞いても、誰かそこに來てゐるのではないか、誰かこつそりそこにかくれてゐて、かれ等の話を立ち聞きしてゐるのではないかといふやうに疑つた。

『だつて、さうぢやない……？　叱、默つて？……そら、足音が聞えるぢやない？』

『何處に？』

かれもいくらか氣味がわるいといふやうにして耳を欹てた。

『そら？』

『あれは木の葉のころがる音ぢやないか……』

『いゝえ、その他に……。そら、そら？』

『何にも聞えやしないよ。』

『聞えるぢやありませんか。ふら、そら、コトコトと。』

『神經だよ。何も僕には聞えやしない……』

假面であつたのか。その假面に由つてのみかの女は光彩をつけてゐたのか。」

小萬は言つた。

『しかし、もう駄目ですね……もう餘りおそすぎました。何うしてたッて、矢張、私は、その面をぬぎ捨てゝ了ふことは出來ないんです………』

『そんなことはないだらう？』

『いゝえ、さうですもの。もう駄目ですの。その面を取るには、餘りに私は罪が深いんですもの……』

『まア、しかし、餘りに、そんなことは思はない方が好いよ。それよりも、僕が心配なのは、他に、何か、僕に言へないやうなことが出來たんぢやないかな……？　そのために、さういふ風に、いろいろなことが考へられるんぢやないかな？』

『別にさういふことはありませんの……！』小萬はかう言つたが、突如に、

『貴方は何う思つて？　今、私が死んだら？』

『………？』

かれは默つてぢつと小萬の顏を見た。暫く經つてから、『何故、そんなことを言ふんだえ？』

『まア好いから……。その時は何う思つて……？　可哀相と思つて……？　矢張、罪の深い女だつたからと思ふでせうね、屹度……。貴方だッて、私の心持なんか本當にわかりやしないでせうねえ。』

を考へ出したんだね？　その動機がちよつとわからないね。』かれはかう言つて暫し間を置いて、『いつから、そんなことを考へ出したんだね？』

『此間の晩なんか、殊にさう思つた……』

『何うしてだらう？』

『だつて、あゝなるのも、皆な私がわるいんだもの……。貴方にしても、世話になつてゐる人にしても、皆な、本當に私のことを思つてゐて吳れるんですもの……。私なんか、本當に罪が深い！　一生を假面をかぶつて通つて來たんですものね。』

胸の中にはいろいろなことが凄じい巴渦を卷いて居りながら、それを十分に表面に言ひあらはすことが出來ないといふやうに、中途半端なところで小萬は言葉をとどめた。

かれは其夜は夥しくかの女が感傷的になつてゐるのを見遁すことが出來なかつた。何ぞと言つては、悲哀がその胸を塞ぐらしく、その頰を傳つて涙が靜かに流れて來るのをかれは目にした。もう何處にも昔のやうな元氣な小萬をかれは見ることは出來なかつた。また昔のやうな妖艶な小萬にも觸れることが出來なかつた。否、それればかりではなかつた。何處にかれは再びその鐵火な、底のわからない女の姿を發見することが出來たであらうか。また何處に底の底の戀の祕密を病的に好んだかの女を發見することが出來たであらうか。かれは思つた。〔本當にさうであつたのか。それはすべてかの女が不自然にかぶつた

『…………』

『だつてさうぢやありませんか……。貴方にしたッて、世話になつてる人にしたッて、本當に、私のことを思つて呉れてるんぢやありませんか。それなのに……それなのに……』言ひかけて聲は雲つた。

百三

『何うして、そんなことを言ふやうになつたんだね？』

『何うしてつて、本當にさうなんですもの……。私一人、そのかぶつた假面のために、本當に思つたことでもないことをこれまでして來たんですもの。私に取つても、うその生活ばかりして來たんですもの。』

かれは默つて小萬の言葉を聞いた。かれはかの女の心にある大きな自覺が起つて來たことを思つた。初めて自分といふことを本當に考へて來たことを思つた。

『さうぢやないでせうか？』

かう小萬は答をかれに促した。

『さうだね、さういふことになるかも知れないね。しかし、何うして、お前が今になつてそんなこと

『此頃、かういふことを考へましたの、人間には、矢張、本當のものがあるんだつていふことを。』

『何う？』

『人間はそんなに不眞面目なものではありませんね。皆な本當のものを持つてるるんですね。悲しければ泣くし、嬉しければ笑ふんですね……』かう言つてちよつと考へるやうにして、『ところが、私なんか、これまで丸で、本當の自分はわきに置いて、うその自分で世の中を送つて來たやうなものですからね。悲しいけれど口惜しいから泣くまい、嬉しいけれど馬鹿にされるとわるいから笑ふまい。かう思つて、わざと假面をかぶつて來たやうなもんですからね。毒婦のやうな面だの、鬼のやうな面だの、さうかと思ふと、何も知らない、無邪氣な女のやうな面だの……』

『それはさうだね。たしかにさうだね。それにしても、何うして、さういふことを考へ始めたんだね？』

『何うしてツて、それは私にもわかりませんけども……此頃、何うも、さう思はれて爲方がないんですの。貴方にだつて、世話になつてるる人にだつて、矢張面をかぶつてるたんですからね。』

かう言つたかと思ふと、急に、いろいろなことを取集めて思ひ出して來たといふやうに、または今までの失はれた虛僞の生活を何う恢復したら好いかと言ふやうに、袖で顏を掩つたまゝ、潸然として聲を立てゝ泣き出した。

不思議だね。僕の見たところでは、お前は決して惡人ぢやないね。わるい女ぢやないね。涙もあれば、物もよくわかると思ふね。』

かうかれが言ふと、小萬は今までの種々のことを思ひ出すやうな調子で、

『自分でも、さうは思ふんですよ。何うして人がさういふ風に私を見るだらうと思ふんですよ……。しかし、考へて見ると、矢張私がわるいんですね……。自分の心の持ちやうがわるかつたから、それでひとり手にさうなつて行つたんだと思ひますね。此方が男に騙されて、男と言ふものは、何うせ薄情なもんだ、女を玩弄具か何かとしか思つてゐないと思つてゐれば、何うしても自然にさう男から取扱はれて行くやうになりますね。』

『それは本當だ。』

『私なんか、さういふ風だつたから、いろんなことがあつたんですね。男を男とも思はないやうなことをしたり、色戀を丸で玩弄具か何かのやうに思つたりしたために、さうした種々のわるいことをも平氣でするやうになつたんですね。……元は、向うがわるいんぢやない。此方がわるいんですね。』

『それはさうだ……。しかし、いやにいつもとは違つてゐるぢやないか。』

『だつて、私、此頃、いろいろなことを考へましたもの。』

『それは好いね……』

「それは覺えてゐるとも……。あの川の畔の小さな家ぢやないか。」
「さうねえ。もう、隨分、昔になるわねえ。十二年。もつとになるわねえ。あの時分から、こんなになると思つてゐたでせうかねえ、お互ひに――」
「ゐたやうな氣がするね。」
「さう？　貴方もさう思つて……、私にも何うもさう思はれて爲方がないんですの。何か、前世にさうした因緣見たいなものがあるやうな氣がして……」
「考へると、不思議だよ、實際――」
かうかれも言はずにはゐられなかつた。丘の上の裸蠟燭の灯は頻りに搖いた。

百二

その夜はいつもに似合はず、かれ等は種々な話をした。センチメンタルな追憶、幼い頃に遭逢した艱難、娘時代にひとりで世の中に出て行かなければならなかつた苦しい經驗、男の體を知つてからのだらしのない無節操な生活、さうしたものがそれからそれへと話し出された。何となく染々と身に染みわたるやうな氣がした。
「それにしては、何うして、さういふ風に鐵火に、男を男と思はないやうになつたんだらうと思ふね。

『何うしてだか、自分にもわからない……。そして、さういふ氣がする時には、もう何も彼も仕盡した。色戀も、何も彼も仕盡した。いつまでかうしたことをしてゐたつてしやうがない……。さういふ氣がするのよ。淋しい、淋しい氣がするわ。』

『何故だらう?』

『別に、わけッてないわ。』

『抱妓を手離したか、何かしたのかね?』

『そんなことはないけど……』

『ぢや、かうしてゐることが何だかわるいことでもしてゐるやうな氣がするのかね?』

『そんなことはない。』

『ぢや、何うしてだらうな?』

『それに、不思議なことには、これまでやつて來たことが、皆な一つ一つ思ひ出されて來て、昨夜なんか、明方近くまで眠られなかつたんですの……』體と顏をかれの方へ寄せるやうにして、『それから、かういふ氣もするのよ。矢張、落ちて行くところは、貴方だツた。遂に遂に、貴方の私だつたといふ氣がするの。さうすると、貴方と初めて逢つた時のことなどがいろいろに考へられて來るわ……。貴方、覺えてゐて、初めて私と逢つた時のことを……?』

しかし沼を渡つて來る間は、かれはそれについて、別に何等の言葉をも懸けなかつた。かれは唯靜かに漕いだ。かれ等はやがていつもの丘の下の船着へとやつて來た。さて、蘆荻の裡に舟を捨てゝ、そのまゝ岸に上る時には、最早あたりは暗くなつて、留守番の老爺の室の灯がほツつり一つ夕闇の中に見えてゐるばかりであつた。二人はその灯を望みながら靜かに坂を上つて來た。

『いやに、今日は悄氣てるね?』

『…………』

『何うかしたの?』

『いゝえ、別に……』

『でも、わるく鬱いでゐるやうに見えるぜ……。何か事があつたんぢやないかね?』

『何も、別にないわ。』

『そんなら好いけれども――』

『しかし、かういふことは考へてはゐたの……。これほど人と人とが思ひ合つたり、惚れ合つたりしても、それは何でもないことだつていふやうな氣がしたの……。そら、よく貴方が言ふわねえ。――いくら考へたツて駄目だ、何ッせ死ぬんだ――さういふ氣が何處かでするのよ。』

『何うしてだらう?』

かれは外曲輪の土手の狹い暗い切通しを再びぬけて、城の址の中の方へと入つて行つた。と、いろいろなことが思ひ出されて來た。かれは面倒臭くなつた。かれは明かずの門のあつたところから、畠の中を突つ切つて、近路をして、昨日舟を捨てゝ町へ行つた船着へと急いで下りて來た。

昨夜の雨の烈しかつたあとは、そこにも到るところに殘つてゐた。蘆荻の白い花は全く水に低頭いて了つてゐたし、つながれてあつたかれの舟には、水が夥しく滿されてゐるのをかれは見た。漕いで向うへ行くには、何うしても、すつかりそれを何うかしなければならなかつた。かれは爲方がなしに、あか汲を手に、尻端折をして、舟を斜に偏らせつゝその水だまりをかき出し始めた。

百一

その翌日、迎へに行つた時にも、別に異つたことはなかつた。三十分も前から此處に來て待つてゐると言つて、小萬はその顏を白くさびしさうに夕暮の空氣の中に見せてゐた。その時の話では、その夜、そこに、その待合の一室にかの女と一緒にかれがゐたことは、全くその世話になつてゐる人に知られずに濟んだらしく、今日はまためづらしく今朝から留守で、出て來るにも何の障碍もなかつたといふことであつた。それにも拘らず、何處となくかの女は陰氣で、何か心配事でもあるやうに、此方の訊ねたことに、いつものやうにはつきりした返事を與へなかつた。

たならば、かれは殆どその友達の家の位置をさへ知ることが出來ないのであつた。かれは急いで路を畠の中に求めて、そしてその小さな祠の方へと行つた。

あたりはすつかり完全な廢墟になつて了つてゐるに拘らず、何うしたためか人知れず何等かの功德と靈驗とを持つてゐたためか、その小さな祠だけは、保護者はゐなくなつても猶その附近の人達に信仰されてゐるといふやうに、依然として――否、昔よりも却て綺麗に、繪馬の新しい數なども多く、そのまま其處に殘されてあるのをかれは目にした。かれはその位置に由つて、始めて友達の家と、かれ等が遊んだ大きな胡桃の樹の位置とを知ることが出來た。畠の中には、果してそこにその大きな切株があつた。かれは堪らなくなつかしい氣がした。

やがてかれはそこを出て、今度は潤々とした野へと行つた。北方に連亙した高い山巒の頂には、既に雪が白くキラ〳〵と日に光つて、林の葉も、田の畦に並べて栽ゑられてある榛の木の葉も、昨夜の雨にあらかたは落ちたらしく、唯ところどころに赤い、黄い、また樺色めいた色をして殘つてゐる葉が冬の來る前の野を纔に一日だけ美しく飾つて見せてゐるといふやうに、派手に絢爛にあたりに輝いてゐるのを見た。と、それに引寄せられて、かれの今やつてゐる戀も、矢張丁度この一日だけ美しく野を飾つてゐる紅葉の容に似てゐはしないかといふやうにかれには思はれた。かれは哀しいさびしいやうな氣がした。

のやうに、かれの魂も戀も、小萬の眉も唇も何も彼も皆混雜と一緒になつて動いて行つてゐるやうにも思はれた。と、人間が、或は一人づゝ、或は群を成しつゝ、移るともなく徐かに舞臺の上に消えて行くさまが手に取るやうにかれには見えた。眼を移すと、暗い水には、午前の日影が微かに動いた。

百

暫しはかれはそこを立去ることは出來なかつた。鋤を荷つた百姓がその傍を掠めるやうにして通つて行つても、昔の士族のあとの上さんらしい品の好い女が此方を見い見い通つて行つても、かれは猶ほその暗い水の中に微かに顫へるやうに搖く日影から目を離すことが出來なかつた。

しかし、それから十分經つた後には、かれは、外曲輪の濠と土手の殘つたあたりを靜かに歩いてゐた。野には晴れた碧い空と、青々とした大根畠と、老人の齒のやうにところどころに殘つてゐる古い家屋とが眼に附いた。ある畠の畦には、黃い菊が一面に咲いてゐたりした。

かれは幼い頃遊び仲間であつた友達の家の位置を野の畠の中にそこか此處かと搜した。もう其處には、かれ等が夏の日に、涼しい陰を求めて、筵を敷いて、いろいろな眞似をして遊んだ胡桃の大きな樹はなかつた。またその奧に、昔、家老として幅をきかせた老翁の起臥してゐた離座敷を持つた家屋すらもなかつた。すべて大根または栗の畠で、もし、その傍に小さな祠——稻荷か何かの祠が殘つてゐなかつ

てあるに相違ないのであつた。かれは跡といふもの、さびしさ――否、跡といふもの、亡びない力強さの雜々と胸に迫つて來るのを覺えた。(跡になつてさへ了へば、それより先は亡びやうはないのだ……。跡だけは、大地だけは依然として、いつ迄もいつ迄も殘つてゐるのだ)かう思ふと、涙組ましいやうな氣分が急に堪らなく胸につき上げて來た。かれは凝と立盡した。

戀に對する昨夜の激情と、永劫に對する今のこの靜寂と、この二つの心をかれは如何やうに取扱はうとするのであらうか。またこの二つの矛盾した人間の心をかれは何う調和しやうとするのであらうか。否、かれは――この二つのものは元來矛盾したものでも、また調和すべきものでもなくて、二つとも別々に人間の心にその位置を占めてゐるものではないか。かう思つて來た時、かれはふと、死の影に似た冷めたい影がサツとかれの心の中を掠めて通つて行つたのを見たやうな氣がした。

と今度は、かれの事業に對する考へが――何うかしてこれだけはやつて死にたいと思つてやつて來た昔の人達の跡のことが、強くかれを壓迫して來た。かれはかうしてはゐられないと思つた。かうして戀に耽つてはゐられないと思つた。もう少し本當に考へなければならないと思つた。と、母親や盲目の祖母が、地下から蘇つて來て、頻にかれを鞭撻するやうにも思はれた。

つゞいてかれは、さうした昔の人達が、野の上に、野の廢址を舞臺に、一人々々あらはれて、そしてまた一人一人消えて行つたやうにも、または夜霧のやうに、白く早く流れて行つたやうにも、またはそ

い草藪乃至水草の生えてゐる暗い水に午前の明るい日影の洩れてさし込んで來てゐるのを見ながら、心には遠い昔の幼いかれ、またはなつかしい母親や盲目の祖母、または隣にゐた愛らしい娘、何も彼もいつの間にか移つて行つて了つた時の不可思議、それにつゞいて昨夜あのやうに激したかれと小萬の美しい眉や脣とが混雜と一緒になつて集つて來て、何とも言はれない情緒がすつかり體をそこに膠着させて了つた。かれはこれほどのなつかしさをつひぞ今まで感じたことはないやうな氣がした。かれは心も體も魂も、一緒にその草藪の日影の線の中に、過去の亡びたシインの中に、または女の美しい眉と脣の中に全く一つになつて了つてゐるやうなのを覺えた。

其處にかれは昔のまゝの舊い茅葺の家屋を見た。大きな栗の樹を見た。土手の上を蔽ふばかりになつた山椒の樹を見た。深く繁つた竹藪を見た。暗い水の中に浮いてゐる澤瀉の葉を見た。ツンツンと長く生えてゐる蘭を見た。かれは不思議な氣がした。かれがあらゆる人生の苦、艱、乏を嘗めて來てゐる間、またあらゆる此世の歡びと樂みと譽れとを得て來てゐる間、またはさまざまにその身が變つて行つてゐる間、これ等のものは、土手は、草藪は、暗い水は、またはそこに浮いてゐる澤瀉は、ひそかに微かにさし込んで來てゐる日影は、更に少しも變ることなく、依然としてかれの經て來たと同じだけの月日をそこに經て來てゐるのであつた。否、そればかりではなかつた、かれの體や、かれの事業や、かれの戀が倏忽として過去つて了つた後も、矢張、これ等の物は、依然として此處に留められ、此處に殘され

てもなくつても好いといふやうな靜かな戀心が、野にも、空にも、または草木にも、草藪にも、日影の美しく照る路にも、あらゆるものゝ亡びて跡方もなくなつた廢墟にも、すべて一樣に、一色にひろがつて行くやうな氣がした。

そこには早く死んだ母親もあらはれて來れば、盲目のやさしい祖母もあらはれて來た。兄もあらはれて來れば、少年の頃に戀した少女もあらはれて來た。樹と樹との間におとりの鳥籠をかけて置いて、此方に離れて日白のそこに下りて來るのを待つてゐるさまなどもあらはれて來た。かれは言ふに言はれないなつかしさ――土にすら接吻したいやうななつかしさを總身に覺えた。

ふと氣が附くと、かれの足はいつともなくかれの生れた草葺の家屋のある方へと向つて歩いて行つてゐた。かれは其處に、昔の篠竹の藪に日影の明るくさしてゐるのを目にした。かれの昔の記憶では、その土手の切通を向うに出たところに、大きな金持の邸があつた筈であつたが、今はさうしたものもなくて、全く濶く畠から野に連つてゐるのをかれは目にした。

九十九

眼には、昔のまゝの、昔より荒廢したといふだけで、土手も、切通しも、殘つた藪も更に變つてゐるな

なつてゐるのもそれと到るところに指さゝれた。雀は頻に囀り、引板を引く音は頻に聞えた。

ある家からは、近くの學校につとめる教員らしい男が、古びた背廣を着、辨當を持つて、子を負つてゐる若い細君に送られつゝ出て來るのを見た。

家屋はそれでもまだところどころにそのまゝに殘つてゐるのを認めることは出來たけれども、しかもその頃の空氣——かれの少年時代に見た士族屋敷らしい空氣は、容易に何處にも見出すことは出來なかつた。あたりはあまりに荒れ果てた。昔、切髪の老いても美しかつた刀自の住んでゐた家の壁は夥しく壞れて、中からは百姓の上さんの口ぎたなく子供を叱る聲などがきこえた。かれが町に行く時にいつも目じるしにした大きな槇の木も既に伐られて影もなく、昔のあとを思はせるやうに殘つてゐる竹藪も僅かにその面影をそれと認めさせるばかりであつた。かれは靜かに晴れた午前の日影を帶びながら歩いた。

昨夜あのやうに激したかれの體の中に、何處にかうした靜かな心が藏されてあつたかと思はれるばかりに、今日は思ひ切つて靜かに、低徊的に、情緒に滿たされてゐるのをかれは見た。かれに取つて今日はあらゆるものがすべて皆なつかしかつた。路傍の草も、家と家との間にある青々した大根や菜の畠も、土手と土手との間に挾まれたやうになつてゐる猫の額のやうな黄熟した稻田も、半ば倒れやうとしてゐる庇の長く出てゐる昔の家屋も……。

そして、かれの戀心——昨夜のやうな激しいものとは丸で形を異にした、かの女といふ對象物があつ

「でも、その人の身になつて見れば、今になつて、お前にさう言はれては生きてゐる效もなくなつて了つたやうなもんだね。」

「でも、爲方がないわ……」

それは爲方がないには相違ない。しかし、愛する女からさへ、さう陰で言はれてゐるその人の悲劇をかれは繰返して考へずにはゐられなかつた。かれは他人事ではないやうな氣がした。女を憎みたいやうな心さへ何處からともなく起つて來た。かれはその時、入口の扉を明けて誰かゞ出て行くやうな氣勢を耳にした。それは小萬から迎へを受けてその旦那の歸つて行くのであるのがかれにも知れた。

九十八

餘りに空が美しく晴れてゐたためか、それともまた朝の氣分がいつもに似ず勝れてゐたためか、それともまたある不可思議な昔の廢墟に埋れた人達の魂がかれをひそかに呼び寄せるやうにしたためか、かれはその日は、朝飯をすませて其處を出ると共に、昔の城址やら、士族屋敷のあるところやらをひとりで靜かに歩いて見ることに心をきめた。

濡れた草や木には、朝日が晴れやかにさして、白い水蒸氣が草葺また板葺の屋根から靜かに騰るのが手に取るやうに見えた。柿の色附いた葉は、すつかり昨夜の雨に落ちて、赤い實の枝にあらはに鈴生に

一時引取られて行つたんですつて……』かう言つた言葉の持つた一家離散の悲慘なさまを想像した。かれには十分同情が出來た。さうしたあらゆるものを失つた田舍の舊家の主人が、せめては、その愛した女をだけ完全なその所有物にしやうとするのは、決して無理とは思はれなかつた。その女の愛だけでも得て、そしてそれを最後の立場にしやうとするのは、止むに止まれぬ最後の願ひであるに相違なかつた。しかし小萬は話した。『さういふつもりなんですとも……。此處にゐては、貴方のやうなものもゐるし、萬事具合がわるいから、足利なり、桐生なりに行つて、別に一軒藝者屋をしんきに始めて、そしてそこの主人にならうつて言ふんですの。だから、困るんですよ。私は初めから、さういふつもりであの人の世話になつたんぢやないんですからね。』

そればかりではなかつた。小萬は猶ほつゞけて、

『それに、さうするためになら、まだ金は持つてゐるらしいんですの……。家や田地を賣つた金が五千や六千は殘つてゐるらしいんですの……。そしてお前が本當にさう思つて吳れるなら、お前には藝者をやめさせて、その代りに、抱妓を三人も置くつて言ふんですの……。だけど、私、その話が出ると、いつも生返事をしてゐるんです……。だつて、さうすりや、一層重荷を脊負はなけりやなりません。ものを……。今だつて、もう懲々してゐるんですから、この上縛られて、始終、長火鉢の向うにゐられては、それこそ堪まりませんもの……。生命が縮まつて了ひますもの。』

九十七

かれはかの女から聞いた話を種々に考へて見た。實際、かの女の言ふやうに、その事件は最早終結に近づきつゝあるのは事實であるらしかつた。その旦那がいかにかの女に執念く纏り附いて來たところで、それが何うにもならう筈はなく、唯、つとめてその恐ろしい自暴自棄の衝に當ることを避けさへすれば、遠からずこの事件は落着して了ふに相違なかつた。『だつて、それは無理ですもの……。何も、彼も、私の故にするツていふ譯はないんですもの……。だから、今は成るたけ柳に風と受流してゐるんですの……。その方が今の場合好いんですの……。だから貴方も成るたけ陰の人になつてゐて下さる方が好いんですの。』かうかの女は言つたが、それは滿更事實でないことはないやうにかれにも思はれて來た。

それに、旦那の方の心持も、想像して見ると、滿更わからないこともないのであつた。かれは田舍の舊家の主人が、ふとしたことから、小蔦のやうな腕達者な女に引寄せられて、何うにも彼うにもならなくなつたさまを想像した。矢張、かれと同じやうに、《戀にあらずんば死》といふ境にまで無條件で引寄せられて行つたさまを想像した。つゞいて、小蔦が言つた言葉――『もう、家はすつかり畳んで了つたんですつて……。お上さんの里は熊谷在で、かなりにやつてゐる百姓ですから、子供達は、皆な其方に

『ぢや、いつもの時間に行つてゐるからね、今日のやうなことはないね。』

『大丈夫……』

そこに、さつきの女中は、傘と下駄とコオトとを持つて入つて來た。そしてコオトだけを小蔦に渡して、あとは、その庭に面した戸を明けて、そこにある踏石の上へと並べて置いた。外では矢張盛んに雨が降つてゐる氣勢がした。

『何うしてゐるの？』

かう女中に小蔦が訊くと、

『お上さんに、今、喰つてかゝつてゐたわ……、えらい劍幕よ……。だから、早く行く方が好いわ。』

『さう？　御迷惑ね！　ぢや、すぐ歸つて、迎へをよこすやうにしますからね……』今度はかれに向つて、『ぢや、ゆつくりおやすみなさいね。雨が降つて、一人で寢るには、今夜は靜かで好いわ……。ぢや、左樣なら……』かう言つて、コオトを着たまゝ小蔦は一枚明けた庭に面した戸のところへと出て行つた。そこには八つ手の廣葉の濡れて光つてゐるのや、雨の白く斜に線を成して落ちて來てゐるのが、室内の灯に映つて、あたりのさまをさながら戀の繪卷の一つの美しいシインのやうにした。やがて紺蛇目の傘に雨の當る音がバラバラと靜かにきこえた。

『本當かね……？』
『本當ですとも……。』
『馬鹿な奴だなア。』
『だつて、しやうがないわ……。だから、私これから歸るの。好いでせう。もう、私の心はわかつたでせう。それに、私だつて、そんな無茶な人と喧嘩して見たつて仕方がないから……』
『さうだとも……。でも、そこに來てゐちや、表から歸つて行くわけにも行かないぢやないか。』
『だから、今、お鶴さんに、此方に、下駄と傘とコオトを持つて來て貰ふやうに賴んで置いたの。』
『何處から行くんだえ？』
『其處から。』
かう言つて、小萬は顎で庭の方をしやくつて見せた。
小萬は急いで着物を着たり、帶を緊めたりしながら、『ぢや、明日……明後日またいつもの處へ行くわ。』
かれは點頭いて見せた。暫くしてから、『大丈夫かねえ？　まだ？　もうあそこのことは勘附かれてゐやしないかね？』
『まだ大丈夫ですの。東京とも思つてゐないが、あそこだとも思つてはゐませんよ。何でも汽車で行くとは思つてゐますけれどもね。』

九十六

年増の女中がこつそり入つて來たのは、それから暫らく經つた後であつた。『ちよつと待つて。今すぐそこに行くから。』かう言つて小萬は慌てたやうに、伊達卷をきうきう音させてしめたが、そのまゝ立て廻した屛風のかげの方へと行つた。

此方で聞いてゐては、女中が何を話してゐるのか、ちよつとわからなかつたけれど、何か不意に事件が起つたらしく、困つたらしい小萬の溜息がそれとなく此方まで傳つて來た。

『さうね……。さうする方が好いわね。何だか怒つてゐるやうだから……。おや、今其處に持つて來るから。』

最後にかう女中は言つて、廊下の方へと靜かに出て行く氣勢がした。

此方に戻つて來た小萬は、

『來たんだツて……』

『え?』

『あの人が來たんだつて! 怒つてゐるんだツて! 此處にゐるに相違ないから、すぐ出せば好いし、出さなければ、明日の朝まで見張つてゐるつて言ふんだつて……』

うと思つたためだッて言ふんですもの……。それに、友達にわるい男がゐるんですの。それが、何處からか貴方のことをきいて來ては、よく焚附けるらしいんですよ。』

『馬鹿な奴だなア！』

『馬鹿でも何でも、さういふことになつて了つたんだから、しやうがないわ。』

こんなことを言ひながら、最初入つた入口のとつつきの一室から、泊るための支度をした一室へとやがてかれ等は移つて來たが、何うしても、今夜は歸つて行かなければならないといふやうな口吻を小萬は洩らした。しかも今はかれは別にそれについて異議を挾まなかつた。『いゝよ、いゝよ、すぐ歸つても好いよ。さうとわかれば、何でもなかつたんだけれど、ゆつくり此處に寢て行くんだつたけれども、何しろ、あそこの沼の船着から期待に期待を重ねて來たもんだから、ついさういふことになッちやつたんだよ。此處の家だッて、始めは、お前とのことは十分かくすつもりでゐたんだけれど……。えらいことになつちやつた。』いくらか醉も醒めたといふやうにしてかれは言つた。

室の外にある八ツ手の廣葉に、高い樹から雨滴の落ちる音がばらばら聞えた。雨は依然として強く降つてゐるらしく、樹の鳴る音や、葉の戰ぐ音が夜更の空氣を何處となく騷がしくした。それにも拘らず、一室の内は靜かで、大和繪の色紙をところどころ張つた枕屛風に、十燭の電氣の明るくさしてゐるのをかれ等は目にした。

かの女の言ふ所によると、今日、足利から桐生に行つたのは、抱妓を住み替へに出すについての話のためであつたといふ。また、世話になつた人の心では、小萬かれ自身をも、金になる然るべきところに住替させて、それに由つて自分だけの身の周圍の處分の足しにもしやうと思つてゐるらしいといふ。『ええ、それはもうひどいんですの……。もう何うにも彼うにもならなくなつたんですの……。それに、第一、もう自暴ですからね。いざとなれば、何をするかわかりやしないんですからね。滅多な眞似は出來はしないんですよ。だから、今だツて、漸く出て來たんですの。ちよつと用事があるからそこまで行つて來るツて出て來たんですの。それなのに、貴方は唯、怒つてゐるんですもの……。本當に、もう何うしやうかと思つた――』

『だつて、此方はそんなことは知らないからね。』

『もうかういふことは懲々……。今度のやうな眼に逢つては、とても體がたまらない。何にしろ、自暴なんだから困るわねえ。』

かう小萬は染々辛さうに言つたが、すぐあとをついで、『それに、一番困ることは、何でも、彼でも皆な私の故にしてゐるんですもの。一家離れ離れにならなければならないやうになつたのも、先祖代々住んでゐた村に住んでゐることが出來なくなつたのも、皆な私の故だツて言ふんですもの。自分が相場で損をしたことは言はずに、さういふ風に損をしたのも、元を言へば、皆なお前につぎ込んだ金を恢復しや

も、お歸りになるツて、言ふことをきかないんですもの。よく來て下すつたわねえ、姐さん。何うしやうかと思つてゐたのよ。』

『まア、歸るツて言つたの？　このふき降りだのに。』

小萬はかう言つたが、『何うしたツて言ふのさ？　貴方？』

『…………』

『ちつともわかつて下さらないんだから困つて了ふよ、本當に――』

かれに向つて言ふともなく、また自ら言ふともなく、かう心からこの戀の錯綜を慨くやうに小萬は言つた。そして猶ほ斷然歸るといふかれを無理やりに引張つて、一先づつぎの室へと入れた。

九十五

世話になつてゐる人と今日足利から桐生に行つた理由を小萬から聞かされた時には、嫉妬の怒りも、孤獨の辛さも、何も彼もすつかり一時に靜まつて了つた。先方の心も知らないで、此方でばかり勝手氣儘をやつてゐたといふ後悔に近いやうな心すらも起つて來た。しかし、それと言ふのも、現に、その前に、かれの眼の前に、遂にその眉と唇と眼とを羅致することが出來たからであるのは、もとより言ふを待たなかつたけれど――。

て氣の毒だと思つてゐるんだよ。勘定はあれぢや足りないかも知れないけども、あとはまた來てよくするからね。』

『そんなことは御心配なさらなくつても好いんですよ……。何う？　本當に？　機嫌を直して、おとなしく今夜は泊つていらつしやいな？』

『まア好いよ、とめないでおいて呉れ給へ。』

かう言つたが、再び激情がかれを捉へたらしく、もう一人の女中の方が傘を持つて來るのを待つにも堪へないといふやうに、そのまゝ入口の扉をあけて、一散に、雨の降り頻る闇の夜の中に飛び出さうとした。

その時、ふとかれはその闇の中に白いものを見た。降頻る雨を衝いて、半ば傘をつぼめたやうにして誰れかゞやつて來るのを見た。そのつぼめた傘に內の灯が白く光つて流れるのを見た。突然かれはそこに小萬の姿を目にした。着物や腰卷をすつかり端折つて、一生懸命で雨の闇夜を衝いて來たらしい小萬の姿を。

そこに立つてゐるかれの姿も忽ちに小萬の眼に入つた。

『まア、あなた、何うしたの？』

『まア、姐さん。』かうそこにゐた年增の女中の言つた方がかれよりも早かつた。『とめても、何うして

『本當に、何うなさるのよ。外はこの雨ぢやありませんか。』

もう一人の年増の方の女中は、かう言つて奥から出て來た。

『好いよ。まア。とめずに置いて呉れ。今夜は歸る。……。何うしても歸るんだから。』

『困るわねえ！』

『大變に迷惑をかけた……。無理を言つてすまなかつた……。何アに、少し位、雨が降つてゐたつて大丈夫だ……。一走りだ……』かう言つた時には、かれは、(仕方がない、これからちよつと行つたところに、小さな旅舍がある筈だ。あそこに行つて泊らう……。)かう思つてゐた。

『ぢや、傘を上げませう。』

『好いよ、好いよ。』

『好いたつて、あなた。この雨に、傘なしでは、一足だツて外に出られやしませんよ。』年増の方の女中は、かう言つて、もう一人の女中に、急いで傘を持つて來ることを命じた。

『好いよ、本當に好いんだよ。』

『でもお待ちなさいよ。本當に强情ね。……貴方は――？　何かお氣に入らないことでもあつたの？この降るのに、餘所に行つて泊らなくつたつて、もう、ちやんと、寢るばかりになつてるのに……』

『難有う、難有う、さう言つて呉れるのは君ばかりだよ。氣に入らないどころか、つまらなく騷がせ

かう自分で言つて、そしてその答の來るのをかれは待つて見た。

しかし答は容易にやつて來なかつた。答の代りに深い深い溜息が來た。とてもさうした實行は出來さうにも思はれなかつた。と、つづいて今度は、さうした中間に挾つて困つてゐるかの女のさまが今更のやうにかれの眼の前に浮んで來た。何うすることも出來ない悲痛が強く胸を壓迫した。

(しかし、兎に角、此處には泊れない……。かうした恥かしい喜劇を演じて、そしておめおめと此處に泊つてゐるわけには行かない。雨が降つてゐたつて構ふことはない……。兎に角出やう、此處を出やう!)

かう思つて、かれは急に身を起した。かれは降り頻る雨の中をぬれそぼちて、すたすたと歩いてやるの。、かの女に對する一種の腹癒せのやうな氣がした。かれは帶をしめ直して、急いで階梯を下りて行つた。かれはまだ夥しく醉つてゐるのである。

九十四

下にゐた女中は、

『何うなさるの? これから、何處かにいらつしやるの?』

かう言つたが、それにも返事もせずに、かれはそのまゝ入口の方へと行つた。

かう言つて、かれは今度は身體と共に向うの方を向いて了つた。

『さうしてゐらつしやると風邪を引きますよ。それよりもお休みなさる方が好う御座いますよ。ちやんと、もう支度は出來てゐるんですから……』

かう勸めて見ても、かれは默つたまゝ容易にそれに應じやうともしないので、『困るわねえ。』と女中は口の中で言ひながら、一度下に下りて行つた。

雨は盛んに降つてゐた。夜はもう十一時半を過ぎてゐる。とても何うにもならないのはわかり切つてゐる。町の旅舍に行つて泊るにしても、これからでは容易でないのもわかり切つてゐる。しかしこのままでは、何うしても此處に泊つて行く氣にはなれない。考へれば考へるほど劫が煮えて劫が煮えて仕方がない……。それは小蔦のやつて來られないのはわからないではない。困つてゐるのもわかつてゐる。またその心が依然として世話になつてゐる人になくしてかれにあるのもよくわかつてゐるのである。それてゐて、腹が立つて、腹が立つて仕方がない……。かうなつた以上は、篠をつく風雨でも何でも衒いて、その愛するかの女を向うの男から奪つて來なければ何うしても承知が出來ぬやうな氣がする。……それでなければ男の一分が立たないやうにも……。暫くかれはぢつとして考へた。

『(でなければ、今夜を境にして、すつかりこの戀の中から浮び上つて了ふか。此間も言つたやうに、また今、電話口でも言つたやうに、もう再びかの女の姿を見ないやうにするか。)

九十三

トントンと階梯に足音がして、やがて女中が上つて來た。

『何うなすつたの？』

『別に、何うもしない……』

仰向けに、兩手を後頭部に組み合はせたまゝかれは言つた。

『でも、無理ね？』

『何が？——』

『もう時間ですものね。今日はもうゆつくりお休みなさいましよ。』

餘計なことを言ふものではないといふやうな調子で、かれは何か言はうとしたが、思ひ返したといふやうにしてそのまゝ默つて了つた。

『さうなさいましよ、ね、ね？　貴方？』

『まア、放つて置いて吳れ。』

『姐さんも心配してるんですよ。その代り、明日は早く來るやうに言つて置きますから……』

『好いよ、好いよ。もう少しかうして置いて吳れ。』

に見せないよ。』

『だつて、そんな無理。』

『無理だつて、何だつて、しやうがない……、今夜といふ今夜、お前の心がわかつた！』

醉ひと激怒が急に一緒に頭に上つて來たといふやうにして、彼は忽ち此方から電話を切つて了つた。

かれは頭をガンと何かで打たれたやうな氣がした。階梯を上つて、二階の元の所へやつて來たが、坐つてはゐられないやうに、頭に一種の眩惑を感じたので、兩手を後頭部に組合せて、そのまゝ、仰向けに倒れて了つた。呼吸が高く胸を上下した。

『馬鹿！』

かうかれは自分を罵つて見た。

しかし、一方では、さう言つて自ら罵ると共に、自ら憐な情が一杯になつて胸に簇つて來た。(馬鹿だから、また同じことをやつたのだ。終には、かうなるのはわかりきつてゐることではないか。……)しかも、わかりきつて居ながら、再びかうした戀の陷穽に墜ちて行つたかれが、何となく憫れまれるやうな氣がした。醉つてゐる體には、感傷の氣分が逸早くも湧き上つて、涙さへ靜かに頰を傳はつて流れて來るのをかれは覺えた。戸外では雨が益盛んに降り頻つた。

またかう突込んだかれの强い言葉は、確かにかの女の胸を刺したに相違なかつた。

暫くまた電話は途切れた。何處からかきこえて來る雜音だの、矢張遠くで誰か男と女と話してゐる聲などが、ゴオといふ音に雜つて耳に響いて來た。かれは電話の切れるのを恐れるやうに、把手をガタガタ言はせたり、聲を高く曳くやうにしたりした。電話はまたきこえて來た。

『お前かえ?』

『え、さう……貴方?』

『さうだよ、僕だよ。』

小萬は低い聲で、『だつて、今夜は無理だわ……。もう時間ですもの……今夜は爲方がないから、そこにお泊んなさい……。ね……おとなしくね……。貴方、醉つてゐるんでせう? 醉つてゐない! そんなことはありませんよ。此處で貴方の話をきいてゐても、醉つてゐるのはわかりますよ。ね……わかつたでせう。今夜はそこにお泊んなさい。おとなしく……ね。私、そこのお上さんに賴んで上げますから。』

『ぢや、何うしても、來られないんだね。』

『………』

『なら好いよ。それならもう、これつきり、お前には逢はないよ。これつきりこの俺の姿はお前の前

九十二

電話口に出た小萬は、もう少し前、十時半の汽車で歸つて來たといふ話をした。その話によると、世話になつてゐる人に無理に伴れられて、ある用事をするために、足利から桐生の方まで行つたといふことであつた。ことに、その小旅行が急に今朝になつてきまつたために、夕方になれば、かれが屹度その沼のほとりにさびしく待つてゐるとは知りながらも、それを何う報知することも出來なかつたといふ。

『さうですか……。そんなところに來てゐるんですか。本當にすみませんでした。その代り、明日は屹度行きますから。』

『今夜は來られないのかえ？』

かうかれは一歩突つ込んで見た。

『…………』

何う返事をして好いか、ちよつと困つたといふやうに、その電話は暫し途切れたが、やがて、また小萬の聲で、それもいくらか低くなつたやうな聲で、

『ところが、今もゐるんですの！』

『ゐちや、來られないのかえ？』

藝者は、あの顏の長いのと、束髮のと、背の高いのと、それからいやに鼻の高いのと、またその他にも一人や二人は來たやうであつた。勿論、かれは醉つても、小萬との仲を覺られるやうなことはしなかつた。また小萬のことをきくにしても、つとめて知れないやうに、遠くから、陰から、またその裏からきいた。かれは小萬についていろいろなことを知つた。騷いでゐる最中に、『こちらは、小萬姐さんと、何うかしてるんぢやない？　屹度さうよ。でなくちや、あんなにいろんなことを訊くわけはないんですもの……。ね、姐さん。此方には滅多に小萬姐さんのことは言へないわ。』

小園といふ二十二三の妓が、いやにじろじろと此方を見ながら、笑を含んで言つた言葉は、今でもはつきり耳に殘つてゐるやうな氣がした。

雨は盛んに降つてゐる。板葺の庇に、または北向きの戸に、バラバラ降りつける音は凄じくきこえた。風もいくらかは添つて來たらしかつた。其處へ女中は、漸く電話の通じたのを知らせに入つて來た。

『小萬さんが出ました。』

『え、小萬が……』

かれはかう言つて急いで飛起きた。

曇り果てゝ了つたらしく、雲は深く且つ低く地上に垂れて、ともすれば、雨になりはせぬかと疑はれた。

それから尠くとも最早三時間は經つた。雨は盛に降つてゐる。いつまで經つてもやみさうにもない。時計を見ると十一時を過ぎること既に十分である。もう何うしてもきり上げて歸らなければならない。しかしかれには歸るところがない。今からとても沼の向うの家に歸つて行くことは出來ない。さうかと言つて、別邸の上さんも起すわけにも行かない。それは、宿屋に泊る氣なら、何もわけのないことではあるけれども、出來ることなら、かの女に逢ひたい……。かの女を此處に聘んで來たい……。

かれは多い藝者達の歸つた後の室に醉つた體を仰向けに倒しながら、兩手を頭の下に組んで、ぢつとひとり天井を見詰めた。と。いろ〳〵なことが思ひ出されて來た。町の外れから引返して、もう一度かの女の家の周圍を闇にめぐつたことなどをも思ひ出されて來た。矢張そこは元のまゝにしんとしてゐた。止むなくそこからかれは引返して、今夜は靜かに別邸に泊らうかと思つた。その時であつた。雨がほつりと一つかれの頭に當つたのは――、（降つて來たな！）かう思つたが、それと同時に、多少自棄に近いやうな氣分が簇々として起つて來た。かれはそれから後の混雜した光景を歷々と思ひ出すことが出來た。

かれはその近所にあつた料理屋へと行つた。そしてそこでかれは尠くとも七八本の酒を飲んだ。

一番先きに、かれは闇の中をこつそりと、例の畑から裏庭の扉のところへと行つて見た。しかし扉も、戸もすつかり閉つてゐた。灯は微かに洩れて見えてゐたけれども、小萬も、抱妓も、また旦那も誰もそこにはゐないらしかつた。暫くしてそこを出て來たかれは、悲しい焦々した心を抱いてひとり町の通を歩いた。

九十一

かれは自分の何者であるかを誰にも知られることなしに、こつそりかの女の話を聞くことについて、あれかこれかと考へながら歩いた。しかし好い方法は容易に浮んでは來なかつた。初めに行つた待合に行くことも出來ないとすれば、無論かの女の家の抱妓を聘んで見ることも出來なかつた。さうかと言つて、顏も何も知らない初めての女を聘ぶために、料理屋にあがつて見たところで仕方がないといふやうな氣がした。かれは唯歩いた。

田舍の町は、四辻のところが唯少し灯が多いだけで、そこを通り過すと、早くから戸を閉めた家などが多く、次第にさびしくなつて行つた。ぼんやり歩いて行つてゐる中に、町はいつか北の盡頭になつてゐるのに氣がついて、かれは慌てゝそこからあとへ引返した。

夜は暗かつた。星は一つも見えてゐなかつた。否、夕燒の美しかつたにも似ず、空はいつかすつかり

遂に、遂にかの女はその姿をそこに見せなかつた。（もしや、別な道から行つたのではないか。別な路から船着のところに行つてゐるのではないか。）ふとかういふ氣がして來たので、かれは再び元の岸に戻つた。しかし矢張、そこには舟がさびしく横つてゐるばかりで、その姿は見えなかつた。

猶暫くかれは待つた。

いよ〳〵駄目らしいので、かれはそのまゝ漕いで歸つて行かうとした。棹を取つて岸に推した。舟はする〳〵と靜かに動いた。

（何か事があつたんぢやないか。）

かう思ふと、今度はその考へが急にかれの胸を塞ぐやうにした。此まゝ歸つて行つたところで、あのさびしい一室の中にとても穩かに眠ることは出來さうにも思はれなかつた。それは、町に行つたところで、かの女の家にぢかに訪ねて行くことは無論出來ない……。またあの初めの夜に行つた待合にも出かけて行くわけにも行かない……。今は、かれの姿を誰にも知らせては具合がわるい。かれの姿を見せては、かれとかの女の隱れてゐる場所が忽ち人に知られて了ふことになる……。で、町に行つて見ることも、かれに取つては、あまり好ましいことでもなかつたけれども、さうかと言つて、このまゝでは、とても櫂を動かして沼を渡つて行く氣にはなれなかつたので、思ひきつて、そのまゝかれは町へ行つて見ることに決心した。

ないか。』かういふ心配と、その監督者の手を遁れることが出來ない理不盡な束縛とをかれは同時に強く感じた。その監督者に對する嫉妬は、以前のやうに深く感じなくなつたけれども、今は却てかよわい女の身を保護する心配が、一層はつきりとかれの心の周圍に絡み着いた。

しかしかれは猶そこにかの女の姿のひよつくりあらはれて來るのを期待した。その白い顔を持つた小さな姿が刻み足で、呼吸をはずませて、そこにやつて來るのを期待した。そして『待つたでせう？　だつて、出るにも容易に出られないんですもの。』かう言つて、急いで舟に乘つて來るのを期待した。そのやさしい聲のために、長い間さびしく待つた心の憂さをも全く忘れて了ふのを期待した。しかしそれは事實としてあらはれて來なかつた。沼の上に微かに殘つた餘照も次第に消え、姫由輪の土手の線も黑く夕闇の空を劃るやうになつて行つた。あたりには、蘆荻の葉の風にすれ合ふ音が唯微かにきこえて來るばかりであつた。

既にさつきも度々岸に上つて行つて見たにも拘らず、もう一度行つて見る氣で――今度行つたならば、屹度そこにはかの女が來てゐるであらうといふやうな氣で、そのまゝ土手に添つて、いつものかの女のやつて來る道の方へと行つて見た。いつかあたりは全く夜になつてゐた。振返つても、沼はもうはつきりとは見えなかつた。

かれは工場の夜業の灯の窓の明るく遠く見えるあたりまで行つて、そこにかなり長い間立ち盡した。

仲好で、いつも學校で物を借りたり貸したりするので、よく同じ生徒仲間から囃されたり、妬まれたり、または到るところの塀にその相合傘を黒々と書かれたりした。ところが、ある日、かれは何うしても、誰も見るものゝゐないところで、二人きりでゐたいといふ欲望――幼いけれどしかもひとり手に起つて來た欲望に迫られて、何とか彼とか言つて、その子を强ひて誘つて、その城址のさびしい廢墟の中に伴れて來たことがあつた。そしてそこで、ある石の傍の日當りの好い草の上で樂しく心置なく一二時間遊んだことがあつた。(その石ではないか。あの時、その傍にあつた石は、これではないか。)

それははつきりさうとは言ふことは出來なかつたけれども、稻荷社の位置から推し、殘つた濠の形から考へて見て、何うもそれがその石らしい氣がして爲方がなかつた。かれは長い間、その石に凭りかゝつてゐた。午後の日は明るく野を一面に照した。

その少女の無邪氣な顏と、小萬のあらゆる戀を經て來た顏とが、今、ゆくりなくかれの空想の中に重り合つた。そしてそれが二つでなくて、一つの顏であるやうに見えた。かれは不思議な氣がした。

九十

時間が經つても、かの女の姿が遂にその土手下の路に見えず、薄暮の空氣が次第に夜になつて行かうとした時には、かれの心はさびしく暗くなつて行つた。(何うしたらう? もしや何か事があつたのではは

か……。かう思ふと、自分ながら、始めて此處にやつて來た時の心持と今とでは、小萬一人のためにかうも變つて行くものかと驚かされた。爲事のことなどは――廢址の上に曾て生きた人達のことなどは、今は遠い遠いところに離れて行つて了つたやうな氣がした。

しかしかれは靜かに、好い心持をして、その城址の中を歩いた。ところどころに、白い穗を銀のやうにかゞやかせた薄が靡いて居り、それに連つて、昔の址のそれと髣髴される土手が殘つて居り、更に向うに、濠のそのまゝ田になつてゐるのがそれと一目に見渡された。土手の下には、小やかな竹藪が靜かに風に動いてゐた。

稻荷社の向うに、新たに出來た家屋があつたが――それは矢張かれと同藩で、先輩で、要路の大官にまで立身して、土地ではすぐれた人物の一人にされてゐる人の老後を養ふために新たに建てられたものだが、そこまで行つて、かれは、つと引返して來た。かれはその新しい家屋のために、すつかりその樂しい幻想を破られるやうな氣がした。

ある日は、かれに面白い詩的な追憶が起つて來た。その時かれは靜かに路傍の石に腰をかけてゐた。

（こゝらではなかつたかしら？）かう思つてあたりを見廻したかれには、今までつひぞ思ひ出したことのないことが思ひ出されて來た。かれは再び美しい可愛い十一か十二位の娘を眼の前に見た。それは色の白い、指の細い、なつかしい子だつた。忘れもしない、お道さんと言つた。そのお道さんとかれとは

の中に、昔の城の殘礎と土手とをその背景にして、しよんぼりと小さくかの女の立つてゐるさまはさびしさうであつた。かれは急いで櫂を動かした。かれはその愛するものゝ眉目の次第に鮮かになり行くのを見た。また、その白い顏に喜びの笑ひの一面に湛へられてゐるのを見た。よくは聞えもせぬ距離の中から、その久しく待たされた恨を女が既に言つてゐるらしい聲を耳にした。

夕暮の空氣の中に湛へられた沼の入江の水の靜けさは、かくて忽ち近づいて來る櫂の音によつて破られた。波は波を生み、渦紋は渦紋を孕んだ。あたりの藻や、眞菰や、水草は皆たぶたぶと根元から動いた。

八十九

時には一時間以上も早く出懸けて、舟をそこに繋いだまゝ、好きな昔の城址の中をそこゝとなく彷徨したりした。かねて志して來た事業――昔、此處に生きた人達の歴史を書かうとした事業、それも此頃では戀のためにすつかり忘れられたやうに、またはすつかり捨てられて了つたやうになつてゐるのを顧つて考へて見た時には、友達なぞはさぞ驚いてゐるだらうと思つた。あんなにいろいろ盡力をさせて置きながら、今はちつとも姿を見せないのは何うしたことかと不思議に思つてゐるだらうと思つた。あそこの別邸の上さんには、仕事の都合で、成るたけ人を避けるやうにしてゐることを話して置いたから、別に何とも思つてゐないだらうけれど、それでもかうした狀態が果していつまで續いて行くのであらう

あつたが、時にはまたそれとは反對に、靜かな夕暮の日の光線が、蒼く澄んだ空氣を透して、人の心にまでぢつと染み通るやうにさしわたつて來てゐることなどもあつた。かれはかれのすぐ傍に、藻の青く浮いてゐるのを目にした。蘆荻の白い花の折れて水に浸されてゐるのを目にした。夕日の光線がさびしく水の底にさし込んでゐるのを目にした。羽音高く鷭の飛び立つて行くのを目にした。

沼の水の中にも、さびしい秋はそれと著るしく跡づけられてあつたけれども、それでも多い水草の中には、小さな白い黄い花のさびしく咲いてゐるのなどが眼に留つた。

時には、何處からともなく不意に昔の少年のかれが浮びあがつて來ることなどもあつた。さういふ時には、我ながら不思議に思はれるほどそれほどその時のことがはつきりと眼に映つて見えた。四十年前のかれも、今のかれも、かうして舷に凭つて空想してゐる形は、全く同じで少しも違ふところはないやうな氣がした。唯、青い赤い小さな魚を釣つてゐるのと、かの女の來るのを待つてゐるのとの相違があるばかりであつた。

夕日が消えて、水の中の草がいやに暗くなつて行くのを、ぢつと忙しい心持でかれは見詰めた。ある時は逸早く丘の裾の船着場は早く漕いで出たに拘らず、途中で道草を食つて、そこにやつて來た頃には、既に久しくかの女が待ちくたびれてゐるやうなことなどもないではなかつた。その時は、かの女の白い顏が遠くから見えた。廣い沼から蘆荻の細い入江に入つて來るあたりから見えた。しかし薄暮の空氣

舟は、再びその灯から離れて行つた。

八十八

その人の知れない隱れた船着は、やがてかれ等に取つて昔の詩でも讀むやうなシインとなつた。かれは何うかすると、約束した時間よりも二三十分も早くそこに漕いで來て、そして靜かなまたは張詰めた時をそこに過すことを樂しみとした。

その時には、かれは大抵蘆荻の茂みの中に半ば舟をさし入れつゝ、櫂を傍に、棹を水の上に、自分は船尾のところでぼんやり空想に耽るのが常であつた。そしてその空想は、時には遠い、遠い昔に遡つて行き、また時には、これからかれ自身の通つて行く將來の生活に觸れて動いた。戀の世界の不可思議なことや、またその戀の世界がいくら深く入つて行つて見ても、その底といふ底のわからないといふことなぞも、をりをりその空想の傍を掠めて通つて行つた。かと思ふと、かうして靜かな自然の中に烈しい戀の火を燃やしてゐるかれのさまが、何うしてもこの世の實在のものではなくて、誰かが歌つた遠い昔の柔らかな且靜かな、すぐれたリズムを持つてゐる詩の中の一つの形のあらはれであるかのやうな氣がした。

時には空が曇つて、沼が死んだやうに、何等かの災厄の前兆でも示してゐるかのやうに見えることも

成るたけ、その夜釣のカンテラの灯には近づきたくないとは思つたけれども、それでもそれに近く漕いで行く時には、何も彼も――その漁師の皺の多い恐ろしげな顔も、舳先に立つて頻に沼の中を覗いてゐる形も、篠竹の尖につるしたカンテラの上に下に絶えず動いてゐるさまも、すべてそれを手に取るやうにはつきりと見えた。そのカンテラの灯から來る光が、いやに赤くかの女の顏にも反映して見えた。

『…………』

何か言はうとして、しかも言はずに、小萬は、そのまゝ兩手で顏を掩つたが、それでも滿足が出來ないやうに、こと更に舟の中に突伏して了つた。

『何うしたんだえ？』

『だつて、怖いんですもの……』

『大丈夫だよ。』

『でも……』

何うしても、小萬は面をあげなかつた。かれは益々その身が象徵派の繪畫の中にあるやうなのを感じた。そのわびしい赤いカンテラの灯は、やがて廢墟の塵埃にならうとしつゝあるかれ等二人の戀ではないか。そしてその皺の多い老漁師は、その戀の運命を司どつてゐる自然ではないか。そして舟の中と沼の中とはすべて歡樂と死とを表はしてゐるのではないか。そんなことを思つてゐる間に、一度近寄つた

それを聞いてゐる同窓の友も、何とも言はれない戀の淺猿しさに打たれて、暫しは沈默したまゝ何とも言ふことが出來なかつたばかりでなく、またそれと同時に、海の潮の黑く光るさまや、舟の灯の搖くにつれて、海の底の不可思議な光景のはつきりと手に取るやうに見えるさまや、ところどころに散點してゐる島や岡がさながら怪物の群でもあるかのやうに思はれるさまなどが、その戀の不思議な、不可解な世界と相ひ連續してゐるやうに思はれて、何とも言はれない恐ろしさと物凄さと心細さとを感じさせたといふ。今、かれの頭には、それがはつきりとあらはれて見えた。

かれは思つた。かれのごときも、また、その熱帶の植民者のごとく、逸早く女の欺騙から遁れ去らなければならない身ではなかつたか。さういふところに、遁れ去つて、そして始めてその身の安全を求めることが出來るのではなかつたか。でなければ、その恐ろしい不可思議の戀の世界の單なる犧牲となつて了ふのではなかつたか。かう思ふと、かうして女と一緒に、夕闇の古い沼の蘆荻の中をわたつて行くのも、その沼の上にさうしたわびしい夜釣の灯の光を見るのも、またそれに聯關して、フランスの詩人の筆に描かれた熱帶の夜の海のさまを思ひ出したのも、皆な過去の數千年に埋められた未死の戀の魂が再び蘇つて來たのではないかといふやうに思はれて來た。否それはかりではなかつた。このまゝ此處から遁れ去つて了はなければ、不慮の災害が忽ちかれの身を襲つて來るやうにも、またはその戀の魂の澤山にすだく古沼の中に引込まれて了ふやうにも……。

『あれは、カンテラだよ。篠竹に結ひつけてあるんだよ。それで、あゝいふ風に上つたり、下つたりするんだよ。』

『さうなの？』

さうと知れば、別に恐ろしくもないやうなものであるけれども、それでも、何となく無氣味に、物凄く、古沼の主でも出て來てゐるのではないかといふやうな氣がされて、かれはつとめてそれに近寄らないやうに、ぐるりと廻るやうにして舟を漕いだ。遠くカンテラに映つた舟の上の漁師の顏は、いやに赤黑く物凄く、さながら戀の惡魔か何ぞのやうに見えた。

八十七

フランスの詩人の作の中にあつたある光景——女の虛僞と欺騙とのために、熱帶の植民地に隱遯した男の許に、數年經つた後に、その同窓の友が訪ねて行つた時の光景が、その鰻の夜釣のカンテラの灯を見るにつけて、歷々とかれに思ひ出されて來た。

矢張、そのシインも月のない暗い夜であつた。海の潮の黑く光る夜であつた。そこで、舟の中で、その熱帶地方に殊に多く產する海の鰻の夜釣をやりながら、十數年前に隱遯して今は全く土人と同じやうな生活をしてゐるその男が、その遯世の理由——女の虛僞と欺騙とに染々打たれた時の話をした時には、

を、さうした殘忍な嫉妬の炎の中に留めて置くことは出來ないやうな氣がした。『ひどいことをするね……。そんなことをされて、默つてる奴があるもんか。』かうかれはその時は激して言つた。

自ら操る靜かな櫂の音に、引寄せられるといふやうにして、次第にかれの心は平靜な狀態になつて行つたけれども、それでもその男の嫉妬の炎が近く且強くかれの周圍に迫つて來てるのを思はずにはゐられなかつた。場合に由つては、その愛するものを保護するために、かれ自ら正面にその炎に面して行かなければならないやうな氣がした。

しかし、かれは今は何も言はなかつた。唯、靜かに漕いだ。

ふと小萬はけたゝましい聲を立てた。

『何アに、あれ？』

かれは驚いてそつちを見た。そこからさう大して遠くない距離に、赤い火の玉のやうなものが上にあがつたり下にさがつたりして、時には明るく、時には暗く、さびしく物凄く水に映つてるのが見えた。上にあがつた時にはさうでもないが、下にさがつた時には、水の面の周圍が一二間ほどわる赤く照されて、蘆や蔺や、藻などが混雜と重なり合つて見えた。

『何でもないよ。あれは、鰻の夜釣だよ。』

『あの火の玉は？』

れときこえるばかり、あつい二つの戀心は、全く夕闇の中にかくされて了つた。
かの女は唯船尾にゐるかれのほの暗い姿を見、かれは唯かの女の白い顏を微かに闇の中に見た。
『でも、こんなところに、お前がやつて來るとは知らないんだらう？』
長い沈默を破つてかうかれが訊くと、
『それは今はわかりやしませんけどもね……』
かう小萬は中途で言葉を留めたが、すぐまたあとをついで、『でも、容易には知れやしませんね。』
『矢張、東京に行つたと思つてゐたかえ？　此間は？』
『疑つちやゐますけれどもね……。さうするより他に、考へやうがないんでせう、屹度。さつきも言つた通り、あの夜、待合といふ待合は、殘すところなく搜したんですからね——』
かれの頭には、さつき舟にかの女を乘せると同時に、立てつゞけにかの女からきかせられた（あの夜歸つて行づた時）の光景が繰返して考へられた。しかし女の言ふところは何處まで本當であるか、果してそれほどまでに男がかの女に執心を殘してゐるか、何うか。それは或はかの女が例の癖として、またその好みとして、戀を殘酷に色濃くするためにわざとつくり出したシインではないか。十のものなら五つ位に考へて置いて丁度好いのではないか。かうも思はないではなかつたけれども、しかも現に目のあたり、女の腕の傷などを目にしては、一種强い昂奮を感ぜずにはゐられなかつた。自分の愛する女

かれは意想外な氣がした。何處からやつて來たのかしら？と思つた。かれは急いで此方に戻つて來た。

『何うしたえ？』

『何うしたッて……？　貴方こそ何うしたの？　私、捜してゐたのよ。』

『僕も何うしたかと思つて、捜してゐたんだ……。さつきから來てゐたのかえ？』

『いゝえ、さうでもない。』

『今、來たんだらう？』

『もうすこしさつき。』

かう言つたが、急に、戀のエクスタシイに二人とも陷つたといふやうにして、互ひに身をひたと寄せた。手は堅く堅く握られ、力を込めて振られた。『大丈夫だつたのかえ？』かうかれが囁くやうに言ふと、『でも、やうやくそつとぬけて來たんですの。見つかれば、それこそ大變……』小萬は、かれの顏を薄暮の空氣の中に仰ぐやうにしてかう小聲で言つた。

八十六

舟が沼の半ばに達した頃には、夜の色は既にあたりを包んで、唯、かれの操る櫂の水の音が微かにそ

昨日、かの女を岸に上らせたところに來た時には、まだ、さうして待つてゐるやうな氣勢は何處にも見當らなかつた。唯、さびしげに夕風に蘆荻が靡いてゐるばかりであつた。

かれは時計を袂の間から出して見た。丁度五時五分前であつた。

（まだ早いんだ――）

かう思ひながら、時計を元のところにしまつて、（此方の來やうが早かつたんだ。……もう來るだらう……？）

そのまゝ舟を岸に近く寄せ、流れないやうに棹を立てゝ置いてから、かれは靜に岸へとのぼつた。かれは次第に姫曲輪の昔の土手の方まで行つた。

土手についてちよつと曲ると、畠を隔てゝ、幅の廣い路が眞直に向うについてゐるのが見えた。かなりに遠くまで見えた。しかももう夜になりかけてゐるので、近くに列つてゐる樹立も、遠くに見えてゐる筈の工場の煙突も、何も彼もはつきりとは見えなかつた。唯、町の夕暮の市聲が沼に反響するやうに喧しくあたりに響きわたつてきこえた。

と、突然すぐ右の土手の陰から、ある足音がきこえたと思ふと、

『そんなところにゐるの？』

かういふかの女の聲がした。

八十五

あくる日の薄暮の空氣をわけて、女を迎へる爲めの櫂の音が靜かに古い沼の上に響いた。

かれの心は此頃にめづらしいほど戀に燃えてゐた。もし、かの女があの約束を破つて、今夜あそこにやつて來なかつたなら、何うしやう？　かれはその時はそのまゝこの身をかの女の眼から永久に隱して了ふと言つたけれども、いざとなつて、果してそれが出來るであらうか。かの女の體と心から未練なしに永久に離れて行くことが出來るであらうか。かう思ふと、その約束した場所に次第に近づいて行くのが、何となく辛いやうにも心許ないやうにも思はれた。何うかして、待つことの辛さを味はされずに、すぐそこにかの女の姿を發見することを得るやうにかれは望んだ。

かれの櫂は頻に動いて、舟は藻の一面に生えてゐるところや、一ところあかあかと夕燒の餘照を涵してゐるあたりや、それからずつと深く蘆荻の連つた間を次第に通過して、漸くその姫曲輪の昔の土手のそれと指さゝるゝ邊まで來た。

かれの眼は逸早くそのあたりへと注がれた。そこにかの女はゐないか。かの女は遲しとて待つてはゐないか。その白い顏が薄暮の空氣の中にはつきりと浮び出すやうに見えてはゐないか。かう思ひながら、かれは靜かに櫂を動かしつゝ、舟を次第に其方へと近寄らせて行つた。

にでもゐるやうな氣がした。羨まれる昔の人達と同じやうに、かれもまた深い戀の空氣に浸つてゐるのではないか。詩の中の一齣を演じてゐるのではないか。死と戀との美しい賭博をやつてゐるのではないかといふやうな氣がした。舟は靜に銀色をした霧の沼の方へと出て行つた。

水の上に微かに浮んで見えてゐる草の葉に、ポッポッ白い花の咲いてゐるのを見た時には、かれは思はず戀の美しい面影をそこに見出してもしたかのやうに、櫂を留めて、その二つ三つを手に摘んだ。

夕霧は次第に深く深くなつて行つてゐた。沼に出た時は、まだ丘がそれと前に浮びあがつて見えてゐたけれども、半ほど漕いで行つた時には、その見當も容易にわからないほど霧と暮色とが迫つて來てゐた。あやしい水鳥の聲も其處此處にきこえ出して來た。

かれは急いで櫂を動かした。もし、このたそがれ時に、此處に埋められた無數の戀の魂が浮び出して來ては、それこそ大變だといふやうな氣がした。理由のないある種の恐怖が、かれに歡樂の恐ろしい世界を展げて見せた。

霧の渦卷くやうに流るゝ中を、あちこちと搜すやうにして、辛うじてその丘の船着に戻つて來た時は、かれはほつと溜息をついた。かれは櫂を持つて、急いで丘の方へと上つて來た。

振返ると、沼は一面の深い霧で、戀も死も何も彼もすべて皆なその神祕の底の底に埋められて了つたやうに見えた。

思はずかれはかう口に出して言つた。と、その次の瞬間には、『死』と『强』といふ字の傍に、『歡樂』と言ふ字がまたあらはれて、それが霧の流るゝにつれて、次第に右へ右へと動いて行つた。かれは不思議な氣がした。夢でも見てゐるやうな氣がした。しかしそれも長い間ではなかつた。見てゐる中に、その三字は、段々小さく小さくなつて、後には遠い、遠い、微かに見えるか見えぬかといふやうになつて了つたが、突然ぱつと金色の火花を一つづゝ美しく放つて、そして再び元の灰色の霧の面になつて了つた。

かう思ふと、今度は『死』――といふ字ばかり、また大きくその上の方にあらはれ出して、再び前のやうに、次第に右へ右へと動いて行つた。そして見ると、それもいつか微かに微かになつて、消えて行つた。

かれは猶凝と空間を見詰めた。しかし今度は微白い霧が流るゝばかりで、何物もその面の上に現はれては來なかつた。

かれはもう一度眼を移して、小萬の姿の沒して行つた昔の姫曲輪の土手の方を見た。しかし薄暮は既に迫りつゝあつた。かの女が歩いて行つた折れ曲つた路も、もう今ははつきり見えなかつた。唯、昔の土手が黑くその霧の中に見えてゐるばかりであつた。やがてかれは歸り支度をした。

舟は靜かに蘆荻に觸れて微かな音を立てた。かれは何とも言はれない氣がした。昔のロオマンスの中

ればならない男の方へ心が向けられたといふやうにして、急いでスタ〳〵と土手の方へと行つた。かの女の姿は忽ち薄暮の霧の中に見えなくなつて了つた。

かれはぼんやりとして、その見えなくなつたあとを凝と見詰めた。何とも言はれないさびしい悲しい氣がした。かれの持つたもの、かれの折角これまで築き上げたもの、かれの漸くに達することの出來た心の位置、さうしたものをも、すべて皆な一時に亡して了つたやうな氣がした。

（廢墟、廢墟……もう廢墟の塵埃になる時も近づいた……）

薄暮の空氣の中にある物をぢつと見詰めながら、かれはこんなことを思つた。微白い沼の夕霧は靜に流れた。

八十四

種々な昔の幻影がかれの眼の前を掠めるやうにした。昔の人達の經て來た無數の男女の歡樂と悲劇とが、微白い夕霧の中に一つ一つあらはれて見えると共に、『死よりも強し』とフランス詩人に言はれた言葉が、今更のやうに深くかれに思當つて來た。と、その文字が、死といふ字が、強しといふ字が、殊に大きく霧の面に浮び上るやうにはつきりと書かれてゐるのをかれは認めた。

（戀の歡樂に比べては、死などは何でもない。）

『では、行くかね？　無理をしてはいけないよ。喧嘩なんかしてはいけないよ。戀の嫉妬に目が晦んでゐる男は、何んなことをするかわからないから。』

『え……』

『矢張、東京へ行つたことにして歸つて行く方が好いよ。』

『え、さうするわ。』

かう言つたが『ぢや、明日の今頃ね、此處に來て待つてゐて下さるのね――』

かれは點頭いて見せた。

小萬は褄を取つて、舟から靜かに岸へと上つた。

『ぢや、いゝかえ？　そこから、土手をぐるりと廻ると、本丸になるから、その路を眞直に行きさへすれば、あの稻荷の社のあるところへ出るから……。間違ふやうな路はありはしないから。』

『そこを眞直に行きさへすれば、町に出るんですね？』

『さうだ……』

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら――』

かう言つた時には、小萬は既に、舟の中に殘されたかれよりも、これから行つてその怒りを宥めなけ

うにして近づいて行つた

どんよりと濕つた薄暮の靜かな空氣は、かれにいろいろな幻影を見せずには置かなかつた。かれはゆくりなくそこに昔の城壘——美しい見事な城壘が空を劃つて聳えてゐるのを見たやうな氣がした。白堊と城櫓と石垣とが依然として殘つてゐるのを見たやうな氣がした。つゞいていろいろな Image がかれに歴々と見え出して來た。そこに住んでゐた繪のやうな美しい人達の生活が、君の愛にのみ縋つて一生を送つたやうな女達の生活が、または嫉妬のために自ら舌を嚙み切つて自殺したやうな烈しい若い女の魂が——。何うした聯想か、ふと昔讀んだ戀の戲曲のシインの數々が思ひ出されて來た。

不貞のために、君王の刄に罹つた美しい女の長い髪がそこに現れて來るかと思ふと、つゞいて不義の戀に殺されても、その靈は猶死せずに、地獄の炎の中に生きて、二つ並んでさまよつてゐるさまなどがあらはれて來た。其處にはエルガもゐれば、フランチエスカもゐた。かれは心が、靈が全くさうした戀の幻想の薄明の中に同化して行くやうな氣がした。

蘆の葉の夕風に小やかな音を立てゝゐたのも、さながらさうした戀の魂の人知れずかくれて私語いてゐる聲か何ぞのやうに聞き取られた。

『ぢや、明日、また……』

かう言つて、かの女は舟の中から身を起した。

に、元、婉曲輪のあつた土手の殘つてゐるところがあるからね。そしてそこは、ちよつと人に知れないやうになつてゐるからね。』

『まだ中々なの？』

『なアに、もうぢきだ……。ぢや、もうそろそろ行かうか。』

『えゝ。』

で、かれ等は再びその蘆荻の中から出て來た。スロオプの上の夕日は既に消えて、その代りに今度はわるく赤く不愉快な雲がいやに佗しくどんよりと沼の上にその影を涵してゐるのを二人は見た。何處かで、欸乃の聲がしたが、蘆荻の繁みの中にかくれてゐると見えて、それらしい漁夫の姿もあたりには見當らなかつた。かれの操る櫂は靜かに薄暮に近い空氣の中に動いた。

少し行くと、果して其處に、こんなところに、かうしたかくれたところがあるかと思はれるやうな、船着ともつかず、さうかと言つて昔は此處から船を出したこともあるらしいところがそこにあらはれ出して來た。舟は靜かに白い蘆荻の花をわけるやうにして入つて行つた。

八十三

昔の城址の土手の一部の殘つてゐるところへと、舟は靜かに、ひとり手に引寄せられ吸ひ込まれるや

ゐなかつた。女は繰返してその言葉の眞實であることを誓つた。男はまた繰返して、その誓つた女の言葉が何處まで眞實であるかは知れたものでないと言ふやうなことを言つた。終には互に行詰つたやうにして二人は默つて了つた。

昨夜かれに與へた歡樂を、今夜は他の男に與へて、それでその立場をつくらうとしてゐる女の心が、今更のやうに、はつきりとかれの胸に迫つて來た。まごまごすれば、短刀で突かれるかも知れないほどそれほど怒つてゐる男の許へも、さうした歡樂と笑ひと妖艶な姿とを持つて平氣で入つて行かうとする女のことを考へた時には、何うすることも出來ないのを知つては居りながら、また、さういふことは豫めそれと肯定して置いたに拘らず、かれは一種強い不愉快の念の總身に起つて來るのを禁めることは出來なかつた。しかし、さうした心は容易に言葉に上せることは出來なかつた。また、言葉に上せて見たところで何うすることも出來なかつた。默つてゐるより他に爲方がなかつた。

『何處なの？　明日迎へに來るといふところは？』

かう小蔦はその重苦しい互ひの沈默の壓迫からのがれたいといふやうにして言つた。

『うむ？』

かうかれは振向いて、ちよつと考へるやうにしたが、矢張その重荷から脱れて出て來たものゝやうにして、『なアに、何處でも好いんだけれども……。何なら、此處からも上れるんだけれども、も少し向う

『好う御座んすとも……』

かう言つた小萬は下唇を咬むやうにした。

八十二

明日の午後五時までにこつそりかれが迎へに來るといふ場所に舟が着いたのは、それからかなり時間が經つてからのことであつた。二人を載せたその小舟は丘の下の船着場を出てから、眞直に城址の方には行かずに、或は蘆荻の繁茂した岸に沿ひ、或は岸の樹の影がベックリンの繪のやうにさびしく沼の上にその影を落してる淵をめぐり、時には佗しい夕日の影の微かに洩れて來るスロオプに添つたりなどして、到るところで櫂を止めては、幾度となく低徊した。それはさながら早く對岸について、そのまゝ二人が別れて了はなければならないのを恐るゝやうに――

しかもかれの操る櫂は、いかにも輕さうに、またそれについて動いて行く舟は、いかにも滑かさうに見えた。舟の進むにつれて、一筋の痕は白く長くあとに殘つた。

中でも殊にかれ等の長く留つてゐたのは、城址の昔の本丸の土手のそれと向うに見える蘆荻の岸であつた。そこでかれ等は長い間いろいろなことを話した。

しかしそれは別に變つたことでもなかつた。戀人同士が常に取り替はす言葉以上には、一歩も出ては

して了つても好いんだね？　さういふ約束だね？』

『え。』

小萬は笑つてゐた。

『笑ひごとではないよ。本當にさういふつもりで僕はゐるんだから……。もう、好い加減な、浮氣な心持ぢやないんだから。』

『え、好う御座んすとも……』

『明日の五時、日の暮れる時分、今日この舟をつけるところに、必ず僕が行つてゐるからね。好いかえ。本當だよ。十分、十五分は待つてゐる。五時十五分までは待つてゐるから……』

『好う御座んすとも……』

『それに、來るにつけても、つとめて人に知れないやうにしなければ駄目だよ。こつそり、夕暮の風か何かのやうに、そツとそこに來て待つてゐるんだよ。』

『え、好う御座んすとも……』

『つまり、それが心と心の試みの鍵になるんだからね。何方がまことの純な火に燃えてゐるかといふ權衡になるんだからね……。もう、僕も浮氣な心持ではゐられなくなつた。お前を奪はうとするもの丶前には、この權でも何でも振つて飛出さずにはゐられなくなつたんだからね。』

を撫でるやうに氣味わるく音を立てたが、少し出ると、今度はピラピラと暗く佗しく光線のさし込んで來てゐる水の中に動いて、さながら大きな蛭でも重なり合つてゐるやうに見えた。小萬は始めは頻にそれを見てゐたが、やがてさうしたものを氣にしない方が好いといふやうに、俄に頭を擧げてかれの方を見た。船尾の處に坐つて、櫂を取つたかれは、既に頻に漕ぎ始めてゐた。

『旨いのね。』

かう言つて小萬は笑つて見せた。

『これでも、子供の時分、散々やつて、馴れてゐることだからね。お前を向うに渡す位のことは何でもないよ。』

こんなことを言つてゐたが、急に、『しかし、送つて行くのは、餘り好い心持はしないな。』

『何うして？』

『向うに、相手がゐるのがわるいよ。』

『また始めた？　あれほど言つてもわからないのねえ……。私だツて、歸りたいツて歸つて來たんぢやないのよ……』

『好いよ、好いよ、わかつてゐるよ……。その代り、明日、約束した時間に、僕の迎へに行つてゐるところに來てゐないと承知しないからね……。その時間に來なければ、僕は永久に僕の體をお前から隱

八十一

『まア、びつくりした！』

かう言つて、小萬はその鳥の行方を見送つたが、『あれが、昨夜鳴いた鳥ぢやない？』

『いや、あれはさうぢやない。あんなに大きな鳥ぢやないよ。』

『さう？』

かう言つたが、夜の沼の怪が俄にかの女を襲つて來たやうに、『何だか怖いやうな氣がするわねえ。爺さんを賴んで來ませうか。』

『大丈夫だよ。』

『でも、何か出るとわるいわ。』

『晝間は大丈夫。』

かれは笑ひながら、棹を取つて、船着場の細く入込んだところを通る間だけ、靜かに蘆荻の根元を押した。舟は靜かに滑るやうに動いて出て行つた。

次第に濶い銹びた沼があらはれ出して來た。いやにどす黑い、時には女の髮の亂れたのを聯想させるやうな、また時には、底の底にゐる怪物の何物かを想像させるやうな亂れ藻が、最初はするすると舟の底

つたが、もう少しでのめつて前に倒れさうにした。それをかれはぐつと強く引寄せた。

『あ、危なかつた……』

かう言つて小萬は胸をなで下ろすやうにして笑つた。

『本當に大丈夫なの？』

『何が――？』

『危なくないの……』

『途中で、沼の主でも出て、舟が何うしても動かないなんて言ふことになると、面白いんだがな――』

『厭、厭、……そんなこと言つちや、厭ですよ。』

『大丈夫だよ。昔なら、沼にも、さうした不思議があつたかも知れないけれども、今ではそんなことはありやしないよ。平凡なもんだ……』

小萬はあたりを見廻して、

『でも、かうしてゐると好いわねえ。蘆や、眞菰で、何處からも見えないわねえ。全くの別天地ね。』

俄かにその傍から、羽音高く一羽の水鳥が飛び出した。

『それが菱屋の舟なの？』
『あゝ。』
『大變ねえ。此方まで寄せられるかしら？』
長い棹を拔いたり、動かし易い舟を遠くへ動かしたりして、それでも後には、その小舟を、一艘わたりさへすれば乘り移ることの出來る距離にまでかれは骨折つて持つて來た。
『此處なら、乘れるね。』
『え、乘れますとも……』
かれは船頭がするやうに、筵を舟の中央に敷いた。そしてその上に座蒲團を敷いた。
『好いの？　もう？』
面白さうに、莞爾しながら、小萬は隣の舟の中迄やつて來たが、それでも、まだ危なかしいといふやうな風をしてゐるのをかれは見て取つて、
『大丈夫だよ。ぴよんと飛べばわけはないよ。』
『でも……』
『ぢや、これにつかまる……』
かう言つて、かれは手を長く出した。小萬はそれに引寄せられるやうにして、辛うじて舟の中に乘移

少し前に櫂を借りに行くと、かう老爺は言つて立上つて出て來やうとした。それをかれは漸くに斷つて、筵と座蒲團と櫂とを持つて出て來た。

『漕げるの？　本當に？』

かう笑ひ懸けるやうにして小萬は言つた。

『それは漕げるさ。』

『漕いだことがあるの？』

『あるどころぢやない……。始終やつてるるんだもの……』

『さう――』

かう言つたが、かれ等は沼に向つて低く平に靡き下つて行つてるる路を縫ふやうにたどたどしく歩いて、やがて眞菰や蘭などの一面に繁つてるる中を、深く入り込んで來てるる船着のところへと行つた。しかし其處からは、蘆荻の深い繁茂に遮られて、沼の水光は見えなかつた。

船着場には、餘り綺麗でない、泥濘にところどころ塗れてるる、小さな五六艘の舟が、長い竿で繋がれたまゝ一杯にそこに並べられてあるのを小萬は目にした。かれは其處に行くと、櫂と筵とを先づ取敢ず手近にある船の上に置いたまゝ、舟から舟へと渡つて、一番遠くにある比較的新しい小舟へと乘移つた。

通らずには置かないやうな神秘な、象徴的な感じが、この曇つた朝のにび色の沼を前景にして起つて來た。

『さうだ。さうだ。この鈍色の古沼の中から……。さうだ。それに違ひない……。かの女はこの古い沼の底から生れ出た遠い遠い昔の戀の魂に違ひない。その戀の魂の再來に違ひない。』

かう思ふと、昨夜の闇の中のあの不可思議は、かの女があつたが爲にのみかれの前に展げられて來た不可思議のやうな氣がした。つゞいて、かれは昨夜のかの女の態度の中に、古い沼の匂ひを嗅得たやうにも、あの暗夜の白い姿、凄じい鳥の聲を發見し得たやうにも、または今朝のかの女の顏の中に、そのさびしい鈍色の沼の姿を見出したやうにも……。と、昔の城の廢址の中に咲いた深紫の花や、黑い腐つた水の中にピラピラと動いた靑い赤い小さな魚などもそれに何等かの連絡を保つてゐるやうに不思議にそこに浮び出して來た。

八十

もう一夜泊るといふのを强ひて促すやうにして、その日の午後の四時過に、かれは小萬と一緒に、蘆荻の深く靡き渡つてゐる船着場へと下りて行つた。

『俺ら漕いで行つてやんべいか。』

けだ。お前と僕のことだつてさうだ……。唯、何の謂はれもなしに、かうして此處で逢つて、再びかうした深い關係になるとは何うしても思はれない。何かわけがあるに相違ない……。しかし、今では、いくら考へても、その謂れはわからない。』

『矢張、私とは深くなつたり何かする譯がないつて言ふんですの？』

『いや、さうぢやない……。さう、わるく取つては困る……。』かう言つたがそのまゝ女の傍を離れるやうにして、『まアそんなことは、しかし、何うでも好い……。何うせ、お前にも、僕にもわからないことだ。』

二人は靜かに步いた。それは丘の上であつた。春は美しい赤い花の咲く丘の上であつた。またその若い戀人同士が互ひにその血を流し合つた丘の上であつた。二人は並んで步いてはゐたけれども、しかしもうさつきのやうに互ひに口を利かうとはしなかつた。女は丘の下の石のところに來て、さも疲れたやうにして腰を下したけれど、男はそこには休まずに、猶五六間沼に面した方に行つて、わざと獨り離れたやうに、獨り離れて考へなければならない大切な事があるやうに靜かにぢつと立盡した。

歡樂の後の疲れか、それともまたいかに一つの體を、心を合せやうとしても、竟に竟にそれを完全に合はせることの出來ないための失望か、それともまた凄じく早く眼のくるめくやうに回轉して行く運命の流れの外にひとり手に押流されねばならぬ苦しみか——恐らく誰れの心にも一度はひそかに掠めて

まざまの物凄い鳥の聲、その闇の世界だけがその世界であるかのやうに、底の底から深夜に浮び出して躍り廻つた不可思議な怪物の巢窟とは、沼は何としても思はれなかつた。いつも見馴れた岸には、唯、蘆荻のみがさびしく靡いた。

『丸で違ふね、沼が――？　昨夜霧の中に見た感じとは？』

かう思はずかれが言ふと、

『本當ですね、昨夜はこんな靜かな沼ぢやありませんでしたね。』

『矢張、晝と夜とでは、丸で世界が違ふんだね。夜には夜の世界があるんだね。晝の中は、小さくなつて、蘆や、藻や、泥深い底などにかくれてゐて、夜になると、幅で出て來るやうな鳥や何かゞ澤山にあるんだね。……不思議だね。矢張、我々には解らないんだね……』

『本當ですねえ……。何うしても、あの昨夜の沼と今朝とでは、同じものだとは思はれませんね……あの白い霧、本當に、霧だつたでせうか。何千年の昔の人達の魂がふわふわして浮び出して來てゐたのではないでせうか。それにあのいろ〳〵な鳥の啼聲の喧しかつたこと、晝よりも却つて賑やかな位でしたものね。』

『本當だ……』

かうかれは言つたが、すぐ言葉をついで、『何うもわからない……。何も彼も皆なわからないものだら

『何うしたんだえ？』

『何でも好いから。早く、早く……。マツチを持つてるんでせう。』

かれは言ふがまゝに、慌てゝ持つて來たマツチを袂から出して磨つた。しかし、沼から來る夜風に吹き消されて、三度までは灯は蠟燭に移らなかつた。

『何うしたんでせうね。』

かう言つてかの女はじれた。かの女は蠟燭に灯が移るまでは、沼から來るある恐ろしさの壓迫を遁れることが出來ないやうに見えた。蠟燭の灯に映つたかの女の顏もわるく蒼白く恐怖に戰へてゐるやうに見えた。

廊下の方へ二三歩やつて來た時、

『でも、大丈夫ね。私には貴方がついてるから。』

かう微かに小蔦は言つた。そしてそれと同時に、かれは溫かい女の手の強い把握をその左の手に感じた。

七十九

あくる朝見た沼は、唯わるく鈍色に曇り勝に見えてゐるばかりであつた。あゝした白い姿の動搖、さ

と、急に、かれは體中がぞくぞくするやうな氣がした。遠い過去から今日に至るまでの無數の亡びたもの〻姿がその沼の底から躍り上つて來るやうに感じられた。そしてその無數の白い姿は、そこから一つ一つ躍り上つて來て、かれ等のやうな歡樂の極みにあるのを靜かに其方へと伴れて行かうとするやうにも……。

『もう行かう？』

かうかれは促すやうに言つた。

『え〻。』

かうかの女も答へるには答へたが、それでもまだ何物にか心を奪はれたやうに、白い夜霧の中にかの女を引寄せる何ものかゞあるやうに、ぢつと見詰めたま〻、急にはそこから離れて此方に來やうとはしなかづた。

『何うしたえ？』

『…………？』

『何うかしたの？』

急に小萬はわれに返つたやうに、

『灯をつけて頂戴な……早く、早く。』

へと動いて來るのがそれとわかつた。

『あれは、何でもないよ。霧だよ。』

『霧？』—

かう小蔦は言つたが、猶ほ一種の恐怖から脱却することが出來ないやうに、『だつて、こんな闇の夜に、あんなに白くはつきりと霧が見えて？』

『それは見えるサ。それ見ておいで、霧だから……。夜霧が流れてゐるんだから……』かう言つて、かれは次第に沼の半面を蔽はうとして動いて來る白い霧を指した。

『さうかしら？』

かう言つて、小蔦はぢつと沼の方を見詰めた。また默つて了つた。

流石にかれにも恐ろしいやうな、不思議な世界からひそかに染み込んで來るやうなさびしさが理由なしに起つて來た。久しい昔から湛へられてあるこの古沼の持つた神秘が、あらゆる奇怪な、不思議なものをこの暗い夜の下に展げてゐるのではないかといふやうに思はれて來た。キ、キ、といふ夜の水鳥の聲が不意にあたりに響き渡つてきこえた。

それとなく、ぢつと何物にか引寄せられるやうにして沼を見てゐる小蔦の顔は、白くくつきりと夜の闇の空氣の中に際立つて見えた。

かう言つて、暫し代つてその蠟燭を手に取つた。かの女は長襦袢の袖で、夜風を遮るやうにした。

『鳴くわね、あの厭な鳥が――』

かれが厠から出て來た時、かの女はかう言つてその身をかれに寄せるやうにした。と同時に、夜風はサツと沼から來た。蠟燭の灯は忽ち吹き消されて了つた。『あ――』と言つて、思はず恐怖に抱合つた二人の姿は、茫とした微白い沼の闇を背景に暫しはそこに見えてゐた。

七十八

二人は相擁したまゝぢつとしてゐた。

暫らく經つた。ズホンの鳥は猶は頻りに鳴いた。更にその淋しい鳴聲に雜つて張詰めた絲を強く扱くやうな聲がした。かと思ふと、大きな翼てなければさうした音は起るまいと思はれるやうなバタバタした響が近くの岸から起つて、それが沼中一面に漲りわたるやうに聞えた。

『何でせう?　あれは?』

『あの音かえ?』

『いゝえ、あの白いもの……。そら、そこにふわふわしてゐるもの?』

成ほど見ると、沼の上に、闇を劃つて、白く茫としたものがかゝつてゐて、それが靜かに此方へ此方

て行く蠟燭に、マッチを磨つて火を點して、かれは先に立つた。

厠は廊下をずつと眞直に突當つて、それからちよつと左に折れたところにあつた。かれは自分の持つた蠟燭の灯が、戸の隙間から入つて來る夜風にチラチラと動いて、寢卷姿のかれと、派手な年に似合はない赤い模様の入つた縮緬の長襦袢に伊達卷をぐるぐる卷いたかの女の姿とを、長い暗い廊下の中に一ところくつきりと繪のやうに浮び上らせながら靜かに動いて行くのを、不思議な光景でもあるかのやうに眺めた。

『此處のはばかりは遠いわねえ。』

廊下を少し此方に來たところで、小萬はかう長襦袢の袖を合はせるやうにして言つた。

『寒い？』

『え、少し……』

かの女が厠に入つてゐる間、かれは蠟燭を手にしてそこに立つて待つてゐた。

かれは墨のやうな暗い夜の中にも、沼は何處となくぼんやりと微白く浮び上つてゐるやうなのを目にした。夜霧は薄くかゝつてゐるらしく、岸近い蘆荻の中あたりで、頻りにその物凄いズホンの鳥の鳴く聲がした。やがて厠から出て來たかの女は、

『貴方も入るの？』

『此頃はもう滅多に鳴かないやうに聞いてゐたがな……』

かうかれが言ふと、

『これまでにも毎晩鳴いたの？』

『鳴いたには鳴いたけれど、今夜のやうに多くはなかつたね。』

『………』

何か言はうとして言はずに、かの女は凝と空間を見詰めるやうにした。一種理由のない恐怖が――この古い淺茅沼の底の底の不可思議から暗夜に乘じて湧き上つて來たやうな恐怖が、ゆくりなくかの女を襲つて來たのであつた。

『私、困つちやつた……。はばかりに行つて來たいのだけれど、何だか怖くつて……』

『ぢや、一緒に行かう。』

『貴方、怖くない？』

『大丈夫だよ……。そんなに氣味をわるがらないでも――』

『でも、よくこんなところに、貴方は一人でゐて、さびしくなかつたわねえ。』

さう言はれて見れば、成ほど性慾の幻想がかれの伴侶であつたために、さうしたさびしさにも、恐ろしさにもこれまで襲はれずにやつて來たことがかれにもそれとわかつた。かれはいつも厠に行く時に携へ

びしくあたりに響き渡つてきこえた。

七十七

『何ていふ鳥？　あの變な聲をして鳴くのは？』

矢張その淋しい聲に耳を留めたといふやうにして小萬は訊いた。

『さうさな、昔、僕等の子供の時分にズホンの鳥と言つてゐたのが、矢張あれなんだらうと思ふんだがね。』

かう言つてかれはその鳥の話をした。嘴を水の中に入れて鳴くために、あのやうに陰にわるく籠つた聲を立てるといふ話をした時には、小萬は、不思議さうに、また何となくさびしく悲しいといふやうに、眼を丸くしてその鳥の聲に耳を欹てた。

『大きな鳥ぢやないんでせうね？』

『小さい、むぐり見たいな鳥だらうと思ふがな。』

『いやに、心さむしくなるやうな聲ね。』

さもさも氣に懸るやうに、何かかわるい前兆でもあるやうに、かの女は頻りにその聲を趁ふやうにして聞いた。

『本當？　本當なら嬉しい。』
物の音が微かにした。
『本當？』
暫くしてから心許なささうにかの女はまた繰返した。
『大丈夫だよ。』
（また、いつもの好加減ぢやない？）かういふ顔の表情を小萬はして見せたが、『いつそ、此處から東京に行つてしまふと好いんだけども……』
『そんな無理なことは出來ないよ。まア、もう少し樣子を見るに越したことはないよ。その中には、ひとり手に、無理をせずに、ちやんと道が開けて來るに相違ないから――』
『さうかしら？』
性慾の世界から浮び出して來ては、かれ等はをりをりこんな話をした。靜かな微かな聲が絕えたり續いたりした。
『さうね……その方が好いわねえ。明日は歸つて、そして、またこつそりやつて來る……。知れさへしなければ大丈夫ですからね。』女が胸を男に寄せる氣勢が靜かにした。
戶外は暗かつた。沼の方では、昔、かれが幼い頃に聞いたズホンの鳥のやうな聲が、ボウ、ボウとさ

かう何處かでいふ聲がした。

しかし、その禁斷の果實の誘惑は、死と雖もそれを思ひ留まらせることの出來るやうなものではなかつた。（死？　結構！）それに面しては、誰もさう叫ばずにはゐられなかつた。

『それは本當なのよ。これが知れたらどんな目に逢はせられるかも知れないんですよ。……始終、短刀を持つてゐるやうな人なんですから……。それも、私もわるかつたんですの。こんな風にまで、あの人を引張るつもりはなかつたんだけども、普通の旦那以上には引張る氣はなかつたんですけども……。あの人が落目になつて了つたもんだから……。言はゞ私のために、女房や子供までも難儀を見るといふ形になつて了つたもんだから。それで今のやうなハメになつて了つたんです！……。本當に困つて了ふんです。』かうした小萬の物語が、不思議な性慾界の色彩の中に際立つて聞かれた。

否、かうした魂を脅かすやうな事件がその間に挾つてゐるために、かれ等の歡樂が一層複雜した影を帶びて來たのは、爭はれない事實であつた。かれは言つた。

『だつて、爲方がないぢやないか。』

『それが心配ですの。何うせ、やぶれかぶれのつもりで、今日は出て來たんですけども、その時は、何うして下さるの？　私をさういふ中から救ひ出して下さるの？』

『それは當り前さ……。何うせ、乘りかゝつた舟だもの。』

の歡樂を思ふさま樂しむ方が好い。』かうかの女は言つてゐるやうに見えた。

七十六

かれ等が其處に過した一夜は、この世にかうしたことがあるかと思はれるやうな性慾の世界であつた。かれが四五日間、その塵埃の匂ひの中にゐて、黄い壁に面して、思ふさま奔放に、また自由に、畸形的に空想に描いた性慾の幻象は、皆そこにあらはれて來た。黑い筋の一筋毎に見えるやうに、かの女の髮の中に指を挿んで見たり、長く美しく空間に描かれた鬢をあくがれ心に深く眺め入つて見たり、または或るシインを色濃くするために、これまで試みたことのない惑溺の狀態をあたりに描いて見せたりした。あらゆるものが皆なかれの心から去つて、その不思議な世界のみが代つてそのあとを領するやうになつた。

禁斷の果實——深く性慾の底の底に沈んで、容易に人の知ることの出來ない、またはその底の底からそれを搜し出すためには、その身の生命をも危くするやうなこともあるかも知れないやうな禁斷の果實、その果實をさへかれはその暗い深い淵から搜し出して來たやうな氣がした。かれはそれを搜し出した。

さてそれを食はうとした。と、

『それを食つた報酬は死だ。好いか、それでも好いか？』

『矢張、何うしたッて、あの人の世話にならないわけには行かないんだらう？』

『だつて、あの人だつて、もう沒落ですもの……。沒落がもうすぐ眼の前に見えてゐるんですもの……』

『ぢや、何うするんだえ？』

『貴方にくつついて行くより他、しやうがないわ。』

かう言つた小萬の顏には、わるく妖艶な、魂をも體をもすつかり男に任せて了つたやうな表情が上つた。

『駄目だよ、そんなことは――』

かれはかう言つて笑つた。この言葉――これまでにもこの言葉は何遍となくかれの口に上つた。また何遍となく女はこの言葉に向つて泣いたり激したりして來た。しかし、今は小萬は以前のやうに、その薄情を責めるでもなければ、その不眞面目を指摘するでもなかつた。否でも應でもその魂と體をかれに寄せ懸けずには置かないやうに見えた。またさうした未來のことなどは何うでも好い、身の行末の振方などは何うでも好い、それよりかうして現在さへ完全に男に身を寄せてゐさへすればそれで好い、滿足だといふやうに見えた。刹那より他、人間には何もない。完成したといふものは何もない……（ぐづぐづ言つて、小さな不滿を男に感じてゐるよりも、それよりも寧ろ全心を男に捧げて、そこから起る刹那

に種々なことを思ひ出したやうに、

『でも、今日のやうなことは始めてね。』

『さうだね。』

『いつだッて、種々なことがあつたり、邪魔が入つたりして、心から二人きりになつたと思つたことはないんですものね……』

『それはさうだね。』

かれ等の心には、十年前のことなどがそれとなく思ひ出されて來てゐた。實際、かれ等には、かうして二人きりになつたといふやうな、世離れた境に身を置いたことはつひぞこれまでにはないのであつた。よしまた偶には二人きりになるやうなことがあつたにしても、それは喧しい世間の中のほんの一時であつたり、またはつとめてさうした機會を不可能の中に求めたりした場合のみで、かう絶對に、靜かなさびしい自然の中に、その二つの體と心とを浮ばせて置いて見たことはなかつた。

かれ等は、唯眼を見合はせただけで、ひとり手に互ひに體が引寄せられて行くやうな氣がした。

『それで、一體、何うする氣なんだえ？』

やがてかうかれは訊いて見た。

『何うするつて？』

かうかの女は言つて、『泊るんけえ。さうけえ、お前の旦那さんけえ？　あの人は？　なんて言つて笑つてゐたわ。あの爺さん、あれで、却々譯知りなんだからね。』

『それから、何うした？　賴んで來たかえ？』

『え、賴んで來たわ……。そんなことは大丈夫だッて言つてゐたわ。此處にゐりや、ちよつくら、人にはわかるもんぢやねえなんて言つてゐたわ。』

『でも、お前の方は何うなんだね。あとで困りやしないかね？』

『困つたつて好いのよ……』かう言つて、かれの顏を見て笑つて、

『もう、そんな話をするのは、止しませうよ。』

『でも……』

『でも、何うしたの？』

『……………』

『氣に懸るの？』

『それは、いくらか氣に懸るよ。何だか内所でわるいことでもしてゐるやうな氣がしてゐるね。』

『さう――？』

男の魂を蕩かさずには置かないやうな笑ひ方をして、燃えるやうな身をかれの側に寄せて來たが、急

た。

『大丈夫だよ、もう、そんなことは心配しないから……』

『さう、嬉しい……。何うなつたつて、好いぢやありませんか。かうしてゐる中に、世の中がひつくり返つたツて何だつて構はないぢやありませんか。』

『さうだとも……。』

『私なんか、もう何うなつたつて構ひやしない。生命なんか、もうとうに投出して了つてゐるんだから。』

かう心から突詰めたものゝやうにして小萬は言つた。そして心の苦痛や恐怖や懊惱も、その情熱に縋ることに由つてのみ、纔かに慰め且忘れることが出來るやうに見えた。

七十五

小萬は老爺のゐるところから此方へと戻つて來た。

『何うしたね？』

かれがかう笑ひを顔に湛へながら訊くと、

『何でもないわ。』

『大丈夫かね？　本當に？』

かう氣に懸ると言ふやうな表情をしてかれが言ふと、

『大丈夫ですとも……。一體、貴方は氣が小さいわねえっ』

（色事でもしやうとするものが、そんなに臆病ではしやうがないぢやありませんか。恐ろしいことがあればあるほど、危險な事情があればあるほど、却てその色事は面白くなるんぢやありませんか。）さうはつきり口に出しては言はないまでも、さうした表情を小萬はその顏にありありと見せた。小萬は全くその體をも、その魂をも何も彼もすつかりかれに寄せて來たやうに見えた。小萬に取つてかれは全く生命の偶像になつたやうに見えた。

『男だから、貴方には、それはわからないかも知れないけれど、この四五日といふもの、何んなに私が焦々したか、何んなに私が悲しんだか、何んなに私が腹立しく思つたか、または思ひもしない男に思はれて、思ふ男に捨てられたことを悲しく思つたか知れないんですもの――。もし、これで何うしても、貴方の行方がわからないとなつたら、何うしやうかと思ひましたもの。自分で自分の體を滅茶滅茶に引さいて了つても、それでも足りないやうな氣がしましたもの。』かうした烈しい情熱が火の雨のやうにかれの上に注がれて來ては、かれとて、ひとり手に其方へ引き寄せられずにはゐられなかつた。そのかれも次第にひとつになつて燃えるやうになつ同じ情熱の火に誘はれて行かずには居られなかつた。

に、その手の届くところに、その塵埃の匂ひの微かに殘つてゐる中に、いかやうにもその髮を、眉を、唇を自由にすることが出來る身となつたから……。またいかやうにも思ふまゝに、その髮の房々した中にかれの魂を入れて樂しむことが出來たから……。

『好いのかえ、本當に泊つて行くのかえ？』

かうかれが訊くと、

『好くつても、わるくつても、今日は泊つて行くんですよ。大丈夫ですよ。まさか、此處に來てゐるとは思つてゐやしませんから……』

『でも、捜してはゐるだらうね？』

『それは捜してはゐるでせうけども……。大抵は東京に行つたと思つてゐるから大丈夫ですよ。』

『さつきの車夫が言ひやしないか？』

『だから、私は家から乘つて來やしませんもの……。町の外れから知らない車夫の車に乘つて來たんですもの。』

『此處の爺さんは……？』

『あの爺さんは、心配はないわ。何でもよくわかる爺さんだから……。少し、小遣でもやれば、見ても見ない振りをしてゐますから。』

かう言つて小萬は笑つた。かれは體がそのまゝ無條件にその笑ひの方に引寄せられて行くやうなのを感じた。不健全であればあるほど、不自然であればあるほど、恐怖が伴つてゐればゐるほど、戀には益々ある色彩が添へられて行くものであるが――平凡な一人と一人の戀以上に、或は激動、或は執着、或は爭鬪、或は勝敗を伴つて來るものであるが、また、時には、さうした不自然な色彩と氣分とが伴ふために、ともすれば、死の暗い影もひとり手に引寄せられて來るやうな形になつて行くものであるが、かれも小萬も、さうした細かい止み難い動搖を此時ひたと總身に覺えた。(だつて爲方がない。たとへ死んだつて爲方がない。)口にこそ出して言はなかつたけれど、さうした氣分がかれ等の情熱に燃えた眼の中を輝かしく掠めて通つて行つた。それと共に、塵埃の日に照る匂ひが頻にかれ等の戀の周圍を取卷いた。

七十四

その黄い壁で取卷かれた一室は、今はさうした人に知られない不健全な、不自然な、畸形な性慾の幻想の實際に行はれる處となつた。

かれの孤獨を彩どつたさまざまの幻想は、今は單なる幻想ではなくなつた。獨りでさびしく思ひ耽つたり打消したりしてゐる幻想ではなくなつた。かれは空間に、または壁に、または柔かい物體の上に、徒らにその髪を、その眉を、その唇を、その美しい肌を描いて見なくとも好くなつた。何故なら、そこ

暫くしてから、かれは訊いた。

『別に――』

『でも、家の方も心配だと見えるね？』

『そんなことはありませんよ。』

『でも、ちやんと、お前の顔に書いてあるもの……』

『さう。』

かう言つたが、『本當を言へば、今日來るんでも、散々喧嘩をして來たんですもの。』

『厄介だな。』

『本當に厄介よ。丸で、此頃では、私の體の番人見たいにしてゐるんですもの……。だから、かうして貴方と一緒にゐることなどが知れやうものなら、それこそ何んな事をされるか知れやしませんよ。』

『それで、一體、僕は何處にゐると思つてゐるんだね？』

『東京に歸つたと思つてゐるかも知れませんね。此間、四五日、貴方の行方がわからなかつたから……だから、さつき來る時も、貴方のあとを追つて、私が東京にでも行くと思つたらしいのですよ。』

『ぢや、まア、此處なら、當分はわからないね。』

『え、此處なら、大丈夫ですとも……』

ぐづぐづしてゐるのを無理に伴れて行つた男の顏もちやんと覺えてゐるんですからね。』
『何んな男だつたえ？』
『色の白い、やさしさうな男でしたよ。そんなひどいことをするなどとは、夢にも思へないやうな人でしたよ。』
『すつかり思ひ詰めたんだね。』
『だから、男つていふものは怖いと思ひますよ。』
と、かれはいくらか笑ふやうにして、
『お前なぞでもさう思ふかね。これまで火と水の中を巧みに散々通つて來たお前ぢやないか。そんなことは思ひさうもないもんだがな……。矢張、思ふかね？』
『それは思ひますね。矢張。』
『昔と比べると、段々、氣が折れて弱くなつて來たんだね？』
『さうかも知れませんね。』
小萬はふと何か思ひ出したやうに、其方のことが全く心配になるといふやうに、ぼんやりして凝と暫しは空間を見詰めた。
『何うかしたかえ？』

氣に入らないことはないらしかつた。

七十三

『花の時分には、お前も始終此處に來るんだね？』

『え。』

『その時は忙しいだらうね？』

『忙しいには忙しいけれども、さう長い間ではありませんからね。花が來たと思ふとすぐもう青葉になつて了ひますからね。』

『さう言へば、去年、此所で藝者が殺されたツて言ふぢやないか。』

かうその話を持出した時には、小萬は再びその當時の慘劇を思ひ出すに忍びないといふやうにして顏を兩手で俺つた。

『ぢや、見てゐたのかえ？　お前も……？』

『えゝ、えゝ、すぐそこにゐたんですもの……』溜息をついて、『あゝ思ひ出しただけでも變な氣がする。つい、その少し前まで、政子さん、鬼ごつこなどして、そこに遊んでゐたんですからね。私、ちやんとその男が政子さんを呼び出しに來た時のことを知つてゐるんですからね。政子さんが、行かずに

小萬は急に思ひ附いたといふやうにして、『あの風雨の時、こんなあばらやに貴方は一人でゐたの？』

『それはさうさ。』

『凄かつたでせうね。』

『餘り好い心持はしなかつたね。』

『よくゐられたわねえ。本當に一人で……』

『そのかはり、終夜お前のことを考へてゐたんだよ。』

かう笑ひながら、かれが言ふと、

『旨いわねえ、矢張、貴方は？』

此一語で、其間のある距離が急に取除かれたといふやうにして、二人は互にひたと身を寄せた。

薄暗い廊下を通り過ぎて、かれの起臥する一室に入つて行つた時には、小萬は思はずかう聲を立てた。

『まア、こんなところにゐたの？　貴方は――？　此處は花時分の藝者部屋ぢやありませんか。』

『さうだつてね……』

『貴方も隨分物好きね。こんな室が好いの？　貴方に？　え、氣に入つたの？』

『そのかはり、全く別天地だよ。』

『それはさうね。別天地ね……。此處なら、隱れてゐても滅多に人にわからないわね。』滿更小萬にも

『え、え、知つてゐますとも……。あれで、あの爺さん中々面白いんですよ。酸いも甘いも若い時にすつかり嘗めて來たやうな爺さんですからね、あれで……』

『さうかね。それでわかつた。……何うも田舍の爺にしてはちよつと氣が利きすぎると思つた。』

『そしてあの爺さんが、御飯も炊いて呉れるの？』

『さうだよ。飯と汁とは持つて來て呉れるんだよ。』

『さうなの……それは大變ね。』

かう言つたが、その時には、かれ等は既に裏口の戸の二枚ほど障子になつてゐるところへと來てゐた。小萬はそのまゝ上にあがらうとしたが、いかにしても塵埃だらけの上に、新しい足袋なので、

『待つて、待つて！』

かう言つて、かれは向うに行つて、竹の子草履を一足さがして來て、それを小萬の前に並べた。

『隨分ひどくなつてゐるのねえ。』

かう言ひながら、かれのあとについて長い廊下をずうと奧の方へと入つて行つたが、一ところ、戸の全く外れてゐるのに目を留めて、『何うしたの？　これ？』

『昨夜やられたんだよ。』

『まア。』

『何うだえ？　船は？』

かうかれが訊くと、

『ヤア、餘程、昨夜の風雨はひどかつたと見えてな、途方もねえところに舟は流されて行つたゞよ。見付けるにも容易なことぢやなかつた。』

『遠いところかね？』

『なアに、そんな遠い處ぢやねえけどもな……。蘆や眞菰の蔭の方になつてゐたでな……。船頭等、まださがしてゐるがな。遠い向うの方まで流された舟もあるでな。』

『ひどい暴風雨だつたからね。』

かう傍から小萬は言つた。

『使へることはそれでも使へるかね？』

『舟けえ？』かう言つて、老爺はかれの方を見て、『使へるには使へるが、ひどくなつてゐたつけ――、水で一杯になつてゐる奴を、やつと浮かして漕いで來たが、あとでもう少しよく洗はねえぢや、町へは行けねえ。』

やがてかれ等は老爺にわかれて此方に來たが、

『知つてゐるんだね、あの爺さん？』

いつかかれ等は、丘の裾をめぐつて、次第に沼の見えるあたりへと近寄つて來た。やがては丘の中に入つて行く門も見え出して來た。

『まア、ねえ、平常はこんなに荒れて了つてるるのねえ。』

花の時以外にやつて來たことのない小萬には、あたりの荒廢してるるさまや、草が人肩をも沒するばかりに繁つてるるさまが不思議のやうに思はれた。『丸で、別なところのやうね。此處等には、春は一杯店が並んで、それは、賑やかなんですがねえ。』こんなことを言ひながら、小萬はかれと並んで丘の方へと入つて行つた。

七十二

最初に二人して覗いて見た時は、老爺の姿はまだ其處に見えてるなかつたけれど、そこから出て、裏の井戸のあるところからかれのるる室の方に來ようとすると、沼の船着の方から櫂をかついで老爺のあがつて來るのにばつたり邂逅した。

初めは、かねて見知越しの小萬の姿を、怪訝なやうな顔をして老爺は見てるたが、馴々しく小萬の方から言葉をかけたり何かするので、やがてそれと飲み込んで了つたらしく、次第にいつもの通りの話を何彼と持出すやうになつた。

『厄介だな……』

『…………』

また默つて了つた。暫く經つてから、

『それにしても、よくわかつたね。此處にゐるといふことが――』

かうかれは急に話頭を改へて行つた。

『わからなかつたんですよ……。あそこの上さんは笑つてばかりゐて、話して呉れないし、貴方は三日も四日も顏を見せて下さらないし、本當に何うなすつたかと思つてゐたんですよ。それをね、昨日、あの暴風雨になり懸りの時分、菱屋からお座敷がかゝつて來たので、行つたのですよ……。と、あそこの上さんが誰か男の人と此處の山の家の話をしてゐる。そして、何でも、その人は東京のえらい人だとか何とか言つて話してゐる。それをちよつと小耳に挾んだんですの……。それからお座敷をすませて來てから、その話をすると、その山の家に一人ぽつねんとしてゐるといふのがてつきり貴方ぢやありませんか。私は何んなに喜んだか知れやしない。昨日も、あの暴風雨の中を無理にもやつて來ようと思つたんですもの……。だけど車が曳けさうにもないつて言ひますからね――』

『ぢや、菱屋の上さんは、私達の事をよく知つてゐるんだね？』

『いゝえ、知りやしませんよ。私は何にもそんな話なんかしませんもの。』

ちでせう。……でも、爲方がなかつたんだもの……。何うすることも出來なかつたんだもの。』
『いゝよ、いゝよ、そんなこと。』
かうかれはそれを押へるやうにして早口に言つた。
また暫しの間、かれ等は默つて歩いた。かれも一種の滿足を覺えた。それは他でもなかつた。結局この女は自分のものである！　といふ心から起つて來た滿足であつた。
『何うしたえ？　それで？』
かうかれは訊いて見た。
『何が――？』
『何がツて……旦那の方さ――』
『矢張同じことよ。』
『それはさうだけど……。家の方のことは――？』
『矢張、駄目らしいわね。すつかりいけなくなつて了つたらしいわね。だから、此頃は、此方にばかり來てゐて、家の方へ歸つて行くやうなことはなくなつて了つたんですもの。』
『ぢや、始終ゐるんだね？　此方に？』
『えゝ。』

七十一

かれ等は默つて歩いた。

林を洩れて來た日影は、二人の心の中までもさし透つて來るかと思はれるほど、それほどあたりの空氣が澄んですき透つて、そして靜かであつた。一時パッと燃え出して來た小萬の瞋恚も、男に逢つた喜びに再び靜かに戻つて行くやうに見えた。

『この間から一度歸らうとは思つてゐたんだけれどね……。現に、昨日もあの暴風雨でなければ歸る筈だつたんだけれど……』

かうかれが言ひ懸けると、小萬は、

『もう、私は貴方は何處かへ身を隱して了つたのかと思つてゐました。私があんまり煩いので、何處かへ行つて了つたと思ひました。だツて、あそこの上さんにいくら言つたツて、話しては呉れないし、明日は歸つて來る、歸つて來ると言ひながら歸つて來ないし、もう、私はすつかり捨てられたのだと思つてゐました。……何うして、貴方はこんなところに來たんですの?』

『少し爲事をしたいと思つたもんだから――』

『いゝえ、さうぢやないでせう。私がわるかつたからでせう。十年前のやうなことをまた私がしたか

ことは、かの女に取つても、何れほど思ひ懸けない喜びであつたか知れなかつた。

かの女は急には何を言つて好いかわからないやうに見えた。ぼんやりと唯かれを見詰めた。顏を見たら、あらゆる恨みを言つてやらなければ承知が出來ないと思つたことも、急にかの女から離れて行つた。で、かれ等は何も言はずに、唯、默つて、互ひに顏を見合せたまゝ暫し立つてゐたが、やがて小萬は思ひついたやうに、小さな紙入を帶の間から出して、

『車屋さん、御苦勞さま……。もう歸つて吳れて好いのよ。』

かう言つて大きな銀貨を出してその手に渡した。半老いた車夫は丁寧に禮を言つた。

車をあとに殘して、五歩六歩此方に來た時、かれはいきなり、

『迎へに、車に來て貰はなくつても好いのかえ？　昨日の暴風雨で、船はすつかり流されて了つて無いよ。』

『好いのよ。泊つて行くのよ。』

薄情な言ひ方だと言はぬばかりの眼付をして、わざと投げつけるやうな調子で小萬は言つた。

『好いのかえ？　そんな眞似をして？』

『死んだつて、殺されたツて、何だつて好いのよ、もう私は……』

深い暗い淵のやうな眼をして、小萬は凝とかれを睨めた。

一刻もぢつとして落付いてゐられず、今朝も旦那と大喧嘩をしながらも、あらゆる犧牲を拂つても差支ないとまで思つて、無茶苦茶に家を飛び出して來たかの女であるといふことは容易にわからなかつた。しかしそれを明かにすべく、車は次第に近寄つて來た。

十間ほど前に來たと思つた時、それと氣がついたらしい車上のかの女は、

『ま。』

と言つて、そして車夫にそのまゝ梶棒を下に下させた。

その時には、路上に立つてゐたかれにも、その光景の何であるかは既に十分にわかつたらしく、われ知らず急いで二三歩前に進んだ。

『やつて來たのかえ――』

最初にかう言つたのは、かれであつた。かれは全く思ひ懸けなかつたことと、また滿更思ひがけないこともなかつたことゝが、突然一緒にその前に現はれて來たのを覺えた。いくらかかれは眩惑を感じた。

しかし感情の漲溢は、小蔦の側に於て、かれよりも殊に一層急で且つ迅かつた。さうとは聞いたものの、果してその丘の上の二階にかれはゐるか、何うか。そこにゐると見せかけて、既に遠く何處かに姿を隱して了つたのではないか。既に全く生命の戀の綱を失つて了つてゐるのではないか。かう思つて危みながらやつて來たかの女が、まだその幽棲にも行かない前に、突然かれの姿を路傍に見出したといふ

そこから起る音は、さはやかに晴れた秋の空に響いて聞えた。」

七十

丘からその裾にかけて、明るい美しい秋の日影が照り輝いた。

その丘の裾をぐるぐる廻るやうにして出て來た車は、次第にその形を、饅頭笠を被つた車夫を、そこに乘つてゐる女の姿を、黑色に白い刺繡をした派手なパラソルを、澄んだ透明な午後の空氣の中に際立つやうにして見せた。かれは初めは別に何とも思はなかつた。その車上の女のいかなる人であるか、町の人であるか、田舍の上さんであるか、それともまた村の娘であるかを注意して見ようとも思はなかつた。しかし、次第に、その車はそのあたりの靜かな空氣に響きわたる音と共にかれの方へと近寄つて來た。

今はそれをはつきりとその眼に映さずには置かれないほどそれほど、その車は近寄つて來た。

何の氣なしに其方を眺めてゐたかれの眼は、やがて急に、慌たゞしくその車上の女の姿に注がれるやうになつた。

しかしその翳したパラソルのために、女の姿は容易にはつきりとはかれには認められなかつた。素人ではないと言ふだけはわかつても、それが戀にあこがれた小萬であり、かれの所在をそれと知つてから、

はもう一度老爺の室を覗いて見たけれども、しかもその姿はまだそこに見えてゐなかつた。

いつそ自分の室に歸らうか。そして一枚でも二枚でも進まぬ筆を動かして見ようか。かう思つて見たが、何うしても氣が進まないので、そのまゝ再び歩を移して、今度は沼とは反對の、丘と水田と林と交錯した方へと歩いて行つた。

かれの眼の前には、さう大して深くない楢の林があつた。そしてそれに添つた路は、一方水田一方草藪の間を丘の裾の方へと續いて行つてゐたが、明るい午後の日影が林の中を洩れて來てゐるので、それがチラチラと明るくその樹の影や草の影をあたりに搖かした。

かれはその林に添つた路を靜かに一町ほど歩いて行つた。

ふと、かれの耳には、ある微かな音響がきこえて來た。それは、始めは唯單なる音といふだけで、何の音であるか、野に耕す農夫の物を運ぶ荷車の音であるか、それとも亦丘のかげの街道に遠く續つて行く荷馬車の響きであるか、それとも亦野の流れの處々にかけてある小さな水車の響きであるか、ちよつとかれにはわからなかつたが、林に添つた路を、丘に添つてぐるつと廻ると、その音は次第に近く、やがてそれは車の走つてゐる音であるといふことがかれにもわかつて來た。かれは立留つて、その音の聞えて來る方を凝と眺めた。

それは丘のかげの路を此方へ此方へとやつて來るらしく、その車の形はまだ見えなかつたけれども、一

じ――自分のこれまで通つて來たさまざまの人生の徑路が取りあつめて考へられて來るやうなことがあるものだが、かれの頭にも、今しも急にさうした感じが染々と身に迫るやうに簇つて集つて來るのを覺えた。かれはその身が廣いさびしい宇宙の上にぽつかり一人置かれてあるやうな氣がした。また、かれのこれまで經て來たライフの線が、種々さまざまの他の線に雜りながら、しかも遂にその紛糾した他の線の中に雜ることが出來ずに、矢張孤獨で、元の一本のまゝで、此處までやつて來たやうな氣がした。また、今になつてかうしてこの故鄕の昔の廢墟の中に半ば埋れたやうになつてゐるのも、さういふ風に廢墟の中に埋められながら、未だに昔の戀の羈絆を斷つことが出來ず、かうしてかの女に向つて靡いて行つてゐるのも、皆な人に知られない、ミスチックなある深い理由があつて、そして自然にかうなつて來てゐるのに相違ないやうな氣がした。(この身の終るべき時が既に近く詰め寄せて來てゐるのではないか。そのさびしく孤獨な人生の中に引張つて來られたかれ自身の線が、近い將來に於て、ボツキリ斷れて了ふのではないか。)

かう思ふと、今まですぎて來た過去も、その前に無限にひろがつてゐる將來も、すつかり『時』の流れと言つたやうなものゝ中に無造作に雜つて行つて了ふやうな心持がして、言ふに言はれないさびしさが急にかれを襲つた。かれは凝と暗い碧色をした沼を眺めた。

暫く經つた後には、かれはもうその丘の上にはゐなかつた。かれは二階屋の方へと戻つて來た。かれ

かう老爺に向つて言ふともなく言つた。

『お前さん、行くんけえ？』

『舟がありや、すぐ行くつもりだつたんだけれど……』

『さうけえ。』

かう言つたが、『なアに、ぢき、そこらにあるにやあんべいよ、舟は――。何しろ、えらい荒れだつたでな。』

六十九

その流された舟を捜しに出かけて行つた老爺は、午になつても容易に歸つて來なかつた。かれは餘程歩いて、沼をぐるりと廻つて、町の方へ行つて見ようかとも思つて見た。しかし道程もかなりにある上に、何もそんなに慌てゝ此方から出かけて行かなくとも好いやうに思はれたので、そのまゝぐづ〳〵と丘の上にまた出て行つて見たり、畠の方へ行つて見たりして半日を暮した。空は昨日とはかうも違ふかと思はれるほど靜かに美しく晴れて、沼を越し、杜を越した彼方には、淡い紫色に染つてゐる皺の多い山巒の起伏がさながら手に取るやうに鮮かに眺められた。

かれは丘の上に立つて、長い間凝としてあたりを眺めた。ある時、ある場合には、誰にもさうした感

『あ、起きたがね。さつき、ちよつと行つて見たが、まだよく寢てゐたで、起さずに來ただ……。昨夜の荒れぢや、碌に眠れなかつたんだんべと思つて。』

『ひどかつたよ、本當に……』

『ちつとも氣が附かなかつたが、舟が大分流されただ。家の舟も、何處へ行つたか、流されてありやしねえ。』

『ふむ、それは困つたな。』

かれも老爺と共にすぐその下の小さな船着へと下りて行つて見た。そこにもかれは凄じい混雜と擾亂とを發見した。蘆荻や藻が一面に亂れ伏して、その元の船着の位置がちよつとはわからないほどに荒されてゐた。

『餘程あつたのかね？　此處に、舟が？』

『十隻位あつたんべ。』

『一體、何處へ流されて行つたんだらう？』

『なアに、そこにあるにはあるんだがな……。さがせや、ぢきわかるだがな。』

こんなことを言つて、平氣で老爺はそこに立盡した。

『ぢや、今日は町へは行かれないな？』

行つた。

少し行くと、戸が一枚外れて、雨がそこから自由に降り込んだらしく、青い木の葉や木の小枝などが一面にそこらに散らばつてゐるのをかれは見た。

（はゝア、昨夜、何處かで雨が降込むやうな音がしたと思つたが、はゝア、此處だな。）

こんなことを腹の中で思ひながら、かれは猶廊下を傳つて行くと、そこゝに戸が外れてゐたり、樋が落ちてゐたり、雨が夥しく洩つてゐたりしてゐて、昨夜の風雨が一通りの烈しさではなかつたのがそれと知れた。

開爐裡の隅に、汁鍋が下してあつたり、飯が炊いて釜がまだ洗はずに置いてあつたりしたが、しかもいつものところには老爺の姿は見えなかつた。かれはそのまゝ外に出て行つた。井戸端にも、家の後にも、何處にも老爺の姿は見出されなかつた。

（何處へ行つたらう？）

かう思つて、丘の方へのぼつて行くと、そこにひよつくり老爺が立つて沼の方を見てゐるのを發見した。

『ひどい風雨だつたね。』

かうかれが聲をかけると、

戸外では、風雨が益々凄じくなつて行つた。

六十八

夜一夜凄じく荒れた風雨は、曉近くいくらか晴れ氣味になつて、二階の角の壞れた樋から落ちる瀧津瀨のやうな音も漸く耳に遠くなつて行つたが、その頃になつてから、かれはうと〳〵と眠に落ちて行つた。

再び眼が覺めた時には、黃い壁にかけて置いたかれの小さな時計が、旣に十時のところを指してゐるのをかれは目にした。つゞいて氣が附いたのは、午前の日影の光線が明るく廊下からさし込んで來てゐることであつた。樹の梢にはまだ風がいくらか殘つて吹いてゐるらしかつたけれども、あらしはすつかり過ぎ去つて了つたらしく、立つて前の戸を明けると、碧い美しい空が靡き伏した丘の上に、さながら盡でもしたかのやうに濶く高く展げられてあるのをかれは見た。庭にも畠にも木の葉は一面に亂れ散つて、さうでなくつてさへ淋しく咲いてゐたダリヤは、全く地に委して了つてゐた。

かれは昨夜の性慾の幻想を思ひ出して、獨居が人間を病的にすることなどを繰返したが、何は措いても、風雨の晴れたといふことが――晴れさへすれば今日にでも沼を渡つて行つて見ることが出來るといふことが、いくらかかれの心を明るくした。かれはそのまゝ廊下を通つて、老爺の居る方へと出懸けて

かれは此處に來てから、此世離れた幽棲に來てから、何んなに度々さうした性慾の幻想に見舞はれたか知れなかつたことをくり返した。かれは歡樂の中でも、殊にその頂點と思はれるやうな歡樂を病的に想像したことを思ひ出した。また廢屋の中の埃塵の匂ひの中に味はるべき歡樂のいかに頽敗してゐるかといふこと、またその頽敗の氣分のいかに世に稀れなる快樂を有してゐるかといふことを空想したことを思ひ出した。

（そのために、そのためにのみ、自分はあの小萬に離れることが出來ないのではないか。その頽敗の性慾――場合に由つては、この身をも、此生命をも、惜くはないと思はれるやうなその頽敗の性慾。）

かう思ふと、それにつゞいて、此風雨の夜、此バラバラと雨の凄じく戶に打ちつける夜、その夜を相互にその顏を見合せてゐる二人の中の一人が、かれ自身でなくて、嫉妬深いかの男であることを想像した時には、かれは體が辛く辛くなつて來るのを感じた。かれはつとめてそれを歡樂の幻想の方に持つて行かうとしたけれども、しかも容易にさうして心の狀態から離れて來ることは出來なかつた。

しかし次第に、かれはその辛さに酬ゆる手段を想像し始めた。皮肉な皮肉な心持なども起つて來た。

（さうだ、今度行つたら、無理やりに此處に伴れて來よう。そして三日も四日もこゝに藏して置いてやらう……。さうだ、さうだ、それに越したことはない。）かう思ふと、性慾の幻想は益々色濃くなつて行つた。かれは押入から蒲團を出して敷いたりした。

て並べて敷かれてある友禪モスリンの派手な座蒲團だの、室の障子に添つて置いてある大きな鏡臺だのが繪にでも描かれてあるかのやうにかれの眼の前にあらはれて見えた。小萬の笑顏が見え、つゞいて旦那の顏が見え、快活な抱妓の顏が見えた。何か小萬は旦那に向つて戲談でも言つてゐるやうであつた。かれは急にある衝動を受けた。

『馬鹿！』

かう叫んで、かれはその暗い辛い心の漲り溢れて來るのを押へた。かれは勝手にかの女を避けてゐるのではないか。そのために、かれはこの丘の上に來てゐるのではないか。つゞいてかう思つて見たかれは、自分ながら心の矛盾――避けて居りながら、向うからやつて來るのを期待してゐるやうな心の矛盾に遭逢して、いくらか狼狽するやうな氣分にならずには居られなかつた。かれは再び風雨の音に耳を傾けた。

と、今度は、毎夜ひとりでかれが浸つてゐる色慾の幻想――われながら、不健全とも、不自然とも、變態性慾とも思はれるやうな幻想、女の髷をなつかしんだり、汚れた髮の臭ひに心をときめかしたり、エクスタシイに陷つた時の心持を無闇に繰返したり、更にまたチラチラする女の色彩に魂を誘はれたりするやうな細かい、のんきな、樂しい幻想が湧き上るやうにかれの心に襍つて來た。と、小萬の姿もそのまゝその黄い壁の上にぽつかり浮び出して來るやうな氣がした。

かう言つて、再び老爺のゐるところに行つて、そこから金盥を一つ持つて來て、室の隅のボタボタ雨洩りするところに置いた。

風雨は次第にその强さを加へて行くやうに見えた。二階のシタミにサツと雨の吹き當てる音、家の周圍を取巻いた樹の葉の鳴り枝の撓む音、時にはメリメリと音がして、たしかに屋根の一角の壞れて落ちたと思はれるやうな氣勢がした。かれのゐる室にも、三分心のランプがぽつかり一つさびしくついてるるばかりであつた。

六十七

この廣い家屋の中に、かれはかういふ風に、老爺はさつき見たやうにして、薄暗いランプの下に、別別に坐つてゐるといふことが、何とも言はれないさびしさをかれに誘つた。かれは戶外に荒るゝ凄じい風雨の音に耳を傾けながら、ぢつと机の上の薄暗いランプを見詰めた。

不整に切られたランプの心は、一方だけ高く煤煙を漲らすやうに出てゐるので、ホヤは旣に三分の二以上黑くなつてゐるのをかれは目にした。薄暗い灯は微かに顫へるやうに動いた。

かれは筆を執る氣にもなれなかつた。さうかと言つて、本を讀む氣にもなれなかつた。かれは唯ぢつとして坐つてゐた。と、不意にその風雨の氣勢の中に、はつきりと小萬の室のさまが——長火鉢に相對し

かう言つて、仰いで天井を見るやうにした。

『それでも、疊の入つてるところだけは、見廻らなくつちや、散々だらう！』

『それもさうだな！』

（面倒臭いな）といふやうな顏の表情をしたが、さうかと言つて折角さう言つて奥れるのを無下にも取扱ふことも出來ないといふやうにして、老爺はそのまゝ立つて、蠟燭を取つて、それに火を點じた。で、かれ等は風雨の凄じく荒れる音を耳にしつゝ、をりく地震でもあるかのやうに家屋の風に搖ぐのを氣味わるがりながら、疊の上げてない下の間をあちこちと見て廻つて歩いた。ある室では、半びしよ濡れになつた疊を三枚まであげて積んだ。またある室では、一箇所だけ洩つてゐるところにバケツを持つて行つて置いた。老爺の手にした蠟燭の灯は、戸の隙間から入つて來る風にチラチラと絶えず搖いた。

『お前さんの室は何うだね？』

廊下に出て來た時、今度はかう老爺はかれに訊いた。

『僕のゐるところか？　僕のところは大丈夫だ……。少しは洩つてゐるやうだが、ボタボタ位だから。大したことはない。』

『でも、金盥でもやんべいか？』

『さうだな。あれば借りるかな。』

やがて思ひ切つて入つて行つたかれは、それと同時に、
『ひどい荒れだな。』
かう老爺に話しかけた。
と、老爺はひよいと顏を上げたが、その皺の多い、薄暗いランプの光線のさし添つた顏を擧げたが、矢張、突如として入つて來たかれの姿に驚いたといふやうにして凝と唯かれの顏を見詰めた。そしてきよとんとしたまゝ暫しはその返事をもしなかつた。二階の屋根の角の壞れた樋のところからは、雨が瀧津瀨のやうに凄じい音を立てゝ流れ落ちた。
『おう、お前さんか？　俺アまた誰かと思つた！』
暫くしてから、そのかれであるのに氣がついて始めて安心したといふやうに、かう言つて老爺はかれを迎へた。
『雨の洩るところが隨分あるぢやないか。あゝいふところを放つて置いて好いのかね。』此方にやつて來る途中、廊下に夥しく雨の洩つてゐるところのあつたのを思ひ出して、かうかれは老爺に注意した。
と、老爺は笑つて、
『雨の洩るところを一々取上げたら、それこそ大變だ。とてもこんなにして落附いちやゐられねえ……。何しろ、古い家屋だでなア。』

つて見ようかしら?」かうかれは、何遍となく思ひ立つては、何遍となくまたそれを打消した。

かれは女の名だの、三味線の撥だのゝ樂書されてある黄い壁に面して、全く性慾の壓迫に疲れ果てたものゝやうにして日を暮した。

六十六

明日こそは行つて見よう。せめて別莊だけなりと行つて見よう。手紙も來てゐるかも知れない。大切な用事もかれを待つてゐるかも知れない。かう思つて寢た夜から雨が降り續いて、そのあくる日の午後には、傘をさしてもとても戸外に出て行くことの出來ないやうな風雨になつた。さらでだに佗しく灰色をした沼の上には、雲霧が低く這ふやうに靡いて、いつも見る漁師の小舟なども終日一隻も見えなかつた。幼い頃に見た沼の龍卷のさまもそれと思ひ出されるやうに凄じい光景の中にその日はさびしく暮れて行つた。

餘り凄じく荒れるので、さつき、老爺のゐる方へと出かけて行つて見たが、そこには三分心のランプが、室の隅々をも照すにも足らないほどにぼんやりついてゐて、ぢつとして坐つてゐる老爺の皺の多い顏を、さながら古い彫像か何ぞのやうに、その薄暗い光線の中に浮び上らせてゐるのをかれは目にした。かれは何となく無氣味な氣がした。かれはそこに入る前に、暫しそこに立ち盡してゐたことを思ひ出した。

ば、その愛した一つの存在を、そのまゝかれの方に奪つて來ることが出來るのであると思ひついた時、その時には、何うしてもさう出て行くより他に路といふ路を得ることが出來なくなるであらう。それより他に何うすることも出來なくなつて了ふであらう……。かう思ふと、その藥問屋の息子が三日間、女の心を獲ることに力を盡し、何うしても愈それが不可能であると思つた時、躍然としてそれに向つて突進して行つたさまが歴々と手に取るやうにその前にあらはれて見えた。

こんな風にそれからそれへと空想に耽つて行つたかれは、次第にその問題さへ自分にはわからなくなつて來るやうな氣がした。現に自分にも、さうした恐ろしい災厄が不意に襲つてやつて來るのではないか、と思はれたり、また時には、かうした廢墟の埃臭い、不健全な空氣の中にゐて、さうした恐ろしい嫉妬深い旦那を持つたかの女とゆくりなく落ち合ふやうになつたといふことは、ひとり手にさうした災厄の運命の巴渦の中に入つて行きつゝあるのではないかと思はれたりした。かれは何うかすると、恐れをのゝくやうな心持で、またはその慘劇に流された血がそのまゝかれ自身の體にもつゞいて來てゐるのではないかといふやうな心持で、そつとそのあづまやのある丘の上にのぼつて行くことなどもあつた。

一日二日はさうした中に過ぎて行つた。さびしいと共にまたその一方では、却てそれが望ましいやうな、このまゝこれでつゞいて行けるなら、それこそ何んなに好いだらうといふやうな氣もした。しかし、上さんからも何とも言つて來ず、小萬からも何とも言つて來ないのもかれには不思議であつた。(一度行

て考へた。

愛したもの丶肌に刄を當てなければ承知が出來ないといふ心の萠芽は、旣に其最初の抱擁の中にあるのである。最初の歡樂の血の中にあるのである。互にある目的に達する爲めに火花を散らした無數の細かい欺騙と詭計と眞實との交錯した中にあるのである。體と體との接觸の中には、さうした危險な萠芽は、いつもひそんでゐることを拒むことは出來ないのである。かれはこ丶まで考へて來て、思はず深い溜息をついた。

かれは急にある一種の恐怖を感じた。〔それは他人事ではない……。自分達の上にもすぐ適用されて來ることだ。〕かうかれは思つたからである。かれは今までさうした危險の中を右に左に巧に避けて通つて來たことを繰返し繰返して見た。われながらよくも無事にこれまでやつて來たと思はれるほどそれほど種々の危險の心理の中を通過して來たことをかれは考へた。

それと同時に思ひ出されて來たのは、何うしても、全くの他人となつて、共に天を戴いてゐることが出來ないほどの情熱に襲はれた時の感じであつた。寧ろさうした屈辱――あらゆる自己の魂をも、心をも、身體をも知り盡した異性を、他人の抱擁に任せて置かなければならないといふやうな屈辱を忍ぶよりは、寧ろさうした存在を自己の存在と共に亡ぼして了ふ方が何れほど安樂で、また何れほど自然で、何れほど目的に適つたことであるかといふことを考へた時――また更に、さうすれば、さうしさへすれ

で、老爺はそのまゝかれをその丘の下のあづまやの處へと伴れて行つた。老爺は一々その時の話をした。その驅けて行つて始めて見た時の女と男の位置などをもそれと指して見せた。『それは凄かつたにも何にも……。女が胸から顏に一面に血に塗れて倒れてゐるのに、男はそこに、柱に、その柱につかまつて、うん〳〵唸つてゐるぢやないかな。』

『そして男は何うしたかね？　死んだかね？』

『男の方は半日生きてゐて、町の病院で死んだぢや。』

『フム、そんなことがあつたのかなア、此處にも――』いかにも感傷なしにはきかれないといふやうにしてかれは言つた。かれは老爺の話に由つて、それからそれへとその時のさまを想像した。晩春の午後の日影と、丘の上に吹きみだれた紅い花とは、その若い二人の止むに止まれぬ悲劇を一層美しいものにして見せるやうにした。『フム』かう言つて、かれは再び頭を振つた。

六十五

『何うも若い者はしやうがない……』かう嘆くやうに老爺は言つたが、しかしさうした簡單な感傷だけでは、かれはその物語に滿足してはゐられなかつた。彼は極端の愛が極端の憎に變つて行く心理に深く入つて考へた。歡樂の二人の血の混合が遂にさうした悲慘な血の混合に落ちて行く心の光景につい

『それを、女は言ふことをきかなかつたんですね？』
『さうぢや……。だもんだで、若いで、くわつとしたぢやな。これほど思つてゐるのに、憎い奴ぢや。かう思つたぢやな。下世話にもある（可愛さ餘つて憎さが百倍）といふ奴ぢやな。それで、ちやんと前の日から用意して、その日は、女が番で山に來てゐるといふことまで、ちやんと調べて、そしてやつて來たぢや……。怖ろしいもんぢや、色戀も一心になるとな……』
『本當だ。』
かう深く同感したやうにかれは言つたが、『何處でやつたんだね、それは？』
『あのあづまやのあるところだ……』
『碑の立つてゐる所かね？』
『さうだ……』
『ちよつと、一緒に行つて見せて與れないかな。』
好奇心に誘はれたといふやうにして、かれはかう老爺に言つた。
『何うするだな？』
『別に、何うつて言ふこともないけれども……。その場所を見れば、一層よくその話がわかつて來るからね。』

『さうだ……丁度、花も盛り、人も出る盛りと言ふ時ぢやつた……。何しろ、その時、その殺された女も、その十五分前までは、他の藝者と一緒になつて、大盡のお客達と山で目かくしをして遊んでゐたぢやでな……。そら、人殺し――と言ふと、大騷ぎにも何にも……。皆な慌てくさつて、遁げて了つたぢや。』

『何うして、目かくしをした場所から連れ出されて行つたのかね？』

『何でも、な、ちよつと來て奥れ、話があるからつて言つて、やさしい調子で、そんなわるだくみがあるなどとはちよつとも見せずに呼出して行つたさうだ……。桐屋といふ内の抱妓でな。これは町では一二番別品ぢやつた……。何でも、五百兩も出して、あそこの姐さんが東京から抱へて來たんぢやが、來てから半年と經たなかつた。丸損ぢや言つてこぼしてゐたぢやよ。』

『ぢや、その殺した男ッて言ふのは、土地に來てから出來た馴染ではなかつたんですね？』

『さうぢやねえだ……。東京の、何でも好いところの息子ださうぢや。たしか藥問屋の次男息子だとか言つたつけ……。その藝者が東京の芳町とかへ出てゐる頃から、ちやんと出來てゐた仲で、何でも、女が男に秋風を立てたとか、何うとか言ふので、その殺す三日も前から、その男は此方に來て、町の旅舍に泊つてゐたんださうぢや。その時も、度々女を料理屋へ呼んで、もとの仲になつて奥れッて頼りに賴んださうぢや――』

『誰かと思つたら、お前さんか。』

こんなことを老爺は言ひながら、鍬を留めようともしなかつた。

『これから、何を栽ゑるんだね？』

『まだ、ちよつとんべい早いが、もう少ししたら、麥を栽ゑべいと思つて……』

せつせつと老爺は働いた。何も思はずに、何も考へずに、また、かれの閉ぢ籠められてゐるやうな苦しい佗しい性慾の世界があらうなどとは夢にも知らずに――

六十四

去年の春に、この丘の上で、若い美しい政子といふ藝者がその馴染客に殺された話をした時には、若い男女の間には兎角さうした無殘なことが多くつて困るといふやうな語調で、老爺は詳しくその話をかれにして聞かせた。『人殺しツと言ふから、俺ア、一番に飛んで行つただ……。その時にや、まだ、女が倒れたばかりで、立ちながら男は咽喉に短刀を突きさしてゐたが、うんうん唸つてあづまやの柱につかまつてゐたゞよ。えらい血ぢやつたぞな。』かう言つて、老爺はその時のさまを再び眼の前に描き出すやうにした。

『花の時分かね？』

がした。つゞいてかれは一室の埃塵の中に何處かに微かに殘つてゐる女の匂ひを發見して、過ぎ去つた春をなつかしむやうな心持に誘はれた。

ある時にはかう考へた。この獨居は、この世にかくれての孤棲は、かれのためばかりではなく、かの女の爲にも、その性慾生活のある試金石であらねばならない筈であると。またかれの忍耐であらねばならない筈であると。そして互ひに互ひの心と、體を牽引することによつて、その戀の程度の深淺を料ることが出來る筈である、と。――かれはいよ〳〵獨居の決心を堅くしようとした。

黄い壁に午後の日影の斜にさしわたつて來る時分には、一日の中で、殊に一種名状し難い倦怠と疲勞とをかれに誘つた。その時分には、室はすべて明るく照されて、影といふ影もなければ、濕つた空氣といふ空氣もなかつた。唯、壁の上の樂書が、佗しく明るくあたりに際立つて浮き上つて見えるばかりであつた。

爲方がなしに、その頃には、かれは室から出て、番人の老爺のところに行つて見たり、一人さびしく草の生えた丘の上にのぼつて行つて見たりした。時には、老爺の姿がいつものところに見えないで、何處に行つたかと思つて、あちこち搜して見たりした。時には、丘のかげの畠でせつせと老爺が耕してゐるのを見出した。

『精が出るね。』

かうかれは近寄つて行つて聲を懸けた。

いほどでつた。よくかれはひとりで戀のエクスタシイに陷つた。

後には頭がグワンと鳴つた。かうした不健全な行爲のために體が滅茶々々になつて了ひはせぬかと疑はれた。それほどかれは女の眉や、眼や、髮に向つてあくがれた。

中でも髮がことにさうした場合に於ての一番强い印象をかれに誘つた。綺麗に美しく結ばれてある時に於ても、また夥しく亂れ解かれてある時に於ても、又その他いかなる時に於ても、髮だけはかれに深い强いセンジユアルな感じを誘はないことはなかつた。長く美しく梳かれた髱、または櫛の齒の細かく綺麗に入れられてある鬢、あらゆる女の濃い情はそこにさながらに集められてあるやうな氣がした。

ことに嫉妬――かれの愛してゐる女が他の男に無條件に觸れてゐることを不健全に想像してゐる場合などに起つて來る嫉妬は、殊にその獨居のさまを物狂はしいものにして見せた。かれは仰向に倒れたまま、凝と無意味に天井を見詰めてゐるやうなことが多かつた。かれはいつも夥しく傷けられた獸を其處に發見した。

『勝子――小奴――千代松――吉助――分福――せい子――』

いろ〳〵な字で、黄い壁に樂書がしてあるのを凝とかれは見詰めた。かれの眼には、その違つた字に由つて、そこに一人々々その女の姿をはつきりと浮び上らせて來ることが出來るやうな氣がした。そしてその女達が、てんでに笑つたり泣いたりまたははしやいだりしてゐるのを見ることが出來るやうな氣

そこでは醉つてゐれば好いのであつたが、あらゆるものに醉つてさへゐれば好いのであつたが、しかもをり／＼時と言ふものや、理智といふやうなものがやつて來て、おせつかいにも折角好い心持に醉つてゐる醉ひを覺さうとした。また、時には、さうしたものがやつて來なくとも、疲勞や倦怠がひとり手にその醉の覺醒を誘つて行つた。しかしその世界にあるものは、如何なる方法を講じても、たとへ、その醉ひのために魂を亡ぼしてしまつても、いかやうにしてもその醉の覺醒から身を拒がなければならないのであつた。かう考へて來たかれは、自から自分を振返つて見た。かれは今、何處にゐるのか。その醉つた世界の中にゐるのか。それともまた半ば覺めてその世界から出ようとしてゐるのか。（否々、自分はとてもそこから出て來ることは出來ない。その醉ひの世界から出て來ては、とてもその寂寥と孤獨とに堪へられない。）かれはかう思ひながら、藝者の名を澤山樂書してあるその前の黄い壁を凝と見詰めた。

六十三

ランプの笠に戀した女の名を書いたことをかれは思ひ出した。ひとり一室に閉ぢ籠つて、女のことばかりを頭に描いては消し、消しては描いたことを思ひ出した。その空想は際限がなかつた。病的と言つて好いか、狂的と言つて好いか、それともまた不思議な心理と言つて好いか、殆ど言説するに言葉がな

までの無數の人達のやつて來た世界もまたかれを取卷いた。そればかりでなかつた。甚だ平凡でありながら、しかも甚だ珍貴なものが次第にかれに近づいて行つた。かれは最早以前のやうに蒼白い顏をしてゐなかつた。また失望ばかりしてゐなかつた。かれは頭を昂げ、股をひろげて世間を濶歩した。

暫くして、かれはまたある暗い壁に行き當つた。それは、欺騙と誠實、誠實と欺騙との互ひに深く細く塗り合はせたやうな壁であつた。かれはその前を行つたり來たりした。時には、絶望して、これは到底人間の入つて行くことの出來るところではないと思つて、悄然としてそこから引返して來ようとしてゐるかれをも見懸けた。しかしそこをも、何うやら彼うやらかれは通つて來ることが出來た。やがてかれは廣い廣いところへ出て行つた。

或はかれのためには、その暗い壁は通過し來なかつた方が好かつたかも知れなかつた。次第にその繪卷を塗つた色彩は薄くなつて行つた。止むなくかれは漸く性慾を誇張した。

しかし、そこにも平凡でない不思議な性慾の世界のあるのをやがてかれは發見した。それは技巧的で、赤くないものを赤くしたり、紫でないものを紫にしたり、黄でないものを黄にするやうな、不整な、不健全な、不道理な世界であつた。そこでは、快樂が人間以上に誇張され、玩弄され、時にはまた不自然化された。獸であると同時に神であり、神であると同時に惡魔であるやうな異形のものが常にそこに充滿した。

六十二

ひとり一室に閉ぢ籠つたかれには、あらゆる性慾生活が再びそこにその繪卷を展げて來るやうな氣がした。かれは一枚々々仔細にその繪を繙して見て行くやうな心持になつた。

そこにも此處にもかれの姿は歷々と描かれてあつた。或は遠く離れて美しい女を見てるるかれもあれば、或はとても手の屆かないところに女を置いて懊惱したり煩悶したりしてるるかれもあつた。かと思ふと、さびしい天地にひとり彷徨して居りながら、心は熱く異性に向つて燃えてるるやうなかれも見かけた。ある時は、かれは戀の苦しみを忘れんがために、深い深い山の中に向つて入つて行つた。また、ある時はかれは戀した女の初めての喜びの夜を薄暗いランプの下に仰向けに倒れてるるのに堪へかねて、漆のやうな烏羽玉の闇の中を獨りほつ〳〵と步いて行つた。時には涙が珠の樣に流れた。時には兩手を後頭部に組み合せたまゝ、さながら死にでもしたかのやうに仰向けに倒れてるた。かれは瘦せた男であつた。蒼白い顏をした男であつた。絕えず不良な行爲をしたり、不健全な眞似をしたりする男であつた。しかし、かれはさうした境に長い間留つてるなかつた。かれは次第に物の核心に向つて進んで行かなければ滿足が出來ないやうな人間になつてるた。繪卷は俄にさまざまの色彩をかへた。

あらゆる異性の色彩がやがてかれを取卷いた。それは現實の世界ばかりでなかつた。昔から今に至る

味したやうな新しい『小説』を發見した。

沼の丘の上に移轉した當座は、別にさうしたつもりでも何でもなかつたけれど――何方かと言へば、一毎日晝だけ此處に來てゐて、夜は町の方へ歸つて行つて寢るつもりでやつて來てゐたのであつたけれども、一週間ほど經つた後には、いつそのことこの誰も知らない幽棲の靜かな、埃臭い空氣の中に全くその身を埋めて了ふ方が好くはないかと思つた。その方が小萬のためにも好くはないかと思つた。

それと言ふのも、この頃は、ことに旦那から非常な束縛を受けてゐるために、いつもの待合にやつて來ることも、小萬には非常に困難になつたらしく、また折角やつて來ても、一時間以上そこに留つてゐることは出來ないらしかつた。しかも小萬は『どんなに束縛されたつて、大丈夫ですよ。藝者ですもの、お客の前に出るのを稼業にしてゐる藝者ですもの……。どんな工夫をしても、大抵なら、ちよつとでも來ますから。』かう言つて、かれをなだめるやうに、決してかれを疎んじてゐるのではない、本當の心は矢張常にかれにあるのであるといふことを示してゐるけれども、それでもかれに取つては、さうした女の世話になつてゐる人から來る壓迫は、決して愉快なものではなかつた。かれの心もひとり手に一種の激越性を帶びて來ずにはゐられなかつた。(さうだ……その方が好い。すつかり幽棲に身をかくして了ふ方が好い。)……次第にかうかれは思ふやうになつた。

言ひながら、それをそのまゝ強ひても押し返して了はなかつたであらうか。しかし、さうは言ふもの丶、別れた女の持つてゐるものを小萬が持つてゐないと同時に、別れた女の持つてゐないものをその小萬が持つてゐることも、爭はれない事實であつた。その小萬の粗々しい氣分の中に、燥がしい心持の中に、一種不可思議な力があつて、それがかれを、かれの體を引寄せて離さないやうにしたのである。

（では、今、假りに別れて來た女が、再び此處に戻つて來たとする。さうした曉には、自分は小萬を離れて躊躇なしに其方に行つて了ふことが出來るであらうか。）

かう言ふ疑問をかれはをり〳〵胸に描いて見た。しかしそれは矢張疑問であつた。Yes よりも No に近い方の疑問であつた。

別れて來たやさしいその女は、いざとなれば、かうして別れて來てもゐられるけれども――遠く離れて互ひに思つてゐる方がお互ひのためにも好いやうに思はれるけれども、小萬には、とてもさうしたことを求めることは出來なかつた。互に愛し合つてゐるか、または互ひに爭ひ合つてゐるか、それともまた互ひに損み合つてゐるか、しなければ、一日も一緒にゐることが出來ないといふやうなのが小萬であつた。苟くもその前に現はれた男といふ男には、何うしても全心全力を擧げさせずには承知が出來ないといふのが小萬であつた。從つてかれは別れて來た女に對して、單純な美しい『抒情詩』を發見すると共に、小萬に對しては、リアリスチツクな、ボンバスチツクな、それにいくらか惡魔的なところを加

『罪業がいよ〱酬つて來たのかも知れない。何うも、此頃は、さういふ氣がして爲方がないんですの。もう生きてゐるのも長いことではないかも知れませんね……』ある夜、かう萎れて言つたさびしいかの女の顏が、歷々とその靜かな室の壁に描かれて見えた。

六十一

常に襲つて來る小萬の面影を擊退するために、かれは別れて來た女の姿をつとめて思ひ出すやうに心懸けた。

小萬と比べては、何といふやさしい靜かな女であつたであらう。また何といふ柔らかな線の細い女であらう。思ひ出すにつれて、かれは種々なものを搜し出した。靜かな秋の空のやうな眼、默つて何も言はずにゐて、それで言つたよりも却て男の心を惹き寄せずには置かないやうな表情――

『だつて、そんなことを仰しやつたつて、それは無理ですわ。それぢや、私だツて可哀相ぢやありませんか。』

常にかう言つて、柔かに、男に絡み着いて來るやうな心――

何うしてかれはさうした柔しい靜かな心の持主と別れて、そして小萬のやうな粗々しい、デカダンな女と一緒になる氣になつたであらうか。何うしてかれは小萬の方から進んで近寄るやうにして來たとは

い方が好い、求めない方が好い』かう獨語して、かれは頻りに頭を振つた。
丘の二階屋の老爺は、かれのために、机に代用する餉臺や、火鉢や、藥罐や、茶器や、其他いろ〳〵なものを貸して吳れた。後には何一つ不便がないやうに、あらゆるものが其處に出されて來た。飯と汁とはいつでも老爺がつくつて吳れると言つた。
二階屋の庭をだら〳〵と沼に下りて行つたところには、蘆荻や、眞菰が一杯に深く茂つてゐて、そこには、漁師の舟が四隻も五隻も繫がれてあるのをかれは見かけた。中に一艘新しい小舟が漂つて雜つてゐたが、それはこの料理屋の所有で、『町へ行く時は、いつでも漕いで行かつせい。俺ア町へ行くことなんか滅多にねえだで。一日、つかつてゐたつて、構はねえだで。』かう言つて、老爺はいつでも自由にその舟を使つて差支ないことをかれに勸めた。しかしその靜かな一室に身を落附かせたに拘らず、矢張小萬の事が絕えずかれを襲つて來るのは、全く豫想に反したやうな氣がした。昨夜、かの女から聞いたところに由ると、かの女の旦那の嫉妬は、此頃、更に夥しく、何うしてそれを綾なして好いかわからないほどであるといふことであつた。小萬は言つた。『ちよつとでも、此方で反抗するやうな態度を見せると、もうすぐ眼を吊し上げて呶鳴つたり何かするんですからね……本當に困つて了ふんですよ。まご〳〵すればどんな眼に逢ふかも知れないと思ひますよ。』あの强い女が、かういかにも困つたやうに、萎れたやうにして話すので、その困難の程度も一通りではないといふことはかれにもよく飮み込めた。

『唯、留守だツて言つて呉れさへすれや好いんですよ。』
『あの方が來ても……？』
かう言つて、上さんは笑つて見せた。
無論それは小萬を意味してゐるのであつた。かれはその場合にも、矢張、同じやうに返事をして貰へば好いと言つた。
『本當ですか？』
『え、本當ですとも……』
『でも、煩さくきくからね。あの方は……。あの方には知らせずには置けないでせうよ。』
『その時は、かう言つて下さい……』かれは少し考へて、『その中、私が歸つて來るから、その話をしますツて……。そして此方から出かけて行くやうに話しておきますつて、さう言つて下さい。』
『ぢや、何うしても、知らせてはいけないんですね。』
『成るたけ知らせないで下さい。あの人ばかりぢやない、他の人にも……』
かう言つてかれはそこから沼を渡つて來たことを思ひ出した。
廢墟の中に廢墟を求め、孤獨の中に孤獨を求めやうとする心をかれは悲み且つ傷まずにはゐられなかつた。(しかし、その方が好いんだ……。かの女のためにも、かれのためにもその方が好いんだ。求めな

かう訊くと、老爺は莞爾しながら、

『番で毎日來るんでさ……。その時分にや、毎日十人や十五人は始終來てゐべいかな。それでゐて、いつも藝者は足りねえだから。』

『此處は好い……。此處なら、靜かで、世離れてゐて好い。』かう言ひながら、かれは低い窓の障子を一枚明けたところに行つて腰を懸けた。

六十

一日二日經つた後には、かれはその靜かな二階屋の奧の一間の主人公となることが出來た。しかし、そのことは、邸の番人の上さんに話しただけで、友達にも誰にもはつきりとそれとは言はなかつた。小萬にも知らさなかつた。かれは矢張依然として以前の邸に住んでゐるやうに見せかけた。机も、本箱も、籐椅子も元のまゝにそこに殘して置いた。かれは唯、必要な本と、士族の零落のスケッチと、寢道具一組とを舟に載せて、こつそり沼を向うに渡つた。

『毎日、歸つて來ますよ。何うも、此處では人が餘り煩さくやつて來て、落着いてゐられないから。』

こんなことを言ふと、上さんは、

『ぢや、人が訪ねて來たら、何ッて言へば好いんです？』

かつたり、いろいろ缺點があつて、さう大して氣に入るといふわけには行かなかつたが、それから廊下を廻つて、ずつと田圃に面した方に入ると、ふと、その奧に、全く今までの室とは離れた、かうしたところにかうした一間が藏されてあるかと思はれるやうな、靜かな、ちんまりした、かれに取つてお誂へ向きな六疊の一室のあるのを發見した。

それは丁度さつき井戸近くで見た丘と田と草藪との光景を矢張その前景にしてゐるやうなところで、低い丘の麓をぐる〳〵と遶つて、その向うの村の方へと通じてゐる道が、それとはつきり午後の日影に照されてゐるのが見えた。庭には、全く棄てられたダリヤの赤いのが、さも〳〵さびしさうにひとり咲いてゐるのをかれは目にした。

『此處は何ういふ室だね? 矢張、飲客を通す室かね?』

『いや、此處は、花の時分に、町の藝者達が來て寄合つてゐるところでさ。』

かう老爺は笑ひながら言つた。

成ほどさう言はれて見れば、壁に、女の顏だの、三味線の撥だのゝ樂書がしてあつて、何處かさうした女の室らしい臭ひが、塵埃の匂ひに雜つてそれとなくひそかに嗅がれるやうな氣がしないでもなかつた。かれは愈々心を惹かれた。

『藝者は大勢來るのかね。花の時分には?』

『それでも、時々お客が來て、戶を明けたり何かすることがあるんぢやないか？』

『そんなことは、今まで俺が知つて一度だつてありやしねえ。こゝは、花の時ばかりだでな。あとは夏でも、秋でも、人なんて、滅多にやつて來ねえだでな。』

『好い室があるにはあるだらう？』

かうかれは一歩を進めて訊いた、

『さア、あるにはあるな。隨分廣いだでな……。間數にしては、上下で十五六間もあんべいから――』

いろ〳〵話しかけて、――かれは遂に老爺に、その下の一間、二間を明けて見せて貰ふことにまで話を持つて行つた。『ほんたうにお前さん借りるんなら、明日にでも、俺あ言つて話してやつても好い……。なアに、本當は話さねえでも好い位なもんだけれども、それでもな、ちよつくら、お上さんにでも言つておく方が好いや。飯なんかだつて、お前さん炊いても好いし、俺が炊いてやつても好いや』後にはこんなことまでその老爺は話した。かうしたところに一人ゐる年寄の身にしては、さうした同居者が出來るといふことは、決してわるいことではないやうに見えた。夜もさびしくなくて好いし、また何ぞにつけて、銀貨の一つも貰ふやうな機會も長い中には出來て來るに相違なかつた。老爺は機嫌よく下の戶を明けて見せて呉れた。

沼に面した方の室は、光線が明る過ぎたり、疊がよごれたり、壁の三方を取卷いた具合が氣に入らな

五十九

『この家は、賴めば、一間位貸して吳れないかしら？』

かうかれは老爺に訊いて見た。

『貸すつて、何うするだな……。お前さん入るんかな……』

『靜かだから、勉强が出來ると思ふんだが……』かう言つて、かれは今、本丸近くのある邸の一間を借りてゐることや、今ゐるところもわるくはないが、此處の方がもつと靜かで好からうかと思ふことや、若い時に此處を去つて東京には出たが、生れは矢張この町の士族であるといふ話などをそれからそれへと話してきかせた。

『さうけえ！　屋敷けえ！』

そのかれの話の中にをり〳〵言葉を挿むやうにして老爺は言つた。

一通りかれの話がすむと、

『それはお安い御用だんべ……』

『それにしても誰が持つてゐるんだね？　此家は？』

『矢張、菱屋で持つてゐるんだが、何うせ平生はいつでもかうやつて、ガラ明きに空いてゐるんだでな。』

跡くともかれは二十分以上もそこに立盡してゐたに相違なかつた。ふと氣が附いて振返つて見ると、――餘り長いのを怪しみでもしてゐるかのやうに、留守番の老爺が、午後の日影の長くさし込んだ入口の大和障子のところにその姿をあらはして、ぢつと此方を見てゐるのを見た。

かれが引返して來ると、

『何うしやした。』

かう番人の老爺は訊ねた。

『別に何ともない……あまり靜かだから、ぢつと立つて見てゐたんだ……。好い水だね、冷たい水だ。』

かう言つてかれは茶碗を返した。

しかし老爺の莞爾した顏と、あたりの荒廢した靜かなさまとは、かれをそこに引留めずには置かなかつた。『まア、入つて休んで行かつしやれ。』かう老爺に勸めらるゝまゝ、かれはその入口のところに行つて腰を懸けた。

此時、ふと胸に上つて來たのは、此の二階屋の廣い多い室の中に、かれの借りて住むに適するやうな靜かな室がないかといふことであつた。（さうだ、向うは向うで、あのまゝ借りて置いても好いから、靜かな室があれば此處も借りたいものだ……。）出來るならば、何うかして、かの女のために卷き起された其の情熱から靜かに遠く離れて來たいとかれは思つた。

かれはそのまゝ、そのポンプ仕懸の井戸の方へと近寄つて行つた。かれは持つて來た茶碗を傍に置いて、老爺の言つたやうに、ポンプを二三度ガタガタと押した。綺麗な水は小さな瀧のやうに幅をなして流れ落ちた。

片手で輕くポンプを押しながら、片手で茶碗を持つて、細く流れ落ちる水を汲んで、たてつゞけにかれは二杯も三杯も飲んだ。旨い冷めたい水であつた。

さてそれを飲み終つたかれは、ふとそこに明るい小さな水彩畫のやうな光景を見出した。小さな階段をなした田、黄熟した稻、うね〳〵と靡いて取卷いてゐる低い丘、その丘の麓に低く生茂つてゐる雜草の藪、しかし、一番深くかれの心をそこに引きつけたのは、さうした混雜したシインそのものよりも、丁度そこにさしわたして來てゐる明るい秋の午後の日影であつた。

あたりに人氣がなかつた故か、それともその日影のさし添つて來てゐるさまが何處となく世離れてゐた故か、一目見たかれは、思はず立留つてぢつとそれに眺め入らずにはゐられないやうな閑寂をひたとその身に覺えた。あたりのシインの全く閑却されてゐるさまも、かれの心を惹かずには置かなかつた。かれは何とも言へない氣がした。兩三日來、次第に燃え上つて來つゝある戀心も、または女の方にいつとなしに引張られて行つてゐる情熱も、すつかりそのシインのために靜められ、淨められ、落附かせられたやうな氣がした。久しく遠ざかつてゐた『詩』がまたかれの胸の中に流れて來た。

五十八

その丘の上には、沼に面して、一軒の二階屋が立つてゐた。それは花の咲く時分に、東京から澤山にやつて來る客の、或は酒飮み、或は女と遊び、或はまた名物の蓴菜や鮒のあらひに舌鼓を鳴らすところとなつてゐたのであつたが、季節外れの今は、全く荒廢して、戸は半ば閉められ、庭は深く草で埋められ、ちよつと見たところでは、人氣があるとは思へないほどそれほどあたりはさびしく荒されてゐるのであつた。ところが、ある日のことであつた。かれは咽喉が渇いて、何うしても水が一杯飮みたかつたので、そのまゝ、その二階屋の下の三疊に住んでゐる留守番の老爺のところへと行つた。

『お安いご用でさ……これでお上んなせい……』

かう言つて、老爺は氣安げに大きな茶碗を出して貸して呉れた。

『井戸はあそこかね？』

向うに、ポンプ仕懸の井戸らしいものが見えてゐたので、指さすと、

『さうでさ……。ポンプだて、一二度押して、水を流してからお飮みなせい……。此頃ぢや、私きりつかはねだて、何うしても水が永く溜つてゐるだで――』

かう深切に老爺は教へて呉れた。

な魔の國に住む老婆か何ぞのやうにしてかれに見せた。さうした沼の話は、決して虚言ではないやうに子供心にも思はれた。

ある日、かれが三の丸の船着場から、老いた船頭に賴んで、その對岸の丘の方へと舟で渡つて行つた時には、不思議にもさうしたことがいろ〳〵と盡きずに胸に上つて來た。

秋なので、丘の上はさびしかつた。草が唯徒らに深く生ひ茂つてゐるばかりであつた。それにも拘らず、かれにはさうした不思議な傳說がそれからそれへと思ひ出されて來た。美しい武將の寵姬の魂も依然としてそこに留つてゐるやうにも思はれゝば、蛇になつた姬も、ある時には、依然としてそこに姿をあらはして來はしないかと思はれた。

否、さうして際限なく空想に落ちて行つたかれには、その祖母の話した半ば人間で半ば蛇體であるといふ姬は、それは單なる傳說ではなくて、取りも直さず女を、更に適切にかの女を指してゐるのではないかといふやうに思はれて來た。かれは既に何うすることも出來ないその恐ろしい誘惑にかゝつてゐるのではないか。かう思ふと、沼のどんよりした佗しい姿は、そのまゝその心の姿のやうに思はれた。

かうその時、幼いかれは、盲目の祖母の顏を仰ぐやうにして訊いたことを覺えてゐる。と、祖母は、齒のない口をもがもがさせながら、『爲方がないぢやでな……。船の中の人が皆なその持つてゐたものを一つ一つ沼の中に捨てたぢや。鼻紙とか、佈れ端とか、絲屑とか、さういふものをな。何故そんなことをしたかつて言へば、見込まれたもの丶投げたものは沈んで了ふぢやでな。それで誰が見込まれたかといふことがわかるのぢや。ところが、何うぢや、皆なして一つ一つその持つてゐるものを投り込んで見たら、姫の投つた小さな扇子がくる〳〵と渦を卷いて、忽ち暗い水の底に沈んで行つたぢやないか。それで、爲方がなしに姫は沼の中に入つて行つて了つたぢや。と、不思議ぢやな、その時まで恐ろしく曇つてゐた空は忽ち晴れて、舟はすう〳〵自由に行くやうになつた。』かう祖母は話し續けて來て、『怖いこつちやらう、な、これ……。今でも、その姫は半分は人間の體で、半分は蛇體で、沼に住んでゐるさうぢや。何うかすると、漁師なんかが蘆の一面に倒れ伏してゐるところで、その姫の蛇體を見屆けることがあるさうぢや。』

『本當？　おばアさん。』

『本當ともな……このお城の沼はな、それはそれは古い、古い沼ぢやて。何んな魔物が住んでゐるかわからないぢや。千年以上も經つてゐる古い沼ぢやでな……』

　　　　一

盲目で、兩眼を白くしてゐるといふことと、齒がすつかり脫けて、口のあたりがいつももがもがと動

五十七

沼の向うにある赤い花の咲くところには、昔から種々な傳說が傳へられてあつた。中で一番かれの心を惹いたのは、その花の古木が、名高かつた或る武將の寵姬――しかもその愛にひかされたがために、乾坤一擲の覇業を滅茶々々にしてしまつた武將の寵姬の遺愛のものであるといふ事であつた。かれはよくその美しい姬を想像した。武將が北國に戰死した後のひとり棲のさまを想像した。少年時代に於てすら、かれはその紅い花をその昔の美しい姬に比べて種々に空想した。

何うかすると、その沼の水が思ひ切つて碧く、花が血のやうに、また戀のまごころをそのまゝそこに留めたやうに、くつきりとあたりに際立つて見えてゐるやうなこともないではなかつた。それに、もう一つの傳說――それはある城主の奥女中が、美しい城の姬を乘せて、ある春の日に、靜かに小舟で沼を渡つて行つた時、途中で、急に空がかきくもつて、何うしても舟はそこから動かなくなつたといふことであつた。かれは盲目の祖母の膝にもたれつゝ、不思議な心持でその話を聞いたことを思ひ出した。祖母は言つた。『それはな、そのお城の姬がな、沼の主に見込まれたのぢや。それで、船が動かなくなつたのぢや。姬は美しい、美しい、それは何とも言はれないほど美しい人ぢやつたさうぢやでな。』

『それで、その後は?』

かれはその側に耕してゐる一人の老爺を見て、近寄つて訊いた。
『此處から、昔は向うに出るための門があつたんですな。』
『さうださうです。』
その老爺は、持つた鍬の手をとゞめてかう言つて答へた。
『貴方などでも、もう御存じはないんですか。』
『えゝ聞覺えには覺えてゐますが、何しろ、もう五十年も昔のことですからな……』かう言つて、腰を伸して、『何でもそのすぐ向うが姫曲輪だつたさうです。』
『さうですかな。難有う……』
かう言つてかれは再び此方の方へと來た。すべてあたりの野、畠、工場、沼、またはその沼に浮んでゐる漁師の小舟など明るくつきりと晴れた空氣の中に際立つて見えてゐた。否、そればかりではなかつた。その小さな舟に乘つた漁師は、昔、見たと同じやうに、巧みに櫂をあやつりながら、三尺おき位に頻りに置針を沼に沈ませて行つてゐるのであつた。葉末のいくらか赤くなつた芦荻には、さびしい秋への風が吹いた。
沼に面したところに草を籍いてぼんやりとして唯腰を息めてゐるかれの横顏には、秋の午後の日影が明るへ斜めにさしわたつた。

間であることが深く深く考へられて來た。

『矢張、同じだ。矢張、小萬の持つてゐるデカダンの匂ひ、衰頽の匂ひ、自暴自棄の氣分をこの自分も澤山に持つてゐるのだ。一度は明るい方へ目ざして進んで行つたにしても、何うしてもそれを突切つて進んで行くことが出來なかつたのだ。』

しかし、さうしたことはいくら考へて見ても爲方がなかつた。でかれはそのまゝ强ひてそれを向うに押しやるやうに、成るべく心を外面に轉ずるやうにして、靜かに沼に近く步いて行つた。

暫くして、かれの眼はふとあるものをその前に發見した。それは城壘の一部の殘つたもので、半は既に破壞し盡されたものであつたけれども、しかもかれは一度見た昔の形を忘れはしなかつた。かれの記憶は新しい泉のやうに湧きあがつて來た。そこは本丸から三の丸へと昔の奧女中などがひそかに出て行く秘密の門のところであることが第一に思ひ出され、つゞいてある城主の寵妾がこゝをこつそり拔け出さうとして、發見されて、蛇責で殺されたといふ傳說が思ひ出され、それからまたつゞいて、年に一度沼の對岸の躑躅の花の咲く時に、此處を明けて、奧女中達が舟で花見に行つて來ることが許されてゐたことなどが思ひ出されて來た。かれは彼方へ行つたり此方へ行つたりして、いろ〳〵とその小さな秘密な城門のあつた時のさまを幻影に描いて見やうと試みた。

しかし濠の址すらも殘つてゐない今では、容易に完全にその昔のさまを髣髴することは出來なかつた。

五十六

頭から體中に染み込んで來る衰頽の氣——廢墟の埃臭い空氣と一つになつて了はなければならないやうなわびしい氣持、それをかれは度々振拂ふやうにした。しかしそれは容易にかれから離れて行きさうには思はれなかつた。

（かうしてゐては、死の影の襲つて來るのを待つやうなものだ。）

かうかれは口に出して言つて見て、そしてそれが的確な事實——如何にしても避けることの出來ない事實であるかのやうに氣味わるさうにあたりを見廻した。

眼では見ることは出來ないにしても、また鼻で嗅ぐことは出來ないにしても、その黑い或は灰色をした運命の影は、怪しい大きな鳥か何ぞのやうに、既に、既に、その前にその双翼を展げてゐるやうなのをかれは感じた。

（これも、しかし止むを得ない。曾て生命の浪費を平氣でやつた自然の報酬だ……。誰を恨むべきものでもない、皆な自分から起つたことだ。一々細かに考へて見れば皆なそれぞれ理由を持つてゐることだ。）

かう思ふと、自分も矢張、小萬と同じく、その頽敗の運命の下にひとり手に誘致されて來た一個の人

り込まれて、一朝一夕には言ふことも語ることも出來ない戀心も、矢張始めはその縁を廢墟の濠の水の中の赤い青いピラピラした魚に起してゐるのではないかといふやうな氣がして來た。

(あの赤い青い小さな魚！　その中に、かれの戀心の暗示が既にあの時全く含まれてあつたのだ……。あそこの中に、あの女もゐれば、その女もゐたのだ。貞子もゐれば、安子もゐたのだ。お龍も、小政も、最近に別れて來たかの女もすべて含まれてゐたのだ。小萬――あの小萬も確かにゐたのだ。)空想は盡きずに空想を引き出した。(さうだ。たしかにさうだ……。だから、あの濠の水は黑くつて恐ろしかつたではないか。そしてその恐ろしさの感じは、矢張、あらゆる戀の背景の持つた恐ろしさと極めてよく相通じてゐたてではないか。殆ど同じであると言つても好いほどではなかつたか。その赤い青い美しい魚は戀を、その黑い凄じい水は、死を暗示してゐるのではなかつたか。)

かれは公園から本丸の跡へと靜かに歩いて行つた。

と、急に、かうしてかれが今此處に彷徨つてゐるのも、かれがゆくりなく小萬との戀に再び落ちて行つたのも、このまゝ猶眞直に進んで行く路の、あやまたず(死へ！)の路であるといふことも何も彼も皆なひとりでに止むに止まれずにかれの前に展げられて來た、何うすることも出來ない光景であるかのやうな氣がした。

かれは深い溜息をついた。

つて昔の人達と同じやうに、皆な塵埃に歸して行つて了ふのだから……）

かうした考へが、何ぞといふと、此頃よく起つて來たが、それが起つて來るにつれて、頭の中のすべて、または體のあらゆる細胞の一つ一つにまでも、その古臭い昔の廢墟の臭ひが、隙間もなく詰め寄せて入つて來てゐるやうな心持がして、一面さびしく悲しい氣がすると共に、一面却てそれをなつかしむやうな氣分が何處となしに漂つてゐるのをかれは感じた。そして小萬に對するかれの戀心は、矢張昔の初戀の續きであると同時に、幼い頃に見た城址の中の美しい紫の杜若の花や、または赤い青い小さな魚へのあくがれのつゞきのやうな氣がした。

かれは歩きながら考へた。（或はこれが不可解の人間の底の底に横つてゐる神祕ではないか。いくら知らうと思つてゐても竟に知ることの出來ない神祕ではないか。そして、その神祕の本體が或は時に片鱗のやうにして、その面影を個人の一生の中にあらはして見せるのではないか。否、さう言はずに、人間の能力さへもう少しすぐれてをれば、いつでも見ることの出來るもの、觸れることの出來るもの、または聞くことの出來るものであるのに、一つ乃至二つの能力が足らないがために、眼前にあつても、はつきりと見、且聞くことが出來ないのではないか。そして、それがある瞬間だけに、即ち神經の昂揚した時とか、心のすつかり鋭敏になつた時とかに、僅にそれに觸れることが出來るのではないか。）かう思ふと、小萬ばかりではなく、かれの一生を通じて起つて來てゐる戀心――さまざまの異性の中に複雜に織

かう思ふと、朝起きに心持よく冴えてゐたかれの頭も俄に曇つて來るのを感じた。かの女の腕からその男を離して了はなければ何うしても承知が出來ないやうな氣がして來た。續いて、誰も見てゐる人はまだゐないとは言ひながら、駒下駄の片方だけを手にぶら下げて、のそ〳〵歸つて來るかれの姿が、いかにも馬鹿げに見えて爲方がなかつた。

五十五

ある日はかれは城址の昔の空氣にあこがれるやうにして、秋晴の靜かに明るい日影を浴びながら、二の丸公園から沼の遠く見渡されるあたりまで行つた。

依然として昔見た廢墟の光景がかれの頭を離れなかつた。新しい時のシンボルのやうに、大きな工場の煙突からは、黑い煤煙が凄じく靡き、女工の寄宿舍からは、洗濯したもの〻午後の日影に干してあるのがそれと明かに見えたりしたけれども、しかもかれの心は全く昔の零落の空氣の中に深く澱んで、何うしても其處から浮び上つて來ることが出來なかつた。またしても草に埋れた濠が見えたり、蛇や蜥蜴のチヨロチヨロする石垣が眼の前にあらはれて來たりした。曾て此處に生息して、榮華を盡して、そしてまた頃刻の間に亡びて行つた人達のことなどがそれからそれへと思ひ出された。

（今、やりかけてゐる仕事、それさへすませば、自分などはもう何うなつて了つても好いのだ。誰だ

といふ顔をして、上さんは笑ひながら此方を見た。

かれはそのまゝ表へ出た。まだ早いので、朝霧が深くあたりを罩めて、何處の家でもまだ起きて戸を明けたものはなかつた。唯ところどころ、草葺の古い屋根から、細い朝炊の烟の騰つてゐるのを見るばかりであつた。

やがて切通しのやうなところから、昔の城の濠の跡の微かに殘つてゐるところを通つて、その畠のところへ行つたかれは、昨夜あれほどさがしても見つからなかつたとは反對に、今朝は、かれの尻餅をついた低く窪んだところから西に一二間向うにある榛の木の下に、忽ちそれを發見した。

(何んだ……。こんなところにあつたのか。わからなかつた筈だ……。これぢや丸で別な方ばかりさがしてゐたやうなもんだから。)こんなことを思ひながら、大根の葉の上や、黑い濕つた土の上に昨夜すつたマッチの棒の白く落ち散つてゐるのをぢつと眺めた。

そこらの家々でもまだ誰も起きてゐるものはなかつた。朝霧は流るゝやうにかゝつて晴れ、晴れてはかゝつた。

昨夜かれが半ばソッと推して出て來たまゝになつてゐる裏庭の木戸も、庭の一隅にある小屋も槍の木も、ぴつしやりと閉つた戸も、何も彼も少しも變らずにそこから明かに指さゝれて見えてゐた。

(泊つて行つたに相違ない。まだあそこにゐて、二人寢てゐるに相違ない。)

それにもし何處かでそんなことをしてゐるのを人が見てゐて、あやしく思はれても厭だと思つたので、遂に斷念して、片方は跣足のまゝで歸つて來た。〔何アに、明日の朝、早く搜しに行けばすぐわかる。〕かう思つてかれは寢た。

で、かれはすぐ番人夫婦のゐる方へと行つた。上さんは早くももう起きて、竈の下をたき附けてゐた。

『下駄を一つ貸して呉れませんか？』

『そこいらにあるのを、どれでもお穿きになつて好う御座います。』

かう上さんは言つたけれど、かれの起き方のいつもに似ず早いのと、下駄を貸せと言ふことにいくらか不審を抱いたといふやうにして、『何うかなすつたんですか？』

『いや、昨夜、下駄を片方見えなくしちやつてね。』

『何うしてゞす？』

『なアに、ちよつと尻餅をついたはずみに飛んで行つて了つたんですが、いくらさがしても昨夜はわからないんです。』

『また、醉つてゐらつしたんでせう？』

『なアに、酒なんか一滴も飲んでゐやしなかつたんですがね。』

〔何うですか、あやしいもんだ。〕

れの腕をまきながら、――さういふことがあつても、それは堪忍して下さいね。ね、ね。だつて、それを押通せば、私は何うなつて了ふかわからないんだから、……。それはひどい嫉妬なんだから――かうかの女が言つたことをもかれは思ひ出した。かれは、嫉妬をやく身でなしに、やかれる身であるのに滿足して、長い秋の夜をおとなしくひとり寢をしなければならないのであつた。

五十四

いつもに似合はず朝早く起きたかれは、そのまゝ前の緣側の戸を一二枚明けた。

そこには駒下駄が片方だけ土に塗れて置いてあるのをかれは目にした。かれはすぐ昨夜のことを思ひ出した。誰も起きない中に、行つてさがして來なければならないと思つた。

「それにしても、馬鹿なことをやつたもんだな。」

かう續いて考へると、われながら笑はずにはゐられないやうな氣もして來た。

昨夜、その裏庭から大根畠を越して、大通の方へ出やうとする時、ふと低く窪んだやうなところに出會して、ばつたり尻餅をついたはずみに、右の方の駒下駄が脫けて何處かへ飛んで行つて了つた。それをかれは長い間あちこちと闇の中を捜した。こんな方へまで飛んで來るわけがないと思はれるところまで捜した。しかしそれは何處にも見當らなかつた。マツチも五六本すつて見ても、矢張見當らなかつた。

かと思つて、こつそり裏の方へと廻つて見た。その時は、月があつたので、何となく影が見られるやうな氣がして、裏庭まで入り込んで見るには見ても、長くそこに身を寄せてゐることは出來なかつたが、しかもそれは、闇夜ならば、それほど好いところはないやうな位置であつた。かれはその後度々やつて來てはそこに身を寄せた。

男の方は半分以上聞き取れなかつたけれども、女の方はかなりにはつきりと聞き取ることが出來たので、それから推して、男が何ういふことを言つたか、またかれ等は何ういふことをしてゐるか、あら方はそれで推量することが出來ないことはなかつた。

裏庭の木戸は、かけ金がかけてあつても、それは容易に外すことが出來た。そしてその入つたところには、炭や薪や鹽の置いてある小さな物置きがあつて、その向うに、一つ二つ盆栽などが丸い臺に載せられてあつた。その夜は抱妓は出てゐないらしく、その冴えた笑聲は竟に聞えて來なかつた。

四十分近くもかれは闇に立つてゐたが、いつまでそんなことをしてゐたつて仕方がないので、やがて足音を忍ばせて、木戸からそつと此方へと出て來た。しかし、癪に觸つて、癪に觸つて仕方がないやうな氣がした。このまゝさびしい孤獨の一室に歸つては行けないやうな氣がした。

しかし、何うすることも出來なかつた。此間も、無理に貰ひをかけて貰つたら、抱妓がやつて來て、姐さんに頼まれた申譯――餘儀ない申譯を其處に持つて來て話したことを繰返した。またある夜は、か

自分にも不思議に思はれる位、夜になると、落附いて一室に坐つてゐることが出來なかつた。

始めはそれでもすぐに引返して來た。强ひてまで逢はないでも好いやうな氣がした。結局、その方が好いんだ……とも思つた。しかしそれは最初の一二回で、段々さうばかりしてゐられなくなつた。今夜一夜はどうしてもかの女に逢ふことが出來ないと思ひ、つゞいて想像されて來るその歡樂を思ふと、いつか心は其方へ捉へられて行つて、體も赫として來ると共に、辛い辛いやうな氣も何處かでした。

一夜はかれはかなり長い間そこに立つてゐた。

娓々としたその話聲は、たしかにそれに相違ないのである。また、それにつれていくらか冴えてきこえて來るのは、かの女の聲に相違ないのである。初めは別にさう長く立聞きする氣でも何でもなかつたけれど、つい、その睦まじく低く雜り合つた聲に引寄せられたといふやうにして、かれはいつまでもいつまでも裏の庭に面した戶のところに身を寄せてゐた。

そこ迄入つて來るのは、さう大して面倒ではなかつた。表通から見ると、裏口が何方だか庭が何方だか、ちよつとわからないやうな家であつたけれども、その少し先の細い露地を入ると、そこは廣い畠になつてゐて、それを突切つて行くと、わけなくその裏庭の四目垣の木戶のところへと達することが出來た。しかしさうして裏庭のところへと達したのは、その夜が決して初めてではなかつた。それはたしか三度目の時であつた。表で聞いただけでは滿足が出來ず、もう少しはつきり聞き取るに好い位置はない

かう言つて、『何の位、そこに立つてゐたの？』

『なアに、これはいけないと思つたから、ぢき歸つて來て了つたけれど、餘り好い心持はしなかつたね。十年前と少しも變らないなんて思ひながら、雨の降る中をとぼとぼ歸つて來たよ。』

『あれから隨分ひどく喧嘩したのよ。』

『矢張、僕のことでだらう。』

『そればかりではなかつたけれども、少しは嫉妬も入つてゐたわねえ。』

お互ひにこの世の中に生かしては置かれないやうなひどい嫉妬喧嘩をして、さてその後の仲直りの甘さは！　それを想像した時には、流石のかれもいくらか體が熱くなつて來るやうな氣がした。

五十三

かの女の家の周圍をぐる〳〵闇に廻るやうな機會は、その後度々やつて來るやうになつた。かれはいつもそこに行つて、先づ内の樣子を窺つた。

（や、また來てゐる？）

かう苦々しさうにかれは心の中に叫んだ。かれはわれながら自分の意氣地のない態度を自分で罵つて見た。またわれながら（昔への心の逆轉）を繙つて考へて見た。しかし何うすることも出來なかつた。

とをかの女に話してきかせるのは、決して得策ではない、益々此方の內兜を見透されるやうなものだと思ひながら、ついかれはかう口を滑らして了つた。

『さうなの？　それはいつなの？』

『昨日、一昨日の夜だ。小雨が降つてゐた夜があつたらう？』

『えゝ、えゝ。』

『あの時、ちよつと訪ねて見る氣になつて、其處まで行つて見たんだ……。ところが、お前の家には客か何か來てゐて、頻に聲高に何か言つてゐる。始めは普通の話かと思つてゐると、段々聲が高くなつて、何かいさかひをしてゐるのだといふことが次第にわかつて來た……。で、具合がわるいと思つたから、すごく〳〵引返して來て了つたんだがね。』

『さうなの？』

いくらかきまりがわるいといふやうに、小萬は些し顏を染めたが、『私、聲が高いからよくわかつたでせう。どんなことを言つてゐて？』

『何でも、そんなことを言つたつて、それは私の故ぢやないとか何とか言つてゐたよ。あれが世話になつてゐる人なんだらう？』

『え、さうなの。』

氣も起さず、年增藝者を聘ぶ氣をも起さなかつたならば、お前達の生活にも、何等の波をも起さずに、穩かに暮して行くことが出來たんだからね。』

『でも、さういふ風には思ひませんね。貴方に逢つたことを、逢はなけりやよかつたとか、困つたとかといふ風に思つたことは一遍もありませんからね。』

『しかし、世話になつてゐる人は、飛んでもない奴が舞ひ込んで來て困つた事だと迷惑に思つてゐるだらう……な』

『それは思つてゐるかも知れませんね。』

『知れませんぢやない、現に、さう思つてゐて、もう散々喧嘩をしてゐるんぢやないかね?』

『さうかも知れませんよ。』

小萬は不思議な表情をして笑つて見せた。かれはその表情の中に、次第に確實にかれを其方へと引寄せて行つてゐる一種の得意らしい心の影の靜かに掠めて通つて行つたのを見遁さなかつた。

『此間の夜も、そのことで喧嘩をしてゐたんだね?』

『此間ツて?』

小萬は俄に頭を此方に向けた。

『此間の夜、ちよつと、お前の家まで行つて、そこから引返して來たことがあつたんだよ。』こんなこ

『それはいかんな……』

かうかれは言つたが、『その上に僕のことでも知れると、それこそ猶いかんな……。少し遠慮しやうかね？』

『もうちやんと知つて居ますよ。』小萬は押し附けるやうにして言つた。

五十二

其處にかれは再び戀の焰を發見した。所有せんがために苦しんでゐる心を發見した。疑惑に次ぐに疑惑を以てし、煩悶に次ぐに煩悶を以てし、その對象としてゐる女に向つて盲目に突進して來る所謂男心を發見した。

『矢張これで不思議なもんだね。お前がいくらすべてを捧げて僕に惚れてゐると言つても、その人のことを忘れられないんだね。わるく言はれゝば、矢張、好い氣持はしないんだね？』

『それはさうですとも……』

『だから、かうした無理なことはしない方が好いと言ふんだよ。言はゞ僕が此處にひよつくりあらはれて來たといふことが、お前達の靜かな落附いた生活に、突然大きな石を抛り込んだやうなものだからね。僕が此處にやつて來ず、またあそこで、靜かな色街の空氣に引寄せられてあの料理屋に上つて見る

さう半はなだめるやうに言つたかれの言葉は聞かうともせずに、

『だから、さつきの話を聞いた時には、自分の身の上のことでも言はれたやうに、ゾッとして來たんですよ。何うしても、私は男の恨みに責めて責めて責めぬかれて、そして死んで行くとしか思はれない……

……』

『そんなことはないよ……』

『いゝえ、さうに違ひない……』かう小萬はそれを信じ切つてでもゐるかのやうに、頭を振つて、『何うせ、私はさういふことになると思はずにはゐられませんの……。でなくては、男といふ男に、さういふ風に緣がないといふわけはないんですもの……。現に、今だつて、さうなんですもの……』

『今だつて？』

かうかれは反問した。

『え、今だつて、さうなんですよ。今、世話になつてゐる人だつて、私のために、何んなに金をつぎ込んだか知れないのです。隨分私のために眞劍に金を出して吳れたんです。そして近頃人の話によると、私の故ばかりではないでせうけども、その穴を埋めるために、相場か何かをやつて、初めはよかつたが、段々わるくなつて、今ではひどく苦んでゐるつていふ話なんですの。だから、此頃は、しよつちう焦々ばかりしてゐますのよ……』

うにしたんですからね。考へて見ると、何だか怖ろしいやうな氣がしますよ。』
『そして何うしたえ？　その息子は？』
『あとがわるいんですの。狂氣のやうになつて、死んだんですもの。』
『さうか、それぢや寢覺がわるいのももつともだな。』
『それも、その死んだつて言ふのも、餘程、あとできいたにはきいたんですけれどもね……』
かう言つて小萬は輕く溜息をついた。
『ふむ？』
かうかれは深く考へるやうな顏の表情をした。
『でも、その當座や、稼業に勵んでゐる頃には、そんなことは何とも思ひはしませんでしたけども……。そんなことは、藝者とお客の世界にはくさるほどある位に思つてゐたんですけれども……。不思議にもそれが時々思ひ出されて來るんです。そればかりではありません。何うしても、男に金をつかはせるといふいきさつになつて、そして最後には捨てて了はなければならない廻り合せになつて了ふんですの……。だから、男の恨みと言ふ恨みは、私の體の中に一杯に充ち滿ちてゐるやうな氣がして仕方がないんですの。』
『でもまア、そんなに、神經を病まん方が好いには好いね。』

の癖、私には、別に爲めになる旦那もあつたんですからね。』かう小萬は昔を思ひ出すやうにして話した。」

五十一

そしてその息子がその持つたあらゆる財産を蕩盡した後には、かの女の姐さんとかの女とは、弊履を棄つるよりも容易にそれを路傍に捨去つて顧みなかつたといふ。また、その息子のいかなる戀の熱情の歎願にも少しも耳を假さなかつたといふ。『その時分は私はまだ何にも知りませんでしたし、それに始めから稼業としてやつてゐたことですから、爲方がありませんでしたけれども、今日考へて見ると、姐さんも隨分ひどかつたにはひどかつたんですね。私がゐなくなつてから、その息子は姐さんの家に來て、もう私がゐないと言つて、オイオイ聲を擧げて泣いたさうですがね。また、私の蒲團を顔に當てゝ、これが小龍の蒲團だつたと言つて泣いたさうですよ。』

『それが時々思ひ出されて來るつて言ふんだね？』

『えゝ。』

と言つたが、すぐ言葉を繼いで、『私も、身を隱す前に、一度ひよつくりつかまつて、ひどく泣かれたことがあるんですの。それは本當に眞劍に思つてゐたんですからね。私が其時仙臺に行つたのも、まごまごすると、刄物騷ぎでも起りはしないかと言ふので、それで心配して姐さんが一時姿をかくさせるや

『それはさうですとも……。藝者は稼業ですからね。好い相手から少しでも多く得を取らうとする稼業ですからね。だから、私なぞでも、初めはその事なんか、ひどいこととも、わるいことと、何とも思つてゐはしませんでしたの。何方かと言へば、平氣でゐたんですけれども、不思議なことには、その時のことが、いつまで經つても、ちやんと私の頭に殘つてゐて、忘れたくても忘れられないんですからね。何ぞと言ふと、すぐ、はつきりと、丸で昨日か一昨日かのやうに、眼の前にひよつくりあらはれて見えて來るんですからね。』

『いつ頃のことだね、それは？』

『私が十九の時ですから、もう十四五年にもなるのですけれども……』

かの女の話すところに由ると、それはかの女がお酌から一本になつて一二年經つた頃のことで、一時毎日のやうにかの女の許へ通つて來た田舍の豪商の一人息子があつた。その頃はかの女は無論まだそれほどわるくはなかつたけれど、かの女の姐さんといふ人が策師で、やさしいことを言ひ、うまいことを言つては、どれだけその息子から金を絞り上げたか知れなかつた。姐さんがその懷に入れた金、また土地の料理屋に落した金、やれ芝居やれ、相撲やれ、遠出、湯水のやうに使つた金、それでも既に驚くべきほどのものであつたのに、更に身受をさせるために、また莫大な金を引き出させた。そして一方では、その魂を蕩かすために、此世では容易に見られないやうな色彩の濃い男女の歡樂をその息子に夜毎に提供した。『そ

……。そして、矢張、それと同じやうに、惚れなければならない男を騙して突つ放して來たんですもの……』かう小萬は言つたが、やがてまた言葉をついで、『まだそれは、貴方に話したことはありませんかね？』

『聞かないな……』

『私なんかも矢張、その通りですの。その初めにやつたことが、今でも、いつもついて廻つて來てゐますの。何遍やつても、何遍やり直しても、お終はいつでも屹度そこに落ちて來て了ふのですからね。それを考へると、恐ろしい、恐ろしい、何だか背中から水でもかけられるやうな氣がしますよ。』かう言つて、そこらを見廻すやうにして、『それこそ、本當に、男の恨みが何の位私の身の上に重なつてゐるかわからないんですからね。』

『その初めにやつたといふのは、何ういふことなんだね？　一體？』

『…………』

『え？』

『なアに、大したことではないんですけれど……。藝者などにしては、そんなことは決してめづらしいことではないんでせうけれども、いくらでもあることなんでせうけれども……』

『ぢや、構はんぢやないか。』

かう呻くやうに小萬は言つた。

五十

『…………？』

『怖ろしいものね。本當に、眞面目に考へては、私だツて、かうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がしますよ。』

『だから、わるいことは出來ないツて言ふんだね。その殺人をした男の話だつて、ひとりでにさうなつて行くんだから恐ろしいぢやないか。二番目に殺した女の時なんか、その女を目に留めるまでは、そんな心は少しも起らず、寧ろ却つてこれからの身の始末を何うしやうかと思ひわづらつてぼんやり夕方のさびしいところに立つてゐたといふぢやないか。ところが、そこをその女の通つたのを見ると、猛然としてその惡念が再び躍り上つて來たといふんだからね。』

『もう澤山、もう、その話はよして下さいな。』

かう小萬は蒼白い顏をして、そして手を振つて見せた。

『何うしてだえ？　何か思ひ出すやうなことでもあるのかえ？』

『だつて、人殺しこそしないけれど、何遍も何遍も同じことをやつて來たことは、同じなんですもの

當人自身に取つても情ないことではないか。悲しいことではないか。何でも再び、もとの女學生を殺した場所に戻つて行つた時には、もう、とてもかうして生きてはゐられない、自ら殺すなり、自首するなりしなければ生きてゐられないといふやうな心持だッたさうだが、實際、それに相違なかつたらうよ。』

『それはその男があとで言つたんでせうか。』

『さうだツて、いつか新聞に書いてあつたよ。』

『へえ！』

小萬はかう頭をやけに振るやうにして言つたが、やがてぷつつり默り込んだまゝ、凝とあるところを見詰めて身動きもしなかつた。

暫くしてかれは言葉を續けた。

『恐ろしい報酬ぢやないか。考へて見ても、身の毛がよだつやうな氣がするぢやないか。生きながらの地獄と言ふのは、さうした罪業の持主ではないか。當然愛さなければならない相手を何うしても殺さなければならないといふやうな……』

かう言ひかけたかれの言葉を急に手で押し留めるやうにして、

『ひとつも違ひやしない。ひとつも違ひやしない。人殺しこそしなかつたけれども、私だつて、その通りだ……』

忽ち走つてその娘を倒した。そしてその罪の顯はれることを恐れて、手を咽喉に當てゝこれを絞殺した。

『何うだね、お前。』かうかれはそれをかの女に詰しつゞけた。『その男は、その場は遁れたけれども、それから一年の間、女を姦しては殺し、姦しては殺しして、遂に、元の女學生を殺した林の近所に來て捕へられたといふではないか。』

『何うして、元のところになんか戻つて來たんでせう？』

『そこが、因果ぢやないか。應報ぢやないか。また、何うしても、行く先々で女を姦して殺さなければならなかつたことが、その最初の罪に對する非常に大きな罰ぢやないか。實際よく考へて見ると、その殺した刹那から、その女學生の魂はその男の心の中にちやんと生きて入つて來てゐて、そしてその男に、ひとり手に、さういふ罪に罪を重ねさせるやうな心理を抱かせるやうになつたのだからね。それを思ふと怖ろしいではないか。』

『本當ですねえ――』

かう言つて、小萬は烈しく撲たれたといふやうにして、また思ひ當ることがあるといふやうにして、ぢつと大きな眼を空間に見張つた。

『一體なら、一度でも自分の體を寄せた異性だ。愛さずにはゐられないものだ。また愛する心も無論起つて來てゐるに相違ないのだ。それであるのに、それを一々殺さなければならなくなるといふ運命は、

言つて小萬はそのまゝかれの膝の上に突伏して了つた。

四十九

かの女の苦惱に觸れて行くほど、かれはかれが此處に來る以前に抱いてゐた、因果の理法のやうなものに再びゆくりなく遭逢したやうな氣がした。かの女も矢張男から男へと無際限に同じやうな幕を繰返して來たのであつた。一人の男を騙したがために、逢ふ男は皆な騙されなければならないやうな悲しい運命を趁つて來たのであつた。時には、信仰に對する過去のかれの熱が、かの女の話につれて燃え上つた。

或はこれは佛の慈悲ではないか。かれの信仰の退轉を救ふために、特にかの女をかれの前にあらはして來たのではないか。かの女の持つた苦みと悶えとをあらはして來たのではないか。それには、かれが先づ第一にかの女の罪業からかの女を救つてやらなければならないのではないか。さう思つた時には、昔の信仰の力が再びかれの內部に蘇つて來て、かの女が豫想外に思ふやうな感激に富んだ話をもそこに持出した。かれはその時ある强姦殺人の大罪を犯した男の話をした。それは年が三十位な、人間の一生の中で最もデカダンの危機に際した、徒らに肉體ばかり發達したといふやうな男であつた。かれはある日、林に添つた道で、學校からの歸り途にある美しい女學生を見た。『急にある欲求がかれを捉へた。かれは

かうかれが訊くと、

『それはあるわ。』

『時々、考へ出すことがあるかね。』

『ありますとも……。罪だと思つたことは、いくら自分で辯解して見ても、ちつとも效能はないんですものね。辯解しても、あとからあとへとついて來るんですものね。そのため、一晩中ねられないことなんかもよくありますよ。現に、昨夜は眠られなかつた！』

『一體何んなことを思ひ出すんだね？』

『何でもないんですけどもね。初めの中は、床に入つてからも眠られないから、講談本なんかを讀んでゐるんですけどもね。その中、何うかすると思ひ出して來るんですね。そして一度思ひ出して來ると、これはいけない、また眠れなくなると思つて、成るたけ何も考へないやうにして、電氣を消したり、眼を閉いだり何かするのですけども、もうさうなると、何をしても駄目なんですね。眼は益々冴えて來る、暗い闇の中には、いろ〳〵な姿やら形やらがあらはれて來るぢやありませんか。さう言ふ時には本當に生靈といふものもあるに違ひないと思ひますね。さういふ時には、やつぱり思ひ出された男の方でも屹度私のことを恨むなり憎むなりしてゐるに相違ないと思ひますからね。』かう言つたが、その深夜の孤獨を再び眼の前に描き出したやうにして『あゝゝ厭だ、厭だ！　また思ひ出しさうになつて來た！』かう

りさうにわるく口の邊を痙攣させたりした。

かと思ふと、それとは丸で反對に、何うすることも出來ない苦しみを持つてゐながら、その苦しみをその愛人にすら傳へることが出來ない、またはその愛人の愛をすら信用することの出來ない、何方に行つても、疑惑と不安の暗い壁で取圍まれて、光明と言つては、一點の微かな光をすら認めることが出來ないその身を、嘆いて好いのか、悲しんで好いのか、それとも身を粉微塵に碎いて了つて好いのか、結局はわからないといふやうにして、ぐつたりと體をかれに凭せかけたまゝ、長い間默つてぢつとしてゐるやうなことも偶にはないではなかつた。そしてさういふ時には、かれがかの女のために、かの女の抱いた苦しみの重荷のために、唯一の有力の突かへ棒として役立つことは、事實であつた。否それはかりではなかつた。その突かへ棒にさゝえられて、ある期間を經て、再び其處から身を起した時には、かの女は平生とは打つて變つて、丸で別な人に生れ變りでもしたかのやうに、やさしい、涙脆い、小羊のやうな從順さを持つた女となるのが常であつた。その時には、かの女はよくかれの話に耳を傾けた。

『本當ですねえ。女つて言ふものは、罪が深いんですつてね。本當から言ふと、私のやうなものは男のためにずたずたにきり虐まれても爲方がないんでせうね。』

こんなことを言つて、今までの色々な罪障の身の周圍に纏り着いて來るのを振返つて見るやうにした。

『今までにも、本當に罪だと思ふやうなことはあつたかね？』

失はれて、それこそ本當の廢墟のやうになつて了つても、それでもお前は滿足か。」

四十八

折角得た心の位置をさういふ風にして失つたばかりではなく、次第にかれはその相手の生活にも觸れて行かなければならないやうになつた。勿論、それはかの女自身の口から聞いたのではなかつた。また世間の噂からでもなかつた。かの女の持つた秘密の黑い影――それがいつとなく、ひとり手に、その感じや、姿や、影をかれの心の上に靡かせて來たのであつた。

「何故、そんな顏をするんですの？」かういつもかの女は言つてゐるやうに見えた。「私がそんなに厭なんですか。その黑い影を私が持つてゐるのがそんなに厭なんですか。でも、何うも爲方がありません。この黑い影の秘密を持つてゐるといふことは、私の運命なんですから、性質なんですから……」かう言つてゐるかと思ふと、時には何うしてまたあのやうに理由なしに氣が荒くなつて來るかと思はれるやうに、「だつて、しやうがないぢやありませんか。それは皆な誰がしたことなのです。さういふ風にこの私をわるくしたのは、皆な貴方ではありませんか。貴方の薄情のために、私はかうなつたのではありませんか。貴方さへあゝした目に私を逢はせなければ、こんな女になれと言つたとて、なれる私ではなかつたではありませんか。それを今更何うかう思つたとて駄目ですよ。」かう今にも口に出して啖呵を切

つたのである。通り一遍のものとして、忽ちかれの眼前を通つて過ぎて行つて了つたに相違ないのである。かれは折角築き上げた心の世界が忽ち強い力で退轉して行くやうなのを感じた。

かれは長い間かゝつて得て來た心の解脫をすつかり失つて了つたやうな氣がした。ある心の拍子のために、折角しつかりつかんでゐた柱を忽ち放して來て了つたやうな氣がした。そしてそれを放したがために、數千萬里を隔てた遠い茫漠としたところへ再び彷徨する身となつたやうな氣がした。しかし時にはそれとは丸で反對に、疲勞のために一時入つてゐた病院の中から漸く出て來て、再び昔の力のある生活に入つて行くことが出來る身となつたやうな氣もしないではなかつた。

何方が本當だか、それがかれにはわからなくなつた。濶々としたところへ出て來た方がかれのために好いのではないか。今迄のやうに、消極的にのみ物を考へてゐたのは、かれの魂が疲れてゐたためではないか。かれの體が衰へてゐたためではないか。しかし、さうばかりは言つてゐられなかつた。何うかすると、その以前の心の殿堂が美しく輝やかしくかれの眼の前にその幻影をあらはして見せた。と、かれの心の中のある聲は叫んだ。『何故、それなら、お前はあの愛した女と別れて來たのか。厭きも厭かれもしない女と別れて來たのか。あの女と比べては、今の女の美は言ふに足らないではないか。お前は一つの良に入るために、一つの良をのがれて來たのか。一つの美しい惡魔に逢ふために一つの惡魔を捨てて來たのか。さうか、本當にさうか。それでお前は滿足か。あらゆるものがやがてはすつかり崩れて、

たごとがのぼりさうにも思はれないやうな言葉ではあるが、しかも、それが一度戀のエクスタシイに陷つて行くと、その言葉は平凡どころか、古るくさいどころか、あらゆる戀の焰と魂の火とをそこに點じ來つて、かの女の爲ならば、またあの人のためならば、身を亡ぼしても生命を無くしてもかまはないといふほどの強い戀の氣分を漲らして來るのである。『來世は夫婦、きつと夫婦……』感じが強められて行くにつれて、言葉もまた強く短くなつて行くのが例であつた。しかもその誓ひのいかに儚なきことよ。いかに現實に遠きことよ。さう言つたかれ等も數日の後には、忽ち別れ去つて了ふことの出來る可能性を持つてゐるのではないか。いくら熱したところで、いくら燃えたところで、それはその時だけで、決して長く續くものではないのである。

かれは、此處にやつて來るまでのかれの生活を考へずには居られなかつた。かれは最早さうした戀のエクスタシイに再び陷るやうな心の持主ではなかつた筈だ。また體の持主でもなかつた筈だ。刹那の歡樂と刹那の誓ひの合言葉である『來世は夫婦』の憧憬者でもなかつた筈だ。何んなに熱した心に打突つても、靜かにそれを傍に見て過ぎて行く位のことは出來る身であつた筈だ。何故なら、さうした戀のあらゆる悲哀と、あらゆる爭鬪と、あらゆる歡樂とに疲れ果てゝ、決して再びその中に入つて行かうなどとは夢にも思つてゐなかつたからである。

從つてかれの前にあらはれて來たものが、かの女でなかつたならば、決してこんなことにはならなか

も何もありやしませんよ。』
かう言つてさびしく笑つて見せたりなどした。
かと思ふと、時には、
『何うせ思ふやうにはならないんだわねえ。かうして長年思ひ込んでゐた貴方に逢つて見ても、十分に惚れたり惚れられたりすることは出來ないんですものねえ……。さう思ふと、死んだ方が好いやうな氣がするわねえ。』凝と思ひ込んだやうにして言つた。

四十七

『もうそんなことを言はないでも好いぢやありませんか。』
いざとなると、いつもかうかの女は言つたが、實際それはさうに違ひないのである。さうした境は既に散々通つて來たかれでありまたかの女であるのである。かれにしても、かの女にしても、到底それより先に一歩も踏出すことの出來ない身であるのはよく知つてゐるのである。またかれ等の戀の運命がさういふ風に昔からちやんときまつて出來てゐるのをも知てゐる筈なのである。
『今の世では、とても駄目だが、來世はきつと夫婦にならうね。』
平凡な、詰らない、昔から言ひ古された言葉であるが、――また多少知識のあるかれの口になどさうし

うなことでも——?』

『それは聞くとも……』

『まア、止しませう。止した方が無事だわ。もう少し經つてから話すわ。』

『好いぢやないか、今でも……』

『でも、貴方のためにも、その方が好いんですよ。』

かう言つたきりで、いくら強ひてもかの女は竟にその話をかれの前に打明けなかつた。

併しかの女の常に抱いてゐる、是非一度はかれにも打明けて言はなければならないやうな黑い影——歡樂の中にも常に際立つて見えてゐるその黑い影が、次第にかれを脅かし出して來た。かれはいつもその黑い影がかの女の身の周圍につき纏はつてゐるのを見遁さなかつた。地獄の底の底にまで墮ちたやうに、唯意味もなく憂鬱な顏をしてゐるのも、そのため、またわけもなく心弱く、ちよつとしたやさしい言葉にも、瀧津瀨のやうに涙を流すのもそのためではないか。その黑い影が常にかの女の心と魂とにつき纏つてゐるために、さうした拙い半生の運命を得て來てゐるのではないか。それにも拘らず、かの女はつとめてそれを示さないやうに、一度でもさういふ暗示めいたことを口に出したのを後悔してゐるやうに、時には全然それを打消すやうに、

『そんなことはありませんよ。かうやつて泣いたり、鬱いだりするのは、皆な私の性質ですよ。理由

いふ不可解な體と魂の持主であつたのか……。十年前にも、さういふところがないではなかつたけれども、これほどとは思はなかつた……。否、その時分には、それが却つて恐ろしいやうな氣がした。そんなことが人間に出來るかとさへ思はれた。しかし、それは此方に理解がなかつたためである。さういふものに觸れた經驗が無かつたためである。』次第にかれはそんな風に女を見るやうになつた。

綺麗に線を成して梳いてある髪が、時には一本々々生きて動くかと思はれた。また時には、その體の中に生きて動いてゐる戀愛の細かい分子が、あらゆる活動を續けて來てゐるかと疑はれた。ある夜はかれは空といふもの丶一番具象的なものをそこに發見したやうな氣がした。ある時、かの女は不意に言つた。

『貴方、本當に訊いて下さる?』

『何を?』

『何をつて……?』言ひかけて止して、『とても駄目ね……』

『でも……。言つて見なければわからないぢやないか。』

『言つたッて無駄だわ。……とても訊いて下さらないに相違ないもの。』

『そんなことはないさ。』

『本當にさう? それがたとへ何んなことであつても。その話を聞いただけで、貴方が呆れて了ふや

かうかの女は始めて聞いたといふやうにしてかれの方を見た。

『さう思はないかね？　お前は。』

『それはさう思はないこともありませんね……。私などにしても、昔よりは、ぐつと男のことはわかつて來ましたから……』かう言つて少し考へて、『さうですかね。成ほど、さう言はれゝば、さうかも知れませんね……。不思議なもんですね。』

『だから、好いんだね。』

それは男女の歡樂の底の底に深く漂つてゐる秘密の快樂か何かの話であつた。かれ等は種々なことを言つてそして笑つた。

四十六

かの女の家の方へは、さう度々出かけて行かなかつたけれども、それでもかれの姿は次第に此間行つた家だの、町の活動小屋の傍にある料理屋などへ入つて行くやうになつた。夜遲くなつて小萬の方から使ひをよこすことなどもあつた。

何うかしてそれから遁れたいと思ふ心はまだありながら、ついそれとなく引張られて行く心持は、一面何處かに自棄のやうに（何うにでもなれ）といふやうな氣分があつた。（かういふ女だつたのか。かう

聲だけでも――その微妙な聲のあらはれだけでも、いろ〳〵な記憶を新しくかれに誘ひ起させた。

『でも、もう年を取つた……。あの時から比べるともう頭がこんなに白くなつたんだからな。――しかしそれも無理はないよ。もう十年も經つんだから。』

ある時かうかれは言つた。しかし、男が老いたといふことは、かの女のパッションには何の影響をも與へないらしく見えた。否さうしたことよりも、却つてかの女の年を經たといふことの方が、色が衰へはせぬかといふことの方が、一層懸念らしいやうにかれには見えた。『いくら白くなつたつて、男は好う御座んすけれども、私の年を取つて了つたこと！　もう丸で見られなくなつて了つたでせうね。』こんなことを言つて、かの女は壞れかけた頭を振つて見せた。

『それでも、女は若いよ……。おつくりでもすれば、まだ二十五六には見えるんだからね。』

『いゝえ駄目ですよ、もう。小皺が承知しませんよ。此間なども、何氣なく鏡に向つてゐると、小さな小さな皺が澤山に澤山に顏に出來てゐるぢやありませんか。もう昔のやうな色艶はなくなつて了ひましたよ。』

さうした青春はお互ひに失くなつて了つたけれど、他にもつと大切なものが出來て來たから好いではないか？　といふやうなことをその時かれは言つて笑ふと、

『さうですかね？』

克たれずには居られないほどそれほど恐ろしい魅力を持つた蒼白い身體の誘惑に――。

かうかれは自ら口に出して叫ばずにはゐられなかつた。

『また元の轍に戻つて來た。』

何としても忘れられないそのもとの轍――その轍の中に彼等は次第に入つて行くのであつた。かれ等は離れた色彩の次第に靜かに近寄つて來るのを見た。消えかけた草の火の漸く再び燃え出して來るのを見た。眼と眼とが互ひに深く觸れ出して來るのを見た。ある空氣とある空氣とが觸れ合つて、再びもとの心の光景をその前に描き出して來るのを見た。殊にかれに取つて忘れられないのは、或は眉、或は髮、或は眼、或は口の微妙な昔の記憶の復活であつた。彼はその刹那を眼前に描きながら、燃ゆる心――或はさうした形容詞では十分に言ひ現すことの出來ないやうな烈しい心を抱きつゝ川に添つた道をかの女の家に急いだことを思ひ出した。またある夜はその願を達することが出來なかつたがために、體も魂もバラバラに解けて了ふやうな失望と焦燥とを感じたことを思ひ出した。

新しいものゝ持つた力、新しいものゝ好奇心を引寄せた力、その力も決して大きく且つ強くないことはなかつたけれど、しかも曾つて一度觸れたもの、親しくなつたもの、馴染を重ねたものゝ、再び元の狀態に復して行かうとする形、その形の更に一層力強いものであることをかれはつくづく思はずにはゐられなかつた。あらゆるものがすべて皆な頭を擡げて來た。すべて二重に役立つやうになつて來た。

町で一番大きな藝者屋ですよ。小鶴さんはそこにゐたんですよ。』

『ふむ。』

かう言つて、かれは袂から敷島の袋を出した。

かうして話してゐる中にも、種々なものがかれの眼についた。床の間に懸けてある晴湖の山水の軸、長押にかけてある或る軍人の書の額、つい此間買つたばかりと思はれるやうな新らしい分厚な桐の箪笥、中には無論その旦那から來たのも入つてゐるだらうと思はれる澤山手紙の入つてゐる狀差し、現にかれ自身の坐つてゐるメリンスの座蒲團の上にも、その旦那の心が歴々と生きて動いて來てゐるのをかれは感じた。

かれは再び當然そこに繰返されなければならない三つの心の爭鬪をそれとなく眼の前に浮かべて考へて見た。かれは堪へられないやうな氣がした。とてもさうした巴渦の中には再び入つて行けさうにも思へなかつた。

『何を考へてるの?』かう言つて小蔦はかれの顏を凝と見詰めた。

四十五

いつとはなしにかれは引寄せられた。靜かに、やさしく、それでゐて強い黑髮の力に、何うしても打

かれは室の到るところに、またあらゆる器物に、あらゆる設備に、その世話になつてゐる人の心の痕跡を發見した。しかもそれは、單に、世間への見えではなしに、かなりに深くかの女に向つて靡いて來てゐる心の痕跡であるのを發見した。でなくては一二年の間に、何うしてかの女はこれだけの根柢と設備とを此處につくることが出來やう。また、何うしてさうした姐さんとして位置をこの町に築き上げることが出來やう。かれはいくらか壓されるやうな心持で、それとはなくあたりを眺め廻した。

『入らつしやいまし。』

緣側のところにゐた此間の抱妓は、幾らか顏を赤らめ加減にして、立つて來て丁寧にかれに挨拶した。――

『この町では、藝者は皆なこの近所にゐるのかね。』

かうかれが訊くと、小萬は長い煙管で煙草をふかしながら、――

『え、さうなの……』

『えらいところだね。』

『それでも、此處なんかまア好い方なんですよ。………却つて町中にゐるよりも靜かで好い位なもんですよ。』

『隣りも矢張藝者屋？』

さう言つて訊いた隣とは反對な方を小萬は指して、『さうですよ、こつちの隣は堺屋と言つて、この

四十四

ある日はかれは小萬をその家に訪ねて行つた。

それは田舍でなくては見られないやうな、これでもさうした妓達の住むところかと思はれるやうな、一菜や大根の畠などが一方にあると共に、一方には、人の汲む度にギイと音を立てゝ高く軋る桔槹などがあたりに際立つて現れて見えてゐるやうなところであつた。かれの記憶する處に由ると、昔は其處は町に屬してはゐなかつた。無足人や足輕などの輕い侍達の住んでゐるところであつた。現に今、かの女を始め、その町の妓達の住んでゐる家屋も、その昔の家に些か修繕を加へたり、目かくしをつくつたり一間二間を新しく建增したりしたやうなものであつた。『はゝア、えらいところにゐるんだね……。こゝは昔は侍のゐたところだよ。』入つて行つたかれは、さもめづらしさうにしてこんなことを言つた。

かれはそこに二疊と六疊と四疊半の狹い家を見た。年月を經て黑くなつた壁に鬱金の袋に包まれたまま三味線が二三挺並べてかけられてあるのを見た。比較的に立派な、艶々とよく拭込んだ長火鉢の置いてあるのを見た。派手なメリンスの座蒲團の向ひ合つて二つ敷かれてあるのを見た。桑の大きな鏡臺の鏡に眠つてゐる猫の映つてゐるのを見た。かれは一目見ただけで此處にもかの女の辣腕が十分に揮はれてゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。

てゐるやうに見えた。

かの女の經て來た生活は、錢の夜にも言つたやうに、隨分多艱多難なものであつたらしかつた。話しても話しても容易に盡きないその物語――しかもその物語の周圍に常に附き纏つてゐる侘しい且粗らい空氣、更に詳しく言つて見れば、ひとり手に、その多艱多難の閲歷から釀して來たに相違ない氣分、さうしたものが、それとはなしに、その言葉や、調子や態度に歷々と刻まれて殘つてゐるのをかれは見落さなかつた。（それほどまでに苦勞をして來たのか！）かれは思はず凝と小萬の顏を見詰めた。

『何うして、貴方は、あの時、私を捨てたんでせうね。』

かうした質問が、錢の夜にも半は質問のやうに、半は嘆息のやうにかの女の口から洩れて出たが、今日もそれに近い話がそれからそれへと繰返された。今更言つて效のないことではあるけれども、あの時お互ひに我儘でなかつたならば、――多少なりとも犧牲の念が二人の中の何方かにあつたならば、かれにしても、かの女にしても、こんなにバラバラに破壞されて了つたやうな情緒と憧憬とを抱いて、かうした廢墟の中に彷徨しなくとも好かつたのであつた。かれはかれ等の戀が最早到底昔のやうな美しさと强さと單純さとを持つことは出來ないことを深く深く感じた。外では、秋雨が靜かにかうした二人の話を縫ふやうにして降つた。

しかし茶を飮んだり何かする中には、さうした氣分も次第に二人の間に消えて行つて了つてゐた。かれ等は睦ましさうに、樂しさうにして話した。『好いところですね。こんな好い處がこの町にあるとは思はなかつた。』かう小萬が言つて、緣側の方に立つて行くあとについて、かれも其方に行つて彼方此方と指さして見せたりした。かれは此處に來るについての事情や、または目的にして來た爲事や、何うもひとりで、話相手がなくつて困つたことなどを話した。小鶴の話をした時には、かれはまだ一度も逢つたこともないと言つてきかせてあるのにも拘らず、いくらか疑惑をその間に挾んだやうにして、小萬はいやにじろじろと搜すやうにかれの顏を見た。『さう? あの人、そんなに綺麗に見えて? 私なんかには、ちつともそんな風には思はれないけれども……』などと小萬は言つた。

かれの方が成るべく、女の生活の話に觸れまい、觸れまいとしてゐるのに引きかへて、かの女の方は、あらゆる方面から今のかれの生活を知らう知らうとしてゐた。かの女は種々なことを訊いた。またいろいろな話——そこからひとり手に男の內所の心や秘密が知れて來るやうな話を巧みに持出して、頻りにかまを懸けるやうにした。別れてからの話をかの女が一つ一つ持ち出して話してきかせるのは、それはその話をするといふのではなくて、實はそれを材料にして、かれの心と、またはその後かれの關係した女を、今も關係してゐる女を搜し出して來やうとしてゐるのであつた。（こんなに私は自分のことを話してゐるのに、貴方はちつともその話を打明けては下さらないんですね。）かうその顏の表情は常に言つ

を直して來た。
『だつて、今の體では、何うしたつてさうしなくつちや、しやうがないんですもの……』
『もう好いよ。本當に……。わるかつたよ、僕が――』かう言つて、かれは性急に立つて、東京から送つて來た甘納豆の罐を其處に出したり、茶簞笥の棚から茶壺を取つて、手づから茶を淹れる支度をしたりした。

四十三

始めはそんな風にいやに互ひに感情がもつれたやうにしてゐたが、それも長いことではなかつた。ぢきかの女の方から『もういやですよ、皮肉は……。貴方の皮肉はもう昔から懲々なんだから……。それを聞くと、厭アな厭アな氣がするんですから。』などゝ言つて折れて來た。
『そんなに皮肉なのかな？　僕は――？』
『さういふ譯ぢやないんですけども、時に由ると、何處かいやにかう突き當つて來るやうなところがあるんですよ。』
『さうかしら？』
かう言つて、かれも少し考へるやうな表情をした。

ね。』

『何故？』

『だつて、來る早々、そんなことを訊かなくつたつて好いぢやないの？』

『なァに、さういふ積りで言つたんぢやないよ。あの晩は本當に氣の毒だと思つたからだよ。』

『さう――』

いくらかむつとしたやうな風で、小萬は默つて煙草を吸つた。煙は一枚明けた障子のところから微かに靡いてそして外へ出て行つた。

『今になつても、まだ、私の心なんか、ちつとも酌んでは下さらないんですからね。貴方は――？』

『いゝよ、いゝよ、もうその話はやめ――。俺が今言つたことが氣にさはつたのかえ？　え？　それなら、俺はあやまる。わるかつた。わるかつた、俺がわるかつた――』かの女に機嫌をわるくされては堪らないといふやうに、早口にかれはかう言つてその言葉を取消した。

『でも、餘りなんですもの、貴方は――？』

『まあ好いよ、好いよ、その話はやめ、やめ……。折角やつて來て呉れたのに、機嫌をわるくさせちや本當に濟まない。それに、それに、そんなことをお互に深く考へるのは詰らないからな。』

小萬は別にそれを深く根に持つといふ風でもなかつた。暫く默つてゐたばかりで、やがて次第に機嫌

『昨日は失敬した……。ちよつと用事があつたもんだから……』

『それよりか、昨夜家に來て下さるだらうと思つて、遲くまで待つてゐたんですよ。餘程、使をよこさうかと思つた位でしたよ。矢張、貴方は――』と言ひかけて、止して、『まあ、言ふのはよすわ。』

『何うしたんだえ？』

『何うでもないのよ。唯、薄情だツて言ふんですよ。』

こんなことを言ひながら、かの女はいつか座敷に入つて來たが、かれのゐる机のところには坐らずに、そのまゝ一隅に壁に寄せて置いてある長火鉢の前に行つて坐つた。小蔦は第一に帶の間から金の象嵌をした細い煙管と古わたりのいきな小さな煙草入とを出した。

『靜かですね、此處は？』

『うむ。』頭に響いて來る聲のつゞきをそのまゝ捨てゝ了ふのは惜しいといふやうに、猶頻りに筆の走りをつゞけてゐたが、やがてそれをもすませて此方に立つて來たかれは、何氣なしに、

『此間、歸つてから困つたらう？』

『いゝえ、別に……』

『怒つてるたらう？』

『そんなことはないわ……』かう小蔦は言つたが、『貴方、矢張、昔のやうに意地がわるいのね。皮肉

きながら身を横へたその縁側の一隅の籐椅子の上に來て腰を懸けた。沼はその時と同じやうに靜かに夕日の閃耀をそこに映してゐた。

四十二

そのあくる日の午後に小萬がやつて來た時には、かれは机に向つてせつせと書きかけた原稿の筆を執つてゐた。外には靜かな秋雨が降つてゐた。ふと或る些やかな物音を庭の方に聞いたかれは、また鶺鴒でもやつて來たのではないかと思ひながら、しかも其方は見やうともせずに、頻に頭に響いて來る聲に熱心に耳を傾けてゐたが、急にドサリと雨傘を縁側に置く音がしたと思ふと、

『お邪魔?』

といふ美しい聲と共に、其處に小萬の顏が現はれた。

『お、お前か?』

かう言つて、かれは筆を手にしたまゝ、急に顏を此方に出した。

『こつそりやつて來たね。おどかすつもりだね。』

『いゝえ、さうぢやありませんよ。今、そこに來て、上さんのところを覗くと、誰もゐないから、何うしたのかと思ひながら、そのまゝ此方にやつて來たんですの? またお留守かと思つた?』

るのを待つてゐたんですね。』後には笑ひながら上さんはつけ加へた。

『何時頃でした。歸つたのは？』

『三時半頃でしたよ。』

『また來るとも、何とも言ひませんでしたか。』

『來るには來るが、それよりも貴方に是非一度來て下さいツて何遍も言ひ置いて行きましたよ。』

やがてかれは上さんにわかれてそのまゝ此方へと來た。果してやつて來た！　かう思ふと、熱い燃えるやうな昨夜の女のパッションが再び強くかれの體中に纏り附いて、何うして好いかわからないやうな氣がした。またあの強い誘惑に捲込まれて行かなければならないのかといふやうな氣がした。それでゐてかれは決して不愉快ではなかつた。また、單に煩さい重荷とばかりも思つてゐなかつた。(何うにでもなるやうになれ！　さうした已むを得ない運命なら何んな運命になつたつて爲方がないぢやないか……)こんな風にも何處かでかれは考へてゐた。

かれは此幽棲が、絶對に孤獨であるために選んでやつて來たこの幽棲が、再びさうした美しい姿を着けて來ることを考へた時には、變な不思議な心持になつた。かれはもう少し前まで其處に坐つたり、また歩いたり、庭に出て行つたりしたかの女の姿を頭に描いて見た。確かにかれは何處からともなしに、強く強く引張り寄せられてゐるのであつた。かれはもうすこし前にかの女がやつて來て微かに溜息をつ

『そんなに長くゐたんですか。』

『えゝ。』

かう言つて、上さんは笑つて、『私、この前にも、何處かで一度見たことがある方だ方だと思つてゐたんですよ。さうしたら、この町の姐さんですつてね。いきな、美しい方ですね。』

『どんなことを話して行きました。』

『別に、どんなつて……』

『僕のことを、何とか言つてやしませんでしたか？』

『別に……』

かう言つたが、少し躊躇してから、『でも、昔から御存じだッたんですつてね。そんなことを言つてゐましたよ。』

『その他には、何も言ひませんでしたか。僕がゐないのでぶつぶつ怒つてはゐませんでしたか。』

『いゝえ、別に……』

上さんの話すところに由ると、かの女は機嫌よく茶を飲んだり、緣側のところに立つて長い間沼を眺めたり、そこから庭下駄を突かけて、向うの竹藪の方まで行つて見たり、そこから戻つて來て、長い間緣側の隅に置いてある籐椅子の上に身を横へたりしてゐたといふことであつた。『矢張、貴方の歸つて來

家に歸つて來たのは、もう五時に近かつた。と、上さんは、
『あ、お客さまが今まで待つていらつしやいました。美しいお客さまでしたよ。』
かう言つて笑ひながらかれを迎へた。

四十一

それは言ふまでもなく小萬であつた。かの女はかれのゐないのにも拘らず、さう上さんに斷つて室の内まで入つて行つて、暫くそこで休んでゐたといふことであつた。『いゝえそんなことはありませんよ。そこらにあつたものに手などをつけさせはしませんから……。それは大丈夫ですよ。』かう上さんは辯解するやうに言つたけれど、しかも、かの女が平氣でかれの室内にある期間ゐたといふことは、かれの心を曇らせずには置かなかつた。それはまさかに、深く藏したかれの祕密の手紙は見はしなかつたであらう。また、本箱の中にしまつてある日記をも見はしなかつたであらう。しかし、觸覺の強い、嗅覺の鋭敏なかの女は、其處から何ういふものを嗅ぎつけて行つたか、何ういふ祕密を捉へ得て行つたか。かう思ふと、かれは何となく心が震へるやうな氣がした。
『餘程、長くゐましたか？』
『さうですね……。あれでも一時間位はゐましたでせうか。』

との多かつた日で、其時分のバザロフとでも言ひたいやうな輿論に新しい考へを持つた男の話も聞けば、また思ひ切つて悲憤慷慨の涙を灑いだ一人のアイデアリストの話などをも聞いていろいろなことが次第にあちこちから解つて來たやうな氣がした。『矢張、昔だつて、今だつて、同じだつたんです。色戀に身を亡したものもあれば、自分の理想の思ひのまゝにならないのに憤慨して自から身を殺したやうな人もあつたんですね。』こんなことを言ひながら、かれは沼に面した老翁の瀟洒な家の一間で午飯を御馳走になつたりした。

歸りは、友達の家を訪ねて、昨夜の話はしないまでにも、それとなく町の妓達の話でも聞いて見やうかとも思つたが、學校からまだ歸つて來てゐさうにも思はれなかつたので、それはこの次のことにして、そのまゝ沼を見晴した城址の中の畠道を靜かな心持で、ゆつたりゆつたり歩いて來た。

大抵は畠になつて了つて、陸稻や大根や菜が一面に出來てゐるけれども、それでもところどころに昔の土手の一部がまだ依然として殘されてあつて、そこには薄の穗や、萱や、篠竹などがガサコソと風に靡いてゐるのをかれは見た。いかにも靜かな秋晴の日の午後であつた。

やがてかれは本丸の城門のあつたところから、靜かに此方へと歩いて來た。今はそこは町の小さな公園になつてゐて、二三代前の殿樣の碑や、昔此處に生活した人達のことを記した石碑などが二つも三つも立てゝあつたが、そこに暫しの間、立留つて、かれは靜かにその漢文を讀んで見たりした。

昨夜のこともあつたが、それよりも昔の話を聞く筈の約束を、ある老人としてゐたことをふと思ひ出して、今日は朝飯をすましたら、一番先にそこに行かうと思ひ立つた。兎に角今はそれより他に何も爲すべきこともないのであつた。その士族の零落の狀態を深く探つて、それを一篇の立派な小說にするより他に、かれにはもう爲事といふ爲事はないのであつた。何んなことがあらうが、それだけは是非やらなければならない。假令、死の運命がその眼前に迫つて來てゐても、それだけは成し遂げなければならない……。かう思ふと、思ひ崩折れてばかりはゐられないやうな心持が盛んに湧き出して來た。かれは元氣よく水草の生ひ茂つてゐる井戶端へ行つて顏を洗つた。

勝手では、上さんが襷がけで頻りに朝の支度に忙しさうであつた。

『昨夜、たうとう歸りませんでしたね。』

『え………』

などと上さんは空返事をしてゐたが、碌々眠らずに明方まで夫の歸るのを待つてゐたと見えて、眼はいやに赤く充血してゐるのをかれは見逃さなかつた。しかし、別にそれについて何か言つて見るほどの親しみをも持つてゐなかつたので、かれはそのまゝ自分の室の方へと戾つて來た。

やがて朝飯を濟ませて出かけたかれは、その老人の家からまたも別な老人の家へと出かけて行つて午後になるまで自分の家へ歸つて來る事が出來なかつた。不思議にもそれはいろいろな面白い話を聞くこ

なかつた。かの女の家に行つてゐる時にも、かれはいつもかの女の世話になつてゐる旦那に氣がねをしたことを思ひ出した。またある夜などは、旦那がやつて來たので、ソツと二階から下りて、知れないやうに表の格子戸を明けて戸外に出て來たことなどがあつたのを思ひ出した。

（さうだ、確かに旦那が來てたんだ……）かう再び思ふと、十年前に味はつた厭な、厭な、氣も心も滅入つて了ふやうな、魂も何も彼も爛れて了ふやうな不愉快な感じが犇々とかれの總身に押寄せて來て、上目勝な、無氣味な、歡樂に夢中にならずには置かないやうなかの女の眼がぼつかり夜の暗黑の中に浮んで見えた。

四十

その夜はいろ〳〵な幻影や、不安や、取越苦勞に虐まれて、明方近くまで眠ることが出來なかつたけれど、しかもあくる朝目覺めた時には、いつもに似合はずかれの頭ははつきりしてゐた。何もそんなに細かに考へるといふことはないやうにさへ思はれた。それと言ふのも、天氣が思切つて好かつたからで、あらゆる物の上に美しく照りわたつた朝の日影は、何とも言へない輝かしい力をあたりに漲らせた。いつも佗しい、暗い感じしかかれに與へない沼さへも、今朝は機嫌よくその朝日に照されてゐるやうに見えた。

ない？　さういふ不自由な戀の方が……表は知らん顏をしてゐても、裏に廻つて本當に女の心の祕密をつかんでゐる戀の方が面白いとは思はない？』

『それは、單に面白い、面白くないから言へば、その方が面白いのは、それはわかつてゐるよ。しかし、本當の男女の戀は、さうした不自然なものではないからね。本當の戀は何うしてもそれで滿足してゐられないからね。』

『さうかしら？　私はまた、折角男に惚れても、面白くないやうな氣がするわ。邪魔があればあるほど私は眞劍になつて行けてよ。』

『矢張、さういふところがあるんだね、お前には――？』

『さうかも知れませんね。』

かうした會話は、十年前に、既に、既に、何遍かれ等の間に繰返されたか知れないものであつた。否、かうした會話ばかりではなかつた。時にはそれが女性の男性に對する微妙な手管であるかのやうに、または、かれをかの女の許に縛つて引寄せて置くための唯一の紐であるかのやうに思はれることもないではなかつた。如何なる場合にも、一方に他の男を持つてゐるといふこと、たとへ、時には持つてゐないことがあつても、いざと言へば、すぐそれを持ち出して來ることが出來るといふこと、さうしたことが、かの女からかれを逭れさせて來た重要な動機の一つになつてゐることをかれは思ひ出さずにはゐられ

『さういふことを言ふのは、却つて自分で自分を賤しくしてゐることではないかね。自分の價値を自分で否定してゐるやうなものではないかね？　戯者だツて、何だつて、さういふことをして好い筈はない。虚言をいつたり、人を騙したりして好い筈はない……』

『ぢや、私、あの人を愛してゐると言つても貴方は構はない？』

『それは爲方がないぢやないか。本當に愛してゐるなら……。あの人をも愛してゐるし、また、この僕とも、離れることが出來ないと言ふのなら？』

『それでも好いのね？』

『いけないつたつて、爲方がない。』

『爲方がないんでせう。それ御覽なさい。さうでない方が好いんぢやありませんか、矢張？』

かう言つてある時かの女が笑つたことをかれは今思ひ出した。

それはその時とは別な時であつたか、續いてかれは次のやうな話をもしたことがあつたことを思ひ出した。

『それぢや、何うしても、私に世話になる人があつてはいけないと言ふのね？』

『…………』

『いけなけりや、よすわ。あんな人なんか捨てゝ了ふのはわけはない……しかし、貴方はかうは思は

（さうだ。確かにさうだ。今夜その人が來てたんだ……）

かう思ふと、以前にもかの女の身の周圍に纏繞してゐた昔の旦那のことが不思議にもかれには思ひ出されて來た。かれはその旦那の心が、人は變つても、矢張依然としてかの女につき纏つてゐるのを眼の前に描いて見ずにはゐられなかつた。と、それが急に、あさましいやうな、悲しいやうな感じをかれに誘つて來た。

三十九

『だツて、僕はそんな眞似は出來ない。そんな人のわるいことは出來ない。お前がその世話になつてゐる人に多少の愛着を感じてゐて、それでその人と離れられずにゐるのならば、それは何うも爲方がないけれども、些しの愛情をもその人に感ぜずに、唯、金のために向うをあやなして、好い加減にして置くといふことでは、それでは僕は贊成することは出來ない。何故なら、それは虛言だから、騙してゐるのだから……』

『だつて、そんなことを藝者に言つたつて、駄目ですよ。』

『何うして？　何うして駄目だね？　藝者だつて矢張同じ人間ぢやないか。』

『それはきまつてゐますけれど……』

して行つて了つた。

否、さうしたことばかりではなかつた。かの女がかうしてかれの前にあらはれて來たといふことも皆さうした不思議の順序があるのであつて、さうならなければならないやうな心持にかれもかの女もなつてゐたために、ひとり手にその不意の遭逢の空氣が醸されて來たのではなかつたか。またかれがあの愛した女とさへ最近別れなければならなくなつたのも、矢張かうしたハメに陷つて行く前兆ではなかつたか。かう思ふと、かれは何うしても遁れることの出來ない、いくらぢたばたしても何うすることも出來ないある陷穽の中に深く陷つて行くやうな恐ろしさを總身に覺えた。否それればかりではなかつた。かれはその美しい蛇のやうなかの女の抱擁を未だに總身に感じてゐるやうな氣分を誘はれた。

〔何故、本當に、それから逃れては來なかつたか。何故、さうした抱擁から振放つて、飛び出しては來なかつたか。〕

思はずかれは溜息をついた。と、そのあとから今度はかの女が言つた今のかの女の生活のことや、その世話になつてゐる人のことや、その世話になつてゐる人などはもう何うなつたつても構はないと言つたことや、生活がさう樂ではないらしいことや、今のその世話をしてゐて吳れる人を失つて了へば、もう何うすることも出來ないといふやうな語氣であつたことなどが、それからそれへと、執念くかれの暗い心の周圍を繞つた。

かの女の情を、心をかれの身の周圍に寄せつけられないやうにはしなかつたか。かれは既に戀の苦難の底の底に沈んだ身ではないか。その底から浮び上るために、その愛した女とも別れて來た身ではないか。その戀の苦しみを遁れんがためには、かうした昔の廢墟の空氣にまでわざと求めて入つて來てゐる身ではないか。しかし、いくらかう思つたところで、今になつてはもう何うすることも出來なかつた。また、此まゝこゝを遁れて、かの女の眼のとゞかないところに隱れやうとしても、それは到底かれには實行が出來さうにも思はれなかつた。かう思ふと、じめじめと腐つて亡びて行く廢墟の氣分が、次第にかれの心に深く染み込んで來るやうな氣がした。

（敗滅！　敗滅！　もう何うしても敗滅は免れられない。）

かうかれは心に叫んで見た。

突然かの女がかれの前にあらはれて來たといふことは、丁度それは、廢墟の草の茂つた中から皮膚の色彩の不思議に美しい蛇が思ひもかけずにあらはれて來たやうなものであつた。そしてその蛇は、廢墟の空氣に浸つたものばかりが見且つ味ふことの出來るやうな美と毒とを備へてゐる者であつた。實際かれが一たび見てはつと驚いた氣分もさうであれば、それと接觸して遂に離れることが出來なくなつた心持も全くそれに酷肖してゐた。かれは唯立留つて、凝と見てゐるより他に爲方がなかつた。暫くすると、その蛇はその美しい皮膚の色彩を明るい日影に輝かせながら、靜かにするすると草の中へとその姿を隱

あつて、かれの持つて來た外國の小說だの、書きかけた原稿だの、士族の零落の狀態をスケッチしたものだのが一面に障子の隅の大きな机の上にちらかつて置かれてあるのが、それとはつきり見えた。さつきのつゞきかと思はれる蟲の聲は、戶を隔てゝ微かにかれの耳に入つて來た。

かれはそのまゝ、障子を明け、つゞいて戶を一枚明けた。

夜は眞暗であつた。唯、室內の光線がその向うにある婆娑とした竹藪に反映して、チラチラ無氣味に搖くのが見えるばかりであつた。晝間はよく一目に見わたされる沼も、すつかり闇に包まれて、その髣髴をも認めることが出來なかつた。

かれは兎に角机の前に來て一度坐つて見た。兩手を額へ當てゝ見た。眼をつぶつて見た。しかし頭はがんとして、何が何だか自分にもはつきりわからないやうな氣がした。あそこでその女に逢つて、それからあそこに來て、あのやうな熱いパッションと涙とを灑がれたといふことも、何だか遠い遠いところにある幻影か何かのやうな氣がした。昔の心の影が、ある反射作用で、一種不思議な光景をかれの前に描いて見せたのではないかと思はれた。

三十八

何故にかれはあそこから無理にも引返して來なかつたか。何故にかれは昔の薄情のつゞきを見せて

など上さんは强ひて笑つてゐたけれども、その歸りの遲いのを待つてゐるらしい氣分は名殘なくその顏にあらはれてゐた。

『何方でした？ 今日は？』

暫くして上さんはかうかれに訊ねた。

『なアに、今まで町にゐたにはゐたんですけれどもね……。突然昔知つてゐたものに逢つたり何かしたもんだから――』

『さやうですか。女の方ですか、男の方ですか。』

『女は女ですけど……』

『何うしても、女の方だと、長くなりますね。』

こんなことを言つて上さんは笑つたり何かした。しかし、いつものやうに、かれは落着いて其處で話してゐる氣にはなれなかつた。突然起つて來た今夜の出來事――颶風のやうに起つて來た出來事、それに對して、靜かに考へて見なければならないやうな氣がして、そのまゝ好加減にかれは廊下づたひに自分の室へと入つて行つた。

かれはやがてその身をいつもの靜かな一室の中に見出した。紫に近い色硝子の電燈の蓋、それを透して來る靜かな光線、床の間につゞいた違ひ棚の上には、石膏だの、木彫だのが一つ二つ置いて

暫くして、

『お歸りですか？』

今まで寢てゐたらしい上さんの寢惚けた聲がして、續いて此方に立つて來る氣勢がした。入口のところにある電氣がぱつと明るく點いた。

『大變遲う御座いましたね。』

こんなことを上さんは内から言つたが、やがてかけ金を外す音がして、戶がその儘からりと開いた。

『つい、遲くなつちやつて……』

『もう、少しさつきまで起きてゐたんですけども、もう十一時が鳴りましたから、今夜はとてもお歸りが無いと思つて、今、床に入つたばかりなんですよ。』

『ヤ、何うも……』

かう言つて、かれは六疊の一間に入つて來たが、いつも寢てゐる番人のSの姿が其處に見えないので、

『何うしました？　まだ、出てゐるんですか。』

『え、今夜は歸つて來ないかも知れませんよ。』

『何處かへ行つたんですか、遠くへでも……』

『えゝ。』

『こんなところから行けるの？』

あるところに來て、かう言つて小萬は立留つた。

『あゝ、こゝからも行ける。』

『さう……私の家も、もうすぐそこなんだけども……。』

『また僕の方からも行くよ。』

『私の方が早いわ、屹度。』

また、暫し闇の中に立つて、二語三語話し交はしたが、――

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら。』

かう言つて二人は別れた。かれは闇の中を暫し此方に來てから、ほつと苦しさうに溜息をついた。

三十七

裏口から入つて行くと、留守番夫婦のゐるところの戶は、もうすつかり鍵がかけてあつた。

『おい、おい……』

二三度戶をガタガタ言はせてから、かれはかう聲を懸けた。

『勘定は?』

『いゝのよ、あなた。』

さういふので、かれは此方へ出て來て、そのまゝ別れを告げやうとすると、

『待つてゐらつしやいよ。そこまで私も一緒に行くから。』

かう言つて、小萬も續いて其處に出て來たが、上り端の處に、さつきの抱妓が立つてゐるのを見て、

『歸らずに、さつきからゐたの?』かう聲をかけた。

『だつて、もう遲いのよ、姐さん。』

『だから、今、歸らうとしてゐるのぢやあないの……』

『………』抱妓は何か言はうとしたが、止して、『ぢや、左樣なら、お上さん。』かう挨拶して、二人の先に並んで出て行くあとから續いた。

睦ましさうに、また離れ難ないやうに、頻りに何か小聲で話しながら二人は並んで歩いて行つた。それとは反對に、抱妓の目には、かうしたことは少しも知らずに、さつきから家で酒を飲んで小萬の歸りの遲いのを待ちあぐんでゐる旦那の曇つた顏などが歷々と映つて見えた。

一二間先の闇の中を行く二人の間から、時々嬉しさうに、面白さうに笑ふ小萬の聲がくつきりと冴えてきこえた。

『わからないでせうね？』

『わかるさ、それは――』

『さう、わかつて？』笑ひもせず、さうかと言つて、その理由を說明するでもなく、輕い嘆息を微かについた。やがて漸く思ひ返したといふやうにして、

『ぢや、好いのね。私の心持はよくわかつたのね。急に默つて歸ることなんかはないのね。』

『それはないよ。兎に角、ある爲事をしに此處に來てるんだから。』

『ぢや、明日にも訪ねて行くかも知れませんよ。何うでしたつけね？　あの大手から入つて行つて、それから何う行くんでしたつけね？』

『大手から一町ほど行くと、右の角に機織工場があるだらう。あそこを曲るんだよ。さうすると、畠だの、栗の林だのがあるから、それを猶構はずに二十間ほど行くと、沼が見えるよ。其處のところのKといふ人の別莊だよ。』

『ぢや、あの辨天さまと向ひ合になつてゐるあたりね。』

『あゝ、さうだ、さうだ。』

『ぢや、行きますからね。』

漸くかの女は立上つて、その室から此方へと出て來た。

三十六

さつきの抱妓が三度までかの女を迎へに其處にやつて來た。鳥渡と言つた時間がそれ程長い時間になつて了つたのである。『もう十一時すぎよ。』其處の上さんもかう心配して室の外から度々聲を懸けた。

『あゝ、もう歸りますよ……』

かうは言ひながらも、小萬は容易にそこから立上らうとはしなかつた。それと言ふのも、いくら言つても、またいくら泣いても、殆んど際限のないほどにそれからそれへと種々な昔が思ひ出されて來るからであつた。

『もう、わかつたよ……。あゝやつて、幾度も迎へに來るんだから、今夜はもう歸らうぢやないか。もう遲いから――』かうかれは促した。

『え、もう、歸りますよ』。(そんなに、貴方は私を歸したいの?)といふ顏の表情をしたが、誰に言ふでもなく、『あゝ、つくづく厭だ……藝者は――』

『何うして?』

『何うしてさうつくづく厭だか、貴方にはわからない?』

『……?』

も、何も彼もよく知つて呉れて、何うしても、もう一度お前を本當の人間に、本當の女にしてやらなければ、折角馴染になつた義務がすまないやうな氣がすると言つて、いろ〳〵やさしく言つて呉れた人がありました。私もその時は、心から動かされて了ひました。多い男の中にはさうしたやさしい男もある、貴方などとは比べ者にならないほど、女に對して、本當に、正直な、やさしい人もある。あゝ私の思つてゐることは間違つてゐる。憎む價値のない人を私は憎んでゐる。恨む方が却て愚かだと言はれるやうな人を恨んでゐる。何も、貴方のやうな人をさう深く恨んだり憎んだりしなくつても好いのだ……。憎むのは、まだ思つてゐるからだ。思ひ切れないからだ。かう思つて、私はすつかりそれまで思つてゐたことを捨てゝ了はうと思ひました。しかし、それが私に出來たでせうか。私はその時すぐかう思ひました。私がさういふ風に思ひ捨てゝ了へば、その時から、貴方はきつと自由になる。自由な體になる。私の恨みや憎しみの附着いてゐない體になる。さうすれば、何んな幸福でも、何んな女でも自由に貴方が得ることが出來るやうになる……。お前は何のためにこれまで苦勞したのだ。何のためにお前はこれまで辛い道を通つて來たのだ……。かう思ふと、私の體はまた赫として來ました。何うしてもそんなことは出來なくなりました。で、間もなく私は松本を去つて了ふことになつたのです。」

かうした言葉に續いて起つて來る欷歔は、かれを脅かさずには置かなかつた。かれは唯默してその長い話を聞いた。

かの女はヒステリックにでもなつたやうに、また、さうした過去の呪ひを、苦しみを、腹立しさを殘らずかれに投げつけて了はなければ、何うしても心が靜まることが出來ないといふやうに、それからそれへと種々なことを話し續けた。

その言ふ所によると、それからといふものは、かの女は、その前にあらはれて來るあらゆる男性に對して、總て復讐的であつたといふ。男性を玩弄することに由つてのみ纔にその快感を買ふことが出來たといふ。殊に大連にゐた頃には、さうした心が一層烈しく、此方が捨てることが出來ないほど惚れてゐる男に對しても、思切つた愛想づかしを言つて、此方から捨てゝ、捨てゝ、捨てゝ來たものだといふ。時には淚の出るやうな悲しみを感ずる事もないでもなかつたけれども、しかもそれよりも復讐といふ快感を得ることの方がいつも先に立つて、泣きながらも、さうした辛い道を歩いて來たといふ。『だから、私がこれまでやつて來たことの中には、皆な、貴方がゐるのです。私が何んな薄情なことをしたにしても、また何んな女らしくないことをしたにしても、そこには皆な貴方が生きて動いてゐたのです。何も彼も、皆な貴方の故です。貴方に捨てられたためです。』かうかの女は強く言つたが、忘れやうにも忘れられないといふやうにして『その中でも、かういふ話があるんです。それは松本にゐた時ですけれども、大變に私のためを思つて、心から私の世話をして呉れた人がありました。何も彼も、私のさういふ我儘ですることも、貴方といふものがあつて、そのために、さうしたひねくれた心になつてゐるといふこと

はなかつたんだ？』かうかれが心からなだめるやうにして言つても、それでも容易にかの女はそれを藏めなかつたやうな流るゝ涙を。

『復讐せずには置かない。一生の中に、一度は乾度逢つて、ヒドイ眼に逢はせてやらなければ承知が出來ない……。かう私はいつでも思つてゐたのです。それが何うでせう。意氣地のない私ではありませんか。貴方の顏を見ると、その恨みのウの字も言ふことが出來ず、復讐のフの字も言ふことが出來なかつたんです……。そして元の通りになつて了つたんです。あゝ、それが悲しい。その意氣地のないのが悲しい。』かう言つて、かの女は縋りついたかれの腕に捲きつくやうにして、したゝかに、したゝかに泣いた。

三十五

その長い間、かの女のかれに對して抱いてゐた憎みと恨みとは、かれに何等の影響を與へなかつたであらうか。かれは絶えず幸福であつたであらうか。

かれの關係したその後の情事に於ても、何等さうした不可思議の恨の遞傳はなかつたであらうか。

『決してないことはなかつたでせう。私の怨みが、ちやんと貴方の身の邊を離れなかつたでせう……さうでなくつてはならない筈だ。もしさうでなかつたなら、神も佛もない世の中だ……』かう言つて小萬は涙に濡れた眼を見張つて、今度は笑ひもせずに、凝とかれの顏を眺めた。

それでもかれは、そこに行つてからも、何うかしてそこから逃れたいと思はないではなかつた。

『今夜はもう歸らう。もう遲いから、またにしやう。何うせ、まだ、長く此處に滯在してゐるんだから……』

かうかれは言つて、そのまゝ歸るやうな形をして見せた。

しかし、さうした微温い衰へたかれの意志は、到底かの女の強いパッションに打勝つことは出來なかつた。かの女は否應なしにかれをかの女の思ふ方へと伴れて行つた。

かれは再び其處に烈しく靡き寄る女の姿を發見した。堅く嚙み合せた白い齒を發見した。黑髮の上に微かに搖いて流れて來る薄暗い光線を發見した。昔のまゝの聲を發見した。

曾てかれが經驗したあらゆるすべては、再びそこにあるのであつた。十年の年月を經ても、少しも變らずに、少しも衰へずに、さながらそのまゝ續いてゐるかのやうに――。かれは一種の深い恐怖を感じた。

續いてかれはかの女の淚を發見した。流しても流しても盡きないやうな淚、押へても押へても何うすることも出來なかつたやうな淚、自暴自棄の淚、艱難と辛勞とを一つ一つ縫ひ交ぜたやうな淚、何處まで行つても孤獨を離るゝことが出來なかつたやうな淚、靜かな淚、湧きかへる淚、人知れず深夜の床の枕を濡した淚を發見した。『そんなにまでお前は思つてゐたのかね？　何故、それなら、さうとあの時言

三十四

それは矢張りかれを引寄せずには、かれをかの女の思ふまゝに自由にせずには置かないやうに見えた。たとへそれは恐ろしい深淵であらうとも、またそれは一度び陥つては何うしても浮び上つて來ることが出來ないやうな陥穽であらうとも、そこまでかれを引張つて行かずには、何うしてもかの女はその魔の手を收めないといふやうにも……。

（かうして、貴方に、世に稀な歡樂を與へるのも、またあらゆる女の持つてゐないやうな體と心を寄せるのも、實は貴方の魂を亡さうとするために過ぎないのである。貴方から受けた忘れられない恨の復讎をするために過ぎないのである。決してこの身はあの時の薄情と殘忍とを忘れてはゐない。）

かうその眼は、その眉は、その體は絶えず言つてゐるやうにかれには思はれた。

かれは自分の弱いのに呆れずにはゐられなかつた。また自分ながら自分の意氣地のないのに驚かずにはゐられなかつた。かれはさうした不安な、動搖勝ちな、ともすれば自分の破滅を引起すやうな夥しい頭の混亂を感じながら、しかもかの女のいかなる誘惑をも拒むことは出來なかつたのである。またいかなるかの女の言葉にも盲目的について行かずにはゐられなかつたのである。そしてそれがかれの必然の受けなければならない自然の報酬であり、また自然の罰であるやうな氣がしたのである。

てぢつと其處に立盡した。

蟲の聲は草の露に咽ぶやうであつた。また次第に寒くなつて行く秋の悲しさに堪へかねたもののやうであつた。壁の邊りで鳴いてゐる蟋蟀のさびしい聲もした。

『でも、それでもよく逢へたわねえ。』

突如としてかう小萬は言つた。

『………』

『私、さつき、お座敷でひよいと貴方の顏を見た時には、足が竦むやうな氣がした。』

『………』

『何う思つて、一體貴方は？ 困つた奴に逢つたと思つたでせうね。』

『それよりも、何うしやうかと僕は思つたよ。逢はせる顏がないやうな氣がしたよ。何しろ、あの時はわるかつたツて言ふことは自分でちやんと知つてゐて、始終考へてゐたんだから……。それよりも、お前こそ百年目ツていふ氣がしたらうな。やつと敵にでもめぐり逢つたやうな氣がしたらうな？』

『さうね、そんな氣も何處かでしたわね。』

かの女はかう言つて、昔の笑ひを見せた。執念く蛇か何ぞのやうに纏りついて來る昔の笑ひを。

『池は池でも晝間見ると、溝のやうに汚いのよ。』

『でも、蟲が鳴くね、頻りに……。好いなア、矢張、田舍は――!』

『すぐ向うが、草藪だの、畠だのになつてゐますからね。』

かう言つて、小萬も立つて來た。二人は暫し並んで立つて、さまざまの蟲の聲に雜つて、何處かで遠く轡蟲の鳴いてゐるのに耳を寄せた。

『あのガチヤガチヤの聲を聽くと、子供だつた頃の事が思ひ出されて來ますね。』

『本當だ……。』

かうかれは言つたが、『お前にもさう思はれるかね。さうすると、矢張誰も同じだと見えるな。僕も今さう思つてゐた所だ。』

『あの聲を聽くと、何とも言はれずに、なつかしいやうな、悲しいやうな、さびしいやうな氣がしますよ。その癖、近くで聽くと、さうでもないんだけども……。唯、喧しいだけなんだけども……』

『さう言へば、昔から、お前はあの轡蟲が好きだつたぢやないか。あの川の畔の家でも、他が鈴蟲だの、松蟲だのを買つて來るのに、お前は、いつもあのガチヤガチヤを買つて來て、庭の草の中に吊して置いたぢやないか。』

『さうでしたね……よく覺えてゐますね……』小萬はその頃のことを染々思ひ出したといふやうにし

にも拘らず、上さんはやがて別な電氣の球を持つて來て、今まではめてあつたのと取替へて行つた。しかし室はそれでもさう大して明るくはならなかつた。

『十燭かしら？』

『そんなことはないでせう。今までのが十燭でせう？』

かう仰ぐやうしてかれは言つた。

『さうかしら？』立つて覗いて見て、『成ほど十六燭だ……。それにしては暗いなア、馬鹿に……。田舍は電氣まで暗いのかしら？』

『何うしても、暗いわねえ、田舍は――』

かう言つたが、鬱陶しいといふやうにして、小萬は前の障子を明けた。

かれは立つて行つて闇を覗いて見て、

『庭かえ、其處は？』

『え、さう。』

『何か光るものがあるぢやないか？』

『池よ、それは――』

『池なんかがあるのかえ。』

『さうぢやないけどもね。』

『なら、好いぢやありませんか。』

『困るな……』

かう言つて、『それに勞れてもゐるんだから』

しかし、さうした拒絶もかの女の前には力がなかつた。かの女は何うしても引寄せずには置かれないといふやうにして、かれをその右側の細い巷路の奥にある家へと伴れて入つて行つた。

三十三

かれは其處に灯の薄暗い家を發見した。いかにも田舍の町の小待合らしい狹い侘しい一間を發見した。いやに輕薄な、野卑な、饒舌な、かうした祕密の男女の會合に法外の利を貪つてゐるやうな上さんを發見した。

『おや、さうなの……。』

かう言つてその上さんは、いやな眼色で、色慾と物慾とより他には何もないといふやうな眼色で、小萬のあとについて入つて行つたかれをぢつと見詰めるやうにして迎へた。

『暗くつたつて好いのよ。これで結構なのよ。話さへ出來れば好いんだから。』かう小萬が言つたの

『もう好いよ。そんなに送つて來て呉れなくつても。』

『でも！』

『なアに、まだゐるんだから。明日歸るとか、明後日歸るとか言ふんぢやないんだから。その中、またゆつくり遊びに行くから……』

『でも……』

かう言つて、猶別れやうともせずに、小萬はあとからぐんぐんついて來た。

四辻を右に曲ると、家々の灯は次第にさびしくさびしくなつて行つた。ふと、あるところに來た時

『ちよつと寄つて行つて下さらない？　まだ話すことが澤山あるんだから……』

かう言つて小萬はそこに立留つた。

『でも、もう遲いぢやないか。』

『ちつとも遲いことなんかありやしませんよ。まだ九時少しすぎた位のもんですよ。』

『でも、またにしやう。』

『何うして？』

『何うしてでも……』

『まだ、あの時の薄情のつゞきをやるつもりなの？　貴方は？』

てゐておくれな。』

『え、好いわ、さうするわ……』

わかれて此方に來てから、

『今のは抱妓かえ？』

『え、さう……』

『幾人ゐるんだえ？　抱妓が？』

『あの妓一人ツきりよ。』

暫し默つて步いたが、

『それにしても、此處に來て、もう何年になるんだね？』

『もう二年と少し……』

『こゝに來る前は？』

『松木から、草津に行つて、それから此處に來たんです。』

『僕の故鄕だなどとは、ちつとも知らずに……？』

『えゝ、えゝ、そんなことは、ちつとも知りませんとも……』

いつか二人は大通をずつと四辻のところまで來た。

『さうでもありませんよ。』

『いや、少しも醉つてゐない。まだしつかりしてゐる。』

『さうかしら。』

こんな平凡な話をしながら、二人は灯の處々についてゐるさびしい町の大通の方へと出て來た。

『姐さん。』

ふと闇の中から黑い姿があらはれたと思ふと、すれ違ひざまに、覗くやうにして見てから聲をかけたものがあつた。小萬は立ち留つた。

『お前かえ? 何うしたの。』

『今、迎へに來たんですの。』

『さう――』

かう言つて、顏を合せるやうにして、何か小聲で囁くやうに二語三語言つたが、『是非、行かなけりやならないお座敷があるからッてね。ね。なるたけ早く歸つて行くには行くけども……』

『ぢや、一時間位?』

『さアね。その位だとは思ふけれど……』

かう言つて、また小聲で何か言つて、『歸るまで、お座敷に出ないでも好いから、お前さんが相手をし

かう言つて、かの女はほつと呼吸をした。

『何にも言ひはしなかつたけども、魘されてゐたらしいね。大きな眼を明いて何か見てゐたよ。』

『さう――大きな眼を明いて？』

かう言つてかの女はさびしく無氣味に笑つた。その無氣味な笑顏を、かれは今でも――十年經つた今でもかの女の上に捜し出すことが出來るやうな氣がした。

三十二

『ちよつと待つて下さい……、私、其處まで送つて行くから。』

かう言つて、小萬はちよつと帳場の方へ行つたが、すぐ戻つて來て、褄を取つて、かれと一緒に外に出た。

『醉つた。隨分醉つた。飮んだからな。』

『さう、そんなに醉ひましたかね。昔から比べると、弱くなりましたね。』

『丸で此頃は飮まないのだもの。』

かう言つたが、すぐ折り返して、『それから比べると、お前は強くなつたね。ちつとも醉つてゐないぢやないか。』

を刻む音ばかりが靜かにあたりに冴えわたつてきこえてゐた。ふと、大きな眼を明いて、凝と空間を見詰めてゐるかの女に氣が附いたかれは、

『何うしたんだえ？』

かう訊いて見た。

『…………』

『何か音でもした？』

『…………』

『え、おい？　何うした？』

『…………』

それでもまだ默つて、かの女はぢつと空間を熱心に見詰めてゐた。

その大きな黑い眼！　深い海の祕密を殘りなくそこに包藏したやうな、または海底の暗い底の底に、美しい珊瑚の色彩を覗いたやうな眼は、不思議な印象をかれに與へた。かれは默つてぢつと見詰めた。

暫くさうした不思議な光景はつゞいた。

やがて氣がついたやうに、また初めてその恐怖から遁れて來たやうに、

『何か言つて……？　私？』

やうに――。

そして、さういふ場合には、かの女はいつも何とも言はれない不愉快な、あさましい顏の表情をして『だつて、爲方がないんだもの。』と言つて、その不可思議な運命の命ずるまゝに動いて行つた。かの女は曾てかれに向つて、『何うしても爲方がないんです。かういふ運なんですツて……私は――。折角正しい方へ、好い方へ向つて行つたと思ふと、すぐあるものがやつて來て、そして私を不遇な路の方へ伴れて行くんですツて。だから、何うしても爲方がない。何かの約束ごとか何かなんですつて。』かう言つたことがあつたが、實際そのあるものが――他人には見えずにかの女にのみ見える何物かがあつて、そしてそれがをりをりかの女を脅かすやうに見えた。

そしてそれは大抵、歡樂のエクスタシイに達した時とか、幸福の頂點に達した時とかに、突如としてやつて來るらしかつた。そしてまたその黑い影がやつて來るために、一種の恐怖と戰慄とを添へて來るために、その歡樂と幸福とは更に一層忘れ難いものとなるのであつた。かれは常に恐怖に震へるかの女の體を抱いた。

ある夜は、かの女はぢつと微暗い空間を見詰めた。

それは二階から下りて來るやうなところにある一間であつた。二人はうと〳〵した睡眠から覺めた。見ると、そこには電燈の光線が微暗く隣室からさし込んで來てゐて、深更らしい夜の空氣には、時計の時

い人生の艱難といふ感じが深くかれの心を埋めるやうにした。

かれは思はず再び溜息をついた。

三十一

かの女はもう昔のやうな美しさの、または艶かしさの持主ではなかつたけれども、それでも、その眼には、その眉には、その口のあたりには、昔の戀の感じが依然として殘つて漂つてゐるのをかれは見遁さなかつた。かの女はまた何んなに巧な戀の魔術を男に働かせ懸けて來るかわからなかつた。また何んな恐ろしい戀の爆裂彈をその相手に投げて行くかわからなかつた。

ふとその時、かれに思ひ出されて來たのは、かの女の心の底の底にかくされて、しかも力強く常に働いてゐる祕密であつた。そしてその不思議な祕密のために、かの女は或は右に、或は左に、或はまた思ひもかけない方向へも止むなく動いて行かなければならないらしく見えた。しかもある時には、それは單に祕密といふやうなものではなくて、ある不思議なかの女にのみ見える朧げな形のやうなものではないか、何等かの因緣見たいなものが絶えずかの女の身邊に纏綿してゐるのではないかと疑はれたことなどもないではなかつた。そしてそれがやつて來ると、かの女はいつもたはいなく引き寄せられて行つた否應なしに引寄せられて行つた。それがかの女の（如何ともすることの出來ない運命）ででもあるかの

『ぢき、來るよ……』

『くせがわるいのねえ。いつでも私が髮を結つてゐる時に歸るのねえ……。もう少しゐたつて好いぢやありませんか。』

それでも蟲が知らせたかして、その時かう言つてかの女はかれを引留めた。

『ぢや、また……』

『さう……ぢや、さやうなら。』

いつもはきまつて『行つてゐらつしやい。』と言ふのが例であつたが、其時に限つて『さやうなら。』と言つたことなども、後にはかれに度々思ひ出された。否、そればかりではなかつた。一年ほどして、旅から歸つて來た後にも、苦痛と懊惱とに堪へかねて、ひそかにその土地に出かけて行つて見たことがあつた。しかしもう其時には、かの女がかねがね言つてゐたやうに、もう其處に姿も影も留めてはゐなかつたのであつた。

それにしても、そのためによく苦しめられたかの女の欷歔——その啜り泣きを耳にすると、あらゆる悔恨が、あらゆる悲愁が、またあらゆる過去の罪業が再びそこに蘇つて來たやうな氣がして、かれ自身にも、過ぎ去つた年月、または思ひのまゝにならなかつた戀、廢墟に埋もれて了ふより他に何うすることも出來ないやうな心の狀態などが繰返して考へられた。續いて、人生の艱難——誰にもついて離れな

もう再び此家に來まい。もうかの女の顏は見まい。いつまでかうした爛れた戀に魂を捉へられてゐても爲方がない。こんなことをいつまでもやつてゐては、最後は死だ！　破滅だ！……かう思つて、默つてその家の入口の格子戸を明けて出て來た朝のことをかれは忘れなかつた。かれ等はそれまでにも何遍烈しい心の暗鬪、默鬪をやつたか知れなかつた。また、かれにしても何遍そこから離れて來ることを決心したかしれなかつた。しかもさう決心して來ても、いつも離れ難ない愛情がかれを裏切つた。『何う？いくらぢたばたしても、私の體から離れることは出來ないでせう！』かう言つて、勝ち誇つたものゝやうな表情をして、かの女が美しい顏を、豐な白い肌をかれに見せつけるやうにするのを見るその情けなさ、腹立しさ、また悲しさ！　しかしかれも遂にはそれに打勝つた。かれはその時そのかの女の家の格子戸を明けて出るとそのまゝ、直に遠い、遠い、とても容易に歸つて來ることの出來ないやうな旅をしたことを思ひ出した。

　それにしても、そのひそかにかの女を捨てゝ來た時のさまは、今でも猶はつきりとそれを眼の前に描くことが出來た。その時、かの女には髮結が來てゐて、緣側で、頻に髮を結つてゐた。かの女はさうした心がかれの胸の奥に潜んでゐるとは少しも知らずに、いつものやうに、平氣で、

『いつ、來るの？　今度は？』

かう半ば結ひかけた髮を此方に向けて言つた。

のために全く埋められて了はなければ、このかれの物語は The end になることは出來ないのではないか。

默つて坐つてゐたかの女は、不意にすつと立つて、庭に面した緣側の方へと行つた。かの女は手巾を顏に當てた。靜かに啜り泣く聲が洩れて聞えた。

三十

その欷歔は深くまた痛くかれの心に染みた。かれも次第に感傷的な心持にならずにはゐられなかつた。あらゆることが――その別れた頃にかれ等の周圍に巴渦を卷いてゐた氣分が、再びはつきりとかれの眼の前に生き返つて來た。

『貴方が來なくなれば、もう私は此土地にはゐませんから……。だつて、きまりがわるくつて、とても此處にはゐられやしませんもの……』かう言つたり、また時には、『もう、これからは、男の言ふことなんかは本當にしないで、どしどし男を騙してやるんだ。今までの仇を取るつもりで騙してやるんだ。』と言つたりした。『これでも遠くに行けば、相手にして吳れる人はいくらでもあるんですからね。』かう或時はわざとかれに向つて愛想づかしを言つてゐるやうな調子で、またはその身の持つた美しさ乃至艷やかさに十分自身を持つてゐるやうな口振で、皮肉な顏の表情をして見せたことなどもあつた。

『それは、さうだらうが、まア、あとで緩くり聞かう。』

かうきつぱり言つたかれは、いくらか昂奮した顔の表情をして見せた。

(今度こそはもう逃がしはしませんからね。)

女は女で、かう深く決心したやうな表情を名殘なくその顔やら態度やらに見せた。

かれの頭には、いろいろなことが往つたり來たりした。あの時から比べては、何んなに浮世のあら浪を凌いで泳いで來たか知れなかつた。また何んなに人間の魂の啜り泣くやうな光景に逢つて來たか知れなかつた。男女の歡樂が單に男女の歡樂である中は好い。またそれが互に泣いたり笑つたり喧嘩をしたりして濟んでゐる中は好い。しかし、一度それが魂と魂との問題になつて來ると、最後は何うしても死にまで到達せずには置かないのが男女の戀の行詰りではなかつたか。死に到達することに由つて、初めて戀はその滿足な贄を贏ち得て、そして妖しい得意な笑をその唇邊にたゝへ、元の寂々とした位置に戻つて行くのではなかつたか。かう思ふと、これまでに身の周圍に絡み着き、纏り着いて來てゐたさまざまの羈絆が、更に新に深い暗い影をもつてかれに迫つて來るのを感じた。

かれは佗しい佗しい氣がした。出來ることなら、かうしたあらゆる眼前の光景からそのまゝ遁れて行つて了ひたかつた。しかし果してそれは出來ることだらうか。たとへ、此處は遁れ去ることが出來たとしても、何處までもその羈絆はかれにつき纏つてやつて來はしないであらうか。かれの心も體も魂も、そ

話を無茶苦茶にかれに話し懸けたさまを歴々と眼の前に描き出すことが出來た。

かの女の言ふところに由ると、それからのかの女は非常な艱難に逢つたといふ。お話にも何にもならないやうな屈辱をも受けたといふ。かの女が一時自暴自棄になつて、その時は飲まなかつた酒をも飲み、男に對しても、大抵敵意を持つたやうになつたのも、皆なその時の失望が大きかつたためだといふ。かの女は大連にも行けば、北海道にも行き、また舞ひ戻つて來ては、東京から高崎へ行き、長野へ行き、松本へ行き、それからたうとうこんなところまで落ちて來たのだといふ。そして、その間のさまざまの辛い、悲しい、淺猿しい閲歴は、到底ちよつとやそつとでは話すことが出來ないほどであるといふ。『矢張、時節が來たんですね。私の心が透つたんですね。これで、一生、お目にかゝれずに終つて了ふやうなことは、それは何うしてもない……。それはない……。もしそんなことがあれば、それこそ神や佛もない世の中だ……。かういつも思つてゐましたが、たうとう御目にかゝることが出來ました。』かう言つて、凝とかれを見た深い淵のやうな眼の底には、涙が一杯ためられてあるのをかれは認めた。

『まア、しかしあとで緩り聞かう……。他の藝者や女中のゐる前で、昔の話をするのも、餘り具合が好いもんぢやないからね。』

『何アに構ひはしませんよ。私が思つて、思つて、恨みに思つてゐたことから考へれば、他に聞かれる位でやめてゐられるやうなものではなかつたんですから。』

やうに一つ二つ浮んで生き返つて來るらしく、殊に、かれをその前に置いては、一層堪へ難く思ひ出されて來るらしく、つとめて快活に、または無關心にならうとしてゐても、ともすれば、沈默勝に、且幽鬱になつて行くのを免れることが出來なかつた。

かれ等は彼等二人きりでなければ話すことの出來ないあらゆるものを持つてゐるのであつた。また他人の前では、とても互ひに打明けて話すことも出來ない悲哀と懊惱と苦痛とをひそかに持つてゐるのであつた。そしてそれに觸れて了はない中は、心も心でゐることが出來ず、魂も魂でゐることが出來ず、お互ひの身もお互の身一つであることが出來ないのであつた。かれも小萬も、をりをり堪へ難くなつて來たやうに、てんでに盃を口に持つて行つて當てた。

二十九

その夜は、かれの一生に取つて、尠くとも非常に重大な、印象の深い張詰めた一夜であつたことをかれは繰返して考へた。それにつけても今になつて、こんな田舍町で、かうした一夜がこつそりかれを待構へてゐやうとは誰が想像したであらうか。また、さうして別れた女が、十年近くの年月を經過した後に、その戀やら恨みやら心やらをかうしてかれに投げつけて來ようとは誰が想像したであらうか。かれは、他の妓達のちよつと席を外した間を窺つて、竟に堪へかねたといふやうにして、女が別れてからの

次第に時が經つにつれて、その烈しい激情の巴渦からも、互ひにいくらか離れて來たとは言ひながら、しかも容易に其動搖から脱却することは出來なかつた。別れて來た時が、互ひに無理で、薄情であつたために、言ひたいことを言ひ、話したいことを話し、恨むべきことを恨み、詫びるべきことを詫びて了はなければ、かうして相對して坐つてゐるにも、何となく互ひに壓迫されるやうな空氣を感ぜずにはゐられなかつた。しかし、それにも拘らず、表面では、平凡な無意味な會話が續いた。

『それにしても、こんなところにお前が來てるやうとは、夢にも知らなかつた……』

かう蒼白い顔を擡げて、始めて纔にかれの言つた時には、いくらかそれに引寄せられるといふやうにして、何時から、此處に來てゐるかなどといふことを小萬はかれに訊ねた。互ひに知つてゐる間であることを一座の女達に隱して置くわけにも行かなかつた。

玉葉は言つた。

『さうなの、まア……。こちらの方を十年も前に姐さんが知つてゐて、そして、それが兩方で知らずに、不意に此處に一緒になつたの……。まア、ねえ、めづらしいわねえ、奇遇だわねえ。』

『本當に奇遇ねえ。』

かう千代松も聲を合はせて言つた。

しかし、小萬には、種々なこと——昔の辛かつた、悲しかつた、または口惜しかつたことが今更らの

『さう？――』

かう長く引張つて言つて、そして深く考へるやうな顏の表情をした。

女中は訊いた。

『知つてゐるお客？』

『いゝえ、別にさう深くも知つてゐる人ぢやないけれども……』

かういくらか、濁らせて小萬は言つたが、女中は別に追求しようともせずに、『姐さんを知つてゐるやうなことは少しも言はなかつたわ。唯、年増を一人かけて呉れッて言ふから、それで姐さんをかけたばかしなの。』

『そして來たのはいつ？』

『もう少しさつきよ……。まだ一時間とは經たないでせう。』

『ぢや、まだ、ちいちやんも、玉ちやんも、來たばかしなのね。』

『え、玉ちやんが一番先きに來て、それからちいちやんが、姐さんが來る少し前に來たばかしなの。』

『さう――』

かう言つてそのまゝ暫し考へるやうにして其處に立つてゐたが、いつまでさうして立つてゐる譯にも行かないので、やがて小萬は室の中に入つて行つた。

て行くやうな、また祕密に落ちて行かなければ滿足しないやうな體と心とがそこにあるのである。かれは、さうした羈絆から、未練から、魅力から、不健全から、何んなに骨を折つて遁れて來たかを思はずにはゐられなかつた。爭つたり、泣いたり、怒つたり、嘘をいつたり、――時には殆ど死ぬやうな思ひまでして、さうしてその羈絆から辛うじて離れて來たかれではなかつたか。

かれは種々な思ひに殆ど壓倒されるやうな重苦しさを總身に感じた。しかも、かれは盃をかの女にさすことを忘れなかつた。

『下さるの……？』

かう言つて微笑を湛へて、小萬はかれの顏を覗くやうにした。

二十八

廊下に出た女中のあとを追つて、そのまゝ立つて來た小萬は、

『あの人、私ツて言ふことを知つてゐて、そしてかけて吳れたの？』

『いゝえ。』

『ぢや、お名ざしでも何でもなかつたのね？』

『え、さうなの……』

かうして衰へ果てた、沈み果てた、再び浮び上ることは何うしても出來なくなつて了つたやうな今の心の廢墟の時に際して、急に、その昔の歡樂と苦痛と薄情と殘忍との對象物であつたかの女が突然姿をかれの前にあらはして來たといふことは、大きな不可思議な自然の裁判か何かのやうにかれには思はれた。最近に別れなくとも好いのに別れて來た女のことも、またはかうした故鄕の昔の廢墟の中にかの女がゐやうなどとは夢にも思ひもかけずにやつて來たといふことも、更にまた水の畔の女の幻影から、次第に町へ、次第に見えないかの女の方へと引張られて來たといふことも、すべて見えない不可思議の力の絲に操られて來てゐるので、あの草花の家の美しい女も、こゝにかうして坐つてゐる二人の若い妓も、かれをかの女の許に引張つて來るための唯の案內者に過ぎなかつたやうにも思はれて來た。

かれは思はず深い溜息をついた。

『何うなすつたの？　溜息なんかついて？』

かう大膽に小萬は言つて、そしてかれの傍に近寄つて來た。

かれは凝と其方を見た。

深い暗い淵のやうな眼がそこにあるのである。あらゆる惡とあらゆる恐怖とあらゆる戰慄とあらゆる歡樂とを同時に感じさせずには置かないやうな眼がそこにあるのである。また一度觸れては容易に離れることの出來ない肌がそこにあるのである。何んなに公然に始めた情事でも、次第に祕密の快樂に落ち

たつて感じられた。女の體にも、忘れられない昔が強い力で蘇つて來たらしかつた。

『ちいちやん達早かつたねえ。』

表面ではこんなことをわざと平氣で言つてゐたけれども、赫と體は燃えて來てゐるらしく、張詰めた小萬の顏には、蔽ふことの出來ない激情が歷々と現れて見えた。

『もう、さつきから來てるの？』

『いゝえ。』

かう言つた千代松にも、玉葉にも、またはそこに坐つてゐた女中にも、普通でない、何か事情のありさうなといふことは、それと直覺的に感じられて來てはゐたけれど、しかもかれ等はそれを面にはあらはさなかつた。かれ等は暫し默つてそのさまを見てゐた。

次第に、何と言つて好いかわからないやうな旋風が凄じく巴渦を卷いて來るのをかれは感じた。かれは坐つてぢつとしてゐられないやうな氣がした。

かれの體の脈管といふ脈管には、その昔のどす黑い、爛れた膿のやうな異樣な血が逆流して、そしてそれがそこに坐つてゐる女の體の血の中に流れ込んでゐるのではないかと思はれた。また、自分の蒔いた種は何うしても刈らなければならない、自分の犯した罪過は、何うしても一度は酬はれなければならないといふやうな心持が、鋸屑を詰めたやうに混雜したかれの頭の中からぽつかり一つ浮んで來た。と、

その衝動は決してかれに取つて愉快なものではなかつた。寧ろそれは悔恨と罪過と懺悔との同時に挾つて巴渦を卷いて來るやうな、出來ることなら一生逢はずに濟ませたかつた女に突然面を會はせなければならなくなつたやうな、または夥しい過去の戀の罪悪の責任を改めて新に强ひられるやうな感じであつた。そしてそれは、急に、强く魂を動搖させずには置かないやうな力でかれを襲つて來た。

『ま！』

女もたしかにはつとしたらしかつた。われ知らずかう微かに叫びに似た聲を最初に放つたが、しかもお座敷といふことゝ、他に藝者や女中がゐるといふことゝに遮られて、その激情をあらはにあたりに示すことが出來なかつたらしく、

『今晩は――』と言つたまゝ、いつものやうに女中のゐるところに坐つた。

『遲かつたでせう。』

かう女中に向つて言ひながら、心の祕密をさとられないやうに手巾で胸のあたりを靜かに煽いで見せた。わざと客の方は見ないやうにした。

二十七

二度目に見交はした二人の眼の中には、互ひに互ひの心を强く壓迫するやうな氣分が名殘なく張りわ

千代松はかう言つて酌をしながら、『でも、藝者のおつくりの長いのは、不名譽ぢやなくつてよ、ねえ貴方？』

昔ならば、『不名譽どころか、おつくりの長い方が藝者は好いんだ。』とか何とかと言つて、賑かに騷いだり笑つたりするのが例であつたが、今はかれにはもうさうした氣分は少しも起つて來なかつた。美しい言葉の技術、聲と調子との上にひとり手に湧き出して來るはなやかな空氣、さうしたものにも、かれは默つて、唯盃を口に當てた。一座は容易に調子づいて來さうにも見えなかつた。

『誰か、他の姐さん來るの？』

こんなことを千代松はそつと玉葉に訊いたりした。

その時、帳場の方で、何か二言三言はしやいだ言葉で言つて、足音輕く此方にやつて來る妓の氣勢がした。

（小萬姐さん――？）

口に出してこそ言はなかつたけれども、千代松も玉葉も、皆さう思つて、其方の方を見た。

すらりとした姿がすぐ其處にあらはれた――否その姿があらはれると同時に、倫藏に向つて盃を口に當てゝゐたかれは、はつとして危くそれを下に落さうとした。かれは體も飛び上るやうな衝動を總身に感じた。

と長く引張るやうにして言つて、千代松はちよつと客の方を見た。

『別品さんだね……。そこにゐた人は？』かれは暫くしてから言つて、その小鶴といふ姐さんの話を持ち出して見た。しかし別に變つたこともなかつた。郡長の家の裏で見た女と同じであるか否かといふことも、この女達に出つては本當に確めることは出來なかつた。話はすぐ普通のかうした席の話になつて行つた。今までいくらか押された形になつてゐた玉葉も千代松が來てから俄にはしやぎ出した。

女中は笑ひながら千代松に言つた。

『さつき、くしやみは出なくつて？』

『何うして？……あゝわかつた……。私のわる口を言つたのね？』

『さうぢやないよ……』

『さうよ、さうよ。屹度さうよ。玉葉さん、さうでせう？』

『わる口ぢやないわ。本當のことを言つたのよ。ねえ、お蝶姐さん。おつくりが長いから、ぐんぐん私が先に出て來たッていふ話をしたのよ。』

『矢張、惡口だわ。』

『だつて、本當だもの。』

『本當だッて、何だッて、ひどいわ。』

言へば、さうだわ。知つてるわ。あとから、あなたが靜かに緩ぐら歩いてゐらしつたのを知つてるわ。

長押の方に眼をやつて、『さう、さう、あの帽子を――』

『さう言へば幾度も幾度も、振返つて見てゐたよ。』

『私が――』(まさか! と言はうとして言はずに)『さう? 私が……。』

かう言つて玉葉はまたかれの盃に酌をした。

女中はやがて出て行つた。

暫くして再び入つて來た時には、註文した二三品の肴を大きな黒く塗つた盆に載せて持つて來て、そしてそれを一つ一つ餉臺の上に並べた。

其時廊下に輕い足音がきこえたと思ふと、もう一人の方の色の白い、頬の豊かな、千代松といふ妓がやがて其處に姿を現はした。

二十六

莞爾した愛嬌のある顔をあたりに輝かしながら、玉葉の傍に並ぶやうにして千代松が坐ると、玉葉は笑ひながら顔を寄せて、何か頻に小聲で囁いて見せた。

『さう――』

とがある客ではないか、それともまた自分の内所事でもよく知つてゐて、それでわざとかうして聘んだ見たのではないかといふやうに、暫しあたりを捜すやうにしたが、

『何うして知つてるの？　姐さん？』

『見てゐたんだもの。』

『姐さんが――？　何處で？』

『何處つて、ね、貴方――』

女中は初めての客とは思はれないやうに如才なく打解けた口のきゝ方をして、『人がいくら聲をかけても、聞えないんだもの……。夢中で、二人で、何かお饒舌をして歩いて行くんだもの。』

『さう？　本當なの？　うそでせう？』何が何だか譯がわからないといふやうな顏をして、玉葉は手巾を輕く振つた。

『僕が見てたんだよ。僕があとからついて歩いて來たんだよ。』

かれは眞面目にかう言つて了つた。

『だから、お禮をお言ひよ。あとからついてゐらしつて、お前さん達の樣子が餘り好いもんだから、それで此處に來てかけて下すつたんだとさ。』

『さう――難有いわね……』玉葉はかう言つたが、更に改めてかれの顏を見るやうにして、『あ、さう

……。待つてゐたけど、なかなからしいから、ぐんぐん來ちやつたの。』

『さうね、ちいちやんは、何方かと言へば、長い方ね。』

『長いわよ、それは隨分……。それに、何んなにいそがれる時でも、平氣で落附いてゐるわ。だから火事がそこまで燒けて來ても、ちいちやんは、平氣で髮を梳いてゐるだらうツて皆なして言ふのよ。』

『まさか、さうでもないだらうけども……』

『その代り、綺麗にはなるわねえ……。すつかり別な人のやうになるわねえ。』

かう言つたが、そのまゝ膝を進めて、餉臺の上にあつた德利を取つて、かれの顏を見ながら酌をした。

女中は笑ひながら言つた。

『玉ちやん、さつき、ちいちやんと小鶴姐さんの許に行つたでせう。そして、もう少しさつき歸つて來たでせう。』

『え、よく知つてるわね。』

『天眼通でちやんと見てゐたんだもの、ねえ、姐さん。』

かう傍から笑ひながらかれは口を挿んだ。女中も大きく笑つて見せた。

玉葉と呼ばれたその妓は、ぢつと客の顏を見て、何處かで知つてゐる人ではないか、一度位聘ばれたこ

『この町では、一番よく賣れた妓でしたから。』

『何うも、此間見かけたのと、今日見たのと、何うしても、同じ人のやうに思はれて爲方がないんだけども……』

『それぢや矢張、小鶴さんでしたでせう。郡長さんのお宅なら、行かないに限つたことはないんですから。』

女中はかう言ひながら、笑つてまた酌をした。

二十五

『今晩は――』

かう言つて、最初に背の高い、瘦削な、顏に何處かくしやくしやしたところのある方がやつて來て、上目でちよつと覗くやうにしてかれを見たが、それが見知らない、半ば老いた、何の興味も惹き起しさうにもない客であるのに失望したといふやうに、そのまゝ女中のゐる傍に來て靜かに坐つた。

『ちいちやんは？』

かう女中は話し懸けた。

『もう來るでせう。お湯からは、一緒に出て來たんですけども、あの人はおつくりが長いんですもの

もうすつかり夜になつて了つてゐたけれども、それでもまだ微かに殘つた夕日の餘照は、庭の松の茂みの間からかけて、遙に町の外廓を取卷いた濶々とした野をかれに思はせるに十分であつた。

かれはこゝにあがるとすぐ、さつき見た草花の咲いてゐる四目垣の家の話を女中にしたことを思ひ出した。と、女中には、すぐそれがわかつた。『あゝそれは小鶴さんの家でせう。』かう言つて、つい今年の春そこに家を持つまで、矢張此處に出てゐたことなどを話した。

『變なことを聞くやうだが、こゝの郡長さんと何かになつてゐはしないかね？』

『小鶴さんがですか。』

『あゝ。』

『郡長さんと――？　そんなことは存じませんが。』かう言つて女中は首を傾けた。

かれは兎に角、さつきかれの先に立つて歩いて來た二人の若い妓をかけ、續いて誰か年増の藝の出來るものを一人聘んで貰ふことを頼み、それから、沼でとれる鮒のあらひを持つて來ることを命じた。

妓がまだやつて來ない前に、女中は、通し物で酒を運んで來た。酌をしながら、

『小鶴さん、御存じなんですか。』

『いや、知りも何にもしないんだけれど、さつき見たばかりだけどもね。十日ほど前にも、一度郡長の家の近所で見たやうな氣がするから、それで聞いて見たんだよ。ちよつと綺麗な人だね』

が、ゆくりなくさつきの二人の若い女に催されて、突然かれを襲つて來たのか。それともまた餘りにじめじめした廢墟の氣分の中にゐるのに堪へかねて、せめては一夕なりとも、その昔の美しい音樂に耳を樂しませ、心を慰めやうとしたのであるか。それは何れが主なる原因であつたかわからなかつたけれども、兎に角暫く經つた後には、かれはその祠の境內の近くにある、瀟洒な、小ぢんまりした料理屋の明るい一間の中にその身を發見した。

かれは一種の淡い興のひそかに胸に漲りわたつて來るのを感じた。少くともかれに取つては――曾てさうした空氣に浸ることを半ば生命のやうに思つたかれに取つては、久しくさうした逸樂に遠ざかつて居たとは言へ、またさうした社會に生活する妓達の內幕を、底の底まで知り拔いて、更に興味を惹かなくなつてゐたとは言へ、さりとて滿更捨て去つて後を顧みても見ないといふやうなものでもなかつた。かれは靜かにあたりを見廻した。

かれはそこにいろいろの花が盛花式に混雜と生けてあるのを見た。何う見ても贋物としか思はれない文晁の山水の二幅對が並べて床の間に懸られてあるのを見た。無數の布袋の集つて戲れてゐるさまを描いた長い額の橫にかけられてあるのを見た。しかもかれに取つて、一番好かつたことは、あたりが思ひ切つて靜かで、世離れてゐて、ぢつと坐つてゐると、全く孤舟の中にでも一人ゐるやうな氣がすることであつた。かれは靜かに立つて障子を明けて見た。

道を傳つて、樓門の方へとかれは出て行つた。

かれの胸には種々のことが盡きずに流れた。過去の賑かな半生に對する哀愁――唯歡樂あるを知つて悲哀あることなどは少しも念頭に置かなかつた時代に對する哀愁が、中でも殊に深くかれを捉へた。かれの頭にはかれの經て來た美しい、賑やかな、または盲目に張り詰めたシインが、いくつとなく重り合つて現れて見えた。

と、この境内にも、ある時、ある夜、二つの黑い影が繰返しても繰返しても盡きない戀を語つてゐるさまがはつきりとかれの眼の前に描かれて見えた。何處まで行つても盡きないのは戀だ……。また何處まで行つても際限なく新しい力を持つてあらはれて來るのは戀だ……。

しかも、戀の廢墟にさまよつてゐるやうなかれが、かうして古い町の空氣の中に、ひとりぼつねんと相手もなしに彷徨してゐるといふことに思ひ到つた時には、堪らなく悲しい哀愁が胸をつくやうに烈しく強く集つて來るのをかれは感じた。そしてその哀愁は次第に暮れて行く夕暮のさびしい空氣に雜り合つた。

二十四

そのあたりの靜かな空氣がかれの心を惹いたのか。それともまた久しく忘れたやうになつてゐた歡樂

れた廊下、その奥の突當りにある狹い室、そこに絡み合つたり縺れ合つたりする二つの心、さういふ光景は、既に、既に、餘りに遠くかれの胸から去つて了つてゐたけれども、それでも、かうした町にも、矢張、曾てはかれのやうな心、曾てはかの女のやうな心が澤山に澤山に巴渦を卷いてゐて、待つ身の辛さもあれば、逢ふまでの嬉れしさもあるかと思ふと、遠い過去が再びかれの眼の前に生きて動いて來るやうに思はれた。かれは靜かにそこに立盡した。

しかし、夕日の影は、まだ全く消えてはゐなかつた。仰ぐと、大きな欅の梢に、その餘照がまだ明るく、境内もしんとして、夜に想像されるあたりの賑かさなどはまだ少しもその氣勢を示さなかつた。

かれは靜かに歩を祠の方へと運んで行つた。

古くはなつたけれども、祠堂は昔と少しも變つてゐなかつた。境内の到るところに栽ゑられてある梅の老樹、祠堂の前面にある大きな樓門、それも昔のまゝであつた。かれは駒下駄を引摺るやうにして靜かに歩いて祠堂の前に行つて、そこに澤山かゝげられてある古い昔の繪馬などを眺めた。

かれが夜學にやつて來た漢學の塾の家屋は、依然として昔のまゝに殘つてゐたけれども、今はそこに二軒にも三軒にも割られて人が住んでゐるらしく、その此方の角の家からは、夕暮時を忙しく赤兒の啼く聲などが頻にした。

かれの鳴した鈴の音は、暫ししんとした夕暮の空氣の中にきこえてゐたが、やがて今度は正面の敷石

かつた大弓場があつたり、小さな瀟洒な家が二三軒庇を並べてゐたりするのが映つた。氣が附いて見ると、そこは古い天神の祠のあるところで、かれの少年の頃には、そこに漢學の先生の家塾があつて、夜などよくそこまで勉強に出かけた處であつた。かれはこの境内がさうした賑かな灯の巷とならうとは夢にも思はなかつた。かれは不思議な氣がした。丸い軒燈に屋號の書いてある角の家からは、稽古の三味線の音が頻にきこえた。

二十三

かれの先に歩いて行つた二人の若い女は、やがてその奧にある、矢張丸い軒燈のある格子戶の家へと入つて了つた。矢張、かれの想像は過たなかつたのである。

賑かに笑つたり話したりする聲がそこゝから聞えて來る。ある家からは、近所のお座敷に行くらしい白粉を眞白につけた妓が、褄を取つて格子を明けて出て來たが、そこに立つてゐるかれの方にちよつとながし目を與れたまゝ、小刻みな足音を立てゝ急いで通の方へと出て行つた。

何となく意氣な、また何處となく艶かしい空氣があたりに滿ちわたつて、かうした舊い町にも、かういふところがあるのかと思はれた。かれは一種遠い昔のなつかしい匂ひを嗅ぐやうな氣がした。

いろいろなことが浮んで來た。賑かな明るい灯の中、水に臨んだ高樓の一間、壁と壁とで細くしきら

い色彩をあたりに漲らせた。

と、かれの心は、いつとはなしに、その方へと引寄せられて行つた。たしかに素人ぢやない……。この町の藝者に相違ない。こんな風に思つたかれは、『では、さつきの女も矢張さうした藝者上りか何かではないか。此町の藝者で、旦那が出來て、そしてあゝして圍はれてゐるのではないか。あの二人の若い女の姐さんか何かになつてゐて、それであゝして訪問して行つたのではないか。』

こんなことを思ひながら、かれはそのまゝ二人のあとをつけて行つた。二人づれはそれとは知らずに、頻に何か話しながら靜かに歩いて行つた。

少し行つたところで、

『夕日が暑いわねえ。』

かう言つて、もう一人の方もサツとパラソルを開いた。で、その間に五六間の距離を置いたまゝに、かれ等はいつか町の家並のつゞいてゐる通りへと行つた。餘り人通りのない、一方には寺の門などのある、白い赤い木槿の垣などの見える、さびしい處を五六町行つたと思ふと、やがて路は急に細い通りの中に曲つて入つて行つた。

二人づれは其方へと行つた。

かれもそのあとから續いた。かれの眼には、やがて大きな欅の樹の根を張つたところに淺黄暖簾のか

したやうな氣がしたからである。かれは自分の眼を疑はずにはゐられなかつた。かれは凝と立ち盡した。
しかも再びわれに返つた時には、その女の姿は既に其處に見えてゐなかつた。垣の外を並んで歩いて行く二人の女と何か二言三言高い聲で笑つて話し合つた聲が耳についてゐるだけで、あとには、紅い白い綺麗な草花と、それを輕く吹き搖かす夕風と、長い空しい緣側とが殘つた。

『それにしても本當にあの女かしら？　あの水の畔で見た女と同じ女かしら？』

かうかれは自問自答して見た。しかしはつきりした答は竟にやつて來なかつた。あの女に似てゐるといふことは確かであるか、全く異つてゐる女であるのかも知れないやうな氣がした。或はまたかれとその女の間にさうした幻影がいつも立つてゐたのではないかといふやうにも……。

（頭がわるい、頭がわるい。）

かう思つて、かれは二つ三つ自分の後頭部を叩きながら歩いた。もう自分は駄目なのではないかといふやうな氣も何處かでした。自分の心は、自分の眼は、もう既に餘りに眩ゆい現代の光線を取り入れるに堪へなくなつてゐるのではないか。全く現代の烈しい潮流の巴渦の外に流れ出して了つて行つてゐるのではないか。自分の頭の中は腐つた址や滅びた塵埃の臭で一杯になつてゐるのではないか、かう思ひながら、歩いて行くかれの前には、そこから出て來たその二人の若い女が、頻に何か笑ひながら話して行くのが見えた。赤い帶揚だの、長い髱だの、一人の方の夕日に開いたパラソルだのがチラチラと美し

や、棕櫚の林などもその附近にあつた。疎い生垣にその周圍を取卷かせて、中に草花を一面に咲かせてゐるやうな家もあつた。

突如としてある美しい聲は起つた。

『ぢや、左樣なら……』

『またいらつしやいね。』

『えゝ、ぢや、旦那によろしくね。』

疎くはあつても、兎に角林のかげに路はなつてゐるので、その聲は何處から起つて來たのかちよつとかれには見當がつかなかつた。

二十二

ふとかれは草花の咲いてゐる家の四目垣の中から、二人の若い女が靜かに此方へと出て來るのを見た。美しい聲は其處から來たのであつた。つゞいてかれはその女達の出て來た家の緣側に、色の白い、髮を粹な丸髷に結つた二十五六の女が、夕暮近い空氣の中にその姿をくつきりと見せて、此方を見送つて立つてゐるのを認めた。

かれはつとした。何故なら、かれはそこに、曩の日に其二階屋の裏の水の畔に見た幻影を再び目に

皆々荷擔して巷に立つたさまを想像した。かれは町の四面を護衛した見張所の址を見たいと思つた。

一番先に、かれは北口の柵のあつたところへと行つて見た。成ほどそこは渡良瀬川の番所から來る最も重要の場所であるらしく、宇都宮の藩主が城を幕府軍に奪はれて、深夜にひそかに此處まで落ち延びて來たさまなぞがそれと想像された。しかし今日では、其處には、さうした昔の跡らしいあとはもう何も殘つてゐなかつた。唯、番所があつたといふあたりがいくらか小高くなつてゐるのを見たばかりであつた。

かれは成たけ町の外廓を縫ふやうにして、西口から南口の方へと歩いて行つた。それは靜かな晴れた好い秋の日であつた。ところどころに、濠の跡らしい跡がわづかに殘つてゐるところもないではなかつたけれども、大抵畑になつて平らに黄熟した稻田と續いてゐるのをかれは見た。西口の番所跡と思はれるところに行つて、かれは長い間立盡した。

かれの前には、野が濶く展けられてあつた。そしてその向うには、或ところは紫色に、或るところは緑に、またあるところは銀色にかゞやいた山巒の起伏が美しく眺められた。午後四時すぎの日影は、影といふ影を皆な大きく黑くして見せた。ふと見ると、その濶い野の末に、玩弄具のやうな小さな軌道車が、白い煙をぽつぽつと晴れた空に漲らせながら、靜かに走つてゐるのが見えた。

やがてかれは畑の中の路を歩いて、再び殘つた濠の方へと出て來た。その濠は暫し續いた。淡竹の藪

まの理髪店があつたり、母親と正月の賣出によく酒や醬油を買ひに來た大きな造酒屋がそのまゝになつてゐたりした。

（人の命ほど短いものはない。家屋や樹木はまだ依然として元のまゝに殘つてゐる。人間があらゆる生活の苦しみを嘗めて、そして徒らに白髮になつたり、死んだりしてゐるのにも頓着せずに殘つてる。）

こんなことを思ひながら、かれは町の大通りの方へと歩いて行つた。中には、新しく出來た家屋もあり、平屋建であつた家屋に二階をつぎ足したやうな家もあつたけれども、家並は大抵は元のまゝで、其處に出入りする人達の上にも、三四十年の年月が忽ちにして經つたとは、何うしても思はれないやうな氣持がした。

かれは維新當時の町のさま——幕府の兵士が町を取卷いたといふ報道に驚かされた頃や、東山道の總督が五六百の兵士と一緒に入つて來た時のさまなどを眼の前に描きながら歩いた。縱橫に町の中を縫つて歩く筒袖だんぶくろの兵士、十人ばかりで綝るやうに曳いて行く舊式の野砲二三門、夕方の時の太鼓が大手の門の樹の上に鳴り響くと、町の周圍を取卷いた番所々々の見張りの柵の木戶はすつかり閉められて、町そのものも、全く城の一部になつて了つたやうな光景を呈した。

かれは藩士を始め藩の人々が、時勢の方向を定めかねて、何方に行つて好いかわからなかつたさまを想像した。今日は味方でも、明日は何うなるかわからないやうな動搖と不安とを抱いて、侍も、町人も

祕に持つて行つて。

かうした暗い想像は、やがてかれを女の方へ伴れて行つた。かの女は今は何うしてゐるであらうか。離れて來た一方のかれが、かう深く憂鬱と懊惱とに陷り果てゝゐるのに、かの女は美しい晴れやかな明るい顏を都會の街頭に見せて歩いてゐるであらうか。苦しい心の影などは微塵も抱くことなしに、絕えず新しい男の眼を惑はせてゐるであらうか。急に、佗しさがかれの心に大きな蓋をするやうに簇つて來た。

『死――』

再びかれはかう強く叫んだ。死があらゆるものを解決するであらう。あらゆる心の重荷を輕くして呉れるだらう。そしてかれのこれまでやつて來た心に、完全に廢墟をつくつて呉れるだらう。そしてそのあとには草が生えるだらう。誰もかうした心の悶えを持つて生きてゐたかれのあつたことを知るものはなくなつて了ふであらう。

二十一

ある日かれは町の方へと出かけて行つて見た。町は以前と比べて夥しく變つて了つたけれども、それでもかれの幼かつた時分の空氣は、まだ何處かにか微かに巴渦を卷いて殘つてゐて、四辻の角に昔のま

た。死はとても選ばるべきものではない。何んな苦痛に際しても、何んな罪惡のどん底に沈んでも。容易に死は考へられるものではない。成ほどそれはさうであらう。それに相違ないであらう。しかし一面から見れば、死ほどまた容易にやつて來るものはない。何の先觸もなく、何の豫感もなく、突如として死はやつて來る。避くべからずにやつて來る。不可思議にやつて來る。そこに――すぐそこにもう死が的確にやつて來てゐるのではないか。

かう考へて來たかれは、いつもにもなくあたりを見廻した。

火繩銃の口を咽喉に當てゝ、靜かに引金を引いた藩士の姿が、はつきりかれの眼の前に現れ出して來た。

『ドン――』

急に凄じい音がした。つゞいて半白く半灰色の煙が、丁度寫眞を撮したあとのマグネシユウムの煙のやうに、一面に天井に漲りわたつた。同時に、自殺した藩士の體はぱつたりと後に倒れた。やがてその音に驚かされた家人がそこに入つて來た……。

もしかれが死に向つて行くとすれば、矢張さうした光景があたりを驚かすに相違なかつた。そしてその死の原因に就いても、いろ〳〵に世間の人達が想像を逞しうするに相違なかつた。或はかれの生活に當はめ、或は女に對するかれの苦惱に引き附け、でなければ誰もその本當のことは知ることの出來ない神

かう言つて、かれ等は酒に、女に、僅にその憂鬱を慰めやうとしたのであつた。悲しいその明るい灯に！

二十

急にかれの心は暗くなつた。塵埃のやうなもの、鋸屑のやうなもの、砂のやうなものが一杯に頭に詰つて感じられた。人間がかうして平氣で生きてゐるのが全くわからなくなつて來た。

過ぎ去つた人達の零落や、敗滅や、苦痛や、さうしたもの、跡をいくら探つて見ても際限がなかつた。またいくら同感して見たところで爲方がなかつた。それはかれの憂鬱と懊惱とを一時まぎらせる手段にはなるにはなつても、到底それでその綻びかけた創口を再び縫ひ合はせることは出來なかつた。かれは泥沼の中に半ば身を埋めて了つたやうなかれの姿を其處に發見した。

木から墜ちた猿のやうな生活でも、それでもまだその昔の人達の苦惱には、それを支へる柱があつた。すつかり倒れて了はずにも濟むやうなものがあつた。しかし、かれにはそれがあつたであらうか。全く縋るものがなくなつて了つてゐはしなかつたであらうか。

『死――』

丁度、曉近く、ほの白い霧の中のあるものに呼ばれて、急いで川に赴いたN翁のことなどが浮んで來

來た。また眞暗な、さびしい路からそこに出て行く時には、ぱつと世間が急に變つたやうに明るくなつたことを思ひ出すことが出來た。女の卑しげに且つ高らかに笑ふ聲がヤケに鳴る三味線の音に雜つてきかれた。

『皆な、奉還したものが遊んでゐるだよ。明日にも食ふことも出來なくなることも知らねえで、不斷握つたためしもないやうな大金を握つたて、それで、あゝして遊んでゐるだよ。』

かう母親は誰かに向つて、苦々しげに言つてゐるのを傍で聞いてゐたことがあつたが――しかも幼いかれには、その言つたことの何ういふことであるか、奉還して平生握つたこともない大金を握つたといふことは、何ういふことであるか、また、かうした賑やかな灯が何うして突如としてそこに現れて來たか、それは丸で解らなかつたが、今にして考へると、その明るい灯にも、その賑かな三味線の音にも、悲しい敗滅と零落との氣分が名殘をしく絡み着きまつはり着いてゐたのであつた。何うともなるやうになれ！　何うせなくなつて了ふ金錢だ！　おそかれ早かれ無くなつて了ふ金錢だ……。かう誰も彼も思つて、その金をつかみ出して、そこに、その明るい灯のもとに、または美しい女のゐる處へと出かけて行つた。

『飲めよ、唄へよ。何うせ一生は一生だ。くよくよ暮すよりは、面白く遊ぶ方が一得だ。金がなくなつたら、その時、あとのことは考へても、決して遲くはないぢや。』

捨て、何も彼も捨て盡して、さてそれで、その望むまゝの生活の保障を得られたかと言へば、それをも決してさう簡單には得られなかつたのである。從つてかれ等の多くは、唯佗しく徒食した。困る、困ると言ひながら、容易にその昔の巣の中から出て行くことが出來なかつた。

思ふに、さうした昔の人達は、木から落ちた猿と同じやうであつたであらう。またかれ等の行く先に何等微かな光明をも認めることが出來なかつたであらう。いかなる奮發をしやうとしても、新しい生活を築き上げやうとしても、一歩先は五里霧中で、何うして好いかわからなかつたであらう。唯、手をつかねて、日晷の過ぎて行くのを見詰めてゐるばかりであつたであらう。じめじめと唯腐つて行くやうな氣分、さうした空氣がさびしく到る處に滿ち渡つてゐるばかりであつたであらう。

であるのに、かれの幼い記憶では、大名小路から此方に入つて來るところに、お城の燒けた時の火事にも燒けずにそのまゝ殘つてゐる七八軒の人家があつた。それは殿樣のゐる時分には、無論士族の住んでゐたところで、主としてお徒士衆などが入つてゐたが、それがいつの間にか賑やかな茶屋町と變つて、色の生白い女などが澤山に入り込んで來て、夜は明るい灯や三味線の音があたりを思ひもかけず賑やかにしてゐたことを覺えてゐる。

その頃、幼いかれは母親に伴れられて、其處を通つては、よく町の方へと行つた。

考へれば考へるほど、かれはそこだけ拔け出したやうに明るく賑かであつたことを思ひ出すことが出

中にもその姿は見當らなかつた。恐ろしい不祥な事件の豫覺が急に誰の胸にも襲つて來た。

『川へ行つたぢやねえか！　行つて見ろ、行つて見ろ。』

かうをばさんは叫んだ。皆な土手の上へとのぼつて行つた。

果してＮ翁は其處に發見された。かれの行つて見た時には、まだその死屍が、淡竹の深く繁つた、水の一ところ淀んだ深淵にふはふはと浮んでゐるのが見られた。かれは恐ろしくて恐ろしくつて、體がぶるぶると戰へて爲方がなかつたことを思ひ出した。それにしても何うしてＮ翁は死んだのであらう？　子供もあり妻もあり田地もある身で、何うしてさうした自殺などを思ひ立つたのであらう？　その疑問はかれにはわからなかつた。かなりに大きくなつても解らなかつた。しかし、今になつては、その悲劇の原因はひし〳〵とかれの胸に迫つて響いて來た。

十九

祖父母や父母の通つて來た昔の道が、朧ろ氣ながらも次第にかれの心に絡み着くやうになつた。零落、敗滅、自暴自棄、さうした腐つたやうな空氣の中に、かれ等はその日その日を送らなければならなかつたのである。新しい時代の生活の巴渦に面しては、容易に手も足も出ないやうな人達が多かつたのである。さうかと言つて、馴れない百姓や商人になつて、今まで威張つた矜持をも捨て權威をも

生きてゐて吳れゝば、それこそ何んなに好かつたか知れなかつたのに……』かう言つて涙をおとさぬばかりにした。

その細君は何方かと言へば、色の蒼白い、さびしさうな顏をしてゐるをばさんであつた。かれ等は瓦解後、家祿を奉還して、城下から一里ほどあるその川の畔に、一町ほどの田畠を買つて、そして農に歸して了つてゐたのであつた。その男の兒を訪ねて行く度に、かれはそのN翁が鍬や鋤を執つて、畠に耕してゐるのをよく見懸けた。翁はいつも莞爾して『よく來たな……』と言つてはかれを迎へた。

それは何でも秋の霧の深い朝であつたやうにかれは覺えてゐた。ふと、騷々しい母屋の氣勢に、かれと一緒に寢た男の兒もかれと一緒に眼を覺した。まだ夜は白々とあけたばかりであつた。

『助や、父さんがゐない、父さんがゐない――』

『父さんがゐない。』

をばさんの聲は殊に慌走つて震へてゐるやうにきこえた。

男の兒の長兄も次兄も既に起きて、あちこちとその父親の行方をさがしてゐた。

『父さん！　父さん！』

かう皆なが呼んだ。

しかし何處にもその答はなかつた。いつも朝早く入る習慣のある厠にもゐなければ、家の周圍の畠の

十八

かれの父親の従弟であつたN翁が身を渡良瀬川に投じた時の朝のさまは、今でもはつきりとかれの眼の前に浮んで見えた。かれはその時十一か二であつた。かれはその前の日にN翁の家に泊りに行つてゐた。N翁には丁度かれと同じ位の末の男の兒がゐたので、なんぞと言つては、土曜から日曜にかけて、よく泊りに出かけたものであつた。その時も、明日は川に釣りに行く筈で、いろいろその準備などをして、そして靜かにかれは別室にその男の兒と眠つた。

N翁は藩では大して重要な地位に身を置いてゐなかつたけれども、小才が利いたのと、普通の世間の事情に通じてゐたのと、交際が上手であつたのとで、かなりに重立つた人達の間に用ひられた。それに附近の各藩の侍達にも平生懇意なものが多かつたので、よく使になどやられたものであるといふことであつた。そして維新の戰爭の時には、かれの父親などと共に仙臺地方まで出かけて行つたりした。かれの記憶してゐるところに由ると、N翁は好いをぢさんであつた。やさしいところもあれば、しつかりした怖いところもあるやうなをぢさんだつた。N翁はかれが早く父に別れたのを常に悲しんで、將來、父の名を汚さないやうな豪いものにならなければならないことを常にかれに說いて聞かせた。否、そればかりではなかつた、かれの父親の話をする時には、いつも夥しく感情的になつて、「お前のお父さんさへ

とに心がけた。さうだ……。〔それに越したことはない。その昔の人達に現代の生活を發見し、それと同時に、現代の人達の生活の中に昔の人達の發見するに如くはない。誰も彼も同じだ。今も昔も少しも變りはしない。矢張、そこには、戀の涙があり、生か死かのパッションがあり、敗滅のリズムがあり、新しい芽の發生があるのである。自分のやつたことも、自分の戀の苦しみも、かうした今のやうなルゥインに似た心になつて行つた形も、皆なその昔の人達の心の徑路の中に、歷々と跡づけることが出來るのだ。〕こんなことをかれはをり／＼獨語した。

それにしても、さうした封建生活の一時の破壞？　一時の敗滅？　それは何んなに慘めな光景であつたであらうか。何んなに賴りない、悲しい一大變遷であつたであらうか。かれ等は家長のゐなくなつた後の城の全く荒草に委せられて行くのを凝と默つて見てゐなければならなかつたのである。否、城や屋敷ばかりではなかつた。その心の上にも草が生え、腐つた水が湛へるのに任せて置かなければならなかつたのである。そして唯、過ぎ來り過ぎ去つて行く時に面してさびしく立たなければならなかつたのである。かれの幼い頃の一つの記憶では、ある冬の霜の白い朝に、家老格の人の住んでゐるなまこしつくいの塀を透して、凄じい銃聲が聞えて、やがて人々が大騷ぎをしたことを覺えてゐるが、さうした悲劇は澤山に澤山にあつたのであつた。かれはその當時の敗滅の空氣が、今のかれの心と體の中に續いて來てゐるやうな氣がした。

或は槍を立て、行列を盛んにして、長い驛路を參覲交代に江戸に向つて行つたさま、さうした生活の中にも、矢張人の心は今と變らず、或は父母の愛、或は男女の戀、或は義、或は孝、或は惡、或は善、矢張同じやうに、義理人情の巴渦はそこに捲いて、喜悅と、悲哀と、涙と笑ひとの中に年月は靜かに經つて行つたのであつた。次第にかれはさうした空氣の中に、今は亡くして昔あつたさうした氣分の巴渦の中に、その廢墟に似た心を染み込ませて行きつゝあるかれを發見した。

かれは決してその昔の時代に生れなかつたことを悔いはしなかつたけれど、しかも現代に倦み勞れたかれの心は、そのユニイクな、傳統的な、繪畫に似た生活に力強く引寄せられずには置かなかつた。かれはペンキ塗の大きな洋館の代りにその白堊の城壘を思ひ、煤烟の黑く漲りこもる工場の烟突の代りに濠の土手の上に美しく聳えわたつた形の好い松を思つた。またつゞいて槍、刀、或はちよん髷のシインの中に、國を憂ひ、家を憂ひ、君のために悲しみ、妻子のために泣いた人々の生活のあつたことを思つた。あらゆるその時分の光景が、時には大名小路の春の弓術試合、時には道場に於いての劍術試合、長い馬場に於ての馬術敎練となつてあらはれて見えた。つゞいて新御殿の中の花のやうな奥女中の生活のさまも、若い奥方の派手な繪のやうな美しい姿も、何も彼も一つ一つはつきりとかれの眼の前にちらついて展げられて來た。

かれはそれからそれへと材料を集めた。また出來得るかぎり、その昔の人達の生活したさまを知るこ

『本當だね……』

『それに、私の父なぞもよく言ひましたが、あの老人は男振も好く、學問も出來て、奧の女達にもやいやい言はれたやうな人ださうですよ。若い方の殿樣の奧方――池尾樣から來て、終には氣違になつて死んだ奧方のお氣に入りて、何ぞと言つては奧に呼ばれて行つたやうな人だつたさうですよ。』

『矢張、昔の跡の微かに殘つてゐるもの丶一つだね。』

かう言つてかれは頭を振るやうにした。

これに限らず、かうした昔の人々は、まだ其處此處にその跡を留めてゐるのであつた。苔蒸した石垣のやうに、または處々に纔か殘つてゐる濠と同じやうに――。

〔しかし、これも、もう長いことはないのだ。すぐ、すぐ敗滅に歸して了ふのだ……〕かうかれは獨語してまた頭を振つた。

十七

昔の人達の生きたさま、階級制度によつてきちんと縛られたやうな狀態、殿樣といふ家長を上に戴いて一つの大きな家族のやうな群を成した生活、中心に銘々に城を持ち、町を持ち、村落を持つて、互にその武を競ひ、富を競ひ、氣風を競つたやうな生活、或は長刀を腰に挾んでそれを自己の生命とした形、

ど恐ろしく老いてゐるのをかれは見た。娘だといふ五十先の女が萬事その世話をしてゐるにはゐても、一それは貧窮と艱難の縮圖を見るやうで、殆ど目も當てられないやうな慘めさが其處にあつた。それにしても、この老翁が維新の空氣に浸つた人か。その時分の重立つた新知識として一時勢力が一藩を壓したB翁か。兵を帥ゐて東北地方に轉戰した當年の勇者か。かう思ふと、かれの胸には、一時に種々なことが押し寄せて來て、談話を聞くにさへ堪へられないやうな氣がして來た。かれは默つてそこに腰をかけた。

しかも、その老翁――最早長くつて半年とは生きてゐまいと思はれる垂死の老翁が、首を枕の上に擡げて、聞耳を立てつゝ、わざわざかれ等が訪ねて行つた理由をその友達から聞き取ると、さながらにその死床から蘇りでもしたかのやうに、または遠い光榮ある過去に戻つてでも行つたかのやうに、熱心になつて、十分に出來ないながらも、その時のことを話してきかせようとした。

其處から歸つて來ながら、

『氣の毒だつたね。』

かうかれが言ふと、友達もあれほどではなかつたといふ顏の表情をして、『本當に氣の毒だ……でも、貴方がいくらかでも金をやつて吳れたから、喜んでゐましたよ。本當に、あれが、その有名なBさんだと思ふと、悲しくなる……。隨分、勢力もあり、榮華もつくした人ですからね。一時は殿樣でも、家老でも、誰でもあの老人の意見を聞かずには、手も足も出なかつたんですからな。』

に、わざ〳〵故老を訪ねてその話を聞いたりして暮した。その故老の中には、白鬚の品の好いお爺さんものれば、かれの生れた時分のことをよく知つてゐて、何彼とかれの父母のことをなつかしさうに話して聞かせて呉れるお婆さんもあつた。『まア、年月の經つといふことは早いもんぢやな……。もうお前さんが四十五になるかやな……。わしなんか年を取るのは當り前ぢや。もう死ぬばかりぢや。』こんなことを言つて、かれが生れた時、産婆の來やうが遲かつたので隣に住んでゐたかの女は、飛んで行つて、かれを産褥から取上げてやつたといふ話をした。

『その時はこんな小さな兒ぢやつたぞえ。それに生憎な、薪がぬり立てゞ、火が燃えないぢや。祖父さんがな、お前さんのお祖父さんが燃してゐたんだが、何うしても旨く燃えない。それに冬だで、寒い、寒い、何年にもためしのない、沼の向うまで氷の上を渡つて行かれるやうな寒い冬の明方だつたぢやで、な、その釜の湯が沸くまでには、お前さんはな、筵の上でぶす色になつてゝつてゐたぢや。これぢや、とてもこの子は育つまいと言つたものぢや……。それがなア、四十先にもなつてな……』種々なことを思ひ出して來たと見えて、しよぼしよぼしたかの女の眼からは涙がこぼれた。

ある八十二三になる老翁は、汚ない、軒の低い、足の入場もないやうな茅葺の小さな家に住んでゐた。ある時代の空氣や氣分を知るための必要に迫られて、かれがそこに訪ねて行つた時には、友達も一緒に行つて呉れたには呉れたが、もう耳が遠く、眼は霞み、言葉もはつきりとはわからないほどそれは

ろな覊絆が、未練が、歡樂が、乃至は何うにもならなくなつたかれの心の末路が、幾重にもかれに絡み着き纏はり着いた。かれの心はすつかり廢墟になつて了つたやうな氣がした。

草に埋められ、苔に封じられ、濠の水は黑くなり、城壘は破壞され、果ては曾て榮華に滿ちた跡といふ跡が、すつかり埋められて了つたのではないか。かう思ふと、かれの體の中にも、矢張同じやうに、一草が生え、塵埃が積り、狐狸が竄伏し、蛇やとかげが昔の石垣の日影にちよろちよろ動いてゐるやうに思はれた。そしてその荒れ果てた廢墟の中に、その水畔の美しい姿が歷々と浮びあがつて見えた。

一度衰へる方に誘はれて行つたものは、何うしても衰へて了はなければならないのであつた。衰頽は衰頽の中に自から生命を持つてゐるのであつた。そして再びその廢墟の中に畠が出來、人が住み、次第に工場などの出來て行くのを待たなければならないのであつた。かれは昨夜一夜さまざまの幻影に脅かされたことを思ひ出した。かれは再びそこに昔の沼を見、昔の水鳥の聲を聞き、苔に蔽はれた石垣を眼にすると同時に、別れて來たかの女の笑顏を見、美しい聲の音樂を耳にした。心の廢墟に住んでゐるあらゆる無氣味なもの、怖ろしいもの、妖しいものが其處からも此處からも來てかれを脅かした。

十六

かれは散歩をしたり、家の一室に終日閉ぢ籠つてゐたり、時にはまた書かうとする爲事の材料を集め

にして置いても、あの郡長の女とか何とか言ふんぢやありませんね。何か、他にもつとわけがあつて、そして頼まれたか何かしたんぢやありませんかね。』
『さうかも知れない。』
『さうですよ、屹度……。しかし、その女が果してあの家にゐるものなら、すぐわかりますよ。なア に狭いところですもの、此町は……。』
『あの家にゐるにはゐるらしいですか?』
『それはわからない……。』
『ふむ……。』
かう言つてかれは考へるやうな表情をした。
しかしかれはそれ以上友達とその話をしなかつた。何故なら、さうした實際のことは――その女が何ういふ女であるか、娘であるか、人の細君であるか、それともまた妾であるか、さうしたことは實は知らなくても好いやうな氣がしたからであつた。かれは美しかつたその幻影を長く、完全に、繪のやうにかれの頭に印象させて殘して置きさへすれば、それで好いのであつた。かれは友達と別な話をするやうにした。
昨夜は心の創口が再び痛み出して來て困つたことをかれは思ひ出した。振拂つても振拂つてもいろい

かう言つて、友達は餘り深入しすぎたかれの想像を笑ふやうにした。

十五

その次ぎに來た時に、友達はその女のことをそれとなく郡長に訊いて見た話をした。

『ぢや、さういふ女は來たことも、見たこともないと言ふのかね？』

いくらか不思議にしたやうな友達の口振を聞いた時、かれはかう言つて反問した。

『いや、さうでもないですけども……』

『郡長はなんと言つてゐるんです？　さういふ人は來たことも、見たこともないツて言つてゐるんですか？』

『まア、さうは言ふんですけれども……。親類にも、知つてゐるものにも、さうした女はないやうなことを言ふんですけどもね……。さうかと言つて、君の見たのを一概に否定して了ふわけにも行かないんですよ。何故と言ふのに、僕が最初に訊いた時に、郡長はちよつと變な表情をしましたからね。祕密にして置くものに運わるく觸られたといふ顏をしましたからね。』

『ぢや、矢張、僕の言つたやうに、內所にして置く女かね？』

かうかれは言つた。友達は鳥渡考へたが、『でも、何うも、さうとは思はれないですね。內所は內所

『男の兒の他には、其處には娘つて言ふものは一人もゐない家ですか。』
『え、あの男の兒きりです。』
かれはやがて話頭を改へて、『それにしても、何處の人です？　郡長は？　舊藩の人ですか？』
『いや、舊藩の人ぢやありません。三河あたりの人です。』
『もう、餘程前から此處に來てゐるんですか？』
『いやまだ半年位にしかなりません。』
『ぢや、まだ來たばかりですね。』
『え、何しろ前の郡長が五年ゐたんですけども、評判がわるくつてわるくつて、しやうがなかつたんです。そのあとにやつて來たんですな。』
『今のところでは、何うです？　評判は――。』
『まだ、よくはわからないけど、わるい方ぢやないやうですな。』
『その女は――』ふとかれは思ひ附いたやうに、『郡長の妾とか、かげにゐる女とか、何とか言ふやうなものぢやないでせうな――？』
『そんなことはない。それはない。郡長は何方かと言へば、謹嚴な方ですから……。それに、郡長の身分では、そんな贅澤な眞似は出來やしませんよ。』

い人だつた。』かう言つて、かれはその水の畔の繪のやうな光景の話を手短にしたが、その不思議な、象徵的な印象は友達には解らずに、

『誰だらうな？』

ちよつと思ひ當らないといふやうにして、またはこの士族屋敷町のことで、かれの知らないものは大抵はない筈だといふやうな顏の表情をして、『男の兒がよくなついてゐるやうな女でしたか？』

『さア、なついてゐたか何うか、それはちよつとわからないが、兎に角、親類の人とでも言ふ關係らしかつたですね。』

『はア。』

また、暫し考へて、『郡長の家へは、僕はよく出入するんだけれど……。さうした女はつひぞ今まで見たことはないですな……。ぢや、東京から客にでも來た女かも知れない。』

『さうかも知れないね。』

『今日か明日行くから、郡長にきいて見ませう。屹度、さうかも知れない。客か何かに來た人かも知れない……』

かれはさびしい氣がした。東京あたりから客にでも來たものとすれば、もう二度とその姿を見ることは出來ないかも知れないなどと思つた。

十四

不思議にもその幻影は、かれから離れなかつた。かれの負つた心の重荷は、その幻影を加へることに由つて、更に一種の深い影を添へたやうに見えた。最後に別れて來た女に對する悲哀も、懊惱も、再びその創口を開いて來さうにした。

かれは昔の友達にその話をした。と、友達は、

『何處です？　一體それは？』

『そら、そこの、昔、不開の門のあつた角のところから、此方に來たところに、二階屋がある。昔、難波と言ふ家老格の人の住んでゐたところさ。』

『あゝ、難波さんの家ですか。』かう友達は言つて『あそこには、今、こゝの郡長が借りて住んでゐますがね。男の兒はゐるが、さうした女はゐない筈だがな……。一體いくつ位です？』

『二十六七位……』

『どんな恰好をしてゐました？』

『さア、いくらか粹なつくりをしてゐたが、さうかと言つて、藝者とか酌婦とか言ふものでもないやうだつた。では、此處等によく見る娘達かと言へば、何うも、さうでもないやうだ……。しかし、美し

と呼ぶ聲がした。

それを聞くと、かの女も男の兒も、急に、其方の方へと顏を向けた。その聲は、さつきの男とは違つてゐるらしかつた。また、それはかれ等の歸りを促すものらしかつた。

『今、歸りますよ。』

かうかの女はそつちに向つて、かなりに高い聲で答へた。で、呼ばるゝまゝに、男の兒を伴れて、其方に行かうとしたが、男の兒は容易にかの女の言ふことに從はなかつた。

『もう、本當に、歸りませうよ。皆なあちらで待つてをりますから。ね、好い兒ですね。おとなしい兒は言ふことを聞くもんですよ。』かうかの女の言ふ聲が手に取るやうにきこえた。賺したり、だましたりして、やがて漸くその男の兒を伴れて行くかの女の姿が見えた。次第に水の畔から路へ、路から樹の影草の影の中へとその美しい姿は見えなくなつて行つて了つた。果して過去の影が蜃氣樓となつて、微かにかれの前にあらはれてそして跡方もなく消えて行つたやうに――。

行つたりし出した。と、ぢつとあたりの靜かな氣分に全身を浸してゐたやうにしてゐた水底のかの女の姿も、いつかあちこち動き始めた。

ふと、幻影から我に返つたかれは、その女が何ういふ女であるか、その家の娘であるか、それともまたその家の侍女であるか。またそこに、昔かれの初戀の娘の住んだ家に住んでゐる人は何ういふ人であるか。昔の士族の子孫であるか。それともまた矢張その工場の出來た爲めに新たに他鄕からやつて來て住んでゐる人達であるか。こんなことをかれは思ひまはした。しかし、昔の廢墟の中に、かうした美しい姿を見るといふことは不思議であつた。或はさうしたシインは、單に、かれの幻影の上にそれとなく築きあげられたものではないか。昔のまゝの水があり、水草があり、紫の水あほひの花があり、更にそのかれの少年の頃に腰をかけた石があつたがために、そのために、さうした幻影が描き出されて來たのではないか。すべてが蜃氣樓のやうにあらはれて來たのではないか。そして時が來れば、忽ち跡方もなく消え去つて了ふのではないか。

かれの眼には、やがてかの女と男の兒の頻りに戯れ合ふさまが映つた。つゞいてかの女の何か唱歌らしいものを唄ふ冴えた聲がきこえた。

と、急に、姿は見えずに、

『お――い。――ヤ。』

『もうおよしなさいね。水が飛ぶから。』

かう言つてかの女は男の兒の手からその長い棒を取つた。水上の渦紋は次第に間遠になつて行つた。今までそこに動いて亂れて映つてゐたかの女の姿は、今度ははつきりと靜かに影を黑い水の底に落すやうになつた。

十三

この靜かな、象徵派の繪のやうな光景は暫しの間續いた。最後の渦紋の靜まつた水の面は、絕對にしんとして、水鳥のその寂寞を破ることもなく、風の來つてその滑かさを動かすでもなく、樹の葉を透した午後の日の光線が、微かにそこに雜るともなく雜つてゐるばかり、そこにゐるかの女も、男の兒も、あたりの靜かな氣分に誘はれたやうにして、唯ぢつとして、立盡してゐた。從つて水底の白い影も、更に些しの動搖を感ずることなく、あざやかにそこに映つてゐるのをかれは目にした。

かれの頭には、種々な影が掠めて通つた。かれが曾てこれまでに見たり觸れたりあくがれたりしたあらゆる眉が、眼が、または肌が明かにその前に再現した。かれは調和したこの光景の美しさに深く見とれた。

しかしこの靜けさは、さう長くは續いてゐなかつた。男の兒がまた動き出した。彼方へ行つたり此方へ

調和を現はしたに相違なかつた。かれは暫しはわれを忘れたといふやうにして、凝とそのシインに眺め入つた。

大きな古い樹木からのみ生れて來るやうな、いくらか暗い光線は、それも矢張り敗滅の空氣の中からでなくては容易に現れて來ないやうな黑い水の色と相合し、相重なつて、其處に一層はつきりと其美しい姿を際立たせて見せた。かの女は靜かに水の畔に立つて、男の兒の手から絕えず湧き出して來る水の上の渦紋をじつと見詰めた。

その伴侶であつた男は、かの女が此方に來てからも、猶姿を此方にあらはさずに、何か頻にそこから聲をかけてゐるやうであつたが――そんなさびしい池の畔に行つて見たつて爲方がないから、男の兒を伴れて歸つて來るやうに促し立てゝゐる樣子であつたが、しかも、その水の畔には遂にやつて來ずに、そのまゝ向うに行つて了つたらしく、やがてはその聲もきこえなくなつて了つた。

かれは高い草に埋められてゐるがために、または明るい午後の日影をぢつと他に外れたところにその身を置いてゐたがために、向うからは少しも此方を見出さるゝ恐れなしに、仔細にその美しい姿を心ゆくまで見ることが出來た。次第にかれはそこに初戀の娘の眉を發見すると共に、最近に別れて來た悲しい女の眼を發見した。否、かれはこれまで戀心をそゝいで來たあらゆる女の姿をもそこに殘すところなく發見することが出來たやうな氣がした。

た。

男の兒は、頻に水をかき廻して、それからそれへと渦紋の出て來るのを珍らしさうにして見てゐたが、後を振返つてふと何か一語二語言つたと思ふと、突然、そこにかれの視野は破れて、美しい、田舍では何うしても見られないやうな、柔かな線と艷な姿とを持つた二十七八の女があらはれて來た。

かれは忽ちある驚異を心に感じた。何故なら、それは現實にあり得ないやうな美の調和をかれはそこに發見したからであつた。誰れかかうしたところに、さういふ美しい眉と冴えた眼とを豫期したであらうか。また誰か昔曾て初戀の女の髣髴を得やうとしたその水の畔に、永い久しい年月を隔てゝ、再びさうした美しい面影を見得やうと想像したであらうか。かれは今まで單にさびしい池として、荒れた池の畔として、または樹の影のわびしく暗く午後の日の光線を遮つてゐるところとして眺めてゐた場所が、その一人の美しい姿を着けたがために、忽ちロマンチツクな、またはサンボリツクなシインとなつて行つたのを見遁さなかつた。かれはドイツの象徵派の畫家の描いたすぐれた繪をそのまゝそこに展げたやうな氣がした。

――そしてそのシインは、かれの心の中に展開されつゝある廢墟の氣分にそのまゝ靜かにつゞいてゐるやうな氣がした。無論、かれに、さうした氣分なしには、さうした感じも起らなかつたに相違なかつたがしかしまた一方かうした敗滅の空氣の中であつたればこそ、その美しい姿も驚異に値ひするやうな美の

もなく下りて來て、ヂヨンチヨンと岸を步いて、そして水の上を掠めるやうにして、蘆荻の茂みの中へと入つて行つた。

美しい聲の音樂は、次第に近く近くなつて聞えた。

突然、かれの視野は破れた。そこには十歲位になる品の好い男の兒が第一にあらはれた。つゞいてその男の兒が水の緣のところに來て、持つて來た棒で、頻りに靜かな水をかき廻すのが窺はれた。黑い水は渦紋をつくつては消え、渦紋をつくつては消えた。

姿はまだそこに現れなかつたけれども、その樹の影の向うには、確に美しいある影が深く埋められてあるのがわかつた。美しい聲の音樂につれて、その衣の裾の動くのも、微かにそれと指さされるやうな氣がした。ふと美しい笑ひ聲がした。つゞいて、

「危いですよ、坊ちやん……」

かういふ聲がした。かれは凝と其方を見詰めた。

十二

此方からは見えないけれど、その女の聲のするあたりからは、その黑い水や、蘆の葉のそよぎや、男の兒の蹲踞んでゐる岸のさまなどが、はつきりと見えてゐるらしかつた。笑聲がまた其處からきこえ

ふと人の聲がした。

それは遠く微かにきこえた人聲であつた。或は向うの街道を通つてゐるものゝ聲であつたかも知れなかつた。しかもそれは、粗い單調な節のない聲でもなく、または荒々しい人を叱るやうな尖つた聲でもなく、街道を通る百姓の耳に疎いスラングでもなく、男の耳に柔かに、靜かに、ある美しい音樂を誘つて來ずには置かない聲であつた。かれは思はず耳を聳てるやうにして、つゞいてその聞えて來る聲を待つた。

その聲はしかし容易に再びやつて來なかつた。沈默が一時全くあたりを領した。或はそれは空聽ではなかつたかとさへかれには思はれた。しかもかれは猶その聲の來るのを待つた。

果してその聲はまたきこえて來た。

しかし、今度は初めの微かな美しい音樂ばかりではなかつた。種々の節のある聲のそれに雜つて聞えて來るのをかれは耳にした。子供の戯れてゐるやうな聲も雜つてゐれば、男の聲高に笑ふやうな聲も交つてゐた。そしてその聲は次第に此方　此方へと近寄つて來るやうな氣勢がした。

かれの腰をかけてゐる石からの視野は、蘆荻の亂れた葉と、その葉を越して暗く湛へてゐる水と、その水の向うに繋つてゐる樹の影と、その影の下に屈曲してついてゐる路と、その他には、右に偏つて、碧い秋の空の一部の聰しげに澄んでゐるのを見るばかりであつたが、その聲は次第に此方に近寄つて來てゐながらも、その視野の靜けさは容易に破られやうともしなかつた。ふと小さな水鳥が一羽、何處からと

その話をした時からですら、年月がまた二十年近くも經つた。私の身の上にもいろいろな變遷があつた。と同時に、その妹の身にも亦驚くべき推移があつたであらう。丁度、この城の廢墟にも、大きな工場が立つて、その烟突から煤烟が凄じく張り渡るやうに――。

かれはその娘の眼が、眉が、姿が一生かれにつき纏つて來たことを思つた。あの女にも、その娘の眼が生きて動いてゐた。またあの女にもその眉の鮮かさが明かに認められた。ふと、かれは濠の水草の上に、斜に秋の日影を帶びて、その娘がにつと笑つて此方を見て立つてゐるのを見たやうな氣がした。

十一

その幻影は、娘の姿であると共に、かれが戀心をそゝいだあらゆる女の姿であり、また最後に別離をつげて來たかの女の姿であつた。かれには急にあらゆる悲哀が押寄せて來た。

かれは默つて、石に腰をかけたまゝ、その額に手を當てた。

それはかれにじつと廢墟の灰燼の中に浸み込んで行くやうな佗しさを誘ふと共に、また絶望して茫然とした心に、ある微かな彩と姿とを顫動させて來るやうな情緒を誘つた。ふと風が靜かに蘆荻の葉末をわたつた。と、かれの心の悲哀と同じやうに、暗い水は細かに震へた。そこにひそやかにさしてゐた日影は、チラチラと動いて、そしてまた元の靜けさに返つて行つた。

かれの眼の前に描かれた美しい眉、白い顏、一種言ふに言はれない氣高い品の好いすらりとした姿、丁度夏の日の廢墟の濠の中にたまさかに咲き出でた紫色の水あほひの花を思はせるやうな姿――さうした、實際、廢墟の濠の黑い水に相應しいやうなさびしい、拙い運命の下に、かの女は生れて來たのではなかつたか。たまさかに、かく深く思はれたかれにすら、竟に竟に逢ふことが出來なかつたほどそれほど不仕合な運命に生れて來たかの女ではなかつたか。思ふに、この城が廢墟に化し、そこに住んでゐた人達が悲しい慘めな生活に落ちなかつたならば、かの女の美しさは、更に一層美しさを加へて、姫達の享けたやうな美しい榮華もかの女の身の周圍に集まつて來たに相違なかつたのである。徒らに、名も知られぬ一商賈の妻となつて、髮も亂れ、姿も衰へ、はだけた胸の乳に、二人の子を縋らせるやうな女の慘めさをかれに想像させなくとも好かつたのである。その時、かれは、その妹に、

『お墓は何處です？』

かう言つて訊いた。

『遠い在ですよ。足利に出て、店を持つてゐたんですけれども、その頃には、どうも具合がわるくなつて、そこから二里も山奧の在に引込んで了つたもんですから……。え、彥馬、閑馬なんて言ふところがあります。あそこの山の中です。本當に、一番、貧乏鬮を引いたのは姉で御座いました。』かう言つてその妹は、一度お參りしたといふその山裾の寺の墓の話をした。

かれが思ひあくがれた娘は、決してかれが想像したやうに、かれの手に屆かないほどそれほど美しい花ではなかつた。やがてかの女は平凡な人の許に平凡な細君となつて、子供を二人ほど持つて、そして病んで死んで行つて了つたのである。殆ど何の跡も殘さずに逸早くこの世から消えて行つて了つたのである。それを思ふと、想像の上に築かれた印象の方が、實際そのものよりも長い間亡びずに生きて續いてゐるものであることをかれは思はずにはゐられなかつた。恐らく、かれといへども、その戀を得て、その娘をかれの一生の伴侶としたならば、その少年時代に描いた美しい印象は、決して今日まで、かう鮮かに生々として殘つてゐないに相違なかつたのである。また、この士族屋敷の古い二階屋も、このやうになつかしいものとならず、土手に殘つた石も、さう深くかれの心を動かすことはなかつたに相違ないのである。

かれはそのまゝその石に腰を懸けて、深い深い瞑想に耽つた。

繁つてゐる水草、蘆荻の間にツンツン長く出て雜つて繭ゐる、それを透して秋の明るい午後の日の光線は、靜かに深くさし込んで來てゐるが、その絕間に所々に惡魔の眼のやうに見えてゐる濠の穴は、依然として、樹の影を帶びて、暗い暗い感じをかれに與へた。

かれは土手の上へと靜かにのぼつて行つた。そして細い草路をたどつて、その殘つた濠の緣へと下りて行つた。かれははつとして驚いた。何故なら、其處に依然として、かれが幼い頃に、毎日のやうにやつて來て腰をかけた石が殘つてゐたのを發見したからである。

あらゆるものが破壞されて、その頃の跡らしい跡も殘つてゐないこの廢墟の中に、何等の影響も受けず、何等の變動をも與へられずに、かうして元のまゝに殘つてゐる石は、奇蹟のやうな思ひをかれに誘はずには置かなかつた。かれは凝としてそこに立盡した。

再びかれは幼いかれを其處に見出した。その娘の姿の髣髴を得たいばかりに、時には半日近くをその石の上に費したかれを見出した。その頃には、其處には樹や草がもつと深く生ひ茂つて、娘のゐる二階屋をはつきりそれと目にすることは出來なかつたけれども、それでも何うかすると、その笑聲らしいやさしい聲を微かに耳にすることが出來た。また、時にはその娘の衣の裾の髣髴をその濠の草藪の中の小路に見出すことが出來た。それは大抵は夕暮近い頃であつた。娘は夕飯後の散歩に、いつも大勢の妹達を伴れて、その濠のほとりまでやつて來るのであつた。娘の着た白地の浴衣は、草や樹の影の間にチラホラと動いて見えた。かれは今から二十年ほども前に、その姉娘の病んで死んだことをその妹の一人から聞いたことを思ひ出した。また、その妹がやさしいその姉に伴れられて、いつも夕暮に、水あほひの花を採りに家の後の濠に行つたことを話したことを思ひ出した。

かう思ふと、かれの經驗した戀の彩も、今はすつかり色が褪せて、全く廢墟の塵に委して了つたやうな氣がした。

かれは追憶と言ふことが、過ぎ去つた後になつて考へるといふことが、いかにその時の刹那の感じと遠く離れてゐるかを繰返さずにはゐられなかつた。あのやうに熱烈であつた心、またはそれを所有せずには何うしても生きてゐられないと思つた心、かの女なしには、いかなる富貴にも、いかなる名譽にも生きてゐることが出來ないと思つた心、その心が今は何うなつたか、矢張その烈しさと强さとを持つてゐるであらうか。否、その心は全く消えないまでにも、すつかりその色と姿とを失つてゐはしないか。その當時の眞劍も、執着も、懊惱も、またはその美しい姿に向つての强い憧憬も、何も彼も一場の繪となつてかれの前にあらはれて來るやうになりはしなかつたか。

『すべて跡だ。苟くも一度繪畫となつたものは、すべて皆な跡だ。』

こんなことを考へながら、かれは畠の中の路を歩いた。

氣が附くと、かれはそのなつかしい昔の二階屋のある通から、畠の中の道を掠めて、その裏の土手の方へと歩いて行つてゐるのであつた。ふと、かれは其處に依然として殘つた濠のあるのを見た。黑い水の湛へられてあるのを見た。水草が昔のまゝに一面に生えてゐるのを見た。勿論、その濠は昔のやうに物凄くはなく、水草も亦以前のやうに深く繁つてはゐなかつたけれど。

珠――それが別離の後につゞく日の悲哀からかれを救つた。

『所有することばかりが戀ではない。體を合せることばかりが戀ではない。一層深い所有は、却て所有せざるところにある。一生體を合はせない戀も、決して戀でないといふことは出來ない。』こんなことをもかれは思つた。

しかもかれは終日默つて籐椅子の上に横つてゐたことを思ひ出した。をりから降り頻る連日の雨に、心の寂寥が細かに織り込まれて行つたことを思ひ出した。銀木犀金木犀の匂ひ、その中にも彼の女に別れた悲哀が雑つて居れば、微かにきこえて來る場末のエンジンの響にも、その佗びしさが絡みついてゐた。時にはさうした理解の上に醸された犧牲が、堪らなく悲しく、悲しくなつて來て、涙が、ほろほろと袖の上に落ちて來たことなども繰返された。

九

この昔の城址の中に生きてゐた人達も、矢張、かれと同じやうな戀の歡樂と悲哀とに浸つたに相違なかつた。かれの味つたやうな焦燥と嫉妬、何うにもならない懊惱、更にそれからひとり手に引出された犧牲でなしには生きてゐることが出來ないやうな心持に、矢張さうした人達も到達したに相違なかつた。『何うも爲方がない。』かう思ひあきらめて、涙をそつと袖に包み隱したものも澤山にあつたに相違ない。

であつたとは思つてゐない。結果は別離に終つても、三四年前のあの時に別れたよりは、何の位お互ひを理解し合つて來てゐるかわからない。せめて、それを私達の幸福とするより他爲方がない。』

『本當ですね。駄目なものは、何處まで行つても駄目だとは思ひますけれど、徒勞ではなかつたですね。』

かう言つた彼の女は、凝と深く考へに沈んだやうな風であつた。

『いくら言つても、爲方がない……。もう今になつては、お互ひに、お互ひの道を行くより爲方がない。……ぢや、丈夫で。』

『貴方も……』

かう言つて別れて來たことをかれは繰返した。續いてその時の彼の女の聲が悲しさに震へてゐたことを思ひ出した。さういふ風に、互に理解して居りながら、しかし何うしても別れなければならないお互の身を堪らなく悲しく思つたことをも思ひ出した。

しかし彼が比較的靜かな、動搖しない心持で、その別離を、またはその別離の後に續く悲しい日を送ることが出來たのは、彼の女を理解する心の程度が非常に進んでゐた爲であることをかれは思つた。長い間の心の巴渦、時には鼎のやうに湧き立ち、時には深淵のやうに暗く深く沈んだその心の巴渦がさうした心の境に彼れを伴れて行つたのであつた。忽然として浮んで來た戀の眞珠、思ひもかけない戀の眞

八

その初めての戀と、此處に來る前に捨てもし、捨てられもした戀と比べて見た彼れは、その間に大きな、鳥渡想象することの出來ない懸隔の横たはつてゐることを思はずにはゐられなかつた。その娘の姿に對する憧憬が、かうした最後の戀に續いて來てゐるのも不思議だが、それが不思議とも何とも思はれずに、また不自然とも思はれずに、かうして長く一つの心の中に芽を出しては育ち、育ちては衰へ、衰へてはまた芽を出して來るのが不思議だつた。

『ぢや、丈夫でおいでなさい。今度こそ本當にお別れだ。無論、お前にもその方が好いんだから……』

かう彼れは言つたことを思ひ出した。と彼の女は、

『何うしても、かうなるより他爲方がなかつたんです。初めからさうだつたんです。それを私達は無理に一緒にしよう、しようとしてやつて來たんです。駄目なものは、何處まで行つたつても駄目なんですね。』

『さうだ、本當だ……』

かう言つたが、すぐ彼れは言葉をついで、『しかし吾々がかうして長くやつて來た努力は、決して徒勞

かれは少年時代のかれを再びそこに目のあたり見たやうな氣がした。美しい姿に惹き寄せられて、われ知らずそこまでやつて來たかれを。そこの垣にそツと身を寄せて、その色彩の髣髴をだに得たいと思つて一心に覗き込んでゐるかれを。また、夕暮の薄暗い路をこつそりそこまでやつて來て、ぴつしやり閉つた雨戸の中までも心が入つて行くやうな戀しさに捉はれたかれを。それにしても、その家族は今は何うしたであらうか。美しい娘達の多い家族の行方は何うなつたであらうか。

かれは其處に矢張同じやうにして井戸があるのを見た。垣があるのを見た。二階の欄干に衣服や蒲團などの干してあるのを見た。その家屋の後にある竹藪も、昔の通りであるのを見た。ある處には、時が逸早く經ち、あるところには、時の力は更に少しも働かないのをかれは見た。暫くしてから、かれは漸く歩き出した。

その少女の姿を初めとして、その後かれはいかに多くの女性を知つたであらうか。また、さうした無邪氣な幼い戀心が、いかに思ひもかけない路に進んで行つたであらうか。或は何處まで行つても何うにもならない戀、秘密なるがために、唯そのためにのみ何うしても離れることの出來なかつた戀、殘酷な眞似をして樂しむばかりが二人の羈絆であつたやうな戀、（しかし、それも過ぎ去つた。全くすぎ去つた……）かう思つたかれには、今になつてその娘の姿が再びかうして浮んで來たことを不思議のやうにした。

かれは見かけた。しかしもう昔の人達の殘つて住んでゐるやうなものはなかつた。人間の事業、人間の生命、それよりももつと存在が長いといふやうにして、さうした古い昔の家屋はあちこちに殘つた。

かれは曾て其處に住んだことのある種々の人達を頭に浮べた。お下げ髪にした綺麗な女の兒も思ひ出されて來れば、白い髪をした品の好い老人も思ひ出されて來た。色の白い老いた刀自が如露の水を夏の草花に灑ぎかけてゐる繪のやうなさまなども眼に浮んで來た。かと思ふと、貧窮と艱難に虐まれつゝもその昔の誇りを捨てまいとするあはれな家族のさまや、さうした貧窮と艱難の中に健氣にも美しく生立つた娘の殊に際立つてあたりに見えたさまなども思ひ出されて來た。一度は全く記憶から離れて了つたことなども、再び歴々と眼の前に蘇つて來た。

その中でも、殊に深くかれの心を動かしたのは、かれのゐる城址から昔の士族屋敷の通りへと出て行つたところにある一軒の二階屋であつた。それは、さうした昔から殘つた家屋の大抵は古び、傾き、または荒廢してゐるのとは異つて、昔のまゝでありながら、しかも掃除は行き屆き、住む人は富み、時の破壞力は少しもその周圍に及んでゐないやうに、あたりがすべて小綺麗となつてゐた。かれのそこにやつて來たのは、沼の岸から、稻荷社の方へと出て來て、それからもう少し散歩して見やうと思つて、そしてゆくりなくその家屋の前へと出て來たのであつたが、其處に來ると、かれはぴたりと立留つて、凝とそのあたりを眺めずには居られなかつた。

――心の何處かに今だにはつきりその幻影をとゞめてゐる追憶が、あらゆる昔のなつかしさをかれの前に展げて來た。今ではそこに殘つてゐる一木一草ですら、かれに深い感じを起させないものはないやうになつて來た。

　ある夜は、かれはそこに深い霧を見た。工場の灯の影をさへぼんやりさせて了ふやうな深い霧を、または沼の所在をすら全く埋めつくして了ふやうな霧を。かれは初めて幼い頃に見た夜霧に逢つたやうな氣がした。

　かれは長い間、その深い夜霧の中を彷徨した。廢墟の夜の霧！　氣味のわるい鳥の聲と微かな灯とより他に何物もない混沌とした灰色の中に、かれはあらゆる昔の幻影が一つ一つあらはれては消え、消えてはまたあらはれて來るのを見た。そしてそれは多くは時の影、戀の影、死の影であるのを見た。かれは凝と眺めるやうにして立ち盡した。

七

　幼い頃に見たまゝに殘つてゐる家屋も處々にあつた。茅葺の屋根、古びた紙の窓、しかつめらしい玄關、しかも昔は士族の人達が嚴めしく人を迎へたり送つたりしたであらうと思はれるその玄關に、早熟の陸稻が刈つたまゝ積まれてあつたり、鷄が一羽二羽こゝと言つてそこに上つて啄んでゐたりするのを

ことはなかつた。それに、その頃のことを知つてゐる年寄達もまだ相應に殘つてゐるので、今ならある程度まで詳しく昔のことを訊くことが出來た。『あのSの老人を知つてゐませんか……。あの人なら、よくお城の燒けた時分のことを知つてゐます。いつでも一緒に行きませう。いや、何うして? 中々丈夫なもんです。今年はもう七十八ださうですけども……』かう昔の友達は言つてきかせた。

しかし、さうは思ひ立つては來たものゝ、かれはとてもすぐさうした爲事や調査などに心を向けることは出來なかつた。かれはそれより先にその心や、體をやすめなければならなかつた。大きな傷口――ともすると、口がぱつくり明いて再び强く痛みを感じて來ないとも限らないその心の傷痍について、かれは今でも猶ほ一種の不安を抱いてゐた。いつそれが再び元のやうにうづき出して來るか知れないやうな氣がした。

かれは一度捉んだと思つたものが再びすつかり指の間から滑つて落ちて行つたことを思つた。信ずるといふことが――唯そのことが、あらゆるものを、あらゆることを本當のものにすると思つたのも決して長くはつゞかなかつた。その考へも矢張、實は賴りにならないものであつて、自然はもつと人間に無關心であることをかれは考へずにはゐられなかつた。かれは再び種々なものを亡くした。かれは唯ぼんやりして暮した。

初めは、昔の廢墟のあとが、すつかり破壞されて、新しくなつてゐるのに失望したが、次第に追憶が

かれはぼんやりとした一月二月を暮したことを思ひ出した。そしてその時、かれに役立つたのは、かれの書齋の長押に以前からかけてある溝渠と寺院と尖塔との多い外國の廢都の寫眞であつた。かれはそれに出つて、そこに渦を卷いてゐる灰色の霧を思ひ、靜かに沈むやうに深く溝渠の水に映つてゐる古い寺院を思ひ、つゞいてその古い空氣と塵埃の匂ひの中に愛妻を失つた悲哀を埋めやうとした詩人を思つた。突然かれの胸に、故郷の城の廢墟と、その廢墟に曾て一度生息した人達のことゝが思ひ出されて來た。(さうだ……。その人達の歴史を書いて見る筈だつた。さうだ。そこに行つて、さうした爲事をするのが、今の自分には一番相應しい)かう思つてかれは其處にやつて來ることにした。

六

昔の友達がかれにその別莊の一間を周旋して呉れた。『それは是非お頼みしても書いて置いて貰ひたいことだ……。實際、吾々の父母や、祖父母は、その維新の制度の變遷に何の位苦しんだか知れない。何の位慘めな生活を送つたか知れない。實際君のいふ通り、五六十年經た今になつて、漸くその影響から免れることが出來たので、吾々だつて、隨分その爲にひどい艱難と貧窮とを戰はなければならなかつたんだから。』かう言つて友達はかれの思ひ立ちに賛成した。そしてそれについてのあらゆる便利は出來るだけ計るつもりだと言つた。昔のあとは十に七八は破壞されたにはされたが、それでもまだ殘つてゐない

於て、心の破産者であつた。生活に於ても、藝術に於ても、またはそれのみを唯一の力綱として、さびしい灰色の人生を渉つて來た戀に於ても……。

かれは既に久しき前から、人生に於ける位置と力とを失つてゐた。心も一度動いたきりで、もう再び以前のやうに烈しく漲つて來なかつた。あらゆるものに對しても、次第に興味がなくなつて行つてゐた。しかし、それでも猶、その一つの心を十分に自分で所有してゐることが出來たならば、あの美しい眸を永久に持つてゐることが出來たならば――さうしたなら、この荒涼とした砂漠のやうな人生にも、猶いくらかの愛着と未練とを持つことが出來たであらうに……。

『もう駄目だ。すべて徒勞に歸した。あらゆる心を注ぎ、あらゆるまことをつくし、あらゆる力を費して見たことも、矢張最後は徒勞に歸した。もう、何も言ふまい、何も歎くまい。かうした形が、人間と人生とのすべてゞある。』かう思つて、かれは強く下唇を嚙んだ日のことを繰返した。かれには一時何うして好いかわからなかつた。もし、かれに家庭がなかつたなら、かれは直ちに山に入つて僧になることを何とも思はなかつたに相違なかつた。また、かれに、金があつたなら、遠く故國に別れをつげて、歸る期なき放浪の旅に上つたかも知れなかつた。竟に掟むことの出來なかつた一つの心のために、かれはあらゆるものを捨てやうとした。あらゆるものを捨てゝ捨てゝ捨て盡して、更に遺憾はないとまで思つた。

生の戀心を示した最初のシンボルではなかつたかといふやうな氣がして來た。かうして今になつて、故鄕の昔の廢墟の匂ひにあくがるゝのも、ある女の悲しい重荷――敗滅の重荷を負つて、かうして世に埋れ果てゝゐるのも、皆なその多い紫の花の不思議に續いてゐるのではないか。

五

かれは一月ほど前のある日に此處にやつて來たことを思ひ出した。その日は秋の初めのさびしい雨が降つてゐた。停車場から町を通つて、半ば幌をした車で昔の城址の方にやつて來ると、なつかしい紅い白い木槿垣や、遠くから微かに薫つて來る木犀などがかれの心を堪へ難くした。

かれがこゝにやつて來た理由、ある期間は都會にも歸るまいと決心してやつて來た理由、その內部の理由は誰も知つて居るものはあるまいけれど、親戚も、または親しい友達も誰も知つて居るものはないであらうけれども、かれに取つては、非常に大きな、悲しい、しかも何うすることも出來ないものであつた。それは世を捨てゝ山に隱遁する僧の心か。否。世間に對して身を置くにところがなくつてゐる敗軍の將の苦しみか。否。戀を失つて、その追憶にのみ生きやうとした失戀の人達の悲しみか。否。しかも、さうした人生の海の破船者の當然嘗めなければならない苦しみは、犇々と常にかれの周圍に集つて來て、今はその一條の路をたどるより他に爲方がなくなつて了つたのであつた。かれはあらゆる方面に

「と、それが何んなに深いミスチックな印象を幼いかれに與へたであらうか。

ある日には、かれは次のやうなものを見た。それは夏の午後であつた。かれの家は沼を眼下に遠く斜に望むことが出來るやうになつてゐたので、その縁側に立つと、その錆沼の水の半面を明かに一目にあつめて見ることが出來た。かれはその時十一二であつたらうか。かねて夕立の時には沼から龍が舞ひ上るのが見えるときいてゐたが、その時かれの兄は飛んで來て『見ろ、見ろ、龍があがる！』と叫んだ。かれは慌てゝその縁側の隅の方へと走つて行つた。

凄じく鳴りわたる雷、石火矢のやうに空に交叉する電光、銀線のやうに瀧ぎ下る雨の脚、それを透して、微かにかれの眼に映つた沼のさまは果して何んなであつたであらうか。黒く簇り逆つた一團の雲は全く沼から跳り上る龍の姿を護るために其處に舞ひ下つて來たとしかかれには何うしても思はれなかつた。

その他にも、かれは沼についての、また城址についての印象を澤山に澤山に持つてゐた。

ある時は、本丸の奥の沼地のところに、自然に生えた杜若が紫に一面に咲いてゐるのを見て、それが、城の昔の美しい姫達の魂の再生ではないかと思つたことなどを思ひ出した。そしてその美しいシインは、今でもはつきりと、鮮やかに、もしかれが畫家であつたならば、直ちにそれを紙の上に移して見ずには置くまいと思はれるほどそれほど美しさと不思議さとを持つてかれの眼の前にあらはれて見えた。

かれはそれを思ひ浮べると、急にドリイミイな氣分になつた。そしてその澤山な紫の花は、かれの一

さうしたら起して貰はう！　と思つて、靜かにかれを寢かして置いたといふ。つまり、幼いかれが小さな呼吸を立てゝ靜かに眠つてゐる間に、前の時代のあらゆる榮華は、歡樂は、色彩は、すべて皆な殘らず燒け落ちて亡びて了つたのであつた。

四

沼も今日のやうに淺露なものではなかつた。夏の頃には、全く蘆荻や蘭や水草に埋められて了つたやうに見え、めづらしい不思議な水鳥の聲が、時には氣味わるく思はるゝほど夥しくあたりに群り集つて聞かれた。嘴を水中に入れて鳴くために曇つた空や夕暮のわびしい空氣の中に厭に陰氣に響きわたつてきこえるズホンの鳥といふ不思議な鳥などもその銹びた沼の何處かにかくれて住んでゐた。そればかりではなかつた。其處には種々な物凄い話や傳說が、沼のさびしい眺めや、城のあれ果てたさまや、人間の心の腐れかけた狀態などと一緖に、深くかれの幼い心に染み込んでゐた。

かれは沼に靑い火の燃えたのを思ひ出すことが出來た。霧の深い晚、漁師が何うしても元のところに歸つて來ることが出來ないで、終夜沼の上をぐるぐる漕ぎまはつたといふ話を思ひ出すことが出來た。人の聲とも鳥の聲ともまたは獸の聲ともわからぬ泣き叫ぶやうな物音を耳にしつゝ、恐ろしさに戰へながら、顏を母親の胸に當てゝ眠つたことをも思ひ出すことが出來た。あれた城址と、古い銹びた淺茅沼

『ふむ――』

かうかれは感慨に滿たされた調子で言つて、『ぢや火事のために城が燒けて了ふまで、三四年の間といふものは人がさうしたものを取つて行かうが、何うしやうが構はずに、丸で狐や狸の巢窟となつてゐたんですね。本丸の御殿も、三の丸の新御殿も、天主閣も何も彼も……』

『それはさうでせう。』

『して見ると、大手附近から出て、すつかり城を燒いて了つたあの火事は、無意味とは思はれませんね。封建の制度のすつかり地に委した形を象徵したやうなものですね。』

かう言つたかれの頭には、かれが六歲の時、一炬にして城を燒きつくした火事のさまが歷々と想像されて見えた。黑いもくもくとした煙が空に漲つて、物の燒け落ちる氣勢が今も手に取るやうにきこえて來るやうな氣がした。かれの母親や、手傳ひに來てゐる親類の人達が、『これでは、もうとても駄目だ、無論此方まで、火はやつて來る。お城にももう火が移つたさうだ――』かう言つて、家財道具を畠の中に出して、恐れ戰くやうな氣分で、じつとその烈風の中に渦まきあがる黑い煙と、をりをりあらはれて見える赤い焰の舌とを眺めて居るさまが、繪卷の中の一つの際立つたシインのやうになつてあらはれて見えた。

その時、幼いかれはいつもの晝寢をしてゐたとふ。そしてかれの母親は火が家老の屋敷に移つたら、

力も何も彼も、煙のやうに消え霧のやうに散じて、あらゆる榮華も、あらゆる贅澤も、またあらゆる美しい色彩も、忽ち荒草野田に化して了ふのが習ひであるが、かれにはその曾て賑かであつたその城下がさうした淒じい荒蕪になつて行つた形が尠からず興味を惹いた。かれはこれまでにもいろ〳〵なことを耳にしてゐた。城の主人が數百年來の家臣に別れて東京に出發して行つた時のことも聞いて知つて居れば、あとに殘された家臣達が木から落ちた猿のやうにして居食同樣の悲しいさびしい辛い生活を續けたさまも、または後も前もわからなくなつた生活に疑ひ惑つて果ては自暴自棄に家祿を奉還して、女に、酒に、滅茶々々に其一生を終つた人達の悲劇の數々をも澤山に聞いて知つてゐた。亡び行く人間の生活、それは矢張その頃の城跡の草藪と同じ狀態であつたに相違なかつた。『實際ひどかつたらしいですよ。何しろ、何うして好いかわからなかつたんですからね。昨日まで喰ふことに何一つ不自由をしなかつたものが、忽ち明日から衣食のことを心配しなければならなくなつたんですからね……』かう言つて昔の友達はいろいろとその母やら祖母やらから聞いたその時分の話をした。

『主人公がゐなくなつてからは、城は番人もなしに、そのまゝ放つて置かれたのかね？』

『それはさうでせう。』

かう言つて、つい此間もその本丸の城門の前にあつた橋のぎぼしが、二つともちやんと揃つて近在の豪農の家の寶になつてゐるといふ話をした。

いほど凄じく草木が繁り、竹藪が連り、路といふ路もなく、子供同士でやつて來ても、自づからの聲やら影やらに驚いて、恐れ戰いて遁げ返つて來るやうな處であつた。「本丸には妖怪がゐる。」かう言つてかれ等は稻荷社より奥へは滅多に入つて行かなかつた。

それにも拘らず、その本丸が不思議の世界として、または思ひもかけない種々の獲物のかくされてある場所として、かれ等に取つて冒險の目標にされてゐたことなどをかれは斷片的に思ひ出した。そこには筍のいくら採つても採り切れないやうな竹藪があつた。茱萸の眞赤に熟してゐる樹などもあつた。幼稚なかれ等には、そこは寶玉に滿たされた南アフリカであつた。猛獸もゐれば、大きな蛇も居るやうに想像された。否、人生のあらゆる不可思議は、その本丸の中にかくされてあるとさへ思はれた。かれはある日、黑い水の中に、蘆荻の縱橫に亂れ伏した中に、赤い小さな魚のピラ〳〵と綺麗に動いてゐるのを見たことがあつたことを思ひ出した。そしてその赤い小さな魚の澤山に集まつてゐるところに藻のやうに浮いてゐたのは、女の屍の黑髮であつたことを思ひ出した。かれは眞青になつて其處から遁げ出して家に歸つて行つたことを思ひ出した。

三

そのかれの幼い眼に映つた荒れ果てた城の跡、移り變る不可思議の力に逢つては、長い間の人間の努

あつたやうであつた。そこには大きな神木と言はれる樫の樹があつて、それに夕日が眞赤になつて落ちて行くのをかれはよくかれの田舍めいた舊い茅屋の緣側から眺めたものであつた。そしてその時分には、大抵沼の半面が夕日に赤くかゞやいてゐて、水鳥の浮んだり飛んだりしてゐるのが黑く點のやうに指さされて見えた。

その神木などは、いつ伐られたか、今では無論その影も形もあたりに見えなかつた。

『さア、あの樫の伐られたのは、何年頃だつたかな。あの稻荷の餘りに荒れたのを修繕するために、伐つて賣られたとは思ふが、何でもその時は、保存派と伐木派と二派あつて、大分、すつたもんだをやつたのを覺えてゐるが、何年頃だつたか、ちよつと覺えてゐない。』かうその昔の友達も言ふほどであるから、もう今では、その大きな傘のやうに四方に枝葉を張つたその雄大の樹の姿などは覺えてゐるものはないに相違なかつた。刹那、刹那にのみ人間は生きて、一月と言はず、一年と言はず、何んな悲劇も、何んな光景も、また何んな心理も、忽ちにして過ぎ去り忘れ去つて了ふのであつた。あらゆることはすべて倐忽にして跡となつて了ふのであつた。

かれはある日は、その稻荷社の近くにある城濠の跡――今は水田になつて、稻が黃く熟してゐるけれども、確かに城濠のあとと思はれるあたりを其處か此處かと步き廻つた。すべてこのあたりは、城の中でも本丸の部分に屬してゐたので、かれの幼い頃の記憶では、夥しく――殆ど想像することが出來な

『それでも、二十年ほど前までは、まだいくらか昔の面影なども殘つてゐたんだけれども、工場が出來たり何かするやうになつてから、すつかり何も彼もなくなつて了つた。』

『一體誰の考へか知らないが、この城址を工場にしたことが第一の災なのだ。町のためにはそれは好いに違ひない。そのために、町は繁華にもなつたに違ひない。しかし、昔の靜かな淀んだ空氣を持つた城下町、舊いなまこじつくいの壁と、貧乏士族の崩れかけた家屋と、淡竹の藪と、栗の林とを持つたさびしい氣分はもう何處に行つても味ふことは出來なくなつたんだね。』

折角歸つて來ても、故鄕の廢墟の氣分に十分に浸ることの出來ないかれは、かう言つて、悲しむやうにして、ひろびろとした桑畠とその向うに連る碧い空とを眺めた。

二

かれが賴んで周旋して置いて貰つた或別莊――それは工場の技師か何かしてゐる人の所有で、此頃九州の分工場の方に行つてゐるために、全く留守番任せになつてゐるのであつたが、その別莊から少し行くと、そこに稻荷を祀つた祠があつて、赤い旗などピラ〳〵してゐるのがそれとはつきり秋の空に浮き出して見えた。かれは退屈すると、よく其處に出かけて行つた。

かれが幼い頃に記憶してゐるところに由ると、この祠は以前は此處よりもつと沼の岸に近いところに

濠の向うにあつた土手の跡も無かつた。すべて一面に平に桑畝になつてゐる。全く勤勉な農夫の鋤にならされて了つてゐる。

『何うも、此處等らしいけれども……。』

かれの爲めに說明の勞を取つてゐる昔の友達は、かう言つて、いくらか低くなつてゐるやうな地形のところを指して言つた。

『何うも、本當にはわからんかなア、もう今ぢや――』

かうかれは言つて、再び幼い頃の記憶をたどるやうにして向うの畠の角に行つて見た。

幼い頃のかれ、まだ五つ六つの頃のかれ、兄に伴れられてよくその橋の下の綺麗な水に泳ぎに來たかれ、その頃の無邪氣な幼いかれがまた浮んで來た。かれは不思議な氣がした。そこで水を泳いだかれは、今そこに立つてゐるが、半ば頭髮も白くなつて立つてゐるが、その無邪氣なかれと半白の頭髮をしたかれとの間には、平凡と言へば平凡、異常と言へば異常、驚くべき波瀾と言へば驚くべき波瀾を持つた人生が嵐のあとのやうに、または大きな絕壁にかゝつた瀑布のやうに、大きな幅を成してひろげられてあるのであつた。

『何も彼もなくなつて了つたね。僕等が見た面影すら、もう少しもなくなつて了つた。何處に、何う搜して好いかわからない位だ。』

新しい芽

一

障子を明けると、古い錆びた沼が見え、岸に繁つた蘆荻が見え、黑い點のやうに處々に散在してゐる漁師の舟が見え、眞白な羊毛のやうな雲の漂つた碧空が見えたけれども、しかもかれの胸には、雑草に埋れた濠の黑い水だの、殘甎の處々に落ち散つてゐる倉庫の址だの、蛇が氣味わるく日影を帶びてのたくつて行く石垣だの、天主閣の半ば崩れて壁が落ちて立つてゐるのなどが、歴々と映つて見えた。

その天主閣の城門に入らうとするところに、かなりに大きな橋があつた。その橋の址をかれは昨日も長い間かゝつて搜したことを思ひ出した。何うかしてそれをさがしたい。何うかしてその跡の髣髴だけをも得たい。さうすれば、それから手繰りに手繰つて、いろ〳〵と昔の跡を搜し出すことが出來る。昔の人の戀物語の跡をもさがすことが出來る。かう思つて、それからそれへと順序を趁つて搜して見たが、今ではそれと思はれるやうなところは何處にも見當らなかつた。橋のかゝつてゐる濠の跡も無ければ、

新しい芽

與へたのだ。そこから心が次第に日に面して行つたのだ。大きな扉の入口であつたのだ。」かれはかう思つて、つゞいて起つて來たさまざまの光景を繰返して頭に描いた。

午後になつてから、かれはO夫婦に暇を告げて、桑の霜に萎れた畑と、背の低い要の四目垣との傍を通つて、鐘樓のところから靜かに山門の方へと出て來た。さびしいしかし春を豫想した冬の野が濶くかれの前に展けた。

揃つてあつたといふことは、不思議な氣がするね。』

かれはこの寺が、苦艱を免れるための幽棲としてのみやつて來たこのさびしい田舍の寺が、大きいがらんとした本堂が、雨ざらしになつて板も半ば朽ちてゐる廊下が、潮のやうに西風の押寄せて來る裏の林が、かれにかうした新しい心の世界を齎して來る場所とならうとは思はなかつた。空しい古い壁を見てさびしいと思ひ、0夫婦の同じ顏を見ても悲しいと思ひ、背戸の畑の日蔭に處々に殘る雪を見ても涙が滂沱として落ちるやうな思ひをしたところが、一朝にしてかうした歡喜と勇猛心とに滿たされて來る場所とならうとはいつかれが豫想したであらうか。

かれの心は輝きと光明と安樂とに滿たされた。かれはもう歸つて行く都會を呪ひはしなかつた。事業のはかなく功名の空しいのを慨きはしなかつた。またかれが住んでゐる藝術の世界の陷穽を恐れはしなかつた。人生の欺騙乃至虛僞にも多くの心を費さなかつた。かれは再び青年に戻つたやうな氣がした。日影は朗かに庫裡のひろい勝手にさし込んで來た。雀はその生を樂むやうに嬉々として百囀した。

かれは殘雪の野をさまよつた頃の悲慘なかれの姿を想像した。『しかし……』とかれは思つた。『あの山陰にある小さな溫泉場、そこから停車場の方へと出て來る路、そこに林の中に縱橫に横つた墓、つゞいて田舍町の饂飩屋で見た老いた百姓の大きな手、それらがかれにかういふ境に入つて行く最初の暗示を

に生きるといふことも、山寺の殿堂に參籠して壯嚴な禮拜に跪くといふことも、決して二つの異つた途ではないのである。外形から推せば、一つは消極的に、一つは積極的に見えるけれども、實は倶に積極的であらねばならぬものである。世尊が死に面して、三七日間にあの大きな獅子吼をなした態度は飽迄かれは範としなければならない。『本當のことをするのはこれからだ……』またしてもかれはかう叫んで膝を叩いた。

　愈々一度都會に歸つて來なければならないといふ日には、下に下りて來て、長い間Oと話した。かれは此間から、その二階や薄暗い一間を『僕の僧房』と呼んでゐたが、『それぢやまた近い中にやつて來るから、成たけ僕の僧房はそツとして置いて與れ給へ。經文は大抵は藏つてちやんとして置いたけれど、種々なものを殘して行くから。』

『好いとも……。誰も二階になんか上つて行きやしないよ』

『それにしても、かうした二階が、これまでに僕の心に役立つとは思はなかつたね。今ぢや僕の一生に取つては大きな記念とすべき二階になつた。Fの山莊もさうだが、此處は一層さうだ。』

『まア、いつでもやつて來る方が好い。僕もこれから少し讀んで見る。』

『それが好い。山に行つて參籠するまでは、暇さへあれば、ちよい／＼やつて來るからね。まだいくらも讀まんのだから……。もつと讀まなければならないんだから……。兎に角しかし、君の寺に藏經が

て呉れたのだ。その心が卽ち法身なんだ。不動不壞なのだ。世尊の敎へには殊にさうしたことが高調して說かれてあるぢやないか。世尊の赤裸々で何物をも疑はない心持が、多くの經文の中心にもなり權威にもなつてゐるではないか、君。』

『面白い……そこだね、本當の信ずる力といふことは……』

『嬰兒行と言ふことなども書いてあるね、君。誠實にして悔ゆるところなし、そこに自由自在の活きた力が働くんだ。是は叡智といふこともあるが、それも所謂今の末法の世間の理智ではないね。その誠實なところから獨り手に湧き出して來るんだね……。いろ〳〵なことが皆なよく解けた。これからはナに本當に働くんだ。新しい思想なぞといふことに惑はされてはゐられない……。』

『本當だね……。そこまで君を動かして行つたかね。』Oは自分の身を振返つて見るやうにして言つた。とは言へ、かれは一度は何うしても都會に歸つて行かなければならなかつた。それは世間にある身の止むを得ない羈絆である。しかし此頃では、かれの心は形式卽ち壯嚴なる禮拜及び讀經、または僧侶達の本當の生活に對する憧憬に次第に深く惹かれて行つてゐた。何うかして一度は大きな山の殿堂に參籠しなければならないとかれは思つた。

一方さうした希望に燃ゆると共に、一方はこれから出て行く、または働かなければならない世間に對して、かなりに張詰めた心を抱いた。卽くも離れるも實は同じ心である。世間の塵埃の裡にあつて活潑

て悔いないとすら思つたからね。僕の經て來た艱難は、丁度海綿か何かの中に吸込まれたやうに、すつかり吸込まれて行つたからね。』

『それは好いね、矢張、經文には大きいところがあるからね。』

『それに、かういふ心持を起したね。かうした大歡喜を受けた得難い經驗を僕は世間にも分つてやりたいとつくづく思つたね。世の中には艱難が充滿してゐる。世間にある人は一人として營々促々としてそれに苦んでゐないものはない。さういふ人のために、この僕の大歡喜を分けてやるといふことも、決して徒爾ではないと思つたね。或は淺い感激かも知れない。例の動かされ易いセンチメンタルな心だと言はれるかも知れない。また實際自分の艱難に捉へられた形かも知れない。しかし僕に取つては大きなことだつたんだからね。本當に逢ひ難き佛法に逢つたわけだからね。』

『面白い……』

流石にOも深く撲たれたやうにして言つた。

『何の疑惑、何の慎恚、何の嫉妬、何の虛榮ぞやではないか、君。君も知つてゐる通り、僕は昔から比較的正直に世間に生きて來た。誠實を失はずにやつて來た。言はゞ丸はだかで刀槍の林立する中を通つて來た。現に、女の欺騙に逢つて苦しんだ時などには、「惚れたものをさういふ眼に逢はせるのは赤兒の手を捻るやうなものだ……」と痛感して言つたことがあつたが、その誠實が、正直が僕の魂を生かし

に深くかくれてゐる法身を再現しなければならないのである。そこに至つて、初めて立派な藝術だと言ふものが出來た。其處に至れば、世間の共鳴すると否とは、最早問題とするにも足りないのであつた。

かれは今まで傾倒し、共鳴した多くの作家を一つ一つ繰つて頭に浮べて見た。かれは自分の今までやつて來た寫事などは、紙屑にだも値ひしないものであることを耻ぢた。

『かうしていつまでもゐて、家の方は好いのかえ？』

餘りに二階の一間に引込んでゐるので、心配してOは言つた。

『いや、歸らなけりやならない用事は澤山あるんだけれど……。つい讀み出したら途中で止められなくなつてね。……何うも、經文がかういふものだとは思はなかつた。しかしもつと詳しく讀んで見なければいけない。わからない處がかなりにある。議論あたりから讀んで見なければ駄目だ。』かう言つて、深く鬚の生えた、頭髮の半ば白い顏を薄暗い空氣の中に見せて、『しかし、いろ〳〵なことを知つた。解けない問題を何の位解いて貰つたかわからない。それに、不思議なのは、書といふものはいくら傾倒して讀んでも、何處かにその弱點とか間隙とかを發見して、曲りなりにも我見を立てるものだが、さうした心がちつとも起つて來ないのが不思議だ。滑かに、自然に、時に由つては讃歎するやうに引張られて行くのが不思議だ。此間も、すつかり打たれて了つて、これからの殘つた一生を佛の功德に報いても決し

ことの出來ない心のあきらめ、勝敗に精神を浪費するより起つて來る狂死、さういふもの丶狀態が無限に書物に描かれてあるが、それは多くは實際の人生の外面的反射で、その透徹の度數から言つて來ると、何の位まで深い魂に入つて來てゐるかゞ疑問であつた。かれは年少なるが故に冒險小說に共鳴した。戀をなやみつ丶あるが故にセンチメンタルな戀物語に共鳴した。また家庭を苦しみつ丶あるものなるが故に家庭問題を主材にした戲曲乃至感想に共鳴した。社會を對照にしてゐる身であるが故に、社會問題を議した思想に共鳴した。しかし、實際の人生は決してこれだけではなかつた筈である。それだけの共鳴ならば、その人は決して、人生の奧深く、更に人間の奧深く潛んでゐる或る偉大なもの微妙なものには觸れてゐないのである。著はされた書と實際の人生の間に竟に竟に一緖になることの出來ない間隙のあるのは止むを得ないことであるとかれは思つた。暫太かれ自身にしても、書より得たものと實際の世の中から得たものを比べて考へて見ると、後者の方が前者よりも非常に有效に役立つて來てゐるのを見落すことは出來なかつた。そして世尊の持つた自信の力、大膽な表白の力、そこに何とも名狀せられない偉大の主觀のあるのを思つた。藝術も矢張さうである。そこまで深く自己を掘つて行く力を持ち、そこから生じて來る不動不壞な自信を持ち、そして世間に乞はれて初めて世間に臨むやうな權威を持つてゐなければ、外面の寫生、または描寫、または單に人生の外部を包んだ雰圍氣に纔に指を染めた位のものになつて了ふのは止むを得ないことだ。人生の再現は可なりであるが、かれ等藝術家は、その雰圍氣を更

かれはまたある時は、自分の經て來た世の中と、曾て讀んだことのある外國の思想乃至小說にあらはれてゐる人生と、今現に讀みつゝある經典にあらはれた世間出世間とを比較して考へて見た。少時から讀書家であるかれは、これまでに手當り次第に隨分種々な本を讀んだ。苟くも著はされたる書は、個人の生活のあらはれで、何んな詰まらないものにも、詰まらないだけの內容を持つてゐるものだと思つて、眞面目にそれに對して來た。滑稽、駄洒落、通俗な小說、さういふものからさへかれはある人生の暗示を得やうと思つて讀んで來た。しかし、今綜合して考へて見ると、實際の人生と著はされたる書物との間には、何處まで行つても一緒にならないやうなところがあつた。それと言ふのは、客觀的から見て、人生の表面にあらはれた雜多紛々が、多くは外面、妥協、中途半端で、人間の魂の外皮を包む所の雰圍氣が因襲、習俗または理智的修練の結果に由つて、非常に厚く破るべからざるものになつてゐると共に、主觀的から見て、個人が魂を痛感する程度が尠く、また偶々それに觸れるものがあつても、人生の表面の雜多紛々に壓倒されて、それを直に大膽に表白するものがない爲めであつた。或は慾に捉へられた形、戀に捉へられた形、世間に捉へられた形、貧富に捉へられた形、肉體に捉へられた形、境遇に捉へられた形、學問に捉へられた形、知識に捉へられた形、運命に捉へられた形、義理人情に捉へられた形、自己に捉へられた形、他に捉へられた形、すべてさういふ捉へられた心の上に起つて來る或は殘酷、或は悲慘、或は痛恨、またはさうしたものから脫離しようとする煩悶、疲勞し盡して再び立つ

堂の前は柩を送つて來た人達の大勢集まつて來てゐる時で、その賑かな氣勢が、讀經の聲に雜つて、かれのゐる二階の方まできこえて來た。

かれは立つて窓を明けた。後で、ある日、かれはOに言つた。

『矢張、形式と言ふものは必要だね。讀經にしても、またはその佛事の儀式にしても、單に無意味にあるのではないね。僕にしても、經を讀むといふことの上に、更に深くその形式に入つて行くことが必要だね。大きな本山にでも行つて、一年でも好いから、その空氣につかつて來ると好いんだがね。』

『それはさうだね。僕等にしても、信仰といふことは、經文の理義を究めるといふことよりも、儀式から入つて行つた方が却つて有效に役立つてゐるやうだからね。讀經してゐれば、僕等でも矢張、佛者の心と合一してゐられるからね。』

『確かにさうだね。それで形式といふことをあのやうに經文でも重んじてゐるんだね。實際、大きな殿堂か何かで、僧達が大勢集つて、列をなして、讀經禮拜してゐるさまは壯嚴だからね。』

かう思つたかれの胸には、Durtal が Chartres の退屈な寺院生活から、次第に中世紀の藝術の方に心を惹かれて行つたさまなどが思ひ出された。

『一年でも好いから、Nあたりに行つて加行でもして來ると好いんだがな。』

しかし哲太の境遇では、さうしたことは容易に許されなかつた。

疲れるとか、暗すぎれば心が憂鬱になるとか言つて、十二三年前に郊外に家を建てる時などには、さういふことを喧しく吟味して、そして書齋をつくつたのであるが、さうしたことは、今ではかれには何んでもなかつた。却つてこの何もない、空しい灰色をした壁と、軸物も額も何もかゝつてゐない薄暗い一間の方がかれの心を靜かにした。

かれは多くの世間の人達が無用のことに心を費し、精神を盲にしてゐることを思つた。其處にも此處にもその例は非常に多かつた。現に、この寺のOなどにしても、もつと考へなければならないことを考へずに放つて置いてゐると思つた。

大般涅槃經は、殊に深くかれの心を動かした。その法身を說いたあたりでは、かれは幾度か歡喜の聲を挙げた。かれの考へたことは、すべてそこにあつた。世尊が人間なるが故に、いろ〳〵な悲喜劇に遭逢し、また幾多の經驗を體感しながら、法身の姿を失はずに、遂にその深い境まで行つたことを思ふと、世尊が今現にそこに實現してゐて、かれのために、『强かれ、勇ましかれ、何物にも捉へられざれ、生死にさへ捉へられざれ』と說法してゐるその聲が歷々と耳にあるやうな氣がした。『時』は五十年の『時』てはない。無窮の『時』である。であるのに、何の故に『時』についてかれは深く思ひ煩つたのか。かれはかう思つてまた法華經の壽量品の中にあるシインを繰返して描いた。

何うかすると、Oは法衣を着て、袈裟をかけて、本堂に行つて、讀經したが、さういふ時は、大抵本

た。哲太はをり〳〵下へ下りて來て、『難かしい。中々難かしい。』かう言つて溜息を吐いた。

ある時はかれはOに言つた。『この教への捨てた形がつまり拾つた形になつてゐるんだね。世を離れてそして世に卽いた形だね。そこをよく考へて見なければならないんだね。それから思つても、今の僧侶はもつと活躍しなければならんと思ふね。枯木寒巖もまた可なりだが、枯木寒巖にしても枯木寒巖の持つた價値そのものをもつと發揮しなければいかんと思ふね。』

冬は次第に寒くなつて行つた。朝は霜が白く寺の瓦の上に置いた。

かれの姿はをり〳〵本堂の前に見えたり、鐘樓の處に立つたり、墓場の方へ通ずる路の方へ歩いて行つたりした。朝早く雀の心地よげに庫裡の庇に囀つてゐるのを、かれは長い間凝と見詰めた。

かと思ふと、朝、食事をすますとすぐ二階に行つて、午まで下りて來ずにじつとしてゐることもあるので、多少氣がゝりになるやうにして、OやOの細君などがそつと階級を上つて覗きに來た。Oの細君は、哲太が鬚の深い顏を薄暗い一間の空氣の中に浮き出させて、少し微笑を含んで此方を向くさまをいくらか氣味わるくすらも思つた。

しかもかれはその薄暗い一間に全く心と體とを凭せたやうにしてゐた。以前はかれはその書齋にいろいろなものを置いた。草花などをも持つて來れば、襖に張る模樣の捺された紙について深い好惡を持つてゐて、色などにもしつこく注意を拂つた。窓からさして來る光線などについても、餘り明るすぎれば

染着の時に起つて來る眞劍と一心とは、解脫に入つてからも、決してその根本を失はない筈でなければならぬ。』かう考へて來てかれはある曙光を得たやうな氣がした。

染着の危險は、その捉へられた形にある。捉へられるがために、疲勞が起り、倦怠が起り、生命の浪費が起る。從つて解脫に入つても、解脫そのものに捉へられては、矢張その大自在は得ることは出來ない。飽くまで玲瓏透徹して、しかもその根本の活動をそのために鈍らされない所に、その大きな道があるのである。そして、本當に捉へられないといふことは、本當に捉へられることであり、また本當に捉へられるといふことは、本當に捉へられないことであるのである。此處に到つて、かれは人間の心理の根柢に横たはつたある不可測なものに觸れることが出來た。

從つて解脫は解脫であつてはならない。悟道は悟道であつてはならない。人間が一度その境に入つて我れ解脫し得たりと思ひ、われ道を得たりと思へば、それは既にその解脫たり悟道たる所以を失つてゐるのである。女に對しての絕對の愛をかれが感じて、しかもその感じたことにほつと呼吸をつけば、それでその絕對の愛は雲霧のやうに消えてなくなつて了ふのである。その道が『あきらめ』にあらざる、また『妥協』にあらざる、消極的にあらずして却て積極的なるはそこにある。

しかしその經文の中にある細かい說明は、容易にかれには解らないやうなことが多かつた。奇蹟の方面、形式の方面、そこまでかれは入つて行けさうに思へながら、何うもそれが十分に入つて行けなかつ

だけそれだけ一心になる、眞面目になる。身をも何をも忘れたやうになる。また不可思議な驚くべき力も其處から湧いて來る。然るに、染着に離れて、欲する念を脱却して、しかも何に頼つて、この眞劍と一心とを保留することが出來るか。

かれと女との間の心理の經過を例にして考へて見ても、眞劍であつたことは、深く染着した時にある。大きな理解の下に釀されて來た本當の愛といふことは、所謂決定であつて、そこに染着した時のやうな眞劍は作つて來てゐない。かれはこの問題について長い間考へた。

かれは自分の知つてゐる所謂僧侶の生活などを思ひめぐらして見た。そこにもさうした弊、さうした矛盾を容易にかれは發見することが出來た。僧が概して狡るいと言はれるのもそのためである。瓢箪鯰でつかまへどころのないと言はれるのもそのためである。立派な天職を有して居りながら、眞劍に、熱烈に、それに從ふことの出來ないのもその爲めである。本當の愛といふことに、または眞劍といふことに捉はれたためである。更に細かく言つて見れば、この偉大な道の敎へが、まださうしたことを本當に痛感もしない中に、無意味に、單に知識として入つて行つてゐて、暗々裡にそれが實世間に利用せられる形になつてゐるためである。內に捉へられるも、また外に捉へられるも、その捉へられたことは一つである。『さうだ……その捉へられない、大乘の眞理に入つて行つても、猶捉へられないところがなければならないのだ。捉へられないといふことが大自在であるのである。空非空、相非相であるのである。

哲太は時にはまた自分の今まで經て來た心の閲歴をそれに當はめて考へた。何も彼も歴々とよくわかつた。一々手に取るやうに見えた。かれが社會反抗、自己反抗に出立して、それから社會改良の思想に失敗し、デカダンとなり、惡、罪過の路に陷り、それから深い染着に入つて行つたさまは、その昔の經文の中に既に立派にちやんと描かれてあるのをかれは見た。かれは思つた。すぐれた藝術は矢張人を救ふであらう。人間の苦艱をその縛めから解くであらう。しかし、藝術の根本は經文のやうな熱烈なものではあり得ない。またそれと同時に、藝術に對するものゝ態度と、經文に對するものゝ態度とは著るしく違つてゐる。折角その陰に人間を救ふほどの力あるものを藏してゐても、藝術の表現では有效にそれを人に傳へることの出來ないやうな處がある。それに人間はその把持の困難なために、折角到達した眞劍また一心といふ境からいつも墮ちて了ふ。そして藝術の中にはそれを幇助するやうな分子がある。かうかれは考へた。

ある時は非常に大きなものに打突かつたやうに、『實に大きい。この道は實に偉大だ……』かう獨り叫んで頭を振つた。

しかし、この偉大な道は、容易に入つて行くことが出來ないやうにも、または普通に世間であきらめと言ふ微温い心の境に似てゐるやうにも哲太には思はれた。かれ自身の心の經驗から言つても、染着した時の眞劍と一心とを、その境では何うして捕捉して行くであらうか。原則から言つて、染着の深いもの

『それは必要だけれど、何うも矢張體感したものが尠いから、知識としては知つてゐても、それをさういふ風に描いて見せるといふことは難かしいよ。言はゞ、世尊が再び生れて來なければ出來ないやうなもんだからね。』

『それはさうだ。難かしい事業には相違ないね。しかし、もつと張り詰めた心や行爲があつても好いと思ふね。大乘は決して張り詰めた心を否定してはゐはしないからね。何うも微温い心が多すぎるよ。』

『それが所謂末法の世でね。』

かうOは靜かに笑つた。

哲太の今の歡喜の心の境では、かうしたOの言葉は非常に物足らなかつた。何故もつと強い共鳴を感じないのかと思つた。あの驚異を、あの熱烈な宣傳を、またはあの大きな強い同情を、何故O乃至Oと同じ教への下にある人達は感じないでゐるのであらうか。そして所謂世間の僧侶として甘んじてゐるのであらうか。樂な妥協に甘んじてゐるためか。それとも大きな教の宣傳にわるく捉へられて、餘りに早く染着を脱したためか、または果して所謂末法のためか。

かれは今の世間にある僧侶の生活の形を、昔の巖窟の中の生活、深山の奥の生活、菩提樹下の生活、旅から旅へと雲水の行を行ひつゝ送つた生活、さうした昔の僧の生活に引き比べて考へた。そしてさうした忍苦の生活からでなければ、本當にその教を象徴した心は生れて來ないと思つた。

或時はかれはOに言つた。

『一々思ひ當ることばかりだ。曾て疑問にして殘して置いたことが、綺麗に立派に解けて行つてゐる。自分のやつて來た經驗を皆生かして呉れる。また力づけて呉れる。豪いものだと思ふね。何故もう少し早く讀まなかつたと思ふね。』

『それは好い。』

『一體、君を始め、多數の僧侶、またはこの大きな哲學を研究した人は、經文について、何う考へて居るんだね。僕なんかはまだ漸く門に入つたばかりだけれど、あの抽象的な文字の中に、說明の多い理窟の多いあの表現の中に、人生の心の綰がすつかり描かれてあると思ふね。見事に心の核心に觸れるやうに描かれてあると思ふね。そして驚くべき斷案を示してゐるね。』

『さういふ讀方をするのが本當の讀方なんだよ。』

『だから、僕の考へでは、それを、この經文を、一々事實に當てはめて、或は家庭に、或は社會に、或は日常の生活に、或は男女の悲劇に、或は心の底に橫はつた罪惡に、一つ一つ當てはめて、丁寧に解釋してやることは、非常な事業てはないかと思ふね。無論、君達の方の人達はそれをやつてゐるのだらうけれど、もつと切實に、譬喩てなしに、また第三者的の微温い說法でなしに、これを世間に敷くといふことは必要ぢやないかね。』

かれは嘗て山の上で讀んだ法華經の背景を成した種々の思想が、次第に深く解け來るのを感じた。壽量品にあらはれた『時』の思想も決して單なる譬喩とは思はれなかつた。また提婆品に於ける龍女の成佛も決して一場のお伽噺ではなかつた。普門品の持つた一心も益々その功德を的確にして來るのを覺えた。

維摩經の中にある病の解脱は、更にかれに今まで思はなかつたことを思はせた。否その中にある阿難が世尊の爲めに牛乳を乞ふの一條、または須菩提が食を閭里に乞ふ一條の中などには、かれが多年問題にしてゐた慈悲、慈善、乃至年齡の相違より起る理解の相違などが一々わかりよく說明し解決されてあるのを見た。かれは益々その世界の廣く、生命の力の强く、空非空、相非相の心理の無限に擴張されて來るのを感じた。

そしてその得たる心の新しい境は、決して消極的のものではなく、世間に普通に言はれてゐるやうな隱遁的のものでもなく、または艱難を回避するための樂なあきらめでもなく、あらゆるものを突破し來つて、更に無限に展開して行く種類のものであることを思つた時には、かれは今まである殼につゝまれて、それをわが生とのみ思つてゐた蟲が、一夜にして生れ變つて、新しき羽を得て、縱橫に、自在に空に飛揚することが出來たやうな喜悅を味はつた。『實に愉快だ。』かれはその喜悅を他に分たずにはゐられないといふやうにして、二階から下りて來てかうO に言つた。

と言つたやうな微妙な境は、かれが曾て主と客とに就いて暗中模索を試み、一進一退、捕捉すること能はず、解決しやうとして解決すること能はなかつたものに、立派な說明と解釋とを加へられたやうなもので、かれは益々心の共鳴を深くした。しかもかうした深い思索は人間の最初からその胸底に橫はつてゐたもので、數千年の昔に、既にかうした心の大成を試みたものがあるといふ事實は、かれがこれまで常に問題にした世間、更に進んで人間の如何ともすべからざる『時』、神祕不可思議として科學の力を以てしては如何ともすることの出來なかつたものを、縱橫無碍に突破して、そしてその自己の持つた生命はこの廣大無邊なる宇宙の中に無窮にひろがり渡るのを覺えた。それから比べると、かれの經て來た社會反抗、または個人反抗、自己反抗、デカダン、更にこれを大にしては、社會的改良の思想、現時ヨオロツパに張り渡つてゐる民主と專制との對照、さうしたものがいかに小さく、またいかに零細に、人間が卽くべからざるものに卽き、浪費すべからざるものに浪費し、熱すべからざるものに熱してゐるさまを眼前に歷々と浮べずには居られなかつた。またさうした悟道と無明とが、丁度木の葉の層々相堆積してゐるやうに無限に重なり合つてゐるさまを思はずにはゐられなかつた。今までは多少の疑惑がその間にあつたにしても、人生の進化がかれの中心思想を支配してゐたが、今ではその進化の尺度の甚だ零細にして、寧ろ前に伸張すると言ふよりも、層々相重なると言つた方が、その光景を如實にあらはし得るに近くはないかと思はれて來た。

あつた。かれは先づその疑ひ惑ふ心の微塵もない聖者の透徹した心に驚いた。次にその信じた力の强い權威に撲たれた。聖者は年未だ不惑に達せずして、何うして何處からかうした信ずる力を得來つたであらうか。また聖者はその敎へを宣するに當つて、衆菩薩の三度四度切にこれを乞ふに及んで、始めて、さらば、爾、諦かに聞け、かう言つて自己の敎へを說いてゐるが、この諦かに聞けと言へる言葉の中だけにも、いかに深い理解と自信と、またそれから生ずる權威とを持つてゐるかをかれは思はずにゐられなかつた。かれは益々深く經卷に讀み耽ると共に、かれ自身やつて來た心の閱歷が、一つ一つ立派な證劵を得て來てゐるやうな喜悅を感じた。あらゆる問題は日每に次第に解けて行つた。さながら必然に解けるべき性質の氷が漸く日に面して行きつゝあるかのやうに……。

ある時は主觀を代表する文殊と、客觀を代表する普賢に就いて、それをかれの經驗し思慮した思想に當てはめて一日も二日も考へた。內にあるものと、外にあるものと、また內にして外にあるものと、外にして內にあるものと、所の寂寥聞えるなくしてしかも萬雷悉くこれに反應する理由と、能の活潑潑地にしてしかも寂然不動なること石もこれに及ばざる理由と、解と行と相對し、所證と能證と相對した形は、かれに深くいろ〳〵なことを思はしめた。しかも文殊にしても、普賢にしても、その傾向を、またその偏向を現したものであつて、文殊必ずしも主觀のみにあらず、普賢必ずしもすべて是れ客觀にあらず

集つて來るやうな町も何もなかつた。Durtal は寧ろその古典的な、形式的な尖つた十字架に夕日の輝ける、雲霧の忙しく寺の殿堂の高い廂を封ずる、または光線の薄暗い廣い堂の中に僧衣を着けた人達の姿の夢のやうに往來する。さうした光景に次第に心を引き寄せられて行つたのであるが、しかし哲太はそれを淋しいとも思はなかつた。外面にこそさうした光景はなけれ、殿堂も、香烟も、尖塔も、あらゆる壯嚴な儀式も、何も彼もかれはその經卷の中に無限に卷き納められてあるのを感じた。かれは靜かな心持で、そこから平凡な野を眺めた。

時には寒い西風が裏の森を鳴らして、それが凄じく潮のやうな音をかれの一間へと送つて來た。夜もすがら落葉の窓を打つ音などもした。

外からこの大きな自然の風や雨や雲霧やくもり日の忙しい光線や、木の葉の空しくなつた樹林のさまが一つ一つ心に染み入るやうに入つて來ると共に、內からは人生の艱難や苦艱やまたはそれ等のものに對する修業や、細かい人間の心や魂や、さうしたものが歴々と出て來て、そしてその大きな自然と雜り合つて行くのをかれは見た。そしてそれが何とも言へない心持を誘つた。

かれはをり／＼經卷の上から眼を離して、體も魂もおのづから跪かずにはゐられないやうな大歡喜を感じた。それは今までかうした心の境に觸れなかつた、觸れても自分の力だけではそれをしつかりと把握し言說することの出來なかつたものを、的確に、明かに、聖者が宣言してるところに遭逢する時で

Durtal のために Chartres の中世紀の寺院が、瞑想の地として、修行の處として有効に役立つたやうに、その平野の寺の塵埃に埋れた二階の一間は、今、暫太のために捨て去ることの出來ないところとなつた。主僧のOはかれのために二階の先代の僧の住んだ室を修理し、整理して呉れると言つたが、かれは敢てそれを望みもせず、また待ちもしなかつた。かれは庫裡の臺所の方から登つて行く二階の室――O夫婦が手近なのを便利として、一時物置に、また養蠶などをする時に限つて使用した六疊の一間の疊を新しくし、落ちた壁を塗り更へたゞけで、そこに机を持つて行つて据ゑた。かれは華嚴經から手を着け始めた。

かれの居る一間の隣は修理さへすれば八疊の立派な室になるのであるが、しかしそこには古い長持だの、本箱だの、養蠶の時に使用する籠などが縱横に置かれてあつて、その上に深く塵埃が積つた。かれはその物置の傍の廊下――いくら掃除してもザラ〳〵と昔の塵埃が落ちて來て草履なしでは歩くことの出來ない廊下を通つて、藏經の一杯に置かれてある室へと行つて、右の雨戸を一枚繰つて、そこからさし込んで來る光線をたよりに、自分の見たいと思ふ經卷を出して、そして窓のところへ行つてその塵埃をぱた〳〵とはたいた。

そこからは、裏の野と、田圃の中に通じた路と、寺の境内に屬した杉の小暗い森とが見えるばかり、Durtal が行した Chartres の大きな寺院の持つたやうな何等壯嚴なまた古典的な光景は見たくも見られなかつた。尖つた塔も、谷合から落ちる無數の瀑布も、香烟の漲り渡る大きな殿堂も、遠くから禮拜者の

その中に發見する考へで讀んで見る……』
『それは面白い。それが本當だ……』
かれは既に早くもすべての心をそれに惹かれた樣に、感激の調子を失はずに、『兎に角、しかし、奇蹟ぢやないか、君。數千年も前に生活した人達の心理がぴたりと僕の心に合ふといふことは……。または
さうした昔にかうした境まで入つて行つた人達があるといふことは……。法身、實際法身の金剛不壞、
それが何とも言はれない光明と大歡喜とを我々に與へるぢやないか。法身を認め得さへすれば、我々に
は生死はもう問題でなくなつてゐるではないか。無限の生命があるぢやないか。それを、前には解脱を
消極的だと思ひ、または一種のあきらめと思つたりしたんだからね。非常に消極的どころか、非常に積
極的なものではないか、君。』
『さうだ、それに違ひない。』
かうＯも言つた。
哲太は愛した女の功德の爲めに寄進されたその經文が、かうしてゆくりなくかれの目に觸れ、手に觸
れて行くといふことも決して因緣なしではないと思つた。これもかれに取つては、確に奇蹟の一つのあ
らはれではないか。

の心に犇々と思ひ當つて來るのを覺えた。

僅に一二枚讀んで行く中にすら、かれは、かれが思慮した、かれが苦しんだ、またはかれが體感した心理の形が微妙に巧に描かれてあるのを發見した。

Oはやつて來て、

『讀んでるね、何うだえ？　ちつとは面白いかえ。』

『面白いね。』

かう頭をあげて、感激したやうにして哲太は言つた。

『少し讀んで見るかね……』

『讀む、是非讀む。』

『註釋のある方がわかり好くはないかな。』

『いや、これで好い……。この方が好い。僕は僕だけの考へでこれを讀んで見やうと思ふから……。僕の讀み方は或は間違ふかも知れない。また或は淺膚なものになるかも知れない。古來の無數の人達が既に何遍も言つてることを單に繰返してるるにすぎないと言つたやうなことになるかも知れない。しかし、兎に角、僕は僕だけの考へで、僕の經驗と知識とそれに由つて起つて來た心理とで讀んで見るつもりだ。僕は學問をしやうとか、研究しやうとかいふ心でなしに、自分の苦艱を、自分の一生の事實を

手近にあつた二三册を持つて、下に降りて來たが、その經文に何等か言說すべからざる隱れたる力があつて、不可思議にかれを惹くやうに、一刻もそれを見ずにはゐられないやうな氣がした。かれの心はその古びた、色の褪めた、處々蟲の食つてゐるその本の方にのみ惹かれて行つた。

Oが頻りに世間の話を爲懸けるのを他に、かれは奥の室の一隅に置かれてある、これも古い昔の寺小屋で使用したやうな低い机に身を凭らせて、緣から障子の上にさして來る冬の日の光線に面しながら、一心にそれに讀み耽つた。

世間に流布した經文の五六種は二三年前から少しづゝかれは親しんでゐるので、普通には難かしい術語や表現や、譬喩などは何うやら斯うやらわからずなりにも理解して行くことが出來た。かれは大きな昔風の文字を一字一字とたどりながら、をり〳〵大きな人生の事實をその蔭に持つた表現に行當つて、頭を振るやうにして、深く考へに沈んだ。

考へても考へても盡きないやうな深い意味がその中にある。空にあらず、また空にあらざるにあらず、相にあらず、また相に非ざるにあらず、損にあらず、益にあらず、平等にあらず、差別にあらず、欲するにあらず、欲せざるにあらず、また欲せずして欲するにあらず、欲して欲せざるにあらず、――昔のかれにしてかうしたものを讀んだなら、唯說者が詭辯を弄してゐるとか、または矛盾したものを無理に持つて來てつぎ合せてゐるとしか思はなかつたであらうが、今ではそれが深い一種の妥當性を以てかれ

『なアに、室なんか何うでも好いがね、兎に角かうして君の寺に藏經があるとは思はなかつた……』
『しかし、もう隨分讀んだんだらう？』
『何アに、世間にあり來りのものばかりさ。今度は大乘よりも、小乘の方をもう少し研究して見たいと思ふね。』
『阿含は面白い……。そこには、世間がすべて說明してあるから……。僕も、般若門はもう少し讀んで見たいと不斷思つてるるんだがね。』
『般若も面白いだらうね。』
『般若が一番肝心なんだね。本當は……。そこを十分に硏究しなければ大乘には細かく入つて行けないからね。』
こんな話をしながら二人は暫しその塵深い二階の中に立つてゐた。哲太は昔の聖者の殘した貴い書が、經驗が、體感が、多くは人間に顧みられずに、かうして闇の中に、塵埃の中に埋められてあることを不思議にした。かうした深い心理の境などは世間は何とも思つてるなかつた。次の時代から次の時代へと多くは盲目に且つ無明に夜は朝になり朝は晝になつて行くのであつた。突當つた壁を何うすることも出來ずに、爲方がないとあきらめて、樂に日夜を過して行くやうな世間であつた。藏經がかうして塵埃の中に埋れてるるのも無理はないとかれは思つた。

皆なあるのである。そしてさうしたあらゆるものが、この暗い闇の中に、深く積つた塵埃の中にあるのである。かう思ふと、かれは過去何千年の人生、または未來何千年の人生が象徴となつて歴々とかれの前に迫つて來てゐるやうなのを感じた。結局塵埃の中に埋れて行く無窮の人生ではなかつたか。

かれは手近にある一二卷を本箱の中から出した。それにすら、かれの持つた手がザラ〳〵した。

本と本とを合せて、塵埃をはたきながら、

『ヒドイ塵埃だね。』

『君でも讀めば、もう少し整理するよ。』

かうＯは笑ひながら言つた。

手に取つたのは華嚴部の五卷目と六卷目であつたが、それは黄い色の褪めた表紙で、字が大きく、古風に、いかにも二三百年以來のものであることが一目でわかつた。明けやうとすると、蟲が食つてゐて紙と紙とがくつ附いて、大きな經文の字が處々なくなつてゐたりした。

『放つて置いては駄目だ……。皆なかう蟲が食つて了ふ……』

『何うしてもさうなるね。』

『一つ讀まして貰ふんだね。僕が來て整理してやらうよ。』

『本當に讀むんなら、この室を君のために住へるやうにしてやつても好い。』

『これですつかりあるんだね。』

哲太はかう言つて、其處に一杯に置いてある藏經を見上げた。『隨分大變あるもんだね。』

『兎に角、この室が十疊だが、こゝにかうして一杯あるんだからな……。ちよつと手がつけられないよ。蟲干をするんだツて、人を賴んで十日はかゝるからね。』

『大變なもんだね。』

『一遍ざつと眼を通すだけでも、三年と何ケ月かゝるツていふ話だから……』

『全部讀んだ人などは滅多にゐないわけだね。』

『それに、各宗とも、宗旨に由つて、重立つた經文がきまつてゐて、それを讀めばまア僧侶として間に合つて行くからね。それに、學校などでも、經文よりも義疏とか註釋とか言ふものに重きを置いて、多くは其方の方で研究するからね。』

『さうだらうね、成ほどこれでは皆な讀むものはない譯だ。』

哲太はこの澤山な本が、人生の苦痛、艱難乃至は懊惱、解脫の一々の記錄であるといふことを考へずにはゐられなかつた。そこにはあらゆる人間の心理の狀態、苦艱の狀態、生活の狀態が皆なあるのである。數千年も前の人達のやつたこと、考へたこと苦しんだことが皆あるのである。戀も名譽も、榮華も生死も皆な層々重なつてそこにあるのである。希望も絶望も皆あるのである。涙も笑ひも喜悅も悲哀も

『惜しいもんだ。こんなにして置くのは――』

『でも、下だけでさへ廣すぎて、掃除が行屆かないんだからな。』

『しかし惜しいもんだ……』

『君でも來る氣なら、少し金をかけりや、立派な室になるよ。』

こんなことを言ひながら、かれ等は床柱に觸つて見たり、襖の繪の黑くなつたのを起して見たりした。哲太は一枚明けた雨戶のところに行つて、庭や畠を越して、細い田圃路の中を人の步いて行くのを眺めた。

『見晴らしも好いね。』

『ちよつと好い。それに、風通しもわるくはないからね。』

こんなことをOは言つたが、そのまゝその一間に隣つたしきりの板戶を明けて、

『これだよ、藏經は――』

『そこにあるのか。』

哲太は近寄つて行つた。忽ち無數の本箱――重なつたり倒れたり壞れたりしてゐる、または本が半その中からはみ出してゐる無數の本箱が、闇の中に、塵埃の中に全く埋もれ果てゝゐるのをかれは眼にした。

六年も熱心にその寺の恢復と整理に骨を折つて來た。そして今では、昔のやうにまでは行かなくとも、それでも何うやら寺觀らしい外形を保持することが出來るやうになつた。『藏經を賣らなかつたのは不思議な位だ……。勿論、その頃には藏經なんか紙屑の値段にしかならなかつたからな。』かうＯは言つた。

Ｏは先に立つて、階級を上つた。鍵こそ今はかゝつてゐないが、依然として昔のまゝの引板がそこに引かれてある。Ｏはそれを引いて明けて、そして二階へと行つた。哲太もあとから續いた。

『君が住職になつてからは、丸で手を入れないんだね。』

『向うの一間は、蟲干や何かの時に使ふが、此方はそのまゝだ。』

暗い闇の中に、塵埃の深く積つた中に、雨戶の隙間や穴から外面の日の光線が一ところ二ところさし込んでゐるので、亂雜な、襖の建具の縱横に倒れた、障子の破れた十疊位の一間はそれと微かに髣髴されたが、やがてＯが其方へ行つて、前の雨戶を一枚開けたので、明るい光線は流るゝやうにその中へとさし込んで來た。

『成ほどこれはひどい。』

哲太はかう言つたが、立派な床柱や、ちやんと出來てゐる床の間や、煤けながらも木目の立派な天井板などに目を留めて『しかし立派な室だね。手を入れりや大した一間になるね。』

『立派な室なんだから……。木でも何でも金はかかつてゐるんだがね。』

室が二間でも三間でも出來るんだけれど、今の小人數ではね。却て掃除や何かゞ面倒でね。』かうOは常に言つてゐた。

尠くともその二階は三四十年その塵埃の埋むるに任せたのである。戸を閉めたまゝ、疊は破れたまゝ、天井は鼠やいたちの騷ぐまゝにして置いたのである。時々その本を蟲干するために、明けて風を通すことはあつても、それも一日二日で、やがて再び暗い闇が名殘なくあたりを領した。

少時を其處に生長したOの話では、その二階は一時は先代が女と戲れる秘密の室として用ひられたこともあつたとかで、其頃は階級の上に鍵をつけた引板があつて、下から何うしても入つて行くことが出來なくなつてゐたさうである。先代は其頃五十六七であつたが、維新の僧の戒律の弛むと共に、放蕩飮酒にその前半生の堅い操行を持ち崩して、近國にもきこえて有福であつた寺の財政をすつかり滅茶々々にして了つた。何でもその頃は若い女が取替へ引替へその二階に往來したといふことである。そして先代は六十二三で死んだが、大勢の弟子もその荒廢した寺を進んで相續するといふものもなく、そのまゝ留守居を置いて十數年をすごした。Oがその晩年の弟子といふ緣故で、世話人に勸められて、止むなく一度還俗した身を其處に寄せた時には、これが昔のあの立派な寺かと思はれるほどであつたといふ。多かつた歷代の什器も寶物も皆何處かに持出されて、すべてががらんとして、留守居がその荒れ切つた庫裡の一隅の一間に小さく塵埃と黴臭い匂ひとに埋もれるやうにして住んでゐたといふ。Oはそれから十五

ゐながら、一年に五度や六度はやつて來て居ながら、つひぞさうした話も出なかつたことを不思議にした。そして長い間塵埃に埋れて人に顧みられなかつたその藏經が、かれの手に由つて、染着と罪過の世界に深く浸つたかれに由つて、更に新たに讀まれやうとしつゝあることを不思議にした。機緣の到來といふことが深く考へられた。

『すぐ行つて見たいもんだね。』かれはその繪を卷納めながら言つた。

『藏經かえ？　見るかね。』

『見せて呉れ給へな。』

『二階はヒドイよ。すつかり空屋同然になつてゐるんだから……』

『好いとも……』

『ぢや來給へ。』

かう言つてOは先に立つた。庫裡の一隅にある古い階級、それは何年にも登つたことのないやうな階級、その下に行つて、Oは持つて來た草履をかれのために並べた。

『とても、草履なしでは駄目だよ。』

その二階は歷代の住職の曾て住んだところである。Oの先代の僧などは、維新の始めの寺の戒律の弛廢したときに際して、そこで女と同棲したりしたことなどもあつた。『二階を住へるやうにすると、好い

あつたといふ、またそのためにその富豪は一切藏經を此寺に寄進したといふそのことは、かれにその繪の持つた大きな暗い凄い男女の心理の活闘を思はしめずには置かなかつた。

『さうすると、その若い妾の墓も、その富豪の墓も、本妻の墓も皆なこの寺の墓地にあるわけだが、それは今ぢやわからないのかね。』暫くしてから哲太はかうO に訊いた。

『何うもわからんね。あつたには相違ないのだけども……』

『でも、その富豪の代々の墓はあるんだらう？』

『あるにはあるがね。』すつかり今ぢや荒廢して了つてゐるよ。』

哲太は再びその繪に見入りながら、『不思議な氣がするね。いろ〳〵なことを考へさせずには置かないね。その他に、何か言ひ傳へたことはないのかね。』

『それつきりだね。』

『さうかね。』また見入つて、『決して凡手ぢやない。落欵はないけども、然るべき繪師に相違ない。』

『兎に角、その主人が書畫道樂で、かうしたものを澤山に集めたといふんだから、丸きり詰らないものでもないんだらう。』

『さうともね。』

哲太はさうした因緣のある一切藏經がこの寺にあるのを不思議にした。また、度々かれが此處に來て

忽ち恐ろしい形相をした髪をふり亂した女の幽靈が無心な乳呑兒を抱いて乳を含ませてゐるさまが、頗る異樣に、凄い陰深の氣が全幅に溢れ漲つてゐるやうに、また俄かに不可思議な罪惡と染着の世界に伴れて行かれたやうにかれの眼の前にあらはれて來るのを哲太は見た。『フム』と言つて、彼は引入れられる樣にしてそれに見惚れた。

『凄いね。』

暫くしてからかれはかう言つたが、

『誰が書いたんだかわからないのかね？』

『書いた人はわからないんだ……。しかし、凡手ぢやないね。』

『凡手どころか。これは餘程すぐれた繪師だ。陰深な氣があたりに漲つてゐる。僕なんかでも、ひよつと突然見せられると吃驚するよ。』

『さうだね……若い産後の女なんか無理はないね。……内の奴なんかでも、これを出すと嫌がるからね。』

『フム。』

容易にその不可思議の染着と罪過の世界から離れられないやうにして、哲太はぢつと深くそれに見入つた。この一枚の繪が、兎に角曾て一度人間の生命を殺したことがあるといふ、またその女が若い妾で

も、矢張、男女問題がそれに絡つてゐるんだ。この町の金持でね、明治の初年まではそのあとがつゞいてゐたが、今はその本家はすつかり潰れて、分家が一二軒殘つてゐる位になつちやつたけれども……。その主人が繪が好きで、いろんなものを集めるのが道樂だつた。ところがある時何の氣なしに、その繪を、その乳呑兒を抱いた幽靈の繪を、何でもその非常に愛した若い妾だとか言ふんだ、その妾の産をした室の簞笥の中に何氣なしに入れて置いたんだ……。と、その妾はそれとは知らずに、何か出すものかが何かあつて、簞笥をあけて見ると、紙の丸く卷いたものがある。何だらうと思つて、あけて見ると、凄い幽靈が乳呑兒を抱いてゐる。キヤツと言つて驚いて、それがもとで、いろ〳〵手をつくした甲斐もなく死んで了つたんだ……。その追福のために、その繪と一緒に藏經を寄進したんだが、何でもそれには本妻とその若い妾との暗鬪が絡んでゐて、それをワザと本妻が簞笥の中に入れて置いたとも言ふんだ……』

『フム。』

哲太は心を惹かれた。

『持つて來て見せやうか、その繪を……』

かう言つてOは立つて行つた。

Oは彼方此方と古簞笥の中を搜してゐたが、やがて丸く卷いた紙の色の黃く褪めた軸にも何にもしてゐない繪を持つて來てそこに展げた。

『それは惜しいな……。さうかえ、君の寺にあるのかえ？　そんなら、何も大騷ぎをしないでも好かつた。』

『何うして？　君でも讀まうと言ふのかえ？』

『君の寺にあるなら、始終、此方に來てゐて讀みたいと思ふね。』

『それはわけはない。』Oはかう言つたが、『かなり好い藏經だよ。今ぢや中々あれだけのものを持つてゐる寺はたんとはないね。』

『餘程古くからあるのかえ？』

『先々代のその前の和尙の時に、檀家から寄附されたものだがね。その和尙は、かなりの學者で、詩もやれば、書も繪も書いて、土地でも聞えた人だが、その時分に寄進されたもんだよ。そして、その寄進の由來に、面白い一條のロマンチックな物語があるんだ。』

『何う……？』

『君に見せたことがないかな。女の幽靈が乳呑兒を抱いてゐる繪を？』

『知らない。』

『さうかな、見せたことはないかな。ありさうなもんだがな……。死んだ女のための追福のために、その繪と一緒に藏經も寄進されたんだがね……。さうかな、見せなかつたかな。』ちよつと考へて、『何で

晉太が世間に苦しんだ時には、いつも自由と溫情とを以てかれを迎へて呉れる唯一の幽棲とも言ふべき處であつたが、此頃、かれはまた其處に度々出かけて行くやうになつた。

裏の林には風が騷ぎ、草藪には烏瓜に夕日が赤くさした。

今から十日ほど前、かれ等の間には、かういふ會話が取換された。

『え、それぢや、君の寺にあるのかえ？　一切藏經が。』

『あるんだよ。』

『そんな話をつひぞきいたことがないが、何處にあるんだえ？』

『二階にあるよ。』

『二階ッて、あの空屋のやうになつた塵埃の中にかえ？』

『ちやんと本箱に入つてゐるんだが、大部のもんだからね。それでも毎年一度づゝは出して蟲干をすることにはなつてゐるんだけど。』

『それで、蟲干をするのかえ？』

『もとはよくやつたけれどもね。此の頃は小僧はゐないし、手はないし、僕一人では何うも出來ないからね。四五年放つてあるがね……。今は活版本で大抵は間に合ふもんだからね。つい出して讀むといふ氣にもならずに、放つたらかして置くがね。』

を神佛として禮拜しないのか、それに對して深く感謝の念を表はさないのか。惡事でないがために、またはま眞劍であつたがために、川に溺れても死せざるやうな、また死せじと自ら信ずるやうな、更に法華經の普門品の中にある大きな言説すべからざる力のやうなものに對して渇仰の念を起さないのか。答へて曰く、それはかれ自身の中にそれが具備されてあるからである。そこに自と他の融合に向つて進んで行く微妙な道があるからである。であるから、自力と他力との別があり、Man-God と God-Man の區別があるのである。また他力の信者は現にその大きな力の無限の功德に對して、禮拜渇仰することを忘らないのである。そしてその更に奥に、他力と自力との融合した境があるのである。

『大きな生命だ……大きな力だ……大きな法だ……』かう思つたかれは、新しい歡喜の溢るゝばかり胸に漲つて來るのを覺えた。また女のためにも、將來幾多の蹉躓、幾多の衰退、幾多の逡巡があるかも知らないけれど、この一路を眞直に精進し、進展し行くことを願はずにはゐられなかつた。かれは山莊にゐた頃から一巻二巻手にし始めた聖者の教を書いた本をもつと深く讀まなければならないと思つた。

平野の寺に住んでゐるOといふ僧は、哲太が少年時代から心を合はせて來た友達だけに、思想上にも、生活上にも、または女にも酒にも話の反の合はないことのないほどの親しい間柄で、哲太と女の關係をも深く知つて居れば、女も哲太と一緒に其寺に行つて泊つたりしたことのあるほどの仲であるが、また

薄命に生れついて來たのだ……といふ風に愚痴ッぽく考へることはないやうになるであらう。しかし、女性の身である。或はその境までは容易に達することは出來ないかも知れない。また世間の雜多紛々が折角芽ざして來た尊い心境を常に曇らせるには相違ない。しかしその辛かつた悲しかつた腹立しかつた事實の深い印象は、常にその心境の陰翳を拭ふ布の一片として役立つであらう。かの女は再び決してその悲劇を繰返さないであらう。

哲太は此處に來て人間が次第に個から全になつて行く形を思はずにはゐられなかつた。また無明から次第に救はれて行く形を思はずにはゐられなかつた。一方は『時』から、一方はその持つて生れた『慧』から、一歩は一歩へと完成して行くさまが明かにかれの前に展開されて見えた。そしてそれは昔も今も同じであつた。無數の人間は太古の昔からさうして生れて生長して土に歸した。若い時は若い時を、中年の時は中年の時を、老年の時は老年の時を、銘々にちやんと侵入することの出來ない法則を以て劃られて、そして生き且死した。そしてその法則は何處から來たか。宇宙から、不思議から、または人間の生存を無限に無我に保護する大きな力から……。かう思つて來たかれは、これほど恩惠に滿ちた愛に滿ちた力を何故人間は崇拜しないであらうかと思つた。人間の生存は食にあり衣にあり住にあるけれども、實はこの法則あるがために危險をも免れ、艱難をも免れ、少時は少時を、中年は中年を、また老年は老年を經過して行くことが出來るのではないか。然るに、人間は何故この力を崇拜しないのか。何故この力

騙も、世間の惡德もすべてそれを打壞すことの出來ない戀を戀した。女にしても、澤山に男はあつたであらうけれど、しかもかれほど眞劍に、深切にかの女を思つてやつたものは恐らくはあるまい。世間には、魂を玩弄視して何とも思はない世間には、嘲笑にも、冷笑にも、または批評にも缺けず壞れずしてかうしたところまでやつて來るものは恐らくは澤山にはあるまい。哲太は自分の苦痛が、懊惱が、反抗乃至忍苦がさうした歡喜境を展開して來たことを深く考へた。

思ふにかの女にしても、これからは本當の事を考へるであらう。世間に對する虛榮や他人に對する妥協に多くの價値を置かなくなるだらう。それは心である。複雜を極め微妙を極めた心である。何ういふ心がこれからのかの女に起つて來るかは、哲太自身の將來の心の變化乃至進展が今のかれに解らないと同じやうに、矢張豫想し且測度することは出來ない。惡事をもやるかも知れない。善事をもやるかも知れない、依然として欺騙と虛僞の空氣に浸つて世をわたつて行くかも知れない。しかし今までのやうに盲目であり得ないことだけは確かである。無智のために罪過を犯すことのないだけは確かである。すべて自分の行つたことに就いては、善かれ、惡しかれ、その全責任を以てこれに對するであらう。そしてそれから生じた自然の報酬は、わるびれずに且つ十分に受け入れるであらう。單に父母の艱難乂は一家の事情のために自己のすべてを犧牲にするやうなことはないであらう。從つてこれも自分の運命だ、かう

ことの出來るものであつたがために、或はまた男性と女性との相違のために生命を賭してまでも染まつては行かなかつたけれど、それだけまたそれから離れることが面倒であつた。何時でも行つて即くことが出來ただけ、それだけ離れることが難しかつた。

かれは女の二階に横つての苦痛を想像した。自分にその體感があるだけ一層深くそれがかれの心を惹いた。しかし、かれは喜悅を感ぜずにはゐられなかつた。かれが多年思慮した、または其處まで達しなければ本當の愛と言ふことが出來ないと思つた自他融合の新しい例をかれは自己の面前に、しかもわが愛したものゝ上に發見することが出來たではないか。

かれは思つた。かれに縋らうと言ふなら、かれは女の縋つて來るのを決して否まないであらう。五六年前のやうに、即かれても苦しみ、離れられても苦しむといふやうな不徹底な考へは抱かぬであらう。出來るだけは、また自分の生きてゐる中は、戀人ともならうし、友達ともならう。もしまた女がかれから離れて行く方がかの女の便利であり、生活方法の利益であるならば、かれは決してそれを留めないであらう。本當の愛を以てかの女のために謀るであらう。艱難に遭逢した時の唯一の相談相手にもなつてやるであらう。それこそ反對の意味の Bel-Ami にもなるであらう。

またかれは大きな心の誇を感ぜずにはゐられなかつた。それは他でもなかつた。兎に角今日に至るまで、かれは女に對して眞劍の戀を戀した。相愛であると否とに關せず、眞劍の戀を戀した。虛僞も、欺

すから、さうした人を相手にした私がわるいんです。つくづくさう思ひました。』

かうした心をかれも曾て感じなかつたであらうか。旅から旅へと漂泊して歩く頃、また何うにも彼うにもならなくつて山莊に身を置くことを求めた頃、その頃にかれもかうした孤獨を、自己を離つて見た心の形を、個々の對立を、何物をも所有することを得ざる悲哀を、孤獨に肉體も精神も亡ぼされて了ふやうな絶望を感じなかつたであらうか。染着を超越するための夥しい苦痛を感じなかつたであらうか。

そしてその染着を脱するについての苦痛は何んなであつたか。思ひ切つては捉はれ捉はれては思ひ切り、一日の中にも心は千變萬化した。朝と夜とではその考へが丸で違つた。時には染着の力が魂を壓倒して、自己の生命を破滅を來たしても滿足だとも思ひ、この戀しさを、このなつかしさを、または肉體の強い羈絆を捨てゝ了ふ位ならば、いつそ亡びて了つた方が好いと思ひ、自己の事業も生活も目前一杯の酒に如かずと思ひ、殆ど茫然としてわれから我を知らないといふやうなことが度々あつた。世間では、戀を情痴と言ひ、惑溺と言ひ、あまりに深く膠着した形を滑稽として笑ふけれど、また當事者自身にしても、時を經て考へるとか、第三者に向つてその話をする時とかには、世間に多くあるやうな話のやうにして色を淡くして話すけれども、正面にそれと相對した身になつては、情痴とか惑溺とか言ふ言葉は餘りに不眞面目な言葉であつた。また餘りに批評的な言葉であつた。それに、かれの場合は、かの女の場合に比して、それほど烈しく切迫してゐなかつたがために、また女が心を二つにも三つにもわけてゐる

かう哲太は喜ばしさうに言つた。かの女は勝敗の原理、更にその勝敗を超越した物を攫まうとしてゐるのであつた。かの女は續いて言つた。『私は思ひますね。私は死ぬわけがなかつたと思ひますね。だから私は助かつたんだと……』

『何うして？』

『だつて、私は眞劍にやつたことなんですもの。わるいことをやつたんぢやないんですもの。先でこそ女の心を玩弄にして、わるいことをしてゐたんですが、私はさうぢやなかつたんですもの。それで死ぬわけはないと思ひました。』

哲太は愈々心を惹かれた。哲太は法華經に書いてある普門品の條などをゆくりなく思ひ出した。その眞劍は、その心のあらはれは、聖者がこの經を奉持し誦讀するものはと言つて、無限の功德を說いたその底の底の心ではないか。哲太は思はず歡喜の聲を擧げた。女の艱難が、戀が、死に面した心が、さうした眞珠をさがし出して來たのである。かう思ふと女の半生乃至今度の事件に對する苦艱が心から同情されると共に、その心の展開を喜ばずにはゐられなかつた。世間の戀ならざる戀にかの女も目覺めて行きつゝあるではないか。人間の底に深く橫つた不動不壞の心に觸れて行きつゝあるではないか。

またかの女は言つた。『皆な私が馬鹿だつたからです。私が私でやつたことの酬いを受けたのです。あの人だツて、わるく言つたりするせきはありません。私が眞劍だつたのに、向うが眞劍でなかつたんで

異れるものゝないのを思はしめ、孤獨の悲しさまたはその悲しさを超越しなければ到底生きて行くことの出來ない人生を思はしめ、今まで自分の對照として重く見て來た世間は、實は浮氣で、うはの空で、妥協で、物質の交換で、好い加減に樂に上手に渡つて行かなければならないやうなところで、眞劍に眞面目に死に面してまでも苦しむやうなところではないことを思はしめ、男の心を自分の所有にしなければ滿足が出來なかつた自分の淺墓であつたことを思はしめ、つゞいて半ば死してそして死なゝかつたその身を思はしめ、自分の相手にした男の心の矢張世間に多く見るやうな中途半端な享樂乃至虛榮を以て滿たされてゐたことを思はしめ、今の自分の心の境遇に打克たなければならないことを思はしめ、更に深く、これからの一生をもつと本當に眞面目に送らなければならないことを思はしめた。そしてその種種の思ひの間を辛い悲しい戀の名殘の波が縫つた。ある時行つた時には、長い間その問題に心を集中してゐたといふやうに、かれの顏を見るや否、『今度のことでは、私が負けたんですけど、私が馬鹿を見たんですけれども、本當は私が負けたんだか何だかわかりませんね。だツて、さうぢやありませんか、眞劍だツたことは私の方が眞劍だツたんですから……。眞劍なことを私はしたんですから、私には何も悔むことはありませんもの。さうぢやないでせうか？』

かう言つてかれの顏を見た。

『さうだ……確かにさうだ。そこまで考へて來なければいけない。』

女は默つてかれを見た。その眼は、『本當？』と訊いてゐるやうでもあれば、『愛想が盡きたでせう？』と言つてゐるやうにも見えた。其處に階段を上る足音がして、母親と醫者とがやつて來た。

女の病氣は捗々しく治らなかつたけれども、それでもそのあくる年の春もすぎ、花も散つた頃には、ひとりで起きて、緣側で髮を梳いたりするやうになつた。心臟も腎臟も前から餘程わるくなつてゐたのを、その不意の衝動で、一時にそれを催進させたやうな形になつたのである。『どうも動悸がして爲方がない。』かう言つては女はよく胸を押へた。

正月頃にはいくらかまだ顏がはれぼつたいやうになつて、大抵は二階で寢てゐたが、この間にも戀の潮の名殘の干潮が執念くかの女の心の周圍に絡み着いた。

その二階は、南に面した日當の好い、または小さな工場の烟突から颺る烟の碧い空に透して見える、小さな床の間に父親の好みの盆栽が綺麗に並べて置いてある。西風の強く吹く日には裏の高窓が明けられないので光線がいやに黃く暗くなつて見える。拙い繪師が醉つて筆を揮つたらしい樓閣山水の屛風が枕元を取卷いてゐる。折々は近所の仕込の長唄の拙い三味線の聞えて來るその二階は、かれの孱寺乃至漂泊の旅行、または山の高原の世離れた別莊と同じやうに、かの女に、いろ〳〵な世間の艱難を思はしめ、戀の染着から離れて行かなければならない辛さを繰返さしめ、自分より他に誰も自分の心を知つて

『少しは聞いた……』

『つくづく馬鹿だつたわね。あれで死ねば、本當に犬死……』

『しかし、本當に考へれば、それだツて、決して徒爾ぢやないよ。死んで了つてはそれは爲方がないけれど、かうして生命を拾つたんだから……。體が良くなつたら、もつと本當に考へて見るんだね。多くの人は折角の經驗をも徒爾にして了ふけれど、成るたけ徒爾にしないやうにするんだね。さうすれば、今までとは違つて新しい生涯が開けて來るから……。色戀なんかよりももつと大切な世界があるのだから……』

『さうですね、本當ですね。』

女はまた深く考へるやうな表情をした。くわつとまた熱が出て來たらしく、顏が目に立つて赤く艶々して來た。かれは女の手に觸つて見た。

『餘り話なんかすると、まだよくないね。』

『熱があつて?』

『あるね。』

『いつそあの時死んで了つた方が好かつたかも知れない……』

『そんな馬鹿なことを言つてはいけない。これから本當の新しい幸福な生涯が開けるんだよ。』

何か言はうとしたが、それを適當に言ひ現はす言葉がないといふやうにして、頭を柱に當てたまゝ凝とかれを見た。

暫らくしてから、

『でも、貴方はすぐ來て下すつたのね。それが嬉しかつた……』

かう言つて莞爾笑つて見せた。

『丁度、旅行から歸つて來てゐてね。早く寢ちやつたんだよ……。そこに自動車が迎へに來てね。それも、もう一日泊つて來る筈の旅行だつたんだがね。急に、歸る氣になつて、あの日に歸つて來たんだよ。蟲が知らせたやうなもんだね。』

『何處に行つてゐたの？』

『何アに近所だがね。』

女は考へて、『でも、水の中に入つて、はッと氣が附いた時にも、貴方のことは考へましたよ。馬鹿な奴だとは思つても、乾度、貴方だけは可哀相に思つて下さるだらうと……』

また涙が出かゝつて來さうになつて來た。

『まア、そんな話はしない方が好い。あとできくよ。あとで詳しくいくらでもきかして貰ふから……』

『でも母さんから訊いたでせう？』

『誰だつて思ふまゝにはならないんだよ。辛い艱難ばかりが世の中にはあるんだよ。そして其思ふまゝにならない、辛い艱難ばかりを人間は誰でも一度は通つて來なければならないんだよ。そしてそれを通つて來て、初めて本當のことがわかるんだから……。人に聞いたり意見されたりしたゞけでは、いくら詳しく說明して貰つてもわからないんだから。』

『本當ですね。』

益々女の眼からは涙が流れた。哲太は女の艱難が初めて自分の艱難に入り雜つて來るのを覺えた。哲太はまたその涙の中に、男に對する愛憎の不斷の徂徠が、かの女を時には冷にし時にまた熱にするのをも見落さなかつた。かれも曾てはさうではなかつたか、その徂徠に身も滅亡するやうな苦しみを感じなかつたか。

『でも好かつた……。もう大丈夫だ。何も考へないで、ゆつたりした氣分でゐるんだね。』

『難有う。』

かう言つて涙を拭いたが、暫く考へるやうにして、またかれの體の中から何かを搜すやうにして、『貴方も、今度は愛想が盡きたでせうね。』

『そんなことはないよ。』

『…………』

かうかれは繰返して言つた。

それでもその日は、歸るまでに、女といろ〳〵話すことが出來た。『何うして、あゝいふ氣になつたか自分にもわからない。驅けて來て飛び込んだのは知つてるますけれど、何うしてさういふ氣になつたのかわかりませんね。』かうした話をしたり、『つくづく男といふものゝ薄情だと思ひましたね。今度こそ本當にさう思ひました。』と言つたりした。

『病院で、夢現で、ヒヨッと貴方の顏を見た時位、すまないと思つたことはありませんでした。耻しくつて、顏を向けられないやうな氣がしました。』

かう言つた時には、一面すまないといふ心持と許して吳れといふ表情とが一緖になつて、女は顏にさびしい微笑を湛へた。

『これからは、落附いて、本當に自分のことを考へるんだね。』

かうかれが言ふと、女は點頭いて、

『よく解つて來ました……。貴方の言つたことが皆なわかつて來ました。さうですね、何でも自分ですね。自分のことを本當に、先にして考へなければ駄目ですね。』

涙が頰を傳はつて流れた。

かれは言葉をついで、

『それにきまつてゐるんです。貴方は始終見てゐないから、さう思召すかも知れませんけど、今まで皆なさうなんですから……。あれが馬鹿だから、旨く操られてゐたんですよ。……その代りあいつにだツて碌なことはありやしません。御覧なさいな、この二三年評判がわるくつて、もうあの稼業もしてゐられなくなつたぢやありませんか。ちやんと酬つて來てゐますからね。』母親は以前からさうであつたが、今は一層わるくその男について話した。

哲太は男女の耽溺が、染着が生命を浪費させることをつくづく思はずにはゐられなかつた。實際、母親の言ふ通り、その男に限らず、または哲太かれ自身でも、世間の多くの男達でも、その深淵に一度身を投じた以上容易にそこから浮び上がることが出來ず、浪費に浪費を重ねて、竟にはその身を滅ぼさずには置かないのであつた。

哲太は女の今の狀態に深く同情することが出來た。寒熱の往來は、戀を失つたものゝ肉體にも心にも常にきまつてやつて來るのであつた。三寒四温、その宇宙の理は、我等人間の心のリズムの中にも完全に働きつゝあるのであつた。かう思ふと自分が曾てさうであつたと同じやうに、女も靜かに安らかに寢ては居りながら、絶えずそれに惱まされてゐるに相違ないことをかれは思つた。愛と憎とが、夢にもその魂を執念く繞つてゐるに相違なかつた。

『まア、靜かに、落附かせて置くんですね……當人だツて、辛いんだから。』

母親の話では、何うもまだ本當でないといふことであつた。醫者の診察では、大したことはないらしいけれど、をり〳〵蒔と熱が出たり、寒氣がしたり、唯昏々として眠つてゐたりして、時には心配になるやうな譫言を言つた。近所の醫者は少し心臟がわるいと言つたといふ。

それまでに女がぽつ〳〵話したらしい話を綜合して、母親は今度の出來事の事情をかれに話した。矢張かれの想像した通りであつた。母親は向うの女の家に置いて來た剃刀から下駄まで、更に曾て女同士で妥協した時、姉妹のかただと言つて、女が先きの女にやつた金簪さへまで圖々しく言つて取戾して來た話などをした。『呆れたもんですよ。あいつがゐるらしいんですよ、あそこに……』

『だつて思ひ合つてはゐるたんでせう？』

『何うですか。好い加減なもんですね。本當に思つてゐるなら、何んな事情だツて一番先きに見舞にやつて來なければならないぢやありませんか。そのために死に損くなつたんぢやありませんか。それに電話もかけてよこさないんですから。』

『事情が事情だから、來はぐれたんだね。』

『來はぐれたですましてゐられませんよ。本當なら……。矢張これですよ。』指を丸めて見せて、『此方はもういくら絞つたツて出ないと思つて見切りをつけたんですよ。向うは金があてなんですから。』

『さうばかりでもないでせうけど……』

兎に角、一度家の方も心配になるからと言つて、かれが歸り支度をしたのは、午後の二時すぎであつたが、その頃には、女も大分落附いて、眼をはつきり明けて、いくらか笑ひを顏に漾はせて、

『申譯がない……』

など丶小聲で言つた。

『まア、安心して靜かにしてゐる方が好いよ。』

女は默つて頷いて見せた。種々のことが振返つて思ひ出されるのであらう。またしても、涙が發熱のために赤くなつたその頬を傳つて流れた。人間の苦艱、救つてやらなければならない人間の多くの苦艱がまた深くかれの心に染み透つて感じられた。つゞいて印度の聖者が女人成佛をその多くの心願の一つにしたことなどが眞面目に思ひ出されて來た。愛した女の魂を救つてやるといふことはかれに取つて大きな事業ではないであらうか。

病院に二日ほどゐて、やがて女は自宅へと伴れられて行つた。かれが三度目に見舞に行つた時は、丁度病院を引揚げたあとで、その足ですぐ行つて見ると、日當りの好い二階の一間に枕屛風をして、水藥の壜や散藥を赤い丸い盆に載せて、母親が結ひ直したらしくいくらか綺麗になつてゐる髮を此方に見せてすや／＼と靜かに眠つてゐた。

『まア、しかし好かつた。僕も自動車の中では氣が氣でなかつた。』

『本當にすみませんね、御心配をかけて……。奥さんは乾度變に思つてゐらしつたでせう。平生、私は伺ひもしないで、手紙などを上げて。』かれの顏を見て聲を落して、『今度はちつとは考へるでせう。』

『僕の方にもわるいところがあつたかも知れないよ。』

『そんなことはないですけどもね……つい昨日も貴方のことを言つてはゐたんですけども。』

『何うにもならないもんだ、人間は――。佛にでも手を合せるより外は。』

深く慨嘆するやうにしてかれは言つた。

暫くしてから、

『それにしても何うします？　今日家に伴れて行きますか。それとも二三日、此處にかうして置きますか。』

『さうですね……。家に早く伴れて行く方が好いんですけども……しかし餘り無理をしましてもね。』

『それもさうだ……』

『まア、醫者に一つ相談して見てからですけど、私の考へでは、今日と明日位此處に置く方が好いと思ふんですがね。』

『その方が好いかもしれない。』

て旅から旅へ、または廢寺から山莊へと行つた染着と同じであつたといふことである。同じ苦しみであつたのである。かれはこの染着が人間の心の底深く横つてゐるさまを歴々と頭に浮べた。

印度の聖者は、特に人一倍すぐれてこの染着の危險を感じた。聖者はこの染着から人間が横死したり惡事を行つたり魂を失つたりすることを知つてゐた。痛感してゐた。しかもこの染着は人間になくてならないものである。まだその染着が深いものほどそれほど慧に達し、佛性に達するものである。それを聖者は到る處に說いてゐる。そしてその一方では深くそれに捉へられることの危險を深切丁寧に反覆して說いてゐる。矢張一にして二である。差別にして平等である。縱にして横である。さう考へて來ると、この昨夜の出來事も、かの女に取つて決して徒爾ではなかつたに相違ないのである。かの女の一生の價値あるシインとして役立つに相違ないのである。又身延の奧の院の合掌と共に長くかの女の心に印象されて殘るに相違ないのである。『それにしても好かつた……。生命を拾つて好かつた。』かれは思はずかう言つて母親を顧みた。

『本當に……。これで死んでは犬死ですからね……。本當に、知らせて來た時には何うしやうかと思ひましたよ。それに五六日前から、何うも樣子が變だし、わるい夢を見たんですよ貴方、あれが、あいつに手足を折られて歸つて來た夢を二三日前に見たんですよ。だから、はツとしましたね、知らせて來た時には――』

『皆に心配をかけてすまなかつたなんて小聲で言つてゐましたよ。』

『好い鹽梅だ……』

俄に元氣附いたやうに父親は立つて其方に行つた。

續いてかれが行つた時には、女は眼を明いてゐたが、何も言はずに、ぢつとかれの顏を見た。

『何うした？　氣が附いたかえ？』

『………』

女の眼からは涙が流れた。

『安心して、何も考へないで、落附いてゐなくつては駄目だよ。』

『………』

言ひたいことは非常にあるけれども、それは言葉では言ひ現せないといふやうにして、默つて女は唯涙を流した。

やがてそれにすら堪へないといふやうに袖で顏を掩つて了つた。

『何にも考へない方が好いよ。』

かう言つて靜かに落附かせて、かれはまた此方に來て坐つた。かれの頭には種々なことが往來した。

中でも一番深く考へられたのは、その生命を失はうとまでしたかの女の染着は、形こそ異れ、かれが曾

かれは次第に朝の明るい光線の雜つて來る川を眺めた。

看護婦達が廊下を往來し、朝飯が下の厨で準備される頃になつても、女は依然として昏々と眠つてゐた。昨夜のめづらしい出來事は、それからそれへと傳はつたらしく、かれの傍を通る看護婦達は、皆なじろ〳〵とかれの方を見て通つた。ある廊下の角では、病室に看護に來てゐる人達が二三人寄つて頻りに何か話してゐた。

醫者が診察に來て、『うん、好い鹽梅だ。これぢや命を取り留めた。』かう言つて出て行つたのは、かれ是十時近くで、窓の硝子を透して、八ツ手の廣葉に日の當るのが晴れやかにそこから覗かれる頃であつたが、その頃から、女は段々氣がついて來たらしく、または自分のゐるところを不思議に感じたらしく、枕元に寄つた母親と何か一言二語小聲で話し始めた。

母親は喜んで此方に來て、

『漸く氣が附いたらしいですよ。此處は何處だえ? なんて訊いてゐましたよ。まア、好い鹽梅だ……これで落附いたら、元のやうになるかも知れない。』

『大丈夫ですとも……』

『貴方の來てゐるのもわかつてゐるやうですよ。』

『何か言ひましたか。』

そして明けて行く大川と相對した。

苦しい人達の魂を誘ふやうに流れてゐるその大川の眺めは、彼にいろ〳〵な光景を眼の前に浮ばせた。曾て讀んだことのある巴里のセイヌの流れに添つて建てられた水死會社や、屍となつて毎日のやうにそこに收容せられる不幸な娘達や、貧しい洗濯女や、またはその死屍收容を平氣で稼業にしてゐる老いた事務員や、不可思議の世界のやうに一間先も見えぬほど立罩める深い霧や、さうしたほどのことはないけれども、それでも矢張この大都會を貫いて流れてゐる川の上には、悲しい、慘めな光景が日夕無數に演ぜらるゝのであつた。ペンキ塗の汽船の波に浮いたり沈んだりする若い女の死屍、橋の上に曉近く並べてぬいで置いてある下駄、泣いても泣いても盡きない死に面しての涙、サツとあがる悲しい水煙、其處にも此處にも苦、乏、老、病の艱みは巴渦を卷いて、生活と人生との不可解を人に思はせずには置かなかつた。しかもさうしたことは何とも思はないやうに、川は時には霧を浮ばせ、時には日光を輝かせ、また舟を浮ばせ、帆を浮ばせ、ボウトを浮ばせて、靜かに溶々として流れて行くのであつた。大都會の不可解の謎をひそかにその中心に抱きながら……。

かれは女が闇に走つて川に赴いたさまを想像した。またサツと水烟を擧げた刹那のさまを想像した。つゞいてさうした突詰めた心を女に起させた男の心を想像した。死にあらずんば、箇々の對立、箇々の對立にあらずんば箇々の融合、それより他に、人間の生きて行く道はないやうな氣がした。

の光線が靜かにさし込んで來てゐた。ふと其處に哲太は、大川の溶々とした流れが夢のやうにあらはれて來るのを目にした。

『こんなところか。川のすぐ傍だ……』

昨夜慌てゝやつて來たかれは、病院の位置をもそれとよく知つてゐなかつたのであつた。かれは微かに、ぼんやりと、鉛のやうな色をした薄い河霧に包まれた川を、ともすれば女の魂をも永遠に伴れて行つたかも知れなかつた川を、窓のカアテンの間から凝と見守つた。舟はまだ一隻も通つてゐなかつた。

かれは昨夜の出來事を想像しつゝ、長い間其處に立つてゐた。突き詰めた女心が悲劇の實行に移つて行く瞬間の心理なども歷々とその心に映つて見えるやうな氣がした。しかし幸ひにして、かの女はその生命を拾ひ得た。否、今の分では十中八九は拾ひ得たと言つても確かである。かれは、そこから、この悲劇から、この體感から、かの女が眞に心から蘇つて來ることを神に祈らずにはゐられないやうな氣がした。

そこへ室から出て來た母親は、靜かにかれの傍に寄つて來て、小聲で、

『すぐそこですよ。』

と言つて指さした。

病院の傍の路は、ある狹斜街から來て、ずつと川へと盡きてゐるのであつた。かれは默つて點頭いて、

それに、其處は餘り端近だからッて言つて、それから、此處に私が負つて伴れて來たんですが、その時はまだ本當に氣が附いてゐませんでした……。心配しましたよ、私は……。あれにもしものことでもあられたら、それこそ大變なんですから……。それもこれも、皆あいつのお蔭ですよ。私にこんな思ひをさせただけでも碌なことはありやしない……』

哲太は唯默つた。

『それでも、好い鹽梅に、巡査は來なかつたさうですから、新聞に出されるやうなことはないだらうと思ひます。』こんなことをも母親は言つた。

夜明け近くなるまでに、女は度々譫言を言つたり微かな唸聲を立てたりした。しかしそれは惡夢にでも襲はれてゐるらしく、別に大したこともなくて過ぎた。母親は、『本當に、此の人はのんきなんですからね。』こんなことを言つて、其處に柱に凭りかゝつての假睡から横に倒れて了つた父親の上に毛布をかけてやつた。

『母さんも少し寢たら何うです……』

『いゝえ……。私なんか好う御座んすけれど……貴方こそお眠いでせう。』

『何アに……僕は平氣ですけど……』

暫くして哲太が廊下に出た時には長い心配の夜も漸くぼんやりと明けて、窓の硝子窓の中から、黎明

當直醫を呼んで來て診て貰つたりしたが、今の處では周圍で騷いではいけない、成るたけある期間までそッとして置かなければいけないと言ふので、そのまゝかれ等は副室の方へと來て坐つた。夜深の寒さは、火鉢に火を熾に起しても、刺すやうに肌に染み通つた。父親はいくらか安心したやうに、または疲れが出たといふやうにして柱に凭りかゝつて眠つた。

それに引かへて、母親はをりく立つて行つては、心配さうに病室を覗いたり、額に手を當てゝ見たりした。女は髮を向うに見せたまゝで、靜かな電氣の光線の下に元のまゝに横つてゐる。『よく眠つてゐますか。』此方に來た母親にかう言つてかれが訊くと、母親は輕く點頭いて見せて、小聲で、

『元のやうになりますかしら？』

『大丈夫ですよ。』

『氣でも違やしないかと思つて、それが今度は心配ですよ。』

『そんなことはないでせう。』

『本當に、親に心配を掛けて……こんな不孝な子つたらありやしない。……』

つくづく辛いといふやうにして母親は言つた。

『母さんが來た時には、もう此の病室に入れられてゐたんですか。』

『いゝえ、まだ下にゐました。それでもね、濡れた着物だけは着更へさせてありましたけれど……。

『男もゐたんですか。其處に……』

『何處かに隱れてゐたかも知れませんね。聞いて吃驚したでせう。でもまさか、平氣でのめ／＼と見舞にも來られないんでせう。散々人の娘を玩弄にして、かういふ眼にまで親を逢はせるんですから……考へると、口惜しくつて爲方がありません。これも、皆なあれが馬鹿だからですけども……』

『何うも爲方がない……』

『唯私は、貴方にかうしたことをおはにかけずに、あのまゝ殺してはすまないと思ひましてね。それで、氣をもみましたよ。貴方がお宅にゐらつしやれば好いが、もし居なけりや何うしやうと思ひましたよ。』

『昨日だと僕もゐなかつた……』

小聲で囁くやうにかうした話が長く長く續いた。

急に、女が聲を立てたので、皆な立つて其方へと行つた。女は明いた眼を擧げて、その傍に近寄つたかれの顏をぢつと見るやうにしたが、しかも何も言はずに、また頭を枕にぐたりと落した。

『何うしたえ？　氣がついたかえ？　來て下すつたんだよ。』

かう母親が言つた。女はもう一度赤い充血した眼を明いて、かれを見たが、それきり何も言はずにまた恍惚した。額に手をあてゝ見たかれは、熱の夥しく出てゐるのを見た。

『フム。』
かう言つて、かれは手を組んでそして深く考へた。
何も彼もはつきりとかれにわかつて來たやうな氣がした。女に限らず、自分にしろ英子にしろ、または世間の戀に艱む澤山な男女にしろ、最後はそこまで行かなければ引返して來ることは出來ないのである。死にまで到達しなければその染着を如何ともすることが出來ないのである。かれは自分も曾つてはその一人であつたことを繰返した。また英子にしても、その孤獨が、矢張同じやうにかの女を死に誘はないとは限らないことをかれは頭に浮べた。
『それでも、よく人が通りかゝりましたね。』
『本當ですよ。これで生きれば、本當に運が好いんです。何でも最初に見つけたのは深川の木場の人ださうですがね。川の中で唸聲がきこえるので、不思議にして覗いて見ると、黒い人の影が岸の杭につかまつてゐるので、それから大騒ぎになつて、矢張其時通りかゝつた車夫と一緒に引上げて呉れたツて言ふことです。それはかう言ふ人ですよ。』かう言つて、母親はその救つて呉れたものゝ名刺をかれに見せた。
『相手の女の家ぢや知らないんですか。』
『知つてゐますとも……。さつきも見舞にその妹が來てましたツけ。』

女を憫むの念を起させずには置かなかつた。かれは副室と女の寢てゐる室の間に立つて、凝と深くそれを見詰めた。

副室の火鉢の置いてあるところで、小聲でぽつ〳〵話しつゞけた母親の言葉の中から、かれは次第に今夜の出來事の眞相をつかむことが出來た。女は矢張その戀のために、長くかれ等の間に解決されずに殘つて來た戀のために危く生命を失はうとしたのであつた。女はその戀の競爭者である女の家に出かけて行つて、そこで啖呵を切つた。そして最後にひそかに帶の間に挾んで持つて行つたハンケチで卷いた剃刀でその戀敵に切つてかゝつた。しかもかの女はその目的を達することが出來ないために、赫となつて夢中で跣足で飛び出して、其處からいくらも遠くない大川にザンブと飛込んで了つたのである。

『何うも、蟲が知らせたと見えましてね。出かけて行く時にも變だと思つたのですよ。九時すぎにお座敷から歸つて來て、仲へお客に行くと言つて出かけて行きましたが、胸騷ぎがして、床に入つて寢ても何うしても眠られないのです。それに、二三日前から、いやに焦燥して、何ぞといふと、川にでも行きさうで、心配してをりましたもんですから……。その中に夜は段々更けて行く。歸つて來ない。十二時が鳴る。仲へ行けば、それはもつと遲くなることはいくらもあるんですけれども、始めからさうぢやないと思つてるもんですから、氣になつて氣になつて爲方がないんです。そこに、ドン〳〵戸を叩いて知らせに來たもんですから、すつかり顚倒して了ひましてね。』

よ……』

『この近所でやつたんですか？』

『すぐそこで……』

窓の方を指さして、『それが、丁度好い鹽梅に、そこを通りかゝつたものがありましてね。それから大騷ぎになつて、取敢ず引上げて此處にかつぎ込んださうです。運の好いことには、知つてゐるものがありましてね……』

『醫者は何う言ふんです？』

『此分なら、命を拾ひ留めるかも知れないツて、もう少し前に、來て見て行きましたが、しかしまだ海のものとも川のものともわかりません。飛んでもないことをしました、親不孝が……。丸で何處を何うして此處にやつて來たか、それもわからない位でしたもの……。まア見て下さい。ヒドイ有樣ですから。』

かう言つて、母親はそつとかれをその病室の中へと導き入れた。女の寢てゐる室の一隅には、女の入水したまゝの濡れそぼちた着物だの帶だの持物だのがまだ半は片附けずに置いてあつたが、その向うに女が亂れた銀杏返しを白く大きなくゝり枕に當てゝ、向うむきになつて寢てゐるのがかれの眼に映つた。何故の入水？　それはまだはつきりとはわからなかつたけれど、兎に角さうした悲慘な光景は、かれに

それには父親は答へずに、また病室の中に半は身を入れたが、今度は慌てゝ母親が出て來た。母親の顔には、不意の出來事に對する亢奮と心配と激情とが歴々と見えてゐたが、かれがせき心で事情を訊かうとするのを押しとゞめるやうにして、またはかれをすぐに女のゐる病室に入れるのを恐れ且つ避けるやうにして、『それでも、好い鹽梅に、今は落附いて寢てゐます。』

かれはほつと呼吸を吐いた。死屍に對しなければならないかと思つた心配はこれで除れたが、その事情を一刻も早く知りたいので、

『一體、何うしたんです？』

『やつたんですよ。川へ！』

かう母親は押しつけるやうな小聲でかれの耳に囁く樣にして言つた。

『…………』

かれは頭を振つた。

『それて、何うしたんです？　大丈夫なんですか？』

『まだ何うなりますかわかりませんけれど……。やつと呼吸をふき返したにはふき返したんです。……家へ知らせて來たので、慌てゝ自動車でやつて來ましたが、その時には丸で呼吸も何にも無かつたんですから……。それで慌てゝ、お宅へその自動車をすぐ迎へに上げたのですが、吃驚しました

やがて自動車が留つたと思ふと、かれはその前に、深い闇の中に、二階三階のところどころの窓を明るく、大きな病院の立つてゐるのを目にした。かれは新たに胸の躍るのを感じた。

かれはそのまゝ默つて自動車を下りて、門のくゞりの僅かに開いたところから中に入つた。八ツ手の大きな廣葉に何處から射して來るともわからない光線がさびしく光つて、がらんとした人氣のない玄關が遠く向うに灯に透されてゐるのが見えた。かれは砂利の上に音を立てゝ急いで其處に行つたが、誰も取次いで呉れるものがない。二三度呼んで見ても、返事がない。爲方がないのでそのまゝ上つて、長い廊下を二三間行くと、眠さうな顔をした看護婦が向うからやつて來た。

『Nといふ人が來てますね。』

『Nさんですか。』慌てたやうに、またかれのやつて來るのを待ちつけてゐたといふやうに、俄に草履の音を高く立てゝ、そして大きな階梯から二階の方へとかれを導いて行つた。

ある病室の前に來た時、ひよつと向うから顔を出したものがある。それは女の父親の顔であつたが、すぐ此方へと飛んで來て、

『よく早く……よく早く。』

言葉も頓には出ないといふ風である。

『何うしたんです？　一體？』

かれの愛が足りなかつた。徹底してゐなかつた。かう思ふと、このまゝ女を死屍として見ることは、いかにしても堪らないやうな氣がして、體が赫とした。

かれは自動車の駛るのもまどろこしいやうな氣がして、絶えず闇の中を覗いて見た。

しんとした深夜の都會の街燈が飛ぶやうに動いて行く。そしてその灯の光線を透して、町並の屋根が見えたり、二階屋が見えたり、三階が見えたりする。坂らしいものが見えたと思ふと、今度は確かに濠らしいやうなところを通つて行つてゐる。そしてその早い自動車の速力の中に、かれの心の顚倒が、胸の動悸が、想像の翼が風車か何かのやうにぐる〳〵廻轉してゐる……。またしても、蒼白い女の顏がこびり〳〵くやうにかれの眼の前に見える……。

橋を渡つたやうに思つたので、何處を今自動車が駛つてゐるかを確かめるために、かれは成るたけ心を落附かせて、動いて行く闇の中を何遍も何遍も覗いて見た。しかし何處が何處だか見當がつかなかつた。

かれは遂に訊いた。

『何處だえ、此處は？』

『もう、すぐそこです。』

かう運轉手の黑い影は答へた。かれの心は愈々混亂し顚倒した。ふと氣が附くと、自動車は灯の多い細い通に今しも曲つて行きつゝあつた。

に對する失戀のために毒藥を仰がうとした男が苦しんだと同じやうに、かの女も2と3の懊惱に堪へかねて、さうして今夜の事件を釀したに相違ないのである。かれは非常に遺憾に思はずにはゐられなかつた。そのために、さうしたことのないために、かれはこれまでにも種々のことを話したり說明して聞かせたのに……。また、染着の危險、所有と把握との不可能を常によく理解の出來るやうに說いてきかせたのに……。と、今度は、女と長い間やつて來たシインが、例へば身延の奧の院の合掌、山の別莊での說明、又は山の廢寺での物語、さうしたものが颷のやうにかれの頭を掠めて通つた。兎に角にこれで生命を失はせては、餘りに可哀相で、且つまたあまりに殘念だともかれは思つた。さう思ふと、血の氣のなくなつた青ざめた顏、または血で赤く染つた物凄い顏が、闇の中にちらついて、纏めて物を考へる餘裕をかれに與へなかつた。明日はパッと新聞で世間に公にされるといふことなども、その混亂した想像の中をぐる〳〵廻つた。

　何うかさうしたことでなくつて呉れれば好い……。また何うか危篤でも、死屍になつてゐて呉れなければ好い……。或はまた存外思つたほどではなくつて、笑つて話をするかも知れない……。何遍もかうは思ひ返して見るが、何うもさうは思はれない。と今度は、かれが半年ほど成るたけ逢はないやうにしてゐたことが、その方が女の眞實の道に向つて進んで行くためだと思つたことが、却て仇となつて、さうした悲劇の火の手を添へる力となつたといふことが、深く深く考へられて來た。矢張、かの女に對する

『それぢや、行つて來るからね……。あとのしまつをよくして置いて臭れ。』

『え〻。』

駒下駄を出すのも匆々に、玄關前の砂利を鳴してかれは出て行つた。門を出ると、そこには自動車の灯が明るく闇を照して、其處に運轉手ともう一人の男が立つて待つてゐた。かれはそれとなく訊いて見たが、薄々知つてゐるらしい彼等も、はつきりとそれをかれには話さなかつた。やがて自動車はかれを乘せて動き出した。

都會の靜かな深夜の闇を走つてゐる自動車の中で、女についての心配が、火花を散らしたやうにかれの心の周圍を繞つた。居ても立つてもゐられないやうな氣がすると共に、或は女が河水にぐつしより浸つた姿、でなければ血塗れになつて痰呵を切つた姿が、てつきりそれに違ひないやうにまざまざとかれの眼の前に見えた。かれは暫らく女には逢はずにゐる。また女がかれの心を理解しかねて、かれの愛情がもうすつかり冷めて了つたと思つて他の男の方に一層深く染着して行つてゐることをもかれは知つてゐる。それからまたその男が一方に女に取つて强敵とも言ふべき或る一人の女を持つてゐて、そのため、その染着も、その熱情も、その眞劍も、出來さうで出來ず、達しられさうで達しられないといふことをも知つてゐる。いづれその間の紛糾した心の苦惱の結果が今夜の事件を惹起したには相違ないのである。矢張、かれが苦しんだと同じやうに、または英子が苦しんだと同じやうに、更にまた曾てかの女

急いで居間の方へとやつて來たが、子供達の縱横に寢てゐる處で、箪笥から英子の出す着物に着更へながら、
『一體、何時なんだえ?』
『一時が今打つたばかりです。』
『一時!』
かれは頭を振つた。
『私は、もうすこしさつきから眼が覺めてゐたんです。と、急に自動車の音がする。今時分自動車がツて思つてゐると、家の前で留つたから、變だ! と思つたんですよ。すると人聲がして、そして家の門を叩くんですもの。それから出て行つて見たんですが……ね……』
『困つたな……屹度不了簡な、後先見ずのことをやつたんだな。』
『そんなことはないでせう。』
『さうだ、……屹度さうだ。』また頭を振つて、
『すぐ赫となる女だからな……。神經が强すぎるんだから。』
『そんなことはありませんよ……。また、屹度逢ひたくなつたんですよ。』
かれはそんなことは頓着してゐられなかつた。急いで足袋を穿いて、外套を着て、

總身は顫へた。

『危篤ツて、病氣だつたんですか、そんなこと聞きませんでしたがね。』

『この手紙ぢやよくわからないけれど、何か變事でもあつたんぢやないかと思ふ……』また手紙をくり返して見て、『H町F病院としてある。不思議だ。病氣だツたんなら、もつと近い所の病院に入りさうなもんだ……。何か變事があつたに相違ない。』

かう言つたかれは、てつきりそれに相違ないと思つた。かれは再び體の顫へるのを感じた。危篤――或はもう死んだのではないかと思つた。女の死屍を人達はその病院に擔ぎ込んだのではないかと思つた。かれはかうしてはゐられないやうな氣がした。

『自動車は待つてゐるんだね?』

『え……』

『ぢや、すぐ行く。』

『いらつしやるんですか。何かまた、先方に譯があるんぢやないんですかね。』

『そんな馬鹿なことがあるもんか。』

『でも……』

『まア、兎に角、かう言つて來ては、行かない譯に行かない。着物を出して呉れ。』

『ちよつと、貴方！』
聲が冴え走つてきこえた。
恍惚した夢から覺めた時には、かれは手に一通の手紙らしいものを持つた英子が何か事ありげな顔の表情をして其處に立つてゐるのを認めた。
『何だえ？』
寢たまゝで、かうかれが訊くと、
『今ね、自動車が來たんですがね。そしてこの手紙を持つて來て、すぐ來て下さいと言ふんですがね。』
『自動車？』
かれは凶事の前兆に打たれたやうに急に半ば身を起した。
そして英子の手から、その手紙を取つて、裏をかへして見ると、それは女の母親からの手紙であつた
急いで封を切つて、走り讀みに眼を通したかれは、
『大變だ！』
かう言つて起上つた。
『どうしたんです！』
『よく詳しいことはわからないけれど、危篤だからすぐ來いと書いてある。』かう言ひながらもかれの

ながらかれは步いた。

それに、この一年間ほど、かれはかれがかねて考へた『欲せざるものは得、求むるものは失ふ。』といふ思案を有效に援んだと思つたことはなかつた。それは女に對してばかりではなかつた。世間に對してもさうであれば社交に對してもさうであつた。世間に對して自己の經て來た徑路が、艱難が、經驗が、または悲喜劇がいつの間にか十分に働いて動いて來て居ると同じやうに、女に對しても、女と偕に長い間を經て來た苦しいまたは樂しい繪卷物が、時の經過が、水火の中に心の煩悶が有效にある空氣を釀して來てゐるのをかれはつくづく考へた。

かれの書齋の裡には、數年來、かれが女の心理の變化乃至狀態を、半は硏究的に、半は實用的に細かく記して來た手帳が五六册あるのであるが、此頃ではかれはもうそれを振返つて見やうともせず、また新に得たものを記さうともせず、その多い手帳の上には深く塵埃が積むのに任せた。

これとは反對に、女は度々思ひ詰めたやうな手紙をかれに寄せた。また時には、髮を綺麗に結つてかれの家に遠くわざ〳〵やつて來た。

それは冬のある寒い夜のことであつた。その日はかれは丁度近郊の二三日の旅から歸つて、早くから疲れて寢て了つたが、突然廊下に足音がきこえて、けたゝましく障子が開いて書齋の電氣がぱつとついた。

物質に盲目になつた戀、でなければわざと物質に反抗した戀、不如意の涙に浸された戀、魂も何も知らずに唯かういふものだからかういふことをしてゐると言つたやうな戀、または幼稚な殘忍な戀、世間を人一倍深く知らなければならない身でありながら何も知つてゐない女の戀、たまには深い染着があるにはあるけれど、それさへ極めて稀で、唯、外形だけ賑かに騷いで暮すやうな社會、そしてその中にいつとなく時は經つて、涙も、魂も、無意味に埋められて了ふやうな社會、かれは到るところに、かれ等の慘めな生活と、青春を悔ゆる愚痴と、無意味な涙と、及ばない後悔と、運命を慨く饒舌との繰返されてゐるのを發見した。

かれは時にはまた繙つて、自分の經て來た性慾の上にあらはれたいろ／＼な姿を思ひ浮べて見た。人間なるが故に、人間のすることはしなければならないものなるが故に、かれはいろ／＼な姿を其處此處に殘して來てはゐるけれども、それはいかに慘めに、またいかに耻かしく、またいかに辛いものであるかを思はずにはゐられなかつた。普通ならば、時の過ぎ去つたのを、またはさうした幻滅の時期の來たのを、自ら慨くやうな氣分を感ずるのであるが、今はそれさへ起つて來なかつた。

かれは土手下の青草の萠え出した路を、靜かな氣分で歩くことが出來た。また宵の間の賑やかにきこえる三味線の音を平氣で聞き流して通つて行くことが出來た。『これで、かの女さへ、自分の考へてゐる心の境につれて來てやれば、それでもうこの戀は終結である。また不動不壞である。』こんなことを考へ

よ。でなくつちや、お前を本當に愛したとは言はれないから……』
『わかつたやうでわからないわね。』
女はこんなことを言つて笑つた。
女ばかりではなく、哲太自身にも自分の心の變化には驚かされた。不思議にも女乃至その周圍を繞る種々の色彩にはかれはもう心を移さなくなつた。土手の上の川の眺望、それはかれが朝に夕に、春に秋に、樂しい心を抱き、辛い思ひに結ぼれ、または深い憂愁に閉されつゝ常に眺めて來たものであつたが、それさへもうかれの心を惹かなくなつてゐるのをかれは見た。船も、帆も、水の流れも、唯都會の郊外の風景としてのみかれの眼に映つた。
狹斜街に住んでゐる人達、女達、またそれを取卷いてゐる空氣、さういふものゝ中にも、かれは昔のやうな憧憬と好奇心とを持たずに、唯、さういふ人達の生活としてのみそれを見た。深く入つて行つて見れば、矢張そこにも平凡な生活があるばかりで、暗鬪や、欺騙や、策略や、社交や、階級が、所謂運、不運と一緒に雜り合つて巴渦を卷いてゐるばかりであつた。矢張人間のやつてゐる雜多紛々以上に何等めづらしいこともなく、また惡魔もなく、神もなく、美しい心もないのであつた。外形は賑かで、且派手であるけれども、内部に入れば入るほど、さびしさが、ぢみが、あはれさがかれの眼に立つて見えた。

たのを女は見た。一疋の兎を逐ふものは一疋の兎をも得ることが出來ないと言つた哲太の言葉などが、ゆくりなく女の頭に思ひ出されて來た。

それを哲太は說明して『さうぢやないよ。もつと深く、あの時分よりも、もつと本當にお前のことを考へてゐるんだよ。お前の考へなどでは、色戀で、深く突詰めて思つて吳れなければ、本當に情がないと思ふかも知れないけれど、そんなことはないよ。深く突詰めては本當に愛したとは言はれないよ。その證據には、突詰めれば、刄を愛したものゝ肌に當てるのを何とも思はないやうになるぢやないか。すぐひつくり返つて敵になつて了ふぢやないか。もつと靜かに、落附いて考へて見るんだね。』かう言ふかと思ふと、『矢張、僕なんかも通るところを通つて來たんだ……。お前も通つて行つて見なければ……』

『それはさうですね。』

『兎に角、お前なんかも、もつと本當に自分のことを考へるんだね。一家の犧牲になつたり、父母の艱難を救つたりしたことは、それは好いさ。屹度その好い報酬は來るさ。しかしもつと自分のことを考へるんだね。しかし自分を深く考へると言つたつて、それは犧牲的精神を亡くして了ふといふことぢやないんだよ。又、自分の慾ばかりに夢中になるといふことでもないんだよ。自分のことが本當にわからなければ他人のことも本當にわからないからね。實際、人間は自分のことが本當にわかれば、それで澤山なんだ。子供なんかあつたッてなくつたッて同じことだ……。僕はそこまでお前を伴れて行つてやる

再び深く考へるやうにしたが、急に現實に戻つて、『それにしても、私なんか何うなつて了ふのかと思ひますよ。年を取れば、もう誰も相手にして吳れませんからね。さういふ姐さん方もこの土地には隨分ゐますからね……。それを思ふと、藝者なんかつくづく厭になりますね。それにつけても、子供が一人でもあつたら好いと思ふわ。さうしたら、苦勞をするにも苦勞の仕ばえがあるけれど……』

『それはさうだけれど、何うも爲方がない……。それよりももつと深く自分を考へて見るんだね。子供があつたつて、無くつたツて、本當の自分さへ打建てれば、何でもないからな。世間といふことをさへ眼中に置かなければ、何んな生計をしても同じだからな。』

『さうは行きませんよ、女は――』

『それは、今はさうかも知れない。しかし段々さういふことがわかつて來るよ。』

『さうですかね。』

かうした話が絕えず哲太の口から出た。女は山から歸つて來てからの哲太の心の變化を不思議に思はずには居られなかつた。『何うしてそんなことばかり仰しやるやうになつたんでせうね。』かう言つて凝と搜すやうにかれの顏を見たり、それを自分の身の方に持つて行つて、『貴方、もう、私なんか何うでも好くなつたのね……さうよ、さうに違ひない。』と言つたりした。三味線も、唄も、酒も、派手な長襦袢も、長い美しい髱も、透徹るやうな色の白い肌も、何も彼も以前のやうにかれの興味を惹かないやうになつ

ひ過ぎるかも知れないが、兎に角それに近い第二義的のものゝために、自己の本當の魂を玩弄物にしたところから芽ざして來てゐるのだ。それに、人間には人を騙せば一生人を騙さなければならず、心中の仕損ひをすれば一生心中の仕損ひをしなければならないといふやうな深い心理があるのだ。考へて見なければならないことだ。』

女は考へるやうにした。種々の艱難を經て來た身には、それがある深い暗示の影をその心に浮ばせずには置かなかつた。

『だから不仕合なんです……これまで一つも自分で本當のことをしたやうな氣がしないんですもの。』

『其處にお前の悲劇があるのだ。しかし、それは自分の運だと思つて、樂にまた感傷的に考へてばかりゐてはいけない。そこから浮びあがらなければいけない。心中の爲損ひをしたものは、再びさういふことをしないやうに、自分で深く戒め、もしそれが自分の力で及ばないやうに思つたら、佛にでも、神にでも手を合はせる位にしなければいけない。その位の熱い烈しい心がなくてはいけない。』

『さうですかね。』

かう言つて女は凝と空間を見詰めた。

『因果應報の理といふことは、不思議でも何でもなしに、ちやんと人間の心の中にあるんだからな。』

『さうですかね。』

た。女と男との關係――それは此頃でも絶えては續き、續いてはまた絶えるやうになつてゐるが、それについても、かれは平らかな心持でそれを聞くことが出來た。

『かうした心とさうした心とは、形は違つてゐても、實は同じ心ではないか。苦しみも、喜びも、皆な同じではないか。自分が苦しんでゐることは、矢張他人も同じやうにして苦しんでゐるのではないか。この互ひにつゞいてゐる所が面白いぢやないか。』かうした話を哲太はよく英子に言つてきかせた。時にはまた、『これだけ言つてもわからないかな……わかりさうなもんだがな。』かう強く押つけるやうにして言つた。

曾てはそこでは小唄が唄はれ、浮氣な物語が話され、遊蕩中心な世間が常に話題にされた女との長火鉢の對話にも、次第に眞面目な生活問題や兩性問題が話されるやうになつた。哲太は女の境遇から性質、乃至は色戀についての苦惱を一つ一つ解剖臺にのせるやうにして詳しく說明してきかせた。『お前と俺との間に、子供がないといふことが、一番わるいのだ。それがないために、何處まで行つても我々の仲は完成しないのだ。對者としてゐる限り、爭鬪と疑惑とがつゞくのだ。また、一面お前に子供がないといふことも、その心を二にし三にしてゐるところから起つて來てゐる自然の報酬だ……。罰だ……。實はお前の一生の不幸も其處から來てゐるのだ。稼業とすべきものでないものを稼業とした心から起つて來てゐるのだ。單に一家の犧牲とか、貧しい艱難な父母のためとか、さういふ虛榮――虛榮と言つては言

生れて來る微妙な融合の境まで伴れて來てやりたいとかれは思つた。かれは自己の妻に對してももう少し深切でなければならないと思つた。小さな嫉妬、小さな虚榮、または小さな自己を雜へた愛情に左右せらるゝやうな境に留めて置いてはならないと思つた。目覺めたものは、本當に進ませなければならない。眞實の道に一歩一歩と進ませて行かなければならない。夫に對して、皮肉に髮を結つたり、櫛や根がけを見せつけたりするやうな安價な心の境に留めて置くやうにしてはならない。

英子にしても、女にしても、眞にそれを愛するならば、染着した心以上に、その魂を愛してやらなければならないのである。無明の境からその魂を救つてやらなければならないのである。かれが此世にゐなくなつた時にも、かれの深切が一つ一つかれ等の心に蘇つて來るやうにしてやらなければならないのである。かう思ふと、かれは、法が、全が次第にかれの箇を大きく包んで行くやうな樂しさと心强さとを覺えた。

互ひに戯れたり喧嘩したり泣いたり笑つたりした長火鉢の對座は、從つて此頃は著るしく說教めいた空氣を帶びて來た。妻に對しても、女に對してもかれは次第に求むる心を放擲して來てゐた。かれは最早對者としてかれ等を取扱はなかつた。

かれは靜かに話した。女の生活乃至色戀に就いての細かい物語をも、かれは第三者のやうな氣分で、英子に話すことが出來ると共に、英子の心の狀態をも細かに解剖して女に話すことが出來るやうになつ

やがてペンキ塗の警察分署、折れ曲つた路、ヂックザックした板葺の人家、その上に高く聳えた半鐘臺、白粉を塗つた女のゐる料理屋、停車場の構内に簇がるやうに白く颺る煙、世間は再びかれの前に開かれて來てゐた。

一年は經過した。

それは哲太に取つては、山の上で考へた思索を一層しつかりと攫むための修行の月日で、一二年前にはとても其處にぢつとしてゐられなかつた退屈な書齋の裡にも、段々落附いて坐つてゐることが出來るやうになつた。机も、筆も、原稿紙も此頃ではもう昔のやうにかれを脅かさなかつた。また昔のやうに、雜誌も、新聞も、書籍も、意味なくかれを壓迫しなくなつた。殊に、一番多く且強くかれに感傷を誘つた『時』が次第にかれの心の周圍から遠退いて行つた形が著るしくかれを力づけた。自然の無關心を慨いた心は、いつかその無關心な自然の中にかれを伴れて行つてゐた。

從つて妻の英子に對しても、女に對して感じたと同じやうに、せめてはかれのこの心の境近くまで、個々の對立の眞の意味を自覺する境まで、若し進み得べくば、更にその個々の對立の上に自然に漂つて

かう村の人達の一人は言つた。

『矢張、僕の心がまだそこに殘つてるやうな氣がするからね。』

『さうずらな……』

で、すつかり閉め終つて、かれ等は傘をさしながら出かけた。哲太はもう一度振返つてその尖つたさびしい屋根を眺めた。

草が茂つて露の深い路、小さな松原に添つた路、女が足袋跣足で泥濘を衝いて來た時には卯の花が白く咲いてゐた路、夏の夕暮に一人思ひ餘つて山に面して立つて涙を流した路、水のぐぢや〱と湧き出してゐるやうな路、眞菰の茂つた池に小舟が一隻さびしく繋いであるのを見下しながら下りて行くやうな路、さうした路もやがては盡きて、角には五六軒の人家、山奥の製板所乃至は石灰の工場に往來する運送車　かれが毎日のやうに山から下りて買ひに來た豆腐屋の店、其處には若い夫婦が新たに人生を乘り出したやうにして一生懸命にいつも働いてゐたが、その時には鷄が二三羽さびしさうに軒で雨にぬれながら餌を啄んでゐるばかりで、その效々しい襷がけの姿を見ることが出來なかつた。つゞいて貧しい日傭取の小さな家一二軒、機を織る音の常にきこえる二階屋、それに添つては、小さやかな流れが音を立てゝ流れて、そこから振返ると、今別れて來た別莊の屋根のさびしく林の中に埋もれてゐるのがそれと指さゝれた。哲太はもう一度振返つて見た。

噌桶や、さういふものを一つ一つ調べて、さびしさうな顔をして、彼方此方の雨戸を閉めて行つたことを思ひ起した。今はもうかれのゐる一室の周圍の雨戸を閉めて、そして出かけて行きさへすれば、かれの半年をすごした、種々な思索をつゞけた、または孤獨の行をやつたこの山の別莊には、かれはもう再びやつて來るか何うかわからないのであつた。高い庇から點滴をなして落ちて來る雨は、其處に散らばつた敷島の空の袋の上にボツ〳〵と音を立てた。

『さびしいだらうね、君達は?』

『へい、もう雪だで?』

『もう、月の末には降るかね?』

『年によつて違ふが、今年は早く來るかも知れねえ。』

『しかし、この山は、僕に取つては、忘れられない記念を殘した處だ……』

こんなことを村の人達と言つてゐる中に、やがてそろ〳〵出かけて行つても好い位の時間になつた。村の人達は、『へい、出かけても好いずら?』かう言つて、一室の周圍の雨戸を閉め始めた。

最後の一枚を閉め終らうとした時には、哲太は何となく別れが惜しいやうな氣がして、もう一度そこに身を寄せて、そして元の空家になつた暗い家の中を覗いた。

『こんな山の中の家でも、半年住むと、別れが惜しいずらな。』

生じつゝあつた染着を超越したまたは愛情を超越した深い理解の空氣をその間に釀させて來なければならないと思つた。つゞいてかれは世間にある無數の人達の生活にも、より以上に、切實に、深くしつくりと觸れて行かなければならないと思つた。曾て平野の殘雪の町で、饂飩を共に食つた老いた百姓の大きな働いた手などが、かれの心に更に大きな意味を持つて蘇つて來た。

山を下る日は午後から冷たい雨が降つて、雲霧が日夕親しんだ山巒を深く封じた。荷物は既に昨日送つて了つたので、手づから持つて行くものは、風呂敷包一つ二つであつた。村の人達は、午後から來て別れを惜んだ。

かれはその山の別莊がこれから住む人もなしに、やがてやつて來る深雪に埋めらるゝさまを想像してさびしい氣がした。其處にはもう來年までは誰もやつて來るものはないであらう。雨戸は閉められたまゝに、またはかれの使つた長火鉢はかれの最後に吸つた卷煙草の吸殼を殘したまゝに、風呂は沸かして入つた湯をそのまゝに、いろ〳〵な思ひや、願ひや、苦しみや、勞働や、さうしたものゝ跡を其處に殘したまゝに、その時まで寂としてこの高原の上に殘されてあるのであらう。落葉の空しい林の中にさびしくその尖つた屋根はあらはれて見えるであらう。さう思ふと、この別莊を管理してゐる老爺がさつきやつて來て、勝手元に堆たかく積まれた紙屑の山や、酒の空壜や、菜や大根の漬けたものゝ殘つた糠味

卷の中に際立つてはつきりとあらはれてゐるシインではなかつたか。かう思ふと、かれは日夕散歩した林の中にも、山花の亂れ發いた草路にも、夜深く明るく硝子戸に反映して來る遠い停車場の灯にも、山畠を透して向うに浮き出して見える若い夫妻の住んでゐる測候所のペンキ塗の洋館にも、ガラ〳〵と手繰る毎に音高く鳴る車井の釣瓶にも、すべて自分の生活が、思索が深く跡づけて殘つてゐるやうに思はれて、このまゝ別れて都會に歸るのに堪へないやうな氣がした。

しかしかれはさうしては居られなかつた。いつまでも此處に停まつてはゐられなかつた。かれはこれから先の行程に上つて行かなければならなかつた。雨であるか、風であるか、または雲霧であるか、晴天であるかわからない行程に……。そしてその最後は必然に死の絕壁でなければならない行程に……。

しかし、その死の絕壁は、今はかれに取つて、曾て考へたやうな暗いものでもなく、灰色のやうなものでもなく、または恐怖と戰慄とを誘つて來るやうなものでもなかつた。かれは死は決して單純に死ではなく、生は決して單純に生ではないといふ理由を此山の上で考へた。

かれはこの異常の心理、不可思議の心理、生死を超越した心理、または愛憎をも勝敗をも超越した心理を、もつと深く確實に攫まなければならないと思つた。そしてこの事業が、かれのこれからの行程の重なる爲事とならなければならないと思つた。

哲太は力づけられた。泉は愈々滾々として湧き出して來た。女に對しても、今まで徐々として萠芽を

の前に迫つて來た。精神も何遍となく破産に破産を重ねた。仔細に瞑目して考へると、屹立つた絶壁の一角に戰慄して立つてゐるかれが見えたり、泥濘の波の中に身動きも出來ずに埋められてゐるかれが映つたり、自ら自分の體を十重二十重に縛つて、何うすることも出來ずに苦んでゐるかれが歴々と見えたりした。ドンヂヤンであると共にハムレツトであり、ハムレツトであると共にドンヂヤンであつた。しかし、それ等の種々の光景、または雜多紛糾した泣くべく笑ふべく罵るべきさまざまの光景は、決して徒爾ではなかつたのである。かれのためには尠くとも無意味に展開されてまた無意味に卷き納められて了つた繪ではなかつたのである。深くこゞらがり亂れ合つて、解くにも解けない絲の一塊の、彼方に轉がされ、此方に轉がされしてゐる中に、いつとなく、また何處からともなく、引張り出した一筋の絲の自然にほごれて來ると同じやうに、一から二へ、二から三へと次第にその紛糾を解くための材料として役立つて來てゐたのである。一つの波は一つの波を孕み、一つの潮は一つの潮を生んで、そして當然行き着くべきところへと行き着きつゝあるのである。そして今はその行き着くべき途中の或る大驛に人生の重荷を下して暫し休憩してゐるのである。

この山中の孤棲の半年が、かれのために、その有效な或る大驛として役立つたことを考へた時には、かれは言ふに言はれないなつかしさを、平生相親しんでゐたその周圍の山や霧や雲に對して感ぜずにはゐられなかつた。尠くともかれに取つては記念とすべきその幽棲ではなかつたか。またかれの一生の繪

した時のさまなどは、殊にはつきりとかれの頭に今も殘つて見えた。

欲して欲せざる心、欲せずして欲する心――。その心境を持して生きて行くより他に、他に生きて行く道はなかつた。漲々として日にかゞやき始めた泉は、次第に新しい淨い渦紋を漲らして來るのをかれは感じた。

ある夕は、寒い凄じい風がかれのゐる周圍の林から起つて、それが枯れた木の葉をガサコサとあたりに吹き亂した。秋から冬に移つて行く山は早かつた。紅葉の日に輝く間も、ほんの僅の間で、遠い高い山には既に雪が美しく光つた。

深い瞑想に耽つたかれの姿は、常に林から林へと通ずる細い折れ曲つた草路の中に見えた。時には、林が急に盡きて、そこから大きな山の半雲に蔽はれたのが見え、または山裾のところどころに山村の人家のさびしく横はつてゐるのなどが見えた。

かれは妻から來る手紙と女から來る手紙とを一緒に紐に卷いて、そしてそれを行李の底深く藏つた。

今まで經過して來た自分の姿がはつきり繰返して眼前に浮んで來た。それは經驗の上に經驗を築き、苦艱の上に苦艱を積み、或は起ち、或は躓き、時には崩折れ、時には奮ひ、時にはまた拐勢し衰退して、再びは何うしても起つことの出來ないやうな慘めなかれの姿であつた。死も何遍となくそ

しい涙が流れ、生別死別の苦痛が生じ、愛憎の潮が深い高い波を捲き起した。

しかしかれは、尠くともかれ自身は、世間の爲めに、または無數の戀に惱むもののために、その不動不壞な愛を失はない行を行しなければならなかつた。その身延の山の奥の院で攫んだ大切なシインを長く胸中に藏しなければならなかつた。かれはかうした思ひに滿たされながら、段々秋になつて行くさびしい山の林の中の道をひとり歩いた。

一年前に、かれが此處にやつて來た時分の心と今の心とをかれはをり〳〵比較して考へて見た。それは自分にも不思議に思はれるほど違つて來てゐるのをかれは發見した。今にして考へると、何のためにかれは農耕者にならうとしたか。又は自己の六尺の身を置くに足るの土地をあちこちにさがしてそれのないのを慨いたか。または一家離散の悲慘なる光景を頭に浮べて其處から此處へと漂泊して歩いたか。絶海の孤島の濃霧の中に行かうとして地理書をその座右から離さなかつたか。また何の故に強ひて女の愛慾から離れ去らうとしたか。強ひて離れ去らうとしたゞけそれだけまた女と離れることを好まなかつたのではなかつたか。他力に由つて、または境遇に賴つて、自ら止むを得ずにその苦惱を壓迫し去らうとする弱い心に捉はれてゐたためではなかつたか。

かれは彼方此方と漂泊し、放浪して歩いたかれの姿を到るところに發見することが出來た。或は平野の中に、殘雪の泥濘の中に、河添のさびしい旅舍の一間の中に……。東北の曠野に、ＭＳの父親を訪問

哲太はもつと深いことを淨山に澤山に女に話してきかせたかつたけれど、しかもかういふより他にそれを言ひあらはす言葉がなかつた。

一緒に下まで下りるといふ僧と倶に、かれ等は提灯を借りて、深い山霧を衝いて出かけた。

かういふ風に身延の山の奥の院で考へたかれの戀愛に對する心持は、あらゆる世間の戀の苦惱乃至煩悶を解決して餘りあるものではないか。思ひ餘つて死にまで到達する男女の心をも更にその上に超越せしめる一つの立派なシインとして役立たないであらうか。お俊傳兵衞の情死の墓のやうに無數の戀に艱む人達の涙と願望とを滿足さすべき無限の功德を自ら備へて來てゐはしないか。またそれを主觀的に見ても、その心持は、そのシインは、戀する人をして單に愛着にのみ、把握にのみ、所有にのみ熱中するもの丶心のエゴイズムを覺醒する材料とはなりはしないか。また戀するものは假令盲目であるにしても、時に際し折に觸れて、これと相似、相通じたシインに遭逢して、染着以上に兩性のまことに觸れることはないであらうか。そこまで考へて來て哲太は旺然として涙の頰を傳つて流れるのを知らなかつた。人間はたまさかにそれに觸れても、さうした心の眞珠に觸れても、身延の山を下れば、また元の愛着の生に復歸して了ふやうに、忽ち世間に捉へられて了ふのである。外面の零細な色彩に捉へられて了ふのである。その眞珠との接觸を長く保持してゐることが出來ないのである。そして其處に辛い悲

つて頭を下げた。

此方に來てから、

『何うも難有う御座いました。』

かう女は僧に向つて禮を述べて、布施を紙に包んで、自分の家の番地などを僧に告げた。

僧は開運の札や一家繁昌の札などをかの女に呉れた。

『あゝ久し振りで好い御參詣をした。』

かう言つたかの女の表情には、何處となく深く昂奮した形が見えた。

かれ等は扉を排して戸外に出た。もうすつかり夜であつた。白い霧は依然として蓬々と山から山へと流れ、凄じい風の音は轟々とあたりの大樹の梢を鳴らした。

『かういふところにゐたら、餘念が起らなくつて好いでせうね。』

かれの想像してゐた如く、果してかの女はさうした心に俗念を淨くしてゐたのであつた。

『兎に角、來てよかつた。途中で引返さなくつて好かつた。心配してやつて來た效があつた。』

かうかれが言ふと、

『本當ですね。……淸々した。お山がお山だけに、本當に行でもしてお詣をしたやうな氣がしました。』

『兎に角、何を措いても、お前とかうして來たことが嬉しい。』

かれは繇つて考へた。この滿足は戀だらうか。然り戀である。單純な友情では勿論ない。しかしその戀は世間の戀に一步を進めた戀ではないか。單に肉體を合はせた戀ではなくて、心をも魂をも合はせた戀ではないか。わが所有物に、またわが珠玉に、または世間に對する虛榮に淺はかに捉へられた戀ではなくてわが所有すると所有せざるとを問はずわが眼の前にあると無いとを問はず、時間を問はず、また空間を問はざる戀ではないか。否、一步を讓つてさうした完全な戀ではないとしても、その完全な、不動不壞な永久な戀に達する萠芽であることだけは確かではないか。所有を超越した所有、把握を超越した把握が其處にあるではないか。

哲太は一種渴仰に似た心に滿たされて、そのまゝ柱に寄せた身を起して、如來尊の端坐してゐる前へと近く行つて坐つた。

僧の讀經の聲は靜かに深く魂に染み入るやうに聞えた。戶外に荒るゝ山颷は、をり〳〵扉の隙間からさつと入つて來て、佛の前に供へた二三本の蠟燭の灯をチラ〳〵と動かした。

合掌をしたまゝ女は身動きもしなかつたが、その疊の上に動いた蠟燭の灯は、さびしく蒼白いかの女の横顏を照した。

やがて終りに近く、僧は鉦を鳴らして、讀經の聲の箏を長く引張るやうにした。

やがて僧は及び腰になつて、最後に一拈の香をひねつて、そして禮拜した。女も哲太も倶にそれに倣

へと行つたが、やがて靜かな讀經が始まるや否、かの女は急いで其方へと行つた。
かれは柱に凭りながら、その光景を凝と見てゐた。此方で見てゐると、僧の讀經の聲の次第に高く調子づいて來るのにつれて、女の低頭き加減に殊勝げに合掌して端坐してゐるさまが、薄暗い蠟燭の灯の中に古代の繪でも見るやうにはつきりと浮き出して見えた。御堂の四面には、夜の霧が白く流れ、山巓の風が凄じく扉を鳴らした。
女の合掌祈念してゐる後姿に凝と見入つたかれは、女の胸に今しも簇がつて來てゐる過去の罪障乃至は因緣に由つて生じて來てゐる苦惱、それを免れやうとしての懺悔、さういふものに滿されてゐる心のさまを想像することが出來るやうな氣がした。かの女は毒藥を仰がうとした男をも思出してゐるであらう。2と3との悲喜劇に惱んだ苦惱をも思ひ浮べてゐるであらう。思ひのまゝにならぬ吾身の不幸をも慨いてゐるだらう。またはさうした火水の苦難に堪へかねて、いつそかうした淨い尊い生活に入つたならそれこそ何んなに好いだらうと思つてゐるだらう。そしてその僧の誦する讀經の聲は御堂をめぐる夜の霧と共に深くかの女の魂に染みるであらう。かう思つたかれは、薄暮にかうして山に登つて參詣して來たかれ等の機緣の不可思議の中に冥々に動いてゐることを思はずにはゐられなかつた。兎に角自分の愛した女を此處までかうして伴れて來て、佛の前に、また自己の本當の魂の前に合掌祈念させたことを非常に滿足にかれは思つた。

『燥らせて貰ふ方が好い。』

『さア、さア、お燥りなさいまし、山は夜は寒う御座いますから。』かう言つて比丘尼は新たに爐に榾を加へた。

さうした大きな山寺の圍爐裏の中に、草鞋のまゝで入つて暖を取つてゐる女の姿は不思議な印象をかれに與へた。深山白夜の中にチラ〳〵輝く蠟燭の灯も、この世のシインとは彼には思はれないやうな氣がした。

ことに由れば、奧の院で一夜を過すことが出來るかも知れないと思つてやつて來たかれ等は、これから三里奧の七面山の大御堂ならそれが出來るが、此處ではさうした設備がないといふことがわかつた時には、『それではかうして此處にゆつくりはしてゐられない。』と言つて、やゝ暖まりかけた圍爐裏から出た。しかし一度登つて來た山だけに歸りにはさう苦勞には思はれなかつた。それに、幸ひなことには、運よく下まで下りるといふ僧がゐた。で、かれ等はその僧に一緒に行つて貰ふやうに賴んで、それからお經を上げて貰ふべく奧の院の御堂へと行つた。

雨はすつかり止んだが、風は依然として夜霧を茫と白くあたりに漲らした。かれ等のために經を上げるための老いた僧は、法衣を着てかれ等のあとからつゞいた。

僧は最初に御堂の扉を明け、蠟燭に火をマッチですつてつけ、靜かに奧の如來尊の安置されてある方

『ぢや、此處まで下から毎日朝日をお拜みにお上りになつたんですね。』
『さうだ……その時分は山はまだ開けなかつたのだ。お堂も何もなかつたのだ……。上人は一人この荒山の下に庵室を結んでそこで行をなすつてをられたのだ。……今でもその跡はある、そして上人は此處で父母の生みの恩を思ひ、それから間もなく池上にお歸りになつて、そしてそこで亡くなられたのだ。』
『…………』
女は口の中で題目を唱へて、そして立つて祈念した。
勇しい題目の音は御堂の前にある庫裡から洩れて來てゐるのであるのがやがてわかつて來た。かれ等はその前に行つて、大和障子を明けて入つて行つた。榾の燻つてゐる大きな圍爐裏と、その前に蹲踞つてゐる比丘尼と、佛前に供へられたチラ〳〵する蠟燭とが一番先にかれ等の眼に入つたが、參詣者のあるのを見て、すぐ立つて來たその老いた比丘尼は、
『まア、大變でしたでせうね。この吹降では――』
かう言つて出て迎へた。
『まア、まア、やつと來ましたね。』
『でも、まア、無事で來てよかつた。お前、寒くはないかえ。』
『寒いにも寒いけど……』

その深い霧の中に、微かながらも題目の太鼓の音を耳にした時には、かれ等の胸は何とも言はれないやうな喜悦で一杯になつた。

『あゝもう來た！』

『さうね、題目が聞えるわね。』

勇ましい奥の院の題目の太鼓の音は、逢々と流るゝ白い夜霧の中に段々高くはつきりと響き渡つてきこえて來た。

題目の音が愈々間近くなつたと思つた時、かれ等は夜霧の浮動する中に漸く御堂の屋根のあらはれて來るのを見た。

『來たよ、來たよ。』

『たうとう來ましたね。』

女は喜び勇んで言つた。

そこは日蓮聖者が晩年に父母の恩を思念したところであつた。つまり生を究めつくして始めて死に面した心持の最も記念せらるべきところであつた。哲太の心は感激に震へた。哲太は聖者の一生の苦行を歷々と眼の前に見るやうなのを感じた。かれは兎に角自分の愛した女をかうして此處まで伴れて來たことを喜ばずには居られなかつた。かれは聖者の話を歩きながら女にした。

女の心にも、矢張かれと同じやうな心が湧いて來たらしく、唯一本の杖に縋るといふやうにして、曾ては口にしたこともない題目を頻りに自から唱へ始めた。そしてかれが木の根に躓いたり何かすると、

『危ない！　用心しなくつちやいけませんよ。貴方にもしものことでもあると、それこそ猶大變だ。』かう言つては、深谷の淵を縫ふやうにして歩く哲太の身を心配した。

五丁目毎にある石標、それも始めは容易にやつて來なかつたけれど、かう二人が眞劍になつてからは、もうやつて來たかと思はれるやうに早く早くかれ等の前に來た。次第にかれ等は力づいて來た。一歩一歩のぼつて行くかの女の題目も次第に心の祈りを力強く示して來た。

薄暮は通り越して、今はすつかり夜にならうとしてゐた。雨は止んだけれど、下から捲きあげる風は早く凄じく白い霧をあたりに漲らした。

四十五町目の石標のところに來た時には、哲太は思はず聲を擧げた。

『もう一息だ？』

『さう？　もうあと一ちやうば？』

かの女も勇氣が加はつたやうに、一層聲高く題目を唱へた。

かれ等は益々急になつて行く坂をあへぎあへぎ登つた。白い霧はかゝつては晴れ、晴れてはかゝつた。

も時間がかゝつて、まだ三十五町目の石標に達しない中に、薄暮近い空氣は次第にあたりに迫つて來てゐた。

右に穿たれた深い谷は、すべて白いまたは灰色の霧で埋められて、それが蓬々と捲き上つては、かれ等ののぼつて行く山路の杉の梢に亂れかゝつた。寂とした荒い深い山、それが益々かれ等の心に深い恐怖を抱かしめた。

今は奥の院に到着するといふより他に、他のことを思つてゐる暇はかれ等にはもうなかつた。思ふに、人間はかうした艱難に際した時に、初めて手を佛の前に合せる心になるのであらう。かれ等の苦しい戀もまたそれに似てはゐないか。互ひに心を合せやうと思つても合はせることが出來ず、また互ひに路上の人にならうと思つてもそれも出來ず、かうして此處までやつて來た形は、何寺かの意味に於て、それに似て居はしないか。二人してゆくりなくかうして艱難を倶にしてゐるといふ形も、深い意味をかれ等の前にあらはして來てはゐないか。かうして心を合せて聖者の行をした山の御堂にゆくりなく詣でゝ行くやうになつたといふことも、かれ等の戀にある深い神祕を暗らして來てはゐないか。かう思ふと、哲太はある感激の念の心の底から湧いて來るのをとゞめることが出來なかつた。

『大丈夫かえ?』

かうかれは何遍も言つた。

ではあつたが、夕暮近い山の寒さが、全身濡れ果てた女を戰慄させた。

いろは四十曲の中ほどで、大きな蛇がかの女の行手を遮つた時には、かの女はキヤツと言つて、蒼靑になつて、我を忘れてあとに驅け下りた。愈々女の身の上が心配になつて來た。兎に角、何は措いても奧の院までは互に扶け合つて行かなければならないと哲太は思つた。白い霧は蓬々として山から山へと流れた。

かれは恐怖に戰へる女をかばふやうにして歩いた。それに女はいくらか體をわるくしてゐる筈である。神經もわるく昂奮してゐる。もし、此山の中で、風雨の中で、誰も人一人ゐない灰色の霧の中で、萬一のことでもあつたなら、それこそ大變である。それこそ自分の責任である。一生悔んでも猶ほ足りない責任である。かう思ふと、山に登りかけた頃に、雨の降り出して來た頃に、『ざまを見ろ!　たんとひどい目に逢へ!　かういふ時でなければ仇を討つことは出來ない。』と思つた念などはすつかり消えて、何うかして、無事に奧の院まで伴れて行かなければならないといふ念が盛んに起つて、弱い女のために聖者に祈るやうな心で胸が一杯になつた。

『大丈夫だよ。蛇なんかゐたツてこはくはありやしないよ。氣を落附けなくつては駄目だよ。何が出たツて僕がゐるから大丈夫だよ。』かう言つて、後れ勝ちになる女を待つたり、『何うだえ、大丈夫かえ?歩けなくなりやしないかえ?』と劬つて力をつけてやつたりした。從つてかれ等の歩みは、思つたより

眞面目であつた。我儘であつた。またデカダンであつた。かれは鎌倉の府の巷に勇ましい獅子吼をした聖者、法華經の擁護に身命を惜まなかつた聖者、波濤萬里の間を遙々と一孤島に遷謫された聖者、太陽を仰ぐことを毎日の課程にした聖者、晩年はこの荒山の人跡不到の地に入つて專念苦行を怠らなかつた聖者、その聖者に比べて、自分がいかに不眞面目で、輕薄で　淫、痴、怒に捉へられた無明の徒であるかを考へずには居られなかつた。路は次第に嶮しく嶮しくなつて行つた。雨は土砂降りに降り出して、風さへ凄じく起つて來た。そしてその荒山の凄じい風雨の中に、女が半は昂奮し、半は戰慄しつゝ、或は留り、或は喘ぎつゝ登つて行くのを見ては、哲太は今は眞劍にならずには居られなかつた。かれには女の身の上が心配になつて來た。

『大丈夫かね。』

『え、大丈夫……。でも、とても一人では駄目ね。これでも貴方と一緒だから、登れるのよ。』

この艱難のために、女の感情もすつかり解けて了つてゐるのをかれは見た。

『でも注意しないといかんよ。』

『大丈夫ですよ。』

かうは健氣には言ひながらも、女は一町歩いては休み、また一町歩いては休むといふ風であつた。雨は益々強くなつて、派手な華奢な蝙蝠傘は、をり〳〵捲き上ぐる山嵐に吹き飛ばされさうに見えた。夏

女は私だつてその位のことは出來るといふ腹立まぎれに、山門から本堂に通ずるあの高い數百級の石磴をも無茶苦茶に登つたが、少しやつて來て、次第に雲霧が深く、溪水の音が物凄く、折れ出つた路か嶮しく、本降らしい雨さへそれに加はつて來た時には、お互ひに心細くなつて、かよわい女のために駕籠を雇つて來なかつたことを哲太は後悔し、女は女で、縋るべきものに縋らずに、我儘を通したことを心の中で悔いた。しかし、それでもかれ等はまだ默つて口をきかなかつた。かれ等は蝙蝠傘に山雨をしのぎつゝ、半身濡れながら一歩一歩登つて行つた。やがて路の處々に驛亭のやうに參詣者のために造られてある最初の小さな佛寺が現はれ出して來た。其處で、女は更に支度を整へた。女は着物の袖を後に結び。腰卷を高く褰げ、曾てはいたことのない草鞋を足袋の上に着けた。見かねて、哲太は草鞋の紐を結んでやつた。

かうなつては、かれ等はもう喧嘩をしては居られなかつた。見かねて、哲太は草鞋の紐を結んでやつた。女も二語三語普通の言葉をきいた。

しかしその深い溪谷に沿つた路を、かれ等は猶沈默勝に歩いた。哲太の胸には、聖者の行をした山を色戀に染着したかれ等が汚してるやうにも思はれゝば、この雲霧は、この風雨は、またこの嶮しい山路は、その汚れた不眞面目な行爲に對する自然の報酬であり罰であるといふやうにも考へられた。かれは何遍も途中から引返さうかと思つた。またゆくりなくかれの前にあらはれたかうしたシインは、かれの染着を元の本性に引戻すための聖者の恩惠深き慈悲な心のあらはれのやうにも感じられた。かれは不

この矛盾が、この兩面が、かれには意味があつた。寒の後に暑があり、苦の裏に樂があり、失意の後に得意があり、恐怖のかげに安心があり、利の次に損があるといふ風に、すべてかういふ風に、普通の心理では測度することの出來ないやうに絶えずリズムを刻んで動いてゐる異常の心の現象が、今まではさうしたことに觸れながらも、目覺めずに、知らずに通過して來たといふことに思附いた時には、かれはそこから更に新しい心理の縱斷を試みることが出來るやうな氣がして、自分で自分の愚かであつたことを心に繰返した。

女に對する愛と憎との兩面、それは痛切にかれが味つたものだけに、一層さうした思索の上に有效に役立つて來るのをかれは感じた。今ではもう孤獨は孤獨ではなかつた。不如意も不如意でなかつた。廣い世間すらも、この山の中にひとりゐるかれの周圍に無限の親しみを寄せて來た。

日蓮聖者がその晩年を行した身延の山の路は、凄じい深い溪谷に添つたり、晝も雲霧で深く鎖された密林の間を登つて行つたりするやうな處で、しかも嶮しい羊腸たる九十曲折であるが、そこを哲太は女と二人で徒歩で登つて行つたことを思ひ出した。それは霧の深い今にも風雨がやつて來さうに思はれる或日の午後であつたが、些細なことで途中で喧嘩をしたかれ等は、わざと駕籠をも雇はず、これから奥の院まではちよつと御無理でせうといふ宿の人達の言葉にも耳を假さず、男は勝手にするが好いと思ひ、

は頭に浮べた。かれの感傷は其處から來た。恐怖から起る戰慄と逡巡とから來た『時』に比しては、その理解の發達の遲い質から來た。

かれは自己の餘りに感傷的であつたことを考へずにはゐられなかつた。曾ては、死に對して、人間に取つて不治の病と言ふべき死に對して、一刻もじつとしてゐられない焦燥と不安とを感じたことをかれは思ひ起した。また人間の屍の上に草が生えることを想像してそして戰慄したことを思ひ起した。時には頭上を蔽ふ廣い穹窿に對して、堪へ難い神祕と恐怖と戰慄とを感じたこともあれば、無關心な大きな自然に對してとゞめ難い深い嘆聲を發したこともあつた。しかし、不思議にも、此頃では次第にさうした消極的な心の壓迫は薄くなつて、自己の存在が自己の存在だけで大きな意味を持つてゐるものであるといふ風に考へられて來た。

ある時には、人間の死が草木の枯死と同じく、さう大した大事件ではないと思はれると同時に、また人間の死が非常に大切に、非常に尊嚴に、決して輕々に看過して了ふことの出來ないものであるやうに思はれた。例へば、ヨオロッパの大戰に死傷した無數の人間を蟻を踏みつぶしたかのやうに思ふと同時に、人道の上から見る平和論者と共に、人類の最も看過することの出來ない大きな罪惡のやうに考へた。そしてこの二つの矛盾した考へ方が共に盾の兩面であることに思ひ及んだ時には、かれは豁然として思索の上に一歩を進めたやうな氣がした。

人間の體と心の周圍をめぐる恐怖といふことに就いてもかれは深く考へた。理由なき恐怖、單にその恐怖ばかりで、人間は死んだり滅びたりする。また何の役に立たない生命の浪費をもやる。しかし一方から言へば、この恐怖があるために、人間は進むところをも進まない代りに、危い淵にも臨まずに身を持して行くやうなところがある。從つて一面反省の心理にも續いてゐる。そしてその生起して來る原因は、多くは世間に對する理解乃至不理解の度數から起つて來てゐるやうな點がある。そしてその中樞を、『時』が貫いてゐる。『時』が來なければ人間の狀態や心理がわからないやうに、恐怖も亦『時』によつて左右される。理解が左右されると同じやうに左右される。從つて『時』と『理解』とが進むに從つて恐怖の度は段々尠くなつて行くことを哲太は考へた。

かれは人一倍若い時からその恐怖に虐まれて來た。不可解が、不可思議が、宇宙の秘密がいつもかれを戰慄させ、また逡巡せさせた。同じく遊ぶ友達の存在、中年の人達の存在、または年老いた人々の存在がかれに恐怖を抱かしめた。人間は何處まで惡魔であるかがかれにはわからなかつた。從つてその時分は生死に對する恐怖よりも、世間が、人間が最も多くかれを脅かした。次に、青年期に入つては、異性が不可思議で不理解で、そして怖ろしかつた。一異性の抱擁が自己を亡ぼすもの丶やうにすらかれには思はれた。

それが中年期に入つて恐怖と好奇心とが一緒になつて、そして凄じい波を擧げたことをつゞいてかれ

との出來る心理であることを書いた。

泉、泉、
日に光り、翳り、紋を成して湧き出づる泉よ。
そこにこそわれあれ、
わが世あれ、
わが細かき常ならざる心あれ、
男、女、生き死に
悶え、苦しむ美しき彩あれ、
泉、泉、
溢れ漲り來るを待つ泉よ。
小鳥も知らず、
草木も知らず、
過ぎ行く雲も知らずに……

かうした卽興の詩をもかれはそこへ書き添へた。

費した今までの生活を振返つた。

不思議にも、かれはこの頃、心の次第に安靜になつて來たことを感じた。女に對しての愛着も、をりをりは強く起つて來るには來るけれども、それも以前のやうに理由なしに募つて來るやうなことは次第に少くなつて、かれと女との間に釀されて來た本當の愛といふことが強くはつきりといつもかれの心鏡に映つた。從つて女の手紙に答へるかれの此頃の手紙の言葉も、次第にさうした心の境を力說するやうになつた。

それればかりではなかつた。一方またかれの爲事に對する世間の批評、まご〳〵すればすぐ押流されて了ひさうに恐ろしく油斷がならないやうに思はれた世間の潮流、さういふものに對する心持も、次第に焦燥と不安の念を脫却して來るやうなのを感じた。かれは朝早く起きて、水を汲み、飯を炊ぎ、一番の上り汽車が山合のレールに白い煙を簇がらせて通つて行く時分には、いつも旣に机に面して坐つて爲事をしてゐるのを例とした。周圍の山畠には、一里も二里もある山村から、百姓達がやつて來て、それが午時分になると『水一杯お貰ひ申しやす。』と言つて、ガラ〳〵響く車井戶の釣瓶の繩を手繰つた。

其處からかれがアメリカにゐるMSに書いた手紙には、民主思想と專制思想に對するかれの新たに得た考へなどが書かれた。かれは細かい個の心理から出立して、その思想の兩面の必ず一致すべきものであることを說いた。またヨオロツパの大戰の背景にある心理は、其處にも此處にも到る處に發見するこ

かれは餘りに小さい零細なことが世間に多いのを思はずにはゐられなかつた。またその小さい零細なことに捉はれてゐるもの、多いのを慨かずにはゐられなかつた。何のための感傷、何のための悲嘆、また何のための恐怖？　妻の英子が孤獨のために苦しむとならば、その孤獨はかの女の本當の道に達する行程として寧ろ喜ぶべきことではないか。他に愛するものが出來たといふならば、それも亦かの女の一生の行程の一事實として是認すべきものではないか。また、女にしても、夫を持つべきならば、それが却てかれに對してまことの價値を示す所以ではないか。

かれは女に深く染着した時に、因果應報の理のやうなものに突當つたことを思ひ起した。また何うにもならないものを何うかしやうとする心理を何の故かと疑ひ惑つたことを思ひ起した。また一つの心が他へ、その心がまた他へ移つて行く形に苦しんだことを思ひ起した。考へても考へても盡くるところを知らない心ではないか。

しかし、それも止むを得ないことであつた。何故なら、人間は人間の一生を盡して了はなければ、人間のことは完全にはわからぬやうに出來てゐるものであるから……。またこれから先の心の Sturm und Drang を通過しなければ、哲太自身にしてもそれはわからぬ筈であるから……。

兎に角、着いたがために起つた感傷であり、煩悶であり、嘆聲であることは確かである。また欲する心に捉へられたが爲に起つて來た不滿、不平、不如意であることも確かである。かれは徒らに精神を浪

眞像は萬人皆なこれを知るといふやうになつたならば、恐らくはその人は却て尋常平凡の人となることを望まずにゐるだらうか。

この平等は何處から來る？　心から、異常の心理から、染、着、懊惱、苦悶の中から……。

哲太は此頃になつて、始めて基督が人間のために十字架を後に負ひ、世尊が衆生のために苦行を敢てしたといふことのまことの意義のヒシ〳〵と胸に反響して來るのを覺えた。世間を擧げて、すべて多くは皆染着である。盲目である。對世間である。また染着、盲目、對世間から根ざして來る懊惱と悲哀と嘆聲とに世間は滿たされてゐる。底には各自皆なその平等の眞珠を藏して居るのであるけれども、多くはさうしたものには觸れて見やうとも思はずにゐる。戀に惱むものも、唯、惱むことを知つて、その惱みがかれをその眞珠につれて行く道程であることを知らない。かう考へて來たかれは、かれの苦惱は、矢張多くの人達の爲めに惱み且苦んだ苦行の一つであるといふ風に考へられて來た。戀に苦しむ無數の人達に共鳴する心は、聖者が世間のために十字架を後に負つた心と相似、且相近づいてゐるのではないか。

重きを置くべきことに重きを置かずに、何うでも好いことに全精神を打込んでゐたのである。底深くかくされてゐる眞髓は放つて置いて、その外面にあらはれたものにばかり夢中になつてゐたのである。雲となり霧となり雨雪となるものにばかり心を注いで、その底にある空には少しも氣がつかなかつたのである。そしてその心の外面が遂にその眞髓をも蝕ばんで行くことに氣附かなかつた。

出來るのである。これは空想ではない。儼とした事實である。深く染着の底に、老、病、生、死の底に横たはつてゐる事實である。

かれは社會の反抗、乃至自己の反抗に生活した以前の生活をあさはかな生活だと思つた。また、デカダンに突進した生活を慘めな無意味の生活だと思つた。勝者の哲學を說いて、しかも實は勝敗の標準の理由を說かない外國の思想家の生活を不完全不徹底だと思つた。かれに何の權利があり、また何の長所があつて、路傍の貧しき群を貧しき群と見てそれを憐むことが出來るのか。社會の貧、病、老、乏を問題にする前にかれ等は何故に自己を問題にしないのか。思ひあがつた自己は、路傍の賤民にだも及ばざるを知らないのか。

幸福の平等は、世間の人も往々にしてそれを口にする。然らば、何故に更に一歩を進めて、衣、食、住、すべき平等であるといふ風に考へて來ないのか。美衣を着けたものと、襤褸を纏つたものゝ差は、それは單に美衣であり襤褸であるだけの差ではないか。その證據には、欲するまゝに美衣を得ることの出來る人に取つては、美衣ではなくつてゐるではないか。また大きな瀟洒な邸宅は、大きな瀟洒な邸宅ではなくなつてゐるではないか。食もまた然りである。多く獲ない中こそ、美食を欲すれ、美酒を欲すれ、一度それを得て、十分に攝取することが出來れば、美食は美食にあらず、美酒は美酒でなくなつて來るではないか。富貴功名もまた然りである。巨萬の富をかさね、世間を擧げてかれを尊敬し、その寫

寺の經机の上に置いた赤いダリアではもうなかつた。

一生逢はなくとも好いと言つた心、それが卽ちかれとかの女の間にさうした氣分を釀して來た最初の第一歩であつたことをもかれは考へた。

ある日はかれはそれを廣くかれの經て來た生活、或は思想に捉はれ、或は經驗に捉はれ、または世間に捉はれた生活、つゞいてこの世間に無數に散在されてゐる欲望、要求、染着に滿たされた種々の生活の上にあてはめて考へた。かれ自身の生活もさうであつたと同じやうに、世間に無數にある生活も、矢張盲目で、種々のものに捉へられつゝ、もがき、悶え、且つ悲しみつゝあるのをかれは見た。あらゆる苦悶は、煩悶は、感傷はすべてさうしたところに最初の根ざしを持つてゐるのである。世間の人が多く世間を對照にして嘆いたり悲しんだりしてゐるのは、單純に世間に捉へられてゐるからである。世間に對して欲する心を抱いてゐるからである。哲太はかつて妻の英子に向つて、「俺は俺だ。何處まで行つても俺は俺だ。乞食になつても、顯位高官になつても、俺としての存在には少しも違ひはない。」とかう激して言つたことがあつたが、その言葉が此頃をり〳〵かれの胸に思ひ起された。欲する心だになければ、世間などは何うでも好いのである。世間に容れられやうが、また捨てられやうが、そんなことは問題でないのである。不動不壞の法の中に同化して、亡びても亡びず、消えても消えず、無窮に生きて行くことが

違があるかといふことであつた。その疑問に逢着して、かれはまた一日二日費した。

欲する心がない、求むる心がない、それが妥協との相違ではないか。あきらめとの相違ではないか。しかし、欲する心がない、たゞそれだけではまだ物足らなかつた。まだ言ひ足らないやうな氣がした。では、欲する心に捉へられない心か。かう言つてかれは答を待つた。

それは以前に考へたものよりも好いやうではあるが、しかしまだ何か足りないやうな心持がした。かれは一歩をすゝめた。欲して欲せざる心、欲せずして欲する心――そこに行つて、かれはまた雀躍した。

男女問題に對する苦痛、世間に對する苦痛、家庭に對する苦痛乃至は更に大きく生死問題に對する苦痛、さうしたものが皆それに連繫して珠のやうになつて考へられて來るのをかれは感じた。

かれは靜かに世の暗黑の中に一人坐つた。また曉近く眼覺めて、黎明の空に黑くくつきりとその外廓をあらはしてゐる山の屹立した姿を眺めた。

夕暮近く、散步から歸つて來て、尖つた別莊の屋根をさびしい松林の中に發見した時には、永劫卽刹那といふことをつくづく思つた。それはこれまでにも口に出してはよく言つた言葉であつたが、しかもその時ほど深く身に染みて感じたことはなかつた。かれは路傍に咲いてゐる山桔梗の深紫の色をしたのを一本折つて來て、それをビールの空壜に生けて、そして机の上に置いた。女に對するかれの心は、山

の現象であつて、決して絶對のものではない。從つて自己の所有物にしたといふことは出來ない。決して出來ない。

一體、把握しやうといふ心が既に不純なのである。我に着してゐるのである。他に染つてゐるのである。從つて種々な欲望や、願ひや、又それにつゞいて他を排したり自ら怒つたりする念が起つて來るのである。從つて不動不壞なることが出來ないのである。浮草のやうに動いて移つて行くのである。しかし、その不動不壞が果して何處から根ざして來てゐるか。答へて曰く、動から、壞から、または着したり染つたりする心から根ざして來てゐるのではないか。動、壞、着、染がなければそこまで心が動いて行くことは出來ないのではないか。

しかしこの動、壞、着、染を經過した不動不壞と、また動、壞、着、染を經過しない盲目な無自覺な心とは甚だよく相似てゐる。女を例にして考へて見ても、何うせ何うにもならないと言つて引返して來る心と、生死の愛着を通過して、その上に始めて起つて來た他愛とでは、形は同じでも其質に於て既に全く其色合を異にしてゐる。『さうだ、さう思はなければ、決して本當にかの女を愛してゐるとは言はれない。』かれはかう思ひながら、誰もやつて來ない山の上の草花の亂れ發いた路を朝に夕に散歩した。

しかし、かうは思ひながらも、疑惑は猶盛に起つた。その多い疑惑の中で、一番手酬い反抗の聲を揚げて來たのは、さういふ心が、さういふ他愛が、果して中ぶらりんの妥協乃至あきらめと何れだけの相

自分の心がある深い一種の暗示を得たやうな氣がして思はず自ら躍り上つた。

『狐！　狐どころか。かの女はこの自分の祕めたる扉をひらくために、立派に役立つて吳れた眞珠の鍵ではなかつたか。聖者に面したS夫人ではなかつたか。』

かう思ふと、かれは深い心の線の微妙に顫動するのを禁めることが出來なかつた。郊外の料理屋の離座敷で、さういふお前の心なら、もうこれで別れても好い、一生逢はないでも好いと感激して言つた心持が、その同じ心持が、更に形を變へて、今一層淨化されてかれの前にあらはれて來るのを見た。

この心、この淨化された心を以て萬物に對すれば、女に對しても、世間に對しても、乃至は自己に對しても、今までよりは、もつと不動な不壞な心持でゐることが出來ると思つた時、かれは非常に大切なものを攫んだやうな氣がした。かれは何年にも感じたことのない精神の雀躍を總身に感じた。

深く考へて來ると、あらゆるものすべて、生あるものゝすべては、如何なるものでも、自己の所有物にすることは絕對に出來ないものである。それは人間同士の間柄ばかりではない。一木一草ですらさうである。生あるものを自分のものにしやうとするには、その生を奪つた後でなければ完全に自己のものにすることは出來ないのである。生物はすべて個々の對立である。如何ともすることの出來ない對立である。雙方の心の一致のために、たまさかに互ひに相把握したと思ふことはあつても、それは單に一時

あらゆるものすべて、世にあるものすべて、すべては皆自己から求むべきものではないのであつた。自己は自己である。千億萬のあらゆる種子は皆な自己の中にあるのである。皆な自己から攫み出し搜し出して來るべきものである。自己を除外しては、あらゆるものはすべて皆無いのである。しかも不幸にして、大抵のものはその自己の祕めたる扉を開くべき鍵を何處かに忘れて來て了つてゐる。皆な持つて生れて來てゐるにはゐるのであるけれど、それを用ふることを忘れて了つてゐる。たまさかに、萬に一つ、億兆に一つ、生れながらにしてそれを用ふることを知つてゐるものもないではないが、しかしそれは甚だ稀である。從つて人間はその經て來た經驗乃至思索に由つて、またその遭逢した心の事實に由つてすら、猶その扉を完全に開くものは稀ではなかつたか。その遭逢した貴い心の事實すら、單に他から致された、または餘儀なく邂逅した艱難と言ふ風に解釋して、我と我が扉を閉ぢたまゝにして置くものが多くはなかつたか。

それは何の故に？　人間の孤獨を知らないがために。山も、川も、野も、鳥も、樹木も、草も、何も皆な完全な孤獨で且つ立派な獨立であることを知らないがために。人間はよく運命といふ二字を口にする。艱難に際しては殊によく感傷的にその二字を口にする。しかしその運命といふものを誰が持つて居るのか。他が持つてゐるのか。われ以外に他に大きな力があつてそれを持つてゐるのか。否、否、否、皆なそれは自己の祕めたる扉の中にかくされてあるのである。かう思つた時には、哲太は紛糾錯雜した

人達のやつて來ない時は、かれは殆ど全く一言の口も開くことなくして暮した。

しかしその孤獨はかれに種々なものを開いて見せた。始めはそれを辛いさびしいとても人間の堪へ難いもの〻やうに思はれたが、またその孤獨の大波はいつかすつかり其身を蔽ひつくして却て自己を埋沒して了ふやうに思はれたが、日を經るにつれて、世間とかれとの交渉、または差別と平等との相違、ひろい空間に獨り存在してゐるもの〻不動不壞の力、さうしたもの〻次第にかれの前にあらはれて來るのを感じた。自己ばかりになつたといふ心は、またはすべての現象を眼中に置かないといふ心は、實は自己が自然大になり、または却て總ての現象を現象とした形であるといふことに考へ及んだ時には、かれは不思議な氣がした。今まで夢にも知らなかつた心の境が突如としてかれの前に展けて來たやうな氣がした。

着くべからざるものに着き、染まるべからざるものに染まつたといふ反省的な考慮の淺かつたことに思ひついた時には、かれは却て着くべきものに思ひ切り深く着き得なかつた卑怯と小膽、または染まるべきものに徹底的に染まり得なかつた躊躇と逡巡とを發見した。そしてその卑怯と小膽、躊躇と逡巡とは果して那邊より來たか。那邊よりその種子を齎し來つたか。曰く、世間から、虚榮から、または自己が他に蔽はれた形から、欲する心から、求むる心から、中ぶらりんな好い加減なまた勞れた衰へた心の狀態から……。

袋を抱へて女はやつて來た。
別莊の近くに來た時には、女は旣に下駄をぬいで足袋跣足になつてゐた。
驚いて出て行つたかれの顏を見るや否や、
『まア、ひどい處ね。』
かう言つて、肩にした信玄袋をドサリとそこに置いて、さも〳〵疲れたやうに、緣側に腰をかけた。縮緬の腰卷にも、泥濘のはねの夥しく上つてゐるのをかれは見た。
『えらい處ね。それに車がないんですもの。』
『迎へに行く處だつたのに……』
『それに、こんなに遠いとは思はなかつたんですもの。』
かの女のわけて來たところは、草藪が深く繁り、路といふ路もなく、名も知らない黃い紫の花などの咲いてゐる處だつた。別莊の周圍には白い卯の花が靜かに一面に見わたされてゐた。かの女にはかれが何故にさうした山の中に一人埋れてゐるかゞわからなかつた。

その山の上では、哲太は辛さに孤獨の苦艱を行した。かれは薪水の勞も自らし、終日机に面して勞働し、夜は疲れてひとり蒲團にくるまつて寢た。それは Durtal の所謂沈默と勞働とに近い生活で、村の

から眞心を見せたりするやうな行爲に出づるのは、それは何うしたことか。それは何處まで本當であるのか。物質を除いて何處まで本當であるのか。『狐！　狐！　たしかに狐だ！　自分の行をさまたげる面をかぶつた狐だ！』かういふ風にかれは考へた。或時それを言ひ出すと、女は怒つて、

『なら、勝手になさいな。』

『だツて、さうとより思はれないからしやうがないぢやないか。』

『何うして？』

『言はなくつたツてわかつてゐるよ。』

『また、あのことを言ふんですね。……あれほど、もうそんなことはないと言つてゐるのに……。』

『何うだかわからない……』

『なら、勝手にする方が好い。』

かうした會話は、しかも何遍繰返しても爲方がないと知りながら、繰返さずにはゐられない言葉であつた。かれは女の歸つて行つた後の廢寺の中で、幾日も幾日も寬に對して、手を拱いて、默つてそれを考へた。

山の高原の中にぽつつり立つてゐる別莊の中に半年以上もゐた時にも、矢張女はやつて來た。停車場、田舍町、泥濘が深いので買立ての足袋も下駄もすつかり汚れて了ふやうな路、さうした間を大きな信玄

くといふ原理、それが常にかれ等の心の周圍を取卷いた。

『私がやつて來たのがそんなに迷惑なら、さう言つて下さい……。すぐ、今すぐ歸つて行きますから。』

わざ／＼やつて來てまだ一時間も經たない中に、二人はもう喧嘩してこんなことを言つて女は眼に涙を浮べた。かと思ふと、細君を傍に豫想してゐない、また男を他に置いてゐないかうした離れた土地での二人の生活は、都會での生活とは違つて、著しく互に深く心持なり氣分なり感じなりの一致してゐるのをかれ等は感じた。さうした時には、女はいつも丸髷に結つて來たが『かうしてゐると、ちつとも可笑しくはないわね。誰が見ても、奥さんに見えるでせう。』などと嬉しさうにして言つた。

かれはさうした形で女と一緒に歩いたさまを其處此處と繰返して思ひ出すことが出來た。野椿の花の赤く咲いてゐる野川の岸、丘から丘へと通じてゐる間を山合の溫泉場へと出て行く眺望の好い路、谷川を跨つて大きな朱塗の橋のかゝつてゐるすぐれた溪流に添つた路、時には秋の紅葉の美しく錦繡を織り成した山路を、かれ等は車にも乘らずに、互に心置なく話しながら樂しさうにして歩いた。時にはまた田舍から歸つて來る長い汽車を二人は睦まじさうに乘つて、他に何の苦勞もないやうに、邪魔も何もない戀人同士のやうに、辨當を買つたり茶を買つたりした。

しかも別れた後では、女は心がすぐ疑はれた。さうしてわざ／＼遠いところをやつて來たり、また心

哲太は自分の少年の頃のことなぞを頭に浮べながら、構内をあちこち歩いたが、世間の艱難に對するといふ心持も、何處に行つても辛い悲哀と不如意とがあるといふ同感も、胸に燃えひろがつた女への憧憬のために蔽はれて、いつものやうに強く起つては來なかつた。『さうした多くの人達に比べれば、まだ自分などは幸福だ……』かう思つて、かれは時計の針の既に發車時間を過ぎてゐるのをぢつと見詰めた。

『遅れるかね。矢張……』

かう訊くと、

『いや、來ますよ、もう。急行だで……。急行は遅れても、大したことはねえ。』

果して地を撼すやうにして、排雪機關車をつけた汽車はやつて來た。凄じい機關車の響、堆雪の中に張りわたる白い濛々とした煙、かれが二等室のクッションに頭を凭らせた時には、汽車は既にその小さな山中の停車場を動き出してゐた。

平野の溫泉場で暮した一月二月、山の廢寺の中に過した半年、そこでは殊に僧侶のやうな禁慾の生活を營むつもりでやつて行つたが、しかも一面はかれ自身から、また一面は女の方からそれを破るといふやうな形になつて、矢張思つたまゝの心の統一をすることが出來ずに終つた。即けば離れ、離るれば即

伴れて行つた。そこには、郵便脚夫と仲買の男と菓子や煙草を賣る少年とが、殘り少になつた火を圍んで、何か饒舌つてゐるばかりで、深夜の急行車に乘らうとするやうな客は、この小さな山中の停車場には一人も見當らなかつた。

かれは構内を彼方此方と歩いた。汽車の來るまでにはまだ時間が三十分以上もあつた。

少年は一度ぐつすり寢たのを、主人に呼起されて、そして此處にやつて來たらしく、『もうこんなところにゐるのは眞平だ……。明日はもう逃げて行くんだ。いくら落ちぶれたつてこんなところにゐて、夜中に起されるよりは增しだ……。寒い、寒い……。何てべら棒に寒いんずら？　もう少し火をくれても好さうなもんだな。』など〻愚痴を言ひながらいくらあらけてもあらけ榮えのしない火を火箸であらけた。

『寢起きだから寒いんずら？』

『あ〻、もうよく〳〵いやだ……。每晩、この急行に起されるんだが、とてもたまらねえ、命にはかへられねえ。』こんなことを言つて、がた〳〵身を戰はせた。

『おい、敷島一つ呉れ。』

かう言つて、哲太はその少年から煙草を一つ買つた。

『それ、矢張、起きて來れば、お客樣はあるにはあ。』

かう笑ひながら郵便脚夫は言つた。

戀に燃えた身を亡ぼして了ふやうなロマンチックな幕を演じたかも知れなかつた。再び盛に降り出して來た粉のやうな雪は、チラチラとその電燈の柱の周圍にかゞやいて、下には凄じい谷の鳴る音が轟々とかれを脅かすやうに聞えた。

しかしその危險な谷に沿つた道も、凄じい怪物の吼えるやうな瀨の音も、または寒い寒い錐のやうに肌をさす夜風も、誰も通らない深夜の闇も、かれの心に影のやうに添つた女のために、かれはさびしいとも辛いとも何とも思はなかつた。かれは唯明日逢はれる女の明るい顏をのみ頭に描いて、滑る靴を踏みしめながら、急いで停車場の方へと向つた。

此時には、かれには最早妻の英子もなければ、子供達もなければ、一家離散の悲慘な光景もなければ、または失はれた精神、亡び行く半生の慘たる光景もなかつた。再びかうして意氣地なく捉へられて引摺られて行く弱い心を鞭打つやうな念は、さつき宿を出る時にはちよつと起つたけれども、それとて何等大きな反響を心の上に齎さなかつた。却て女が、その捨て去らうとした女が、女の一顰一笑が、かれに或は生を、或は死を與へるものであるといふ風に考へられた。そして自分の取つた自脈が、消極的な心が、反省が非常に愚かな馬鹿々々しい行爲のやうに思はれ出して來てゐた。あの一つの心をさへ把握することが出來ないで、自分は何をしやうとするかとすら思つた。

一つ一つ傳つて沿つて歩いて行つた電燈の柱は、やがてかれを深雪の中に八分通り埋つた停車場へと

『なアに……』

かう言つて、時計の蓋をあけて見て、『まだ一時間足らずある。それぢや、それまでに一本飲むかな。』

女の方へ歸るといふ心が、何があつても兎に角女の顏だけは明日見ることが出來るといふ心が、急に旅行中消極的にしよげてゐたかれを力附けた。かれは旅行案内の細かい時間を繰つた。幸ひにそれは急行車であつた。百里に近い距離をかれは時の間に歸ることが出來るのを嬉しく思つた。尠くとも、明日の午前中には、女の顏を見ることが出來た……。

『何うしても歸るの？』

その中年の女は、かれに對してある目的を持つてゐたらしく、頻りにかれを引留めやうとしたが、何うしてもかれがその決心を改めないので、失望したやうにして言つて、そのまゝ酒を取りに帳場の方へと行つた。

あらゆる邪魔も、あらゆる障礙も、又あらゆる反省も、何も彼も女に向ふ心に面しては、日に對する氷のやうに忽ちにして解けて流れた。かれは寒さを凌ぐ酒を大急ぎで飲んで、そしてそこから出かける支度をした。

溫泉場から停車場までの間には、處々電燈の柱が並んでゐたから好かつたやうなものゝ、もしそれがなかつたなら、かれは凍つた雪道に滑り、または一歩踏込めば半は身を沒するやうな深雪の中に陷つて

室に歸つて來て、かれはひとりで一二本の酒を飮んだ。絶えず押寄せて來る戀しさを押へながら、または一つ一つ思ひ出されて來るそのをり〳〵の笑顏を押退けながら……。しかしかれは次第にさびしさに堪へ難くなつて來た。またかうして企てられた冬の旅の無意味が繰返されるやうになつて來た。

火鉢狀に凭りかゝつて、頻りに旅行案內を見てゐたかれは、

『今夜、十一時に、此處を通る汽車があるんだね。』

『えゝ。』

中年を過ぎた卑しい笑ひ方をする女は、かう言つて傍に寄つて來たが、『あるけど、寒くつてな……』

それには頓着せずに、かれは突如として言つた。

『それぢや、僕はその汽車で歸ることにするからね。』

『お歸りになる？ その汽車で？ お泊んなさいよ、今夜はゆつくり……。寒くつてしやうがないよ、夜中の汽車なんか……』

『いや、歸る。忘れてゐた用事を急に思ひ出したから。』

かう言つて、かれは逸早くも其處等に散らばつた手帳や鉛筆などを取片附けにかゝると、

『何うしてそんなに急に思ひ立つて歸るつていふのよ。いやな人ね。泊るとばかり思つてゐたのに。寒いよ、夜中の汽車は？』

停車場からさう遠く離れてゐない深雪の中の或る溫泉場に泊つた時には、女に對する戀ごゝろが、意味も理由もなしに募つて來て、何うしてもその眼を、眉を、表情を見ずにはゐても立つてもゐられないやうな氣がした。當分離れてゐるために企てられた旅であり、また心を他へ移すためには全力を擧げなければならないといふことをちやんと知つて居ながら、しかも何うしても押へることが出來ないほどの力を以て迫つて來た。

遠く堆雪の中を一二里も木管で引いて來てゐる湯は、途中で冷めて、溫くなつて、長い間體をその中につけてゐても、容易にあがつて來ることが出來なかつた。湯は玉のやうに透徹つて綺麗であつた。小さな樋から落ちて來る湯、それでもそのあたりはいくらか溫度が高いので、成るたけそこに體を寄せるやうにして、山中のさびしい冬の溫泉場を頭に浮べたりしてゐたが、その時分から、離れた女に對する心は次第に細かくつよく波打つやうに募つて來てゐた。さびしい冬のひとり旅ではありながら、實は片時も離れられない女の面影を一緒に伴れて來てゐるかれは、何につけ、彼につけ、三味線の音を聞くにつけ、柔かな女の髮の線を見るにつけ、またはかうした靜かな冬の溫泉の詩趣あるさびしさを味ふにつけ、日に日に、次第にその眉目の色濃くなつて來るのを感じた。湯から上つて來た時には、そこにかけてある大きな鏡に、かれの姿と並んで、女の笑つて立つてゐるのを見るやうな氣がした。

たさまが、混雜とかれの眼の前に映つて見えた。『唯、一つあるばかりだ。あとは何も彼も皆空想だ。』かうかれは思つて頭を振つた。

そこは小さな停車場であつた。雪は既に人家の軒近くまで深くつもつてゐたが、さつきから發車しないでゐるのを不思議に思つてゐたが、ふと氣がつくと、乘客の下りて行く氣勢がして、

『困るな。此處は何處だえ？　Ｋかえ？　こゝには町といふ町も何もありやしない。』

『駄目なのかな。』

『何でも、先が埋つたさうだ。』

『困るな。』

こんな言葉が其處にも此處にもきこえた。哲太も起つて行つた。

野も山もすべて眞白に深く雪に埋められてゐた。成ほど小さな停車場で、今度新に軌道が敷かれたために、取敢ず間に合はせに出來たものらしく、掘立小屋のやうな中に、カン〳〵炭がおこしてあつたが、驛員達は困つたやうな顏をして降り頻る雪の中を彼方此方へと往來してゐた。『寒い、とてもたまらん。』こんなことを言つて、後には乘客達はその停車場の中の火の周圍に集まつて行つた。

ポツケツトの中の封筒は、をり〳〵哲太の手に觸れた。しかし此時には、もうかれはその手紙を外國に出さうとは思はなくなつてゐた。

かれはもう少し別なことを書いてやりたいと思つた。かうした苦惱を傳へるのには巴里は餘りに遠すぎるやうな氣がした。また今迄この友達にかうした苦惱を告げてやつたことはないとも思つた。この友達とはかれは長い間一緒に同じ道を歩いて來た。藝術の苦しみも、人生の苦しみも倶に苦んで來た、それに、年齢も一つ違ひなので、境遇からカルチュア、心持、氣分、すべて似たところを持つてゐた。しかし互に心を合はせてゐながらも、互に相手を深く信じ合つて、言ひたいことも七分まで言へばそれで完全に理解が出來るので、これまでにもつひぞさうした苦しみを打明けたことがなかつた。またその友達の方にしても、矢張さうであつた。友達が苦しみに邂逅した時にも、『人生の艱難は何うも爲方がない。』かう言つたやうな表情をして、二人とも默り合つてしまふのが常であつた。

かれは其處を出る時、その封筒をポッケットの中に入れた。

寒いのでポッケットに手をよく入れる。その度にその封筒に觸る。と、巴里の町の賑かなさま、大きな、層をなした建物、噴水の見事な公園、後期印象派の繪畫の並んだ畫堂、女の姿を前にしたモウパッサンの像のある小さな公園、郊外の明るい日影に働く農夫達の群、ルウアンの大きな藝術家の邸宅の址、さうしたものが、女の顏と、涙と、またはその何うにもならない心持と、眼の前に展開された風雪の野と雪に埋もれた村落と一緒になつてかれの頭を徂徠した。

つゞいて過去になつたさまざまの思想や、思想につれて起つた事件や、その思想の土崩瓦解して行つ

かねて持つてゐた横封の封筒に入れて、その上に、巴里の宿所とSの宛名を書いてそしてそれを傍に置いた。火燵板の上には丸行燈の灯が靜かに落ちて、外では風雪の絶間を波濤の音が縫つた。

明日は早くこれを出させやうと思つて寢たが、しかしかれはそれを女中に渡さうとはしなかつた。かれはその横封の封筒を風呂敷の中に包んだまゝで、その海岸の宿から出て汽車に乘つた。汽車に乘る時にも、ちやんと今朝切手まで貼つて置いたのであるから、構外のポストに投り込めばすぐ投り込めたのだが、何となく書いてあることが餘りに感傷的にすぎるやうな氣がしたので、そのまゝ風呂敷の中からそれを出さうともしなかつた。かれはまた旅をつゞけた。

ある田舍で午飯を食つた時にも再びそれを思ひ出して、『感傷的だツて、何だツて構はない。折角書いたんだ……。それに無沙汰もしてゐるんだ。』かう思つて、風呂敷包の中からそれを出して、そのまゝ火燵板の上に置いた。

女中は膳を下げながら、

『これはお出しになるんですか。』

『いや、待つて呉れ。』

かう言つてかれはそれを遮つた。

君は自然に家庭から出て行かれた。しかし私は家庭から獨り自ら出て行かなければならない放浪者でした。私は何も彼も亡くして了ひました。得やうと思つて却て亡くして了つたのでした。それにしても、あの大川端の水のほとりで、初秋のあざやかな水に灯のうつるのを君と倶になつかしんだ頃のことが思ひ出されずにはをられません。あの頃はまだ私も無邪氣でした。何も知りませんでした。異性を唯の美しい對象とのみ思つてゐました。欲することは必らず得られ、求むるものは必ず來ると思つてゐました。それにしてもあの美しい人は何うしたでせうか。一度はあの川の畔にも行つて見たいと思ひますけれど、今は、今は、もうさうした心の餘裕を持つてゐなくなりました。何と言つて好いか、『時』の力と言つて好いか、それとも人生の底の底にある或物の消長と言つて好いか、兎に角さうしたものに不斷に惱まされて、自分で自分がわからず、さうかと言つて、そのわからぬ自分を何うにかしなければならないといふやうなあはれな漂泊者になつて了ひました。

S君。

しかし、これも止むを得ません。自分で何うかする他、爲方がありません。かういふ有樣なので、從つて、此頃は舊友の誰にも逢はず、Y君、N君、K君などとも疎く暮してをります。今夜は靜かな宿で、波の音が微かに聞えてをりますから、それを枕に靜かに寢やうと思つてをります。それではまた――

年足らずの月日が經ちました。S君、君は新に修業をするつもりでフランス行を思ひ立たれた。勇ましい心だ。私も萬事を捨てゝ一緒に出かけて行きたい位の君のフランス行でした。あのHの溫泉場で最後の別れを惜しんだ時、私は醉つて、『僕はこれから異性の研究だ。』かう痩我慢のやうに言ひました。と、君は靜かな落附いた例の態度で、『それは面白いね……異性の研究、それは面白いでせうね。』かう重ねて言つた。それを覺えてゐられるでせうね。

異性の研究、今、考へて見ると、我ながら馬鹿なことを言つたものです。研究？ 私にその研究が出來たでせうか。また、さうした魂の問題の中に赤手で飛び込んで行つて、殊にわれ等藝術を旨とするものゝ單純な心を以て、手疵を負はずにその中から引返して來ることが出來るでせうか。研究？ 大膽にも程があるとあの時君は思はれたに相違ないのです。S君、君に別れてから、君が外國の文化の空氣に觸れ、新しい果實を劈くやうな藝術の空氣を嗅ぎ、新興理想派のすぐれた作品に親まれてゐる間、私は性の濁つた溝瀆の泥に塗れ、火と水のやうな地獄の釜の中に漂ひ、冷熱の往來する心の巷に戰慄しつゝ、其時分はまだいくらか持つてゐた精神をも半は失つて了ふやうな心の境遇に陷つて了つたのです。研究どころか、却つて此方が解剖臺の上にあげられて、まごまごすると、かゞやくメスの光の下に生命を失はうとしたのでした。

S君。

『さうかえ、いつ來るやうになつたんだえ?』

『つい此間、まだ二月位にしかなりますまい……。大旦那さん、わかつてゐるもんですからね。それて、入れることになつたんですもの?』

『ぢや、さつき見た、色の白い、何處か婀娜ぽいと思つた、背の高いあれがさうだね。』

『え、さうです。』笑ひながらばた〳〵と女中は階梯を下りて行つた。

哲太は火鉢に凭れながらひとりでその三味線の音を聞いた。

（S―）

拜啓　Kの停車場で別れてから、一度手紙をさし上げたいと思ひながら、ついその機會がなくて、今日まで御無沙汰を致しました。香港から一通、マルセイユから一通、それに巴里から一通、君の方からは常に消息をきかせて下すつたのに、私はそれに酬ゆる手紙らしい手紙もさし上げず、酒間になぐり書にした連名の端書、てなければ卽興の歌を亂暴に書いた端書、まことに濟まないと思ひながら、その中細かく落附いて書いて出さうと思つて、横封の封筒は旅に出る時にはいつもちやんと用意してやつて來るのでした。

しかしさうした中にも月日は用捨なく經つて行きました。もう、君が其方にお出でになつてから一

かう言つてとめた。

それにも拘らず、明日は行けるところまでは行くつもりで、その準備を宿に賴んで置いて寢た。ところが、その夜は更に凄しい大風雪で、今度は先へもあとへも行けないやうになつて了つて、止むなくかれはまたその古い山裾の町で二日を過した。

火燵があつて、温かではあつたけれども、すつかり閉め切つた雨戸のあかり取りの窓は小さく、室の中は薄暗く、少しのすき間からも風雪は粉のやうに細かく氷つて吹き込まれて來た。ギシ〳〵と軋む階梯、長い廊下の隅にある風呂、旅舍の人達のゐる室には、灯の晝もついた神棚があつて、若い主人夫妻は雪に包まれた旅客を親身の人でもあるやうにして迎へた。

夜は三味線の音が靜かに何處かできこえた。

來た女中に、『藝者でもゐるのかえ、此處には?』

『いゝえ。』

『ぢや、誰が彈いてるの?』

『若いお上さん。』

『上手だね。』

『だつて、小千谷に勤めてゐたんですもの。』

る。又それも爲て出來ないことではない。しかしかれの考へでは、それは一種かれの自滅である。或はそこまで着いて行く方が好いと言ふ人もあるかも知れないが、またそれは自滅どころではない、却てその方が本當だと言ふものもあるかも知れないが、少くともかれ自身に取つては、それは自滅と沒落とを意味してゐる。ある旅舍では、『馬鹿な奴だ。……まだ、そんなことを思つてゐる。貴樣は昔は快活な青年ではなかつたか。百里の道を草鞋に踏み躙つて、猶有り餘る客氣は天を衝くやうな青年ではなかつたか。女などは殆ど眼中に置いてゐない青年ではなかつたか。』かう自ら叱咤して、寒い、寒い、錐にでも刺されるかと思はれるやうな朝風に橇を走らせて、深雪の中を五里以上も山の中に入つて、古びた旅舍の一間にさびしい一夜を過した。

それはNといふ高い山轡の裾にあるやうな町で、その附近を流るゝ川の奥は、青年の頃に讀んで憧憬した『北越雪譜』といふ本の中にある深山窮谷の中であつた。そこでは住民は終夜榾火を焚いて、その傍に、叺の中に入つて、その上に筵を幾枚も重ねてそして僅かに夜眠の暖を取つた。高い、高い崖の下を流るゝ深潭、そこに春を下して鮭を獲るのを生計のたつきにするやうな生活、今の世でも、まだそこにはいくらもさうした文化の影響は及んでゐないといふことであつた。かれは出來るだけ深く、その雪の谷の中に入つて行かうと思つて、それを宿の主人に訊くと、

『今ぢや、とても入つて行けやすまい。』

かれは人間の個々の對立といふことを深く思つた。また自己の心、唯心一つが、何んなにいろ〳〵な悲喜劇の形となつてあらはれて來るかを思つた。他と自とが離り合ひ、また離れ合つた形は、到底普通の心理では解けないのをかれは感じた。そしてこの細かい心の苦惱の周圍を精神上にも物質上にも今は全く紙衣であるかれの境遇が取卷いた。

かれは何うかして自分の生活を立て直さなければならないと思つた。餘りに世間にまたは愛慾に着きすぎ染まりすぎたからである。また餘りに尖鋭な神經を異常な心理の中に突き込んだからである。かれは旅から旅へと出て行つた。

しかし、かれは矢張戀の重荷を負つてるドン、ヂャンであつた。雪の深く降り積る溫泉場、排雪機關車の轟音を漲らして行く積雪の中の停車場、怒濤の凄じく打寄せる海岸のさびしい旅舍、何處に行つても、離れ難ない女の情が絡み着き纒はり着いた。振り放つても、女は片時もかれの心を離れなかつた。

かれはそれを强ひて押へた。その方が、女に離れて行くやうにする方が、自分のためでありまたかの女のためでもあるのである。自分が離れさへすれば、先の男も疑心暗鬼を去つて、自然に女の心を正當に、すなほに受け入れるやうになるに相違ない。そこにかの女の幸福がある。女を殺して自己も死ぬほどの愛情が自分にあつたにしたところで、妻を捨て、子を捨てなければ何うにもならない境遇にゐるのであ

しかし自己を捨てゝ飜つて客觀的に英子の身の上から考へて見ると、さうした快樂は、かの女を沈滯した空氣から救ふには相違なかつた。かの女はその爲めに女らしい生氣と色彩とを帶びて來るであらう。今までのやうな動かない心ではゐられなくなるであらう。世間で言ふ意味とは違ふが、人間としての本當の幸福を感じるであらう。或はそのためにその生命を失つても悔いないであらう。もしまた英子が果して強い聰明な女であるならば、一度溺れかけたその深淵から何うやら彼うやら浮び上つて來るであらう。そしてその浮び上つて來た形は、人間の價値から言つて、今の英子よりも數等すぐれたものであるには相違ない。しかし、夫は自分の妻をしてさうした所行を敢てさせることが出來るであらうか。默つて、單に價値を進める所以だと言つて見てゐられるであらうか。また、大勢の子供達の母親の手から離れて行く慘めさを見てゐられるだらうか。かれ自身にしても、既に一度その苦惱を女から嘗めさせられた。とても再びそれに堪へられないのはわかり切つてゐる。しかして今ではそれを英子から嘗めさせられないとは限つてゐなくなつてゐる。その自由は、權利は、今は移つて英子の心にあるのである。曾て夫から踏まれたり蹴られたりした其權利は――。

かれは夜になつてから、髪結の許に出かけて行く英子を想像した。そこには何があるかわからなかつた。髪結の女乃至その亭主は、かの女にいかに快樂に滿ちた世間を見せるかわからなかつた。またかの女の出て行く交際の範圍に、何んな惡魔の手が潜んでゐるか知れなかつた。

外面からも內面からも誘惑されて行く量に富んでゐるのである。それに、人間の根本から言つても、異性に要求を持つてゐる心の多いものだけそれだけ、皮膚の色も美しく、姿形も艶でやかに、髮や着物などにも彩や影を添へて來るものである。哲太は深く考へずには居られなかつた。心の複雜した變化と狀態とに長い間苦しんで來たかれは、更に深く異常な細かい心のあらはれを凝視した。

かれは世間に澤山にあるさうした心に捉はれた女――役者とこつそり小待合に媾曳きする妻、力士と郊外の料理店に快樂を貪る未亡人、始めは亭主の遊蕩に對する反抗から出立して、段々異性に對する興味にはまつて、遂には曾ては生命であり自己の大切な分身であつた大勢の子供達をすら捨てゝ、深い性慾の淵に陷つて行く細君を想像した。またさうした女達が大抵は中年以上、今まで性慾に無自覺で盲目であつたものに多いのを想像した。從つてその浸つて行く快樂は、生命を亡ぼしても猶悔いないほどのものであるに相違なかつた、相手の惚れてゐる惚れてゐないなどを穿鑿してゐる暇のないものであるのに相違なかつた。例としてさうした女達は、男から金を捲き上げられ、物品を捲き上げられ、最後は社會上の名譽までをも破壞されて、そして始めて死乃至覺醒に面して立つた。

さうした女をかれは英子に當てゝ考へて見た。さうした場所に、又はさうした深淵に……。想像は想像を生んで行つた。かれの過去の所行は、當然かれの妻をして、さうした女の種類の一人たらしめずには置かないやうな氣がした。かれはKの所謂『油斷ならない』以上の戰慄を總身に感じた。

もあるものかなア。」と思つただけであつた。そのKの言葉が、その2と3の悲劇を散々繰返して、遂には松原の中の病院の一室に妻妾二人に介抱されながらさびしく死んで行つて、今はその遺骸も全く土に歸して了つたKの言葉が、不思議にもある確とした眞理と事實とを以てかれの胸に蘇つて來た。そして一方、その言葉は、Kがいかにその當時2と3の苦惱を戰つたかといふことをかれに思はせた。

女が哲太の前にその女の獨立と權利を儼として主張してゐると同じやうに、英子もまたかれに對して孤獨が孕んだ獨立と權利とを主張し始めたのであつた。かれの苦しみは更に一つの新しい影を添へた。

英子はかれが晩酌をすまして床に入つてから、三日おき位に、ソッと着物を着更へて、近所に住んでゐる髮結の許に出かけた。「矢張、日本髮に結つて綺麗にして置く方が好いでせう。」こんなことを皮肉に言つて、そしていつも出かけて行くが、さうした心の妾の萠して來たといふことは、單に身じまひの爲めと言つてすまして居られるであらうか。また單にかれの持つた他の女に對抗するため、即ち哲太自身に媚びるための心のあらはれと見てすましてゐられるだらうか。そしてさうした心を英子に起させたのは、果して誰か。誰の咎か。誰の罪過か？　または自然の大きな皮肉か？

夫に自分を美しく見せやうとする心を一轉換すれば、即ち浮氣な心になるのである。また、客觀的に見て、夫に綺麗に見える細君は、大勢の誰にも矢張綺麗に見えるのである。危險の分子が多いのである。

つて見るひまもなく過ぎて來たのであるだけそれだけ、この丸髷とカセカケの復活は、哲太に種々なことを思はせた。哲太は默つてその丸髷姿を見た。

淺猿しい悲しいやうな氣がすると同時に、異性を憫む念が盛んに起つた。哲太は默つて自己の妻を、一生の伴侶である妻を、さうした孤獨の狀態に陷いれて行つた自分の罪過を思つた。またかれは其處に世間に無數にある兩性の二つの力の悲しい扞格を思つた。つゞいてかれはさうした悲しい扞格から自然に孕まれて行く無數の悲劇を想像した。

普通の家庭には、殊に日本の保守的な家庭には、さうしたことは尠いであらう。さうした復仇的悲劇は絕えてなくして僅に有るものであるであらうが、狹斜の巷などには、他から他へと移つて行く心は決してめづらしいものではなかつた。否、外國の小說などには、さうしたシインが到るところにあるのをかれはかねて讀んで知つてゐた。

哲太にはゆくりなく不治の病を宣告された親友のKが妻妾を同棲させた頃のとが思ひ出されて來た。

その時分、Kは、

『亭主がいろんなことをして見せると、細君もそれに鍛鍊されて、思ひもかけない性慾を發展させて來るもんだよ。油斷がならないよ。』

かう言つたことがあつた。哲太はその時分はまだその言葉が本當にはわからなかつた。さういふこと

かれはかれの嘗めた戀の苦惱が、橫には歷史を、縱には人生を貫いて、徒爾ではなしに、微塵數の心の中にはつきりと連續してまたは獨立して浮んでゐるのを見た。戀の苦しみに對する廣い同情はかれに淚を誘はずには置かなかつた。

英子の此頃の狀態も哲太の胸に悲しい或る暗示を與へた。英子は以前のやうには泣いたり崩折れたりしてばかりはゐなくなつた。母を亡くした悲哀や、女に對する嫉妬や、焦燥や、さういふものばかりにこだはつて悲觀してはゐられないやうに見えた。自分も女として、妻として、または母親として立派に獨り立つて見せなければならないと思つたらしかつた。殊に女としての目覺めが著しく眼に立つた。

旅から歸つて來た時などに、英子がいつもに似合はず、大きな丸髷を水々しく結つて、派手なカセカケを際立つて見せて、そして莞爾として出て迎へる形がかれに不思議な印象を與へた。否それればかりではなかつた。此頃はかの女はつとめて扮裝を亂さぬやうにした。今までは隅の方へ押やつて、滅多に顏を映してても見たことのない鏡臺を綺麗に拭いて、櫛も揃へれば、化粧品も總領の娘のだけ別なのを買つて來たりして、着物も藏つて置いた派手なのを出して着た。英子は幼い頃は下町の小さな店に育つて、娘時代には、何方かと言へば派手なつくりの方であつたが、子供を持つてからは、すつかり山手の細君風の庇髮になつて、家事と子供の養育に忙殺されて、つひぞ櫛や、根がけや、簪のたしなみなどは振返

な印象をかれに與へた。

Durtal はその修道院の中にある、森のかげの小さな清い泉に對して、その渦紋をなして流れ出して來てゐるさまに靜かに見入つてゐる。そしてその中にかれの經て來た人生を發見してゐる。水紋は湧き且つ日に光つてキラ〳〵と輝いてゐる。Durtal はぢつとそれに見入つた。

その遠い遠い外國にある清い泉、その中に哲太も矢張そのかれの人生を發見したやうな氣がした。その遠い泉には白い雲の影が靜かに徂徠した。

哲太はまた奈良朝時代の男女のさまを頭に浮べた。曾て行つて見た西の京のさびしい大きな寺、ブロンズの佛像、それは今は徒らに遊覽者の心を惹くにとゞまつてゐるけれど、また深い塵埃と土の苔とし め切つた扉の中とに閉されてゐるけれども、昔は男女の苦しい戀の涙や、願ひや、煩悶が盛んな香煙と唄音とに雜つて、無限にその前に灑がれ、開かれ、祈られたのであつた。かれはまた一國の帝王が皇后以下百官を引いて、華嚴經のために、あの大きな毘盧沙那佛を開眼した時のさまを想像した。その時代の戀ごゝろは、男女の涙は、苦悶は、歌となつて、千有餘年の後の今日も猶もわれ等の耳と心とにある。哲太はさうした一代を擧げて宗教に赴いた人心のかげに、淫蕩な、自由な、または魂の亡びるやうな幸さが、または生命を捨てゝも猶戀の情に醉ふことを惜まなかつたやうなやさしさが、未曾有のすぐれた悲しい美しい繪卷を擴げてゐることを思はずにはゐられなかつた。

だ。それなのに、さうした弱い自賑を取るといふことは、自分が意氣地がないからである。お前は曾て强かつた戰鬪の心を忘れたのか。勝たなければならない身であるのを忘れたのか。それを何處に失つて了つたのか。―かう思つて、女から、苦惱から、家庭から遁れやうとする心を鞭打つて見たが、しかしそれは僅にぼつと燃え上つた火のやうなもので、やがては消えて、濡れた落葉の唯ぷすぷすと燻つて烟を立てゝゐるやうな狀態になつた。かれはもう燃えてばかりはゐられなかつた。燻つて末は消えて行く人間の身の上をも考へなければならなかつた。

かれはその周圍を見廻した。過去を振返つて考へた。いろ〳〵なものが、今までとは漸く違つた形と姿とを持つてあらはれて來るのを見た。弱者の一生として憫み且つ呪つた亡兄の生涯も、決して徒爾ではなかつたやうに見え出して來た。また一生を奉仕の生活に送つて悔いも嘆きもしなかつた叔父の一生なども貴く思はれ出して來た。

Durtal の入つて行つた中世紀の修道院の中には、國に血を流した革命があつたのも知らず、女の體がいかにつくられてあるかも知らず、世間にいかなる無數の悲喜劇があるかも知らず、死ねば棺にも入れずにそのまゝ肉體を冷めたい土に埋めて了ふ人達がゐるのであつた。また互に名をも記せず、そこに入つて來るまでの前生の何なるかを問はず、沈默して、勞働して、そして神の前に手を合せて死んで行く人達があるのであつた。かういふ人達と自分乃至世間の人達の送つて來てゐる生活との對照は、不思議

感傷的氣分が代つてその空所を領した。精神上にも物質上にも紙衣の悲哀が犇々と迫つて來てゐた。殊に、かれは家庭にゐることの辛さを覺えた。書齋にある籐椅子、机、筆、原稿紙、楣間にかゝげた額、重荷が更に年々に重くなつて行く子供達、妻の英子の孤獨を嘆く涙の顏、さういふものが片時もやむ時なく細かにかれの疲れた精神を刺した。かれも矢張女と均しく、十年もかゝつて、熱い心をそゝいで、到るところで大小無數の手傷を負ひながら、何一つ把握し得たものゝない放浪者となつた。

それに、『時』がまたかれを脅かした。新しい時代がかれを脅かした。かれはかれが男女の苦痛と歡樂とに浸つて漂つてゐる間に、いつの間にか自分の時代の過ぎ去つて行くのを見た。常に自力を以て誇りとしたかれも、今は誰か大きな手で救つてでも異れるものがなければ、このまゝ烈しいまたは廣い潮流の中に永久に流されて行つて了ふやうな氣がした。縋るべき一握の藁すらないやうな氣がした。

かれは一家離散の悲慘な光景を眼の前に描いた。子供達は丁稚なり給仕なりになる。妻は幼い兒を伴れて涙顏乾く日もなき生活を送る。かれはかれで、抱いてゐた志をも、思想をも、精神をもすつかり失つて了つて、喪心したものゝやうに現實の塵埃の中に埋れ去つて了ふ。かう思ふと、かれは悲しかつた。自業自得とは言ひながら、それは餘りに悲し過ぎる末路だと思つた。かと思ふと、心の一方では、それに反抗する念が暴風雨のやうに起つた。『俺はわるいことをやつたのではない。人間のやることをやつたの

のであるといふ風に考へ出して來てゐたが、それと同じやうに、女もまた前の男の怨恨が執念く自分の體に絡みついて來てゐるのを感じた。をりをりかの女は、毒藥を仰がうとしたその男に追懸けられる夢から覺めた。その男の思ひだけでも、とても自分の戀は滿足には成り立たないやうな氣がして來た。

それに、二兎を逐ふものは一兎を得ずといふ心理も、間接に、人知れずに、かれ等の周圍に動いてゐるのであつた。いくら、本能の力が強いと言つても、體を、魂を亡ぼすやうな目に逢つては、しかも度々逢つては、遂には人間はそこから引返して來るものである。從つて女が惚れた男の薄情と虛僞から目覺めて來る心理は、直ちに、また的確にその苦惱から脫れやう脫れやうとする哲太の心理にも通じて續いてゐるのであつた。

哲太がDurtalのやうな孤獨を痛感し始めたのはこの頃からであつた。それに、その戀の交錯の苦惱を別にして、生活の方面からも、種々なものが哲太を襲つて來た。哲太はその時分、長く勤めてゐた社をやめることになつた。またかれの心境にも、生命の浪費に浪費を重ねたために沈滯と疲勞とが大浪のやうに上から覆ひかぶさつて寄せて來た。デカダンから救はれたと思つたかれは、更に如何ともすることの出來ない魂の暗い壁に突當つて、何も彼も失つた人のやうにして、暗い街頭を步かなければならなくなつた。

氣が附いた時には、かれはいつの間にかかれの持つたVital Forceを何處かへ落して來てゐるのを感じた。また精神の一部をも失つて來てゐるのを感じた。何を見ても興味を惹かなかつた。そして性來の

て、到底その本當の心を傳へることが出來なかつた。右も左も皆暗い壁なのをかれは感じた。

女の心は右し或は左した。惚れた男とは何遍か離れては逢ひ逢つては離れた。惚れた弱味のために女が男に入揚げた金も少しではなかつた。そのために女の生活方面は荒廢した。家人と女との間の爭鬪も日夜絕えなかつた。

女はその度々の苦惱、それは哲太の苦しんだのと同じものであるが、その苦惱から浮び上つて來る度に、心を哲太の方へ寄せて來た。女は次第に人の妻となることの出來ない身、または世間の多くの女のやうに子供を持つことの出來ない身、その相手にする異性は大抵遊蕩兒か、でなければ色魔か、でなければ年を取つた人でなければならない身を痛感して來た。虛榮から性慾に目覺め、更に眞實に目覺めなければならない時が來た。

『二兎を逐ふものは、一兎を得ずといふことがあるよ。よく考へて見なければ駄目だよ。』かう度々哲太は言つた。また哲太は女が以前或る男につれない行爲を敢てして、殆どその男をして自殺するまでに至るほどの苦惱を嘗めさせたことがあつたのを指摘して、その報酬の種子も女のその苦惱の中には雜つてゐるといふことを言つた。此頃では、哲太は自分の苦惱が、思ひのまゝにならないことが、不自然な結果に墮ちて行つた形が、あの平野の僧の妻になつた女に對して曾て行つた無自覺が自然に酬つて來た

馬鹿しい。本當に子供見たいだ……』かう口では事もなげに言つて了つたけれども、その涙のかげにはかうした社會にゐる女の眞の悲哀と孤獨とが隱されてゐるのを哲太は思つた。かれ等は親の手から夫の手に移り夫の手から子の手に移る平々凡々な多くの世間の細君の持つたものすらも持つことが出來ないのではないか。稼業の爲とは言へ、またはさうして渡つて來た習慣のためとは言へ、心にもない虛僞を言ひ、火と水との中を通過し、惚れた男にはステッキで撲たれ、眞心の浪費にのみ日を送つて、さうして何一つしつかりと把握したものはないではないか。女は女で、哲太の家を訪問した時のことなどが際限なく胸に浮んだ。對者として英子の前に出たかの女は、いろ〳〵な方面から壓迫を感じたが、中でも殊に、多い大勢の子供が母親の味方になつてゐる形に一番強くかの女は壓された。

『奥さんなんか、味方が多いから……』

かう言つて女は歔欷した。

妻を捨てなければ、子を捨てなければ、いくらかの女を愛したからとて、それは本當にかの女を愛してゐるのではない。ふとかう思つた哲太は、自分がいかに無理なまたは不自然な愛慾に捉へられてゐるかを思はずにはゐられなかつた。一夫一妻の理がまた強い力でかれを襲つて來た。

『矢張、女は夫を持たなければうそだ。』かうした言葉が口に上りかけて來たが、また現にさうしたことをこの前にも度々言つたが、それを口に、言葉に言ひ現はして了つては、其處に一種の厭味が出て來

女は涙を流した。不思議に思はれるほど、男の身の哲太にはちよつと理解の出來ないほど涙を流した。
『何うしたんだえ？　一體……』
『ねえ、多喜子ちやん、もう叔母さんのところへ來ませんね。矢張、母さんのところが好いのね。』
哲太の言葉には答へずに、こんなことを女は言つて袖で眼を押へた。
『何うしたのさ？』
『なァに、子供見たいなことを言つてゐるんですよ。』かう言つて、女の母親はその話を哲太にした。
それはかういふ話であつた。今朝窓のところで、女が鏡臺に向つておつくりをしてゐると、其處へ女の兒が見に行つて遊んで居た。
『今日はお家に歸るのね。また入らつしやいね。』
かう何氣なしに女が言ふと、女の兒はちよつと考へるやうにして默つてゐたが、『もう來ないのよ。だツて、母さんに叱られるもの。』と言つた。子供だから思つたまゝを正直に言つたのである。それが女の胸を深く刺した。
相手が子供であるのをも忘れて了つたかのやうに、かの女は夥しく激昂した。流石に女の兒には別にひどくは當らなかつたけれど、自分で自分を悲觀して、今朝からあゝして涙ばかりこぼしてゐるといふことであつた。哲太も女を憫まずにはゐられなかつた。『何んだ、そんなことで泣いてゐるのか？　馬鹿

は言つたが、英子にはそれは單に戯談とは思へなかつた。歸る日に歸つて來なかつた時には、英子はひどく心配して、わざ〳〵哲太にそれを迎へに行かせた。

女の兒の口から女の狀態を何彼とさがし出して聞く英子と同じく、女も矢張女の兒から種々なことを訊いた。其處にも女同士の相互の暗中模索があつた。それに、その女の兒が怜悧で、可愛い盛で、女にもよく懐いたが、しかも母親のことは遂にその小さい心から離れなかつた。母親が心配で堪らないやうに、矢張女の兒は絶えず母親のことを思つた。何んなに女からちやほやされ、めづらしい玩弄具を買つて貰ひ、賑やかなところへ伴れて行つて貰ひ、撫でるやうにして可愛がつて貰つても……。

哲太が迎へに行つた時には、女はいくらか昂奮した狀態で、眼を赤く泣き腫してゐた。母親を思つて片時も忘れない幼い兒の愛情が、一面かの女に女としての悲哀を思はせると共に、家庭を知らず、夫を知らず、また子を知らないかの女にある深い感傷を與へたのである。夙くから一家の沒落の爲の犧牲とのみなつて、さうした社會に生ひ立つて來たかの女は、淫蕩な空氣の中にのみ盲目に日を送つて來て、さて飜つて考へて見ると、自分はこれまでに何一つしつかりしたものを持つたことのないのを思はずにはゐられなかつたのである。

『奥さんなんか羨しい。かうして、片時も忘れない子供を大勢持つてるるんだから。』かう言ひながら

『無いことはない。必ずある。それは俺のあの女に對した心の形でわかる。あの女に他に男があつて、それが自由にならない。夫婦約束までしても、一緒になれない。一面では俺はそれを可哀相だとは思ふ。しかし、それればかりではない。何うにもならないのを却て喜ぶやうなところがある。だから、お前にも屹度それがあるに相違ない……』

『それはさうかも知れません。』

『それが情ないのだ……。つまり不自然なことをしてゐるのだ。一夫一妻の眞理であるといふことは、これでもわかるのだ……』哲太は深く思ひ沈んだやうな顔の表情をした。哲太の胸には、女がぢかにかれの家にやつて來て、女の家でかれが味はせられたその苦しみを、矢張英子にも味はせたことがあつたことが思ひ出された。

その時、英子は餘り進まないのを、女は無理に末の女の兒の八歳になるのを伴れて歸つて行つた。末の女の兒は、この前にも哲太に伴れられて女の家に行つたことがあるのでよく女に馴染んでゐたのである。

『お前、行くかえ？』かう英子が女の兒に言ふと、女の兒はぢろ〳〵と母親の顔を見ながら、また行つて好いかわるいかを氣兼ねしながら、默つてぐづ〳〵してゐるのを、女は、『よう御座んすね、奥さん……一日貸して下さい。大丈夫ですとも……ね、行きませうね。』かう言つて、奪ふやうにして伴れて行つた。

『まご〳〵してゐると、今度は、亭主ばかりぢやない。子供まで取られて了ふぞ。』こんな戯談を哲太

を保護しすぎたことが、お前達の不幸福になつたのだ……。何の不自由なこともないといふことが、お前達の心を沈滯させたのだ。お互に、もつと本當のことを考へる必要がある。俺は今精神の危機に臨んでゐる。新規蒔直しをしなければならない。俺は海へでも、山へでも、野へでもひとりで行く。ひとりで行つて考へて見る。そして破壞すべきものは破壞しなければならない。お前もひとりで考へて見るが好い。夫や子供達のことでなしに、自分自身のことをもう少し考へて見るが好い。』

『……………』

英子は何か言はうとしたが、それを押へて默つて落ちて來る涙を拭いた。

『元を糺せば、俺の罪過かも知れない。しかし俺をかうした深淵に沈ませたのについては、お前にも責任がないではない。しかし、俺がお前をさし置いて、心を他の女に移したのはわるいかもしれないが、移して了つた今では何うすることも出來ない。今すぐそれをやめろと言つたつて、それは無理だ……。やめたいと常に思つてゐる俺にすらやめられないで困つてゐるのだから。』

『だから、何もおやめにならなくつたつてよう御座んす。』

『さういふ反抗的の言葉を言ふのが既にお前の解らない證據だ。お前は夫の苦しんでゐるのを喜んでゐるやうなものだ。あの女に男があつて、何うにもならないのをお前は喜んでゐるのだ……』

『そんなことはありません。』

つたであらう。しかし悪事はしなかつた筈だ。人の魂を玩弄するやうなことはしなかつた筈だ。だから、俺はあの女をも捨てないのだ。何うかしてあの女の魂だけでも救つてやりたい。かう思つてゐるんだ。』

『私には、さう思つて呉れる人すらないんですから……』

『いや、俺は思つてゐる。お前が母親の手から夫の手に移り、俺が死んだ後の子供の手に移つて、矢張今日のやうに詰らなく生きて死んで行くかと思ふと、本當に可哀相だと思ふ。……お前だツて、俺の一生の伴侶としてかうしてやつて來たんぢやないか……』急に感極まつたやうにして、哲太は漲り溢れて來る涙を手で拭つた。

英子も夫に誘はれて涙を流した。考へて見れば、夫も可哀相である。その女も可哀相である。その中に入つて中でも殊に自分が立つ瀬のない身の上であることに考へ及ぶと、かの女の涙は更に漲るやうに胸に溢れて來た。

哲太は言葉を續いだ。

『だから、俺は俺のすることをする。俺のすることは、お前でも、子供達でも、世間でもそれを遮ることは出來ない。俺はこれまで家庭のためには盡して來た。俺はお前達を不自由な目に逢はせないために、人に冷笑されるやうな僞事をもやつて來た。かなりの犧牲を拂つて來た。しかし、それが、お前達

しないのだ。お前にも、俺と同じやうに、儼としたお前がある筈だ。俺なぞに踏まれたり蹴られたりして甘んじてゐられない貴い魂がある筈だ。何故、さう思つたら、夫に食はせて貰つてゐる物質を捨てないのだ。また、子供を捨てないのだ。子供はお前とは離れ難いかも知れないが、しかし、お前即ち子供ではない。子を棄てる(ヽ)數はあるが、身を捨てる數はない。實際さうだ……。さういふ苦しい境涯にある女は澤山ある。何故、ノラのやうに夫を捨てない？　子を捨てない？　家庭を捨てない？』

『日本の女ですから、そんな眞似は出來ません。』

『それが出來なければ、矢張昔の女でゐるより他爲方がない。要するに、お前なぞはまだ贅澤なのだ。世間を知らないのだ。艱難を知らないのだ。自分はまださうした少しの資格も持つてゐない癖に、自分の夫のすべてを占領しやうとするのだ。それが不滿なら、お前は夫の生活に何ういふ苦痛があり、何ういふ煩悶があり、何ういふ艱難があるかを知つてゐるか。恐らくは知つてゐないだらう。お前などは女としての眞實の道に漸く足を踏み入れた位で、まだ何にも知つてゐないのだ……。』段々昂奮して來たやうな形で、『お前なんかは、本當に自分の夫と思ふなら、もう少し俺を憫んで呉れて好いのだ。俺の苦しみを同感して呉れて好い筈だ。……俺は苦しい眞實の道を生きて來た。他人の心や權利を奪ふやうなことは、また他人を餘所に自分の欲するところをのみ遂げやうとしたことは、惡事は、これまで曾てやつて來たことはない筈だ。それは罪過はあつたであらう。何も知らないがために無意識に犯した罪過はあ

の中か、絶海の孤島の中にひとり住んでゐても、俺は矢張俺だ。杉山哲太は杉山哲太だ。ちつとも變りやしない。だから、お前がお前の思ふやうに俺の總てを占領しやうと思つたつて、それは駄目だ。』

『だから、貴方は勝手だと言ふんです。』

かう妻の英子も昂奮したやうにして言つた。

『勝手でも何でも爲方がない。俺は世間のために生きてゐるのではない。また、お前や子供達のために生きてゐるのではない。お前の考へでは、世間に多く見るやうな善良な家庭の主人に、または溫和な夫に、慈愛深い父親になつて貰ひさへすれば好いのだらうけれども、俺はその要求のために、自己の自由と生命とを失ふことは出來ない。さう言ふと、お前達は、女は、すぐ薄情だとか不道德だとか言ふかも知れないが、俺には厭になれば、重荷になれば、妻や子供は捨てゝ了つて差支ない權利がある。世間は何と言はうが、そんなことは頓着しない。七十五日經てば煙のやうに消えて了ふ世間の噂や批評などは何うでも好い。それは俺の權利だ。自殺が個人の權利であるのと同じやうに、矢張人間の底の底に橫たはつてゐる權利だ――』

『だから、何うとも、勝手になさる方が好い。私なんか、何うせ食はせて置いて貰へば好いんですから……。踏まれても蹴られても爲方がないんですから……。』

『それはいけない……。いや、それがいけないと言ふのだ。何故、お前はさう思つたら、それに反抗

『………』

女の眼には涙が光つた。丁度その時朝の日影は高窓からさし込んで、それが盃盤の上を朗らかに照した。何處かで復習つてゐる長唄の音が、默つて相對した二人の沈默の間を縫つた。

かうしたシインがあるかと思ふと、或夜は晢太は夥しく腹を立てて、人々の留めるのも聞かずに、無理に外套を出させて、表の格子戸を一二寸はね返るほど音高くしめて、そして闇の中をすた〳〵と遁れるやうにして出て來た。

突然かれは裏の細い路の溝に足を踏込んだ。はつとして慌てゝ拔かうとしたが、溝の中に深く陷つた駒下駄は容易に取れなかつた。着物も長胴着も裾は皆な泥に塗れた。ことに、その長胴着は、その正月の贈物として、女が特にかれのために拵へて異れたもので、意あつてか、なくしてか、助六の似顔の繪が一面にそこに模樣になつて出てゐたが、その裾から膝のところは殊に夥しく溝の泥に塗れた。しかしかれは女の家に引返さうとはしなかつた。かれは汚れたまゝですた〳〵と歩いた。かれはかれの戀が、心がすつかり泥土に委して了つたやうな氣がした。

『だツて、俺は俺だ。何處まで行つたツて、俺は俺だ。かうした大きな家に住んで、旨い物を食つて、世間で人に知られてゐても、または世間がこの俺をすつかり棄てゝ了つて、お前さへ俺を捨てゝ了つて、山

哲太はまた哲太で、『さうだとも……お前の言ふ通りだ。夫婦約束までした仲なのだから、何うかしてその人と一緒になる方が好い。それには僕は異論はない。お前の幸福の爲めなら、僕は今すぐでも別れてやる。辛いには辛いが仕方がない。』

かう言つて行詰まつたもの丶やうな表情をして盃を口に當てた。

或る朝の長火鉢の前では、哲太も女も彩しく昂奮した。お互の心の中を隱すところなく打明け合つて了つても、それでも猶底に解決することの出來ない或物が殘つた。今まで暴風雨のやうにお互に負けずに性の問題を饒舌り合つたのは、あれは、別の人であつたかのやうに、二人は言ひ合せたやうに口を噤んで了つた。互に相憫むやうな心が生じた。

暫らくしてから、

『何うも爲方がない。』

かう哲太は言つたが、すぐ言葉を續いで、『併し、かうして皆な何も殘さず言つて了つたあとには、お互にさつぱりした理解が生れて來るもんだ。出來ないことは何うしたッて出來ない。……死んでも出來ない。何うも爲方がない。しかしこ丶までお互の心を知つたと言ふことは、非常に滿足だ。喧嘩をしたり、言ひ合つたり、又は水と火の中を通つて來たりしなければ、とても、さうした氣分や理解は出て來ない……』

人目が邪魔か、
曲る横町に柳影
その時分、女はさうした小唄をよく彈いた。三下りで、何でも吉原あたりでうつして貰つて來たらしく、込んでゐる相の手の三味線が面白い情調を流るゝやうに人の心に誘つた。しかしそれ以上にかの女自身がその小唄に共鳴してゐたのであつた。戀がならひか、人目が邪魔か、矢張その唄にあるやうにして女は横町を驅け出して、柳の影の夕暮に靡く巷に惚れた男に逢ひに行つたのである。哲太をあとに殘して、或は自分の爲すべき義務の一部だけをすまして、そしてその男の方へとうかれ心で走つて行つたのである。その頃には哲太はよく腹を立てた。またよく女をいぢめた。時にはわざと意地わるく女を自分の傍から離さないやうにした。それに、一家の人達は哲太以上にかの女と男の間を堰いた。
それから女は一中節にある小春髪結の曲の小春とお綱の會話のところをよく彈いた。前の三日月の小唄の方ではその戀ごころの留め難いのを示し、その一曲ではかれと英子とかの女の間の心をそれに託したのであるが、かの女は爪を糸にあてながら、自ら唄ふ唄の心にひかされて、思はずその眼からほろほろと涙を落した。
『だつて、何うせ、私は貴方の奥さんにはなれない。』
何ごと言ふと、女はかう言つて哲太の顏を見た。

た。つゞいて曾て讀んだことのあるゴンクウルの『陷穽』の中にあるその女主人公ジエルミニイが自分の情夫に他に女があつて、それについて體も魂も亡びるやうに苦しみながら、その女の接吻し殘した箇所を情夫の體の中にさがして、せめてもそれに滿足するといふ一章が深く哲太の胸に思ひ出されて來た。

相手の體から他の女乃至男が接吻し殘した箇所を捜して滿足するといふ言葉、それはいかに悲しい辛いまた情ないことであるであらうか。またはいかに深く魂の動搖を覺ゆることであらうか。それを、世間は、世間の人達の多くはさうした大切なことを、何の不思議もないやうに、又は何の罪過でもないやうに、平氣で、輕い心で、勝利者とか劣敗者とか、または惚れたものとか振られたものとかいふ淺薄な心や言葉で片附けて、當然のことでもあるやうにしてやつてゐるではないか。現に哲太かれ自身すら、女から受けたさうした苦惱を更に移して英子に與へてゐるではないか。更に驚かるゝことは、ちやんとさういふ風に百も二百も承知して居ながら、何うすることも出來ずに女の體に引寄せられて行つてゐるではないか。

三日月の光出ぬ間に
ちよと驅け出し
戀がならひか、

た。2は3になり3は4になつた。

男と女が花札を引く歡樂に浸つてゐるために、そのために、哲太は今まで手にもしたこともない花札を持つやうになり、五光のやくを知り、丹一のやくを知るやうになり、オヤとビケの位置に由つての花札の使ひ方をも知るやうになつた。否それはかりではなかつた。英子の里の兄の來た時には、英子がまだ哲太に嫁いで來ない時分に盛んにやつたその話が出て、『さうですか。ちつとも知らなかつた。哲さん、知つてゐるんですか、花を……。ぢや、僕の家に二組あるから一組上げませうか。あれも正月なんかちよつと面白いもんです。』かう言つて義兄はそれを持つて來て吳れた。

それに、女より他に誰も知つてゐない筈の、または他に知られては、箇の矜持にも威嚴にも關するやうな深い深い秘密を、哲太自身も知つてゐるやうに、先の男も女を透してさうした哲太の秘密を知つてゐるといふことが、一番深い辛い跡とするやうな焦燥を哲太に起させた。これは哲太ばかりではなかつた。すべての人間が皆さうであつた。その辛い想像乃至事實から、刄を肌に當てなければならないやうな悲慘な出來事がいつも起つた。

自分の愛した女が人知れず持つてゐる扰、それは自分より他には知つてゐるものがない筈の扰、それを他の男が知つてゐるといふことはいかに深い苦惱を人間の魂に與へるものであらうか。哲太はそこまで想像する度に、身の置きどころもないやうになつて、女から却走したいやうな焦燥にいつも胸を焦し

女を透して、その男の狀態はかなりに深く哲太に知れた。それは女は容易に話さないものではあるが、ことに底の底の歡樂の狀態はつとめて秘密にして置くものであるが、それがある場合、たとへば女の方から哲太なら哲太の心を力強く自分の方へ引寄せやうと思ふやうな場合には、存外その先の男の體の組織や心の形やその折々に觸れての種々のあらはれを話して聞かせるものであつた。哲太は女の言葉の中から男の種々なものを搜した。

その男は花札を手にする種類の人であつた。また場合に由つては、滿都の人氣をその双肩に集めることの出來る人であつた。女を相手にするに好い武器の一つである人氣といふものを持つた男であつた。かれは田舍の料理店の息子で、內藝者などのゐる中に育つたものだけに、年少時代からさうした女の空氣にはよく熟してゐて、若い時から異性に對する經驗と鍛錬とを澤山に持つてゐた。かれは唄を巧に唄つた。三味線も手にした。口はさう多く饒舌る方ではなかつたが、その餘り饒舌らないところに却て女を引寄せる力を持つてゐた。かれはいかなる場合にも、一人の女だけをその對者にしてゐることはなかつた。彼方を引くために此方を持ち此方を引くために彼方を持つといふ色男の奧の手をいつもかれは應用した。

それに釣られてかの女が熱して行つたと同じやうに、かの女自身もまたさうした形で哲太を熱くさせた。否、何も知らない英子かの女自身すら、矢張それと同じ形で、その盲目から目覺めて來たのであつ

つ間が僅に三四十分であつたけれども、その間すらかれには堪へ難く苦痛に感じられた。汽車に乗つてからは、二人はもう多く口をきかなかつた。女は窓から動いて行く外を眺め、哲太は掌を後頭部に組み合せて、起きてはゐられないやうな心持のする體を凭せかけるやうにしてクッションに凭りかゝつた。

やがて哲太の家の方へ行く電車の線のわかれてゐる停車場が來た。哲太は身を起した。

『それぢや、また、近くに……』

『うん。』

これだけで哲太は汽車を下りた。哲太はすたこら歩いた。あとを振返つても見なかつた。深い深い溜息が出た。

女はその日歸つてからの話を哲太にした。置いて來た男は、電話をかけてもかけてもやつて來なかつた。漸くやつて來たと思ふと、非常に昂奮してゐて、てんから女の笑顔をも何をも受けつけなかつた。平生ならば何でもないことに角を立て、ヤケに酒を呷つて、遂には席を蹴つて外へ出た。それを歸すまいとして、縋つて細い闇の露路に出た女は、突飛ばされて倒れたばかりか、持つてゐたステッキで、したゝかにその肩と背とを撲たれた。その話を聞いた時には、それはもう餘程後であつたけれども、それでも哲太は昂奮した。そのステッキで打たれたのは女でなくつて自分のやうな氣がした。惚れた男のステッキに打たれた女が憎かつた。

去るに堪へないやうな氣がしたが、しかしいつまでさうしてゐることも出來なかつた。午近くなつてから、車をといふのを斷つて、二人は其處を出て、池の緣から町の通りの方へと行つた。

哲太はこれ迄の例として、女と別れて來る朝には、いつも家庭の妻や子供の方に心を惹かれて、女と酌む酒も旨いが、家庭の餉臺の前で飲む酒も捨て難くなるのが常であつたが、その日は何うしてもさういふ氣にはなれなかつた。今度は昨日置去りにされた男の役割を哲太かれ自身がやらなければならないのであつた。

いくら合せても合せ難い二つの心であることを痛感しながら哲太は町の通りの方へと出て來た。やがて停車場へと來たが、汽車の時間がまだ間があるので、二人は引返してその前の休茶屋に寄つた。岩槻町に通ふ乘合自動車が丁度客を集めてゐるところで、包を持つた細君や、紳士や、赤いメリンスの帶をした娘などがその周圍に集まつて來るのを二人は眼にした。

女の眼と表情とを見てゐる中に、哲太は愈々苦しくなつて來た。その前に坐つてゐるにすら堪へ難いやうになつて來た。一刻も早くさうした苦惱から脫却して、兎に角自分一人になつて靜かに考へたいとかれは思つた。しかも、その靜かに一人考へるといふことが、いかに辛く苦しいか、またいかに堪へ難く胸の焰の燃ゆるものなるかをかれはこれまでに十分味はつて知つてゐるのであるが、それでもかうして相對して、女を、女の眼を、眼にあらはれる心を見てゐるよりは增しだとすらかれは思つた。その待

滅して闇を縫つて飛んで行つた。

日長けてから起きた二人は、歡樂の極みにある戀人同士のやうにして、靜かな松林の中や、鞦韆や木馬の置いてある廣場や、あづまやのある斜草地のあたりを並んで靜かに散歩した。かれ等の眼の前には田舍ののんきな朝の眺めがあつた。朝日は美しく緑色の漲つた田畠を照し、小川に添つた露深い路を働きに出る農夫が鋤を擔いで歩いて行つた。

かれ等は心も體も綿のやうに勞れ切つてゐた。かれ等は終夜眠られなかつた。昂奮と辛勞との間を縫つた歡樂、まことの心と欺騙との雜り合つた兩性の平均乃至不平均、思ひのまゝにならぬ焦燥、時には卽き、時には離れ、また時には悶えて、女の涙と男の溜息とが絕えず苦しげにその間に雜り合つた。かれ等は輾轉反側した。黎明近く、雨戶の隙がほの白く見える頃になつてから、漸くかれ等はうと〳〵した。

かれ等は散歩から戾つて、朝湯に入り、淡泊したもので淺く酒を酌み、草藪の中に微かに見える赤い花などを眺めた。もうこれで別れて好い、一生逢はなくつて好いと男は言ひ、いやです、別れるのは厭ですと女が言つた昂奮した昨夜の氣分、さうした眞實はまだ底の底には力強く橫たはつてはゐるけれども、しかも疑惑やら、嫉妬やら、一刻も女を離し難い心やらが絕えず哲太の體の周圍にあると共に、女には昨日平氣で置き去りにして來た男が氣に懸つた。二人は言葉少に朝飯をすました。哲太は此のまゝ此處を

女はいつもに似合はず、自分の生立やら、不幸福な境遇やら、これまでに嘗めて來た艱難や辛勞やらを染々とかれに語つた。また男との關係についても、多少の情僞があるであらうと想像されながら、しかもその想像を十分に打破することが出來るほどの眞實を以てかれに語つた。女もまた自己の戀の儘にならないのを、心の願のまゝならないのを常に嘆いてゐる一人であつたのであつた。

かれは長年抱いてゐたデカダンな心持や、皮肉や、勝敗の原理や、冷笑や、無意味な突進や、人の魂を魂とも思はないやうな行爲や、さうしたものゝ一つ〳〵空に消えて行つたさまを頭に繰返した。かれは今まで少くとも人間の魂の核心に觸れてゐなかつたことを思つた。

蚊やりの烟は細く、蚊は次第に集つて來た。薄暗くついた電燈以外には、すべて一抹の深い闇で、その一室ばかりがかれ等の小さな覺束ない世界のやうに見えた。さつき女中が持つて來て緣側の隅に置いて行つた白絽を張つた大きな螢籠の中には、こゝの名物の無數の大きな螢がさながら花火線香の火のやうにチラ〳〵と動いて光つてゐた。

『これで好い……俺はこれでもう別れても好い……』

痛感したやうにかれが言ふと、

『いゝえ、別れるなんかいやです。……』かう女は眞面目な表情をして縋るやうにして言つた。靜かに前庭の草藪を動かして行く夜風につれて、何處から來たか、螢が一つ魂か何ぞのやうにピカピカと明

にならないのを歎くやうに、またはさうした深い苦惱をわざと傍にかい捨てたやうに、二人は酒をグイグイ飲んだり三味線をヤケに彈いたりした。女の目からは涙が流れた。

かれ等の仲は、もう五六年の月日を經過してゐたけれども、今迄に曾てこれほどの心の一致と展開とを互に見せたことはあるであらうか。またお互ひにこれほど心の底と底とを打明けて見せたことがあるだらうか。これほどお互ひの自己の底にある犧牲の念を見せ合つたことはあるであらうか。またこれほど涙を流し合つたことはあるであらうか。堅く手を握り合つたことはあるであらうか。情死と言ふ樣な心はまだはつきりとは起つて來なかつたけれども、尠くともそれに近い侘しい辛い艱難な心の共鳴を二人は今までにつひぞ感じたことがない程に强く感じた。二人はいつかまた盃と三味線を下に置いて、そして默つて相對した。

『私の心はわかりましたね……ね。もう考へるのは止しませう。』

かう女は何遍も言つた。

かれのためには、女に他に男があるがために展開して來たまた昻揚して來た心の境であり、女のためには、矢張他に男があるために、今まで知らなかつたかれの心の深い扉に對しての接觸であつたのである。『いゝえ、さうぢやありません。そんなことはありません。私は一生藝者で通しますから……』かう下唇を咬んで辛うじて涙の胸にこみ上げて來るのを押へるやうにして女は言つた。

物かゞあるやうに思はれて不愉快な氣がした。しかしかれにしても、女の留めるのを振切つて歸るほどの心はなかつた。兎に角外形だけでも勝利者の位置に立ちたいといふ念と、女に愛着した心とが巴のやうに絡み合ひ亂れ合つた。皮肉な行爲を敢てして冷やかに笑つてはゐられなかつた。で、かれは女のするまゝに任せた。

日が暮れてから着いた停車場、祭禮の提灯や夜店で賑やかな田舍町、その町外れの深い森の中を通つて、螢の明滅する池の緣を縫つて、猶ほその奥にある松林の中の瀟洒の料理屋の離座敷、闇の夜で、また夏で、蚊が軒にわん〳〵聲を立てゝゐたけれども、それでも二人は靜かに其處に二人の世界をつくることが出來た。女中は小さな提灯をつけて、踏石傳ひに茶や酒や肴を運んで來た。豚の形をした器からは、蚊遣線香の煙が餘り明るくない電燈の光に細く微かに靡いて見えた。

そこでは哲太は女を殺して了ひたいやうな心持がした。女も亦男の爲に殺されて了ひたい樣な表情を見せた。それほどの深い情があるなら、何故もつと早く見せては呉れなかつたかと女は言つた。かれはまたかれで、お前にさういふ心があるなら、他に男があつても好い、亭主を持つても好い、何をしても好い、これで別れても好い、これから一生逢はないでも好いと言つた。その夜の二人のさまはいつものやうではなかつた。二人は默つて長い間盃の酒の冷えるのも知らずに相對してゐた。かと思ふと急に儘

うにも思はれなかつた。男達は互にその生國の話をしたり、職業の話をしたりして一二時間を過した。
哲太は自分の方から、靜かに起つて歸つて來ようとした。
と、女は來て、あることをかれの耳に囁いた。
『いや、今日は歸らう……、もうよくわかつてゐるから。』
『いゝえ、それぢや、私がいけないの。』
『でも、今日は歸るよ。』
『なアに、あの人は、もう歸るんです……。用があるッて言ふんですから。四時からは、是非行かなけりやならないッてさつきも言つてるたんですから。』
『でも、今日は歸らう。その方が好いんだよ、お互のためにも、……』
『だッて、私が厭なんですもの。』
達つてとめて、女はかれを歸さうとはしながつた。男は眞に用事があるらしく、しかし一面には女と哲太との狀態をこのまゝにして捨て去るには堪へないといふやうにしてぐづ〳〵してゐたが、女は平氣でさつさと自分で自分の意見をきめて、家では面白くないからと言つて、髮を梳いたり、着物を着更へたりして、哲太と一緒に何處かへ出かける支度を始めた。哲太にはそれが厭だつた。男の方には構はずに、かれにのみその情を見せるやうにする女の態度の裏には、男と女との間に、かれよりも一層深い何

いふやうな、又は勝利者が得てあらはし勝てある驕慢な心の形を少しでも面にあらはすやうなことがあつたならば、かれは或は席を蹴つて起つか。またはさうした不快な淺薄なデカダンを卑しみ笑つて冷やかにそこを立去つたであらうが、女のある點まで眞實な憐憫な心は、決して其態度にさうした不眞面目を見せなかつた。却つて哲太は惚れた女心の苦しみに同情した。また自ら爲した業とは言ひながら、さうした苦境に魂を二つにわけなければならない女を可哀相に思つた。之は無論、哲太に、女に對する未練があり愛着があり離れ難い熱情があつたためであるには相違なかつたけれど、併しそれ以上に、彼は女のために深い深い同感を惹いた。出來るものならば、さうした惚れた男に一緒にしてやりたいといふ犧牲的の考へもかなりに強くかれに起つた。今こそかうした突詰めた心持になつてはゐるけれども、元を糺せば、皆なかれの浮いた淺い享樂の心から始まつた事である。かれには妻がある。家庭がある。子供がある。始めから女と一緒になることは出來ないのは知れ切つてゐる。女がさうした淺いかれの享樂の心に滿足が出來ずに、心から一生を託さうとする男を他に求むるのは、決して無理ではない。不自然ではない。又淺薄でもない。これはその時に限らず、かれが常に女に對して感じてゐる底の底の本當の心であつた。で、女の潛かに危んでゐたらしいのとは違つて、一座には、靜かにのんきな何事もないやうな氣分が漲つて、男の哲太にさした盃に女が酌をしたり、女が哲太にさした盃に男が酌をしたりした。これでは外形だけでは、二つにわけた心の一つづゝを男達は銘々に滿足して持つてゐて、それで何事も起りさ

た女の姿は、永久に、また片時も離れずに、かれの頭の中に生きて刻まれてあるであらう。山に行つても、海に行つても、また巧に遁げおほせてかれの罪惡を誰一人知つてるものもない遠い國に行つても、或はまた天に翔り、地に潜んでも、兎も角に、その女の姿だけは、かれの死にまでついて廻つて來るであらう。死の最後の呼吸をひき取るまでは、否、生々死々、佛者の所謂三世の後までは、乃至は永劫の時の盡き果つるまでは……。かれはかう思つて戰慄した。世間にはさうしたことは澤山に澤山にあるのであつた。かれは愛と憎の空氣がそこまで人間を陥いれて行くさまを想像した。

一

ある時は女の家でかれは男とばつたり顏を合せて了つた。顏さへ合せなければ、何方かでそツと姿を躱しおほせさへすれば、それはそれで濟んだのだけれど、何うにでもしてごまかして了ふことが出來たのだけれど、否、現にさうした不幸な遭逢はこれまでにでも度々あつたのだけれど、不運にも競爭者同士が一目でも互に雙方を見た以上、女としてこの二つのものをちやんと正式に逢はせずには、互に互を侮辱したやうな形になるので、女はかれの方に來ては說き、男の方に行つては說きして、いろ〳〵の細かい情の曲折のあつた後、漸く二人の男を盃盤の狼藉した間に來て相對して坐らせた。

哲太はその時でも決して男を憎むといふ念は起らなかつた。また女を憎むといふ心にもなれなかつた。もし女の顏の表情に、言葉の一端に、女がそれを、男性を二人その力の下に並べたといふことを誇ると

かれは一歩一歩恐怖と戰慄とにをのゝく足を踏みしめながら、靜かに音もしないやうに狹い階梯を下へと下りて行く。階梯の板のきしむのが氣になる。それに、下には電氣がついてゐる。家人はそこに寢てゐる。さうした殘酷な事件があらうとは知らずに、またかれ等のために大事な娘であり、生活の唯一のたつきである娘がさうした目に逢つて殺されてゐるとは夢にも知らずに、平和の神がかれ等の上に安らかな眠りを齎して來てゐる。かれはちよつとそこをのぞいて見て、そして靜かに別の間の方へ通じたしきりの襖を押して見るかれを想像した。

しきりの襖は音もなく明いた。

かれはそこから出て行つた。かれはいつもの例として、女のまだ寢てゐる間に、一人で曉の散歩をする習慣があるので、少し位その氣勢を家人は耳にしても、またいつもの散歩と思つて、わざ〳〵起きて來るやうなことはあるまい。で、かれは何うやら彼うやら入口の格子戸の鍵を外して靜かに戸をあけてそして曉の戸外へと出て行く……。その時は何んな氣がするのであらう。復讐の快味か。否。殺人の血腥い昂奮から來る恐怖か。否。愛と生命とを失つた絶望か。否。深淵の中から脱し得た自由の喜悦か。否。氣も心も顚倒して我と我が魂の平均を失つて了つたやうな空洞な氣持か。否。その時の心の狀態はさうした千萬の說明も猶その一端を現はすことが出來ぬほどそれほど複雜したものであらう。

しかし、何は置いても、これだけは確かであつた。その歡樂の名殘の夜着の中にある色の白い蒼ざめ

呼吸を立てゝ眠つてゐる。電氣は明るくその一間を照して、其處等に散らばつた帶や着物や白足袋は、だらしなく昨夜の歡樂の名殘を語つてゐる。譯はない……、譯はない。そこに蛇のやうに長くのたくつて落ちてゐるシゴキを取つて、それをそつと女の白い首の周圍に廻して、ぐつと力強く締めさへすれば、それで目的は達せらるゝのである。女の呼吸は忽ちそこに斷たれるのである。女の魂はなくなるのである。かれの爲めに愛であり生命でありまた惡魔であつたかの女はこの世にゐなくなるのである。かれはその魂の天上に歸した時を想像して、恐ろしい戰慄を總身に感じた。かれは續いてその死屍をそつとそこに見捨てゝ、そして自分はいかなる態度を取るであらうかと思つて見た。恐らく其處でそのまゝ死んで了ふやうなことはあるまい。何故なら、無理情死ほど男に取つて遺憾なことはないからである。かの女を殺した上は、かれも無論死ぬであらう。しかし、同じ死ぬにしてもかれは一度は其處を遁れるであらう。そしてかれは山なり海なりに行つてその最後の死場所を發見するであらう。かう思ふと、かれが此處を逃げ出すについて、女の死の家人に發見せらるゝまでの間に、相當する時間を置くやうにしなければならないのをかれは思つた。で、かれはその女の死屍に、今までは自己の愛であり生命であつたその死屍に、歡樂の名殘である夜着をかけて、すや〳〵と靜かに寢てゐるやうに見せかけて、朝、家人が雨戶を明けに來た時にもちよつとわからぬやうにして、そして靜かに障子を明けて出て行く。永久に再びとは來ることのないその室を、または種々の記憶の纏れ合ひ絡み合つたその室を……。

に、その愛した男の戀を十分に占めることが出來ずに、矢張かれ及びかれの妻と同じやうに、不如意と焦燥と不自然とを常に感じた。

人間の根抵には、同じ心の狀態が、それからそれへと際限なく續いてゐるのを哲太は思はずにはゐられなかつた。哲太は暗い夜の路をさうした思ひに虐まれつゝ彷徨した。

自分が歸つたあとに、すぐその男がやつて來るといふことを知りながら歸つて來た夜も何遍かあつた。さういふ時には、女を憎む念は火のやうに燃えた。男に對しては助六の劇に見るやうな態度または心的狀態は起らなかつたけれど、または外國の物語や日本の武士時代に見る決鬪と言つたやうな、さうした突詰めた心は起らなかつたけれど、女に對しての憎惡の念は強く強くかれの心頭を衝いて起つた。かれは女の白い肌に刄を當てることを心で企んで、それを實行して、初めてこの苦惱から免れることが出來るとすら思つた。かれは女を殺すことが、その憎むべき女を殺すことが、自己の生存上最も必要な實行だとまで思ひ詰めた。かれは女を殺してから、そつと階梯を下りて、家人に知れないやうに、曉の扉を明けて出て行くかれを想像した。

女はすや／＼と寢てゐる。何も知らずに寢てゐる。男にさうした苦痛を起させたことに就いては何の悔恨も反省もなしに、また女自身さうした淫蕩と欺騙を敢てしたことに就ても何の考へもなしに靜かな

に逢つて歡ぶことを得せしめたいとすら思つた。かれは邪魔をしようとは思はなかつた。否、邪魔どころか、かれは場合に由つては、その戀のために自分の戀を男らしくその贄に供しても好いと思つた。しかし、男の性として、女から打明けられた他への戀を靜かに落附いて聞いてゐられるだらうか。細かい情緒の交錯、歡ばしい心と心との共鳴、唇から唇への甘い私語、熱した眼と眼とのかゞやき、さうしたものを、無關心で、または犧牲になつた心で、靜かに聞いたり見たりばかりしてゐられるだらうか。其處には儼として人間の底の底の血が横はつてはゐないだらうか。其處に如何ともすべからざる悲劇の根柢が横たはつてはゐないだらうか。世間での大通は、所謂水と火の中を無數に經て來たと稱する大通は、さうした難關を談笑の間に解決して了ふと言はれてゐるけれども、またさうした態度が男らしく且わかつた人間として第三者から言はれてゐるけれども、それはしかし、愛したものを眞に愛した形ではなくて、矢張第三者的の樂なまた單に賢いと言はれる人達の奐え切らない行爲ではないか。眞に愛した心は眞に憎む心ではないか。

この深い心の問題に於て、哲太は一面に妻にそれを感じ、一面はまたその女にそれを感じた。妻がなゐたけ深く細かくかれとその女の狀態を知りたいと欲しつゝも、それを知れば知るほどそれに對して焦らずにはゐられなかつたと同じやうに、かれも亦その女の他への戀を細かく知れば知るほど堪へ難い肉體と神經の疼痛を覺えた。否、それはかりではなかつた。その女すらもまたその一方にかれあるがため

い。』この考へは、妻に對しては、殊に有效に自己の責任の輕くなつて來るのを感じた。
さうした心境に、哲太はある間とどまつてゐることが出來た。しかし、矢張それは詰まらない彌縫であることが次第に感じられて來た。哲太は再び熱した心で女の許に通つた。

何の爲めに一つの心と他の心とが觸れながら、更にまたその他の心に觸れて行かれるやうにこの兩性の心と體とが出來てゐるのであらうか。また何の爲めにその爲めから起る苦悶、嫉妬、瞋恚が不自然にこの兩性の間に横つてゐるのであらうか。またこの引く力と引かるゝ力とが終局は遂に不平均に終はらなければならぬのであらうか。惚れたものは、自己の愛妻の他に姦せられてゐるのを知りながらも、その愛妻に離るゝ能はざるが爲めに、自己の衿持と魂とを失ひながらも、猶ほその肉體の一角だけをも握つて離すまいとし、惚れたものは愛せられた男性の心に惹かれながらも、竟にそれに滿足することが出來なくなつて、却て自己から積極的に他に惚れずには居られないやうになる、この力の消長と言つて好いか、または性に賦與せられた不自然な矛盾と言つて好いか、兎に角何と言つて好いかわからないが、その複雜した、交叉した、細かいまたは痛い心理狀態は、哲太をして深い懊惱に沈ましめずには置かなかつた。かれは何遍か惚れた男に逢ひたい女の心に同情した。或時はかれはそのために、自分が現に惚れた苦痛を嘗めてゐる經驗から考へて、かの女をして何の顧慮もなしに、何の反省もなしに、其男

從つて哲太は到底打克つことの出來ない戰ひを戰ふことゝなつたのである。傍觀することの出來ない位置に身を置きながら傍觀しなければならないことになつたのである。火であると同時に水でなければならなくなつたのである。もしこれが、かの女の持つたものが、眞珠でなかつたら、かれは決してそこまで入つて行かなかつたらう。また引かへして深淵から出て來るにしても、さう大した苦痛を感じなかつたであらう。笑つて匙を投げて引戻して來たであらう。そして二三日の間 Sober な顏をして、『なあにあいつらは、何うせ、皆なあゝさ。』かう言つて忘れて了ふであらう。平々凡々でその幕は閉ぢられたであらう。併しかの女はそれ以上のあるものを、ある力を、ある心の姿を持つてゐた。

哲太はかの女の不眞面目を議する前に、自らの不眞面目をかの女から議された。かの女の涙は、不如意は、艱難は、奮鬪は、すべて女性としての一種の獅子吼で、その中にはセックスの細かい問題があり、社會主義の問題があり、女性問題があり、夫妻及び家庭問題があるのであつた。そしてそれは皆本當の細かい經驗と痛感から來てゐた。かの女は更にそれを淫蕩な外皮で包んだ。

哲太はそこに一種の運命を感じた。何うにもならないものを何うにかしなければならないハメにかれは陷つて了つたのである。止むを得ずある時は哲太は考へた。『何うせ、何うにもならないんだ。』向うから言つても此方から言つても……。唯、かうしてゐれば好い。その魂の一片を握つてゐるさへすれば好い。それで滿足しなければならない。渾てを占領しようと思ふから辛いのだ。もつと輕い心持でゐる方が好

ずにゐられなかつた。

一人の女、その女がかれをデカダンから救つたことは、確な事實であつた。その女は無論、Durtal の所謂 Florence 又は耳を噛む癖の種類の女であるが、しかしまだその本當の魂を失つてゐない女であつた。欺騙に酬ゆるには欺騙を以てし、虚僞に酬ゆるには虚僞を以てし、妥協に酬ゆるには妥協を以つてしたが、幸ひなことには、かの女はさうした社會に見る多くのデカダンではなかつた。底にある美しく輝く眞珠を持つてゐた。その底の眞珠が哲太を救つた。デカダンから救つた。自暴自棄から救つた。無意味な生存から救つた。平凡な家庭から救つた。しかしその女の持つたものが眞珠であつたがために、微温いデカダンではなかつたために、かれは一層辛い苦痛を嘗めなければならなかつた。

かの女の生活も哲太やまた英子と均しく、本當のものに向つて憧憬するものであつた。眞實と自由に向つて奮鬪した生活であつた。さうした社會にあつて、眞實と自由に向つて奮鬪した生活! さう言つただけでも、それは哲太や英子やまたは世間の多くの女性達の生活に比して、數等艱難の多いものであつたことは誰も想像することが出來るものである。哲太には殊にそれがよくわかつた。

かの女も矢張思ひのまゝにならぬ身の上を慨く一人であつた。欺騙と虚僞の多い中に身を置きながら、または時に由つてはその欺騙と虚僞とを大勢の對者に用ひながら、矢張欺騙と虚僞とに苦められてゐる女であつた。哲太はかの女の魂の中にも自分の魂を發見することが出來た。

しかし英子は今にしても矢張哲太の苦痛は理解することが出來なかつたのである。『男は男で勝手な眞似をしてゐる。』といふ以上に哲太を見ることは出來なかつたのである。美しい眉に、白い肌に、または巧な表情にすつかり有頂天になつて了つてゐるとしか思はれなかつたのである。しかし實際、哲太は歡樂の庭を單に歡樂の庭として樂しむことが出來たであらうか。完全に男を得ることの出來ない英子の悲哀と苦痛とを矢張哲太は苦しんでゐはしなかつたであらうか。一つの心を得るための努力を浪費してゐはしなかつたであらうか。

哲太の眼を見れば、表情を見れば、さびしい心を見れば、自由を得ることが出來ないで悶えてゐるさまを見れば、歡樂の庭から歸つて來たもの、顏にも似合はないさびしさと佗しさとを見れば、それで哲太の苦惱はわかる筈であつた。思ふまゝにならない煩悶は理解さるべき筈であつた。しかし、箇と箇とに執した相互の心には、さうした餘裕を持つことは出來ないのである。哲太はさうした妻の苦痛と涙とを餘所に、ひとりさびしく書齋の籐椅子の上に身を横たへた。

大勢の女から一人の女に移つて行つた哲太は、五六年の間に、實に大きな苦痛の戰ひを戰つたのであつた。何うすることも出來ない戰ひを。欺騙の戰ひ、虛僞の戰ひ、それは比較的容易に打勝つて進むことが出來たが、それから先の魂を問題にした戰ひに至つては、かれは暗い暗い絕壁に突當つたのを感ぜ

英子は母親の愛に包まれた過去を繰返した。また夫と自分との間に何等の理解もなくて過ぎて來た月日を繰返した。今まで世間に向つて開かれたかの女の眼は、ほんの上つ面な、または母親乃至子供を通して見たゞけの眼で、異性に對しては、全で盲目であることを繰返した。『貴方はいくらでも勝手に面白い眞似が出來るから好い。男だから好い。しかし、女は何うしたら好いんでせう。女は何を快樂にして生きてゐるのでせう。』かう度々英子は哲太に向つて云つたが、哲太はまたそれを、『だつて子供があるぢやないか。』と無下に一言の下に云つて了ふのが例であるが、その問題がいつもかの女を深く苦しませた。英子は女として初めて男に對さなければならない位置に身を置いてゐることを今になつて痛感した。

　女なるがために、美しくならねばならない。男を惹くやうに自からをしなければならない。また自己の持つた男を自分の勢力の下に置くやうにしなければならない。自分の男を他の女に寢取られないやうにしなければならない。かう思つた英子は、更に廣く今まで目にも心にも留めなかつた世間を見るやうな心になつた。其處にも此處にもさうした悲喜劇は澤山にある。夫に似た行爲をしてゐる男性は無數にある。否、男性ばかりではない、かの女の側にある女性にもさうしたものが澤山にある。共に援けなければならない女性が互に敵となつて男の奪ひ合をしてゐる。かの女は一人の女が一人の女にその男を奪はれたゝめに、その男を刄で刺した新聞の記事を見て戰慄した。その女の悲哀と苦痛とが自分の體にそのまゝ蘇つて來るやうな氣がした。英子はその記事を顏に當てて深く思ひ沈んだ。

ついて話したことも、何處までが本當で、何處までが事實だかわからなかつた。かの女が思つてるよりも、或はもつと深い仲になつてゐて、芝居や小說にでもあるやうな、または新聞にでも出るやうな事件を釀すやうなことがあるのではないかと思ふと、英子は落附いてぢつとして寢てはゐられないやうな焦立たしさを感じた。しかし心配した程のこともなかつた。別にさうした事件も起らずに、三つの心の中にある同じ細かい心の線の顫動はそのまゝにまた續いて行つた。

しかし英子の夫に對する神經は、日增に尖銳にまた細かくなつて行つた。いくら夫がそれをまぎらさうとしても、その行動には、ちやんとリズムがあつて、女の許に出かけて行く時の狀態はすぐわかつた。次第に英子は夫は今頃は何をしてゐるか、女の許に行つて戯れてゐるか、それとも一緒に何處かに行つてゐるか、酒を飮んでゐるか、手を握り合つてゐるか、遠く離れてゐても、それが一々はつきりと眼前に見える樣になつて來た。忘れ難い亡母に對する悲哀に續いて、今度は性に對する焦燥がかの女を脅かした。

かの女は今にして初めて性の世界を深く見廻すやうになつた。かの女は今まで滅多に見たこともない新聞をも手にするやうになつた。また、夫の許にやつて來る手紙や書類にも自分ながら不思議に思はれるほど細かく注意を拂つた。哲太のゐない夜は子供達が皆眠りに落ちて了つた後までも、ひとりで長火鉢の傍に坐つて赤い顏をして、進まぬ裁縫の針を動かしてゐた。悲哀がをり〳〵波のやうに押寄せて來て、急霰のやうな淚がその頰を傳つて落ちた。

涙と激情と覺醒とが深く深く綯ひ交ぜられた。
　英子の觀察したところに由ると、それは勿論世間知らずの、漸く女として眼覺めたばかりのかの女の觀察であるから、普通さうした遊蕩の亭主を持つた怜悧な細君のやうに、歸つて來た夫の着物の移香で女に逢つて來たか來ないかを知るといふやうな、またはちやんと亭主との間に一度女に逢つた罰金をいくらいくらときめて置くといふやうな、さういふ細君の機敏な細かい觀察はないに相違なかつたけれども、それでも、哲太がかなりに深く――思つたより深く、その女に心を移してゐるのを英子は否定することは出來なかつた。英子は一度はわざと妬かないやうな風をして、寛大な餘裕のある心を持つてゐるやうな恰好をして、かげから其本當の狀態を知らうと試みた。
　その時あるところまで哲太は話した　陰翳もあり日向もあるやうな心の言葉、汲んで見ても、汲んで見ても、何處までが本當で、また何處までがお世辭であるが、何處までが女自身のまことの心で、何處までが自分の稼業のために媚びた形か、それが恐らく哲太自身にもわからないのであらうが、その細かい心の雜り合つた形が、時には英子の胸を躍らせ、時にはまたその胸を沈ませた。
　一夜哲太がさながら大事件でもあるかのやうに、今夜行かなければ自分の男としての一分が立たないと言つて、烈しい語氣をあとに殘して、留めても留まらず、あたふたと玄關前の小石を踏み散らして出て行つた後では、英子は殊に心を惱ました。何が何だかわからないやうな氣がした。夫が平生その女に

哲太がいかにその女に捉へられてゐるか。それは新に目覺めた英子の眼にかなりにはつきりと映つて理解された。もう昔のかの女でない英子には、母親のゐる中は平氣で意にも留めなかつたやうな些少なことまで今は一つ一つ頭に蘇生して動いて來てゐた。英子は自分の城壁と信じた家庭に、いつの間にかいろ〳〵な形になつて、その女の入り込んで來てゐるのを見遁すことが出來なかつた。柄に似合はず哲太が着物に贅澤になつたことの中にも、または今まで氣にもしなかつた時計の鎖や財布に注意するやうになつたことの中にも、昔のやうに無頓着に鬚などを生してゐずに、小まめに床屋に出かけて行くといふやうな形の中にも、皆な細かにその女が入つて動いてゐるので、その他にも、或は寫眞箱の中のカビネ形の寫眞に、或はそれとなく贈物として送つてよこした物品の中に、或は女がお酌から一本になり立ての頃に使つたといふ三味線に……。それは哲太がある時何處からか持つて來て、出來もしない癖に肥つた膝の上に載せては滑らせ、載せては滑らせてボツ〳〵彈いたものであるが、初めは買つて來たのか貰つて來たのかわからなかつたが、いつわかるともなく、それはその女のものであるといふことが段々英子には飲み込めて來た。哲太は皙金の袋に包まれたその三味線を茶の間の長火鉢のところの柱へと常にかけて置いた。

その他にも、哲太の不用意に饒舌る言葉の中に、書齋の轉寢のメリンスの夜着の中に、又は朝夕の食物の膳立の小言の中に、ひとり物思はしげに一ところを見詰めて考へてゐる哲太の瞑想の顏の中に、いつも細かくその女が織り込まれて動いてゐるのを英子は見た。そしてそれに母親に別れた英子の悲哀と

柄な眼のはつきりした女であつた。

哲太にもそれはよくわかつた。其頃には、もう哲太も無下には、妻の辛勞を挑發するやうな言葉を口にしないやうになつてゐたが、その言はなくなつたことが、却つてかの女の深い底の心を傷つけた。

英子は朝は屹度佛壇の前に行つて、眼に涙を湛へて線香を上げた。末の女の兒は、餘り長く母親がそこに立つて何か口の中で言つてゐるので、不思議さうにしてぢつとそれを見てゐたりした。彼女の心では、さうして相對してゐれば、母親がそこに出て來て、莞爾した顏を見せて呉れるとさへ思はれたのである。

『今日はお祖母さんと口をきいたよ。』などと英子は幼ない女の兒に言つた。

かの女は家の周圍にある花といふ花を採つて來ては供へた。沈丁花、山吹、こゞめ櫻、それから躑躅、アネモネ、杜若、ゐぞ菊、睡蓮などに及ぶほどそれほど時が經つても、それでもかの女は猶ほ佛前に香花を供へることをやめなかつた。

女の月々あるもの丶ある前後には、殊にそれが色濃く烈しくかの女を襲つた。かの女は朝から赤い昂奮した血色をして、こめかみに頭痛膏などを張つた。

哲太は『時』の行爲以外に、曾てはデカダンであり、征服論者であり、欲するものは何をやつても好いと思ふエゴイストであり、または浮氣な誇張的なドン●ヂヤンであつたかれを、さうした魂が、眞劍が本當の力を以て絕えずかれを脅かして來るのを感じた。

たけれども、中風のやうな半身不隨で、口も利けず、手足も動かすことが出來ず、そのまゝに五六日ゐて、そして死んで行つて了つた。

英子は身も世もないやうな氣がした。葬式をすまして歸つて來ても、母親はもうこの世にゐないとは何うしても思はれなかつた。いつものやうに玄關の格子戸を明けて、杖をついて、腰を曲げて、赤い血色の好い顏をして、『英、ゐたかや。』と言つてやつて來るとしか思へなかつた。また里に出かけてさへ行けば、その二階の一間に、ちやんと道具や火鉢を揃へて、嫁や息子から離れて、眼鏡をかけて元氣よく縫物をしてゐる母親がゐるやうに思はれた。かの女は涙を流した。殆ど他の見る目にも氣の毒なほど涙を流した。寢れば母親に逢はれぬ涙、それが世間を知らないかの女であり『知らぬが佛』のかの女であるがために、その行動が一層深く哲太の心を動かした。大勢の子供の母であるかの女は、今はあらゆる辛勞と艱難とをまともにその身に負はなければならなくなつたのである。些少な子供の着物の柄の選擇にも、大きい兒の着物を下の兒に讓るための裁縫の相談にも、襤褸のつぎはぎにも、何にも彼にも相談相手にした母親は、突然ゐなくなつて、あらゆることの正面にかの女は立たなければならなくなつたのである。かの女は朝起きるとから、眼を眞赤にして、子供達を早く學校に出してやる朝飯の支度に取りかゝつた。漬物を切る俎板の上に涙がほろ／＼こぼれた。

中でも、母親の死に由つて、一番深く蘇つてかの女に迫つて來たのは、哲太のかげにかくれたその小

も男に對してアットラクチイブであるらしい女であつた。星はかの女と一廻りほどちがふ丑の三碧。

しかし妻の英子は、T事件の餘焔が此の頃ではすつかり覺めて、世間でも餘り哲太の身の上を問題にしないのを心安く思つた。臺所から賣つてやつた紙屑の中から哲太の行動を其筋で調べたといふ話や、哲太と同じ友達の身の周圍に刑事が常に影のやうに添つてついて歩いたといふ話や、其他いろ〳〵なさうした或る壓迫から起る不安は、此頃では餘程もう少くなつてゐた。『まア、女狂ひをしても、その心配よりは好い。』かう英子は時には思つたこともある。しかし實はその心配よりも、却つて女の方が本當は心配であるといふことが、やがてぢり〳〵とかの女の體と心とに迫つて來た。

哲太が Durtal のやうな孤獨を痛感して、旅から旅へと歩くやうになるまでには、その心と體との周圍に、さまざまの苦痛が取卷き、種々な歡樂が喰ひ込み、またはデカダンでゐることも出來ず、思ひ切つた驀進も出來ず、好い加減な妥協も出來ずに、つぶさに辛い艱難の心の歷史を閱したが、妻の英子の心の狀態にも、虛榮から眞實の道に達するさびしい悲しい出來事があつた。

その出來事はいろ〳〵あつたが、その中でも一番大きな影響をかの女に齎したのはそれは他でもなかつた。母親の身の上に襲つて來た突然の死であつた。母親は勝手元で俎板で大根を切つてゐながら、『苦しい――』と言つて卒倒した。平生持病にしてゐた腦が俄にやつて來たのであつた。英子がその報を得て驚いて行つた時には、母親はまだ生きてはゐたけれども、眼は大きく明いてかの女を見ることが出來

らなかつた。母親は中年時代に十分さうした經驗を嘗めて、好い男の夫のために自分の持つてゐた金も使はれ、散々さうした苦勞をやつて來た人だけに、表面では娘を心配させないために、大したことのやうに言はないけれども、かげでは窃に哲太の行動に目を注いで、英子から種々な細かい材料を得るやうにと心懸けた。それが、その母親の心づかひが此頃では英子にも次第にわかつて來た。英子は母親と自分の間にもある障壁があり、また自分と夫との間にもそれがあつて、自分は矢張孤獨であるといふやうな心淋しさを段々覺えた。

『哲太は行くかな?――此頃でも……』

かうそれとなく母親に訊かれて、

『矢張、始終働いてますからね。時には遊びにも行かなくつちや氣がつまるでせう。』

こんな風にわざと打消して言はなければならない辛さをも英子は覺えた。

哲太が相手にした大勢の女の中から、次第に一人の女がはつきりと浮び出して來たのは、T事件について心配した年から二三年經つた後であつた。初めはそれが何れだかわからなかつたが、郵便箱に入つてゐた手紙の女がそれらしくもありまたそれらしくもなかつたが、時が次第にそのかげにゐる女の眉目を明かにしてかの女に見せた。

それは何方かと言へば、小柄な、背の低い、髮の餘りに濃くない、しかし眼のはつきりとした、いかに

やうになつて來た。その頃哲太の遊蕩は益々募つた。家を明けることも段々多くなつて行つた。初めは容易に信じなかつたかげにゐる女も、いつかかの女の心と體に交渉を持つて來てゐるのを感じた。かの女は次第にかの女の呼吸してゐた今までの世界の空氣が破れて、そこに更に深い全く變つた世界のあることを思はずにはゐられなくなつた。

第一に、自分が心配になつて來た。子供の大勢の群が心配になつて來た。家が心配になつて來た。夫の生活を、心理狀態を、世間に於ける位置を、思想を、月々の經濟を自分が全く知らずにゐたことが心配になつて來た。いつの間にか、その家庭の外にゐる女が、色の白い惡魔がかの女以上の働きと感化とを夫の上に投げかけてゐはしないかと思ふと、いつか夫の袂から出た料理店のつけだの、ある朝郵便箱の中に入つてゐた女からの手紙だのを、唯單に夫の享樂、男の道樂と言ふ風にのんきに考へて濟ましてゐることが出來なくなつた。長く展開されずに體の底に蔽はれて來た英子の心はやゝ目覺めかけて來た。

哲太がかの女を前に置いて、いろ〳〵に話して聞かせる男女の關係、淫蕩の空氣の漲つた社會、そんな馬鹿な不自然なことがあるものかと思はれるやうな世間、それは半分は戯談であるとは思ふけれど、またはかの女の不知を嘲かけて面白がる男の浮はついた心の習ひだとは思ふけれども、しかしそれを放つて置いては、男が何處まで深く陷つて行くかわからず、また自分や子供達が何うなつて行くかゞわか

く勞働すると共に、また自己の力の可能を信じてゐた。デカダンから享樂に移つて行つたやうなかれのその頃の心の狀態は、何方かと言へば、明るい浮はついたものであつた。かれは柄にもない小唄などをよく妻を前に置いて唄つてきかせた。その癖、それは節廻しも出來てゐなければ、三味線にも合はないやうなものであつた。かれの心は、妻の前で女の惚氣をわざと言つてきかせるほどそれほど輕かつた。妻の心もまたそれを平氣で笑つてゐるほどそれほど輕く且盲目であつた。

『いくら言つてきかせても、お前にはわからない。』

『わからなくつて、丁度好いんですよ。』

丁度正月近く、幼ない子供達が『いろはたんか』を持ち出して遊んでゐたので、その一つ一つに託して、誰は『年寄の冷水』だとか、誰は『芋の奕えたも御存じなし』だとか言つて、家庭の人達をそれにあてはめて笑ひ興じた。

『お祖母さんは「老いては子に從ひ」だね。』かう子供達は笑ひながら言つた。

『知らぬが佛！　さうだ、お前は「知らぬが佛」が好い。さうだ……。非常によく合つてゐる。』かうかれは妻に向つて言つて、いかにも面白さうにして笑つた。

しかし流石に『知らぬ佛』でありまたは長い年月を同棲しながら、家庭の主人としてより以外に全く哲太を知らずに過ぎて來たやうな妻の英子も、次第に子供と母親との愛にのみ沒頭してゐられなくなる

かうある時慨くやうにかれが言ふと、

『貴方、子供、子供ツて、子供の愛に溺れてゐるやうにいつも言ふけども、子供なんかちつとも欲しくはありませんよ。世話が燒けて爲方がないんですもの……』

『だツて、女は子供が出來ると、男に對する心持がぐつと變つて來るに違ひない。子供さへありや男なんか何うでも好くなつて來ると見えるんだ……。もうおしやらくをして亭主の機嫌なんか取らなくつても好くなると見えるんだ……』

『そんなことはありませんよ。子供に追はれて、おしやらくをしたくつたツて出來ないんですもの。』

『だつて、世間を見て見ろ。男が道樂を始めるのは、若い時か、でなければ、子供が二三人出來た頃からだから。そこに兩性の間に横はつた深い眞理があるんだ。交渉の出來ないやうな區別があるんだ。女は子を一人でも餘計に拵へて育てるのが本分、男は一つでも餘計に種を下ろすのが本分……。』

かう笑ひながら哲太が言ふと、

『また始まつた！』

かう言つて、妻はそんな戲談には忙しくつて相手になつてゐられないといふやうにして向うに行つた。

しかしその時分には、哲太にはまだ Durtal のやうな孤獨はやつて來てゐなかつた。かれは一面烈し

或は妻にしては、世間を知らない妻の身にしては、他の女が、屋外にゐる他の女がさうして家庭の中に入つて來るといふことさへ十分には信じられなかつたらしく思はれた。『そんな馬鹿なことが出來るもんですか。戲談ばつかり言つてる。誰がそんなことを……』かう言つたことも、一度や二度ではなかつた。

哲太の性慾の目覺めの最初の對照であつた或る女學生が同居してゐた時分にも、だから妻は平氣な無關心な態度を取つて、却て第三者達から心配された。細かい心理の颶風のやうに捲き起されて來た時にも、かれの妻は平氣で子供と母親の愛に沒頭した。

『お前、心をよくしめてゐないといけないよ。』

かう母親から小聲で注意された時には、哲太かれ自身の言葉は戲談として平氣で訊いてゐたかの女も、さうしたことがこの世間に澤山あるのかと思つて眼を瞬つた。

T事件前後には、それでもかれの妻は心配した。MSが往來したり、Oが牢獄に繋がれたりしたので、もし、哲太の身にもそんなことがあつたらと思つて、一家離散の光景を取留めなく頭に浮べたりした。

『馬鹿を言へ、さういふ思想に似た思想を持つてゐたからとて、何にもわるいことをしない奴がドシドシ牢に打込まれて堪まるものか。』かう哲太は半は笑ふやうに半は叫ぶやうにして言つた。

『女ツて言ふものは、何うしてさう子供ばかりが生命なんだらうな。』

んで了はなければ、子供が三四人出來ても、完全に夫の所有物とはならないやうなものだが、かれの妻は殊に最も多くさうであつた。それに、母親はごくその近くにゐた。ひとりで、やさしい、深切な、孫達の爲めにも好いお祖母さんとして……。從つて、かれの妻は自分の惑ふことが出來た時、または淋しい辛いやうなことに邂逅した時、さういふ時にはいつもきまつて母親の許に走つた。そして莞爾した世路の辛酸を嘗め盡した老いた母親の皺の寄つた顏を見て、それで滿足して、何も彼も忘れたやうにして歸つて來た。

その時分、哲太はよく夜遲く郊外の自分の家の門を叩いた。かれは大抵は醉つてゐた。時には玄關の中に入るとそのまゝいきなりそこに打倒れて、その大きな體を室に、蒲團の中につれて行くのに妻は一方ならぬ困難を感じたやうなこともあつた。また時には、玄關の戸をドン／＼叩いて、その頃いくらか馴染になつてゐた女の名を呼んで、『おい、小勝、寢たのか――小勝。』などと言つて入つて來ることなどもあつた。

或る時には、書齋の本箱の抽斗の中に、ある藥品とある處に使用する或る道具とが入つてゐて、それを哲太は持つてよく厠へと行つた。そして哲太は蒼い苦しさうな顏をして、『罰だ、覿面な罰だ！』などと言つてゐた。その病氣に就いても、妻は深く知ることがなかつた。

ふことをかれは次第に痛感して來た。

異性の中でも、殊に最も深く知つてゐなければならない筈のものは、かれの妻であつた。しかし、かれは妻を本當に知つてゐるだらうか。また本當にそれを得てゐるであらうか。妻は子供の性根のまだ失せない頃からかれと同棲して、旨目的に、無意識的に、さう生れ附いたものだからさうしなければならないといふやうに、または結婚すれば妻のやうに、子が生れゝば母のやうにやつて來なければならないといふやうに全く何の感覺も何の意識もなしにやつて來た。そしてかれと妻との間には五人の子供が出來てゐる。何の不思議も不自然もないやうにして出來てゐる。そしてかれもかれの妻もお互にそれを何とも思つてゐなかつた。恐らく妻にしても、自分の夫の體の組織を知らないと同じやうに、かれも亦異性としての妻の體の組織を知らなかつたのであらう。一番深く互に知らなければならない夫妻にして既にさうした形である。空想を食物にして生きて來たドン・ヂヤンもその空想を一氣にかい捨てなければならない時が來た。

妻は初めはそれを信じなかつた。かれ等の家庭に、さうした世間の多くの家庭が入つて來やうとは思はなかつた。自分の信じた同棲者にさうした性慾の目覺めが來たとは信ずることが出來なかつた。それに、その頃には妻はまだ母親の手離しかねた末の娘であつた。娘といふものは、人の細君となつても、多くは容易に夫のものとならずに、矢張母親の所有物と言つたやうなところのあるものだが、母親が死

船の港の氣分がそことなくあたりに漂つてゐて、女達は一種他と異つた調子で素朴な竹枝を唄つた。座敷には、蠟燭の灯が薄暗くちらつき、涙に似た蠟は長く垂れ、蒼い位に色の白い若い女は、かれの Vital Force の贄として不自然にかれの傍に一夜侍した。その女は、狹い室に吊るための蚊帳の吊手のカンをあたりに鳴らしながら、小聲で、浮き河竹の中にゐるもの丶悲しい唄を唄つた。その唄の聲は今だにかれの耳にあつた。

その最初の狹斜街からDurtal が苦しんだやうな境に達するまでには、尠くとも十餘年の月日が經過した。そしてその長い月日は半は生命の浪費、肉體の浪費であつて、半は深淵の底に沈んで輝いてゐる眞珠を獲るための努力であつた。初めはあらゆることも、あらゆる思想も、強大なかれの Vital Force を以てすれば、直に實行することが出來ると信じた。ちよつと出來ないやうなことがあつても、それはある些細な障礙で、その障礙はすぐ除き去ることが出來ると信じた。そしてかれは何遍も何遍も無意味な同じ生命の浪費を繰返した。かれは次第に疲れて來た。さうした外面的のことはすべて興味を惹かなくなつて來た。今まで自分はあらゆるものを獲てゐると信じてゐたが、實は一つも本當のものを把握してゐなかつたことがわかつて來た。

人間の情緒の奥に潜んでゐる些細なあるあらはれをも、または性慾の上にをりくヽ起る處の祕密な發展をも、對者として自分が取扱つてゐる異性の體の細かい組織をも、何も彼も本當に知つてゐないとい

たどつていつか元に戻らうとしつゝあつたのを知らなかつたのである。かれは自暴自棄の赤く爛れてゐる境に滿足してゐることが出來なくなつた。單に、征服と勝利とに甘んじてゐることが出來なくなつた。深淵の中の毒草や赤い花の匂ひを嗅いだだけで滿足してはゐられなくなつた。かれはその底に深く沈んでゐる眞珠を獲んことを欲した。少くともその白くかゞやく光にだにも近寄つて行かんことを欲した。哲太の苦悶は實にそこから始まつたのであつた。

かれはＭＳと往來した時分の驀進の空氣の中から次第にデカダンの空氣に浸り、それにも滿足が出來なくなつて、同じく享樂にしても、本當の眞劍のものを求めるやうになつて行つた。かれはまたをりをりかれの性慾の發達についても考へた。センチメンタルな少年、女性を太陽のやうに眩ゆく感じた青年、聖教徒のやうな禁慾から何も知らない子供としか思へない妻を持つた夫、さうした路を歩いて來たかれが、俄に性慾にある目覺めを感じて行つた形は不思議であつた。そしてその目覺めは單に性慾ばかりでなく、今まで當然展開せらるべくしてしかもその機會のないために展開されずに殘されてゐたVita Force の力強いあらはれであつた。かれが平野の寺の妻になつた女と相識つたのもその頃である。また、かれはその時分はじめて東北の或るふるい港で、狹斜街といふものを知つた。そのさまは今でもをりをり繪となつてかれの眼の前に現れた。その夜は月が明かであつた。廓は港の公園の後を劃つた美しい松林を越えて行つたところにあつたが、かの西鶴の筆にも上つた處だけに、今でも古い衰へた昔の和

魂を刺戟する不思議な色彩をした花の匂ひや、捉へたいにも捉へ難い眞珠の光などに心を引摺られて行つてゐた。浮び上りたいと欲する心は、深く沈まうとする心と同じであつた。そのためにかれは深く苦しんだのである。

女から女へと移つて行く中は、まだ問題が簡單であつた。美しい肌や、色彩深い姿や、形の好い髪形や、三味線の爪彈に合せて唄ふ小唄や、郊外にある靜かな離座敷を持つた料理屋や、其處に朝早くから沸く綺麗な風呂や、風呂から出たところにある大きな鏡に映る女の顏や、その鏡臺の抽斗の中に女の使ふ三本足と男の用ふるブラシとが一緒に雜つて入つてゐるさまや、夜着の襟當にくつきりと出てゐる助六の似顏の繪や、大勢の着飾つた女達の中に埋れたやうにして醉ひ痴れてゐる形や、人の情緒を動かさずに置かない艶麗な北州の舞踊の扇のひらめきや、正月の白襟紋附や、潰島田や、口々に鳥の囀るやうに近寄つて來る『お目出度う。』や、さういふものに心を動かし、興を催してゐる中は、底にデカダンに通ずる深い孤獨はありながら、猶淺い道樂な遊蕩氣分でゐられたけれど、深淵と言つてもまだ僅かにその淵に臨んで好奇の憧憬を起してゐる位の位置であつたけれども、一度その淵に身を沈めたが最後、容易に其處から出ることの出來ないのを次第にかれは痛感するやうになつた。

哲太はをり〳〵獨りで、さうなつて行つた心の徑路を考へた。右せんと欲するものがいつか左せんとしつゝあつたのである。前に進まうとしたものが、いつか後に退かうとしてゐたのである。圓の周圍を

車場のプラットホオムで止めた。それはそこらには似つかない大きなプラットホオムであつた。下には別な線の電車がボギイ車を連結させて、凄じい地響をさせて通つて行つた。大きな時計は夜もその數字がわかるほどに明るい電燈に照されてゐた。

何うかすると、哲太はそこで友達の二三に逢つた。

『何方へ？』

『ちよつと……』

言葉を濁らせて答へた後にはもう女が強くかれの身體を惹いてゐるのを感じた。

『何うも郊外は夜は闇ですからな。何うしても、明るい方へ行きたくなりますな。』

こんなことを友達は言つた。

Durtalの心の歷史を書いた小説を哲太は繰返し繰返し讀んだ。その本は常にかれの周圍にころがつて、いつもかれの繙いて讀むのに任せた。酒に、遊蕩に、自暴自棄に入つて行つたかれの心が次第に一つの女の心に向つて動いて行つた徑路をかれはをり〳〵辿つて考へた。古いキユラソオの壜にさした赤い花が眼に浮んで來た。

何うかして浮び上らうとするだけそれだけ、哲太はその深淵の底に深く生えてゐる毒草や、厭に人の

さの快感を思ひ出した。
ある時は Durtal は卓の上で今日の新聞を見てゐた。と、急に、その字の行間にその女があらはれて來た。その女は怒つてゐる。昂奮してゐる。眉は逆立つてゐる。女は何か聲高く爭つてゐる。Durtal は急いでそこを出た。そして教會のある方への路を闇に歩いた。

さうした種類の女は到る處にゐた。自らの肉體にのみ生命を託したやうな女、心を二つにも三つにもわけることの出來る女、男性に最も深い最も卑しい且つまた最も本當な人間の底を見せる女、男の魂を粉微塵に碎いてそして妖しい笑を口のあたりに漂はせてゐる女、自分で自分を知つてゐるやうでそして實は何も知らない女、さうした女に Durtal は矢張深く惱まされてゐた。Durtal は寺院の中に入つて、そして自らその深淵から浮び上らんことを神に祈つた。

Durtal がその苦惱を抱いて遂に中世紀の修道院の中に入つて行くまでの心の歴史を書いた小説は、青味がかつたまた黄ばんだクロオスの本であつたが、それに哲太は深く共鳴した。Durtal も矢張かれと同じ位の年輩であつた。Durtal には哲太のやうな家庭と子供とがなかつたけれども、その心は矢張デカダンの苦惱の中から入つて行つたもので、その周圍には、神と惡魔とが常にその居所を爭つてゐた。時には神が勝ち、時には惡魔が勝つた。

哲太は Durtal のやうにして、矢張、その女の方へ向つて行く足を何遍となく郊外から都會へ行く停

『雨だ……また下駄と傘だ。』かう言つてかれは笑つた。

夜の闇の中をかれは歩いてゐた。かれは成るべく灯の明るいのを見ないやうにと心がけた。細い暗い路を選ぶやうにしてかれは歩いた。

しかしこの都會には、かれの心を正しい方へ引戻して呉れるあらゆるものがなかつた。闇の空を劃る寺院の尖塔もなければ、扉をあけて罪過の懺悔者を待つ教會堂もなかつた。已むなくかれは暗い闇の路を一人淋しく彷徨した。

これまでになるまで、しかしかれは若干の罪過を重ねたであらうか。また何遍その抵抗し難き力に引摺られて、浮び上らうとしながらもその深淵に落ちて行つたであらうか。耳を嚙む女、Florence とフランスの作者の書いた女、さういふ女にかれは何遍思ひ止まつてはまた引張られて行つたであらうか。

Durtal はカフエの卓の明るい上で、酒を口にしながら、ぢつとして深くその女のことを思つた。と、空間に明るい灯の中に、その Coquettish な笑ひ顏が見えて、そして半ばあらはに現はれた白い腕と肌とが見えた。にツとその顏は笑つてゐる。いかに離れたくともこの私には何うしたツて離れることは出來ないと言つてゐるやうに笑つてゐる。『そんなに考へ込んだツて駄目ですよ。考へ込むだけ無駄ですよ。早くお出でなさいよ。』と言つて招いてゐる。Durtal はぢつとそれを見詰めた。ふとかれは嚙まれた耳の痛

行つた自分を眼前に浮べて見た。
ふと電燈が消えた。それにも拘らず、凝と見詰めた闇の中には、電線が赤く細く光つて見えてゐるやうな氣がした。暫し闇の世界が續いた。哲太はある力を考へた。このひろい宇宙の中に、その不可思議の力があつて、それが空間から電線へ、また電線から電線へと傳つて來てゐるさまと、またその力が男女の間にも細かく働いてゐて、自分の傍に寢てゐる女の呼吸の中にも續いてゐるさまとを取留めなく想像した。
ほつとまた電氣が來た。再び元の明るい細い線がチラ〳〵と動いた。
ふと寢がへりを打つた相手は、あるものに驚かされたやうに眼を明いてあたりを見廻して、
『何か言つて、貴方？』
『いや――』
『今、電氣が消えたわねえ。』
『知つてゐたのかえ？』
『知つてたわ。それから、私、何かこはい夢を見てたわ。魘されたでせう？』
『さつき何か言つてゐたよ。』
『さう――』あたりを見廻したが、サツと降り頻つてゐる雨に氣がついたらしく、『雨ですね？』

るい路を拾ひ拾ひ駒下駄で歩いて、『かうして歩いては、昨夜、何處かに泊つたことは一目で人にわかる。』などと思ひながら歩いて來たこともあつた。足駄を穿いて雨支度をしてちやんとして歩いて居る人を見ると、だらしのない自分の形と比べて、自分の遊蕩が、不眞面目が、自暴自棄が深く戒められてゐるやうな氣もした。時にはわざと反抗的に、『ざまを見ろ――』かう自分で自分と人間とを罵りながら歩いた。

かれはすぐ隣に自分の相手の寢てゐる後向の姿を見た。長い髱を、形の好い髷を、翡翠の根がけを、二三本亂れた後れ毛を、白い襟元を……。相手はスヤ〳〵と心持好ささうな呼吸を靜かに刻んで寢てゐたが、しかも何か夢でも見てゐるらしく、をり〳〵わからないやうなことを夢中で言つてゐた。

彼は深夜の狹い一室に、電燈の靜かについてゐるのを凝と見詰めた。電球の中に電氣の傳はつた細い線がキラ〳〵と光つて、をり〳〵それが震へるやうに動いた。雨がまたサッと強く降つて來る音がした。と、不意にかれの自暴自棄と、用ふるところがないのでさうした境に溺れて行つた心と、いつの間にか女に捉へられるともなく捉へられて行つた形とが、歷々とその前に展げられて見えた。それがかれには辛かつた。何をも構はず、人の笑ふのも顧みず、家庭の亂脈になるのも厭はず、唯、快樂に、慾に、酒に心を浪費してゐるかれが其處にも此處にも見えた。しかし哲太はすぐそれを打消した。『何だ。馬鹿々々しい。今更そんなことを考へたッて仕方がない。』かう思つて強く壓迫した。かれは女から女へと移つて

哲太は次第にかうした空氣に浸つて來た自分を思つた。『なアに、構ふもんか。これも人間のやることだ』かう思つて、酒に、女に、深淵に次第に一歩一歩陥つて行つてゐるかれを哲太は見た。

バラ／＼と雨のトタン屋根に當る音がする。夜半にふと目覺めた哲太は、『や、また雨かな。』かう思つて聞耳を立てた。

かなり強く降つてゐるやうである。それもさつきから降つてゐるらしく、庇の樋から雨滴の落ちる音もそれに雜つて聞えてゐる。サツと強く遠くの方を降つて行く氣勢もした。

『また、雨だな。遲くも昨夜歸ればよかつた。』降頻る雨が、ぬれた路が、傘をさして足駄を穿かなければ歸れない路が續いてかれの頭に映つた。『また、足駄と傘とを買はなけりやならない。』かう思つてかれは寢がへりを打つた。

かういふ事は既に何遍もあつた。『足駄と傘！　面白いトピツクだね。かうした社會に遊ぶものは、屹度足駄と傘について珍談があるに相違ないね。運わるく屹度降り出して來るんだからな。やらずの雨といふことがあるが、さうした言葉がある以上、矢張昔からこの足駄と傘の喜劇はあつたんだね。』こんなことを遊蕩仲間と話し合つて笑つたこともあれば、駒下駄を新聞紙に包んで抱へて、新しく買つた番傘をさして、そして雨の泥濘の中を歩いて來たこともあつた。時にはさうした家から傘だけを借りて、わ

『好いよ。』

『なら、Hね。』

『うん。』

女中はそのまゝ下に下りて行つた。代つて女將が上つて來た。女中は女將にその話をしたらしかつた。

『本當に、お氣に入つたのがなくつてね。』

かう言つて莞爾して、『これでも、いろいろ考へてはゐるんですけれども……。矢張好いのが御座いませんでね。今、誰をおかけになりまして？　Hを。あの子も好い妓ですけども、またいけない所もありましてね。』

『何でも好いよ。』

女中はまた上つて來た。

『來るかえ、Hは？』かう女將が訊くと、

『參ります。』

かうわざと押しつけるやうに言つて、『此間のやうにまた酷めちやいけませんよ。』

『よし、よし。』

『それはさうだけども……』
『貴方は一體何ういふ積なのよ。貴方のやうな人は珍らしい。Bだツて、ちやんと旨く行つてゐたものを、貴方の方から打壞してさ。BとKとを並べたり何かしてさ。さうして面白がつてゐるんだもの。誰だつて、あんなことをされちや怒るわ。玩弄具か何かのつもりでゐるんだもの、貴方は——』
『玩弄具ぢやないか。』
『玩弄具ぢやありませんよ。矢張女ですよ。』
『女ツて言ふものは皆なあゝいふもんかね。それなら、女はすべて玩弄具だ。玩弄具にすらならないやうなもんだ。だからそれがいやだと言ふんだ。』
『だツて玩弄具にするから、玩弄具のやうになるんですよ。藝者だツて、玩弄具あつかひにされゝば、玩弄具だけのことしきやしないぢやないの？』
『馬鹿に肩を持つね。』
『だツて、さうですもの。Bちやんの怒つたのなんか、私、本當に貴方の方がわるいと思ふわ……。だから、一人本當におきめなさいよ。』
『僕にはまださういふ氣にはなれない。玩弄具にしか何うしても思はれない。』
『なら、さうして置きなさいな。……その代り、つまらない眼に逢つたつて、私は知らないから……』

『あれは駄目。』
『駄目なことはありはしない。』
『ぢや、ぢかにやる？』
『好いとも。』
『また、此間のやうな目に逢ひますよ。逢つても好いの？』
『好いよ。』
『餘り好くもないでせう。』女中はいやに笑つて、『一體、貴方は氣が多すぎるんですよ。誰か一人きめてお了ひなさいよ。その方が面白くてよ。Kは何う？　いけない？　ならMは何う？』
『あんな奴爲方がない。』
『だツて、Mは貴方のことをしよつちう言つてゐるのよ。』
『だツてしやうがない。』
『本當に貴方は難かし屋ね、今度のCだつてさ。散々大騷ぎをして、人に骨を折らせて、今度こそはと思ふと、またいけないツて仰有るんだもの。困つて了ふ。』
『だツて、いけないんだから爲方がないぢやないか。』
『Cはいけないツて言ひはしないわ。』

哲太は默つてその光景を見てゐた。萬感が胸を衝いて來た。悲しい人生の縮圖をまざ〲と眼の前に突きつけられたやうな氣がした。しかしそれには頓着なく、電車はそのまゝ深夜の街頭を停留場毎に留りつゝ進んで行つた。やがて哲太の下りるべき停留場は來た。哲太は下りた。下りてからもかれはぢつと立つてその電車を見送つた。その電車はさうした破壞された慘ましい魂を運んで世界の果まで行くやうな氣がした。

『もう好いんだ。あんな奴はあれで澤山だ……。誰れか他のを聘んで呉れ給へ。』

かう哲太が言ふと、

『だツて、Yちやんだツて、あれツ切りぢや可哀相だ。』

かう肥つた女中は言つた。この女中と此家の女將とは既にかれのためにかうした女の Dozen を取持つた。女中は金を貯めるより他に樂みはないらしく、卑しい顏の表情をして、いつも厭な不愉快な追從を言つた。

『困るわねえ、貴方のやうに我儘では――』

別に困りもしない癖に、困つたやうな顏をして言つた。

『Hを呼んで呉れ給へ。』

『よし、よし、さうだ。さう君が思つて與れさへすれば好い。あいつの言ふことなんか何うでも好い……何うでも好い……』またぐつたり頭を低れた。

誰も皆夥しく酔つてはゐるけれども、それでもPとSとRとはいくらかしつかりしてゐる方であつた。

Pは席が明いてゐるにも拘らず、釣革にぶら下つて立ち、その向うにRが並び、S一人その前に腰をかけて、昂奮したしかし何處か眞面目な表情をして腰をかけてゐた。

SはRから話しかけられても、小さく點頭くばかりで、唯深く痛感したといふ風にして、Nだの　だのPだのゝ行動をぢつと睨むやうにして見てゐた。

何か言つてゐたが、突然NとKとは立上つた。車中の視線――視線と言つても、この群達と哲太とその他に中年の女が一人隅の方に腰をかけてゐるばかりであつたが、何事かと思つて、喧嘩でも始まるのかと思つて其方を見た。

『K!』

『N!』

かう互に名を呼んで、二人は感極まつたやうにして、立つたまゝ互に體をしつかりと抱き合はせた。つゞいて、『握手!』かう言つて堅く手を握り合せた。二人はよろけながら、長い間その抱き合つた身體を離さなかつた。

『貴樣は醉はんな。』
『醉つた……』
『醉はん……。だから、貴樣は冷めたいつて言はれるんだ。何も……何も……、人間は自分の持つたものを祕密にしてゐることはないんだ。我々は我々の持つて生れて來た生を有效に……有效に……最も有效に……』
あとは舌が縺れて半ば途切れるのを、
『わかつたよ、わかつたよ。』
『分かつたか、P……。わかれや許してやる……。貴樣の嬶が待つてゐるんだらう。さうだ、貴樣の嬶は可愛い嬶だ。わが黨の士だ。だからかうして貴樣を皆なして家まで送り屆けてやらうと言ふんだ。それで我々はかうして來たんだ……』胸を大きくはだけて、『酒でも飲むより他に爲方がないぢやないか。』
『本當だ。Nの言ふ通りだ……。本當だ……。酒でも……飲むより……他に……』今まで涙を流して頰りにそれを拭いてゐたKは、かう言つて赤く酒に爛れた顏を上げて、
『P!』と絶叫して立上つた。
『まア、好いから、おとなしくしてゐたまへよ。貴樣の言ふ事はすつかりわかつたよ。』PはKの顏の傍に顏を寄せて、何か一言二語言ふと、すつかり手輕く共鳴したといふ風に、

かれの行く先には、川に面した狹斜街があるのであつた。酒があるのであつた。女があるのであつた。魂を滅ぼすやうな爛れた快樂があるのであつた。泥醉があるのであつた。やがて顏を仰向け加減にして、凝と空間を見詰めたが、その顏は長い間少しも動かずに蒼白く群集の中に見えてゐた。

『何だ、貴樣は泣くのか。泣くのは止せ。見つともないぢやないか。』

かうPは留めた。

『だッて、これが泣かずにゐられ……ゐ……か。』エイと長く引張つたやうに、殆ど昂奮し切つてこらへじやうがなくなつたやうにしてKは泣いた。それは明るい電車の中であつた。少し低頭き加減になつたKの涙に濡れた蒼白い顏には明るい電氣の光線がさした。

『魂を……魂を失つて……それでも猶……猶……我々は……』

泣き饒舌るのを、隣に腰かけてゐたこれも矢張夥しく醉つてぷん〳〵アルコホルの匂ひをさせてゐたNは、

『おい、K……。貴樣は泣くのか。泣け、泣け、大に泣け。我々のために泣け。貴樣は好い男だ。血もあり涙もある男だ。實際泣かずにはゐられないぢやないか。』かう言つたが、そこに釣革にぶら下つて矢張蹌々踉々としてゐるPに、

電車は引切りなしにやつて來ては、其處に留つて、客を下ろしたり乘せたりして通つて行つた。

しかし群集の中には、さうした夕刊賣の叫聲にも頓着せずに、平氣でのんきさうにアスハルトの路を通つて行くものもあれば、角の帽子店でシャツや帽子を買つてゐるものもあつた。その時分流行つたクラッカアを製造してゐる小店では、それを買つて、風呂敷に包んでゐる庇髪の細君などもあつた。樽柿や林檎やバナヽを並べた店では、小僧が客に何か言ひながら、頻りに古新聞に包んだ果物の包に赤い紐をかけてゐた。

その時、銅像の後にある大きな赤煉瓦の停車場から、ふと群集に雜つて、外套に身を包んだ太い蝙蝠傘を持つた男がこゞみ加減に電車の方へ歩いて來るのが見えた。それは哲太であつた。

かれは混雜した四辻に來ると、サンドウイッチマンの大きなビラとその呼聲と鈴の音とにすぐ心を惹かれたやうに見えたが、そのまゝその傍に行つて、外套のポッケットから銅貨を賣子に渡して、そして夕刊と號外とを持つて、兩國橋の方へ行く電車に乘つた。

電車の中でも、窓から手を出して夕刊を買つてゐるものが二三人あつた。

哲太は腰をかけるとそのまゝ、すぐ夕刊をひろげてそれに眼を注いだ。かれはぢつとしてそれに讀耽つた。暫しは顏をも擧げなかつた。かれの頭には種々な光景が映つて見えた。やがてかれはそれを外套のポッケットに押込んだが、しかし大きな二號活字は長い間かれの眼の前にチラついて動いた。

壓しつけるやうな、悲しむやうな、または普通とは違つてゐるやうな空氣が佗しくあたりに漂つてゐた。西の方を劃つた空には、赤く濁つた夕日の色がそれとなくおぼろげに見えて、往來の氣勢から街頭の具合から、すべて何か事ありげに見えた。

『號外、號外。』

いつもそこに立つて新聞を賣つてゐる青年の聲もいやに昂奮して聞えた。

『夕刊、夕刊、號外つきの夕刊！　大變な號外つきの夕刊！』

かう叫んで自暴のやうに鈴を鳴らした。

都會の要衝な地點だけに、いつも賑やかなところであるけれども、其日は殊にごたごたした佗しい曇つた光景を呈してゐた。夕刊賣の聲にしても、日露の戰役とか、社會の新事變とか云ふやうなことを報ずる時の聲の朗かに晴れやかなのには似ず、彩しく變つた調子を持つてゐた。

『夕刊、夕刊、大變の夕刊、號外つきの夕刊！』

其處でも此處でも、さうした呼聲が高くきこえた。

人々は爭つて買つて、そして向うに歩いて行つたり、其處にやつて來た電車に乘つたりした。アスハルトを敷いた街路の隅では、その賣子の五六人が其處此處に陣取つて、新聞社から持つて來た部厚な夕刊紙の堆積から一枚一枚急いで折つてゐるが、それが間に合はない位にすぐ賣れて行つた。

臨んだ一間の中に……。

その時分である、かれの兄が病んで死んだのは――。不如意と不遇と貧窮との中に正しいしかし慘めな一生を背景にして死んだのは――。かれに取つては、兄は幼時から艱難を倶にしてやつて來た唯一の理解者であつた。また兄に取つても、かれは唯一の力ある同情者であつた。それにも拘らず、死ぬとすぐかれは兄の一生を冷かに解剖臺に上せて解剖した。兄の生活には世間に捉へられた形があるからいけないと言つた。弱者の生活だから呪ふべきものであると言つた。弱き者は死せよ、この人生の重荷に堪へられないものは遠慮なく死せよ。弱肉强食は眞理ではないが、しかし妥協の生活を行ふよりは寧ろ潔く死んだ方が增しである。兄よ、死せる兄よ、再び世に生れん時は、强者の血を持つて來れ。かうかれは兄の屍に對して言つた。そしてその言葉の終らない中に、涙は滂沱としてかれの頰を傳つて流れた。

軍人の銅像の立つてる町の四辻は雜沓を極めてゐた。

電車は右から左から不愉快な音響を漲らして動いて來た。西洋料理店、小間物店、果物商、帽子商、甘栗の招牌、煙草屋の店、あは餅屋の刺戟の強い赤いペンキ塗りの店、さうした都會の街頭を群集が右往左往に往來した。

もう日は暮れ近かつた。初冬の頃のいつもの晴れた空に似合はず、その日はいやにどんよりと曇つて、

かれは死人の皮を煙草人にして喜んでゐるデカダンではなかつた。またわざとそのデカダンを肯定して自ら甘んじてゐるものでもなかつた。從つて皮肉の底にきらめく魂と、解剖の奥にひそんでゐる不可解とがいつもかれを脅かした。かれは賑やかな街頭の夜を戰慄しつゝ歩いた。そしてかれはロシアの文學に、一時アルコオルと肉慾に沈湎して、纔にその疑惑と戰慄と壓迫との苦痛を忘れやうとした傾向があつたのと、それと同じやうな形を取つて、酒と女の許へと走つた。

かれは泥醉して電信柱に突當つたことも思ひ出すことが出來る。激昂して盃を卓の上に叩きつけたことも思ひ出すことが出來る。同じ群の人達とあるレストランに寄り集つた時、柄にも似合はない獅子吼をして人を驚かしたことも思ひ出すことが出來る。人生を何うすることも出來ない艮にたとへたことも思ひ出すことが出來る。啼き喚く子供達をあさましく思つて、家庭を動物園にたとへたことも思ひ出すことが出來る。女から女へと移つて、それを玩弄物にするところに皮肉味を感じて自ら快としたことも思ひ出すことが出來る。自己の眞面目な一死は決してこの無窮の人生のために徒爾でないと信じたことも思ひ出すことが出來る。

かれは到るところにかれの慘めな姿を發見することが出來た。深夜の赤電車のがらんとした中に、または赤く濁れた無意味の快樂の中に、レストランからレストランへと蹌踉として酒をあふつて歩く群の中に、夜更の郊外の茶畑に接した垣根の中に、または馬鹿な奴だと自分で罵りながら女の澤山ゐる川に

『難有う。』

哲太はさびしい心で、筒袖姿のSが其處此處と待合室の中を歩いてゐるのを見た。つゞいて荒野の中に二人さびしく殘された主翁夫妻を思つた。いろ〳〵なことがまた押寄せて來た。MSのことからそれに連繫したT事件前後の空氣が色濃く繰返されて來た。やがて改札口が開かれて、汽車の窓から見た時には、荒野の方へと歸つて行くSのさびしい後姿が見えた。

MSが外國に行く時分の複雜した空氣が哲太の頭に絡み附いて見えた。その時分、かれは何うした態度で、また何ういふ心持で世間に生活してゐたであらうか。

MSとは無論かれは違つた考へを抱いてゐたのである。かれはMS並びにその一派の抱いた思想を餘りに空想に過ぎるものと思つてゐたのである。それに、MSは年齡から言つてもかれよりは一時代若い。言ひ換へれば一時代新しいのである。しかしMS達に烈しい驀進があつたやうに、かれには戰慄と思ふまゝにならない虛僞の世間があつたのである。反抗から來た乃至は魂に面した不可能から來たデカダンがあつたのである。あらゆるものから味つた幻滅、またはその幻滅の底に潜んだ疑惑があつたのである。何うして好いかわからなかつたのである。自分で自分の內部の活闘を凝視し客觀する餘裕を持つてゐなかつたのである。かれは皮肉な解剖と否定の冷笑とに僅にその心の平均を保つことが出來た。もとより

日の明るくさし渡つてゐるプラットホオムなどが段々はつきりとかれ等の眼に映つた。停車場の前にある二三軒の人家、それもこれ以上發展しやうにもしやうのないやうなさびれた外觀で、休茶屋らしいものもなく、大抵は荒野の開墾者がそこに生活してゐるらしく見えた。

停車場に來て見ると、丁度好い鹽梅に二十分ほど待てば上りがやつて來るやうな時間であつた。待合室には綿ネルの黑い襟卷をした老いた百姓と、此處等に見る皺のきれた田舍娘とが淋しさうに待つてゐた。

停車場の向うには、葉のすつかり落ちた林に、朝日が美しく線を成してさし込んでゐるのが見られた。

『まア、しかし、年寄には餘り心配をかけない方が好いよ。』

『え……大丈夫です。』

『父さんだツて、元氣には働いてゐるけれども、もう年が年だからな。』

『さうです……』

Sはかう點頭いた。

『また、何うしても東京に出るやうになつたら、家にもやつて來給へ。またいくらか力にもなれるかも知れないから……』

かれ等は林の中を通つて、段々野の方へと出て來た。しかし、移住者が少いので大抵は草藪で、畠などは餘り多く其處等には見當らなかつた。

昨夜は風が强かつたので、幸ひに霜は餘り深くなく、平生なら、霜解の泥濘がひどいであらうと思はれる路も、さう大して苦にはならなかつた。

Sは捷路をして、細い草路を通つてずん〳〵歩いた。

『あ、あれが停車場だね。』

『さうです……』

かれ等の前には、廣い野の地平線の末に小さくくつきりと停車場が見えた。昨日やつて來た路とは違ふと思つたら、それはかれが下りた一つ手前の停車場であるのがやがてわかつた。

『此方の方が近いのかえ？』

『いくらか近いです。』

『何うも路が違ふ、違ふと思つてゐた。』

『さうですか、昨日はあつちからお出になつたんですか。しかし、判り好いには、あつちの方がわかり好いかも知れません。』

停車場は次第に近く、その位置や、レイルにつゞいて並んだ電信柱や、その附近にある信號柱や、朝

哲太は突然訊いた。

『東京に行つて、する爲事はきまつてるるのかね？』

『何にもきまつては居りません。しかし、働くです。何でもして働くのです。體は丈夫ですから。』

かういつてSは健かな腕を見せるやうにした。

『まア、働くさ、若いんだから。』

『さうですとも……。働きさへすりや、身を粉にする氣なら、どんな事でも出來ないッて言ふことはありませんから。』

『それはさうだ……』

老いた父母のことがまた口に上らうとしたが、哲太はそれを押へた。

Sは話した。

『アメリカの兄も來いッて言ふんです。内地にぐづ〳〵してるるよりも、此方に來た方が好いッてよく言つてよこすんです。いくらでも働く爲事はあるッて言ふんです……。しかしそれには旅費が要りますから、東京に行つて、働いて、それを拵へて行かうと思ひます。アメリカの兄も、出來たらいくらか送つて呉れる筈ですから。』

『まアやるサ。』

る。哲太にしても、さうした世間を通過して來た哲太かれ自身にしても、矢張人間たるが故に、人間として生れたるが故に、猶その幻滅のその前にあるのを知らずに、かうして荒野の中をさまよつたり山の奥に入つて行つたりしてゐるのである。あの主翁にしても矢張さうである。またアメリカにあるMSにしてもさうである。

かれは續いて若い時分旅をした頃に、或海に近い峠で、若い郵便脚夫と一緒になつたことを思ひ出した。赤い頰をした肥つた元氣の好い青年であつた。それが矢張都會に出ることを唯一の希望にして、其處を黃金の理想境のやうに思つた。かれと青年とは長い二三里の峠道をさうしたロマンチックな空想を語り合ひながら步いた。海の日に光るのが美しくその峠の到るところから見えた。かれ等は峠に近いところで、林の中に入つて、パイプにする形の好い木などをナイフで伐つた。その青年は今何うしたであらうか。哲太の頭に印象されて殘つてゐるのは、今も矢張頰の赤い元氣な青年の姿であるけれど、かれも亦幻滅に幻滅を重ねて、思ひのまゝの十の一も滿足させることが出來ずにそのまゝ年を重ねたであらう。かう思ふと、その傍にとぼ〳〵步を運んでゐるSが、矢張その青年と同じやうな氣がして、人間としての苦惱が他人事とは思はれないやうに深く哲太の體に染み渡つた。

『時の間に墓になつて了ふ主翁夫妻の苦惱も悲哀も、この都會にあくがるゝSの苦惱と悲哀と同じではないか。また自分のかうして處を得ずして放浪してゐる心と同じく續いてゐるのではないか。』

としつゝある。否、今日ばかりではない、遠い過去にも將來にも矢張かうした若い心が絶えず生滅してゐるのである。かれは宋人の『老去功名意轉疎、獨騎瘦馬取長途、孤村至曉猶燈火、知有人家夜讀書』と言ふ詩を思ひ出した。

實際、この曉に至るまで燈火をかゝげて書を讀む若い心は悲しいと言つて好いかまた勇ましいと言つて好いかわからなかつた。彼等はその前に横はつてゐる幻滅又幻滅を知らないのである。また知つてゐても、まだ經驗をしないので、自分でやつて見なければ承知が出來ないのである。かれ等はさうして水と火とに打突かるのである。また無數の思ひのまゝにならない不可能のシインに面するのである。神と惡魔とに逢つて懊惱するのである。或るものはこの若い心を抱いて千仞の谷に身を投じて自ら殺した。またあるものは冷めたい鋼鐵のレールの上に身を横へた。またあるものはその水火に、その不可能に、その神と惡魔に虐まれて、魂を失つて、唯徒らに生活のために生活することになつて了ふのである。哲太は既に世間にあつてさうした光景に無數に接した。そしてそれは男ばかりではなかつた。女も矢張さうであつた。女も虚榮から眞實に達する辛い道を歩かなければならなかつた。新婚の夢は忽ちにして幻のやうに消えた。冷めたい家庭の空氣が續いてやつて來た。

しかし印度の聖者は言つた。『何の故に？　これも亦人間として生れたるが故に……』『人間たるが故に、目前一寸のところにさうした無數の幻滅があるのを知りながら、しかも何うすることも出來ないのであ

『そして、東京に行つて、何をやらうッて言ふんだね？』

『何だかわかりません。けども、兎に角東京に行かなけりや爲方がありません。それや、私は兄弟の中で一番馬鹿を見たんですから、總領の兄貴やアメリカに行つてゐる兄貴なんか、まだ父が元氣でしたから、中學へでも何でもやつて貰へたんですけど、僕ばかりは、小學校を出たきりなんですから。』

『しかし東京へ出たッて苦しいことばかりだよ。思つたやうに、東京に好いことばかりが待つてゐやしないぜ、君？』

『苦しいことは何んなに苦しくつたッて好いんです。何でもやります、何んなことでもやるつもりです。無意味に此處で働いてゐるよりも、その方が好いんですから……』

哲太はさうした青年の心を強ひて留めることは出來なかつた。Ｓの言ふところにも眞面目な首肯されるる若い心が儼として動いて横つてゐるのであつた。またいくら經驗したものがその經驗を引例にして言つて聞かせたところで、それが若い心に油をこそ注げ、決して理解されるものでないことをかれは十分に知つてゐた。

かれは默つて歩いた。林は林に續いた。

若い心が都會に向つて靡くさまをかれは到る處で見て知つてゐた。それは澤山に澤山にあつた。微塵數も啻ならざるほどにあつた。曾てはかれもその一人であつた。またかれの子供達もその一人にならう

かうかれはSに言つた。

Sは默つてかれの顏を見た。父母よりも、かうして野に一人取殘されて働いてゐる自分の方が一層淋しいといふやうな顏の表情を見せて……。

暫らく互に默つて步いたが、

『もう、何うしても、來月か來々月は東京に出るつもりです。とても、こんなところにゐては何にも出來ませんから。』

かうSが突如として言つた。

『でも、年寄が困るだらう？』

『いゝえ、好いツて言ふんです。貴樣のやうなものは、あてにはしてゐないから、思ひ立つたら、いつでも出て行けツて言ふんです。』

『でも……』

かう哲太が言ふと、

『それは困るには困るだらうと思ふんですけども……僕だつて、こゝにいつまでかうしてゐたつて際限がないんですから……。何も出來やしないんですから。それで、草鞋や筵なんかを夜なべにつくつて、東京に行く金にしやうと思つて、もう餘程前から心がけてゐるんです。もう、大分貯りました。』

この荒野に築くであらう。その墓には草が生えるであらう。冷めたい月が照すであらう。野は再び原始の狀態に戾るか、でなければまた新しい人が來て耕し且開墾するであらう。哲太はたまらない悲哀がその胸に簇つて來るのを禁めることが出來なかつた。

『では……』

『歸るかな。それでは……』

かう言つて立つて主翁夫妻は緣側から外へ出て來た。息子のSは、好いと言ふのに停車場まで送るのだと言つて、既にそこに來て立つて待つてゐた。

『アメリカにも手紙を出しますから……』

『何うか。さうして吳れ。そして丈夫でゐるからッて言つてやつて吳れ。』

で、哲太は別れた。家から野へ、野から林へと一步一步その姿は離れて行つた。哲太は何遍となく振返つた。最後の林の角で振返つた時にも、主翁夫妻がさびしさうにして、同じ位置に立つて、そして此方を見てゐるのを見た。

路は林の中に入つた。

『お父さんや、お母さんは淋しいんだらう。』

だと思つた。自己の本當の生活によつてのみ世界が新しくされると思つた。昔の人達の經て來た虚僞と妥協の生活は、かれの時代を以て終りとするとすら思つた。しかしそれは單に自己の建設または荒廢だけに役立つたのみで、すべては皆なすべての生活を持つてゐるのであつた。かれの生活は主翁の生活と同じやうにして過ぎ去つた。また現に過ぎ去りつゝあつた。

大きな生命の流れをかれは眼の前にまざまざと見るやうな氣がした。かうして荒野の荒屋の中に終夜眼覺めてゐるといふ形は、その大きな流れの中の點のやうなものではないか。またかれのために貴重な記念とすべき繪卷の一つではないか。――外は、晝のやうに明るいらしく、雨戶の隙から月の光がさし込んで來て、それが障子の棧のところに線をなして映つた。家の周圍を落葉のころがる音がした。

翌朝は早くわかれを告げた。

『もう滅多にお出になるやうなことはないでせうから、また、いつ逢はれるか。』

かう悲しさうにして、老主婦は別れを惜んだ。主翁にもまた元の生活にかへるのがさびしさうに見えた。

『なアに、まア、お互に丈夫でゐさへすればまたいつでも逢はれるぢや。まア働くのが肝心ぢや。人間は死ぬまで働きさへすればそれで好いのぢや。』かう元氣には言つてゐるけれども、その顏にも長い年

月馬が家の垣の外に運んで來た話などをして、過ぎ去つた昔を語つた。故鄕の城の燒けた時の話などをもした。主婦が午後にやつて來ると、哲太はいつも町の通りに燒芋などを買ひにやられた。

主翁はまだ其頃は四十にもならない若さで、『お貞さん！』などゝ母の名を呼んで、表から入つて來た。哲太に向つては『豪くならなくつちやならないぜ！　父さん豪かつたんだからな。』などゝ言つた。

かれ等はその時旣に哲太が後に經驗したやうな世間、または生活、または艱難、または男女の悲喜劇を十分に經驗して居たのであつた。今にしてその時分の繪を廣げて考へて見ると、矢張其處にも戀の渦卷や、嫉妬の炎や、孤獨や、發奮や、女が子を持つてから後の男の遊蕩や、子があるために、そのためにのみ心の離れた夫を捨て得ない妻の苦悶や、別れのつらさや、青春の亡びて行く悲哀や、その月々の晦日を苦勞にする生活難や、寒い夜風や、冷めたい月が依然としてあつたのであつた。否、美しい女の肌も、酒に亂れた宴も、二つにも三つにもわけられる女の心も、惡も、罪過も、何も彼も……。

かうした荒野の中の主翁夫妻の生活、その生活にさうした過去の繪が深く卷き納められて居るといふことは、今にしてはちよつと想像にだにも及ばないことである。また全く想像に過ぎないかも知れないのである。しかしまたさうした繪があつてそしてこの荒野へ來たのかも知れないのである。ふと主翁と哲太の母親の友情の蔭にかくれてゐる深い秘密のやうなことが考へられて來た……。

哲太は辿つて自分の通つて來た生活の繪卷を頭に浮べた。一度はかれはかれの生きた生活のみが貴重

をやつたことや、朝鮮に行つた山の青年のことや、殘雪の下に靜かに眠つてゐる和尚や、未だに都會にかれを待つてゐる女や、家庭の悲慘な狀態や、さうしたものが押へても押へても盡きずに集つて來た。夜半からは風が出て、林が鳴り、草藪がざわつき、雨戶がガタ〳〵した。隙間だらけの壁の傍に臥したかれは丸で荒野の中に身を橫へてゐるやうな氣がした。

三十年も前に眼にした生活が長いライフの中から一ところ切離した繪のやうになつて見えた。其處にはかれの母親もゐれば、新たに妻帶した兄もゐる。かれはまだ袴を裾短に穿いて元氣よく歩いてゐる青年である。それは丁度家が近い爲めに主翁夫妻とよく往來した頃で、主婦とかれの母親とは、常に長火鉢を前にして、勝手元の用事の濟んだ後の午前を、長い長い饒舌に過した。主婦は母親よりは十歲位若く、MSが、漸く三つか四つ位で、可愛い盛りで、主婦の膝の上におとなしく凭りかゝつてゐたりしてゐた。其處に兄の妻になつたばかりの嫁がまだ島田髷を高く結つて、恥かしさうにして庭を前にして裁縫に坐つてゐた。柴垣の外は通りで、さまざまの物賣の聲が往來した。

電車はまだなかつた。人は何んな遠い處でも車か徒歩で行つた。從つて町の通は賑やかで、店の前なども到る處客が大勢たかつて物を買つてゐた。なまこ漆喰の塀などもまだ處々に殘つてゐた。かれ等はまだ十分に維新後の士族の零落の艱難を脫し得なかつた。殿樣の話や、大小を挾んだ話や、扶持米を每

に撲たれたことを思ひ出した。

膳に載せられた肴には、何うせ碌なものはなかつたけれど、また町で出來るといふ地酒は、薄く且つ臭かつたけれども、それでも主翁夫妻の款待は、かれに久しく味はない心安さを與へた。かれは初めは無氣味がつて傍にも寄つて來なかつた子供達の段々かれにまつはつて來るのを見た。矢張、かうした荒野の中にも樂しい夜の團欒はあるのであつた。

主翁の口からは、開墾についての苦心やら、税が年々増加されて次第に經營が困難になつた話やら、其他いろ〱なことが飲み且話された。Socialist の群の話、それからつゞいて、大隈内閣の話、海を隔てゝ行はれてゐる大きな戰爭の話、個人思想の專制國にあらはれた形と共和國に現はれた形との差違、さうした話なども出た。Sは傍に侍して默つてそれに聞き耽つた。開墾の話を哲太が持ち出した時には、

『何うも何事も世の中は旨く行かんものぢや。百姓だつて、さう他で見たやうに暢氣なものぢやない。』

かう主翁は自己の後半生の經驗を背景にしたやうな口吻で言つた。

一枚雨戶を繰つて外廁へ行つた時には、月は既に平野を照して、薄い白い霜が刷毛で撫でたやうに林に沈んで靜に靡いてゐるのが見えた。野は原始の狀態に返つたやうに寂然としてゐた。

襟のよごれて冷たい夜着に煎餅のやうな薄い蒲團を敷いて寢た哲太は、いろ〱な思ひに襲はれて、終夜眠ることが出來なかつた。酒を飲みながら、主翁とSと三人署名してアメリカのMSに記念の端書

拘らず、珍客だと言つて、歸ると、風呂を立てたり、自分の畑で取つて手づから引いたといふ蕎麥を打つたりして待つてゐて呉れた。庇の下にある古い風呂桶の中からは、ぼつと夜霧に包まれた野や林が、やがて登り始めた月の光に銀のやうに輝き出して來るのが見え、風呂の火を燃してゐるSの顔が赤くぼつかりと薄い闇の中に浮んでゐるのが見えた。かれは風呂に浸りながら、Sに東京の話や、アメリカの話や、MSについての話などをした。青年の心をそゝるやうなことは成るたけ口にしないやうにしたが、それでもSの心は際涯なく別な世界に向つて波打ちつゝあるのを見た。Sはをり／＼深い瞑想から蘇つたやうにして、風呂の竈の中に粗朶を投げ入れた。

と、ぼつと火が燃えて、Sの亂れた頭髪と筒袖姿とが向うの壁に大きく黑く映つて見えた。

家の破れた壁、乃至障子などに張つてある石版繪や錦繪や古新聞紙などにも、この主翁が世間に離れていかに長い年月を過したかといふことが一々指さゝれた。この家の人達に取つては、曾てSのやうであつたMSと、これからMSのやうにならうとするSとを除いては、世間にあることは、あるゆる世間の變遷は、何等の交渉のないものゝやうに見えた。無數にあるあらゆる悲劇も、國を賭しての戰爭も、男女の深い煩悶も、美しい歡樂も、皆なすべて同じやうに、何の思ひをも惹かずに、破れた隙間隙間に張られて、そして年を經て、黑く煤けて行くのであつた。野から歸つて來て、緣側の壁に、十年ほど前に世を騷がした美しい男女の情死の記事の煤けて張られてあるのを見た時には、哲太は一種不思議な感

劫だからな。』

『さうでせうな。』

町から買つて來た種々なものを鞍につけた馬は、Sに手綱を取られながらも、路傍に殘つた草にをりをり心を移して立留つた。そしてシッ〳〵と聲をかけられる度に、馬はのそ〳〵と歩き出した。

暫く行つたところで、主翁は、

『俺はもう少し此方を廻つて行くぢやで、先に歸れや、お袋が待つてゐるぢやから……』

かう言はれて、すぐ點頭いて、Sはひらりと馬に跨つた。そして無言で哲太に挨拶して、鞭を一當あてると、馬は夕日のさし透つた落葉の林に添つた眞直な路を逸早く驅け出して向うに行つた。

『好い青年になりましたな。』

『駄目ぢや。若い奴等は駄目ぢや。』

かう言つて主翁はさびしく笑つた。その笑ひの中には、哲太の將來の運命が同じくさびしく微笑んでゐるやうな氣がした。哲太の眼には家庭にゐる大勢の子供達が映つて通つた。二人はそれから林をめぐつたり畠に添つたりして家路へと就いた。

強ひて留められて一夜泊つた荒野の印象は深くかれの心に刻みつけられた。主婦は老いた身であるに

『何うだつた？』

『旨く行つた。拂つた。』

この短い會話で町に行つた用事をすましたが、やがて主翁は、『そら、知つてゐるだらう。東京の……』かう言つてSを哲太に紹介した。Sは丁寧に辭儀をしたが、しかも客の體中から東京の空氣乃至世間の功名をさがしてもするやうに凝と長く哲太の方を見詰めた。Sは平生あくがれてゐる都會の文明が客を透してこの荒野に微かに波打つて來たのを感じた。若い胸は躍つた。

哲太は哲太で、ノルウェイの作者の書いた山の中にゐる青年を思ひ起した。山の彼方に雲の湧き上るのを望んでゐる青年、草の中に身を埋めて美しい世間の幻影に心を躍らせてゐる青年、さうした青年はこの荒野の中にもあるのである。哲太は續いてその幻影の時の間に崩れて行くさまを想像した。また老いた心と若い心との間に横つた悲劇を想像した。

三人は各自違つた心持を抱いて、林に添つて歩いた。しかし會話は少しもその互の心には觸れなかつた。

『この林はそれでももう大きいですな。』

『少しは大きくもして見やうと思つてな……それから、炭燒を少しばかりやつて見たことがあるぢや。これはもつと山の中ぢやが、これも手さへありや間には合ふ……。山の中ぢやな、薪にして出すのは臆

『大きくした方が好くはないんですか。』

『六年目位で伐る方が得ぢやな。』

二人はまた默つた。

林に添つた路を馬に乘つて駛つて來る青年の姿にふと眼をとめた主翁は、

『お、Ｓが歸つて來た。』

かう言つて『おーい。』と聲をあげて呼んだ。その呼聲は野から林に向つて大きく反響した。

『おーい。』

林の蔭にもう少しで隱れやうとしたその青年の馬上の姿は、その呼聲を耳にして、ふと此方を見たが、その眼には、丘の上の夕日のかゞやきの中に父親と見知らぬ人とが二人立つて此方を見て呼んでゐるのが小さく映つたと覺しく、やがて馬の首を旋らして此方へと駛らせて來た。

暫くした後には、Ｓは既にその丘の裾のところへと來てゐた。

此方から二人は下りて行つたが、哲太の眼には、筒袖を着た元氣な莞爾とした青年の姿がやがてはつきりと映つた。頭には古ぼけた帽を被つて、長く生えた髮が襟元までかゝつてゐるが、此の青年にも、矢張父親やＭＳの熱い烈しい血が流れてゐるらしく、到底荒野の開墾者の後繼者に滿足してゐられないやうな光りが眼の中に見えた。鼻から額にかけて何處かＭＳに似たところがあつた。

主翁は一度捨てた世間にまだ意があるやうに、をり〳〵足を留めて、八十近くで政權を握つた大隈内閣の話などをしながら歩いた。支那やヨオロッパの話などをもした。

丘はさう高くはなかつた。その上はやゝ平らかになつてゐて、石などがところどころに散ばつてあつた。MSが少年時代によく登つて空想に耽つたところは此處である。やがて二人はその上に行つて、石に腰をかけて休んだ。

野は今夕日に彩られつゝあつた。ところどころに林があり、それを縫つて小川が光り、路は眞直にそこから停車場の方へとつゞいてゐるのが眺められた。雲は低く赤く平蕪の上に流れた。

二人はその眺めに心を奪はれたやうにして默つて何をも語らなかつた。主翁の心にも哲太の胸にも、人生の錯雜と時の推移とがあり〳〵と浮んで見えた。

『此の下のところは、大抵貴方がやつたところですか。』

かう言つて哲太が沈默を破ると、

『まア、さうだな。』主翁も眼をあげてあたりを眺めて、『あの林があるな、あのあたりまでさうだ。』

『隨分廣いには廣いんですな。』

『何うも矢張資本がなくてはな。いくら廣くつても駄目ぢや。それでも林は割合に成功した方ぢや。皆な五六年で薪に代つて了ふんだがな。』

『今はやつてゐないんですか。』
『つい、此間までやつてゐたがな。何うも手が足りんで、面倒でな。』
『五穀では麥ですか？』
『まア、麥ぢやな……。それでも、國あたりで出來る半分も出來ないからな。勿論肥料の足りんためもあるぢやが……』
段々その畠や野――主翁が半生の心と力とを灑いだ『廢墟』が現はれ出して來た。麥の蒔かれた畠もあるが、それは割合に少く、大抵は一度耕された田や畠が再び元の草藪になつて了つたやうなところが多かつた。掘り割つた小さな水路の水は枯れて、其處には落葉が一杯に詰まつてゐた。
『盛にやつた時には、隨分百姓も雇つてやらせて見たんだがな。』
あるところに來た時には、主翁はかう言つて、昔の事業を振返つて見るやうにして、
『矢張世の中は思ふやうには行かんわ。』
果物を栽培したところもやがてあらはれて來た。それは荒野の一ところに靡いてゐる丘の裾のやうなところで、一二町の面積を占めてゐたが、もうとうの昔に棄てゝ顧みないために、址といふ址も認められない位にあたりは荒廢して、半は始めの草藪になりかけてゐた。二人は話しながら、其處を通つて、細い路を迴つて、丘の上へと登つて行つた。

「初めは餘程、廣くやつたんですか？」

かう哲太が訊くと、

『なァに此處等は荒地で、來る時は唯貰つたやうなもんぢやつたぢや。山と藪地と十二三町もあつた。その他にも、今だにこんなに廣く明いてゐるぢやから……。』

『地面が何うしてもいけませんかな？』

『俺が來た初めには、一番先に水がなくて困つた。なァに、地面はわるくつても、水さへ十分にあればと思つて、これから先一里ほど向うにある谷川の水を引いたぢや。その事業でも中々大變ぢやつたぞ。漸く水が十分に自分の畠に來るやうになるのには一二年かゝつた。それから麥もつくつて見れば、陸稻も作つて見たが、何うもいかんぢや。それから五年目には、果樹園を少しやつて見た。これも駄目ぢやつた……。』

『林檎ですか、葡萄ですか。』

『兩方ともやつて見た。林檎はかなりに出來るぢやが、何うも手がかゝつて、とても駄目ぢやのでよした。葡萄は何うも地味に合はんと見えて、蟲が澤山つくので、一年でやめた。』

『何が一番成功した方です？』

『鷄なんか旨く行つた方だな。鷄卵は一時かなりに多く出したぢや。』

ね。』

暫くしてかう哲太が言ふと、

『山なんか見て、何うするんぢやな。』

『別に何うするつて言ふこともありませんけれど……。』

『貴公も開墾でもやらうツて言ふのか。』

かう言つたが、哲太の返事を聞かずに、『まァゆつくりして行けや。久し振りだ。一晩是非泊つて行けや。蕎麥位、婆さまが打つわ。』

『これからでも遲くはないでせう？』

『山見にか？ 遲くはないがな。山なんか見たツてしやうがないぞ。まア、ゆつくり一晩泊つて、明日にする方が好い。』

『さうなさいよ。』かう傍から主婦も言つた。

『でも……。』

『行つて見るか。案内するのはわけはない。それぢや行くか。行つて俺の半生の失敗の跡でも見るか。』

かう言つて笑つて主翁は立上つた。

主翁は先に立つて歩いた。

『あるものかね、今でもかう貧乏してゐるんだもの。』

『地面がわるくつてな、此處等は……』主翁は傍から口を挿れて、

『土地が火山の灰ぢやでな。何をつくつても好く出來ない。……しかし、婆さまのやうに愚痴を滴してゐたッて爲方がないぢや。まア、働ける中は働くぢや。』かう言つて主翁は大きく笑つた。

哲太は種々なことを思はずには居られなかつた。いろいろな變遷のあつた世間を餘所に、日清日露の國を賭した戰爭を餘所に、電話、電車、自働車、飛行機を餘所に、維新の功臣の凋落を餘所に、または世間に無數にある心の悲劇、虛榮の悲劇、男女の悲劇を餘所に、かうして荒野の中に老いた老人夫妻の生活を思ふと、かれは不思議な氣がした。續いてMSの數奇な不遇な生活やら、不毛な林や野やらが一緒になつてかれの眼の前を通りすぎた。MSが中學校に通ふ時分の日記に書いてあつた野山と若い心との入り雜つた記事なども思ひ出されて來た。MSは雪の深い中を衝いて、よく東京から、この荒野の父母の許へと歸つて來た。また霜の白い寒い朝を林を横ぎつて停車場へと行つた。MSはその時分よくその荒野のことを哲太に話した。日のさし透る晩秋の林、火のやうに美しく輝く紅葉の山巒、原始の空氣の漲つてゐる原野、さういふ中からMSのやうな烈しいSocialistが出たといふことは大きな事實ではなかつたか。哲太はつゞいて主翁夫妻とMSとの間にある自分の生活を深く考へた。

『山や畠を見せて戴きたいと思ふんですが、……それも今度來た用事の一つと言へば一つなんですが

こんな田舍にはゐたくないだらうけれどな、哲ちやん。』かう主婦は話した。

總領の作は、父親が此處に引込む時、東京に獨立して殘つたが、アメリカに行つてゐるMSは、その頃十二三で、そこから一里半ほどある小學校に通つて、それがすむと、父母に强請つて、土地の中學校から東京の私立大學へとやつて貰つた。父親もまだその頃は若かつた。子供なんかあてにしなかつた。何ういふ種類の人間にでもなれ、親の扶けられるだけは扶けてやるから、とかう父親は言つた。しかし今はもうさう言つてゐられなかつた。力と賴む杖がなくては、いかに氣丈な主翁でも段々さびしく心細くなつて來た。一層母親にはそれが身に染みて感じられた。

『一番末の子は女だから役には立たんしな。Sに居て貰はなけりや本當にしやうがないんだよ、哲ちやん。此處に來てから、それは始終苦勞の仕通しをして、今になつて矢張かうして作の子供の世話までしなけりやならないと思ふと、お貞さんのやうに早く死んだ方がどんなに樂で好いかと思ふよ、哲ちやん……。』

『そんなことはありませんがね。』

『此處に來てから、二十年といふものは、それは働いたんだからね。並の百姓の上さんなんかよりも、もつともつと働いたんだから……。』

『でも、働いただけのことはあつたんでせう？』

『何ァに、哲なんか、かういふ生活も見て置く方が好いんぢや。旨いものはいつでも食つてゐらァ。めづらしくもねえ。それよりも、かういふものでも食ふ方が却つてめづらしいんぢや。なァ、哲太……』

あはゝと笑つて『それでも、今年は馬鈴薯だけはよく出來た。一株に、それは澤山についた……』

『矢張出來、不出來がおりませうな。』

『それはあるな。まァ、馬鈴薯なんかさう不出來ッて言ふこともないがな。今年は陸稻はすつかり駄目でな。』

『さうでしたか……』

『まァ、爲方がねえ。今年は馬鈴薯でも食つて、冬を暮すぢや。何うぢや一つ、東京ぢやこんな旨い奴は食へんぞ。』かう言つてまたあはゝと大きく笑つた。

哲太もそれを一つ取つた。哲太と主婦との間には、今度は東京にゐた頃の話やら、哲太の亡母亡兄の話などが始まつた。鷄が一羽、また緣側に上つて來て、何か頻りに啄いてゐるのが、午後の日のパッと照つた障子に映つて見えた。野をすぎて行く汽車の音が微かに聞えた。

主婦の口吻では、末の子のSが矢張落附いて此處で農耕をやつて呉れないのが心配らしかつた。かれ等の老いた生活の前には、何等縋るべきものなく、また光明もなく、希望もなかつた。『矢張、若いものは、

『でも、向うでも丈夫で結構ですな。』

『まア何かやつてるぢやらう。若いからな、まだ。やるだけやらなきやな……。何アに、俺なんかな、年は取つてもな、まだ五年や十年、かうして働いて行けるぢやで、此方の事は心配は無用ぢやッて言つてやるんぢやが、それでも心配になると見えて、よく手紙をよこすよ。……』ちよつと途切れて、『それでも、貴公のところにも時にはたよりがあるかな。』

『ちつともありません。』

『さうかな。矢張忙しいぢやな。』

其處に、老いた主婦が――主翁よりも疲勞と老衰との著るしく眼に立つ主婦が、茶と、ふかした馬鈴薯とを盆に載せたのを持つて來た。

『主翁はすぐそれを一つ取つて、

『何うぢや。こんなものきり此處にはないぢや、でもな、これは俺が自分で手を下してつくつたのぢやで。旨いには旨い。何うぢやな。』

かう言つてむしやむしや食つた。

『折角ゐらしても、こんなものつきりで、何もお構ひするものがなくつて……。』

傍から主婦が申譯のやうに言ふと、

想の張つた人達の生活だのが映つた。つゞいてかれはＭＳがよくかれの家にやつて來た時分のことを思つた。烈しい思潮、極端な議論、さうした波は曾ては一度この極東の一孤島にも打寄せて來て、若いかれの血もその爲めに色濃く燃えたことがあつたのである。しかし今はかれはそれ以上に自己と人生とを考へなければならなかつた。哲太はかうした荒野の中に老いた人達と遠く異鄕に離れた息子の放浪の生活とを並べて浮べて考へて、その現象の方が、實在の方が、さうした思潮や議論よりももつと深く意義のあることを思つた。

ＭＳは曾て外國に行く汽船の中から、無線電信で、この荒野の老父母に自分の消息を報じたことがあつた。その噂は哲太も間接に聞いて知つてゐた。面白いシィンだと思つた　それればかりではない、かれは折々それを頭に思ひ浮べて、その老父母が、巡査や刑事の探索に心を痛ませてゐたその老父母が、深夜に海上から來た無線電信に呼び起されたさまなどを想像した。またその老父母の喜悅を想像して、外國の作家の作の中にでもありさうなことだと思つた。

『さうだ……夜中ぢやつた。ドンドン戶を叩くものがあるぢや、何だと思つて起きて見ると、電報だといふ……。海の船の中から來た電報だと言ふぢや。あの時は、日本も、俺がかうして野良に出て働いてゐる中に、えらく開けたなアと思つたよ。』

その話をすると、主翁はかう言つて其時を思ふやうにした。

知らうとしたといふ。またその時には、この主翁は、普通の老人のやうにそれを怖れも悔いもせずに、却つてＭＳのために大に氣焔を吐いたといふ。その噂は哲太もかねて聞いて知つてゐるのであつた。

主翁が此處に開墾を思ひ立つてやつて來た頃には、哲太もまだ若くつて、さうした深いことは考へも知りもしなかつたけれど、今になつて見ると、その決意の中に、かうした荒漠とした野の中に世を離れて一人で出て來た行動の中に、その烈しい血が、激憤が、色濃く塗られてゐることを哲太は思はずには居られなかつた。其頃、主翁は警察の方に職を奉じてゐて、常に上官の明のないのを憤慨してゐた。また哲太の母や兄は常にそれを慰めてゐた。しかしそればかりがその原因ではなかつたのである。哲太は血の悲劇、性格の悲劇をまざ／＼と明かに眼の前に見るやうな氣がした。

『ＭＳさんからはたよりがありますか。』

かう哲太が思ひ出したやうにして訊くと、

『あるよ。つい此間もあつた……。あいつはそれでも總領とは違つてな。中々やつてをるわい。此間も向うの同じ仲間のとを書いてよこしたが、わしにはよくわからんが中々盛んなさうぢやな。』かう言つて主翁は立つて、あちこちをさがしたが、やがて横封の手紙と一緒に、外國の本や寫眞帖や新聞やを一まとめにしたものを持つて來て哲太の前に置いた。

哲太は手紙を讀み、寫眞帖を展げた。かれの眼の前には、大きな市街だの建物だの、またはさうした思

かう言つてゐる處に、十二三になる矢張餘り綺麗でない女の兒が來て丁寧に挨拶をした。

『このお子ですか。』

『いや、これは俺の末ぢや。此方に來てから出來たんぢや。』

『さうですか、かういふ末のお子さんもあつたんですか、ちつとも知らなかつた……。もういくつです？』

『十三ぢや。』

『さうですか。』

かう遠い過去を思ひ廻すやうにして哲太は言つた。

この主翁の次男は、今年三十六七で、曾ては哲太の家にもよく往來したことがあつた。兄弟中では學問が一番よく出來て、或る外國語の學校を苦學して卒業して、それからN社の社會主義的傾向に共鳴して、隨分過激な議論を吐いた。MSといふかれの名は、一時新聞や雜誌に喧傳されたことがあつた。ことに後には、MSはさうした思想家の中でも、過激な主張者として當局から認められて、かのT事件前後には、本國にゐることが出來なくなつて、今はアメリカに行つてゐるが、今かうしてこの主翁に對して見ると、哲太は矢張この老翁の烈しい血がそのMSにも流れてゐるのを今更のやうに思はずには居られなかつた。T事件前後には、この荒涼とした荒野の中にも巡査や刑事が度々やつて來てかれの消息を

少し前まで、島へ出てたぢや。』
『Sさんは?』
主翁の持つた三人の息子の末の子の名を言つてかれが訊くと、
『今日は馬を引いて町迄行つた。』
『それでもよくSさんだけは、落附いてお世話をなさいますね。』
『なアに、奴も東京に出たがつて、落附いて野良なんかやつてやしないや……。野良や山のことはまだこれで私がやつてゐるんぢやで……。それに、此頃は總領の作の子供を預かつてゐるものだからな。婆さまも中々大變さ。』
『あゝ、表で遊んでゐたのは、作さんの子ですか、作さん、それでも好いんでせう?』
『なアに——』と一喝するやうに言つて、『あいつも能なしでな。今だに東京でまご〳〵してゐるぢや。もう四十先だのに……まだ行先の目的が立たんぢや、もう一生浮浪人ぢや。貴公と同じ位の年ぢやな。』
『さうです。僕の方が一つ下です。』
『それに、あいつの嬶が死んでな。それでまァ、爲方がねえで、一人だけ婆さまが可哀相だッて引取つて世話してるがな。』
『さうですか、お上さん死んだんですか、ちつとも知りませんでした。それは大變ですね。』

ばかりしてゐて……。』

『いや、それは何方も同じこつちや。お袋や兄貴が死んでから、逢ふやうな折も無うてな、まア上れ、汚いところぢやが――』

かう言つて、主翁夫妻はかれを座敷の方へと頻に請じた。

かれの眼には、がらんとした農家の内部がうつた。暗い貧しい臺所が、俵や叺が二三俵ころがしてあるばかりで、他には冬の燃料しか積んでない臺所が、貧窮と零落と饑寒としか思はせないやうなあたりのさまが……。障子は破れ、壁は半ば崩れ落ちて、襤褸の置いてある日當りの縁側に鷄が上つて、何か頻に啄いてゐたが、何かそこに取りに行つた主婦は、それと見て、叱つと逐つた、鷄はコケコケと言つて羽ばたきをして飛んで下りた。

導かれた座敷もかなりに汚かつた。もう何年にも取替へたことのないやうに疊は古く黑くなつてゐて、壁の破れを日清戰爭の錦繪で繕つてあつたが、それももう長い年月を經て、その繪もはつきりとわからないばかりに黑くなつてゐた。主翁はそこらに散ばつてゐるものを片付けながら、

『百姓になつちや、これぢやからな。この通りぢやからな。』

『それでもお丈夫で結構です。』

『丈夫は丈夫ぢや。まだ、これで野良に出て働くぢやで……』腕をまくつて見せて、『今日も、もう

了つたがね。』かう言つて、急になつかしさうに、またはかうした繕はない姿と生活とを見られるのをきまりがわるいといふやうにして、そのまゝ戸内に入つて行つたが、

『お父さん、まア、めづらしい人が……、私、すつかり見忘れて了つた。哲ちやんが來たんだよ。杉仙の哲ちやんが――』

かう言つて、奥にゐる主翁に話しかけてゐる聲がした。

『哲太が……？　それはめづらしい……』奥から主翁はかう言つて立つて來たらしかつたが、かれが其處に行つた時には、そのあるじが、すつかり髮の白くなつたあるじが、維新の頃には十五六で、藩の青年組の一人で、殊に組の中の牛耳を取つて四方に往來したかれが、今は全く一個の好老爺としてかれの前にあらはれて來るのを見た。

『ヤ、哲太……。これはめづらしい。思ひもかけないこつちや……。よく來たな。』かう言つてぢつと見て、『成程お清が見忘れるのも尤もぢや、こんなに立派になつたんだから……』

もう一度ぢつと見戍つて、

『よく來たな。何うして來た……。まア、ひどいところだがな。こんなに取散してあるが、まア上れや。』

『つい其處まで來たもんですから、何んなにしてゐらつしやるかと思つて……。不斷、いつも御無沙汰

りには廣い草藪と、林と、そこを貫いて縱横に流れてゐる石川とが見られた。かれは一里ほど離れてゐるさびしい小さな停車場から歩いて來た。そこにはかれの遠い親類に當る六十五六になる老人が、二十五年も前から其處に移住して、あたりの開墾に從事してゐた。

かれは靜に瞑想に耽りながら歩いた。林は既に紅葉をすぎて、をり〳〵吹いて來る風にガサ〳〵と音を立てゝ散つた。路には半ば開墾された、寧ろいかに努力して開いても遂に遂に徒勞に歸して了つたと言ふ方が好い畠が、大根や菜の畑が、または綠り色の微かな麥の畠が、あはれにいぢけてところ〴〵に綴られて見えてゐた。

林が林に續いた。

その林の中に、かれは遂に小さな廂の低い家屋を發見した。

かれは急いで其方へと行つた。廣い庭と、長い日當りの好い緣側と、そこらに散されてあるこれからの長い冬を凌ぐための燃料と、汚い着物を着て其處等に遊んでゐる子供とが眼に附いた。

やがて奧から年の既に老いた筒袖姿の女が出て來たが、それは一目で主婦であるといふことが、遠い昔に見たことのある面影の殘つてゐる主婦であるといふことがかれにはわかつたが、黑い外套を被た髭の生えた四十先の都會風のかれが主婦にはちよつとわからなかつたらしく、怪訝さうな顏をして暫らくぢつと見戍つてゐたが、「まア、哲ちやんかね。めづらしいね。餘りお久しいので、すつかり見忘れて

かれはまた臘納臍の時を定めて無數に集つて來る島嶼を思つた。つゞいて、深林また深林、行つても行つても盡きない林の中の小さなさびしい停車場を思つた。一年中深い濃霧に埋められて日の光も見ることの出來ないやうなところに働いて生活してゐる人達を思つた。其處では、冬は氷が汽船を封鎖して了ふといふことであつた。また其處では雪が全く人家を埋め盡して了ふといふことであつた。かれは續いて其處に移住したある團隊の悲慘な冬ごもりのさまを想像した。かれはその人達の生活を撮影した寫眞を持つてゐた。かれはそれを出して來て、半日そのあたりのことを研究した。

かれの机の上には、移住民の手續の書かれた本や、案內書や、地圖や、旅行記が長い間置かれた。かれはをり〳〵それを手に取つて讀み且繙した。否、それはかりではなかつた。かれは其ためにある人をあるところに訪ねて、種々と細かい開墾の話などを聞いた。その地方からやつて來た或る友達は、多少さうした開墾の經驗を持つてゐて、廣い野山の話や、農耕の話や、川で獲れる魚類の話などをして呉れた。そして最後に、かれの空想を戒めるやうに『しかし、何處に行つたつて同じですよ。矢張同じ人間の生活があるばかりですよ。矢張、男女關係と物質とですよ。』かう言つて、何んな深い山の中にも、矢張男について行く女があり、孤獨について行く羈絆があるといふ話の例を二つも三つも擧げた。生活のための生活――それ以上には新しい意義ある生活は何處にも見出すことが出來なかつた。

或る初冬の寒い日の午後には、かれはかれの姿を荒漠とした東北の廣い野の道の上に發見した。あた

の一人として、世間から注意された菓である。かれは不思議な氣がした。『矢張、自分は空想家だ。……さうだ、確かに空想家だ。徒らに空中樓閣を描いてゐるのだ。』哲太は世間の艱難が、罪過が、すべて悉く自分に集つて來るやうなのを不思議にした。かれはその山奥の溫泉場に一月以上もゐた。

かれはまた荒涼とした北海道や樺太に住む人達の生活を頭に描いた。自然のまゝな深林、それを少しづゝ開墾して一生を終るのも決して徒爾ではないとかれは思つた。かれの眼の前には、雪に埋められた小舍が見えた。熊の餌を求めて里近く出て來る山裾の村のさまが見えた。榾火の赤く暖かく燃えてゐる夜が見えた。寥廓として際涯なき穹窿に星の金屬のやうにきら〳〵と輝くのが見えた。かれはロシアの渺茫としたステップの中に、突然訪ねて來て、一夜泊つて、そして翌朝はさびしく別れて行くといふザイチエフの『客』といふ短篇を思ひ出した。

この廣い穹窿の下にあつて、都會の功名に、又は富貴に、又は足らざるもののない贅澤な生活の中に、美しい女と酒の中に生活する人達は、『客』の中にあらはれたやうな悠遠な靜かな本當の生活を味ふことが出來るであらうか。かれは歷史にあらはれた英雄の生活と、榮華を盡した絕代の美人の生活と、またはさうしたステップの中に住む人達の生活と、何も彼も同じ穹窿の下に瞬時に現れてそして消えて行くものであることを思つて黯然たらざるを得なかつた。

またある時は、絶海の畔にあるさびしい燈臺に一夜泊つて、その世離れた孤獨の生活をかれは羨んだ。何故自分もさうした生活を得やうとはしなかつたであらうか、もし此處にさうした方面に勢力のある舊友でもあつて、自分のためにさうした位置を贏ち得て呉れるならば、それこそ何んなに深い感謝を捧げるであらうか。かう思つて、かれは燈臺の主人の話す難破船の話や、信天翁の話や、一週間毎に里から食料を運んで來る話などをさびしい波の音を耳にしながら聞いた。シエンキヰツチの書いた波蘭の老放浪者の悲劇などが終夜かれの頭に上つた。それにも拘らず、燈臺守の主人は却てかれの都會生活を羨んで、これから來る冬のさびしさや、荒涼とした海や、波の音などを佗びしがるのであつた。そしてある朝は松原遠く送つて來て、哲太の姿の見えなくなるまで見送つてゐた。

山奥の溫泉場に長く滯在してゐた時には、その溫泉宿の一軒についての株や價値などといふものをもそれとなく訊き正した。そこの主人にならうとかれは思つたのであつた。しかし矢張それはかれの空想で、容易にその周圍に同化することは出來さうにも思はれなかつた。ある日はかれは山の中に一人さびしく入つて行くかれを想像した。誰もゐない深山の中に、鳥と獸と林としかない深山の中に……。つゞいてかれは其處にひとりさびしく、自己の最後を發見しつゝあるかれを想像した。そこより他にはかれの位置はないやうにすらかれには思はれた。

かれは飜つて考へた。これが曾て盲目的に世間に向つて突進して行つた渠である。またデカダンの群

哲太は到るところで、新規蒔直しをする位置と機會とを求めた。或る町ではかれは機織業者に逢つて、その事業と生活方法との內容を詳しく聞いて、工場から工場へと步いて見せて貰つた。或る山の中では、寒天を製造する家々を歷訪して、大きな釜から白い湯氣の夥しく騰るのを眺めた。農業に關しては、人間の生活方法として一番自然で且つ一番意味がある生活と信じてゐるだけそれだけ、かれは殊に深い注意を拂つて、或は平野に、或は海岸に、或は山村に、種々な方面からその細かい狀態を研究した。時には千米突以上の高距を持つた山奧の民の生活を訪ねたり、時にはまた林を拂ひ下げて、道路を造つて、小さな製板所を持つてゐる人の生活をわざわざ草鞋ばきで三日かゝつて訪問した。

果物栽培者は殊に何軒も行つて見た。葡萄、林檎、梨、桃、さういふ人達は或は南に面した山の懷に、或は西風の吹き荒るゝ平野の林の蔭に、或は谷合の靜かな山畠の中に、小さな掘立小屋のやうな家を造つて、大きな圍爐裏に榾火を燃やしてそして全く世間と離れたやうな生活を送つてゐた。或る山の上の果物栽培者は、僅かな年月の中に努力の結果をかなりに收めて、外國風の帳場をつくつて、椅子にテイブルを据ゑて、自分の牧場で搾つた野羊の乳をかれに勸めた。かれは羨まずには居られなかつた。かれは何も彼も捨てゝ、さうした自然の中にその身を埋めて了はうかと何遍思つたか知れなかつた。しかし、一步を進めてその內部に入つて行くと、かれは常に失望した。矢張其處にも細かい厭な世間の空氣が巴渦を卷いてゐるのをかれは見逃すことが出來なかつた。

た。一つのキユラソウの墖、昔からこの寺にあつた墖、それにすらこの三つの過、現、未があることを思はずにはゐられなかつた。柱にかけてある古い鏡には、鬚の深いやつれた蒼白いかれの顔が映つた。

淡い霧の中にぴつしやりと閉ぢられた大きな堂宇の扉、そこに立つてかれは何遍『開かれざる心の扉』について考へたであらうか。不幸にして、かれには、巴里のデカダンの一人であつた作者のやうに、靜寂の完全に保たれてゐる堂宇をすら得ることが出來なかつた。名高い大きな寺觀であつたにも拘らず、其處には淨い心の一つをもかれは何處にも發見することが出來なかつた。

讀經の力で、法衣に五色の絲屑がつくといふ奇蹟を行つた老僧の許にもかれは行つて見たが、しかし失望して歸つて來た。

かれはさびしい心で其處を去つた。深い霧も、烈しい山颷も、冷たい雪も、かれに十分なる力——あらゆるものを立て直す十分なる力を與へては呉れなかつた。かれは矢張安んじて身を置くにところのないあはれな放浪者であつた。

旅から旅へとまたかれは行つた。三等の混雜した汽車の中、荒海をわたる小さな汽船の窓の下、あれ果てた宿驛の中の旅舍の一間にかれはそのさびしい姿を發見した。人生の重荷と戀の重荷とにやつれたかれを……。

めなければならないといふことをかれは考へた。

かれは旅から旅へと行つた。旅ばかりがかれに本當のことを思はせた。

半年はかれは山の廢寺の僧房で全く一人で暮した。

深く閉された半ば壞れた門、中には庇の落ち壁の崩れた小さな僧房があつて、盲人の目のやうに戸がぴつしやりと閉められてあつた。

哲太はひとりで飯を炊いて食つた。初め伴れて來た書生は、一月もゐることが出來ずに歸つて行つて了つた。かれは古い眞菰に埋れた池の中にほつかり浮び出すやうに咲いてゐる濃い紫の杜若に思ひを寄せた。夜は盲目の戀にあくがれた蛙の鳴き聲が過ぎ去つた歡樂を彼に思ひ起させた。

崖を下りて行くと、そこに隣の僧のつくつてゐる赤いダリアの花の美しく咲いてゐる畑があつたが、哲太はそれを一枝貰つて來て、僧房の一隅に轉がつてゐた古いキユラソウの壜にさして、漆の兀げた經机の上に置いた。

そしてかれは終日長く滅びて行つた昔の空中樓閣に對した。

かれは其處でデカダンを思つた。また共產主義を考へた。男女の離れ難ない羈絆を思つた。また、かれはこの廢寺の中に曾て住んだ人の址などを偲んだ。

過去が現在となりまた直ちにそれが將來になつて行くことに就ては、かれは殊に深い長い瞑想に耽つ

女、山の停車場の近くにゐる女、都會の郊外に住む新しい思想を持つたと稱する女、若い男を周圍に常に引き附けて置かなければ滿足が出來ないといふ富豪の女、乃至は海の畔に住んでゐる無知なしかし怜悧な女が、かれのドン・ヂヤンとしての行動の背景の一つ一つを色濃く塗つた。

そしてその女達には何があつたか。本能から命ぜられた盲目的情慾の發露以外に何があつたか。男から男に移つて行く歡樂の追求、でなければ種々の生殖に忽ちいぢけて滿足して了ふ赤く爛れた低級な愛情、でなければ異性の心を征服して、その征服したといふことにのみ勝利の快感を味ふデカダンな心、でなければ世間の榮華を得んがためにのみ切賣され浪費された愛情、それ以外に何があつたか、心から異性の魂まで入つて知らうと思つたものは一人でもあつたか。

更に愚劣なのは家庭である。家庭にゐる女達である。家庭の牢獄に均しいといふことは、數千年前既に印度の聖者も說いてゐるが、その愚痴と卑しい氣分と調子とは人の魂を亡ぼさずに置かないものであることをかれは思はずには居られなかつた。

かれは次第に、一木一草すら自由にならないことを痛感し始めた。と同時に征服といふ思想の不可能なことが次第にわかつて來た。かれは自分の空中樓閣が一朝にして灰燼に歸して了ふのを見た。その頃かられは旅に出た。新規蒔直しをやらなければならないと思ひ立つたのである。

女達の心に、又は家庭に、自己を完全に打立てなければならないと思つた。征服ならずに、融合を求

かれはあらゆるものの平等を欲した。あらゆる人間がかれの如くならば、世界は理想境として一大革命を來すであらうと信じた。かれは外國の人達の勇ましい偶像破壞に傾倒した。自己崇拜に傾倒した。我即ち神也の思想に傾倒した。

かれは共産主義者の群にも友達を持つてゐた。危險な無政府主義者にも一面に於て共鳴した。かれは尠くとも思想の分野に於ける新しく萠え出した芽であつた。かれは世間に行はれつゝあるあらゆるものに自ら觸れて行かうとした。否、現に觸れて行きつゝあつた。しかし果してそれが何うであつたか、如何なる結果をかれの心に齎し來つたであらうか、それは單に一朝にして土崩瓦解して行く空中樓閣ではなかつたか。

かれは惡の道に、罪過の道に一歩一歩落ちて行くことを知らなかつたのである。かれは矢張空想に捉へられてゐたのである。何でも出來ると信じたその裏には、何も出來ない、一草一木すらかれの自由にはならないといふ事實が儼として橫つてゐたことを知らなかつたのである。かれはいつの間にか思想の奴隷となつてゐたことを知らなかつたのである。思想のために魂か虐げられて居りながら、または暗々裏に魂の壓迫から來た不自然を感じて居りながら、思想といふ或る大きな型に惑はされて、この思想によつて實行を敢てしやうとしたドン・ヂヤンであつたのである。

かれは其處此處に多くの女の顏を思ひ浮べることが出來た。平野の寺にそのルウヰンを見やうとした

車窓からさびしさうに白い顔を出して故郷の人達に別れをつけてゐるRを想像した。
汽車は降り頻る雨を衝いて、ポッポッと白い烟を立てゝ山を出て行つた。

何のためにさうした煩悶と苦痛とが起つたかといふことを哲太はをりをり考へて見た。しかしその答は容易に正當に具象的にかれの胸に響いては來なかつた。それは複雜したまたはこんがらかつた糸の塊の解き易からざるに似てゐた。此方を引張れば彼方が結ばれた。彼方を解けば此方が結ばれた。世間と、生活と、自他と、男女の關係と、力の暗鬪とが、過去と現在と未來とを一緒にして深く解き難く重なり合つてゐた。

かれは曾て力の漲り溢れた若いかれを見た。また太いステッキを振舞はして街頭を濶歩してゐるかれを見た。『今が人生の盛りだ。今ほど心から生きたと思はれる時はない。』かう思つて盲目的に世間の悲喜に向つて突進して行つてゐるかれを見た。『刹那だ、一瞬間だ。それより外に何もない。反省は尠くとも衰へた心と肉體との第一歩である。忍耐は或力の壓迫に餘儀なくされたいぢけた惡德である。あらゆるものを征服せよ。他を征服せよ。生死を征服せよ。いかなるか是れ善、いかなるか是れ惡、力のある所に善惡あることとなし、道德あることとなし。』かう叫んで進んで行くかれを見た。

かれは貧しきものの必ず艱難に、富んだものの必ず貪婪に、功名にあへぐものの必ず卑屈なのを見た。

の音も、溫泉の湧き出す暖かい湯の町も、絡みつき縺れついて忘れかねる女の情も、段々Nの方へ心を靡かせて行つてやがては山の舊い家にその笑顔を見せるであらうと思はれるHをも、何をも彼をも捨てて、そして何處へ？　朝鮮へ。汚ない土壁で圍まれた低い民家と、オンドルと、南京蟲と、寒い寒い冬は零度以下に下る土地へ、ひろいひろい何處から手をつけて好いかわからないやうな荒野へ。明るい灯や美しい顏の見たくも見られない異鄕へ。

哲太はその報知の手紙をRから受取つた時には、その勇ましい心が、または悲哀が、捨てゝ自ら生きやうとした形が、自分自身がRその人であるかのやうな深い深い感激を齎さずには置かなかつた。山の別莊にゐる時分、いくらかその話を聞いて知つてゐた哲太は『好いな、俺も行くかな、何も彼も捨てゝ……。行くよ、君が行けば、俺もあとからつゞいて行くよ。』こんなことを戲談ではなしに心から言つたことがあつた。哲太かれ自身もさうした自覺に悶えてゐる身ではなかつたか。全くの一人になることを望む身ではなかつたか、

しかしかれは餘りに深く世間に浸り過ぎてゐた。Rかれ自身のやうに、一刀兩斷の快擧に出るには餘りに既に複雜した羈絆と束縛とに自らの身を縛りすぎてゐた。それを思ふと哲太は悲しかつた。

哲太はRの立つて行く山の停車場の秋雨を想像した。SやNや其他の青年が深い泥濘の路をついてやつて來て、例の素樸な言葉で、醉つて別を敍してゐるさまを想像した。またNやHの仲などを想像した。

ない質であつた。かれは何かしなければならないと常に思つた。Sのやうに、またはNのやうに物を書いたり歌を詠んだりしただけでは滿足が出來なかつた。この附近の山の村の中に流れてゐる放浪の氣分、それが一番かれに多かつた。

不思議にもこの山の村からは昔から種々な人達が出た。少時志を立てゝ代議士になつてゐるものもあれば、都會に出て立派な工場を經營してゐるものもある。從つて低きも高きも、一度は村を出て何かやつて來なければならないといふ氣分がさびしい山の村の到るところに巴渦を卷いてゐた。中には赤手にして南アメリカから巴里、ロンドンへと放浪して、また再び赤手で歸つて來たやうな青年などもあつた。

Rが色町に沈湎して、それが何うにもならなくなつたのは間もなくであつた。父は默つてかれの顏を見た。母は病床でくどくどとかれを意見した。殊に、他に嫁いでゐる姉の染々した意見は少からず彼を動かした。かれの若い血は湧いた。虛僞と欺騙と遊蕩とから再び躍り上らなければならないといふ自覺めがかれの全身を震はせた。かれは遂に志を決した。かねて話しのあつた朝鮮の農場——村の有力者の買占めて持つてゐる農場、そこに行つて、新規蒔直しをやらうとかれは思ひ立つた。

秋雨の降り頻る日、かれはさびしく山の停車場から出發した。

あらゆるものを捨てゝ、故鄕も、父母も、姉妹も、なつかしい山の高原の眺望も、朝に夕に山莊へと哲太を訪ねて行つた山花の亂れ開いた草藪の中の路も、離れ難ない色町の賑やかな空氣も、三味線と鼓

かつた。Sは若くて妻帶して、否應なしに山の中の農夫にならなければならぬ運命を負はせられた。その青年の熱い志は、妻により、父母により、又は生れた可愛い子に由つていつも押へられた。Nは温順な賢い親孝行な青年であつた。野に出て働くことを何とも思つてゐなかつた。かれは新しい歌を習つて、野に耕す間にも、手帳と鉛筆とを身から離さないやうな青年であつた。Rとは殊に氣が合つて、まだ色町にRが足を踏み入れない前には、日曜などにいつも揃つて、汽車で、湖水に添つた温泉のある町へと遊びに行つて、そこの本屋の娘のHを通りの店に訪ねて、半日面白くあそび暮した。Hも矢張歌を紫インキか何かで手帳に細かく書きつける樣な娘であつた。山に初茸の出來る時分には、二人は停車場まで行く間の松原の中でそれをさがして、澤山取つてHの店に土産に持つて行つてやつたりなどした。さうした交際は二三年續いた。ところがRが色町に入るやうになつてから、その行動をHは常にNに話した。『昨夜も來てましたよ。Rさんが、あんなに遊んで好いのかしら?』などゝ言つた。Nも何うかするとRに無理に誘はれて、さうした空氣の中に浸ることは一二度はあつたが、かれは決してRのやうに深はまりはしなかつた。Hはその話をきくと、『惡友、惡友。』などゝRに向つて言つた。

Rが山の青年達の中で一番志のある青年であることは哲太も知つてゐた。Sは既に山村の農夫である。Nも山にゐて父母の家を嗣ぐべき好箇の青年である。唯、Rばかりが山にぢつとしてゐることの出來

しいやうな心がしたり、陰で皆なが、その相手の女すらが、自分の何も知らないのを笑つてゐるやうに思はれたりして、自分の經驗の淺いのをわれと自分であざ笑つたやうなことも尠くなかつたが、しかもいつとなく引摺られて、次第に賑かな色町の空氣がその身から心から離れることが出來なくなるやうになつた。兎に角、これも經驗だ、人間のやることだ、捉へられさへしなければ好い、かう心ではちやんと理解してゐながら、哲太が山に滯在中、平生言つてゐた色戀のことなどをも深く胸に留めて置きながら、しかも深い刹那の戀の牽引力はいつもかれの足をそつちへと向けさせた。『なァに、へえ？　あいつらは？』など、一應さうした世界の空氣に通じてゐるやうな言葉を表面に言ふことはあつても、しかも自分の毎日勤めてゐる村の銀行の椅子の上では、片時も色町の賑やかな灯と三味線とそのぞめきとから心を離すことが出來なかつた。かれの勤めてゐる銀行は、山寄りの庇の高い板葺のつゞいたさびしい村の中にあつた。それは村長をしてゐるかれの父や、親類や、村の富豪などが寄り合つて、地方の農耕、養蠶、または肥料を買ふ時などの農夫達の金の融通機關として建てられた銀行であつた。從つてそこにつとめてゐるRは、勤めに行くと言つても、家か乃至は親類へでも行つてゐるやうな氣安さであつた。同僚は皆子供時分から共に騷いだ惡太郎達で、中には矢張山の別莊に一緒に哲太を訪ねて行つたSもゐた。RはSと共に色町へも出かけて行つた。

かうした山の中の青年達も、しかも時期が來れば、ひとり手に生活の波に觸れて行かなければならな

『いくら丈夫だツて、馬鹿〳〵しいや……』青年の身にしては、さういふ世界は全くこれからの自分等の所有で、老人などの與り知らぬものゝやうに思へた。

青年達は、可笑しいやうな、不思議なやうな顏色をして、其處等に働いてゐる爺さん婆さんを見た。婆さんは、時には、近所の林の中に行つて、其處等に出てゐるいろ〳〵な茸類を取つて來て、皮をむいたり、わるいのを選んで捨てたりしてゐた。さういふ時には、哲太はそこに行つて話した。かれは農婦に似合ない白い腕と細い指とを見遁すことが出來なかつた。そこには Coquetry とか、Adultery とか言ふ心持の老いても猶痕を留めてゐるのをかれは見た。かれは婆さんの前生涯を想像した。

その青年達の一人であるRが朝鮮へ立つて行つたのは、その翌年の秋のことであつた。Rはいつの間にかその未知の世界に、歡樂の世界に思つたより深く身を浸してゐたのであつた。かれは矢張さうした最初の蕩兒が誰も踏んで行くやうな道程――撥を手にする女に、門構への洒落れた緣などの綺麗に拭き込んである家に、續いて明るい灯の晝のやうな廓に、深酒と駄洒落とおべんちやらと追從との中に、鼓と三味線の湧くやうな高樓に、人を馬鹿にしたやうな脇息を中年の女から勸められるやうな一間に、長襦袢姿で女のソツと靜かに入つて來るやうな深夜の空氣に、さういふ風にして段々深みへ入つて行つたのであつた。元氣な快活な聰明なかれは、初めは顏が赧くなつたり、馬鹿にされたやうに思つたり、淺ま

て燃やしてなどゐたが　今度行つた時には、鼻とも茶呑友達ともつかない五十位の婆さんが一緒に寢泊りして、頻りにやさしげにその世話をしたりほころびを縫つてやつたりしてゐるのであつた。飯はいつもその婆さんが運んだ。

ある時、哲太は笑ひながら、山の青年達に言つた。

『どうも、西鶴にでもありさうなシインだね。よつぴて、睦まじく話してゐるからな、爺さん、婆さん。去年女をつれて來て、此方で見せつけた仇を今度は打たれるわけだね。』

『戯談ずら？』

『うそぢやないよ。本當だよ。それに、あの爺にしても、まだ一人で暮してゐるのはさびしいやな。』

かう言つて哲太は笑つた。

『本當かな……。何うも戯談らしいぞ！』

『戯談なことがあるもんか。だから、今夜は此方に枕をして寢やうと思つてゐるんだ……何うも寢られなくて困るからな。』かう言つて哲太は笑つた。

『あいつら、何ずら？　お互に棺桶に足を踏込んでゐる手合ずらに――』

Nといふ青年はかう言つて聲をあげて笑つた。

『だつてまだ丈夫だからな。』

の中にゐるのに同情して、降頻る秋雨の山路に濡れながら、わざわざ訪ねて來る村の青年達もあつた。その青年にかれが其話をすると、『さういふ時に、女と男と一緒にゐたら、唯ぢやすむめい。えらい騷ぎが持上がるずら？』と言つて笑つた。

『えらい騷ぎどころぢやないよ。さういふ時に及物三昧がよく始まるんだよ。敵の肌に刄を當てなければ滿足が出來ないやうになるんだよ。』

『さうずらな。』

青年はかう言つてまだ經驗しない未知の世界を搜すやうな眼色をして言つた。

青年達に取つては　さうした境は不可思議のやうにも、また禁ぜられた果實のやうにも思はれるらしかつた。またその前途に樂しく橫つた世界のやうでもあつた。否、その青年の群の中には、逸早くその世界に突進して、その甘い果實の汁に手を著け始めたものもあつた。その青年はRと呼ばれてゐた。

Rは他の青年達と違つて、赤手でその危險な世界に飛び込んで行くやうな男であつた。『困るな……』かう心配して哲太が言ふと、『大丈夫ですよ。ハメを外すやうなことはありませんから。』かう言つて一つ二つ經驗した果實の旨さをかれに話した。

さうかと思ふと、そのかれのゐる別莊の留守居に、六十ばかりになる岩乘な爺がゐた。初めに行つた時にも、次ぎに行つた時にも、その爺は全く一人で暮してゐたが、圍爐裡の中にさびしさうに榾をくべ

まで上つた。しかし女は何うしても男に離れやうとしなかつた。爲方がないので、親類の人達は、一先づ女と農夫とを山の家に伴れて來て置いた。土、鍋釜、七輪、手桶――さういふもの丶中にかれ等は小唄にでもあるやうにして暮した。これがもしその農夫の妻に子供が一人でもあつたなら、その問題もある違つた形を取つたであらうが、不幸にもかの女には子供がなかつた。――丁度その頃であつた。その女と切れる切れないの悶着中であつた。哲太はゆくりなくそこに行つた。

『とても、さう簡單にはすまないと思ふね。男女の間はさう第三者の言ふやうにならんもんだから。』

かうかれは其話を聞いて言つた。

それが次に行つた時には、『い丶鹽梅に、手切れですみましてな、――今ぢやあの男も落附いて家に歸つてゐますよ。上さん大喜びでさ。』かう言つてその村の人達は話した。しかし話はそれで The end になつてはゐなかつた。一年後に妻に子供が生れた。不幸にしてその子は半年ほどして死んだ。その前後になつて、前の女は再び停車場附近の茶屋にその姿をあらはした。若い農夫もをり〳〵は出かけて行くらしい形跡があつた。辛い暗鬪は始まつた。ある夜は、風雨の降り頻る中に、妻は夫の身の上を案じて、寧ろ女に對する嫉妬に燃えて、草藪の深い露をわけて明るい停車場の灯の方に出かけて行くのに哲太は逢つた。

その時はかれは山の別荘に十日ほどゐた。村の人達はよく訪ねて來て吳れた。かうしてかれの一人山

として捲き上がる或る眺望臺では、氷に滑る階梯を辛うじて登り究めて、暗い凄じい荒海を眺めた。
雪の深く降り積つたある山村では、そこに移住して來た果物栽培者の貧しい悲慘な家族をたづねた、その家族ですら、榾火の周圍に僅かに寒さと餓とに戰ひつゝ希望のない將來を見詰めてゐるやうな人達ですら、猶さうして旅から旅へと彷徨つてゐるかれよりは幸福に思はれた。かれは寧ろ全く今までの羈絆を捨てゝ、人知れない山の村に新規蒔直しの生活をしやうと思つて、ある山の田地を見に行つたことすらあつた。しかし、山の中にも本當の生活は求めることは出來なかつた。外形は原始時代に見るやうな純な空氣と穩かな氣分とを持つてゐるけれども、一度その中に入れば、矢張形式と習慣と虛僞とが羊の皮を被つて存在してゐるのを見て失望した。
これに、さうした山の中にも、矢張女が綺麗な着物を着、白粉や臙脂を塗つて、一年中養蠶に、農耕に勞力を費して得た人達の金を捲き上げた。何處に行つても、夜は明るい灯と酒と女とがあつた。山奧の製板所にまでかれ等は入つて行つた。
かれはある時は大きな山の裾に展開された廣い松林に對して日を暮した。そしてその松林の中にも、矢張明るい灯があり酒があり女があることを想像した。否それればかりではなかつた。かれは村の人達の家庭に對して、その女達がいかに非常に恐ろしい强敵であるかといふことを痛切に感じた。
かれはある若い富んだ農夫を知つてゐた。その農夫はさうした種類の女に迷つて、終には親族會議に

れから南に向つて五六里の道を行かなければならなかつた。寒い西風の吹く路を、山の雪のきらきらと輝く平野を、または大きな河に添つた土手の上を、更に佗しいのは、この殘雪の平野にすら留ることが出來ずに、刺戟の多い都會に、爭鬪の多い世間に、一度足を踏込めば何うしても出ることの出來ない泥淖の中に、複雜した辛い心の巴渦を卷いてゐる中に戻つて行かなければならないことであつた。かれはかれを待つてゐる悲慘な家庭を想像した。また箇の上に箇を無理に築き上げやうとする世間を想像した。張詰めた心でなくては一刻も押されずに生きて行くことの出來ない社會を想像した。心の黎明などは遂に遂に得られさうにもなかつた。

かれは續いてかれを待つてゐる平野の中の小さな停車場を想像した。そこから都會に向つて動いて行く汽車を想像した。車は遂に來た。

今度ばかりではなかつた。かれは四五年前からあちこちの旅へと出かけた。かれは落附いて家庭と世間とに雜つてゐることが出來なかつた。かれは心の赤く爛れて行くことを恐れた。次に再び恐ろしい泥淖の中に陷ることを恐れた。かれは靜かに考へるところを山の隅、海の畔にもとめた。

かれはさびしいその旅の姿を到るところに發見することが出來た。北海の怒濤の音の地を捲いて來る旅館の一間では、その時分心の主であつた女にやる手紙を書きかけてそして破つて捨てた。風雪の暗澹

町長さんのわる口をよく言ふのは……。』

『兎に角、えらい騷ぎだつた。あゝいふことを毎晩やるのかえ？』

『そんなことはないけど……。でも、お氣の毒でしたね。寢られなかつたでせう？』

『歸つたのは、もう一時だつたね。』

『さうですよ。私達が寢たのは三時でしたもの……。』

『藝者はあれつきりゐないのかえ？』

『え……、あのお婆ちやん一人きり、それに、あの人には子供があるのよ。五つになるのが――。それでも藝はいくらか出來るんださうだけれども、田舍はしやうがないわね。』

『何處から流れて來たんだえ？』

『熊谷でせう、屹度……。東京にも行つたこともあるさうですよ。散々いろんなことをして來たんでせう、もう……。』

『ぢやア、まア、今は旦那がゐるわけだね。旦那の子かえ？』

『さうぢやないんでせう……』後を言はずに女は笑つた。

車の來る間を、哲太はこんなことを言つて、朝飯の準備の並んだ餉臺を前に、女を相手にして坐つてゐた。かうした輕い氣分の會話を交へてゐるにも拘らず、かれの心は重苦しく且佗しかつた。かれはこ

『君も隨分やつたよ。手拍子を打つて、ドウ〳〵廻りをしてたぢやないか。』
『だつて、あゝでなくつちや、田舍では納まらないんだもの。』
『何も彼も皆な知つてるよ。逸見の禿ちやんッて言つて追懸けられたのも知つてるし、町長のわる口を誰かゞ言つてゐたのも知つてるし、拙いサノサを唄つたのも知つてるよ……。それからお客が歸つてから、あら！　煙草がもつと殘つてゐるかと思つたら、一本しきや殘つてゐないッて君が言つたのも知つてるよ。』
『私ぢやないよ。あれは、留ちやんだよ。』
『君だよ。』
押しつけるやうに言つて、『すつかりお浚ひをして見やうか。』
『よう御座んすよ。』
『して見やうか？』
『だつて、しやうがないんだもの。藝者が年増だから、私達があゝして騷がなけりや駄目なんだもの。』
『しかし、本當によく騷いだもんだ。……それから、お客の中の一人にいやに酒癖のわるい奴がゐたぢやないか。』
『え……、武藤さん。あの人はこのぢき近くの金持の旦那ですけど、質がわるいのよ。あの人ですよ。

『毎朝かうですか。』

『何時でもさうだ……。』

かう言つて、爺もその樓上を仰いで見たが、そのまゝ向うの方へと歩いて行つた。

かれは本堂から町の通に出る間を歩きながら、此の本尊が七八百年の長い年月をかうして此處に鎮座してゐることを頭に繰返した。私の父母も、祖父母も、皆な此處にお詣りに來た。駕籠に乘つたり、ちよん髷に結つたり、長刀を挾んだりして……かれはまたこの本尊を勸請した歴史に名高い髮を涅めて北國に戰死した健氣な武士のことをも頭に浮べた。無限に長い過去であつた。また無限に長い將來であつた。その長いライフの流れの上に、かうして一夜來て泊つて黎明の境内を歩いてゐるかれの姿の背景には、矢張無限の人達の悲喜と明暗と深い心理とが展げられてゐるのであつた。

町の通りではまだ誰も起きてゐなかつた。唯半鐘臺のみが高く平野の朝霜の中に立つてゐた。

『昨夜はすつかり聞いちやつたよ。えらい騷ぎだつたね。かうした人があんなに騷ぐかと思ふと、變な氣がするよ。』

かう笑ひながらかれが言ふと、女も流石にきまりがわるいといふやうにして、『私ぢやないんですよ。お清さんですよ。』

ないではないか、またかれの一生にもさうしたあざやかな力強い黎明が來さうにも思はれぬではないか。

中門から表門へと長く通じた敷石を隔てゝ、御堂の四周をめぐる深い杉の林の樹間には、赤い美しい黎明の空が、やがて生れて來る大きな日輪を豫想させつゝ、嚴かに四邊にひろがり渡つてゐるのが指さゝれた。

朝早くからお詣りに來る人達の下駄の音は、凍つた敷石の上にカラコロと音を立てゝ響いて聞えた。早起の子供達は、いつまでも佗しい臥床の中にあるに堪へられぬやうに、赤い毛糸の襟卷などをして、元氣よくこの寒い境内へとやつて來てゐた。ところぐ、家屋の蔭、樹の根元、屋根の隅々とに殘つた雪は、凍つて固くなつて、中には半ば泥に塗れたものなどもあつた。

中門の前に立つたかれは、不意にある生物の無限に喜び合ひ囀き合ふやうな聲を耳にした。やがてそれは朝の目覺に歡喜してゐる樓上の無數の鳩の啼き聲であることを知つたかれは、心に一種の爽かな再生の喜びの共鳴を感ぜずにはゐられなかつた。見てゐると、鳩は一羽二羽と其處から次第に飛んで下りて來た。

布子姿の顏の皺の深い爺がかれの傍を掠めて通つて行つた。

『鳩ですな、あの音は?』

『さうだ……矢張、鳥獸でも、夜の明けたのが嬉しんだんべ。』

かれはあたりを見廻した。幸ひに今起きたばかりの下男が、眠さうな眼をこすりながら、かれのために店のくゞりを明けて呉れた。かれは逃れるやうにして黎明の冷たい空氣の中に出て行つた。

冷めたい朝の空氣は刺すやうにかれの肌に染み通つた。かれは林間を透して來る黎明の光を眺めながら、靜かに、御堂の方へと行つた。そこには仁王尊の彫像のある中門があつたが、奥の本堂では、蠟燭の火が殘つた夜の薄暗い影を照して、靜かな朝の讀經の聲があたりを深く壯嚴にした。

かれは生き返つたやうな氣がした。世間の暗黑の底から嬉しく浮び上つたやうな力強さを感じた。今日に限らず、曉の空氣はかれに誕生の喜びと再生の力強さを與へるのが常であつたが、今朝は殊にそれが強くかれの心に染み渡つて感じられた。かれはこの自分の身にも、世途の艱難と辛勞とに塗みれ且疲れたこの身にも、猶再生の力が殘り、復活の思想が湧き返つて來るのを覺えた。かれは靜かに本堂の前に行つて、長い太い緒を引いて、鰐口を鳴らして手を合せて禮拜した。

この靜かな朝の讀經と、刺し透るやうな朝の空氣と、朗かな生々とした黎明の光とが、何故人間には長く續いて行かないのであらうか、何故生温い心や暖かい空氣や妥協し易い雰圍氣が午前よりは午後、午後よりは暗い夜と、いふ風に溷濁して行かなければならないのか。かれは黎明と言ふことを長い間考へて來た。心の黎明、魂の黎明、思想の黎明、さういふものに誰も皆な深く憧れながら、遂にその黎明はやつて來

四年以來さうした思ひに惱まされ通しでやつて來た。一緒に揃つて世に出て來た友人のグウルプにも、そのためかれは逢はうともしなかつた。そしてをりをりその決心を口に出して言つた。しかし、その實行がいかに難かしく、いかに不可能であるかを考へると、かれはいつも思ひ崩折れずには居られなかつた。床の上に坐つたかれの姿は後の襖にさびしく黑く映つた。

隣室では、今が歡樂の頂上であるかのやうに、皆な揃つて、醉つて、手を叩いて、何にもわからないやうな唄を唄つた。女達も夥しく醉つたらしかつた。かれ等は家も撼くばかりに、終ひにはドウドウ廻りをして室中を踊り廻つた。黄い女の金切聲は男の濁聲と一緒になつて、深夜の空氣を動かすばかりにした。

この騷ぎも、かれのためには心をまぎらせるものとしては役立つた。その騷ぎがいくらか靜まつて、客が一人二人歸る時分には、かれも思ひに疲れて、蒲團が薄く體や足が暖まらないのをも忘れて、いつかうとうとと睡眠の中に入つて行つてゐた。

しかし、寒さは、平野の冬の夜の寒さは、かれを長く安眠の境には置かなかつた。かれは朝早く眼覺めて、着物を着て、外套をはおつて、襟卷をしてそのまゝ二階の階梯を下りて行つた。

曉の光は既に窓の隙間に明るくさし込んでゐるに拘らず、家の人々はまだ深い熟睡に落ちて、容易に起きやうともしなかつた。店には昨夜騷いだ女達が煎餅のやうに薄い蒲團に滿足して、或は枕を外し、或は髮の壞れかけた髷を見せ、或は白い顏を仰向けにして、縱にまた横樣にいぎたなく睡眠を貪つてゐた。

それは魂の問題であつた。それに襲はれると、かれはいつも自分の心が、魂が粉微塵に粉韲されるのを見た。居ても立つてもゐられない樣な氣がするのを見た。かうして落附いて旅などに出てゐる自分が餘りに暢氣すぎるやうなのを見た。世間に人間にさうしたことがあるに堪へられないやうに、身がくわつとほてつて來るのが常であつた。

かれは今それが起つて來るのを此上なく恐れた。この嵐のやうな騷ぎの中に、何うすることも出來ない旅舍の深夜に、それがやつて來ては大變だと思つた。かれはつとめて心を靜かにした。わざと旅の出來事などを輕く頭に浮べるやうにした。

枕元に置いてある薄暗いランプのホヤが半は黑くなつてゐるのをかれは見た。かれはわざと心をまぎらかすやうに隣の騷ぎに耳を傾けたり、床の上にひとり起上つて見たり、立つて障子をあけて足音高く廁へ下りて行つたりした。幸ひにして、そのある物はさう強く襲つては來なかつた。次第に心から離れて行つた。

『さうだ……。それより他に路はない、一切を捨てる。第一に家庭を捨てる。次ぎに世間を捨てる。學問を捨てる』知識を捨てる。今まで築き上げ積み上げたものを捨てる。さうして新しく新規蒔直しをやる。それより他に爲方がない。それより他に、この魂を生かす方法がない。』

かう思つて、かれは手を拱いた。これまでにもかれは何遍それを繰返したか知れなかつた。かれは三

が種々と細かくかれの胸に上つて來た。續いてかれの經て來た數年來の女の色彩や影や艶かしい言葉や反古になり易い誓約などが、唄と踊りと三味線と嵐のやうな騷ぎと、女のきやつきやつと戲れる氣勢とに雜り合つて見えた。

『逸見さんの棚の達磨さんは今日始めて見た。禿ちやんに似合はずうまいな。』かう女の一人が言ふのが聞えた。

『禿ちやんはけしからん、貴樣、禿ちやんつて言つたな。お清だな。』かう言ふかと思ふと、今まで踊ををどつてゐた半老いた町長次席が、急にそれをよして、遁げ廻る女を追ひ懸けて、廊下まで出て來て、ばたばたと此方の障子や襖に突當つた。女は廊下の角でやがてつかまつたらしく、『御免なさい――』と半ば笑ふやうな聲で言つて、ギウギウ押つけられてゐる氣勢がした。

一時間、二時間經つても、その騷ぎは容易にやまなかつた。まづい都々逸も出ればサノサも出た。小女はあとからあとへと德利を運んで來た。哲太は眠られぬ一間で、老いた百姓の大きな健やかな手を思ひ出したり、馬車の後の臺で假眠を貪つた車掌を思ひ出したり、レールに飛込んだ丸い筒袖姿を思ひ出したり、町を通つて行く獅子舞の囃の音を思ひ浮べたりした。

ふとある物がかれを襲つて來た。それはかれに取つて佗しい辛いものであつた。かれはいつもそれがやつて來るのを恐れた。いつもかれはそれを押退けるやうに、やうにとつとめた。

體の暖まるよすがもないのを侘しく思ひながらうとうとしたが、彼等がやつて來た氣勢に眼を覺まされてからは、もう再び瞼を合はせることが出來なかつた。かれ等は四人か五人連であつた。何でも町の會の崩れであるらしく、來た時からしてもう大きな聲で唄などを唄つてゐた。そしてその中には、町の醫者があり、町長次席の男があり、豪農の主人があり、旋毛まがりの議論好きの有志がゐるのが段々わかつた。かれ等はもう分別盛りを過ぎた人達であつた。家にゐては一廉の主人であり父親であり夫である人達であつた。中には今の政治と政治家とを批評するやうなものもあれば、町のための事業に熱心に鞅掌するやうなものもあつた。それにも拘らず、その騷ぎは！　そのはしやぎ樣は！　その唄は！　その踊りは！　女に戲れるさまの露骨さは！

しかしさうした湯に、又さうした歡樂に、場所こそ違へ、心の持方こそ異れ、曾ては十分に浸つたことのあるかれは、それを唯無意味に煩さいとか、喧しいとか、傍若無人とか言つて非難する氣にはなれなかつた。そこにかれはかれ自身をも見出すことが出來た。また、かれ等が酒さめ、興盡きた後、ソバアな顏をして、悄氣て家路を辿るさまをも想像することが出來た。寧ろかれはさういふ單純な心の狀態にゐて、または深くその世界の底を知らうともせずに、酒と女とに輕く平凡に騷いで行く人達を羨むやうな心持がした。

一方またさうした客の相手になる女達の生活や、かうした稼業をして世を過して行く店の人達の生活

の葉を越し、山の雪の閃耀に圍まれた寒い平野を越して、二階の前の障子に震へるやうにその響を傳へて來た。

『トン、トン、トン、トン。』

かれは獅子舞の幼い子供を、又は鼓を打つてその後についてゐる男をすぐ眼の前に見るやうな氣がした。かれ等放浪者の群は、かうした日暮に食を得るための錢を求めてゐるのであつた。『自分などは贅澤だ。自分の戀の苦しみなどは……』かう哲太は思ひながら、町を通つて行くその高い囃の響に耳を傾けた。

果してその夜は嵐のやうな騷ぎの中にかれは轉輾反側した。かれは其處に酒に醉つた人達の聲と、男の女に戯れる氣勢と、淺薄な歡樂の得意とを見出した。調子外れの唄は唄に續き、節は節に續き、聲は聲に續いた。女達が階段から廊下をバタバタと歩いて行く音が絶えず聞えた。

かれ等は九時過頃からやつて來た。それ迄は靜かな田舍の旅舍の一夜であつた。向うに一間を隔てゝ、新たに鐵道を地方に敷く計畫をしてゐる男が一人二人、酌婦を相手に酒を飲んでゐたが、それはさほどかれの瞑想の邪魔にはならなかつた。彼は住職に逢つて聞いたかの女の行方を淡い心で思ひ浮べたり、現に廢墟になりつゝある女の事を繰返したり、長い人生の中に一度逢つてそして別れて行つて了ふ人達の不思議さを考へたり、落葉のガサコソと夜の風に散るのを聞いたりして、綿の固い更紗の四布蒲團に

哲太は皺の切れた手と、いやにそればかり白い顔と、客さへ見ればそれを自分の相手と思ふやうな表情とを、可哀相のやうな心持で凝と見守つた。

『向うに、客が來て騷ぐんぢやないかな。』

笑ひながらかう女に言ふと、

『そんなことはありません、大丈夫ですよ。この頃はそんなお客なんかありやしません。』かう女は笑ひながら言つて、そして火を火鉢の中に入れて、トン〳〵音を立てゝ階梯を下りて行つた。

哲太は立つてあちこちを見廻した。落葉の一杯に積つた庭、米俵や叺の入れられてある土藏、それから此方に來る深い庇の下では、はつぴ姿の指物師が、寒さうに又は勞れたやうにして、をり〳〵手を尉になつた火鉢に當てながら障子の棧を造つてゐた。日はもう暮れ近かつた。殘つた餘照は明るくしかしさびしく周圍の大きな杉森の中を照した。

室の中の田舍廻りの繪師の書いた山水の襖、拙い筆蹟の幅物、さうしたものにも人生の艱難が縮圖されてゐるのをかれは思つた。

と、急に、

『トン、トン、トン、トン――。』

といふ鼓の音が、町を通つて行つてゐる獅子舞の囃の音が、家屋を越し、夕日のさし透つた境内の杉

沼町へとやつて來た。川の上流には、河川工事の浚渫船やトロコが混雜と動いてゐて、そこから黑い煤烟がもく／＼と寒い寒い風に靡いてゐた。

その旅舍は此處等に澤山にある、遊蕩氣分の漲つてゐる家であることがすぐ一目でわかつた。で、かれは一度引返して、他に靜かな宿を町の通に搜したけれど、狹い町にはさうした旅舍は何處にも發見することが出來なかつた。かれは再びその境内へと引返した。

白粉をつけた女と中年先の主婦とがひまさうに店で將棋をさしてゐたが、かれが入つて行くと、途中でそれを止して、その白粉の女がかれを二階へと案内した。

庭に面した靜かな一間の方をかれが選ぶと、女はじろ／＼とかれを見ながら『こちらはお客があるかも知れませんから……。』かう言つて長い廊下を隔てた方の暗い一間をかれに當てた。

かれは爲方なしに其處に坐つて、女が火を運んで來るのを待つた。かれはかうした此地方の女達の生活に熟してゐた。またかうした旅舍の濁つた汚ない空氣にもかなりに深く浸つてゐた。さうした女達は、夕暮に白粉を塗つて、銘仙の着物などを着て、客の前に出て、心をも魂をも持たないやうなことを饒舌つた。かれ等はそれからそれへと流れた。體をも精神をも、または其持つた若い時をも皆をも考へずに、平氣で浪費して異性の玩弄具になつた。玩弄具を玩弄具とも知らないやうな女が多かつた。そして其の中の僅に一人二人が土地の旦那に圍はれて妾となつて、町の通りに小さな店などを出して貰つた。

やがてかれは其處から引返して、今度は庫裡の方に行つた。ある希望が不意にかれを襲つて來たのであつた。かれは思つた。『兎に角、今の住職に逢つて見やう……。そしてそれとなく先住の事を聞いて見やう。』かうかれは思つた。かれは最初唯その廢墟だけを見やう、人知れずこつそり訪ねてそして歸つて來やうと思つてやつて來たのであつたけれども、今になつてはそれだけでは物足らないといふ情が心の底から湧き上つて來た。

かれは庫裡の前に行つて、靜かに案内を乞うた。

人が住んでゐるかゐないかわからないやうな寂寥があたりを領した。案内を乞ふかれの聲は次第に高くなつた。しかし矢張りそれに應ずるものはなかつた。庫裡の上り端には小作米の上りらしい米俵が七八俵と大きな權衡と丸い桶とが置いてあつた。と、不意に三毛猫がちよろちよろと何處からか出て來た。そしてぢつと立留まつて此方を見た。その眼の中にもかの女がゐるやうにかれには思はれた。

かれは更に聲を高くした。今度は奧で微かに返事がした。つゞいて人の出て來る氣勢が襖のかげでした。

一時間後には、かれは自分の姿を流行佛のある大きな寺の境内の旅舍の一間に發見した。かれは寺で住職にわかれてから、殘雪の美しい中を流れる銹鐵色をした大きな川に架つた舟橋を渡つて、靜かに妻

ふと林の右の奥に、丸い墓石の並んでゐるのをかれは見た。それは疑ひなく歴代の僧の墓地である。かれは雪の後の路のわるいのを拾ふやうにして、又は枯草の上を求めて踏むやうにして、靜かに其方へと近寄つて行つた。かれはやがて多い丸い墓石の中に、新しい一基の墓を發見した。

それはかの女の夫の僧の墓であつた。そこには兎にも角にもかの女の一生の十年間を自分のものにした老いた僧の屍が横つてゐるのであつた。無論、その僧もかの女の魂を、すべてを得たとは言はれなかつた。腸チブスで死んだ友人も、または其處に立つてゐるかれも、完全にかの女のすべてを占領することが出來なかつたと同じやうに、かの僧も單にその肉體の把握だけに滿足しなければならなかつたに相違なかつた。かう思ふと、女性に對する男性の位置が、いかに努力してもその完全な融合を得ることの出來ない對照が、又は二にして竟に一なること能はず、一にして遂に二なること能はざる悲劇が、眞面目に深く哲太の頭に繰返されて來た。外形では、世間では二のものが一になつたやうに見えもするし、又美しい羨ましい融合の姿を見せてゐるものもないではなかつたが、しかし深く考へて、果してそれが根本の融合であるであらうか。かれは何うしてもさう思ふことが出來なかつた。かれの經驗し、體感し、又は見聞したところに由つては――。

かれは長い間其處に立盡した。しかし、かの女は兎に角十年間同棲した夫に對して普通の涙だけはその墓前に濺いだに相違ない……。

な身を挺して銃槍刀劍の林立した中に突進して行くやうなものであるけれども、それでも自分が男でありかの女が女であるがために、さうした境の開けて來ることを望むがために、いつも本當の心を開いて見せて來た。であるのに、今にして、一人すら、唯一つすらその心を得ることが出來ないとしたら、かれに取つて、それは何んなに悲しいことであるか知れない。――ふと冬のさびしい枯れた寺の庭に、野椿が赤く一つ咲いてゐるのが見えた。それがかれの今になつても猶ほかうしてあくがれてゐる唯一つの女の心ではなかつたか。

かれは靜かに寺の彼方此方を歩いた。本堂の前に行つては、階段の上に昇つて、障子を明けて、如來尊像の端坐してゐる堂内を見た。そこは向うの窓からさし込んで來てゐる夕日に明るく、金鍍をした天蓋だの、大きな須彌壇だの、派手な座蒲團の上に置かれた木魚だの、木の槌を添へた磬だのが秩序正しく置かれてあるのがかれの眼に映つた。其處にも此處にもかの女の姿が伴つて殘つてゐるやうにかれには思はれた。廢墟は完全にかれの前に展げられた。

やがてかれは其處を出て、寺の裏の方へと行つた。そこには墓地があつた。小さな要垣に圍まれた墓、新しく築かれた土饅頭、萎れた樒、色の褪めた蛇の形をした幢、その間を傳つて行つた路は、やがて明るい夕日の野に向つて開けて、ところどころ根元に雪を殘した林が向うに低く谷のやうな低地を開いた。

寺の中はしんとしてゐた。人氣もなかつた。本堂の障子の繼張りの白く黑いのが碁盤の目のやうに際立つて見えた。庫裡の傍には井戸があつた。そこに竿の短い釣瓶が伏せてあつた。

何も彼もかれにはなつかしかつた。一年前までは、かの女が其處にゐたのである。かの女はそこらにその姿を際立たせて步いてゐたのである。その井戸端にもかの女は度々その姿をあらはしたのである。或はその竿の短い釣瓶にもその手が觸れたかも知れないのである。

しかしかの女は、世間寺の大黑としての生活上にある生活を得たであらうか。老いた夫との同棲の生活以上にある聖い心を養ひ得たであらうか。恐らくは、かの女はそれを得なかつたであらう。夢にもそんなことを考へなかつたであらう。しかしもし萬が一、聖者の伴侶であつたかのS夫人のやうに、男女の外形の形を、乃至は皮相の姿を脫離して、哲太かれ自身よりも、もつと早くその泥濘の中から浮び上つてゐたとすれば、それはどんなに嬉しいまた喜ばしいことであつたか知れなかつた。その時こそかれ等は靜かに昔の戀を語ることが出來るであらうとかれは思つた。

或る感激がかれに來た。さういふ境と、欺騙乃至遊蕩の境と、何方がまことで、そして何方が純であるであらうか。そんなことは元より問ふを待たないことである。かれはかの女に限らず、凡そ今までかれに近寄つた女達の誰に向つても、さうした境の開けて來たのを望まないことはなかつた。かれは何の女に向つてもいつも本當の心を開いた。實はさうした心を欺騙と虛僞の中に開くといふことは、赤裸々

昔の聖者の心がかれに強く蘇つて來た。そのさびしい教、心も魂をも一つにしなければやまない教、死も生をも一つに融和させなければやまない教、しかもその教は人間最大の事實なる男女の間をいかに解釋したであらうか。

色、非色、相、非相、非々相、深く着したものでなければ深く脫することが出來ないとして聖者は說いてゐるではないか。着することの危險の度數の强いがために、聖者はその遠離を說いたのではないか。聖者もまた私と同じやうに色に卽くことの苦しみを嘗めたのではないか。

かれは再びはつきりと自分の位置――人生と宇宙との間に彷徨してゐる自分の位置を見た。半は世間に、愛慾に――。半は空に、淸淨に――。

かれはこれまでにも何遍この位置を離つて考へて見たかわからなかつた。何遍となくかれは泥濘の中から躍り上らうとした。しかしかれは何遍となく失敗した。それにも懲りずに、かれはまた躍り上つた。また失敗した。また躍り上つた。

時にはその努力の空しいのに腹を立てゝ、われからその泥濘の中に深く陷つて行つたことなどもあつた。考へて見れば、かうしてこの寺を訪ねて來るといふことも、矢張その努力の空しいのを語つてゐるに過ぎなかつた。

かれは溜息を吐いた。そして又靜かに步き出した。

路はだら〳〵と折れ曲つて、或は殘雪の林に添ひ、或は麥畑の縁に添ひ、或は氷の薄く張つた水田に添つて、ずつとその山門の方へと通じてゐるのを見た。

ふと一人の百姓が通りすがつた。

『K寺はあそこですか？』

『さうです……』

その百姓は、かう素氣なく言つて、後も見ずにすた〳〵と向うに行つた。

かれは靜かに歩いた。段々寺のさまは明かに指さゝれて來た。高く遠く望まれた山門もさう立派でないと言ふことも、白堊の庫裡の處々壁が落ちて崩れてゐるといふことも、鐘樓には鐘が吊るされてあるけれども、何年にも撞いたことのないといふことも、山門に達する路の敷石も不揃で歩き惛くなつてゐるといふことも、何も彼も……。

さびしい哲太の姿は段々山門近くへと歩いて行つた。其處に來ると、本堂の屋根にまともに夕日の射してゐるのが晴れやかに明るく仰がれた。

山門の前で、かれはやゝ暫く立止まつてあたりを見た。そこには寺の表札も扁額も何もかゝつてゐなかつた。かれは唯その前に二三の古い地藏尊と、酒を禁じた石の立つてゐるのを眼にした。

とは二十以上も年が違つてゐたんです。何でも非常に可愛がつて、若い奥さんの言ふなりになつてゐたさうです。かなりその寺は金があつたさうですから……。』かうその若い女は附加へて話した。

かうした田舎寺に、寒い西風とさびしい林のそよぎと白い朝霜との中に埋れてかの女の過した十三年の年月が哲太には不思議に思はれた。老いて始めて異性を知つた住職と、情熱に富んだ美しい何方かと言へば實感的のかの女との同棲乃至對照は、かれに不思議な深い境を展いて見せた。人の魂を蕩かさずに置かないその眼や、いくらか甘えるやうに男に縋つて來る裊々した姿や、いかなる場合にも臙脂と白粉を忘れなかつたさまや、さうした細かいことが一つ一つはつきりとかれの眼の前に浮んで見えた。かれは老いた和尚の情の深くかの女に絡み附いて行つたさまなどを想像した。

『もしもこれが五六年前であつたなら。』かう思つた哲太は、それと聞いてその行方をさがさずに置かないかれを想像した。また何も彼も捨てて其方に偏つて行くかれを想像した。何んな痕跡をとゞめない世間でも、屹度それを搜し出さずには置かないかれを想像した。何處までもそのあとを追はずには止まないかれを想像した。しかし今は心の狀態が全く違つた。朝鮮はおろか、何處までもそのあとを追はずには止まないかれを想像した。しかし今は心の狀態が全く違つた。冬が來た。凋落の冬が來た。さびしい姿を持つて、又は白い霜や、寒い風や、冷めたい氷や、銀のやうにキラキラと輝く山の雪とを持つて……。

ふとかれの眼は内から外へと向つた。かれは果してその前に、さびしい日影の射した廣い田畠を隔てて、こんもりとした杉樹の森のくつきりと鮮かに現はれて來てゐるのを見た。

の女には子供がなかつたので、生きてゐる中に友人がその甥を貰つて養子にして置いたが、その子をつれて――寧ろ愛慾の苦しみをその子の愛に埋めて、そしてかの女は他郷に行つた。かれは全くかの女の行方を知らなかつた。十三年の月日は忽ち經過した。今年はかの女は最早三十八である筈である。それが、今ゆくりなくかれの耳にその消息が入つて來やうとは！　また、つい一年前までかういふ田舍の寺の妻として埋れて住んでゐやうとは！

しかしかれがかうしてその廢墟を見やうとしてやつて來たのは、かの女がもう其處にゐないといふことがわかつたからであつた。かの女が第二の夫にしたこの寺の住職はもう二年前に死んでゐた。そしてそれから一年ほどして、かの女は還俗した養子と共に、再び世間へと出て行つたのであつた。廣い世間に、容易にその痕跡をとゞめない世間に……。その女の消息をかれは不思議な思ひがけないところで聞いた。それは其還俗した養子を知つてゐるある若い女からであつた。死んだ住職は其養子を寺の後繼者にする積りで骨を折つたのであつたが、若い妻が一生困らないやうな方針を立てて置いて呉れたのであつたが、養子が何うしても僧侶になるのは厭だと言ふので、それで止むなく寺の株をかなりの金で賣つて、そしてその寺から出て行つたといふことであつた。養子は二十一二で、母親と朝鮮に行つたとも言ひ、養子だけ行つて、母親は東京の何處かに留つて殘つてゐるとも言つた。『子供のない方でしたから四十近くなつてもまだ若う御座んしたよ。和尚さんですか。和尚さんは死んだ時六十一か二でしたから奥さん

てそれを押のけるやうにした。

この寺に、かれが今から訪ねて行かうとする寺に、つい一年前まで住んでゐた女は、實はかれの友人の妻であつた。名をお房と呼ばれてゐた。『お房！』かうその友人が呼んだり、『お房さん』と自分が呼んだりした頃のことが今でも歴々と眼の前に見えた。昨夜も、溫泉場の靜かな一間で、その涙に濡れた白い頬とアットラクチイブな眼とをかれは思ひ出した。

友人が腸チブスを病んで死んで行つた時には、かの女はまだ二十五であつた。若い美しい後家さんだつた。かれは今でもその派手な手絡をかけた丸髷姿を思ひ出すことが出來た。夫の死後、急に賴りなさを感じて、かれに縋つて來たさまをも細かく思ひ出すことが出來た。竊にはかれは『お房さん』又は『奧さん』でなしに『お房……』と呼ぶことが出來る身であつた。哲太は若さのために、又は人間の魂を本當にまだ知り得なかつたために、又は世間の生溫い習慣の惰性のために、思ひもかけない罪過を犯したことを考へた。そしてそれが何等かの形で一生ついて廻つてゐることを考へた。

世間の生溫い習慣の惰性のために懷されたかれ等の罪過は、その結果としてすべて世間といふものを標準にした。世間がそれを敢てさせたと共に、世間がまたそれを壞して行つた。かれ等はその結果を世間以上に持つて行くことが出來なかつた。かれ等は涙を、悲しい涙を、併し時のためには乾いて了ふだけの涙を流して別れた。かの女はやがてかれから消えた。全くとまでは行かないまでにも、九分通は消えた。か

買つた。そして其處の上さんにある寺の所在を訊いた。

『もう一二町、行つた所から右に曲るんです。少し行くと、森が見えますから、ぢきわかります。』

かう上さんは敎へて呉れた。

『まだ、餘程ありますか。』

『なアに、四五町位なもんでさ。』

で、哲太は靜かに歩き出した。さびしい、孤獨な、薄い午後の日影がぢつと魂に染み通るといふやうな氣分である。またあらゆるもの丶過ぎ去つたあとにたまさかにやつて來るやうな靜かなさびしい氣分である。『廢都』の空氣を探る詩人ばかりが或はたまさかにかうした氣分に浸ることが出來るであらう。また艱難と辛勞、激情と苦悶、さういふものを經て來た心のみが後に到つて味ふことの出來るものであらう。かれはかれの心が、かれの魂が、路傍の笹のそよぎにも、草藪の中に透つた日影にも細かく深く織り込まれて行くやうなのを感じた。

廢墟だ。すべて廢墟だ……。かう思つたかれは、歩きながらこれまで經て來た自分の生活を振返つて見るやうにした。廢墟が廢墟に續いた。光景が光景につゞいた。

そして自分は今でもその廢墟の一つをつくらうとしてゐた。かれは一つ一つそれを繰返しながら歩いた。その中でもそのつくらうとしてゐる廢墟が、一番強くかれの頭に絡み附いて來たが、かれはつとめ

かれはそれから逃れるやうにして日影に輝く遠い山の雪を仰いだ。

ある光景がほつかりと浮んで來た。汽車は非常汽笛を鳴らして停車した。窓からは顔がいくつも出た。そこは踏切であつた。殘雪が桑の畠を白く見せてゐた。矢張窓から顔を出したかれの眼には、汚い年老いた百姓の丸い筒袖姿の男が、自ら死なうとしてレイルに飛び込んだ男が、二三人の人達に頻に押されてゐるのが映つた。それは二三日前の午前のことであつた。やがて汽車は動き出した。と、其處に入つて來た若い車掌は、『もうあんな年をして、それであゝいふ不心得をするんですからな……。え、無論、鐵道規則に問はれる筈です。それに、酒の匂ひがぷんぷんしてゐましたよ。』かう言つて笑つた。車中の人達も同じやうにして笑つた。それにも拘らず、かれには、悲慘な縮圖を、貧窮の縮圖を眼のあたり見せられたやうな氣がして、その汚い筒袖の丸い姿が、いつまでもかれの眼と心とから離れなかつた。昨夜も山合のさびしい溫泉場で、獨り深くその光景を頭に描いた。それがまた今浮んで來た……。その慘めさは矢張自分の慘めさではないか。同じ人間である自分の慘めさではないか。否、人類總ての間に横つてゐる慘めさではないか。

かうした思ひを載せて馬車は時には留り、時には駛つて、殘雪の野を無關心に唯妻沼町の方へと向つて進んで行つた。後の臺のところで、車掌は矢張こつくりこつくりとやつてゐた。

利根川の少し手前で、馬車を見捨てた晋太は、一番先に、街道の角のところにある小さな店で煙草を

るのが常であるが、今日は幸ひに穩かで、暖かで、馬車の周圍の幔幕を半以上捲つて、美しい山の雪と相對することが出來た。馬車の馬は歩みも次第に緩くなつて行つた。馭者がその近くにゐる客と土地の話をしてゐるのに引かへて、車掌はほつと呼吸をついたといふやうに、後の臺に立ちながら、こつくりこつくりと短い僅な假睡を貪つた。そして時々吃驚したやうに大きく眼を明いてあたりを見廻した。

　哲太にはさうした車掌や客達の生活が眼に見えるやうな氣がした。烈しい勞働、僅かばかりの報酬、一日の仕事を終つてからの酒、かれ等にも矢張その手の屆くところに歡樂の相手がゐて、愛慾の苦痛もあれば、孤獨のさびしさもあるのであつた。父母も居れば兄弟もゐるのであつた。もう少し好い生活に向つての希望と絶望とが纏れ合ひ重なり合つてゐるのであつた。かれは不思議な氣がした。さうした生活と言ふものが、其處にも此處にも、外面は平和に、内面は烈しい巴渦を卷いて、そして猶ほその底に男と女の世界が誰にも深く色濃く横はつてゐるのが不思議であつた。ふと哲太は自分のすぐ前に腰をかけてゐる荒れた唇と半壞れた丸髷とを持つた二十八九の色の褪せた女を見た。かの女は大きな風呂敷包を膝の上に置いてゐるが、その顏の一つの皺にも、乃至はその眼の一瞬のかゞやきにも、哲太は矢張その人生と生活と男女の世界とを發見することが出來た。この女も矢張辛勞の世間に愛慾の羈絆に日夜悶えてゐるに相違なかつた。……哲太は自分が辛く辛くなつて來るのを覺えた。何も彼も破壞して了ひたいやうな激情がまた總身を熱くした。

間の經なければならないあらゆる苦痛と辛勞と歡樂とがそこにあるのである。その手は曾ては幼い小さな手であつた。また野に出て肥料をも平氣でつかむやうな手であつた。世間を渡るにつけての武器としての手であつた。否、かうした百姓でも、矢張りその手は女の手を握つたことがあるに相違なかつた。

哲太はその健かな大きな手に比べて、自分の手の蒼白く滑かに小さいのを見た。それも矢張いろ〳〵な境を經て來た手ではないか。說明することの出來ないほど複雜した心理を經て來た手ではないか。かれはその太い皺だらけの手に握手したくなつた。

百姓はその手を火の上に翳して、をり〳〵それを揉むやうにした。

馬車は眞直な路を駛つた。時々けたゝましい喇叭の音をあたりに響かせながら、又はをり〳〵立留つて路を步いてゐる近所の百姓や上さんを載せながら……。そしてその背景を廣い野が、畠が、林が塗つた。更に遠く山の雪が銀のやうに美しくきらきらと日に輝いた。

珊瑚樹の葉の厚い高い垣があつたり、霜や雪にしもけた菜の畑があつたり、日當りの暖かい緣に老婆が後向きになつて絲を繰つてゐたりした。林の影になつたところはぐちや〳〵した泥濘で、林の中の徑は半ば殘つて雪に埋められてゐた。

西風の吹く日には、この街道などは殆ど顏も向けられぬやうに、手も足もちぎるゝやうに寒さを覺ゆ

た。

『本當に好い天氣ですな。』

『風があつては、此處等ももう寒くつてな……とても出ても歩けねえ。』

『本當ですな。關東の空つ風は堪りませんな。』

やがてお誂へを聞きに來たさつきの女を其處に置いて、

『お前ら、何を喰ふ？　細いのか？　太いのか？』

『細いのが好いや。』

『お前は？』

『細いのが好いや。』

『矢張、細いのが好いか。』

かう言つて百姓は女に饂飩とひもかはとを註文した。

子供を大勢持つてゐる哲太には、その言葉の中に深い共鳴を感ぜずには居られなかつた。自分の艱難と辛勞とは、直にその農夫の體と心とに見出すことが出來るやうな氣がした。と、不思議にも、その皺の深い顏が、その太い健かな手が堪らなくなつかしくなつて來るのを感じた。

大きい健かな皺だらけの手！　そこに人生の艱難があるのである。人間として生れて來たために、人

てゐたと同じやうに、無窮の未來にも矢張この杙があるに相違ないと思つた。

何うしてさういふ心持が突然にかれを襲つて來たのか、かれはまたそこで、火に手を當てながら、蒼白い顏を仰向け加減にして凝と考へた。墓から少し來ると、松原は盡きた。そして潤い寒い野と午前の日影に明るく照された殘雪の丘とがあらはれた。哲太は首を俛れて深く心の聲に聞き惚れるやうな形をして歩いた。

この今の靜けさは、尠くともその心の狀態の連續であつた。かれは今までに經驗したことのない暖かい同情に滿ちた心の漲つて溢れて來るのを感じた。

後の大和障子が明いて、客が入つて來たので空想は破れた。

ふとかれは九歲と七歲位になる二人の子供を伴れて、綿フランの黑い襟卷をした五十先の百姓が、かれの坐つてゐる前に、何の遠慮もないやうに、又は無限のなつかし味を感じてゐるやうに靜かに近寄つて來るのを見た。

『風がねえで、暖かい好い日和ですな。』

かう挨拶して、其處に積んである座蒲團を三枚自分で取つて、二枚を子供に敷かせ一枚を自分で敷いて坐つて、大きな手をその火鉢の上に翳した。

すぐれた彫刻にでも見るやうな深い艱難と勞働との刻まれてある皺の多い顏を哲太はそこに發見し

『ひもかはで好いかね』

『何でも好い。』

女が向うに行つた後を、かれは手を暖かい火の上に翳しながら、靜かに窓障子にさし込んで來てゐる午後の日影に見入つた。靜かな心が今ゆくりなくかれを領した。孤獨が、孤獨のさびしい中にもをりをり染み込んで來る快樂に似た靜けさが……。

それは廣い長い辛い人生の艱難の中にをりをり現はれて來る靜けさであつた。何等の束縛をも、何等の對照をも、又何等の羈絆をも持つてゐないやうな、俺まで自らをも捨て、世間とも離れ、センチメンタルな情緒とも離れ、全く我一人を濶い空間に見出したやうな靜けさであつた。かれは今朝立つて來た山谷の溫泉のある村を考へた。そこから出て來る松原の中の路を考へた。そこに墓があつた。苔の蒸した丸い昔の墓もあれば、缺けて倒れて長い年月をその儘に過したやうな墓もあつた。かれはその前に長い間立盡した。何うしてさうした墓があれほど深くかれの心を惹きつけたであらうか、また何うしてあれほどなつかしくかれの心に感じられたであらうか、かれはその多い墓を何うしても冷めたい石と思ふことが出來なかつた。かれは哲學も宗教も艱難も快樂も何も彼も其處に橫つてゐるやうな氣がした。

かれは自分の魂が其處に續いてゐるやうな氣がした。未知に對する恐怖、偶然に襲つて來る黑いものの手、さういふ風にかれには何うしても死が考へられなかつた。遠い過去にもこの自分が生きて呼吸し

を教へた。哲太は急いで其方へと行つた。

汚ない半ば破れた大和障子――うどん蕎麥、御中食と書いた障子が其處にあつた。かれはそれを明けた。廣い混雜した厨と、大釜の湯氣の白く漲つた臺所と、膳や椀や德利の並んだ棚と、火鉢を前にしてくはへ烟管をして亭主の坐つてゐる店とがかれの眼に映つた。『いらつしやい』と言つて迎へるものもなかつた。哲太は色の褪せた黑の外套に身をつゝんだまゝ、すぐその傍に續いた廣く打通した一間へと上つた。汚ない薄い座蒲團と火の尉になつた角火鉢とがかれの前にあつた。ところどころ燒焦げの出來てゐる疊の向うには、一方に夥しく破れた古い襖、一方に午後の日影の黃く侘しくさし込んで來てゐる窓障子が見えて、長押には、その町の持つた停車場の汽車の發着表が子供の書いたやうな拙い字で書かれて張附けられてあつた。

髮を箒のやうにして、油染みて汚れててかてか光つた筒袖を着た二十四五の女が、客と見て、燒き落を十能に一杯入れたのを手に持つて、それがぼろぼろ滴れて落ちるのを氣にも留めず、つかつか上つて來て、いきなりそれを哲太の前にある火鉢へとあけた。白い灰がぱつと立つた。

それにも拘らず、『おう、暖かい……』かう言つて、哲太は野の冷たい空氣に冷えた顏と手とをそれに當てた。

『うどんを暖かくして大急ぎで持つて來て呉れ給へ。』

殘雪

町の四つ角のところに來た。其處には乘合馬車が一臺待つてゐた。馬は既に杙につけられてあつた。』

『妻沼町へはもうすぐ出ますか？』

絹物を着て幅廣の白縮緬の三尺帶をしめて卷煙草をふかして其處に立つてゐる親方らしい男に哲太は訊いた。

『もうすぐ出ます。』

かうその男は素氣なく答へた。

哲太はしかしまだ午飯を濟ましてゐなかつた。もう午後二時である。馬車に乘つて了へば、猶ほその飢を抱いて殘る半日を過さなければならなかつた。かれは續いて訊いた。『まだ午飯を食はんのだが、それをやる處はないでせうか。』

『急いで使つていらつしやい。待つてゐますから……』かう言つて、其男はその通の角にある飲食店

残雪

花袋全集第十巻目次

田山花袋著

花袋全集

第十卷

殘雪・新しい芽・鈴子の戀

花袋全集刊行會